四国横断自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第二十四冊

郡家田代遺跡

1996. 10

香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日本道路公団

四国横断自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第二十四冊

郡家田代遺跡

1996. 10

香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日本道路公団

『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第二十四冊　郡家田代遺跡』

正誤表

頁	行	誤	正
13～14	上段	弥生前期	（下段のキャプション）
15～16	上段	弥生前期～古墳後期	弥生後期～古墳前期
23	図中	宝憧寺	宝幢寺
43	20	鎖線の南側	鎖線の内側
57	29	第38図剥離面１	第38図剥離面２
59	2	この剥離面に先行する	この剥離面に後出する
59	2～3	剥離面２	剥離面１
98	18	第３層に	第Ⅲ層に
99	2	第３層に	第Ⅲ層に
100	20	第Ⅳ層や	第Ⅲ層や
155	4	みられる点で，性格を	みられる点で，方形土坑とは性格を

弥生前期土器（103）

古式土師器（107, 111, 118, 119, 121, 123）

巻頭図版 2

須恵器骨蔵器（134, 135）

土師質甕（393）

弥生前期土器（103）

古式土師器（107, 111, 118, 119, 121, 123）

須恵器骨蔵器（134, 135）

土師質甕（393）

序　　文

四国横断自動車道は，高松～善通寺間が平成４年５月に開通しました。これにより，瀬戸大橋と香川県の高速道路が直結することになり，香川県は本格的な高速交通の時代を迎えております。

香川県教育委員会では，四国横断自動車道（高松～善通寺間）の建設に伴い，昭和63年度から財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託して，用地内の埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。３年６か月の期間を要して28遺跡の発掘調査を実施し，平成３年９月に発掘調査を終了いたしました。また，平成３年度からは同センターにおきまして発掘調査の出土品の整理を順次行っているところであり，平成４年度からは発掘調査報告書の刊行を開始いたしております。

このたび「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第二十四冊」として刊行いたしますのは，丸亀市郡家町田代に所在する郡家田代遺跡についてであります。この遺跡の調査では，複数の石片が接合する旧石器時代の石器接合資料，須恵器を蔵骨器として用いた古代の火葬墓，近世土器や陶磁器が出土する近世集落などを検出しました。

本報告書が，本県の歴史研究の資料として広く活用されるとともに，埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが，発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間，日本道路公団及び関係機関並びに地元関係各位には多大の御協力と御指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに，今後ともよろしく御支援賜りますようにお願い申し上げます。

平成８年10月

香川県教育委員会

教育長　田　中　壮一郎

例　　言

1．本報告書は，四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第二十四冊であり，香川県丸亀市郡家町田代で実施した郡家田代遺跡（ぐんげでんだいいせき）の発掘調査の報告を収録した。

2．発掘調査は，香川県教育委員会が日本道路公団から委託され，香川県教育委員会が調査主体，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3．発掘調査は，予備調査を昭和63年３月に実施し，本調査を昭和63年６月15日から平成元年２月17日まで実施した。本調査の担当は以下のとおりである。

岡田静明，佐藤竜馬

4．調査の実施にあたって，下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同，敬称略）

香川県土木部横断道対策室，同善通寺土木事務所横断道対策室，丸亀市土木部高速自動車道担当，四国横断自動車道建設丸亀市郡家地区対策協議会，各地元自治会

5．報告書の作成は，香川県教育委員会の指導のもとに財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。報告書の編集・執筆は，佐藤が担当した。

6．報告書の作成にあたっては，下記の方々の御教示・御協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同，敬称略）

京都国立博物館　難波洋三，大分県教育委員会　吉田寛，笠岡市教育委員会，里庄町教育委員会，鴨方町教育委員会，小野康郎，山田清明，藤原俊夫，詫間貞利

7．本遺跡の報告にあたっては，下記に分析を依頼し，玉稿をいただいた。

胎土分析　　岡山理科大学自然科学研究所　白石　純氏

8．本報告書で用いる方位の北は，国土座標系第Ⅳ系の北であり，標高はＴ．Ｐ．を基準としている。

また，遺構は下記の略号により表示している。

ＳＡ　柵列状遺構　　ＳＢ　掘立柱建物　　ＳＤ　溝状遺構　　ＳＥ　井戸状遺構

ＳＫ　土坑　　ＳＰ　柱穴　　ＳＴ　墳墓

ＳＸ　方形土坑・石積み土坑・性格不明遺構

9．挿図の一部に建設省国土地理院地形図「白峰山」「丸亀」「観音寺」（1/25,000）と建設

省国土地理院国土基本図「IV－ＦＥ36」「IV－ＦＥ37」「IV－ＦＥ46」(1/5,000) を使用した。また図版の一部に，建設省国土地理院撮影の空中写真「Ｃ10Ｂ－13」を使用した。

10．図版の遺物番号は，本文中・観察表の遺物番号と同じである。

本 文 目 次

第１章　調査の経緯
　第１節　調査に至る経過……1
　第２節　調査の経過……4
　　１．発掘調査の経過……4
　　２．整理作業の経過……7
第２章　立地と環境
　第１節　地理的環境……8
　第２節　歴史的環境……10
第３章　調査の成果
　第１節　土層の堆積状況……29
　第２節　旧石器時代……41
　　１．概　要……41
　　２．石器集中部１……41
　　３．石器集中部２……51
　　４．その他の遺構……61
　　５．上位層出土の旧石器……63
　第３節　縄文時代～弥生時代前期……69
　　１．概　要……69
　　２．溝状遺構……69
　第４節　弥生時代後期～古墳時代前期……75
　　１．概　要……75
　　２．掘立柱建物……75
　　３．土　坑……77
　　４．溝状遺構……80
　　５．性格不明遺構……90
　第５節　古代前半……95
　　１．概　要……95
　　２．火葬墓……95
　　３．溝状遺構……98

第6節　近　世 ……102
1．概　要 ……102
2．掘立柱建物 ……102
3．柵列状遺構 ……108
4．土坑・井戸状遺構 ……108
5．方形土坑・石積み土坑 ……155
6．溝状遺構 ……174
第7節　包含層出土の遺物 ……180
1．Ⅰ区南半部包含層 ……180
2．Ⅰ区北半部包含層 ……182
3．Ⅱ区包含層 ……197
4．Ⅲ区包含層 ……198
5．Ⅳ区包含層 ……200
6．Ⅴ区包含層 ……202
7．石　器 ……205
第4章　自然科学的調査の成果
第1節　郡家田代遺跡出土近世土器の胎土分析 ……211
第2節　胎土分析試料の概要と今後の課題 ……216
第5章　まとめ
第1節　出土旧石器の特徴 ……219
第2節　近世土器の形態 ……227
第3節　近世土器の地域色 ……239
第4節　遺構の変遷 ……251

挿 図 目 次

第１図　郡家田代遺跡位置図……１
第２図　四国横断自動車道関係
　　埋蔵文化財包蔵地……２
第３図　予備調査トレンチ配置図……３
第４図　調査区割図……４
第５図　グリッド配置図……５
第６図　調査杭とグリッドの位置関係……５
第７図　丸亀平野の地形と旧石器（国府期）
　　出土地点……11
第８図　龍川・郡家地区溝状遺構の変遷(1)
　　……13～14
第９図　龍川・郡家地区溝状遺構の変遷(2)
　　……15～16
第10図　龍川・郡家地区溝状遺構の変遷(3)
　　……17～18
第11図　龍川・郡家地区溝状遺構の変遷(4)
　　……19～20
第12図　郡家原・一里屋遺跡の古代集落……22
第13図　古代の集落と郷名・官道……23
第14図　近世の都市（町場）と街道……25
第15図　18～19世紀の建物分布……27～28
第16図　郡家田代遺跡柱状土層図……29
第17図　グリッド土層図(1)……31
第18図　グリッド土層図(2)……32
第19図　グリッド土層図(3)……33
第20図　グリッド土層図(4)……34
第21図　グリッド土層図(5)……35
第22図　グリッド土層図(6)……36
第23図　グリッド土層図(7)……37
第24図　グリッド土層図(8)……38
第25図　石器集中部１・２概略図……39～40
第26図　石器集中部１石器接合関係分布図……42
第27図　ＳＸ０８平・断面図……44
第28図　ＳＸ０９平・断面図……44
第29図　石器集中部１出土遺物(1)……46
第30図　石器集中部１出土遺物(2)……47
第31図　石器集中部１出土遺物(3)，
　　ＳＸ０８，Ｅ-８区出土遺物……48
第32図　石核34の剝離面……49
第33図　石器集中部１出土遺物(4)……50
第34図　石器集中部１出土遺物(5)……51
第35図　石器集中部２出土遺物(1)……53
第36図　石器集中部２出土遺物(2)……54
第37図　石器集中部２出土遺物(3)……56
第38図　石核46＋47の剝離面……57
第39図　石器集中部２出土遺物(4)……58
第40図　石器集中部２出土遺物(5)……59
第41図　石器集中部２出土遺物(6)……60
第42図　ＳＸ１０平・断面図……61
第43図　炭化物集中地点平面図……62
第44図　炭化物集中地点出土遺物，
　　石器集中部１出土遺物(6)……63
第45図　上位層出土の旧石器(1)……65
第46図　上位層出土の旧石器(2)……66
第47図　上位層出土の旧石器(3)……67
第48図　上位層出土の旧石器(4)……68
第49図　ＳＤ５０断面図……69
第50図　ＳＤ５０出土遺物……69
第51図　ＳＤ０５・０６断面図……70
第52図　II・III区溝状遺構の重複状況……70
第53図　ＳＤ１２・１３・１５・２１
　　２３・２４・２８断面図……71

第54図　ＳＤ１２遺物出土状況……72
第55図　ＳＤ１２出土遺物……72
第56図　ＳＤ２５遺物出土状況……73
第57図　ＳＤ２５出土遺物……74
第58図　ＳＢ０１出土遺物……75
第59図　ＳＢ０１平・断面図……76
第60図　ＳＫ２３平・断面図……77
第61図　ＳＫ２６平・断面図……77
第62図　ＳＫ２７・２８平・断面図……78
第63図　ＳＫ２９平・断面図……78
第64図　ＳＫ３２平・断面図……79
第65図　ＳＫ３３平・断面図……79
第66図　ＳＫ４６平・断面図……79
第67図　ＳＤ１６平・断面図……80
第68図　ＳＤ３５断面図……81
第69図　ＳＤ３５遺物出土状況(1)……82
第70図　ＳＤ３５遺物出土状況(2)……83
第71図　ＳＤ３５遺物出土状況(3)……84
第72図　ＳＤ４０断面図……86
第73図　ＳＤ３５出土遺物(1)……87
第74図　ＳＤ３５出土遺物(2)，ＳＤ４０出土遺物(1)，ＳＤ４２出土遺物……88
第75図　ＳＤ４０出土遺物(2)……89
第76図　ＳＤ４１～４３・５９断面図……90
第77図　ＳＤ５９出土遺物……90
第78図　ＳＸ０５出土遺物……90
第79図　ＳＸ０５平・断面図……91
第80図　ＳＸ０７断面図……92
第81図　ＳＸ０７平面図……93～94
第82図　ＳＴ０１平・断面図……96
第83図　ＳＴ０１墓壙平面図……97
第84図　ＳＴ０１骨蔵器……97
第85図　ＳＤ０１・０２断面図……98
第86図　ＳＤ１０断面図，出土遺物……98
第87図　ＳＤ２２断面図……99
第88図　ＳＤ３７断面図，出土遺物……99
第89図　ＳＤ５３断面図……100
第90図　ＳＤ５４・５５断面図……101
第91図　ＳＢ０２平・断面図……103
第92図　ＳＢ０３平・断面図……104
第93図　ＳＢ０３出土遺物……104
第94図　ＳＢ０４平・断面図……105
第95図　ＳＢ０５平・断面図……106
第96図　ＳＢ０６平・断面図……107
第97図　ＳＫ０５平・断面図……108
第98図　ＳＫ０６平・断面図……109
第99図　ＳＫ０６出土遺物(1)……110
第100図　ＳＫ０６出土遺物(2)……111
第101図　ＳＫ０８出土遺物(1)……112
第102図　ＳＫ０８出土遺物(2)……113
第103図　ＳＫ０８平・断面図……114
第104図　ＳＫ０９平・断面図……114
第105図　ＳＫ０９出土遺物(1)……119
第106図　ＳＫ０９出土遺物(2)……120
第107図　ＳＫ０９出土遺物(3)……121
第108図　ＳＫ０９出土遺物(4)……122
第109図　ＳＫ０９出土遺物(5)……123
第110図　ＳＫ０９出土遺物(6)……124
第111図　ＳＫ０９出土遺物(7)……125
第112図　ＳＫ０９出土遺物(8)……126
第113図　ＳＫ０９出土遺物(9)……127
第114図　ＳＫ０９出土遺物(10)……128
第115図　ＳＫ０９出土遺物(11)……129
第116図　ＳＫ０９出土遺物(12)……130
第117図　ＳＫ０９出土遺物(13)……131
第118図　ＳＫ０９出土遺物(14)……132
第119図　ＳＫ０９出土遺物(15)……133
第120図　ＳＫ０９出土遺物(16)……134
第121図　ＳＫ０９出土遺物(17)……135
第122図　ＳＫ０９出土遺物(18)……136

第123図　ＳＫ１０出土遺物(1) ……138
第124図　ＳＫ１０出土遺物(2) ……139
第125図　ＳＫ１０平・断面図……140
第126図　ＳＫ１１出土遺物……140
第127図　ＳＫ１１平・断面図……140
第128図　ＳＫ１５平・断面図……141
第129図　ＳＫ１５出土遺物……141
第130図　ＳＫ１６出土遺物……142
第131図　ＳＫ１６平・断面図……142
第132図　ＳＫ１７平面・縦断面図……143
第133図　ＳＫ１７横断面図……144
第134図　ＳＫ１７出土遺物……145
第135図　ＳＫ１８平・断面図……146
第136図　ＳＫ１８出土遺物……147
第137図　ＳＫ１９平・断面図……148
第138図　ＳＫ１９出土遺物……148
第139図　ＳＫ２０出土遺物……149
第140図　ＳＫ２０平・断面図……150
第141図　ＳＫ２５出土遺物……150
第142図　ＳＫ２５平・断面図……150
第143図　ＳＫ５８出土遺物……151
第144図　ＳＫ５８平・断面図……152
第145図　ＳＥ０１平・断面図……153
第146図　ＳＥ０１出土遺物(1) ……154
第147図　ＳＥ０１出土遺物(2) ……155
第148図　ＳＸ０１・０２平・断面図……156
第149図　ＳＸ０１出土遺物……157
第150図　ＳＸ０２出土遺物……158
第151図　ＳＸ０３平・断面図 ……159～160
第152図　ＳＸ０３基底石・杭列……161
第153図　ＳＸ０３石積み内埋土出土遺物(1)…163
第154図　ＳＸ０３石積み内埋土出土遺物(2)…164
第155図　ＳＸ０３石積み内埋土出土遺物(3)…165
第156図　ＳＸ０３石積み裏込め土出土遺物(1)
……166
第157図　ＳＸ０３石積み裏込め土出土遺物(2)
……167
第158図　ＳＸ０３石積み裏込め土出土遺物(3)
……168
第159図　ＳＸ０３石積み裏込め土出土遺物(4)
……169
第160図　ＳＸ０３石積み裏込め土出土遺物(5)
……170
第161図　ＳＸ０３石積み裏込め土出土遺物(6)
……171
第162図　ＳＸ０３石積み内出土遺物(1) ……172
第163図　ＳＸ０３石積み内出土遺物(2) ……173
第164図　ＳＤ０３断面図……174
第165図　ＳＤ０３出土遺物……175
第166図　ＳＤ４５出土遺物(1) ……176
第167図　ＳＤ４５出土遺物(2) ……177
第168図　ＳＤ４５出土遺物(3) ……178
第169図　ＳＤ４５断面図 ……179
第170図　Ⅰ区南半部包含層出土遺物……181
第171図　Ⅰ区北半部包含層出土遺物(1) ……183
第172図　Ⅰ区北半部包含層出土遺物(2) ……184
第173図　Ⅰ区北半部包含層出土遺物(3) ……185
第174図　Ⅰ区北半部包含層出土遺物(4) ……187
第175図　Ⅰ区北半部包含層出土遺物(5) ……188
第176図　Ⅰ区北半部包含層出土遺物(6) ……189
第177図　Ⅰ区北半部包含層出土遺物(7) ……190
第178図　Ⅰ区北半部包含層出土遺物(8) ……191
第179図　Ⅰ区北半部包含層出土遺物(9) ……192
第180図　Ⅰ区北半部包含層出土遺物(10) …193
第181図　Ⅰ区北半部包含層出土遺物(11) …194
第182図　Ⅰ区北半部包含層出土遺物(12) …195
第183図　Ⅰ区北半部包含層出土遺物(13) …196
第184図　Ⅱ区包含層出土遺物……197
第185図　Ⅲ区包含層出土遺物(1) ……198
第186図　Ⅲ区包含層出土遺物(2) ……199

第187図　IV区包含層出土遺物(1) ……200
第188図　IV区包含層出土遺物(2) ……201
第189図　V区包含層出土遺物(1) ……202
第190図　V区包含層出土遺物(2) ……203
第191図　V区包含層出土遺物(3) ……204
第192図　包含層出土石器(1) ……206
第193図　包含層出土石器(2) ……207
第194図　包含層出土石器(3) ……208
第195図　包含層出土石器(4) ……209
第196図　予備調査・トレンチ出土遺物，
　出土地点不明遺物……210
第197図　K_2O-CaOによる郡家田代遺跡内出土
　近世土器の器種別の比較……214
第198図　Sr-Rbによる郡家田代遺跡内出土
　近世土器の器種別の比較……214
第199図　K_2O-CaOによる郡家田代遺跡内出土
　近世土器(焙烙・粘土)の比較……215
第200図　Sr-Rbによる郡家田代遺跡内出土
　近世土器(焙烙・粘土)の比較……215
第201図　分析試料採取地点と土器生産地……218
第202図　石器集中部2出土石器……221
第203図　国分台朱雀台第1地点採集の石核…224
第204図　郡家田代遺跡出土の近世土器(1) …229
第205図　郡家田代遺跡出土の近世土器(2) …231
第206図　郡家田代遺跡出土の近世土器(3) …233
第207図　一の谷遺跡群出土の近世土器(1) …234
第208図　一の谷遺跡群出土の近世土器(2) …235
第209図　一の谷遺跡群出土の近世土器(3) …236
第210図　一の谷遺跡群出土の近世土器(4) …237
第211図　高松市空港跡地遺跡における
　「御厩系」焙烙の変遷……239
第212図　鍛冶屋遺跡出土の近世焙烙……240
第213図　阿坂古墳前庭部出土の近世焙烙……241
第214図　大原窯産焙烙の民俗例……241
第215図　東広島市周辺の近世焙烙……243
第216図　田村遺跡群出土の近世焙烙……244
第217図　「瀬戸内系」焙烙の系譜 ……245
第218図　城ノ内遺跡出土の近世焙烙……245
第219図　18世紀代の焙烙分布図……246
第220図　近世焙烙の地域色……247
第221図　18～19世紀の土師質甕……248
第222図　本谷遺跡出土の近世甕……249
第223図　遺構の変遷(1)……253～254
第224図　遺構の変遷(2)……255～256
第225図　遺構の変遷(3)……257～258
第226図　溝状遺構の微地形 ……257～258
第227図　一の谷遺跡群平塚地区近世集落……261

図 版 目 次

図版１　郡家田代遺跡周辺空中写真
図版２　調査前風景（東から）
　　調査前風景（西から）
図版３　Ｉ区北半部作業風景（東から）
　　Ｉ区南半部近世遺構（北東から）
図版４　ＳＢ０１（東から）
　　ＳＴ０１（南から）
図版５　ＳＴ０１（南から）
　　ＳＫ０６（南から）
図版６　ＳＫ０５（北東から）
　　ＳＫ０９（南西から）
図版７　ＳＫ１７（北東から）
　　ＳＫ１７－②（北から）
図版８　ＳＫ１７－①（北から）
　　ＳＫ１８（北から）
図版９　ＳＥ０１（南東から）
　　ＳＸ０３（東から）
図版10　ＳＸ０３基底石（北西から）
　　ＳＸ０３五輪塔出土状況（北東から）
図版11　II区北半部遺構（南東から）
　　II区南半部遺構（北から）
図版12　III区西半部遺構（南東から）
　　ＳＤ３５・３７・４０・４５（東から）
図版13　ＳＤ４０，ＳＸ０５（東から）
　　ＳＤ１２・１６・２２・２５ほか(北東から)
図版14　ＳＤ１２・１６・２２・２５ほか（東から）
　　ＳＤ１２遺物出土状況（東から）
図版15　ＳＤ２５遺物出土状況（東から）
　　ＳＤ１６（北西から）
図版16　ＳＤ３５南端部（南西から）
　　ＳＤ３５ｃ－ｃ'土層（南から）
図版17　ＳＤ４０ａ－ａ'土層（南から）
　　ＳＤ４０ｅ－ｅ'土層（南から）
図版18　ＳＸ０７，ＳＤ５０（南から）
　　ＳＤ５３（南から）
図版19　ＳＤ５３（南東から）
　　Ｖ区北半部遺構（南から）
図版20　Ｖ区南半部遺構（西から）
　　ＳＫ５８（南から）
図版21　石器集中部１全景（北東から）
　　石器集中部１中央部付近（北から）
図版22　石器集中部１ナイフ形石器(1)出土状況
　　石器集中部１ナイフ形石器(2)出土状況
図版23　ＳＸ０８上面検出状況（南西から）
　　ＳＸ０８完掘状況（南西から）
図版24　石器集中部２全景（西から）
　　石器集中部２全景（北西から）
図版25　石器集中部２全景（南から）
　　石器集中部２ナイフ形石器(40)出土状況
図版26　石器集中部２ナイフ形石器(41)出土状況
　　石器集中部２ナイフ形石器(42)出土状況
図版27　石器集中部２ナイフ形石器(43)出土状況
　　石器集中部２ナイフ形石器(49)出土状況
図版28　石器集中部２石核(46)・原礫(80)出土状況
　　石器集中部２石核(46)出土状況
図版29　石器集中部１出土遺物（1）
図版30　石器集中部１出土遺物（2）
図版31　石器集中部１出土遺物（3）
図版32　石器集中部１出土遺物（4）

図版33　石器集中部１出土遺物（5）
Ｅ－８区第Ⅳ層出土遺物
図版34　石器集中部１出土遺物（6）
図版35　石器集中部１出土遺物（7）
図版36　石器集中部１出土遺物（8）
図版37　石器集中部１出土遺物（9）
図版38　石器集中部２出土遺物（1）
図版39　石器集中部２出土遺物（2）
図版40　石器集中部２出土遺物（3）
図版41　石器集中部２出土遺物（4）
図版42　石器集中部２出土遺物（5）
図版43　石器集中部２出土遺物（6）
図版44　石器集中部２出土遺物（7）
図版45　石器集中部２出土遺物（8）
図版46　石器集中部２出土遺物（9）
図版47　石器集中部２出土遺物（10）
石器集中部２出土遺物（11）
炭化物集中地点出土遺物
図版48　上位層出土旧石器（1）
図版49　上位層出土旧石器（2）
図版50　上位層出土旧石器（3）
図版51　上位層出土旧石器（4）
図版52　上位層出土旧石器（5）
図版53　上位層出土旧石器（6）
ＳＤ５０出土遺物
ＳＢ０１出土遺物
図版54　ＳＴ０１出土遺物
図版55　ＳＤ２５出土遺物
図版56　ＳＤ３５・４０・４２出土遺物
図版57　ＳＤ３７出土遺物
ＳＫ０６出土遺物
図版58　ＳＫ０８出土遺物
図版59　ＳＫ０９出土遺物（1）
図版60　ＳＫ０９出土遺物（2）
図版61　ＳＫ０９出土遺物（3）
図版62　ＳＫ０９出土遺物（4）
図版63　ＳＫ０９出土遺物（5）
図版64　ＳＫ０９出土遺物（6）
図版65　ＳＫ０９出土遺物（7）
図版66　ＳＫ０９出土遺物（8）
図版67　ＳＫ０９出土遺物（9）
図版68　ＳＫ１０出土遺物
ＳＫ１７出土遺物
図版69　ＳＫ１９出土遺物
ＳＫ２０出土遺物
ＳＫ５８出土遺物
図版70　ＳＥ０１出土遺物（1）
図版71　ＳＥ０１出土遺物（2）
ＳＸ０３出土遺物（1）
図版72　ＳＸ０３出土遺物（2）
図版73　ＳＸ０３出土遺物（3）
図版74　ＳＸ０３出土遺物（4）
図版75　ＳＸ０３出土遺物（5）
図版76　ＳＸ０３出土遺物（6）
図版77　ＳＸ０３出土遺物（7）
図版78　ＳＢ０３，ＳＸ０３，ＳＤ０３出土遺物
ＳＸ０３出土遺物（8）
図版79　ＳＤ４５出土遺物（1）
図版80　ＳＤ４５出土遺物（2）
Ⅰ区北半部包含層出土遺物（1）
図版81　Ⅰ区北半部包含層出土遺物（2）
図版82　Ⅰ区北半部包含層出土遺物（3）
図版83　Ⅰ区北半部包含層出土遺物（4）
図版84　Ⅰ区北半部包含層出土遺物（5）
図版85　Ⅲ区包含層出土遺物（1）
Ⅲ区包含層出土遺物（2）
Ⅴ区包含層出土遺物（1）
図版86　Ⅴ区包含層出土遺物（2）
図版87　Ⅴ区包含層出土遺物（3）
包含層出土石器

表　目　次

第１表　発掘調査工程表 …… 6
第２表　整理作業工程表 …… 7
第３表　郡家田代遺跡出土近世土器の胎土分析値一覧表 ……213
第４表　郡家田代遺跡出土旧石器の器種組成 ……220
第５表　石核の底面長と打点高 ……223
第６表　石器観察表 ……267
第７表　土器観察表 ……271
第８表　陶磁器観察表 ……285
第９表　瓦観察表 ……301
第10表　金属・ガラス製品観察表 ……305

付　図　目　次

付図１　石器集中部１　石器平面分布・断面分布
付図２　石器集中部１　石器平面分布・断面分布（器種別）
付図３　石器集中部２　石器平面分布・断面分布
付図４　石器集中部２　石器平面分布・断面分布（器種別）
付図５　郡家田代遺跡遺構配置図（1）
付図６　郡家田代遺跡遺構配置図（2）

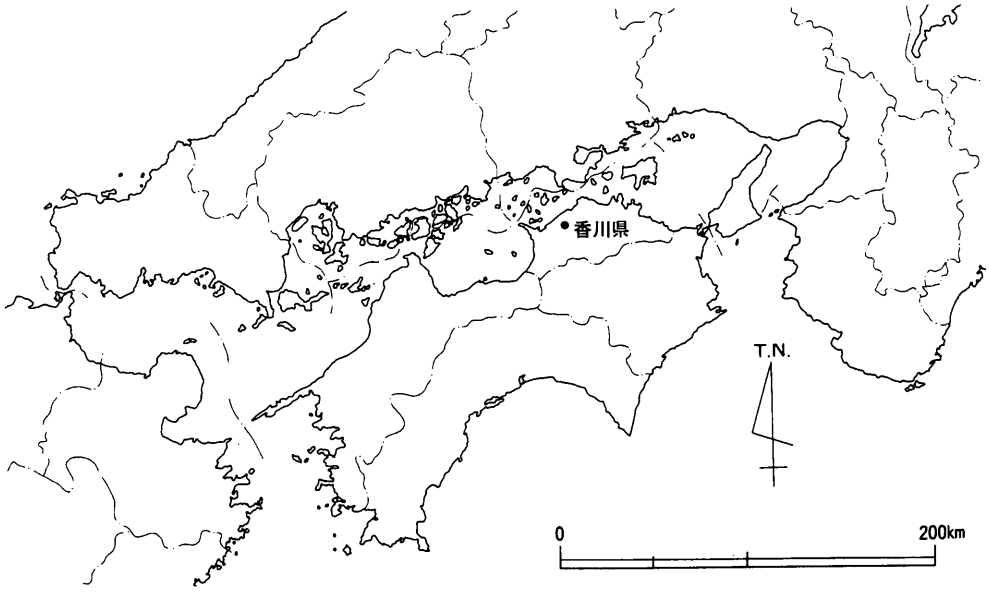
第1章　調査の経緯

第1節　調査に至る経過

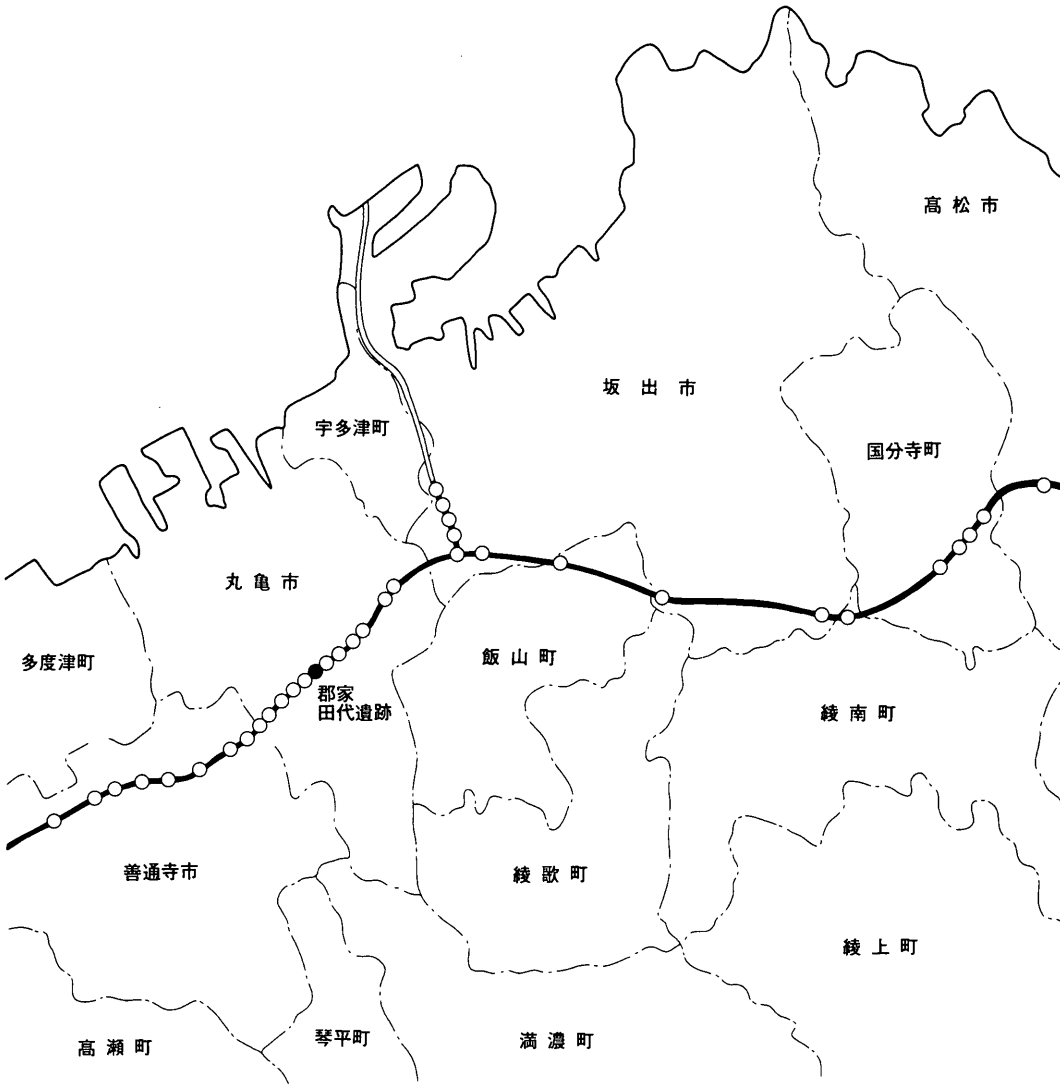
四国横断自動車道高松～善通寺間の建設は，同善通寺～豊浜間に引き続き，昭和57年1月8日に整備計画が決定され，昭和59年11月30日に建設大臣から日本道路公団総裁に対して施工命令が下された。

香川県教育委員会は，これを受けて路線内の埋蔵文化財包蔵地の状況を確認する目的で，国庫補助事業として分布調査を実施した。これらの成果をもとに，路線内に所在する埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについて，日本道路公団と文化庁の協議が行われ，基本的には記録保存で対応することが決定した。

また香川県教育委員会は，同事業に対応するため香川県土木部横断道対策室及び日本道路公団高松建設局高松工事事務所と昭和62年度から調査体制等について協議を開始した。協議の結果，昭和63年から2カ年の予定で本調査を実施し，発掘調査終了後に整理報告を実施することが決定した。香川県教育委員会では，昭和62年11月に財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを設置し，専門職員の増員等の措置を行うことで調査体制の充実を図っ



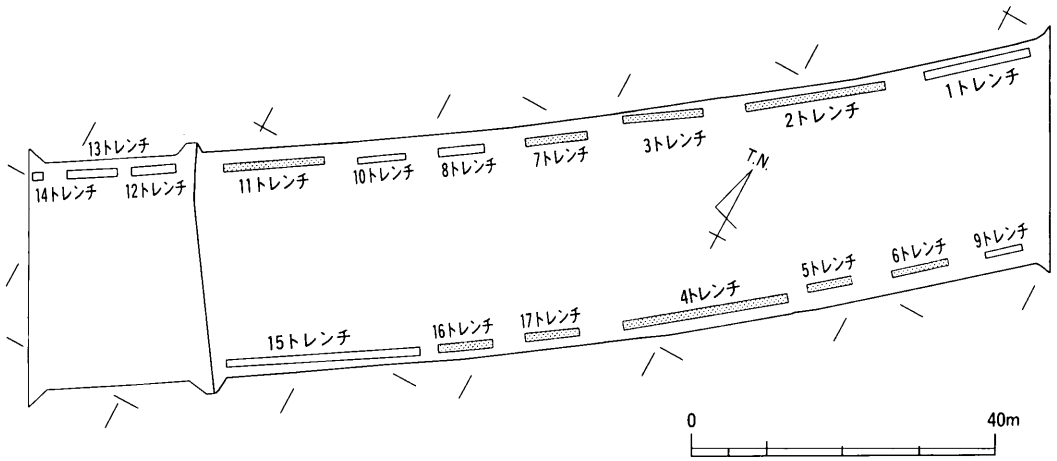
第1図　郡家田代遺跡位置図



第２図　四国横断自動車道関係 埋蔵文化財包蔵地

た。これと並行して日本道路公団との協議が行われ，路線内の具体的な遺跡内容の把握を目的として予備調査を実施することとなった。昭和63年３月には，用地買収が進んでいた丸亀市郡家地区を対象とした予備調査が行われた。

予備調査の結果，郡家地区において６遺跡の内容が把握され，同地区の本調査の対象面積を85,150㎡に確定した。このうち郡家Ｆ地区では路線幅の両側で17箇所のトレンチ調査が行われ，弥生時代・古代・近世の遺構・遺物，及び包含層の存在が確認された。12～14トレンチでは遺構が確認されなかったため対象外とし，市道田代南北線と市道原・剣来線の間の12,741㎡を調査対象地に確定した。郡家Ｆ地区は「郡家田代遺跡」と呼称されるこ



第３図　予備調査トレンチ配置図
網目は遺構を検出したトレンチ

ととなり，昭和63年６月15日から平成元年２月17日まで本調査が行われた。

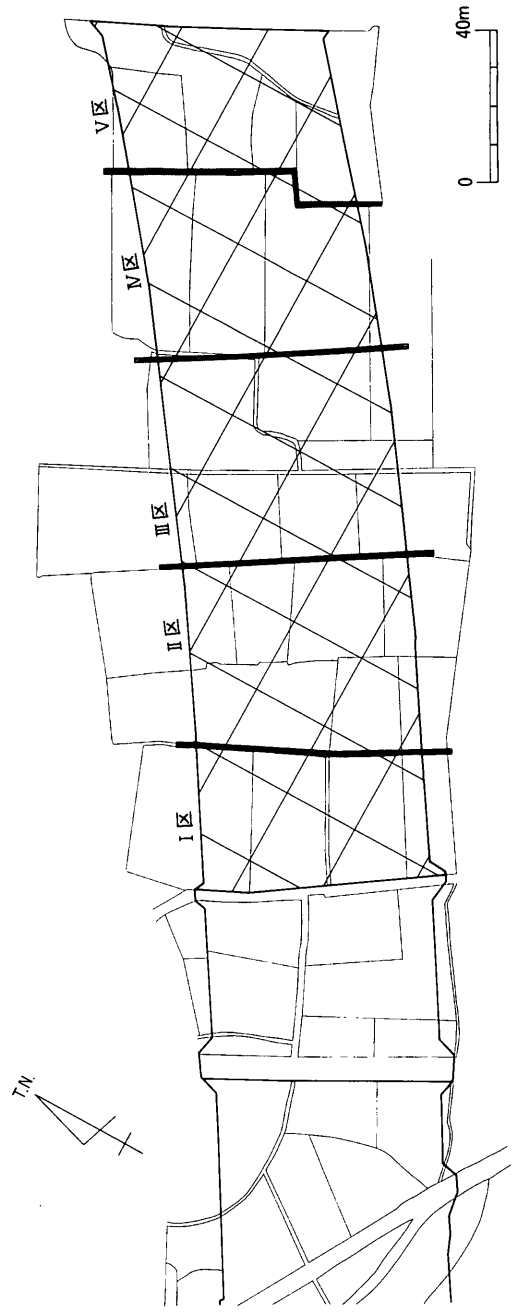
調査は，香川県教育委員会が日本道路公団高松建設局から委託を受け，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを調査担当者として実施した。

第2節　調査の経過

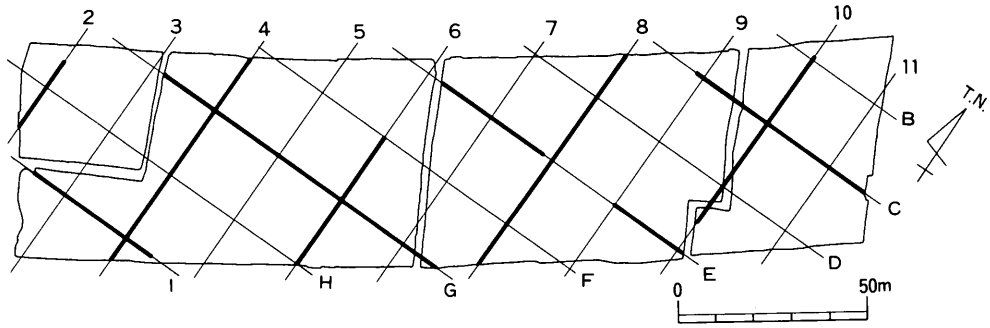
1．発掘調査の経過

発掘調査にあたって，現状の地割や水路をもとに遺跡をⅠ～Ⅴ区に分割し，各調査区単位で順次調査を行うことにした。またこれとは別に，国土座標第Ⅳ系に準拠して調査区全体を20×20mのグリッドに細分し，東西方向のラインを北からA～I，南北方向のラインを西から1～11とした。両ラインの交点杭の名称と，その杭を北西隅とする20m方格のグリッド名は同一である。包含層の遺物は，このグリッド単位か調査区（Ⅰ～Ⅴ区）単位で取り上げた。またグリッド毎に土層堆積状況を把握し，土層図・写真を記録した。

調査は，この年度に本格的に導入された工事請負方式で行われた。請負業者は東海興業株式会社である。掘削は水田耕作土と床土は重機により除去し，その下に堆積していた第Ⅲ層（弥生時代～古代の包含層）は人力で行い，遺物を取り上げた。またⅠ区北半部は床土に陶磁器・土器が多量に含まれ，近世遺物の包含層でもあったので，



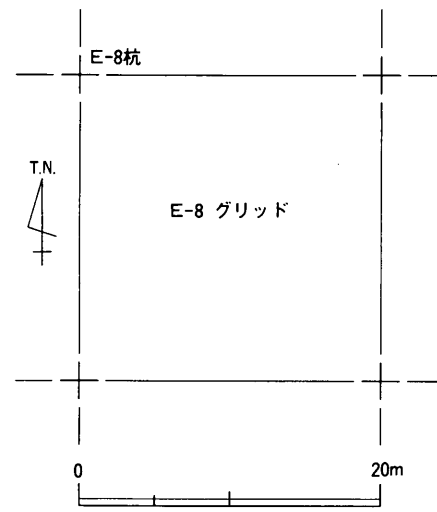
第4図　調査区割図



第５図　グリッド配置図
太線は土層図掲載のグリッドライン

一部は人力で除去した。

当初は予備調査トレンチの再掘削により，第III層下の第IV層（黄色系粘質土層）には遺物の存在が確認できず，地山と認識していた。しかし，同年度に三条黒島遺跡において黄色系粘質土で旧石器ブロックが検出されたため，下層確認のトレンチをⅠ・III区で掘削した。結果は旧石器は確認できなかったが，調査の最終段階にさしかかった時点で，Ⅳ・Ⅴ区の第IV層から旧石器が出土した。この部分の石器群は原位置を保つ可能性も考えられたが，調査が終盤で設計土量の変更も困難なため，調査方針を変更する必要が生じた。その結果，旧石器調査に関しては直営方式で行うこととなった。直営調査は，作業員14名で平成元年１月６日～２月11日に実施した。直営調査終了後に，請負業者によって現場の埋め戻しが行われ，２月17日に調査は終了した。昭和63年度の調査体制は，下記のとおりである。



第６図　調査杭とグリッドの位置関係

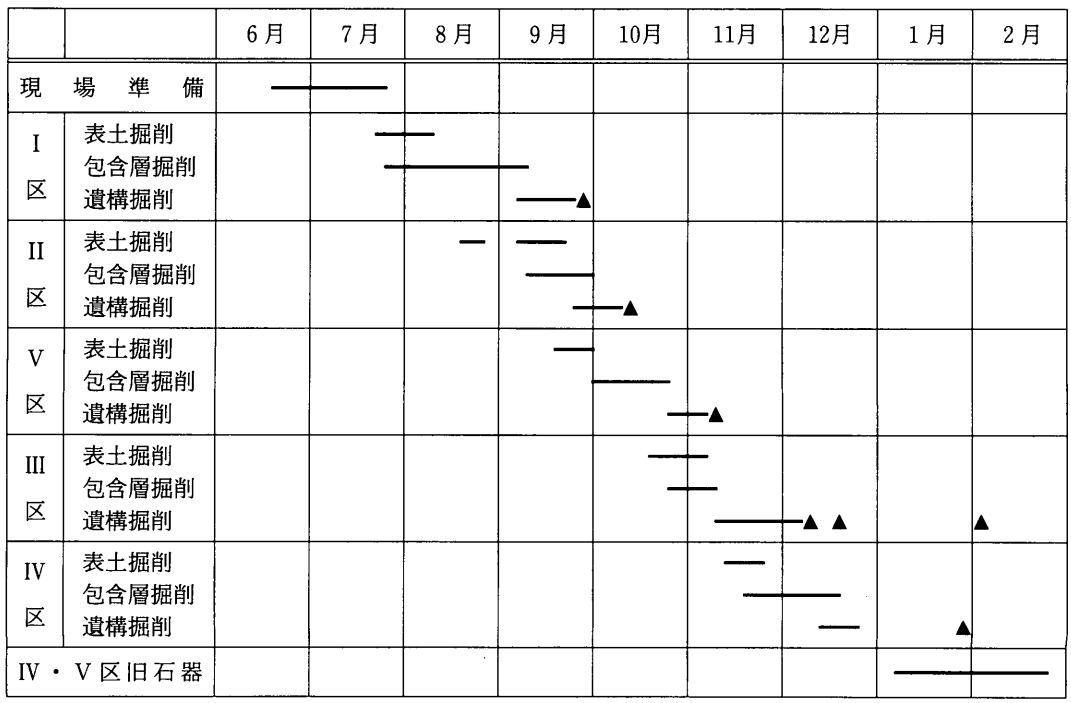
香川県教育委員会事務局　文化行政課		財団法人香川県埋蔵文化財調査センター	
課　　長	廣　瀬　和　孝	所　　長	田　丸　秀　明
課長補佐	高　木　　尚	次　　長	小　原　克　己
副 主 幹	野　綱　朝二郎（6.1～）	総務主査	加　藤　正　司
総務係長	宮　谷　昌　之（～5.31）	主査	山　地　　修

係長	宮内憲生 (6.1～)	主事	三宅浩司
主事	横田秀幸 (6.1～)	参事	見勢護
主事	水本久美子	調査文化財専門員	真鍋昌宏
埋蔵文化財係長	大山真充	技師	岡田静明
		技師	佐藤竜馬

発掘調査に参加した方々

現場整理作業員　山地　真理子

現場作業員　川西　貞三・佐藤　春夫・田中　宏臣・冨田　広武
長谷川　正幸・福本　正道・分木　信行
浦野　房子・林　佐智子・藤井　悦子・堀家　千代子
松田　君子・吉井　絢子



第Ⅰ表　発掘調査工程表

▲は航空測量実施日

2．整理作業の経過

整理作業は，平成７年４月１日から平成８年３月31日まで行った。

平成７年度の整理体制は，以下のとおりである。

香川県教育委員会事務局文化行政課

課　　長	高木　尚（～10.23）
	藤原章夫（10.24～）
課長補佐	高木一義
副主幹	渡部明夫
総務係長	山崎　隆
主査	星加宏明
主任主事	高倉秀子
埋蔵文化財主任技師	森下英治
技師	塩崎誠司

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

所　　長	大森忠彦
次　　長	真鍋隆幸
総務係長	前田和也
主任主事	西川　大
調査主任文化財専門員	廣瀬常雄
主任技師	佐藤竜馬
整理員	戸川昌代
整理補助員	若山淳子
整理補助員	小畑三千代
整理補助員	冨家孝子
整理作業員	大林由佳
整理作業員	藤野麻理

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
遺物接合・復元	―	―										
遺物実測・拓本		―	―	―	―							
トレース					―	―	―	―	―			
遺物観察表					―							―
遺物写真撮影					―						―	
原稿執筆				―	―	―	―	―	―	―	―	―
編集												―
コンテナ収納									―			

第２表　整理作業工程表

第2章　立地と環境

第1節　地理的環境

［丸亀平野の概要］

郡家田代遺跡は，現在の行政区画では丸亀市郡家町田代に所在する遺跡であり，丸亀平野のほぼ中央部に位置する。遺跡の地表面の標高は17.5～18.1mである。

丸亀平野は，香川県内を東西に細長く貫く讃岐平野の1単位である。平野の東西は標高200～400mの山塊に囲まれており，三豊平野や坂出平野・羽床盆地と明瞭に区分される。平野の形態は，満濃町や琴平町付近から北に向って扇形に広がり，丸亀市・多度津町の市街地が位置する海岸部へと至る。南北方向に土器川・金倉川が流れており，地割の乱れなどから両河川の流路は頻繁に変更を繰り返していたと思われる。平野部は，主にこの2河川の堆積作用によって形成されており，南半部ではやや勾配のある扇状地となっている。また北東部の宇多津町・坂出市川津町付近には，大束川によって形成された小規模な平野が存在する。広義にはこれも丸亀平野に包括されよう。

土器川は上流部では表流水が主であるが，下流部では伏流水が多くなり，表流の水量はさほど増大しない。このため，平野部の耕地への取水量は不足しがちであり，伏流水を噴出させて取水する施設の「出水（でみず）」が多く掘削されている。また溜池も多いが，多くは近世以降に構築されている。N－30°－Wの方向をもつ方格地割（条里型地割）は，これら河川や「出水」・溜池を水源として開発・整備されてきた。

なお，平野部北東部には孤立した山塊が存在する。飯野山（標高421.9m），青ノ山（標高224.5m），亀山（標高66.5m），双子山（標高41.1m）がそれであり，平野の中に突出するような特徴的な円錐形の山容（ビュート）をもつ。これらは平野部での生活の場に隣接するため，様々なかたちで利用されてきた。飯野山は信仰の対象となり式内社の飯神社が鎮座し，祭神の飯依彦は『播磨国風土記』にもみえる。青ノ山には山頂・山腹に古墳群が形成される。また亀山は近世に大規模に改変され，丸亀城となる。さらに双子山は，山頂部付近でサヌカイトが産出するともいわれる。しかし通常の安山岩の露頭が多く，安定したかたちでの石材獲得は困難な条件にあったと思われる。

［遺跡付近の微地形］

郡家田代遺跡周辺の龍川・郡家地区では，空中写真や地形図（工事用設計図）の検討によっていくつかの微起伏を認めることができる。既に龍川五条遺跡から三条番ノ原遺跡までは，木下晴一氏が10cm等高線図などをもとに微起伏を想定しているのでこれに依拠する。三条黒島遺跡から郡家田代遺跡までは，木下氏と同様の手法を用いて今回新たに微凹地（旧河道）の位置を検討した。以上から作製したのが，第８図上段である。龍川五条遺跡の西側に氾濫原の広がる金倉川を別にすると，この地域における最大の凹地は２箇所存在する。つまり，龍川四条遺跡西半部（Ａ地区）を東西に延びる凹地と，郡家大林上遺跡西端部を南北に延びる凹地（現・清水川）である。前者は，龍川四条遺跡Ａ地区のＳＲ０１～０３にあたり，縄文時代晩期～12世紀の遺物を断続的に含む。後者は郡家大林上遺跡のＳＲ０１にあたり，弥生時代中期後半～12世紀の遺物を断続的に含む。大林上ＳＲ０１は埋没後も調査区外に流路を変更し，現在の清水川に至っていると考えられる。したがって，少なくとも弥生時代から12世紀に至る長期間，この地域には２つの比較的大きな河道が固定的に存在していたことがわかる。郡家田代遺跡は，大林上ＳＲ０１によって弥生時代～中世の集落群（郡家原遺跡など）と切り離されているが，これは本遺跡で検出された遺構の内容や変遷を考える際に特に重要な観点と思われる。

清水川の東岸域の微高地は，郡家大林上遺跡中央部付近，大林上遺跡東端部から本遺跡Ⅰ区までの箇所，Ⅴ区から東側の川西北・原遺跡にかけての３箇所に存在する。前２者は微凹地（縄文時代以前の埋没河道）によって区分され，大林上遺跡中央部の微高地には北側に「大林」，大林上遺跡東端部から本遺跡Ⅰ区の微高地には南側に「田代」の現集落が展開する。なおⅣ・Ⅴ区北側にある「原池」は，Ⅰ区の微高地とⅤ区の微高地の間を塞き止めて構築されたと考えられる。

第2節　歴史的環境

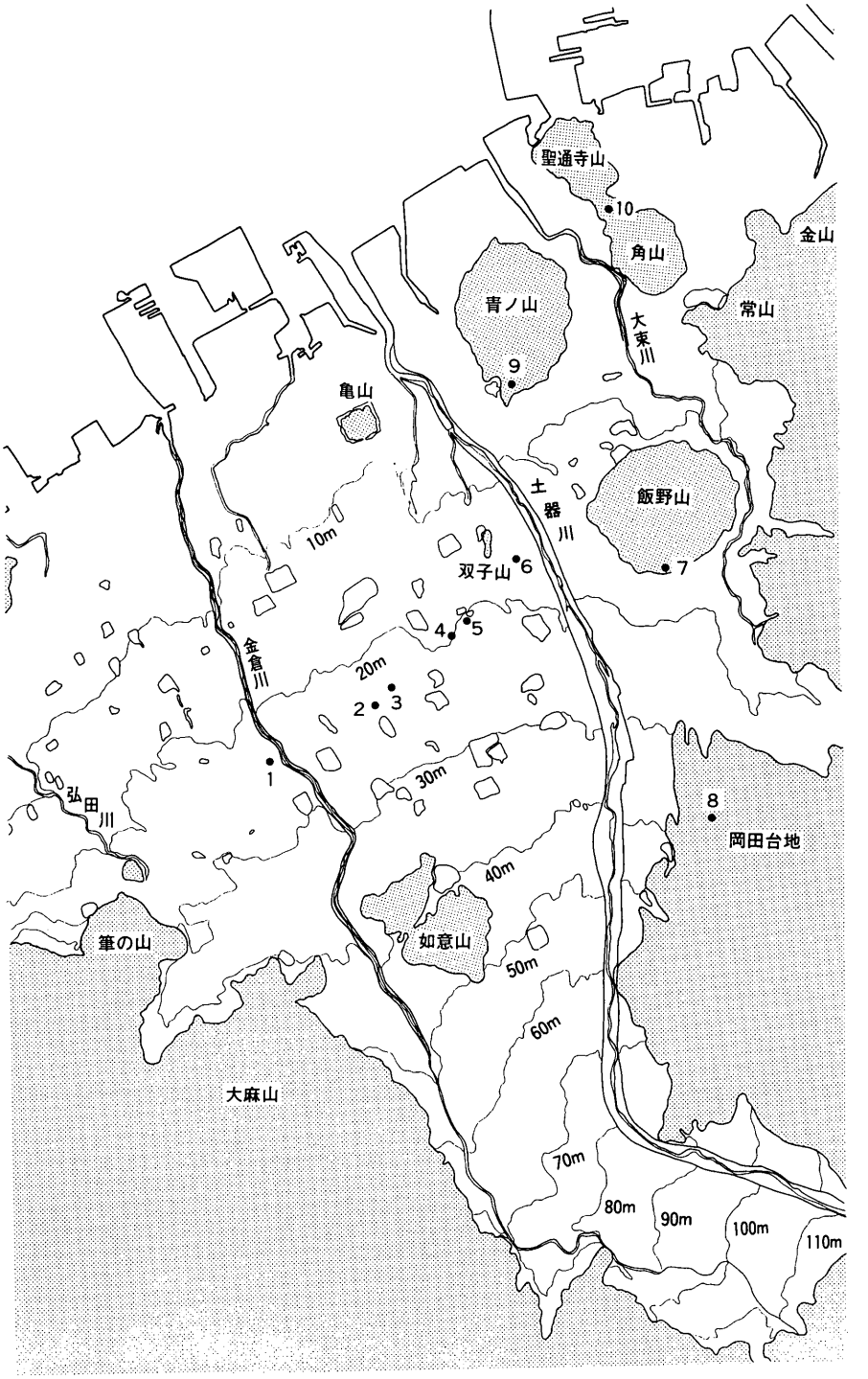
第3章で報告するように，郡家田代遺跡は旧石器時代から近世後期まで断続的な遺構の展開が認められる遺跡である。遺構の具体的な変遷過程は後述するが，調査成果に関連する周辺地域の歴史環境を項目別にいくつか列記しておきたい。

［旧石器遺跡の分布］

周辺地域における旧石器時代のまとまった石器群の存在は，三条黒島遺跡の石器ブロックの検出によって初めて明確化された。弥生時代以降の基盤層である黄灰色粘質土層中で140点の石器群が検出されたのである。石器群は径4mの範囲に分布しており，盤状剥片に復元できる良好な接合資料が存在することから，ここで翼状剥片の剥取が行われたことがわかる。剥取された翼状剥片3枚のうち2枚はブロック外に持ち出されている。このことと焼土や炭化物，礫群などが伴わないことから，短時間の石器製作によってブロックが形成された可能性があろう。長期間にわたる石器群の集積ではない点が本遺跡と共通しているが，編年的には大きな隔たりがないと思われる両者の石器組成に差異（定形的な製品の多寡，石核の消耗度）が存在するようにも思われる。今後の正報告が待たれる。

周辺の平野部では，このほかにも旧石器が少量出土する遺跡がある。川西北・鍛冶屋遺跡では，黄色系粘土から横長剥片石核や剥片が出土している。また三条番ノ原遺跡では，層位的な関係は不明だがスクレイパー・横長剥片・縦長剥片・縦長剥片石核・叩き石が出土した落ち込み状遺構（ＳＸ０２）が検出されている。郡家大林上遺跡では，ナイフ形石器・翼状剥片・横長剥片石核が遊離した状態で出土した。さらに丸亀平野周縁の丘陵部に立地する諸遺跡からも，国府期とみられる旧石器が少量採取されている。

このように当遺跡も含めて，周辺地域では平野部における旧石器単純層出土例や，遊離した状態とはいえ付近に旧石器単純層の存在が想定される事例が次第に増加してきている。いずれも少量の石器からなる消費地遺跡の様相をもつとみられ，原産地（国分台）からの距離が8～21km（郡家田代遺跡は13km）と比較的近いのにもかかわらず，サヌカイトがふんだんに消費されたとはいい難い状況を示す。これは，原産地からの距離をほぼ同じくする備讃海峡の遺跡群と異なる点であり，遺跡の形成要因に明確な違いがあることを窺わせる。その前提としての遺跡立地は，黄色系粘土層とその下に潜り込む礫層や火山灰（ＡＴ）層との大局的な関係と，各遺跡の細かな土層堆積状況を把握する基礎作業によって考えていく必要があろう。



第７図　丸亀平野の地形と旧石器（国府期）出土地点（S＝1/10万）

1 金蔵寺下所遺跡　2 三条番ノ原遺跡　3 三条黒島遺跡　4 郡家大林上遺跡
5 郡家田代遺跡　6 川西北・鍛冶屋遺跡　7 飯野山西麓遺跡　8 大窪池遺跡
9 吉岡神社古墳　10 田尾茶臼山遺跡

［潅漑網の成立過程］

第１節で述べたように，土器川と金倉川に挟まれた龍川・郡家・川西地区は，微起伏によってさらに細分される微高地群と凹地（旧河道）群からなる。高松平野で指摘されているように，各時代の潅漑網の整備がこうした地形の起伏に制約されながら進行していったことが考えられるが，その詳細な過程を検討するのは今後の課題に残される。

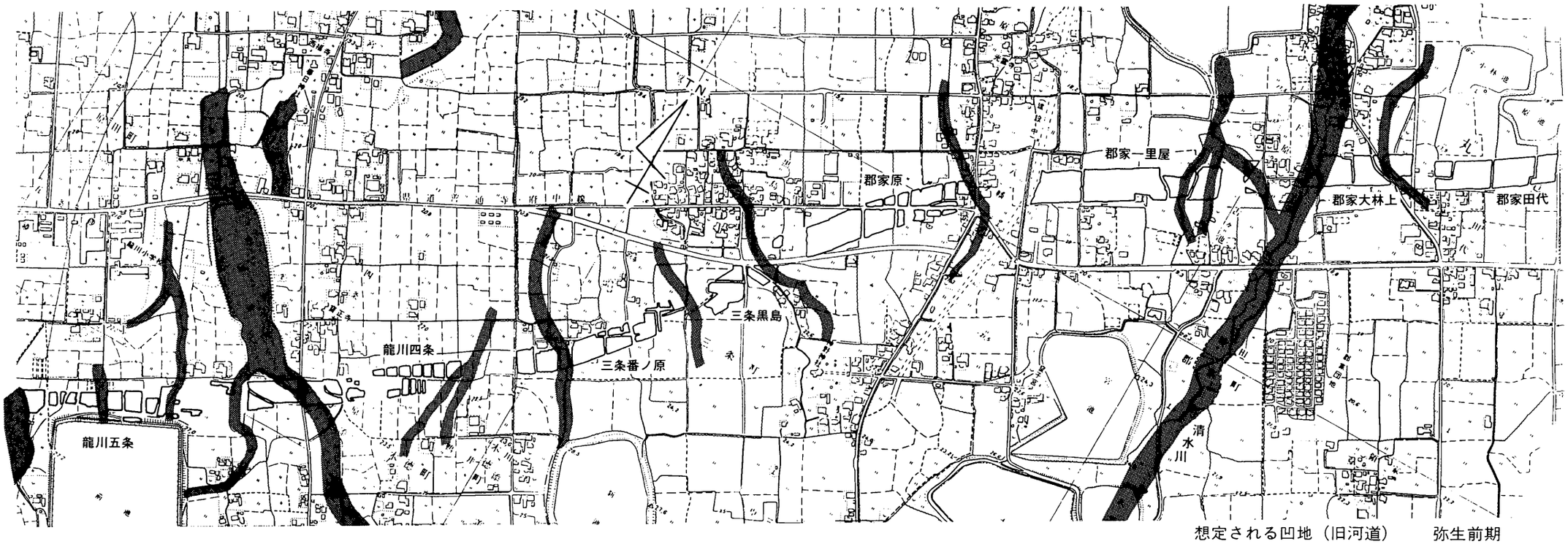
ここでは龍川・郡家地区の各報告書から，溝状遺構・出水状遺構などの潅漑施設の変遷を概観しておくのにとどめる。なお，この地区における水田遺構は，郡家一里屋遺跡Ⅳ区の畦畔状遺構（弥生時代後期～奈良時代の間）が検出されているのにとどまる。

縄文時代晩期には，龍川四条遺跡Ａ地区で突帯文土器を多量に包含する旧河道が検出されているが，潅漑遺構は認められず実態不明である。

弥生時代前期も三条番ノ原遺跡・三条黒島遺跡で溝状遺構が検出されているのにとどまる。これらの溝は比較的規模が大きく，特に後者では後期および古墳時代後期にも掘り直しが行われており，長期間にわたって同じところが溝として踏襲されているようである。こうした固定的で規模の大きな事例は地域の幹線水路になる可能性があり，それが弥生時代前期に出現するのである。ただし，この段階では大規模な溝が限定的な点として存在しており，微高地が面的に耕地化されているような状況は想定できない。また弥生時代中期の遺物が欠落することから，その「継続性」についても問題にする必要があろう。

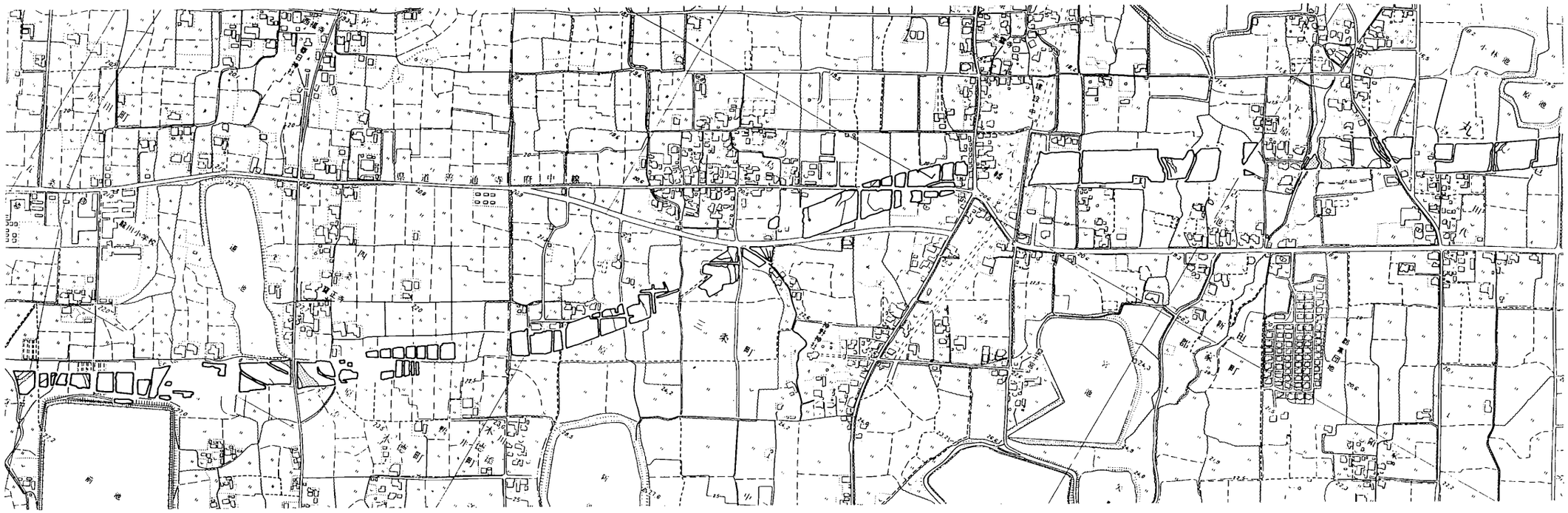
弥生時代後期になると，遺構の数・分布ともに増加する。この時期の遺構群は，旧河道の存在により龍川五条遺跡・龍川四条遺跡Ａ地区（ａ群），龍川四条遺跡Ｂ地区・三条番ノ原遺跡・三条黒島遺跡・郡家原遺跡・郡家一里屋遺跡（ｂ群），郡家大林上遺跡・郡家田代遺跡（ｃ群）の３群に分けられる。溝状遺構はこのうちｂ群に顕著であり，特に三条番ノ原遺跡から郡家原遺跡にかけての地域に集中する。これは，両遺跡で集落が出現するのと無関係とは思われず，集落の拡散がｂ群における生産基盤の面的な拡大をもたらした可能性がある。そしてこの時期に郡家原遺跡において，湧水を水源とした潅漑施設「出水」とみられる遺構群が出現することは，注目してよいだろう。「出水」の出現は，表層の水量が少ない河川潅漑に加えて積極的な水源確保が行われるようになったことを示す。

古墳時代後期末～奈良時代には，ｂ群東半部に溝状遺構の大半が集中するようになる。７世紀代の溝状遺構は，地形の制約を受けない部分では真北方向を指向する。８世紀代になると，多くが周囲の現地割（条里型地割）と平行する方向をとるようになる。また規模も７世紀代よりも大きくなり，中世まで踏襲される幹線水路の形態が整う。郡家原遺跡や，

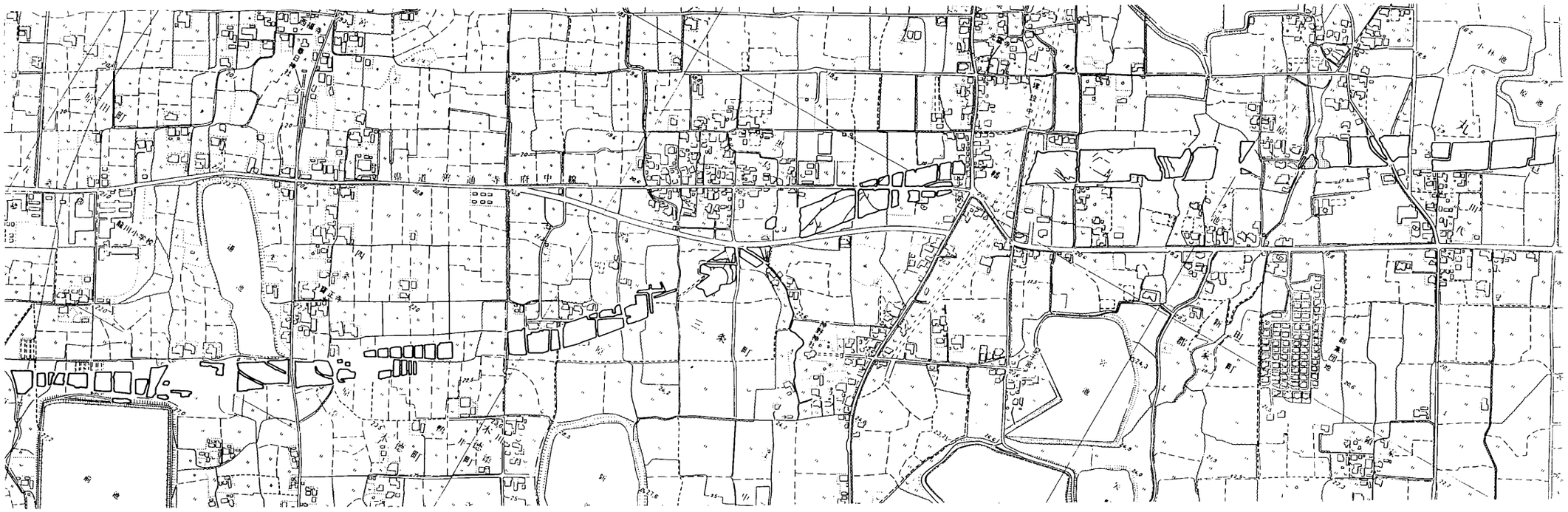


第８図　龍川・郡家地区　溝状遺構の変遷(1)（1/5,000）

網目：河道　太線：大規模な溝状遺構　細線：小規模な溝状遺構　●：出水状遺構



弥生前期～古墳後期



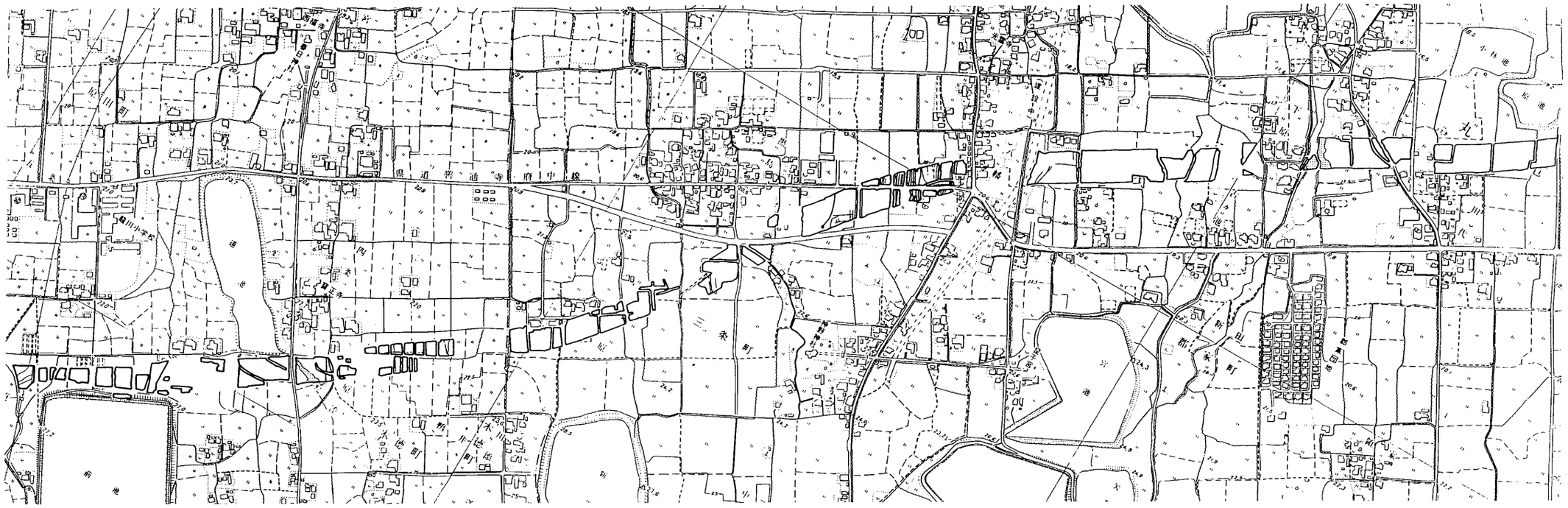
7 世紀

第 9 図　龍川・郡家地区　溝状遺構の変遷(2)（1/5,000）

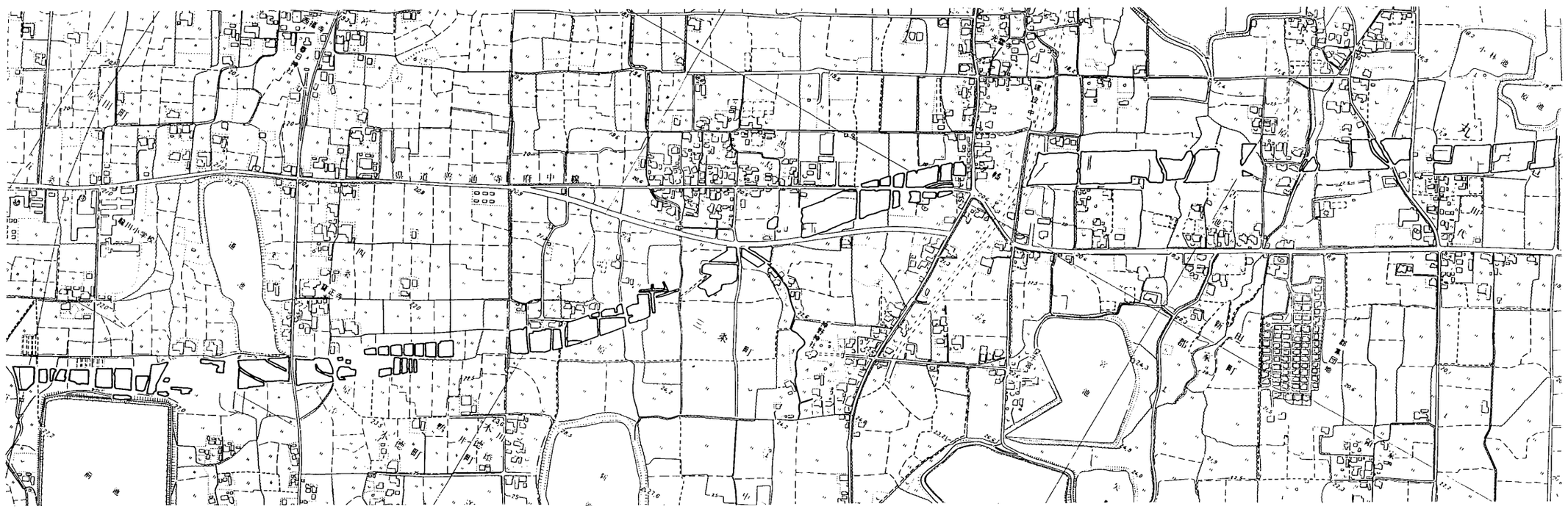
8世紀

9～10世紀

第10図　龍川・郡家地区　溝状遺構の変遷(3)（1/5,000）



12～14世紀



18～19世紀

第11図　龍川・郡家地区　溝状遺構の変遷(4)（1/5,000）

やや離れた川西北・鍛冶屋遺跡での状況から，「出水」がこの新たな水路群の重要な水源に組み込まれたことが窺える。このような７世紀代に一時真北方向を指向し，その後遅くとも８世紀には現地割と同じ方向で揃う在り方は，この時期の集落にも反映されている。同様な状況は金蔵寺下所遺跡や稲木遺跡など，金蔵川西岸域の遺跡においても看取でき，小地域にとどまらない広範な地割設定の動きが７～８世紀代にあったことを想定させる。しかし依然として溝状遺構の集中度には，地域的なばらつきがあり（特にｂ群西半部にはほとんど存在しない），今日みられるような整然とした土地景観の成立をこの時期に求めるのはやや困難と思われる。

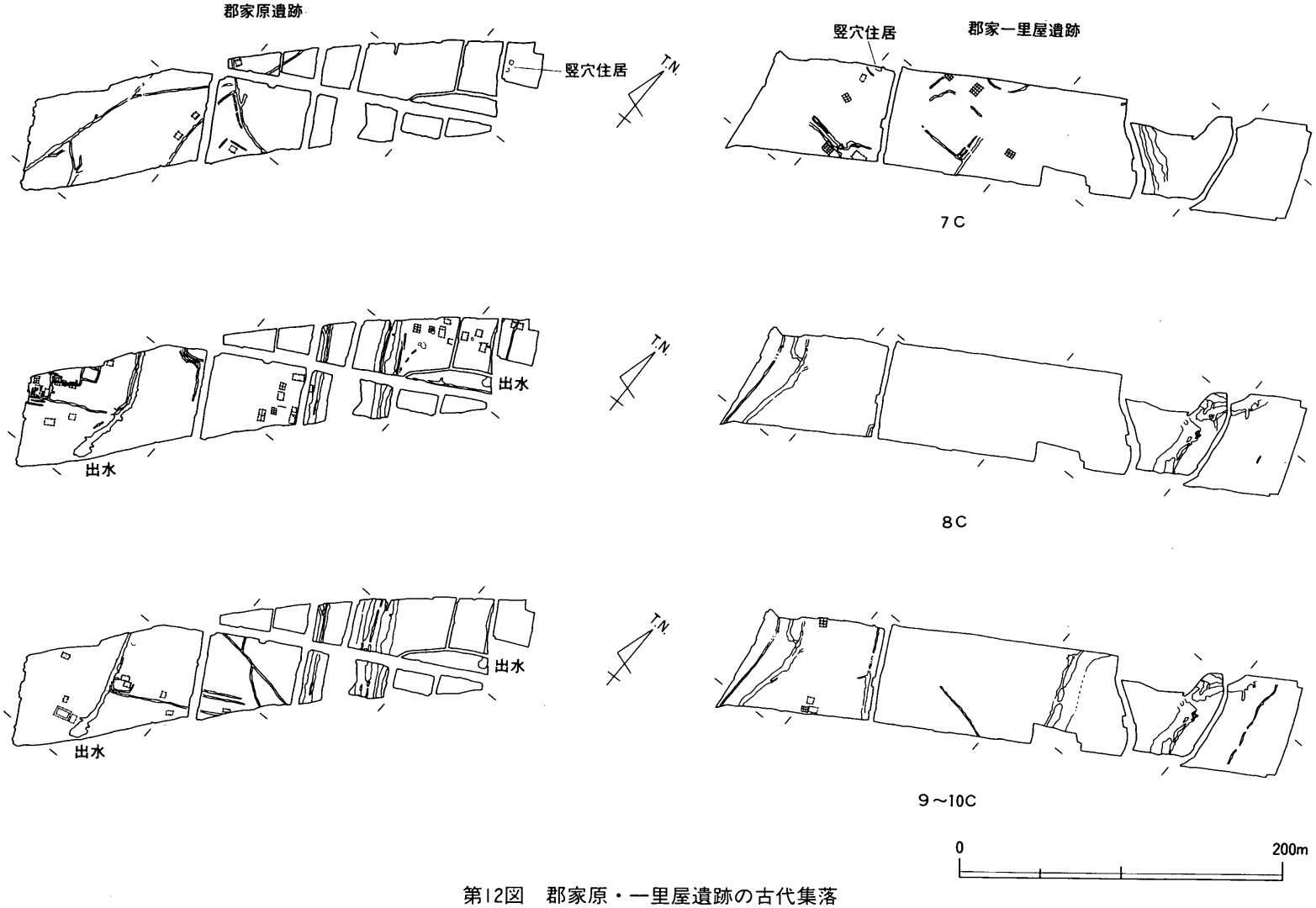
平安時代前期（９～10世紀前半）には，８世紀代に成立した地割に平行する溝状遺構が，面的にも拡充する。郡家一里屋遺跡では，調査区西端の最も標高の高い地点に大溝群が掘削されるようになる。位置的に限定された周辺地域への配水を目的とした幹線水路といえよう。ａ群やｂ群西半部においても，規模の大きな事例がみられるようになる。遺構数が減少する11世紀代の変動期を経て，この傾向は中世前半（12～14世紀）にも継承される。ことにｂ群西端にあたる龍川四条遺跡で，12世紀に塚墓を伴う集落が成立することが，大きな変化として挙げられよう。既に指摘されているような，土地高燥化がこの時期に進行したとする意見が正しければ，まず平安時代に潅漑施設が整えられ，その後集落が成立するという開発過程を土地条件との関わりで説明できる可能性がある。

近世には，溝状遺構の数はむしろ減少する傾向にあるが，これは主要な幹線水路が現在の水路と重複しているためと考えられる。なお，中世まで機能していた「出水」が遺構として確認できなくなることは，水利環境の大きな変動（大規模な溜池群の構築）を示唆するのかもしれない。今日的な潅漑網の完成は，近世を遡ることはないであろう。

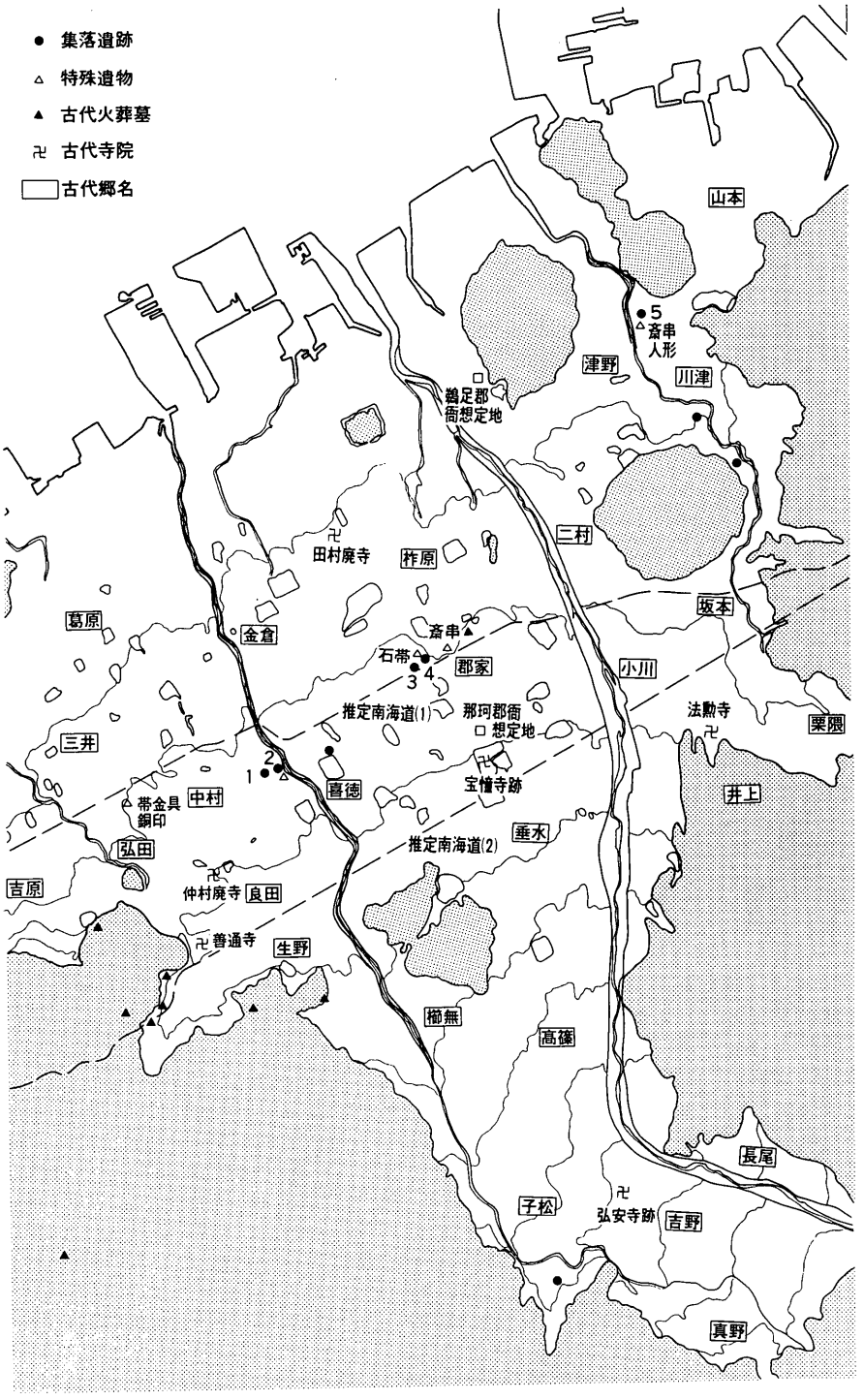
［古代集落］

周辺地域は古代には郡家郷に編成されるが，実態としての村落景観はまだ明らかにはされていない。郡家地区では古代の建物群は，郡家原・郡家一里屋遺跡で確認されている。両遺跡の建物群構成や位置関係は，７世紀代，８世紀代，９～10世紀前半の３時期によって若干異なった様相をもつ。

７世紀代には，建物群は３群認められる。郡家原遺跡の２群は極めて小規模な建物からなり，東側の群は竪穴住居のみで構成される。郡家一里屋遺跡では，相対的により大きな掘立柱建物が主体（竪穴住居も１棟）であり，総柱建物が卓越する。既に述べたように，建物の方位は真北方向を指向する。



第12図　郡家原・一里屋遺跡の古代集落



第13図　古代の集落と郷名・官道（S＝1/10万）

1 稲木遺跡　2 金蔵寺下所遺跡　3 郡家原遺跡

4 郡家一里屋遺跡　5 下川津遺跡

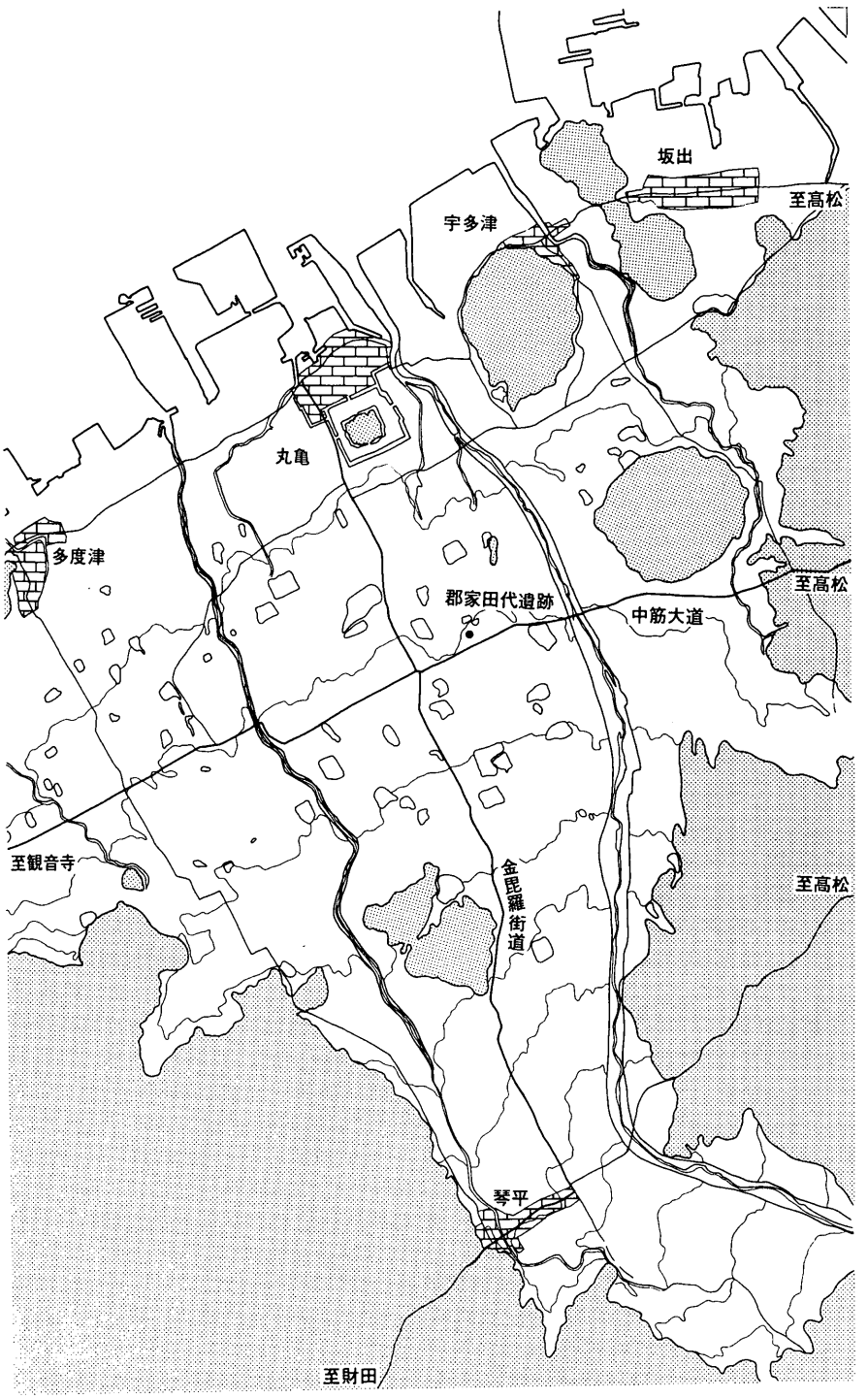
8世紀代には，幹線水路群に分割されるかたちで建物群が3群存在する。各建物群は7～9棟の掘立柱建物からなり，竪穴住居は含まない。また総柱建物を各2ないし3棟伴う。主屋に特定できるような明瞭な格差（規模・構造）をもった建物は指摘し難いものの，総柱建物とそうでない建物は異なった配置状況を示す。恐らく前者が倉庫，後者が住居的な機能を分担していたのであろう。7世紀代と比較して，均質的でまとまった内容の建物群となっている。なお，西端部の建物群では柵で区画された，畝状の小溝群（畑？）が検出されている。

9～10世紀前半には，建物群は2群程度認められる。前代でみられたような，建物群の均質でまとまりのある形態とは異なり，2～3棟の建物が散在傾向にありながら緩やかに各群を構成している。また建物の構造にもばらつきがある。

以上のように，一応は7～10世紀前半の長期にわたってほぼ同じ地点で集落形成が行われるのであるが，その一方で各建物群が厳密な意味での同一箇所に営まれることがない点に注意する必要がある。また，建物群の内容が相互に均質であったのは8世紀代だけであり，その前後には非均質的な状況が読み取れる。これらは居住者の経営基盤がかなり不安定もしくは不均衡であったことを窺わせ，逆に8世紀代の集落構成の特異性が強調されるように思われる。

これらは丸亀平野に一般的な小集落と考えられるが，周囲には有力階層の居住したとみられる集落も存在する。金蔵寺下所遺跡は，7世紀末葉～8世紀前葉の掘立柱建物群が，大規模な溝状遺構と河道によって区画された遺跡である。遺構の重複関係や遺物の年代観によると，7世紀末葉前後のある時点で遺構の主軸方位が真北指向から現地割と一致する方向へと転換している。建物の最大規模は7世紀末葉で37.73㎡，8世紀前葉で24.4㎡を測り，郡家地区の集落よりもかなり大きい。また建物群に不随する可能性のある溝状遺構も，規模が格段に大きく，断面形態が深いV字形を呈する。出土遺物も特異である。集落の南辺を画する河道からは，土師器・須恵器とともに人形・笛形などの木製模造品，斎串，鉄製壺鐙などが出土している。これらは律令的な祭祀具を使用し，また農耕以外の目的で馬を所有する居住者の存在を予測させ，一般集落とは大きく隔たった遺跡の性格を示していよう。

龍川・郡家地区では，このような遺跡の存在は確認されていないが，郡家大林上遺跡の河道（ＳＲ０１）から出土した奈良時代の斎串や，郡家一里屋遺跡の溝状遺構から多量に出土した灰釉・緑釉陶器，同遺跡から出土した石帯などの遺物に注意する必要があろう。



第14図　近世の都市（町場）と街道（S＝1/10万）

いずれも廃棄された状態での出土であるが，遺跡の南方にこれらを廃棄する階層が存在したことを暗示する。那珂郡衙の推定地の問題とともに，今後議論を深めるべき課題であろう。

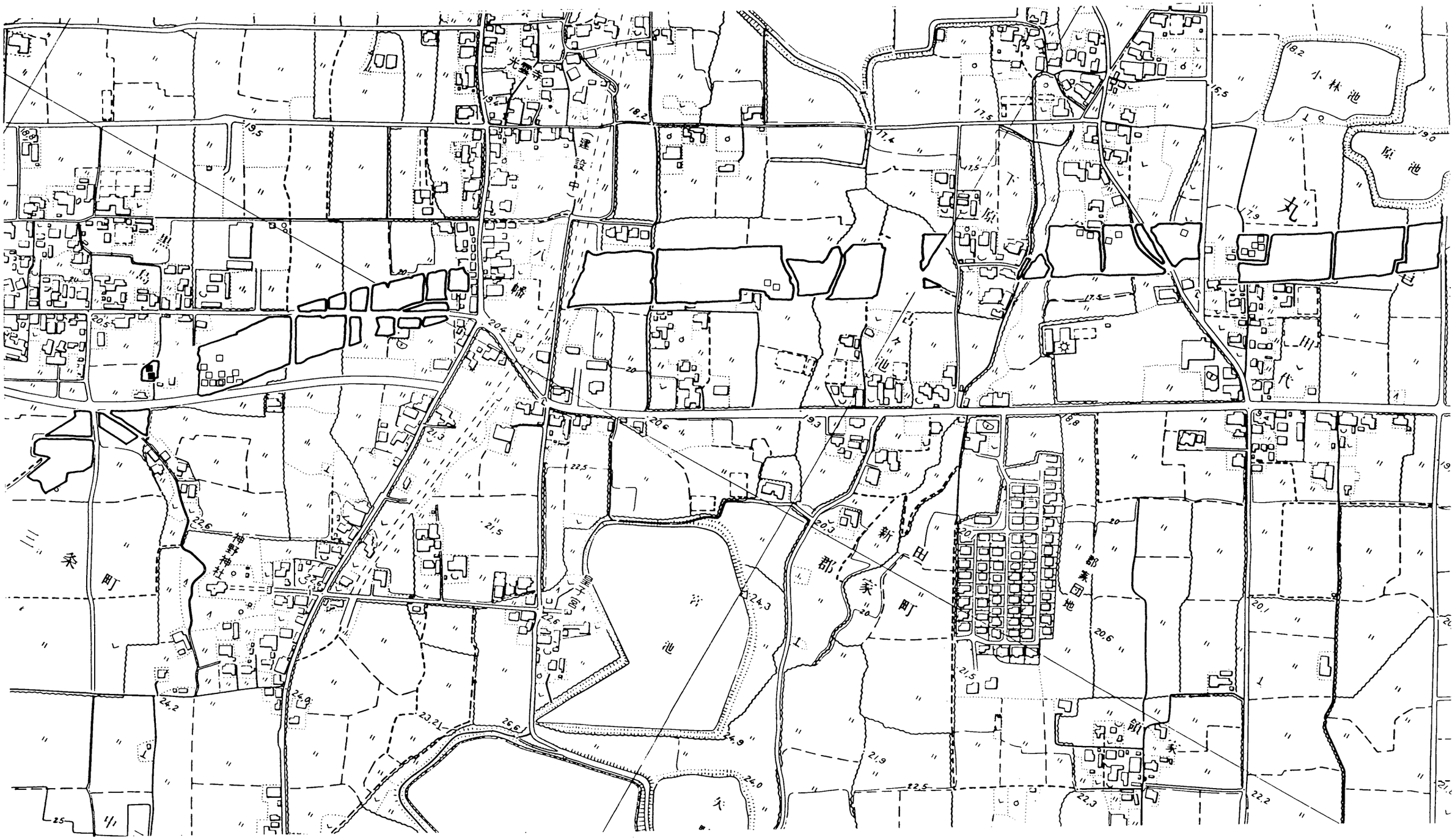
［近世村落と交通網］

寛永18年（1641），讃岐は東西（高松藩・丸亀藩）に二分され，郡家付近は高松藩領となった。これは両藩の石高を調整した結果設定されたものであることから，交通や物流という点では藩の領域がこれを規制することは少なかったと思われる。

丸亀平野における大きな近世都市（町場）としては，丸亀・多度津・宇多津・坂出・琴平がある。丸亀は城下町として，この地域の交通・物流の中核的存在をなした都市である。また多度津は丸亀の支藩として陣屋が形成された。宇多津・坂出は塩田や物資の集散地としての機能をもつ町場であった。さらに琴平は金毘羅信仰の高揚とともに，近世後期に急速に成長した門前町である。

龍川・郡家地区付近の近世村落は，これらの都市に囲まれた農村部であり，一般に「集村」または「疎塊村」と呼ばれる形態を呈していたようである。街道筋に面した地域の村落は集村的な形態をもつが，そこから離れた箇所の村落は疎塊村的な形態となる。発掘調査で検出された近世建物群（大半が18～19世紀）は，現在の村落と重複する位置にあることがわかり，少なくとも近世後期から現在に至るまで，多くの村落は踏襲されていることが考えられる。また発掘調査の知見による限り，建物下部の構造は18世紀代までは掘立柱が圧倒的に多く，礎石建物の明らかな事例はない。これは，19世紀前半の段階で農村部の建物の半数以上が掘立柱建物であった，という史料の記載と一致する傾向である。

付近の街道としては，中筋大道（現在の県道善通寺・府中線にほぼ相当）が東西に延び，これに丸亀城下から南に延びる金毘羅街道が八幡で直交している。中筋大道は西は鳥坂峠を経て三豊平野へ，東は額坂峠を超えて国分寺・高松に至る街道である。振り売り（行商）による販売が主な流通ルートと考えられる近世土器の流通にとって，街道（とりわけ中筋大道）が果たした役割は大きかったと推測される。近世焙烙の分布をみると，丸亀平野は岡本（豊中町）系と御厩（高松市）系の混在する地域であることがわかる。藩の領域にとらわれない物流の一端をよく示していよう。



第15図　18～19世紀の建物分布
白ヌキは掘立柱建物，黒ヌリは礎石建物

第3章　調査の成果

第1節　土層の堆積状況

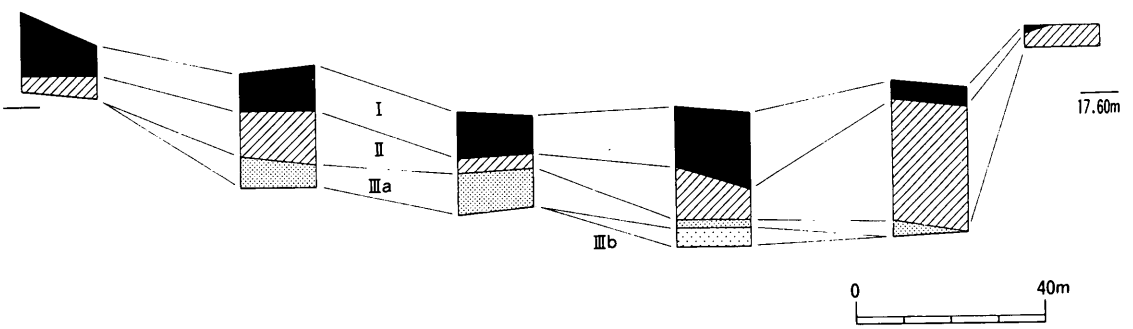
第2章第1節で述べたように，調査区付近はⅠ区とⅤ区が微高地となっている状況が調査着手前の現況からも読み取れた。土層はこの起伏に対応するかたちで堆積していた。

基本的な層序は上から第Ⅰ層（耕作土層），第II層（床土層），第III層（弥生～古代包含層），第IV層（旧石器包含層）である。第IV層の下には，無遺物層である第Ⅴ層（灰褐色系粘質土層）と第VI層（砂礫層）が堆積している。Ⅰ区北半部とⅤ区東端部で第VI層が遺構面に表れており，地表でみられた微高地の盛り上がりと一致する。縄文時代晩期以降の遺構は，第IV層上面（Ⅰ区北半部とⅤ区東端部では第VI層上面）で検出された。第IV層中に包含されていた石器群は，IV区南端とⅤ区西半部に限定的にみられるのみである。第2節で報告するような細別層位で石器包含層を特定した場合，全ての調査区の第IV層が石器包含層と同一かという点が問題であるが，調査ではこのことが検証できなかった。

以下，図示したグリッドラインの土層について，概要を報告したい。なお，土層名については各図ともに統一した。

［2ライン］（第17図）

Ⅰ区北半部の遺構が多数検出された地点である。第Ⅰ・II層の直下に遺構面（第VI層）があり，弥生時代後期・平安時代初頭・近世の遺構が同一面にみられる。削平が顕著なこ



第16図　郡家田代遺跡柱状土層図（横S＝1/1,600・縦S＝1/40）

とを示す。遺構面のレベルは17.6m前後である。南端部では，南に向って遺構面が落ち込んでおり，そこに第III b 層が堆積する。

［I ライン］（第17図）

I 区南半部で遺構の希薄な地点である。第 I ・II層の下に，弥生時代～古代の包含層である第III a ・ b 層が水平に堆積する。わずかながら近世の遺構が第III a 層上面で検出された。その下の標高17.3m前後で弥生時代の遺構面（第IV層あるいは第 V 層）が検出された。遺構面の重複状況から，近世以後の削平を強く受けていないことがわかる。第III層の細別層には弥生時代前期～平安時代前期の遺物が多く含まれていたが，両層が異なった時期の所産かどうかは明らかにできなかった。

［4 ライン］（第18図）

II区西半部を中心とする，遺構の希薄な地点である。第 I ・II層下に第III a ・ b 層が薄く堆積する。第III層はほぼ水平堆積であるが，その下の遺構面（第IV層）は17.4～17.5m前後で若干の起伏があり，G－4 杭とH－4 杭の間で第III層のみられない盛り上がり部分がある。I 区北半部から続く微高地の末端とみられ，この部分のみ削平が顕著である。なお第III層には遺物がほとんど含まれていなかった。

［Gライン］（第19図）

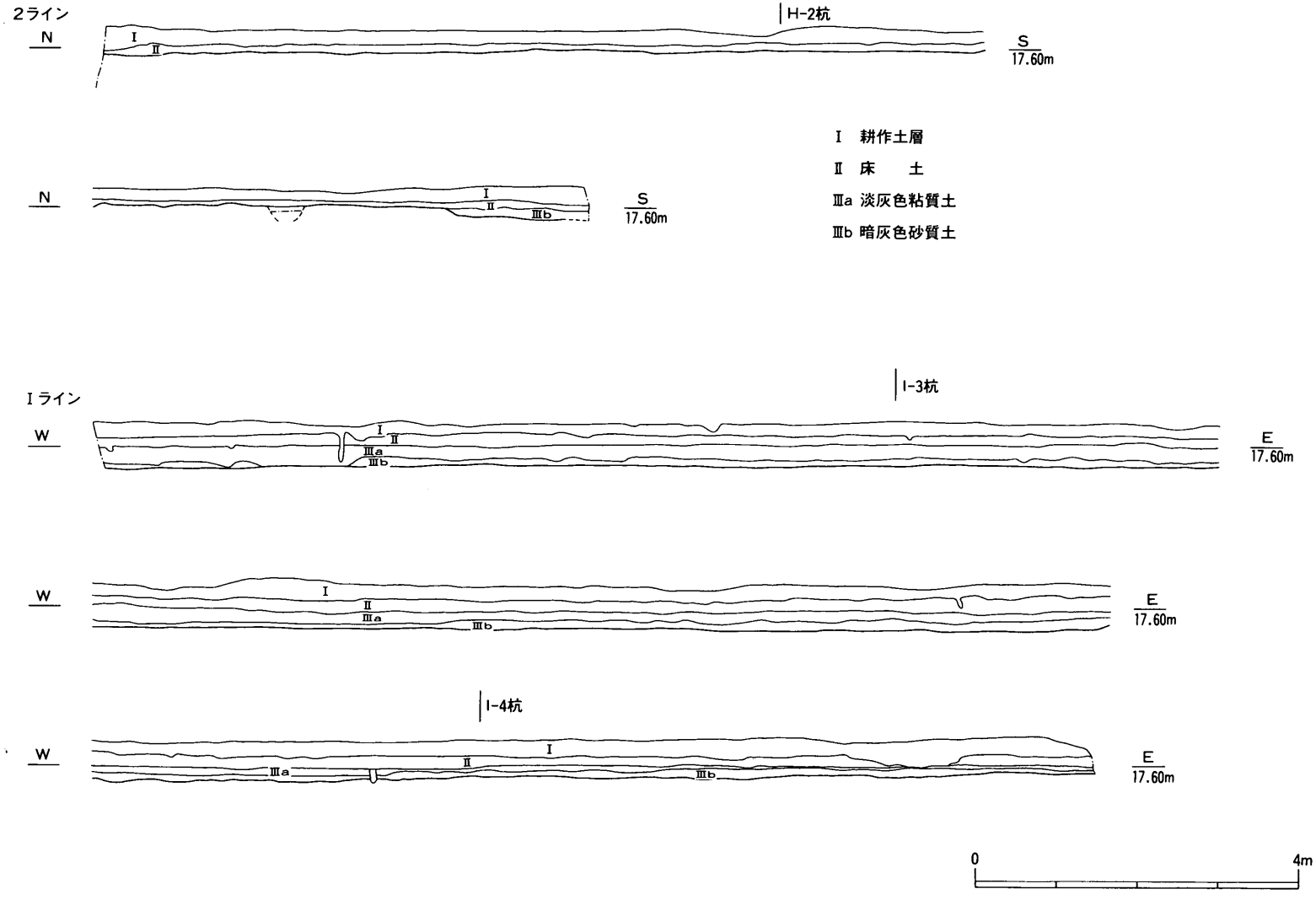
II区からIII区を東西に横断するラインであり，西端で近世のピットが，東半部で弥生時代前期～古墳時代前期の溝が若干認められる地点である。G－4 杭からG－6 杭の間の大部分は，第 I ・II層が薄く堆積する直下で遺構面（第IV層）が検出されたが，西端の一部では第III a ・ b 層が，東半部では第III b 層が堆積している。第III層の遺存状況から，全体に削平が著しいと考えられる。東端部で古墳時代前期のＳＤ３５の肩部が第III b 層を切り込んでいる。

［6 ライン］（第20図）

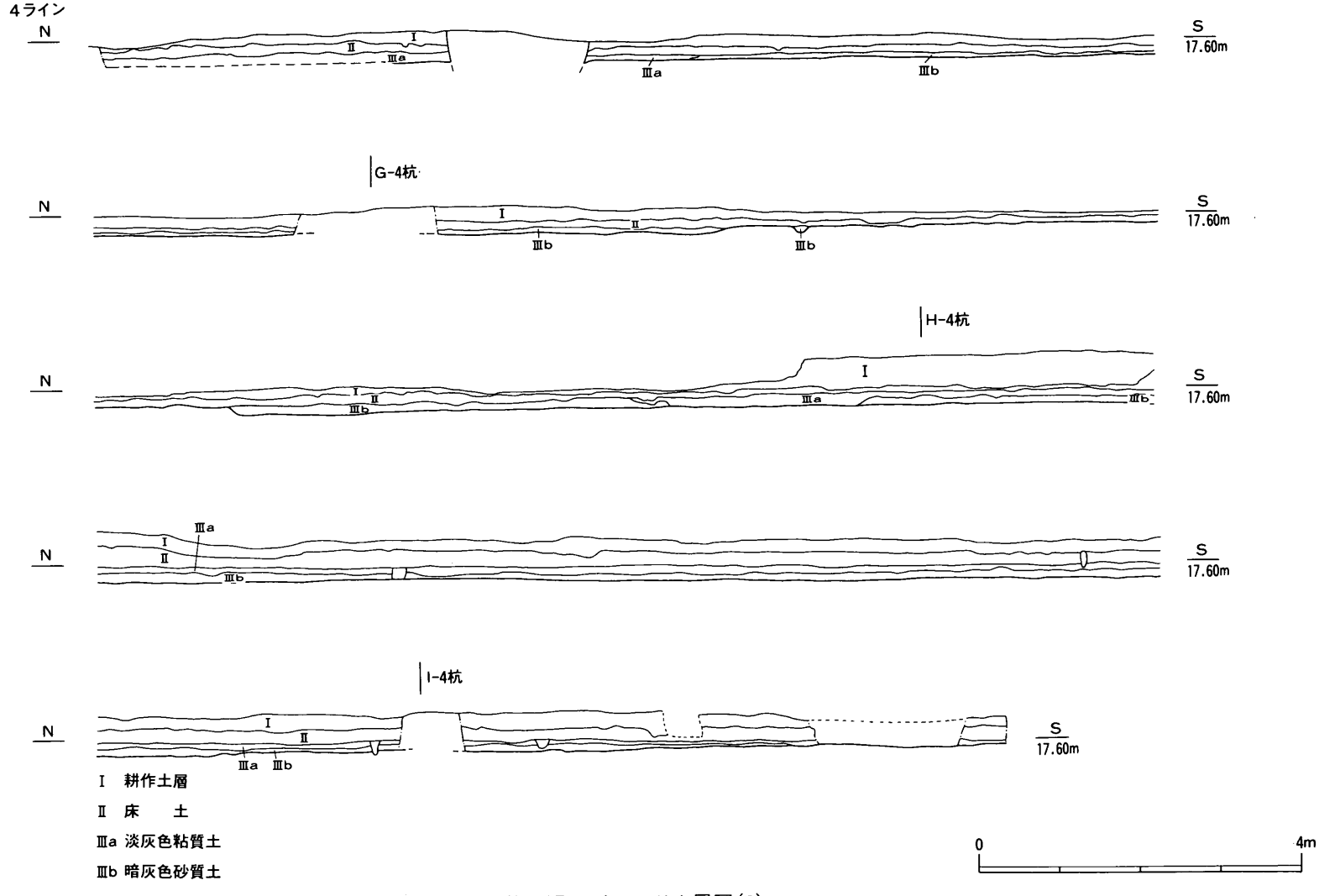
III区東半部南半を南北に切るラインである。遺構面（第IV層）に若干の起伏があり，直上に第III b 層が部分的に遺存する。その上に第 I ・II層が水平に堆積しており，削平が顕著なことを窺わせる。第III b 層から遺物はほとんど出土しなかった。

［8 ライン］（第21図）

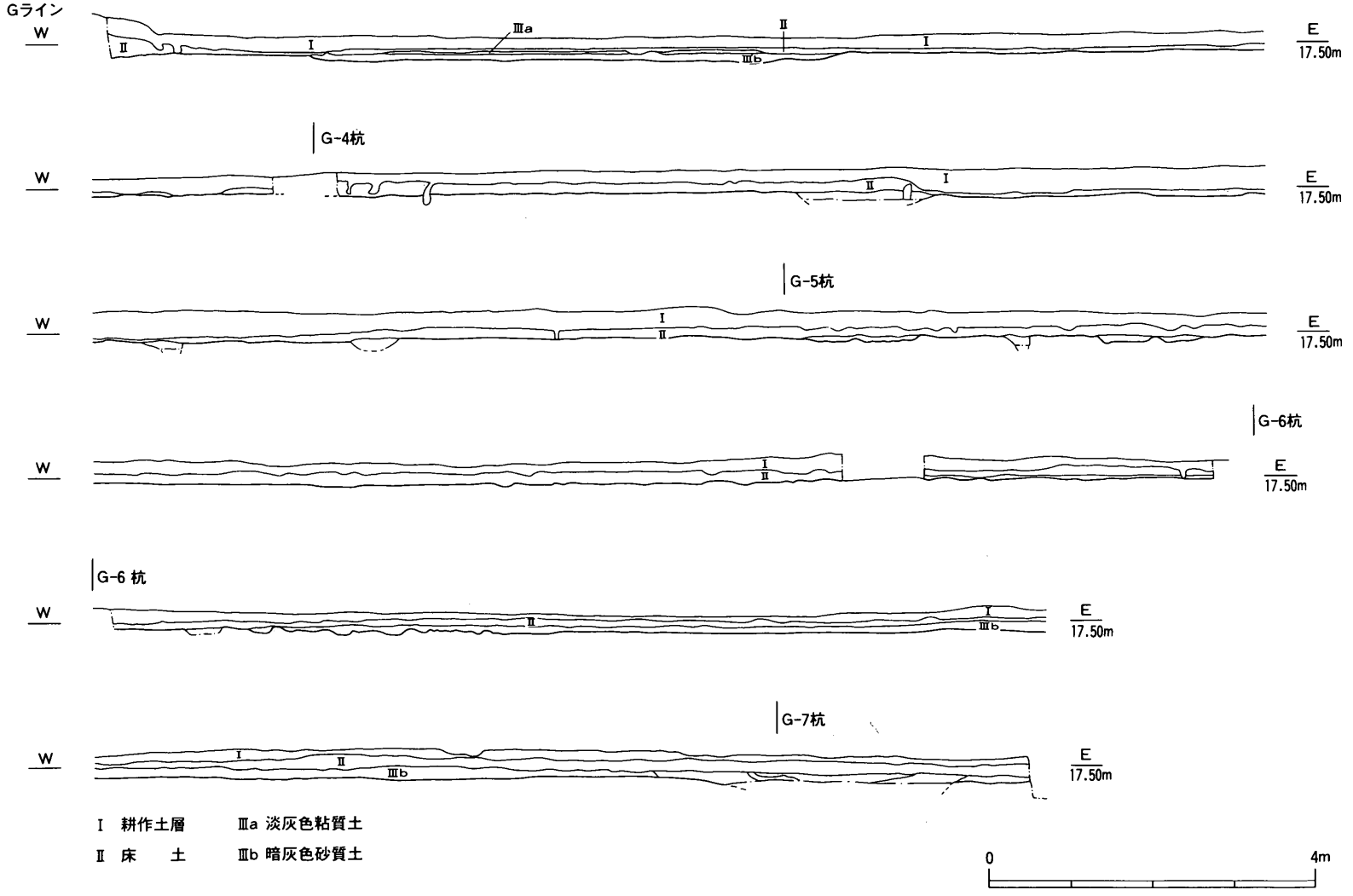
III区東半部とIV区北半部を南北に切るラインである。第 I ・II層の下に第III層が堆積している。第III a ・ b 層はほぼ水平に堆積しているが，第III a 層の上面の凹凸部分に薄く堆積する包含層（第III c 層）がある。遺構面（第IV層）は北へ向って緩やかに傾斜しており，



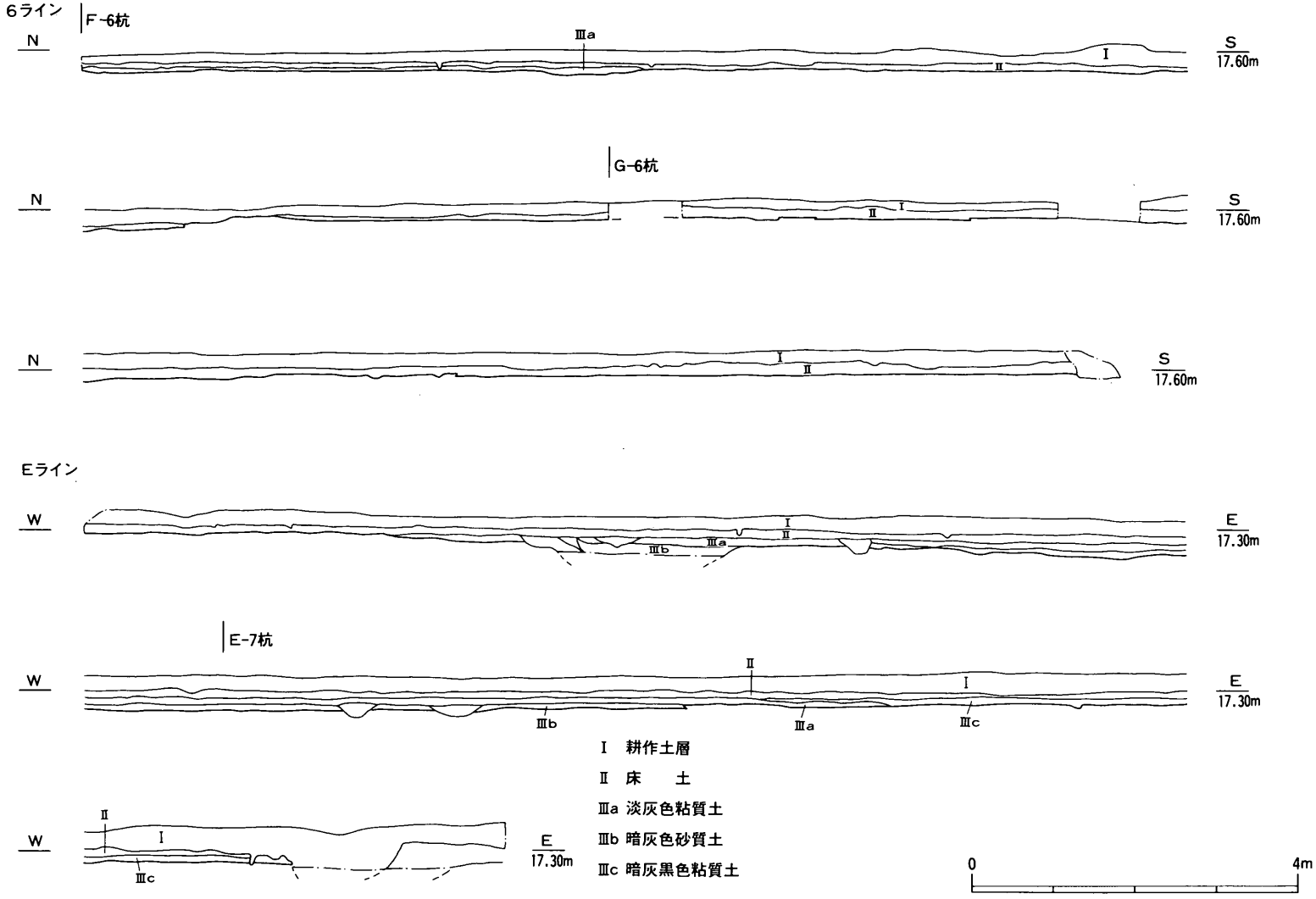
第17図 グリッド土層図(1)



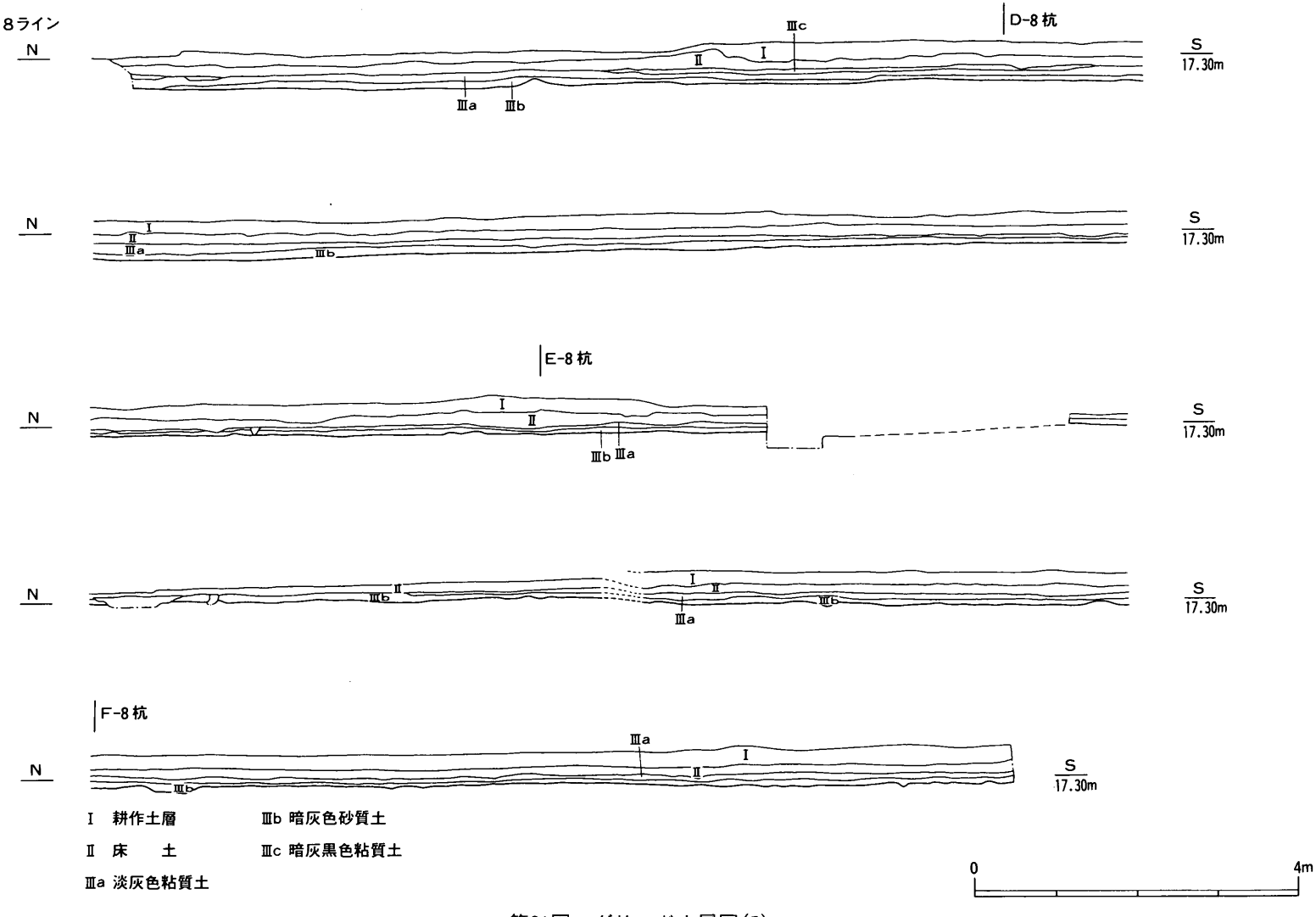
第18図　グリッド土層図(2)



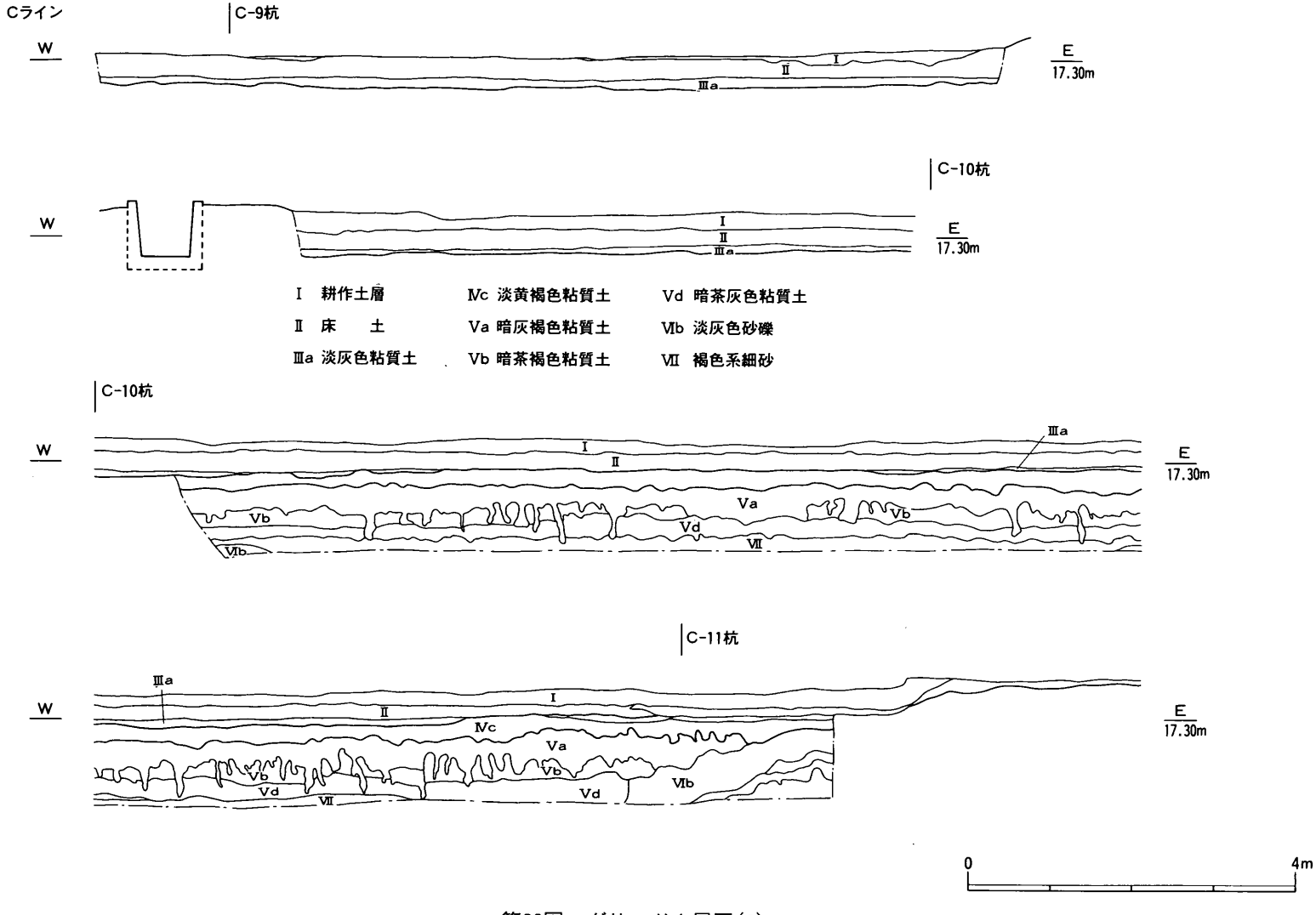
第19図 グリッド土層図(3)



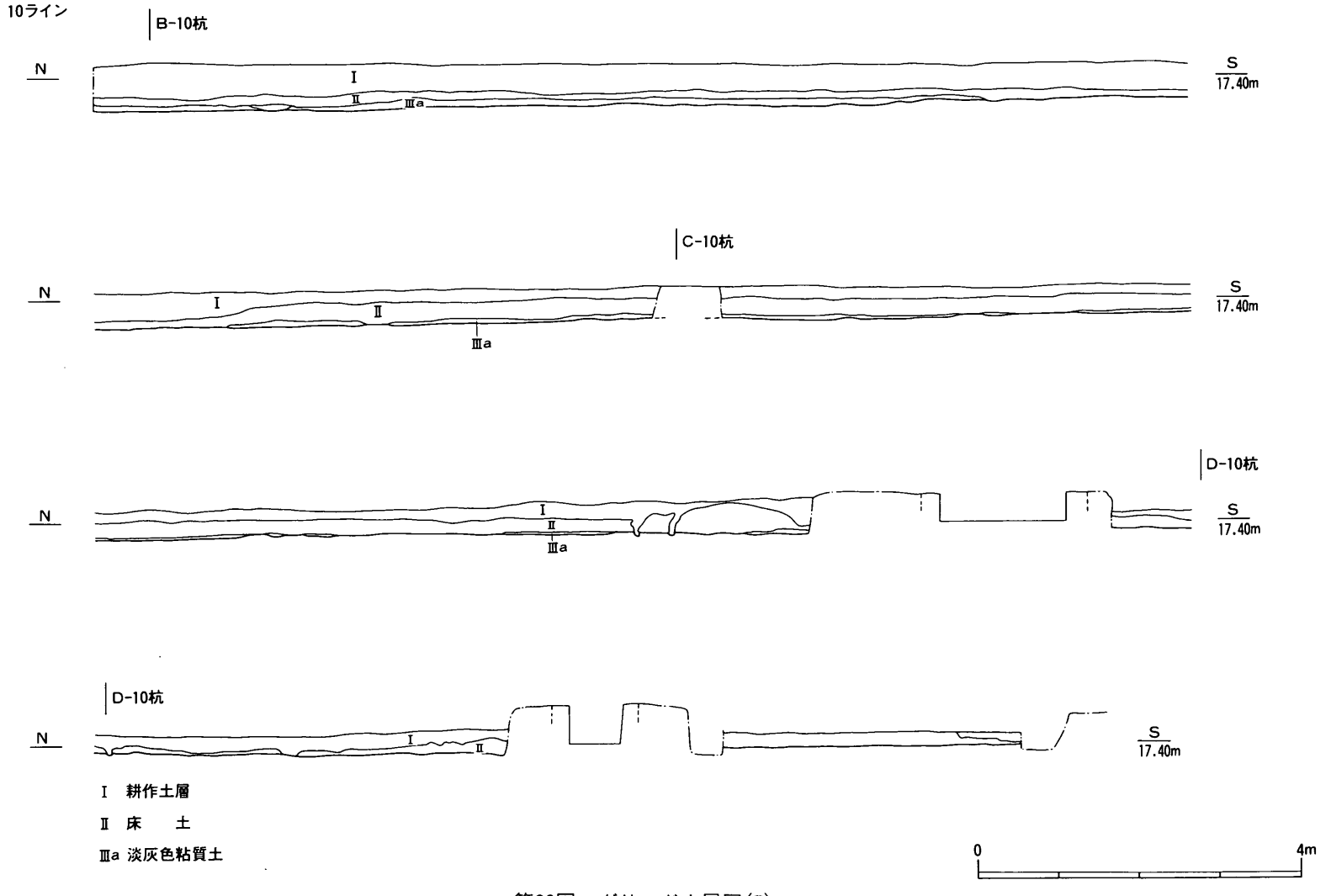
第20図　グリッド土層図(4)



第21図 グリッド土層図(5)



第22図　グリッド土層図(6)



第23図　グリッド土層図(7)

北端と南端とのレベル差は約0.3mある。第III層中には遺物がほとんど含まれていなかった。

［Cライン］（第22図）

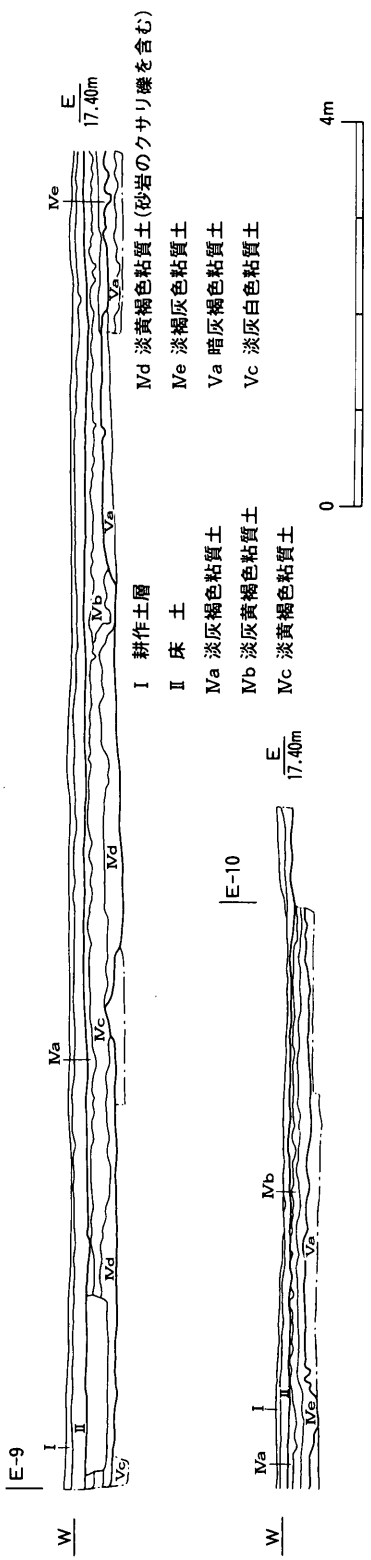
IV区からV区を東西に横断するラインの土層である。V区東半部の微高地を切るかたちで設定した。第I・II層下に第III a 層が薄く堆積していた。第III層はC－11杭付近で途切れており，東端へ向って第VI層が急速に上がっている。この付近でも，耕地化の際に第III層や第IV層の削平が行われたようである。第IV層には旧石器がごく少量含まれている。第V層の下面は乾痕が顕著に認められる。

［10ライン］（第23図）

V区西半部を南北に切る土層ラインである。第I・II層が水平に堆積し，その下に部分的に第III a 層が遺存する。ここでも耕地化による削平が顕著である。第III a 層にはごく少量の古代の土器が包含されていた。

［Eライン］（第24図）

IV区南端部の石器集中地点1と重複する位置の土層である。第I・II層の直下が旧石器包含層（第IV層）であり，弥生時代～古代の包含層（第III層）はみられない。10ライン南半の堆積状況を考慮すると，耕地化に伴い削平された可能性が高い。このことは，第IV層自体も一定度削平されていることを示していよう。第IV層以下の層序については，石器の出土層位とも関わるので，第2節で報告する。



第24図　グリッド土層図（8）

第25図　石器集中部１・２概略図
網目は未掘部分

第2節　旧石器時代

1．概　　要

この時期の遺構は，IV区とV区で認められる。ここでは縄文時代晩期以降の遺構面を構成する黄褐色系粘質土層（数層に細別可能）に石器群が包含されており，E－9グリッドとD－10グリッドを中心に緩やかな石器集中部をなしていた。またこの層の下面で不定形な落ち込み状遺構（SX08・09，やや離れた位置にSX10）が検出できた。集中部の石器群は，ナイフ形石器や翼状剥片や横長剥片・石核を含んでおり，後期旧石器時代の所産であることは明らかである。また集中部と一部重なるように，床土層（近世包含層）からも旧石器がかなり出土している。これらは近世以降の耕地化に伴い，石器集中部から攪拌された可能性が強い。

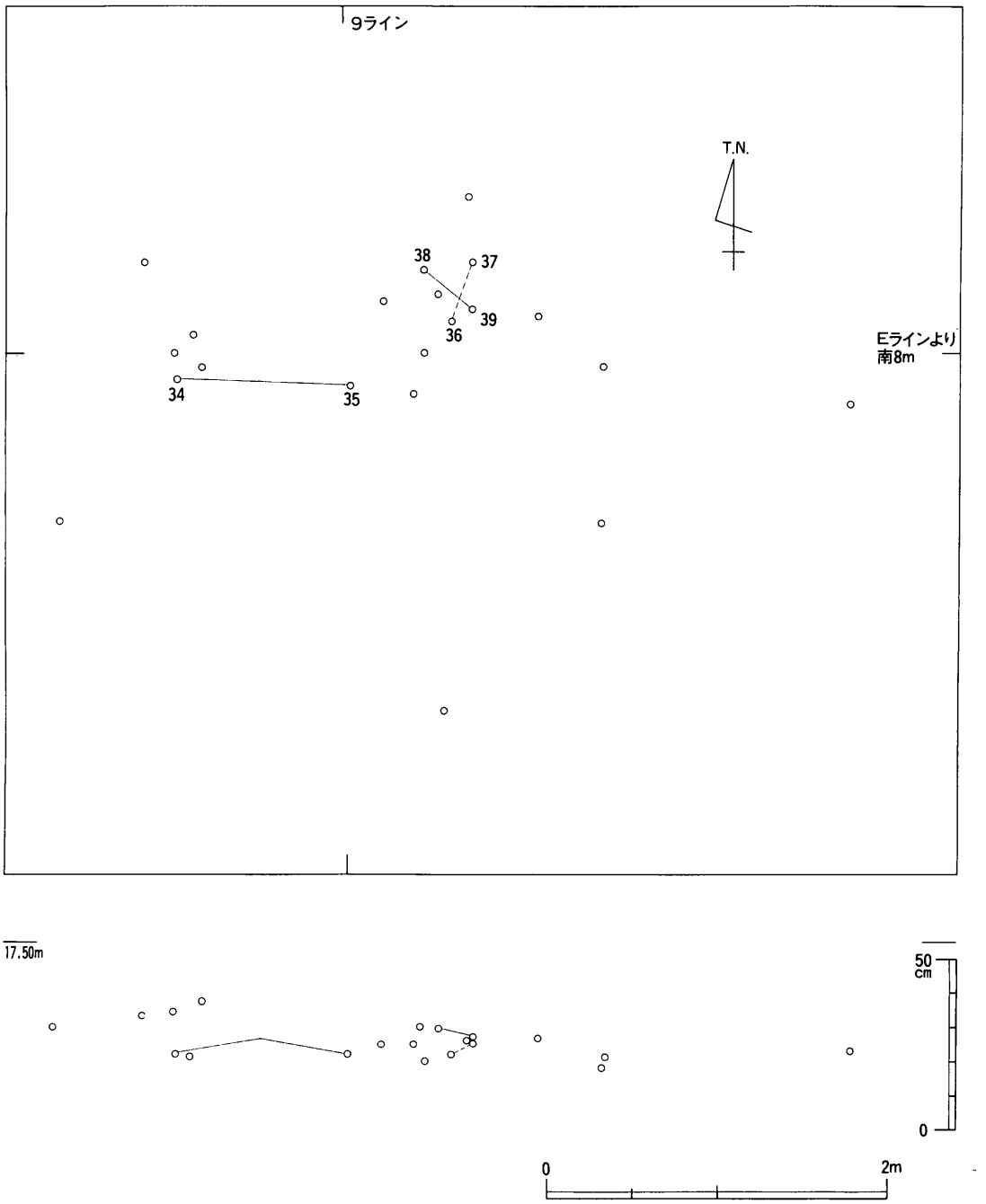
2．石器集中部1（第25図，付図1・2，図版21・22）

E－8・9グリッドとD－9グリッドに分布しており，東西20m，南北22mの範囲で49点の石器が出土した。石器はサヌカイトで占められるが，付近の基盤層下の礫層にはみられない安山岩片もある。明瞭な加工痕は観察できないが，別地点から移動してきた可能性があり，一応これも点数に加えている。この範囲の石器群を石器集中部1と呼称する。

［層序と垂直分布］（付図1）

耕作土・床土層直下の黄褐色系土層（IV層）以下は，次のような土層に細別できる。

IVa　淡灰褐色粘質土層
IVb　淡灰黄褐色粘質土層
IVc　淡黄褐色粘質土層
IVd　淡黄褐色粘質土層（砂岩のクサリ礫を含む）
IVe　淡褐灰色粘質土層
Va　暗灰褐色粘質土層
Vb　暗茶褐色粘質土層
Vc　淡灰白色粘質土層
VI　淡黄褐色砂礫層（砂岩礫を含む）



第26図　石器集中部Ⅰ石器接合関係分布図
実線：剝離面接合，破線：折れ面接合

このうち石器を包含していたのは，IVａ・IVｃ・IVｄ層である。細別したIV層の各層は近似した色調・土質をもつ。この他にＶｃ・VI層にも少量の石器が含まれるが，いずれもIV層との境界付近であるため，IV層から垂直移動したことが考えられる。また後述するＳＸ０８・０９はＶｃ層から掘り込まれている。したがって，石器群のベースとなるのはV・VI層である可能性が強い。

石器群はレベル的には20cm前後の幅で分布しており，IV層内の細別層位別に偏る傾向は読み取れない。また接合資料も細別層位を超えて分布している。なお，同じレベル幅から石鏃が４点出土している。このことは，石器群の一括性にも関わることであるが，平面分布の在り方や接合資料の存在などを考慮すると，石鏃は垂直移動により混入したと考えられよう。

［平面分布］（第25・26図，付図１）

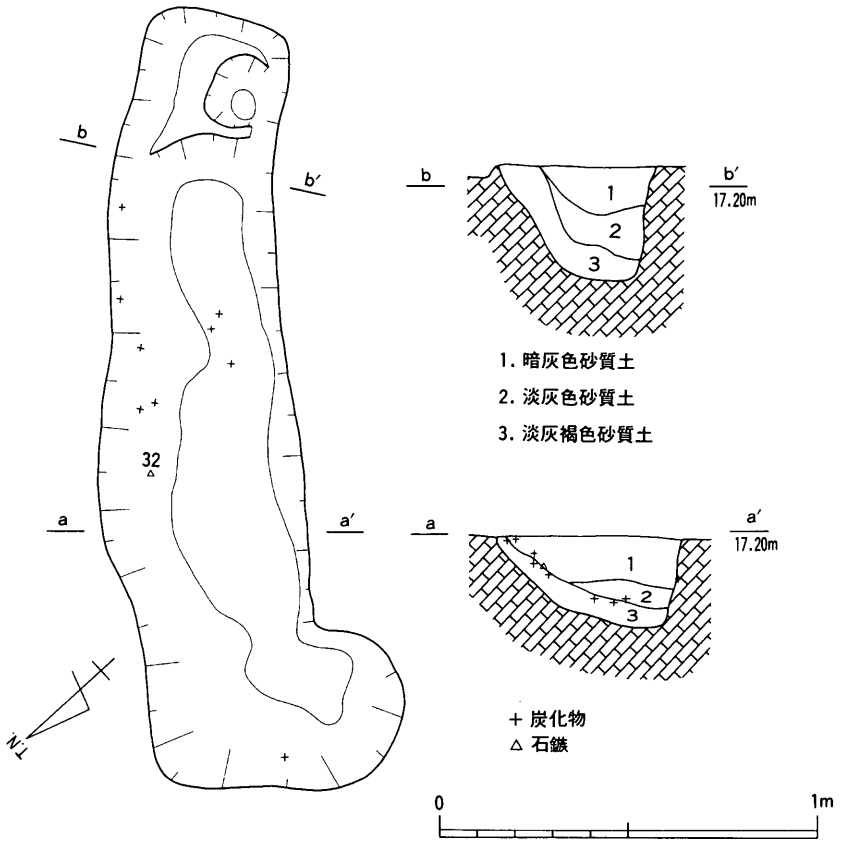
全体に石器の分布は散漫であるが，そのほぼ中央にあたる東西３m，南北2.2mの範囲（第25図の破線内）に，18点の石器がやや集中的な分布を示している。ここでは，３例６点の接合資料の存在が認められた（第26図）。また風化のかなり進んだやや粗い石質のサヌカイト（白色風化サヌカイト）が主体であり，同一母岩の可能性がある。接合資料や近似した石材の在り方から，この範囲は平面的にはかなり原位置を保っており，同一時期に石器製作が行われた場所の可能性がある。

器種別の分布をみると，中央の集中部分にはナイフ形石器（２）があり，また横長剝片と石核の接合資料（34＋35）がみられる。その周囲の南北８m，東西12m程度の範囲（第25図鎖線の南側）から，ナイフ形石器（１）やスクレイパー（３），楔形石器などが出土している。一応この範囲が一つのブロックと捉えられよう。その北側は接合資料がなく，特に集中する傾向もないため，別個のブロックを形成するものなのか明らかではない。

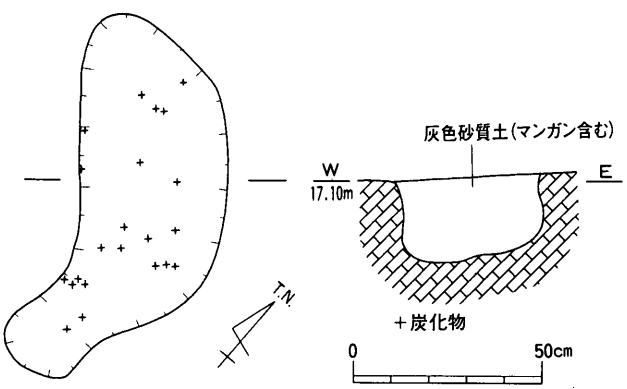
また，石器分布の散漫な東部から北東部にかけて，土坑状の遺構（ＳＸ０８・０９）や炭化物の集中地点が存在する。

［ＳＸ０８］（第27図，図版23）

石器集中部１の東部で検出された土坑状の遺構であり，Ｖｃ層上面から掘り込まれる。平面形態は北西辺がやや南に張り出したようになっているが，概ね長方形を呈する。底面形態は上面ほど直線的ではなく，また南東辺付近は２段に落ち込んでおり，不定形である。埋土は３層に分けられ，北東辺から南西辺に向かって堆積している。最下層の第３層には炭化物粒がかなり含まれる。



第27図　ＳＸ０８平・断面図（Ｓ＝1/20）



第28図　ＳＸ０９平・断面図（Ｓ＝1/20）

遺物は，第１層と第３層との境から石鏃が１点（32）出土している。

［ＳＸ０９］（第28図）

ＳＸ０８の西約４ｍの地点のＶ層上面で検出された，土坑状の遺構である。平面形態は南端が張り出しており，不定形な形態である。埋土は単一であり，炭化物粒を若干量含んでいる。石器は出土しなかった。

ＳＸ０８・０９は石器群に関連する遺構ともみられるが，付近に礫群や焼土面などの遺構を伴わず，人為的な遺構とするにはなお検討を要する。いわゆる「風倒木痕」である可能性も考慮する必要があろう。

［出土遺物］（第29～34図）

ナイフ形石器（１・２）　いずれも底面をもった横長剥片を素材とする。１は背面に４枚のネガティブ面がみられる。そのうち基部に近い大きな剥離面は，先行して剥取された横長剥片の剥離痕である。想定される打点の位置は，腹面のそれとは若干ずれている。先端に近い剥離面は，盤状剥片を剥取する以前の石核の打面とみられる。背部調整は腹面側から行われており，先端ほど細かく施されている。２は背面と腹面の打点がほぼ同じ位置にある横長剥片を素材とする。調整剥離は背部のみならず刃部にも行われており，特に先端部側では，腹面側からの加工によって三角形に近い断面形態を作出している。

スクレイパー（３）　折損した三角形の横長剥片の一辺に，細かく連続的な調整剥離を行うものである。側縁には自然面が遺存する。

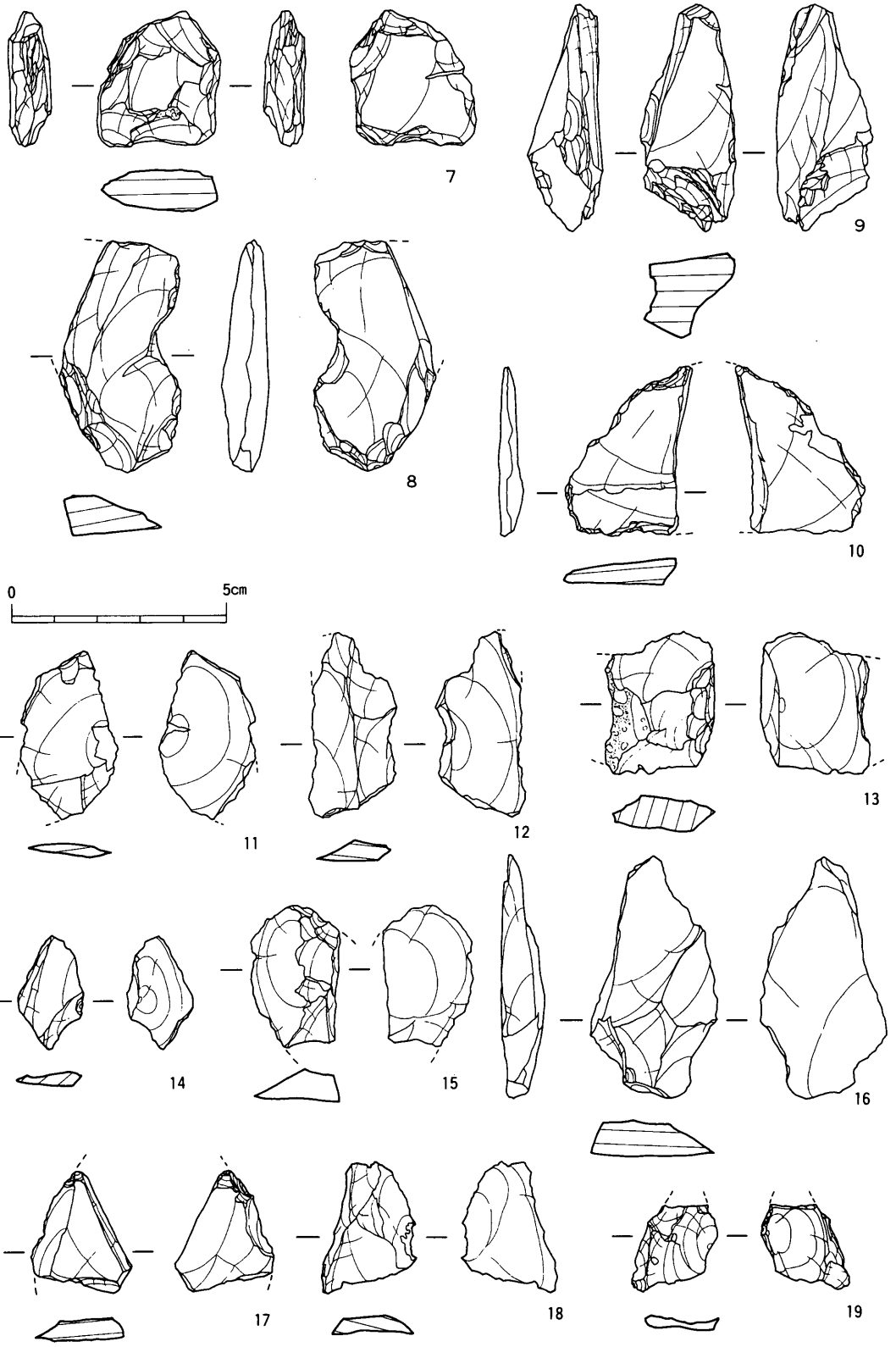
楔形石器（７～９）　上下両辺ないし片辺に蝶番剥離をもつものを楔形石器とした。７は上辺の狭い台形を呈し，上下両辺に蝶番剥離がみられる。石材の風化が顕著であるため，側縁の裁断面や上下両辺の潰れの存在は明らかにし得ない。８・９も一応楔形石器と捉えたが，二次加工ある剥片との識別が難しい。ともに縦長で不定形な形態をもち，下辺に顕著な剥離がみられる。８は側縁に折れ面があり，下辺の剥離に先行する。上下両辺には潰れ痕がみられる。９も側縁に大きな折れ面がある。

二次加工ある剥片（６・10）　比較的細かく連続的な調整剥離を行われた剥片を二次加工ある剥片とした。６は折損した剥片に二次加工を施す。調整剥離は背・腹両面から行われている。側面には自然面が残る。10は背面に底面状の剥離面をもつ横長剥片であり，側縁に折れ面をもつ。下辺と上辺から側縁にかけて細かな剥離が連続するが，風化が著しいために使用痕との識別は難しい。

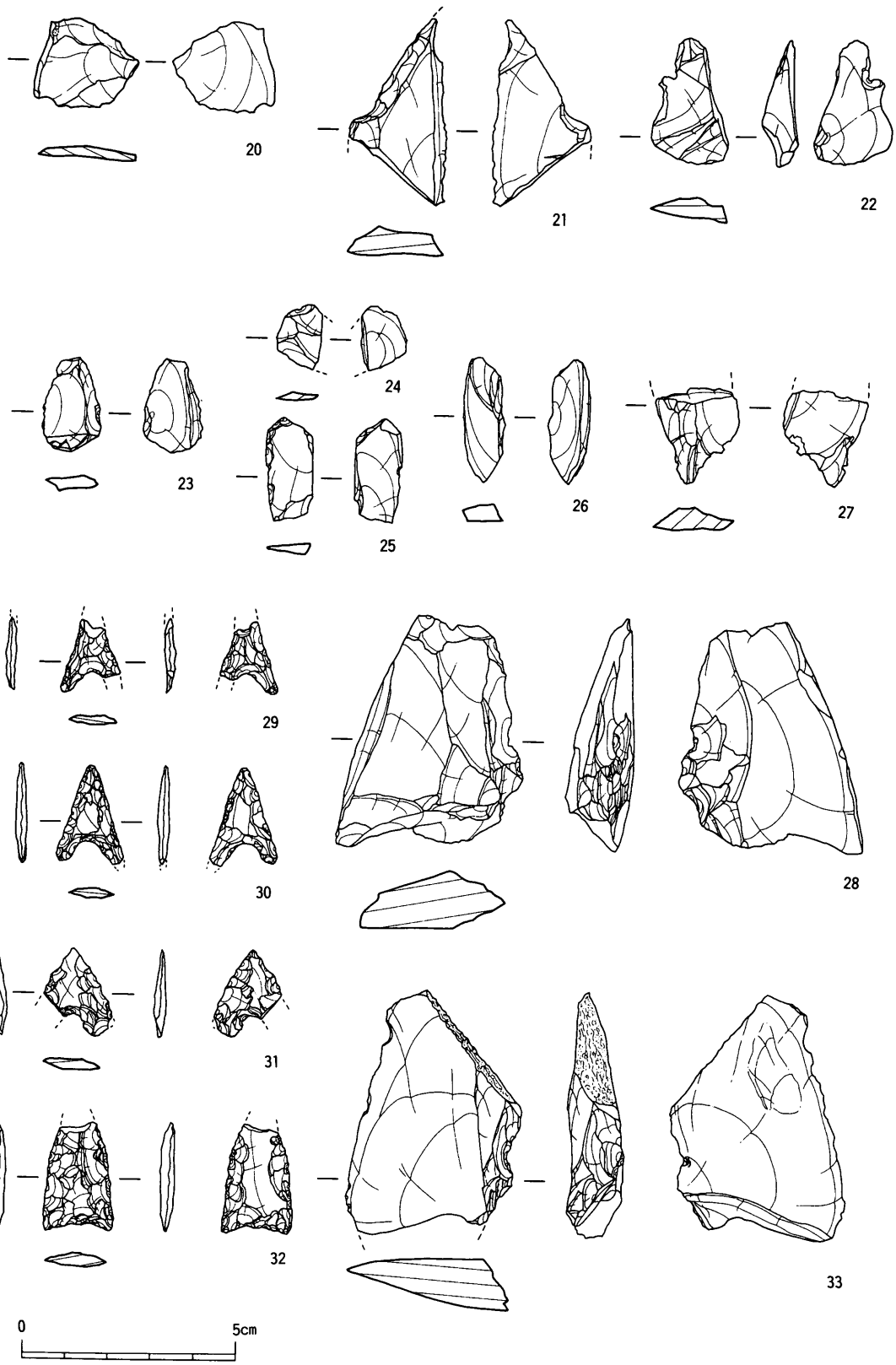
使用痕ある剥片（４・５）　４は背面側に自然面がみられることから，調整剥片と思われる。側縁の一部に，潰れ状の微細な剥離がみられる。５は縦長剥片石核の調整剥片と思われるもので，打面と背面との縁に微細な剥離がみられる。

剥片（11～16・18～20・22・23・25～27・35）　打面・打点が残る未加工・未使用のものを剥片とした。ただし，非調整的な粗い剥離や折れ面によって打面と打点がないものも，本来的にこれが存在したとみられるものについては，剥片として扱った。形態的には横長

第29図　石器集中部Ⅰ出土遺物（1）（S＝2/3）



第30図　石器集中部Ⅰ出土遺物（2）（S＝2/3）



第31図　石器集中部Ⅰ出土遺物（3），ＳＸ０８，Ｅ－８区出土遺物（Ｓ＝2/3）

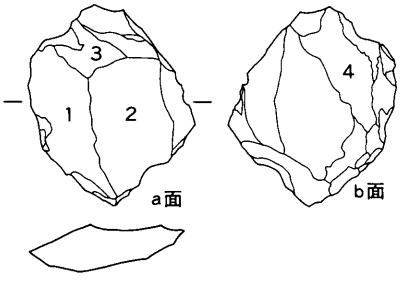
のもので占められ，縦長剥片は見出せない。また目的剥片と考えられるのは，接合資料の35のみである。他の多くは調整剥片とみられるが，いずれの工程に伴う調整剥片か特定は難しい。

35は底面をもつ横長剥片である。底面・背面ともに剥離面は1枚である。また底面と腹面の境には鋭角的な縁辺がみられる。想定される背面側と腹面側の打点の位置は，ほぼ同じである。折損によって打点と打面は遺存していないが，横長剥片としては安定的な形態を有しており，目的剥片とみられる。石核（34）と接合する。

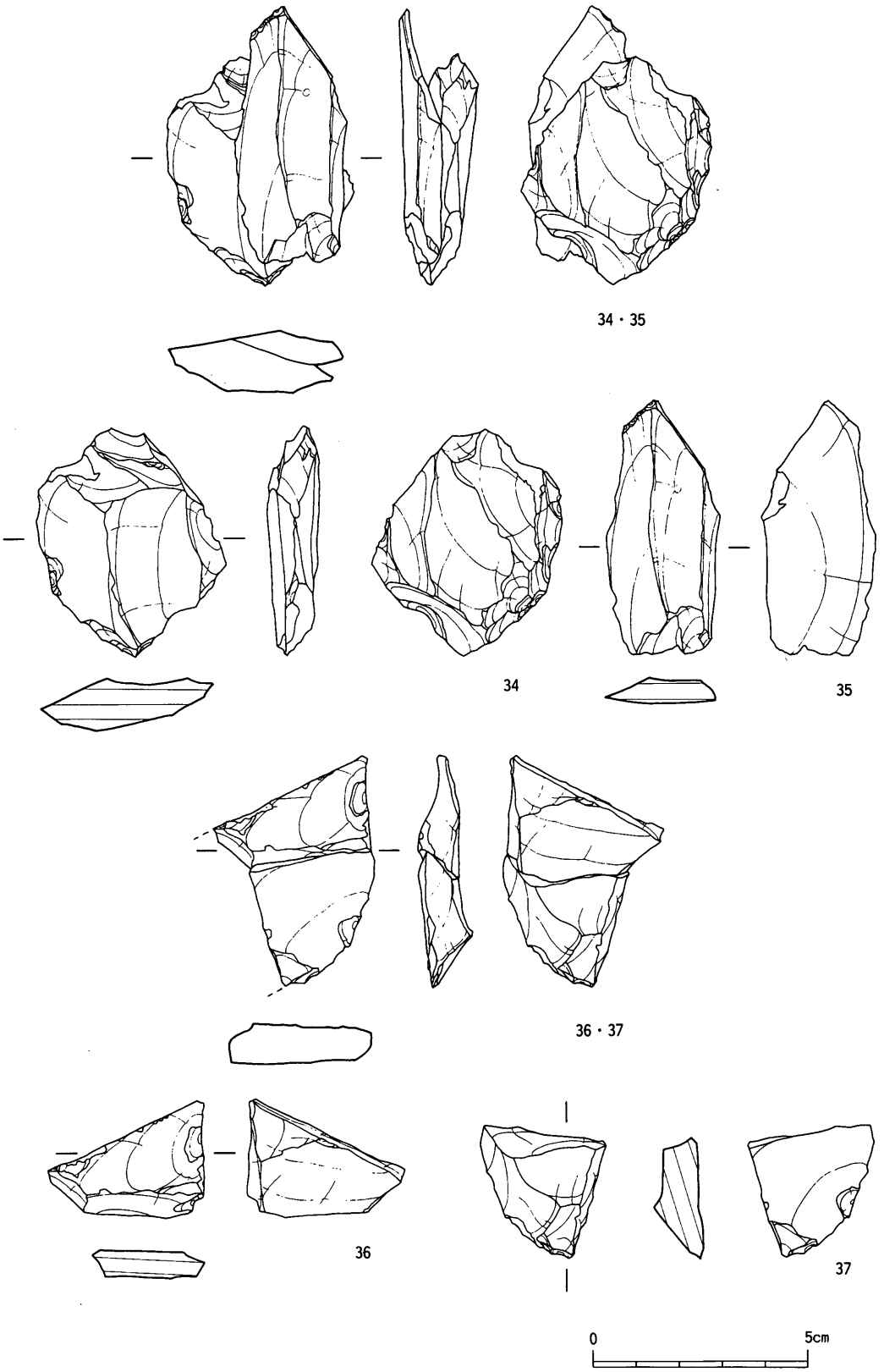
石核（28・34）　横長剥片石核が2点みられる。28は，一応ポジティブな面を底面としたものと捉えられる。この面には，目的剥片を剥取したと考えられる，石核幅とほぼ一致した剥離面が1面認められる。ネガティブ面側にも比較的大きな剥離面が2面みられる。石理との関係でみると，打面調整の剥離痕の可能性が高いものの，交互剥離による目的剥片剥取の形跡の可能性も全くは否定できない。剥片剥取後に両辺に二次加工が施され，転用されているようである。34も剥片剥取後に縁辺に二次加工が施される。35と接合するため，剥片剥離については，接合資料の項で報告する。

石鏃（29～32）　4点出土した。いずれも凹基式であるが，基部の抉りが長く延びるもの（29～31）と，僅かに抉れる平基式に近いもの（32）がある。29・30は刃部が細長く，31は幅広の正三角形の刃部をもつ。大阪市長原遺跡の石鏃の変遷を参考にすると，29・30・32は縄文時代後期～晩期頃の所産とみられ，31は縄文時代中期頃と考えられる。

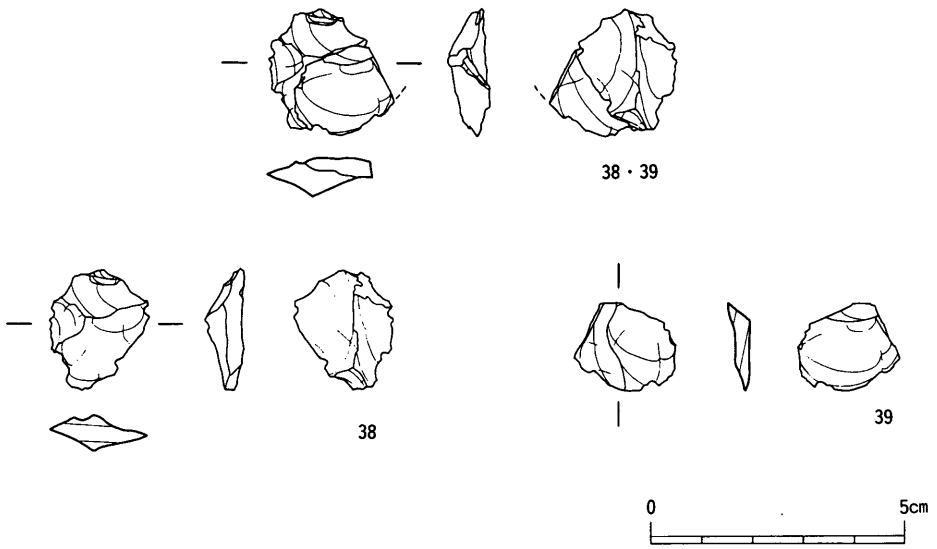
接合資料（34～39）　3組6点の接合資料がある。34＋35は横長剥片石核と横長剥片の接合例である。個々の形態については上記したので，ここでは剥片剥離の在り方について触れておく。既にみたように35は目的剥片である可能性が高く，これと接合する34はａ面のポジティブ面を底面（第32図剥離面1），ネガティブ面（剥離面2：35を剥取した面）を作業面としていることが考えられる。この面には35の剥取面に後出するネガティブ面（剥離面3）が認められる。想定される打点の位置は35の剥離面とは大きく異なり，ほぼ直交する。この面から剥取された剥片は遺存しないものの，かなり厚みのあったことが予想される。また長さは石核縁辺が二次加工されているために明らかにし難いが，剥片35の遺存した打面との位置関係からみれば，ほぼ35と同じか，やや小振りな剥片が得



第32図　石核34の剥離面（S＝1/2）



第33図　石器集中部Ⅰ出土遺物（4）（S＝2/3）



第34図　石器集中部１出土遺物（5）（S＝2/3）

られた可能性もある。またｂ面にも，ａ面の作業面とほぼ相対する方向から加撃された剝離面（剝離面４）がみられる。これらの剝離面を目的剝片剝離の作業面とみるかどうかは，34自体が非常に消耗した石核であることもあり，判断は難しい。

36＋37は，折損面での接合資料である。大きさは比較的大きいが，打面・打点が遺存しておらず，また接合面以外にも折損面がみられ，剝取された当初の形態をとどめていない。このため砕片として報告した。38＋39も砕片の接合資料である。

３．石器集中部２（第25図，付図３・４，図版24～28）

Ｄ－10グリッドで東西14m，南北11mの範囲から43点の石器が出土した。これを石器集中部２と呼称する。石器集中部１との距離は，約20mである。

［層序と垂直分布］（付図３）

付近は耕作土層（Ⅰ層），床土層（II層），古代包含層（III層）が堆積しており，その下に石器包含層（IV層）が存在する。IV層以下を次のように細別した。なお細別層位は，石器集中部１に対応する。

IVｃ　淡黄褐色粘質土層

IVｆ　淡黄白色粘質土層

IVｇ　淡黄色シルト層

IVh　淡茶褐色シルト層

IVi　淡茶褐色砂質土層

Va　暗灰褐色粘質土層

Vd　暗茶灰色粘土層

このうち石器を主体的に包含していたのは，IVc層である。IVf・IVg層，さらにVa・Vd層にも石器が包含されるが，極めて僅かである。ただし調査段階ではIVg層で少量の石器の出土は確認したが，それ以外の層位は平面的な把握が困難であり，十分に把握できなかった。Cラインの土層堆積状況から明瞭に窺えるように，V区は東端部の礫層が急激に落ち込む縁辺部にあたり，特に集中部2東半部ではそれに伴う土層の起伏が激しい。そしてIVc層は比較的水平で安定的に堆積するのに対して，それ以下の層では起伏が顕著であったり断続的に漸移するなど不安定な状況を示す。こうした状況から，本来的な石器包含層はIVc層のみであり，IVg層は垂直移動による可能性がある。また他の層位の石器の大半は，不安定な土層の投影に起因する見かけ上の分布状況を示すに過ぎないと思われる。石器群のベースとなるのはIVc層の下面であろう。

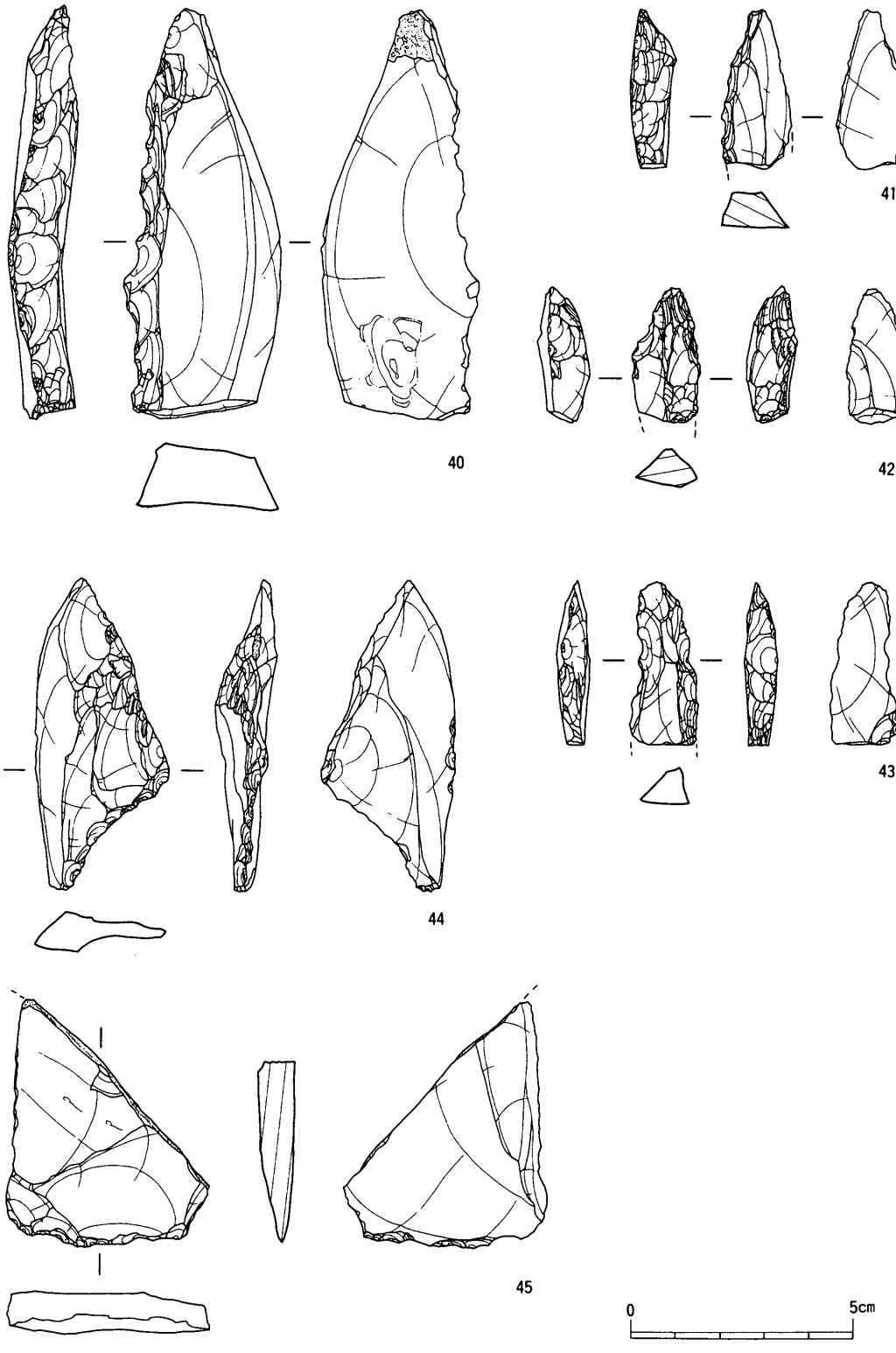
［平面分布］（第25図，付図3・4）

集中部1でみられたような，相対的な石器の偏在は認められない。しかし北・東・西の3方で石器の全く出土しなかった箇所があり，平面的な分布範囲についてはほぼ全体を検出し得たと考えられる。

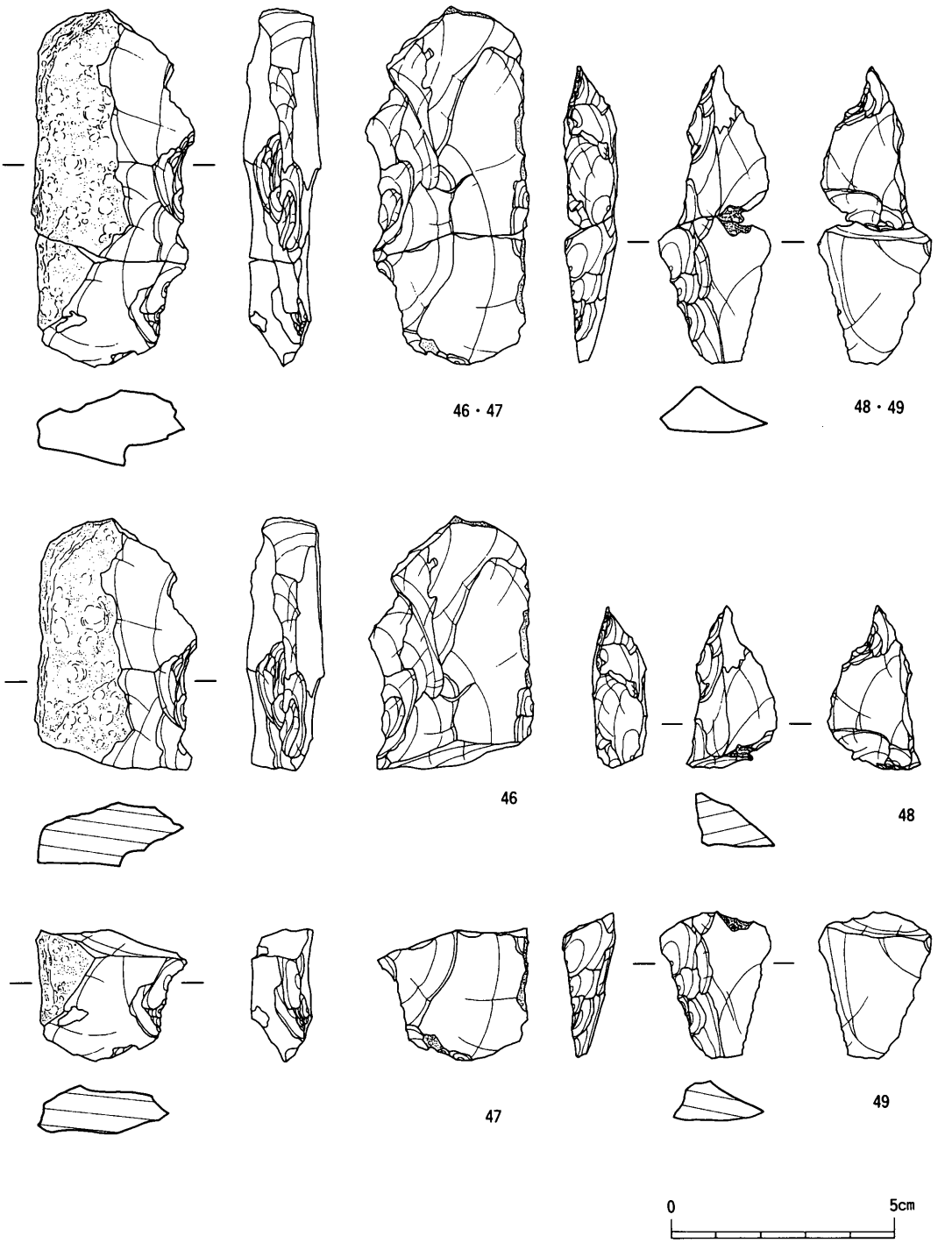
器種別にみると，分布範囲の中央部から西半部にかけてナイフ形石器5点，翼状剥片1点，石核5点，原礫1点が分布している。また東半部にはナイフ形石器1点(第202図)，二次加工のある剥片が5点みられ，器種別に若干の偏在傾向は読み取れそうである。また接合資料が分布範囲の中央付近で2組（46＋47，48＋49。ただし47の出土地点は不明）認められる。そのうちの48＋49は製作途上のナイフ形石器が折損した後，再生が行われており，廃棄後の偶然的な要因で破損したものではない。これらから，石器集中部2は平面的に原位置をかなり保ち，かつ同時性も指摘できるものであるといえ，一応1単位のブロックとして捉えることが可能である。

［出土遺物］（第35～41図）

ナイフ形石器（40～43，48＋49）　6点出土している。ただしそのうちの1点は，調査終了後に紛失してしまい，わずかに概報掲載図からその概形がわかるのみである。このため，概報図面を再掲するのにとどめたい（第202図）。



第35図　石器集中部２出土遺物（Ⅰ）（S＝2/3）



第36図　石器集中部２出土遺物（2）（S＝2/3）

いずれも横長剝片を素材とするものである。このうち40と41は，翼状剝片を素材とした国府型ナイフ形石器である。いずれも腹面側から細かい背部調整が行われる。40は基部が折損しているが，本遺跡出土のナイフ形石器としては最大である。先端部の腹面側には素材の自然面が残る。41は素材の中央付近で折損しているが，恐らく先端部であろう。

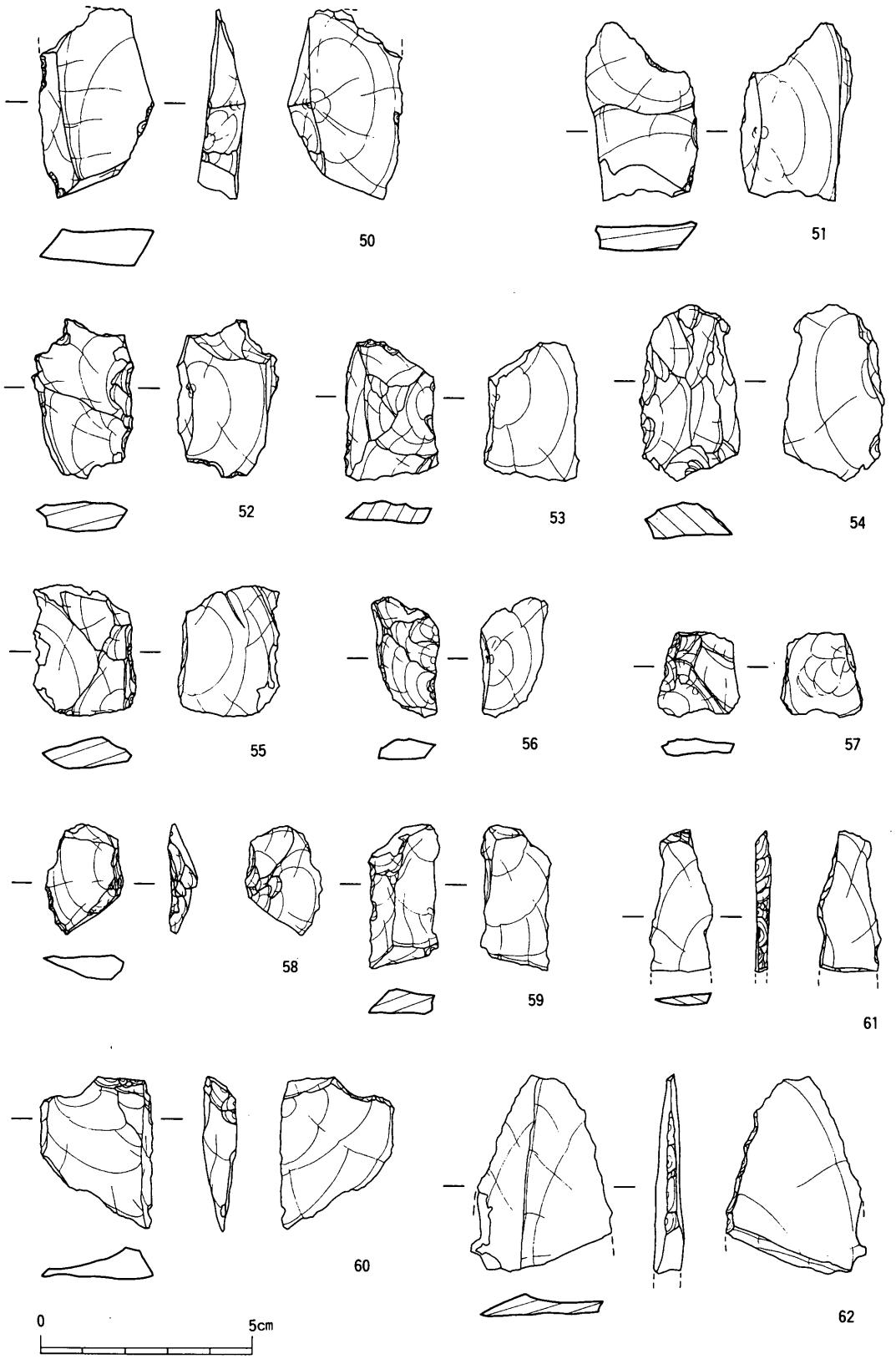
42も中央付近で折損するが，折損面を打面として細かい調整剝離がみられる。腹面側には，ポジティブ面に後出するネガティブ面が認められる。このネガティブ面は背部側から加撃されており，腹面の打点を除去する背部調整とみられる。さらにこのネガティブ面に後出して，腹面側から細かな背部調整が行われている。刃部側にも調整剝離が行われ，鋭利で尖った先端部が作出される。43も中央付近で折損しており，折損面を打面とした細かな調整が行われる点も42と同様である。刃部が全面にわたって調整されているため，底面を有していたかどうかは明らかではない。先端はヘラ状に鋭利な縁辺を形成する。基部の可能性もあるが，折損後の調整が存在することを考慮し，一応先端部とみておきたい。

48＋49は，背部調整の途上で中央から折損したものである。折損状況やその後の形態改変については，接合資料の項で詳述したい。

二次加工ある剝片（44・45・60～62・74・75）　44は底面をもつ横長剝片を素材としている。腹面には剝離面が2面存在する，やや特異な形態をもつ。打面には打撃痕が複数認められることから，石核から剝取する際に打面を数回加撃し，その際に亀裂が生じたために最終的な剝離面と重複したようになったのであろう。本来は横長剝片素材のナイフ形石器を製作しようとしたものと思われるが，腹面の形態・厚さが不定形なものとなったため，通常の背部調整とは異なる調整を行っている。すなわち，先端部側の背部には素材の打面が幅広く残ったため，背部の厚さを薄くするように素材の打面を再度加撃した小剝離が階段状に行われる。これに対して基部側の背部には素材の打面がほとんど残らずに，鋭利なエッジが形成されたようであり，これを潰す腹面側からの小剝離が連続して施される。なお刃部のほぼ全体に使用痕とみられる微細な剝離がみられ，ナイフ形石器同様に使用されたと考えられる。

45は折損した横長剝片を素材としており，細かな剝離がみられる。小剝離は不揃いながら連続して施されており，スクレイパーに分類した方がよいかもしれない。60は半折した横長剝片の打面側のネガティブ面縁辺と折損部の縁辺に小剝離が認められる。

61は底面をもたない横長剝片の打面に連続的な小剝離を施すものである。62は底面をもつ横長剝片の打面に小剝離を行うものである。底面側の縁辺には使用痕とみられる微細な



第37図　石器集中部２出土遺物（3）（S＝2/3）

剝離がみられる。61・62は底面の有無という相違はあるものの，ナイフ形石器の素材としては厚みのない，不定形な横長剝片に加工を施している点で共通している。小剝離の角度は急である。底面側の鋭利な縁辺を機能させるために，打面を調整加工したものと思われる。この点で，不定形ながらも44と同様な機能が推測される。

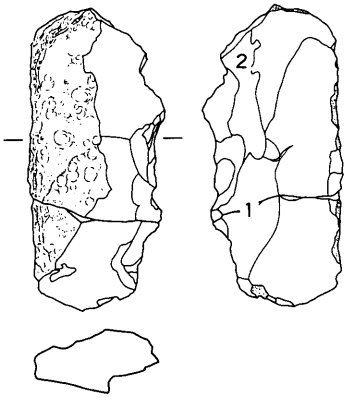
74は不定形な剝片に細かい剝離を連続して行う。小剝離を行った後に，折損している。75は一応底面をもつ横長剝片であるが，底面はネガティブな面となっている。また打面には小剝離が部分的にみられる程度であり，調整加工かどうか判断は難しい。一見すると小型のナイフ形石器のようであるが，上記した点からここでは保留しておく。

剝片（50～59・63～66・69～73・76）　明確に目的剝片と判断できるものは少ない。50は翼状剝片である。山形の打面をもち，その頂部を加撃して剝取される。ネガティブ面とポジティブ面の打点の位置はほぼ同じである。左右の厚みは著しく不揃いであり，また折損しているために大きさも小さい。このためにナイフ形石器に仕上げられなかったと思われるが，底面縁辺には小剝離がみられ，翼状剝片のまま使用されたことが考えられる。

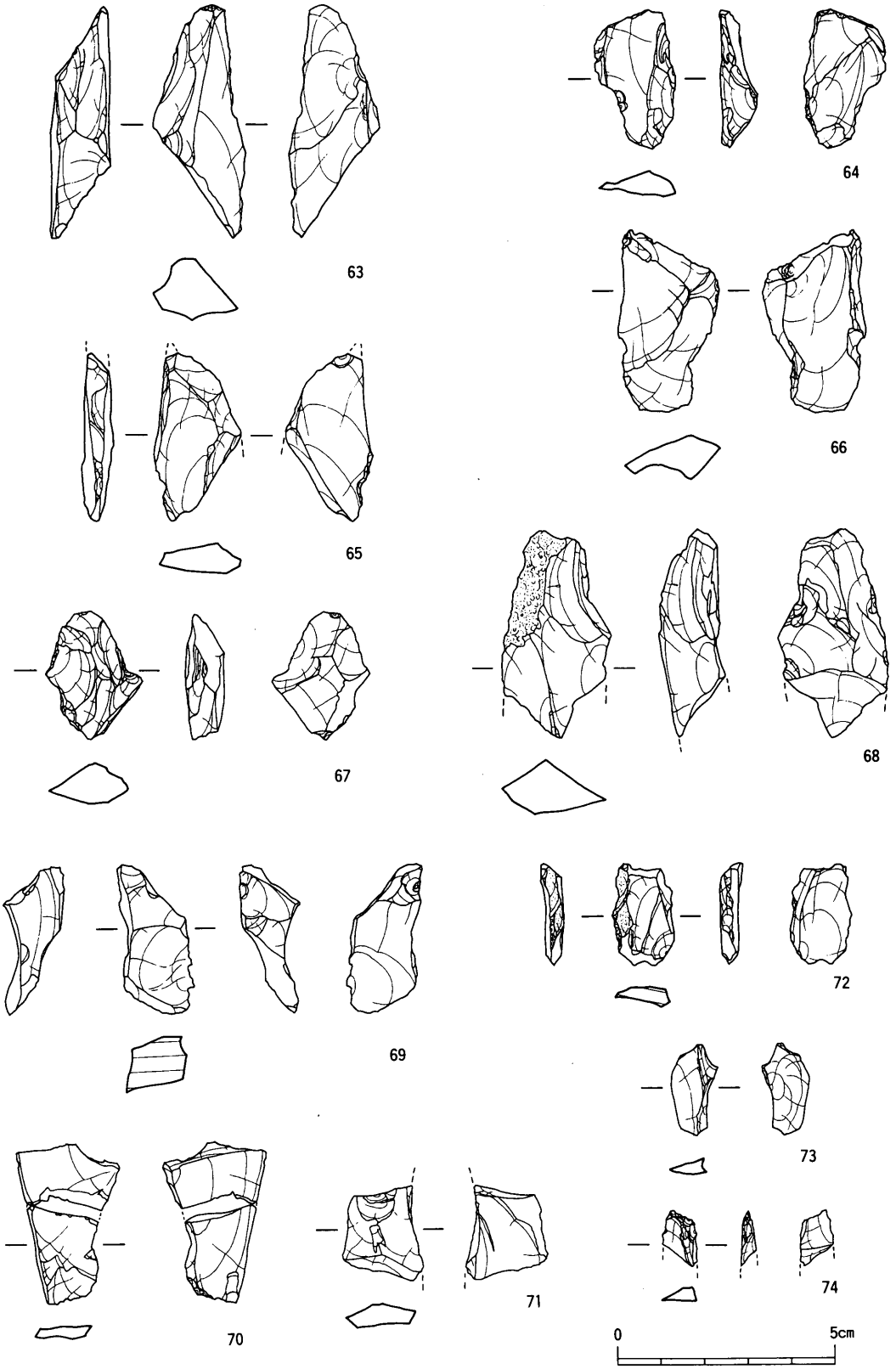
51～57は平坦な打面をもつ横長剝片である。背面に複数のネガティブ面をもち，不定形な縁辺をもつものが多い。中に底面をもつものもある（53）が，厚みがなく，やはり不定形である。これらは調整剝片と考えられる。63～66，69～73，76も調整剝片であろう。

59は縦長剝片である。国分台遺跡群の縦長剝片は，石理のあまり目立たない石材を素材にするとされるが，59は石理の顕著なサヌカイトを素材としている。側縁には微細な剝離がみられ，使用痕と考えられる。

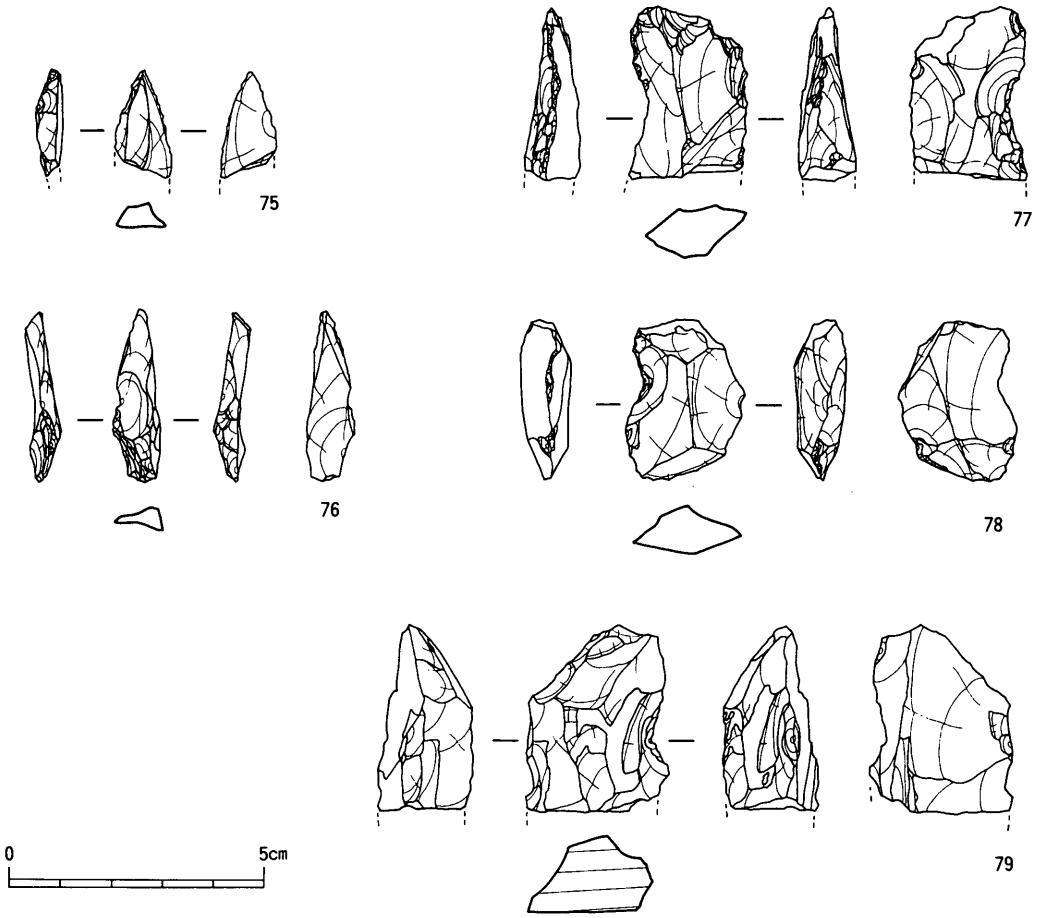
石核（46＋47・67・68・77～79）　全て横長剝片石核である。46＋47は，作業面と打面が固定的な石核と考えられるものである。石理の顕著なサヌカイトを素材としており，石理と作業面との関係は，半順目である。底面はネガティブな面となっている。打面側には原礫の自然面が残り，石核幅を二分する大きな2枚の剝離と，作業面縁辺で行われる3枚の小さな剝離によって，打面調整される。これによって山形の打面が形成され，ほぼその頂部を加撃することで横長剝片が剝取されている。作業面に残された剝片剝離面（第38図剝離面1）をみると，加撃方向（底面側の）からみた左側が底面まで力が抜けきらずに蝶



第38図　石核46＋47の剝離面



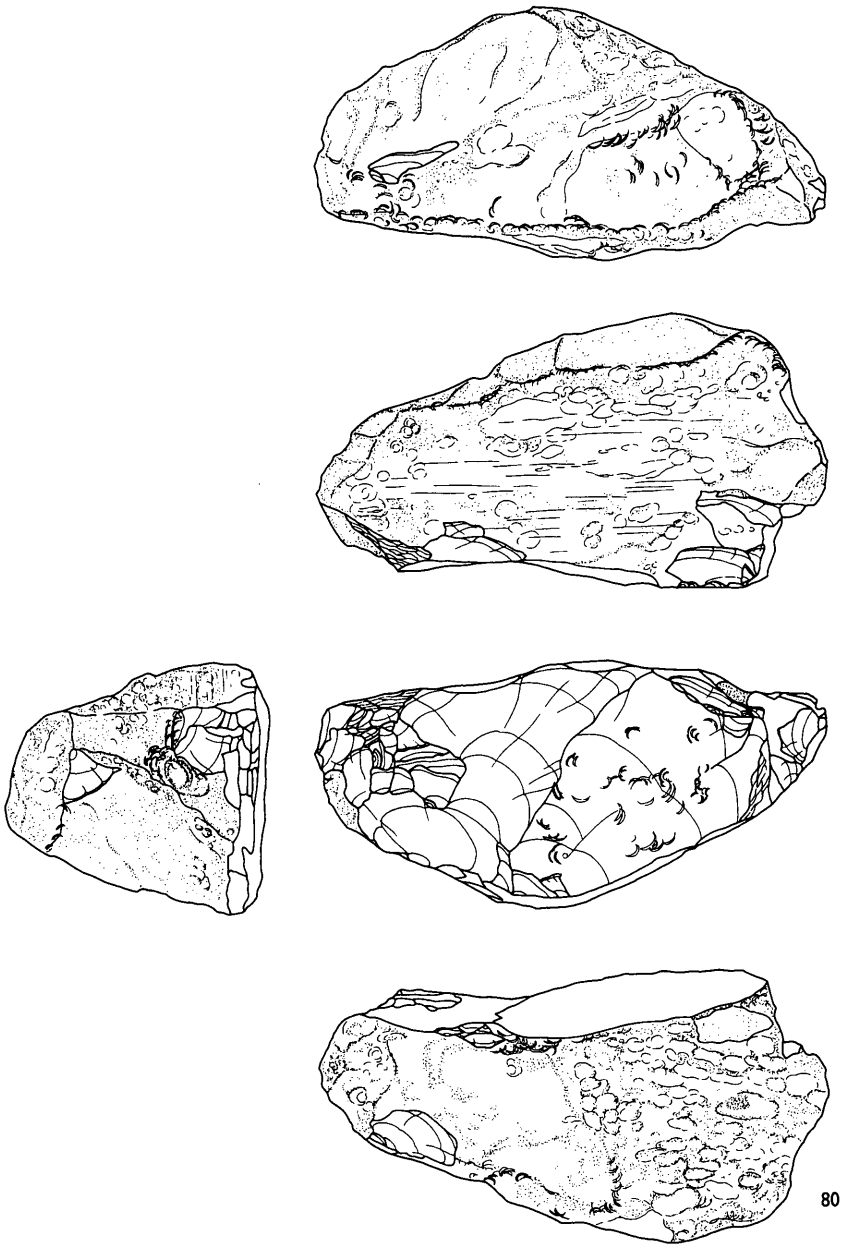
第39図　石器集中部２出土遺物（4）



第40図　石器集中部２出土遺物（5）（S＝2/3）

番剝離となっており，良好な刃部をもった剝片は得られなかったようである。また，石核幅よりも若干短い剝片が剝取されたであろう。この剝離面に先行する剝片剝離面（剝離面２）の状況から，１と２の剝離に際して，直線的に打点が移動したことが考えられる。１の剝取後に打面に再び小剝離が複数施されるが，作業面にも小剝離がみられることから，残核を転用するための調整痕とみられる。

67・68・77～79は一応石核の可能性をもつものであるが，いずれも不定形な形態をもつ。67・77は非常に緻密で良質なサヌカイトであり，68・78は普通サヌカイト，79は石理の顕著なサヌカイトである。これらから剝取された剝片は極めて小さなものであり，集中地点内に遺存するナイフ形石器の素材とは到底考えられない，異質なものである。なお67・77・78には，使用痕の可能性をもつ微細な剝離が部分的に認められる。



第41図　石器集中部２出土遺物（6）（S＝2/3）

接合資料（46＋47，48＋49）　２組４点出土している。46＋47は横長剝片石核が折損したものである。

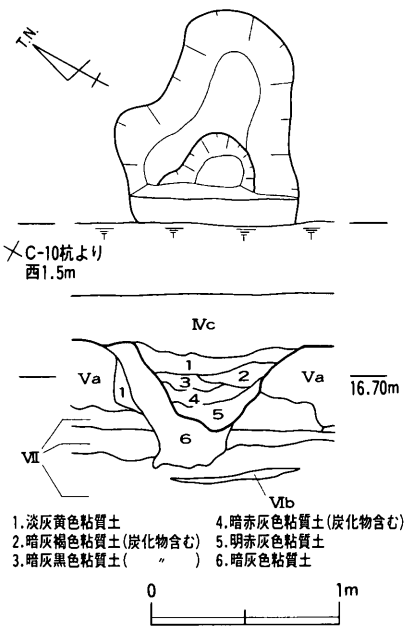
48＋49は横長剝片素材のナイフ形石器である。先端は二側縁加工となっており，刃部側の調整剝離が背部側のそれに先行する。背部の調整加工時には中央部から折損している。折損の原因は，底面のほぼ中央に直径６㎜程の異物による空隙があり，背部加工の際にそこから亀裂が生じたためと思われる。折損後に基部側は廃棄されるが，先端部側には再加工が施される。折損面を打面として背部に樋状剝離を行い，彫器状の形態を作出しているのである。

原礫（80）　拳大のサヌカイト転礫である。石材として持ち込まれたものであろう。

４．その他の遺構

［ＳＸ１０］（第42図）

Ｃ－９グリッドの北東隅で検出した，土坑状の遺構である。石器集中地点の調査前に行った下層確認トレンチ（Ｖ－３トレンチ）掘削の際に断面で確認した。このため土層が石器集中地点と対応して把握しておらず，細分層位との関係が明らかではないが，第Ⅳ層直下の第Ｖ層上面を掘り込み面としていることが確認できた。したがって，石器集中地点とベースを同じくしていることは確かである。



第42図　ＳＸ10平・断面図（Ｓ＝1/40）

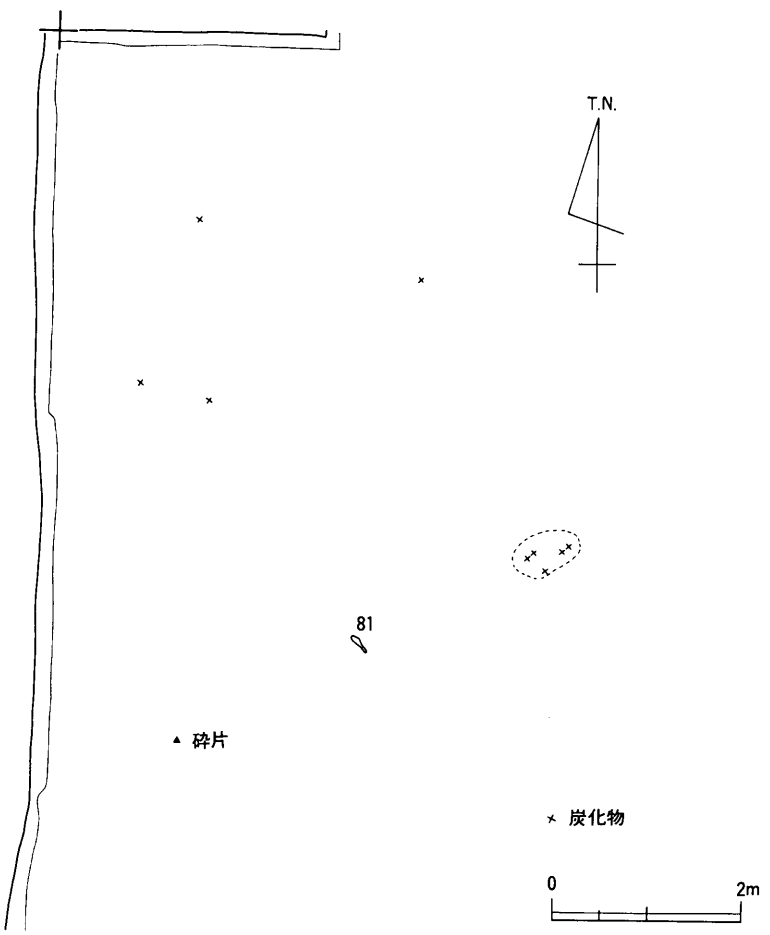
平面形態は不定形であり，掘り込みを２段もつ。検出長1.13m，幅0.93m，深さ0.45mを測る。埋土は５層に細分できるが，大きくみると上層（第１層），中層（第２～４層），下層（第５層）にまとめることができる。中層には炭化物粒が含まれていた。埋土中や周囲から石器は出土しなかった。なお，ＳＸ１０の南2.5mの第Ｖ層上面で，径0.4mの範囲に炭化物の顕著な集中が認められた。

埋土中に炭化物を含む点では石器集中部１のＳＸ０８・０９同様な在り方であるが，ＳＸ１０の性格については，人為的な遺構として認識できるかどうか，なお検討を要するといえよう。周囲に石器群を伴わないことも考慮する必要がある。

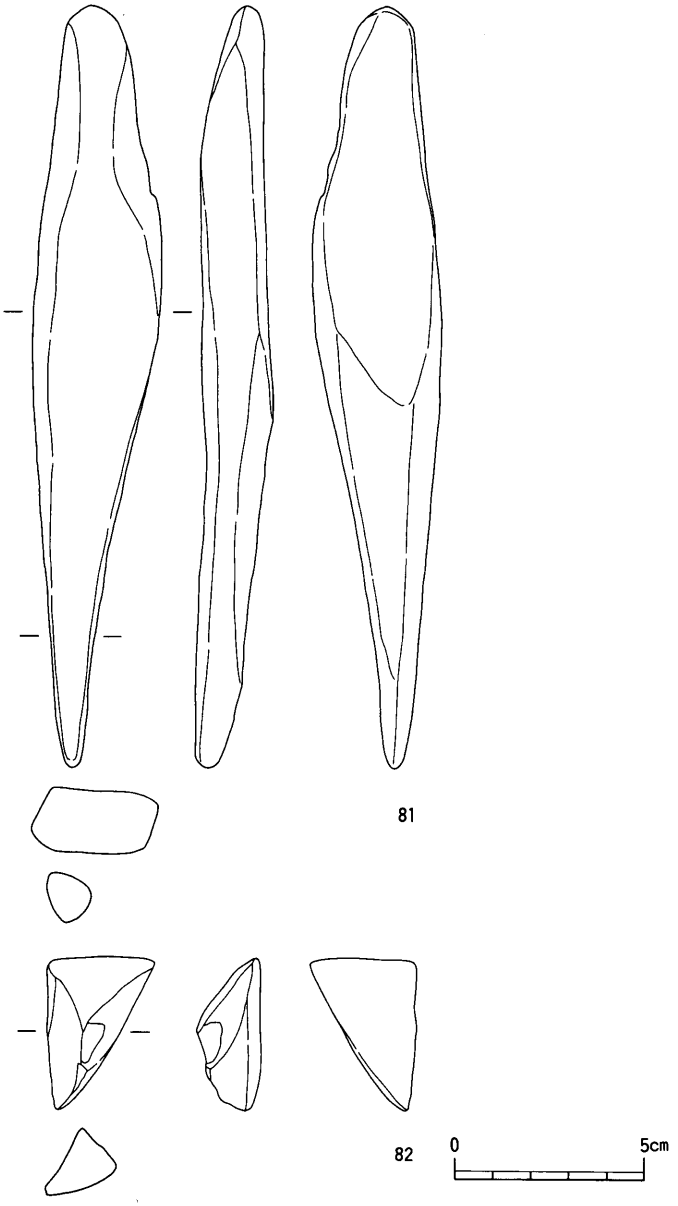
［炭化物集中地点］（第43図）

ＳＸ１０の北約18mのＢ－10グリッドで，炭化物の集中地点が検出された。検出された層位は第Ⅴ層上面である。炭化物は東西2.5m，南北2.0mの範囲に分布しており，南東部の径0.3mに集中する以外は点的に散在する。また南側に隣接した第Ⅳ層中から，サヌカイト製砕片１点と安山岩製の礫が１点出土した。

安山岩製礫（第44図81）は剝離面などの加工痕のみられない自然礫であるが，第Ⅴ層下約0.9mに堆積する礫層は砂岩で構成されており，自然状態でこの地点に遺存したとは考え難い。安山岩としては比較的緻密な石質であり，何らかのかたちで遺跡外からもたらされた可能性もあろう。



第43図　炭化物集中地点平面図（Ｓ＝1/80）



第44図　炭化物集中地点出土遺物，石器集中部Ⅰ出土遺物（6）（S＝1/2）

5．上位層出土の旧石器

［出土状況］

Ⅳ・Ⅴ区の第Ⅰ層（耕作土層），第Ⅱ層（床土・近世遺物包含層），第Ⅲ層（古代包含層）から若干量の旧石器が出土した。平面的に石器集中部１・２と重複して出土したものはほ

とんどなく，Ⅳ・Ⅴ区北半部から出土する傾向にある。付近は地形的にはⅤ区南東部が最も高く，北西方向へと傾斜している。このため，Ⅴ区南東部付近を削平し，Ⅳ・Ⅴ区北半部へと土を移動させて水田化が行われたとみられ，主に石器集中部2からの攪拌・移動によるものと思われる。

［出土遺物］（第45～48図）

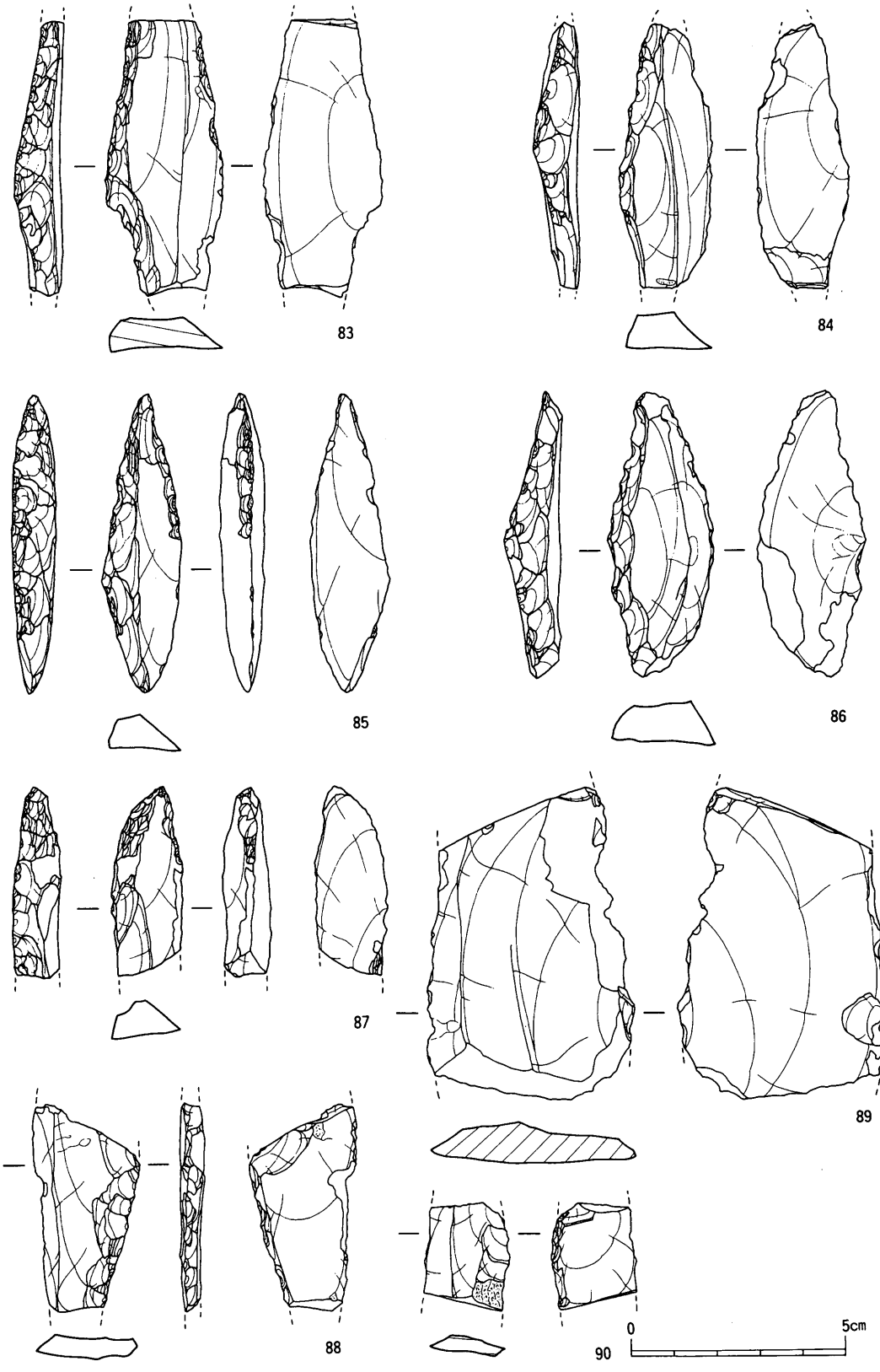
ナイフ形石器（83～87，89，94）　いずれも1枚の底面をもつ横長剝片を素材とする。翼状剝片を素材とした国府型ナイフ形石器の存在が目立つ。

83は背面と腹面の打点の位置が若干ずれる翼状剝片を素材とする。背部加工は腹面側からなされており，やや大きめの剝離を連続して行った後，その稜を潰すように細かな剝離を連続させる。両端が折損するために先端部がどちらになるか明確ではないが，細かな背部加工が顕著なのは図示した上側であり，厚さも薄く均一である。刃部には使用痕とみられる小剝離が認められる。84も翼状剝片を素材とするものである。やはり両端部が折損しているが，背部加工は図示した上側が細かく丁寧である。また上側の折損部の方が，より薄く鋭利な形態に復元できる。刃部には使用痕らしい微細な剝離がみられる。86も翼状剝片を素材とする。底面には盤状剝片のバルブがみられることから，素材がファーストフレイクの可能性がある。以上3点は，典型的な国府型ナイフ形石器としてよいであろう。

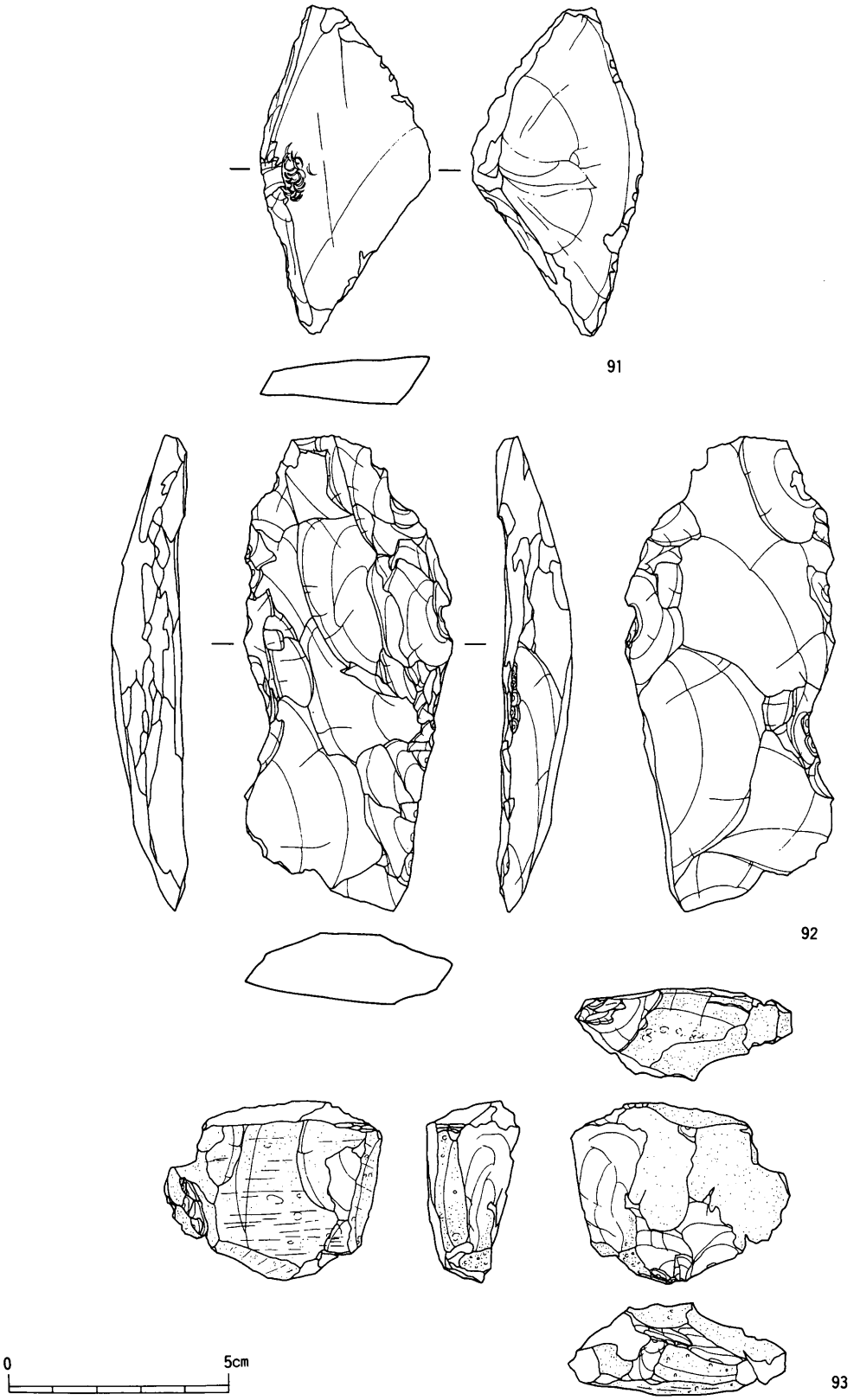
85は二側縁加工のナイフ形石器である。背部加工が顕著であり，背面および底面との境の稜はほとんど除去されている。このため断面三角形で細身の柳葉形を呈する。ただし背部加工が特に顕著で細かいのは図示した上半分であり，下端には素材剝取時の打面が残る。刃部の上半分には連続的な小剝離が行われており，背部加工の小剝離と対応する。図示した上半部が先端部になるのか基部になるのか判断が難しいが，より細身で鋭い先端が作られているのは上半部である。

87も二側縁加工のナイフ形石器である。中央部で折損しているが，背面と腹面の形態および打点の位置から，恐らく翼状剝片を素材としていると思われる。折損部付近の背部加工をみると，素材の打面をより顕著に除去しており，腹面を強く抉るような階段状の剝離面を形成している。これが折損の原因かもしれない。図示した上端側は基部の可能性も否定できないが，二側縁加工によって断面正三角形を呈し鋭く尖った切先のようになっており，先端部となる可能性もある。

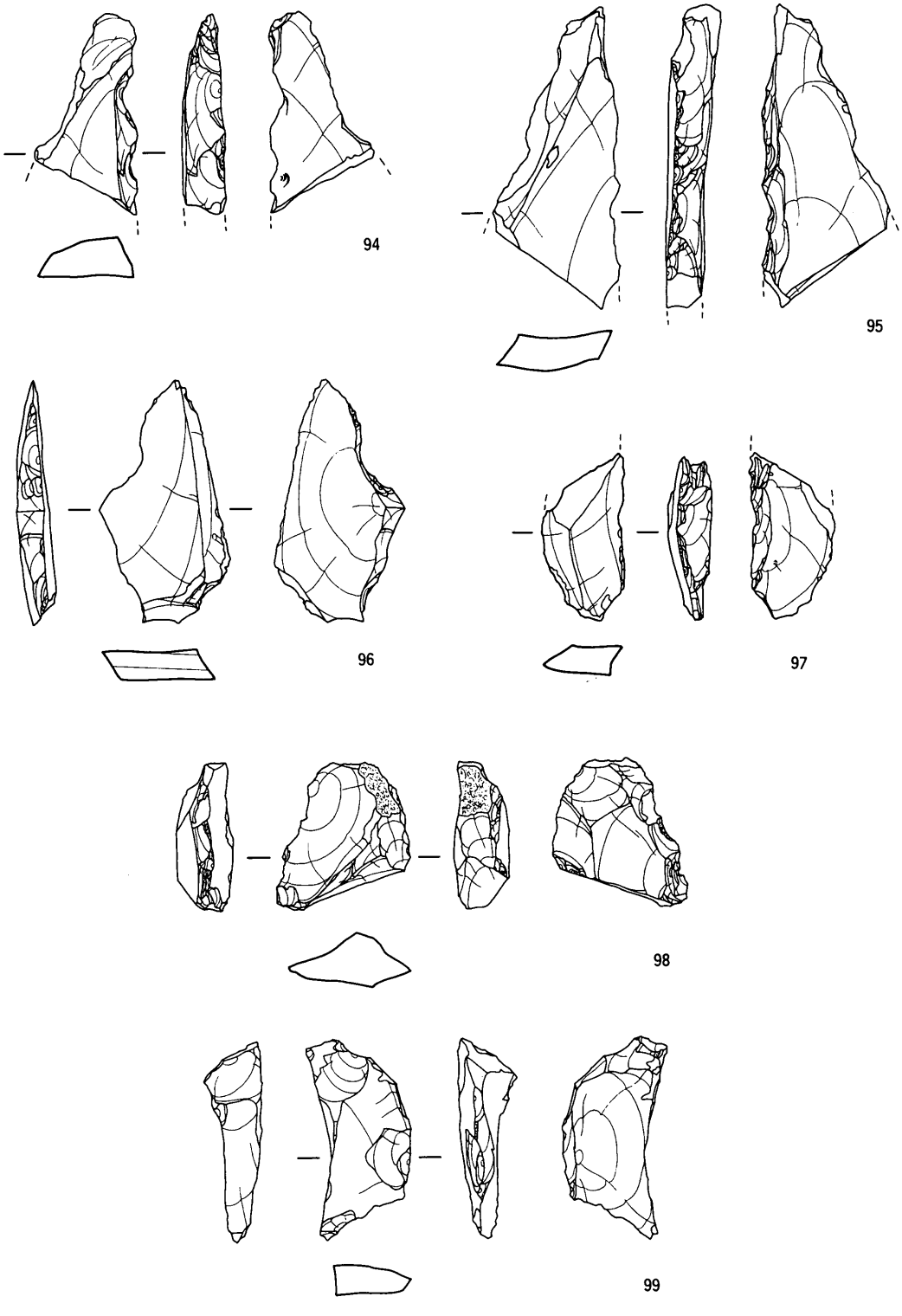
89は薄身だが大型の翼状剝片を素材とするものである。素材の打面は，腹面側からの背部加工によって一応は除去されているが，通常のナイフ形石器よりも幅広であり，細身化



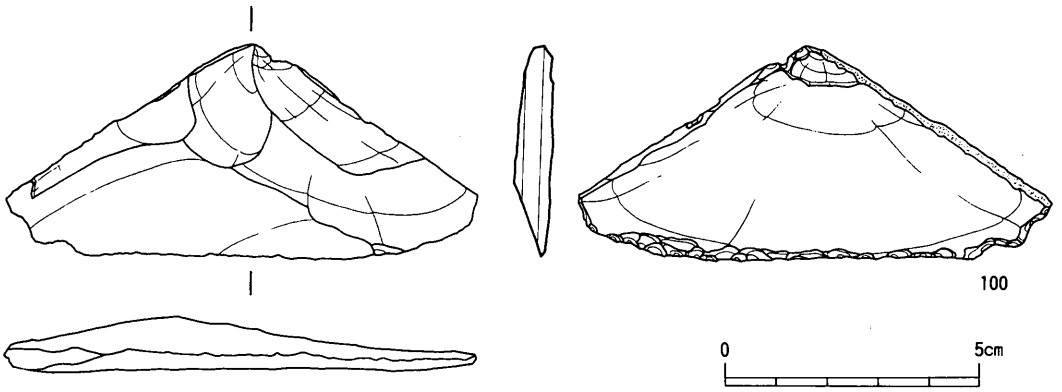
第45図　上位層出土の旧石器（I）（S＝2/3）



第46図　上位層出土の旧石器（2）（S＝2/3）



第47図　上位層出土の旧石器（3）（S＝2/3）



第48図　上位層出土の旧石器（4）（S＝2/3）

が進行していない。また背部加工も同じ部分を数回剝離することはなく，恐らく先端から基部まで1回通り粗く剝離しただけの状態である。このことから，加工途上の未製品の可能性もある。

94は横長剝片を素材とする。一応底面を有するが，背面との境には明瞭な稜は形成されず，通常の翼状剝片とは異質である。背部加工は粗く大きな剝離を行うのみであり，最終的な調整段階にまで至っていない。89同様，未製品の可能性もあろう。

スクレイパー（100）　三角形状の横長剝片の下辺腹面側に小剝離を連続させるものである。側縁の一方に自然面が残る。

二次加工ある剝片（88・90・92）　88は半折した薄身の翼状剝片の打面を加撃して，背面側に連続的な小剝離を行う。90は，打面調整剝片のネガティブ面に細かい蝶番剝離を施す。92は不定形な大型の剝片の折損部縁辺に二次加工を行う。

剝片（91・95～97・99）　翼状剝片が比較的目立つ存在である。91は翼状剝片のファーストフレイクである。背面側は盤状剝片の打面であり，底面との境に複数の加撃痕が認められる。この加撃によって底面が形成されており，底面中央はバルブによって大きく膨らんでいる。95・96も翼状剝片である。ともに底面はネガティブな面からなる。背面・腹面の打点の位置は，95は同じであるが，96はややずれるようである。97は横長剝片である。99は調整剝片であろう。

石核（98）　横長剝片石核の可能性をもつものが1点出土した。背面側には2枚の大きな剝離面によって山形の打面が形成され，それをさらに細かな剝離によって整形している。この打面の頂部を加撃して長さ4cm程度の小さな横長剝片が剝取されている。非常に消耗し切った石核であり，石器集中部2の石核との関わりが問題となろう。

第３節　縄文時代～弥生時代前期

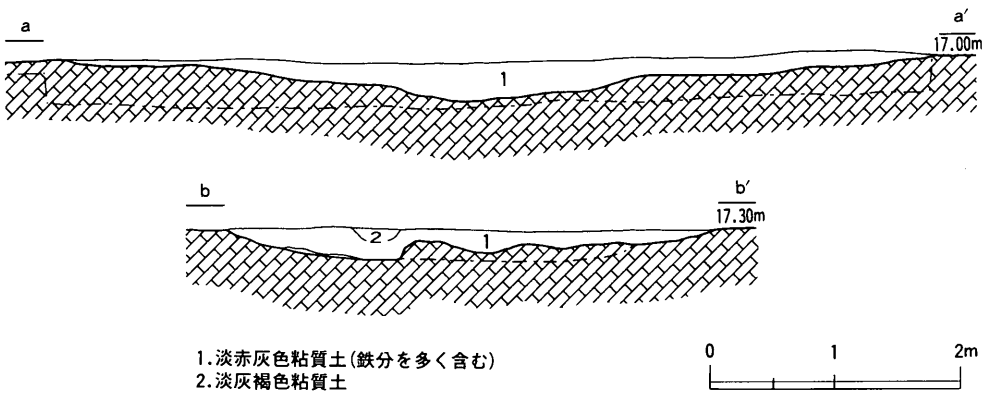
１．概　　要

当該期の遺構は，旧石器包含層を形成する第IV層の上面で検出された。遺構の分布はII区東端部からIII区西半部にかけて同じ方向をもった溝状遺構が集中する，特徴的な在り方を示す。等高線との位置関係から，これらは自然地形の起伏に制約されて存在していたことが窺える。

２．溝状遺構

［ＳＤ５０］（第49・50図，図版18）

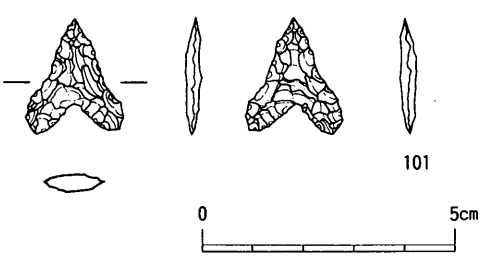
IV区西部をＮ－30°－W前後の方向に北流する溝状遺構である。流路はやや蛇行気味であり，特に北半部ではＳ字形に大きく屈曲する。幅は2.0～6.4m，深さは0.18mを測り，



第49図　ＳＤ５０断面図（Ｓ＝1/60）

断面は極めて浅い皿形を呈する。明瞭な掘り込み状の立ち上がりは認められず，自然河道の可能性もある。埋土は鉄分を多量に含んだ淡赤灰色粘質土が主体であり，部分的には第IV層と識別困難な箇所もあった。

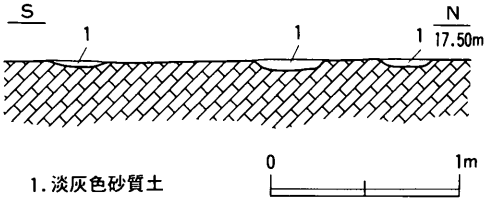
遺物は，サヌカイト製の石鏃が１点（101）出土したのにとどまり，土器片はみられなかった。



第50図　ＳＤ５０出土遺物（Ｓ＝2/3）

101は脚部が長く伸び，若干横方向にも広がる形態をもつ。調整剝離は極めて細かく丁寧である。縄文晩期頃の所産であろう。このほかに時期を判断する材料は乏しいが，埋土の状況が弥生時代前期の溝状遺構とは異なり，相対的に第IV層に近似することはより古い時期であることを窺わせ，想定される石鏃の時期とも矛盾しない。

［ＳＤ０５・０６］（第51図）

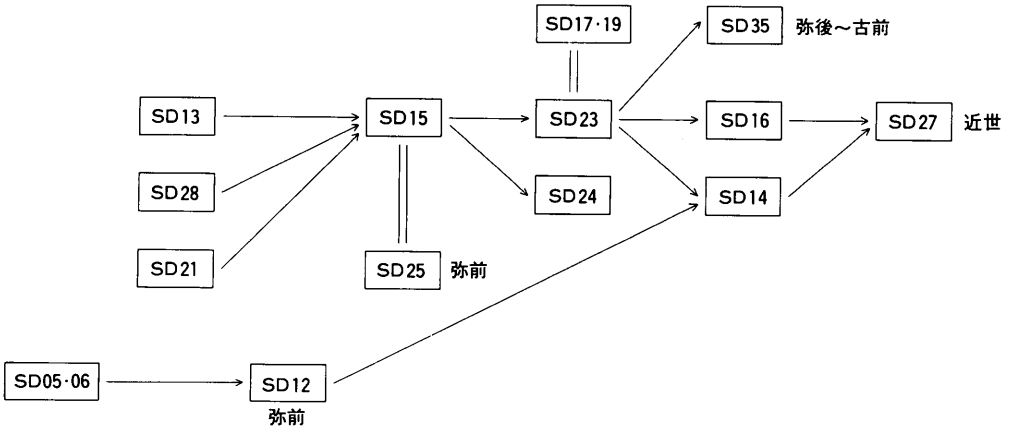


第51図　ＳＤ０５・０６断面図（Ｓ＝1/40）

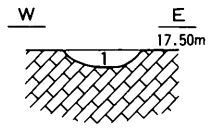
Ｉ区南半部からII区にかけて，２条平行してＮ－44°－Ｅ前後の方向に延びる溝状遺構である。第IIIｂ層下の第IV層上面で検出した。東端でＳＤ１２に切り込まれており，付近を精査したが遺存状況が悪いこともありこの部分で途切れている。ＳＤ０５は幅0.36m，深さ0.06m，ＳＤ０６は幅0.28m，深さ0.03mを測り，断面が極めて浅いＵ字形を呈する。遺物は出土していないが，包含層との上下関係やＳＤ１２との重複関係から弥生時代前期もしくはそれ以前の所産であることは確かである。

［ＳＤ１２・１３・１５・２３・２５・２６・２８］（第52～56図，図版13）

II区東端部からIII区西半部にかけて10条の溝状遺構が平行している。いずれも南半ではＮ－20～25°前後の方向をもつが，北半で急激に屈曲してＮ－25°－Ｅ前後の方向で延びるようになる。規模は，幅0.25～0.85m，深さ0.05～0.25mを測り，いずれも遺存状況が悪い。これらは，いくつかの溝で相互に重複しており，また時期の異なる溝とも重複してい

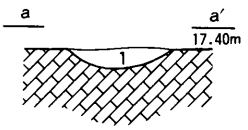


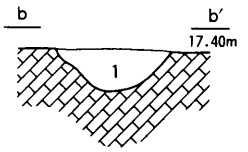
第52図　II・III区溝状遺構の重複状況



1. 暗黄灰褐色粘質土

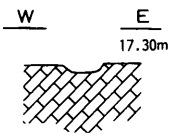
SD12



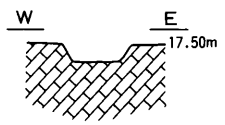


1. 暗茶褐色砂質土

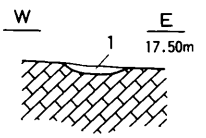
SD23



SD24

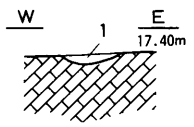


SD13



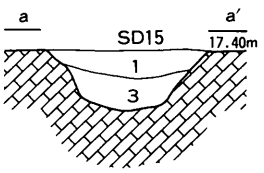
1. 暗茶灰色砂質土

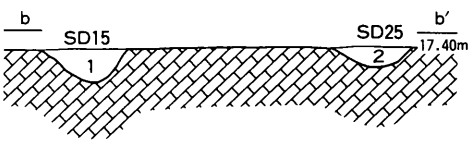
SD26

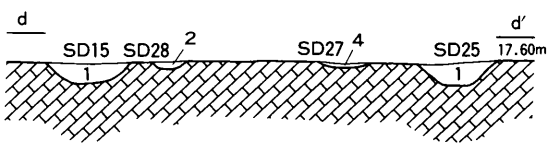


1. 暗茶褐色砂質土
（やや灰色を
呈する）

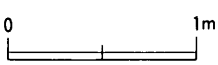
SD21







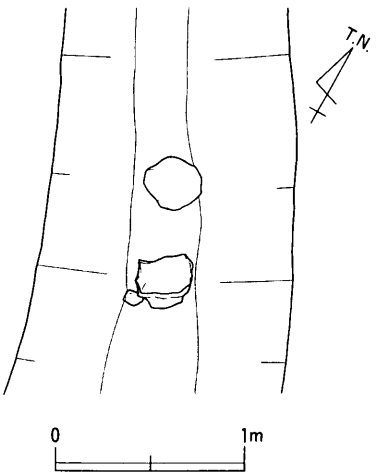
1. 暗茶灰色砂質土
2. 暗茶灰色砂質土
（やや黄色を呈する）
3. 淡灰色砂質土
4. 灰白色砂質土



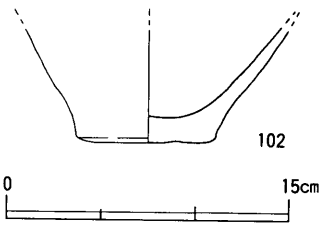
第53図　ＳＤ１２・１３・１５・２１・２３・２４・２８断面図（Ｓ＝１/40）

る。重複状態と出土遺物によって前後関係を整理すると，第52図のようになる。同じ方向の溝状遺構は少なくとも３段階に分けることが可能であり，そのうちの多くが弥生時代前期に掘削・埋没を繰り返したことが想定できる。

遺物はほとんどないが，ＳＤ１２とＳＤ２５で弥生前期土器が出土した。ＳＤ１２では，底面に接して弥生土器壺の底部（102）が出土した。厚手で幅広な底部をもち，胎土に粗い砂粒を多量に含む。またＳＤ２５では，底面からやや浮いた状態ではあるが，弥生土器壺（103）が口縁部から底部に至る比較的大きな破片となって，折り重なるように出土した。上面が削平されているとみられるため，一部の破片は遺存していなかったが，接合作業の結果，ほぼ完形に復元できた。このことから，土器は後世の流れ込みや混入とは考えられず，遺構の時期をほぼ直截に反映していると思われる。

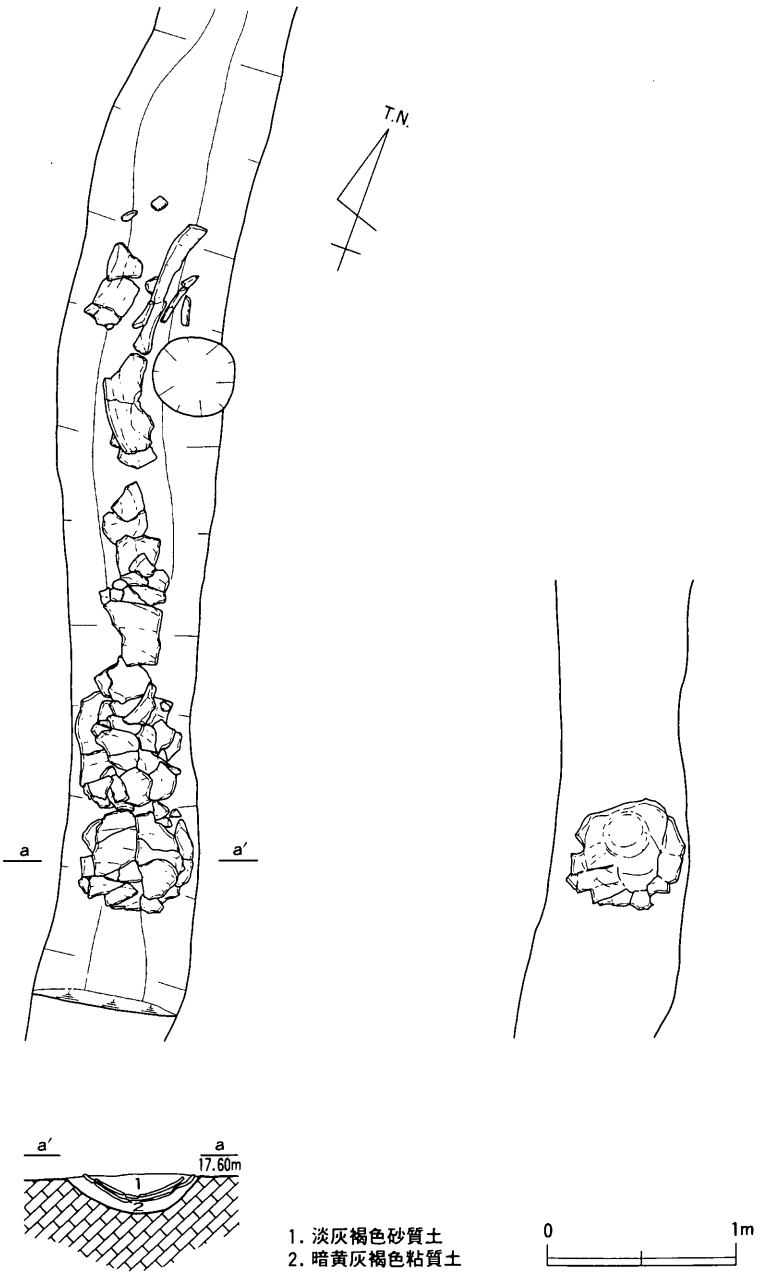


第54図　ＳＤ12遺物出土状況
（Ｓ＝1/40）

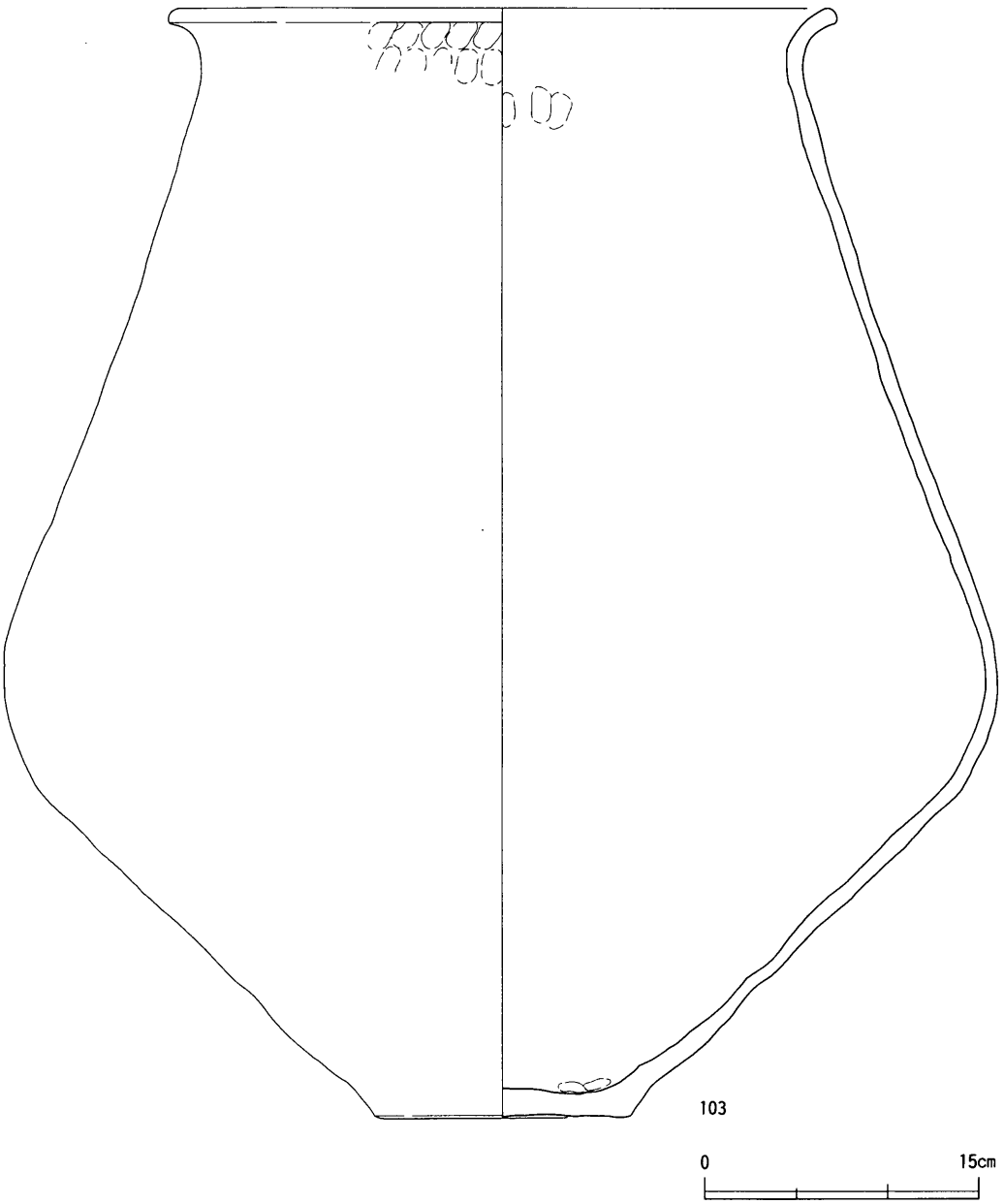


第55図　ＳＤ１２出土遺物（Ｓ＝1/4）

103は，かなり大型の壺形土器である。体部最大径が器高の2/3の位置に求められるため，全体的に重心の低いプロポーションを呈する。体部上半は直線的に内傾して立ち上がり，口縁部は緩やかな弧を描いて短く外反する。口縁部から頸部にかけては，成形時の指オサエが顕著であり，その凹凸が弱い段のようにみえるが，意識的に作出したものではないようである。口縁端部には，やや丸味を帯びた端面が形成される。体部下半は径の小さな底部からかなり急角度で外傾している。103同様，胎土中には多量の粗い砂粒が含まれる。また外面の体部中位から口縁部にかけて，広範に黒斑の形成された箇所がある。器表は摩滅が顕著であり，文様は認められない。当初から施文されなかったものと思われる。単純な比較は難しいが，口縁部の外反状況などから宮崎哲治氏編年の第II期にあたるものと思われ，弥生時代前期前半（初頭を含まない）頃の所産としてよいだろう。



第56図　ＳＤ２５遺物出土状況（Ｓ＝1/40）



第57図　ＳＤ２５出土遺物（Ｓ＝1/4）

第４節　弥生時代後期～古墳時代前期

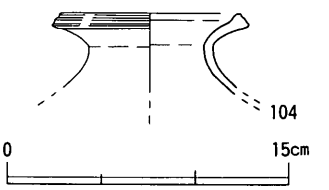
１．概　　要

当該期と考えられる遺構は，掘立柱建物１棟・土坑８基以上・溝状遺構６条・性格不明遺構からなる。掘立柱建物と溝状遺構は出土遺物から当該期と判断した。掘立柱建物はＩ区北半部の微高地上に位置する。清水川以東の郡家地区では，唯一の弥生時代後期の建物遺構である。溝状遺構は前代よりも若干東に流路の主体が移り，規模も大型化する。また点数は少ないが残存状況の良好な土器群が出土しており，上流地域での新たな集落の展開が予想される。土坑については一応当該期と判断したが，厳密には弥生時代前期～古代までの幅の中で捉えるべきである。また形態的にも不定形なものが多く，特定の機能を想定できるものはないことから，当該期の遺構内容を特徴付ける存在ではない。

２．掘立柱建物

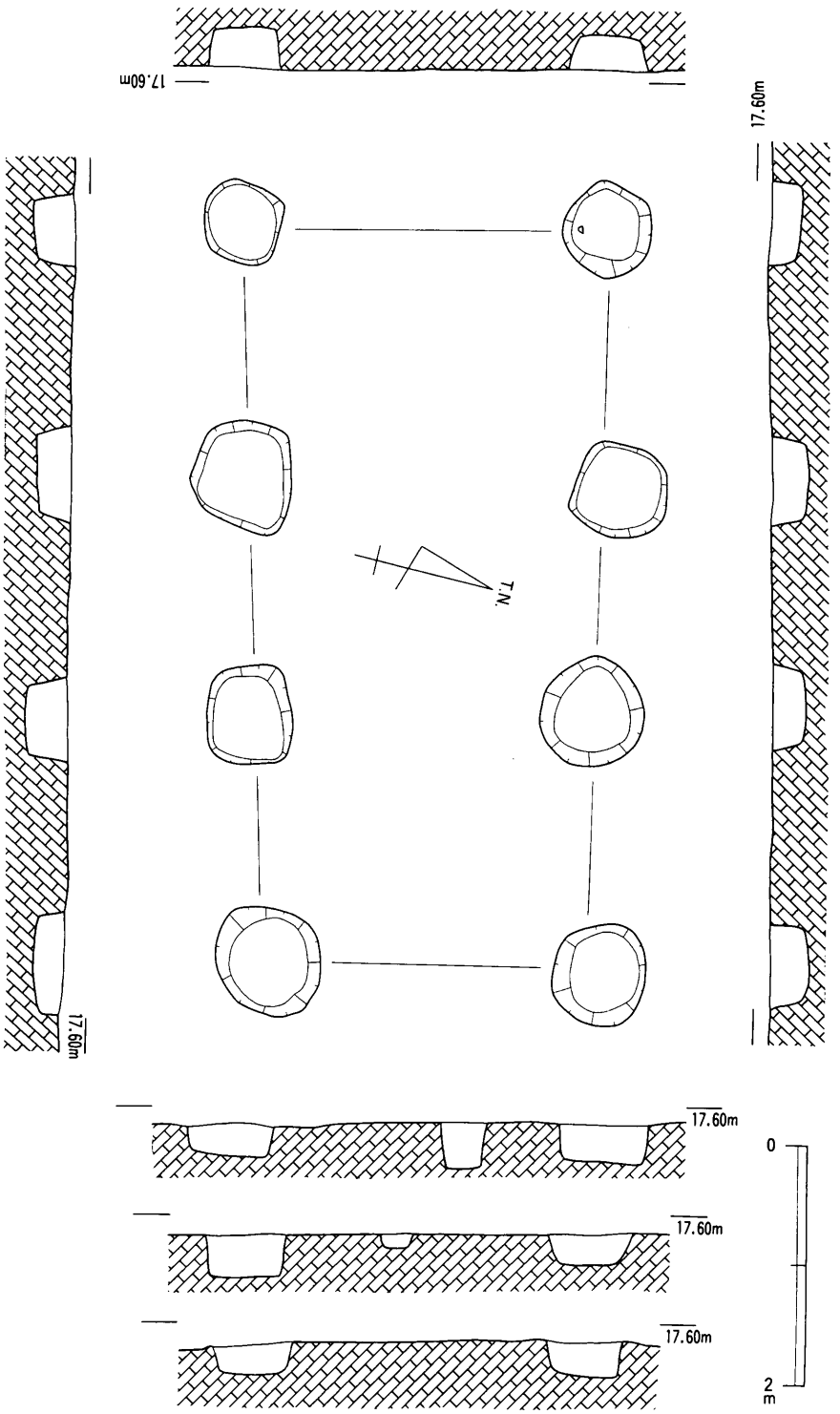
［ＳＢ０１］（第58・59図，図版４）

Ｉ区北半部に位置する掘立柱建物である。主軸方向はＮ－77°－Ｅであり，周囲に分布する近世遺構とは一致しない。規模は１×３間であり，床面積18m²を測る。梁間は西側が東側よりも約0.4m広い。柱穴掘り方は，隅丸方形か角をもった歪な円形であり，一辺（径）0.8m前後，深さ0.3m前後を測る。掘り方壁面は垂直に掘り込まれており，底面のレベルは17.2m付近で一定している。掘り方の埋土は　暗黒茶色粘質土であり，柱痕は確認できなかった。



第58図　ＳＢ01出土遺物
（Ｓ＝1/4）

遺物は北西隅にある柱穴掘り方埋土の下位から，弥生土器片（104）が出土したのみである。104は壺の口縁部であり，上方に弱く拡張した口縁端部に２条の凹線が施される。頸部は短く直立する。時期は口縁部形態や凹線文の施文状況から，弥生時代後期初頭頃が考えられる。



第59図　ＳＢ０１平・断面図（Ｓ＝1/60）

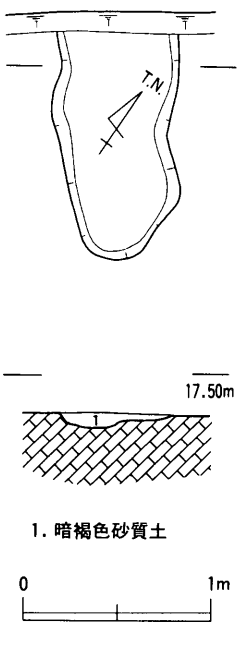
3．土　　坑

［ＳＫ２３］(第60図)

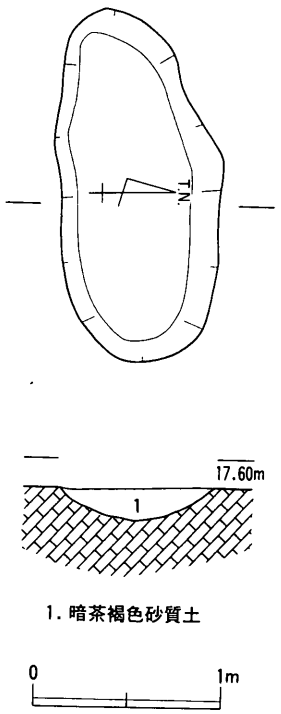
II区北西部で検出された，平面楕円形を呈する不定形な土坑である。北側は調査区外に延びるため，全長は不明だが検出長1.22m，幅0.62m，深さ0.08mを測る。断面形態も不定形であり，最深部は西辺寄りに位置し，東辺側はかなり緩やかな掘り込みとなっている。暗褐色砂質土を埋土とする。遺物は出土しなかった。

［ＳＫ２６］(第61図)

II区中央部で検出された，平面楕円形の不定形な土坑である。長さ1.88m，幅0.84m，深さ0.17mを測る。断面形態は浅いU字形を呈する。暗茶褐色砂質土を埋土とする。遺物は出土しなかった。



第60図　ＳＫ２３平・断面図（Ｓ＝1/40）



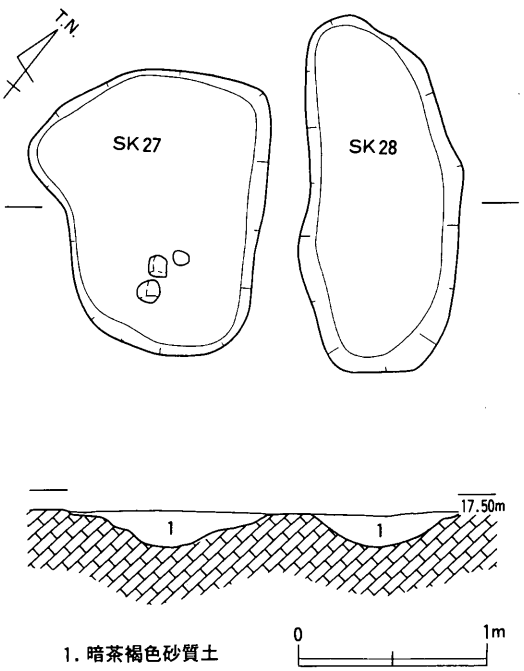
第61図　ＳＫ２６平・断面図（Ｓ＝1/40）

［ＳＫ２７・２８］（第62図）

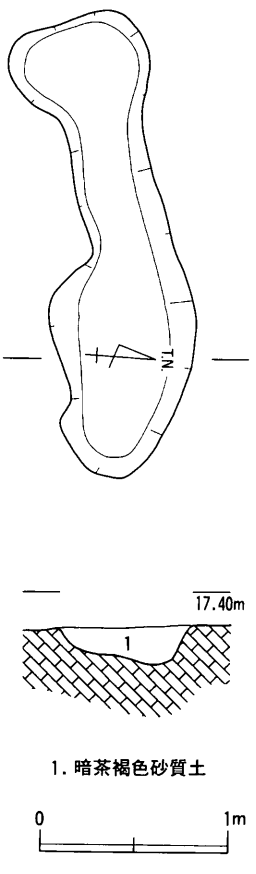
II区中央部で検出された土坑である。２基並列しており，西側のＳＫ２７は長方形に近い歪な平面形態をもち，東側のＳＫ２８は楕円形を呈する。ＳＫ２７は長さ1.5m，最大幅1.28m，深さ0.18mを測り，断面形態は肩部の掘り込みが極めてなだらかである。ＳＫ２８は長さ1.88m，幅0.84m，深さ0.16mを測り，断面は浅いU字形を呈する。ともに暗茶褐色砂質土を埋土とする。遺物は出土しなかった。

［ＳＫ２９］（第63図）

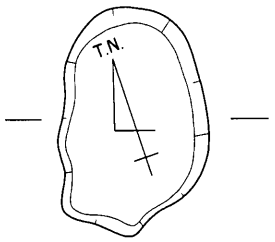
II区中央部で検出された土坑である。平面形態は溝状に細長く延びた，不定形な楕円形である。規模は長さ1.46m，幅0.78m，深さ0.2mを測り，断面逆台形を呈する。暗茶褐色砂質土を埋土とする。遺物は出土しなかった。

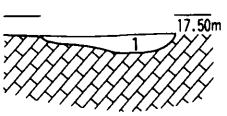


第62図　ＳＫ２７・２８平・断面図（Ｓ＝1/40）

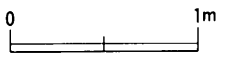


第63図　ＳＫ２９平・断面図
（Ｓ＝1/40）





1. 暗褐色砂質土



第64図　ＳＫ32平・断面図（Ｓ＝1/40）

［ＳＫ３２］（第64図）

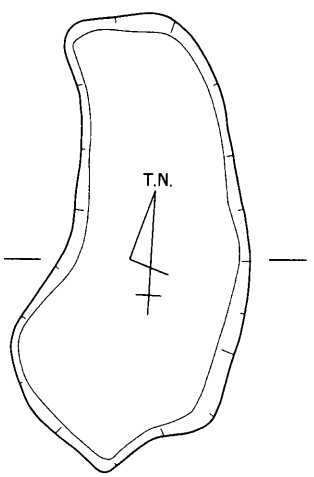
II区中央部で検出された，平面楕円形の不定形な土坑である。長さ1.18m，幅0.8m，深さ0.1mを測る。断面形態は浅い皿形を呈するが，西辺の掘り込みは極めてなだらかである。暗褐色砂質土を埋土としている。遺物は出土しなかった。

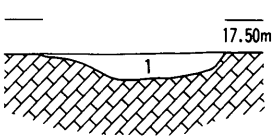
［ＳＫ３３］（第65図）

II区東端部で検出された，不定形な平面形態の土坑である。長さ1.4m，幅1.17m，深さ0.13mを測り，断面は浅い逆台形を呈するが，西辺の掘り込みが極めてなだらかである。暗褐色砂質土を埋土としており，遺物は出土しなかった。

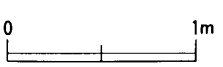
［ＳＫ４６］（第66図）

III区西半部南端で検出された，平面楕円形の不定形な土坑で

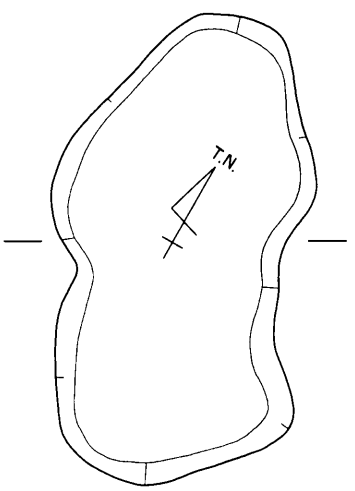


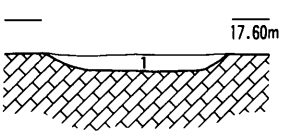


1. 暗褐色砂質土

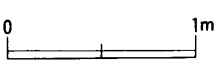


第65図　ＳＫ33平・断面図（Ｓ＝1/40）





1. 暗灰褐色砂質土



第66図　ＳＫ46平・断面図（Ｓ＝1/40）

ある。長さ1.52m，幅1.33m，深さ0.08mを測る。断面形態は浅い逆台形を呈しており，暗灰褐色砂質土を埋土とする。遺物は出土しなかった。

4．溝状遺構

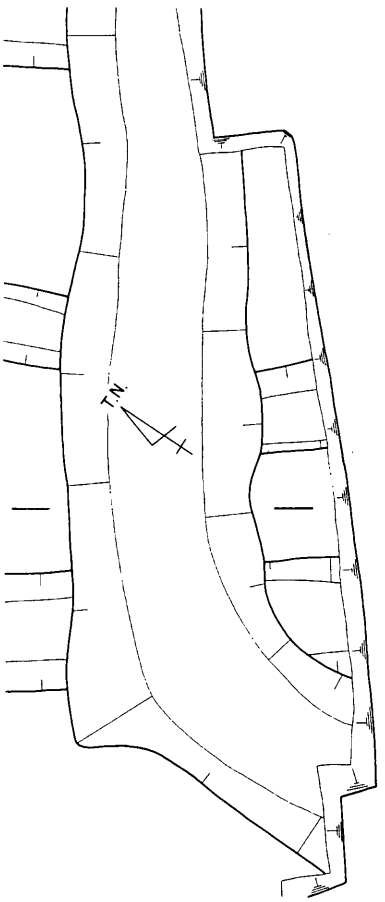
［ＳＤ１６］（第67図・図版15）

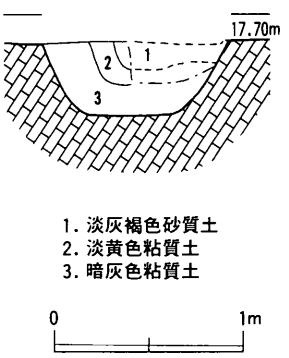
II区とIII区の境界南端部で検出された。N－63°－Eの方向をもち，弥生時代前期の溝状遺構を切り込んでいる。検出した西端部で南側に屈曲している。幅0.95m，深さ0.39mを測り，断面逆台形を呈する。弥生時代前期～古代の幅の中で別の時期に捉えられる可能性も否定はできないが，弥生前期の溝が重複しながらもほぼ同じ方向と規模をもって流れているのに対し，ＳＤ１６は方向・規模ともに明らかにこれらとは異質である。また古代の溝状遺構は後述するように南北方向が主体で，東西方向に延びる規模の大きな溝状遺構はみられない。このことと，走向からＳＤ３５に繋がる可能性があることより，一応当該期の遺構としておきたい。

［ＳＤ３５］（第68～71，73・74図・図版16）

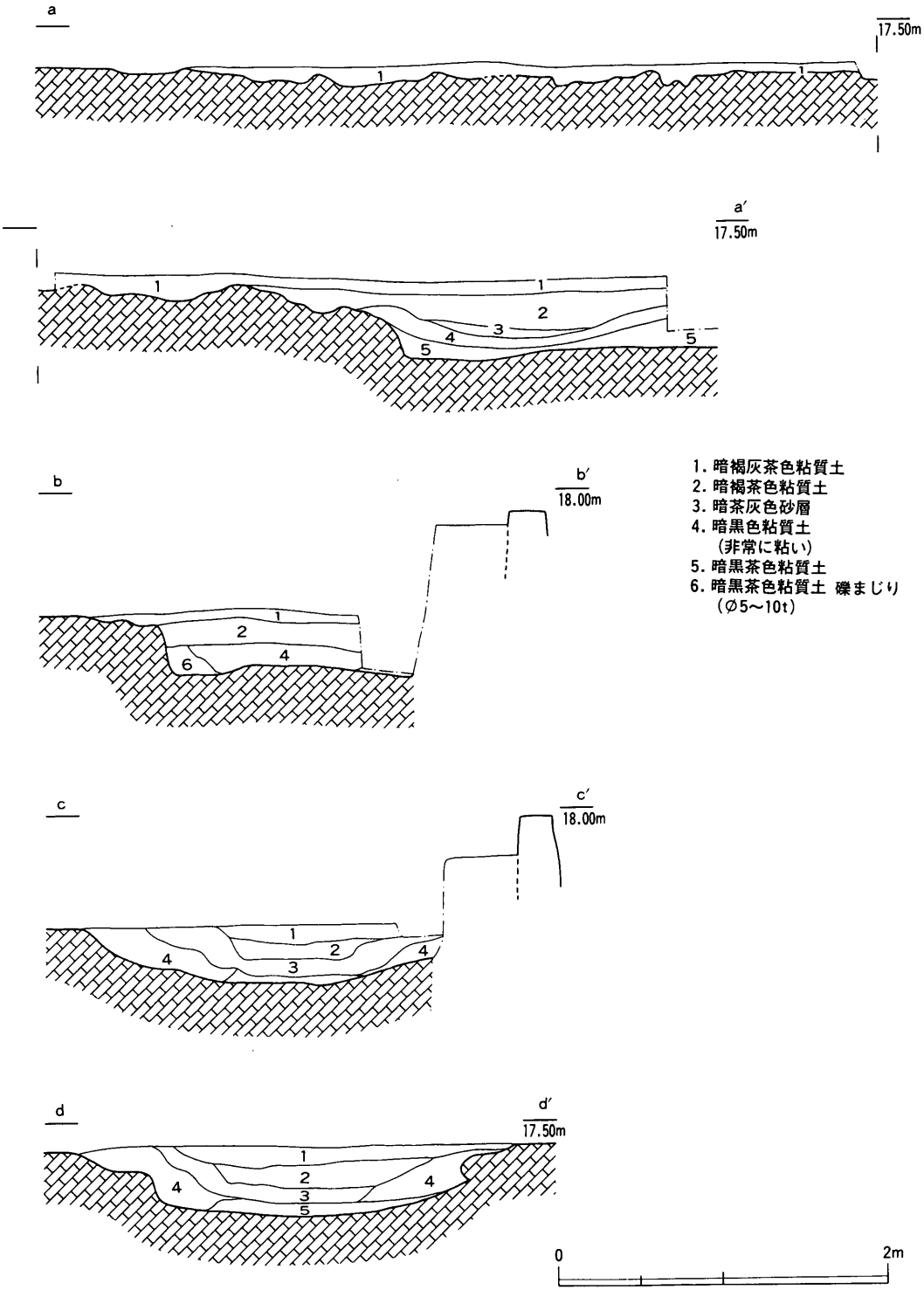
III区の中央部をほぼ南北方向に延びる大型の溝状遺構である。流路の方向は，検出した南半ではN－20°－W前後であるが，北半ではN－25°－Wとわずかに西に偏る。この弱い屈曲部は，ＳＤ４０との合流部にあたる。さらに北端部では大きく北側に屈曲してN－15°－E前後の方向に延びるようになる。以上のような流路の方向は，東側約５mを北流するＳＤ４０とほぼ同じである。

東西両側の掘り込みが遺存する南端部での規模は，幅2.63m，深さ0.42mを測る。溝本体の掘り込みは明



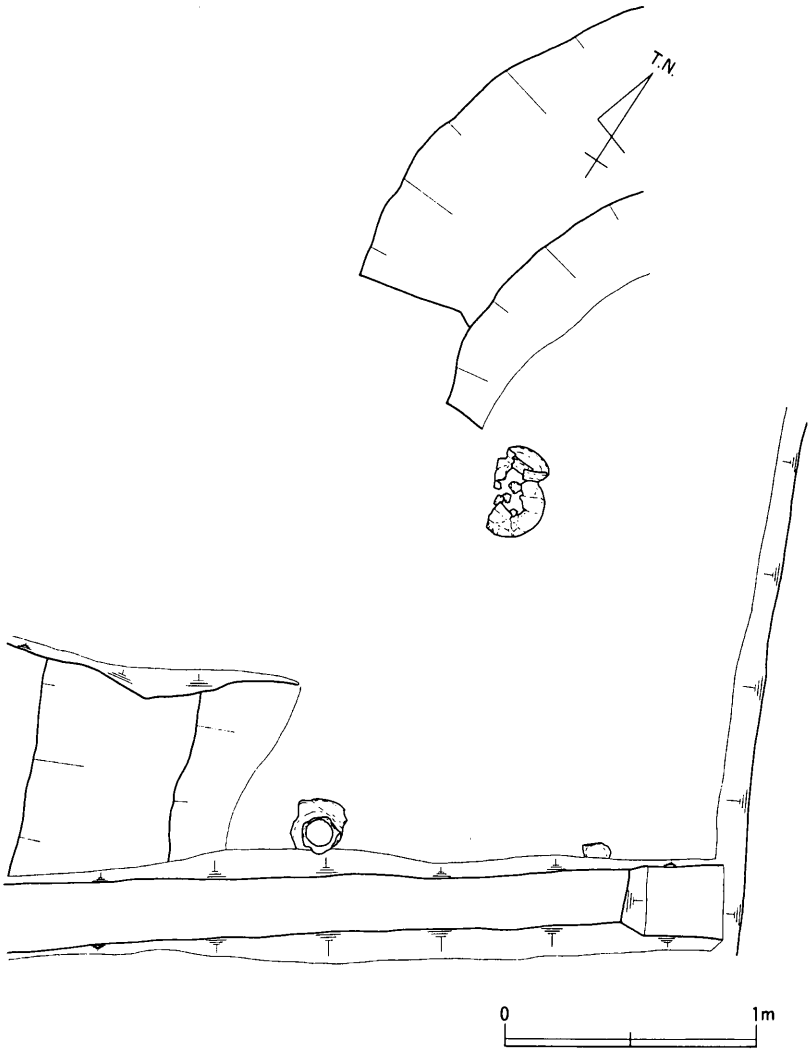


第67図　ＳＤ16平・断面図（Ｓ＝1/40）

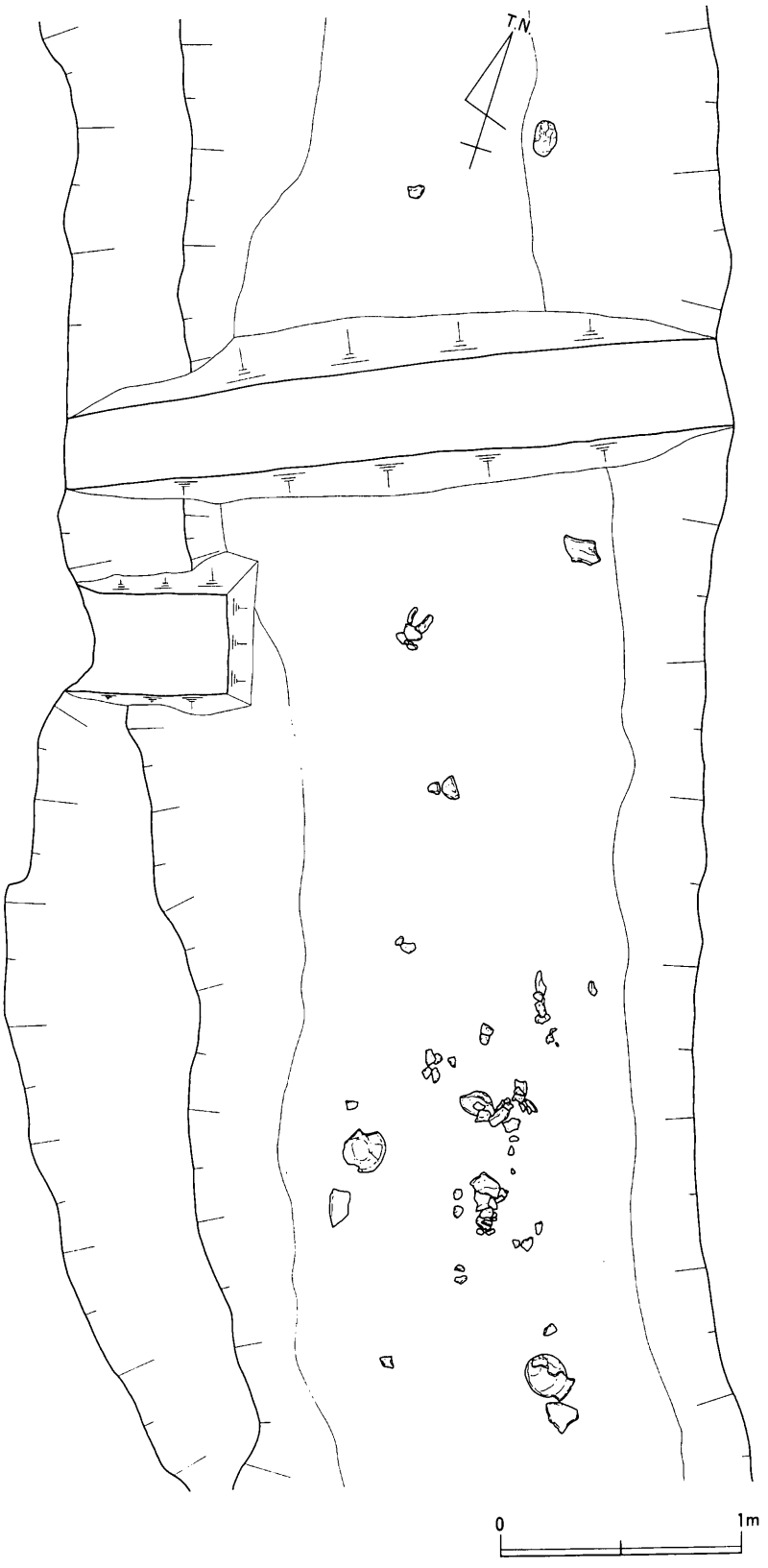


第68図　ＳＤ３５断面図（Ｓ＝1/40）

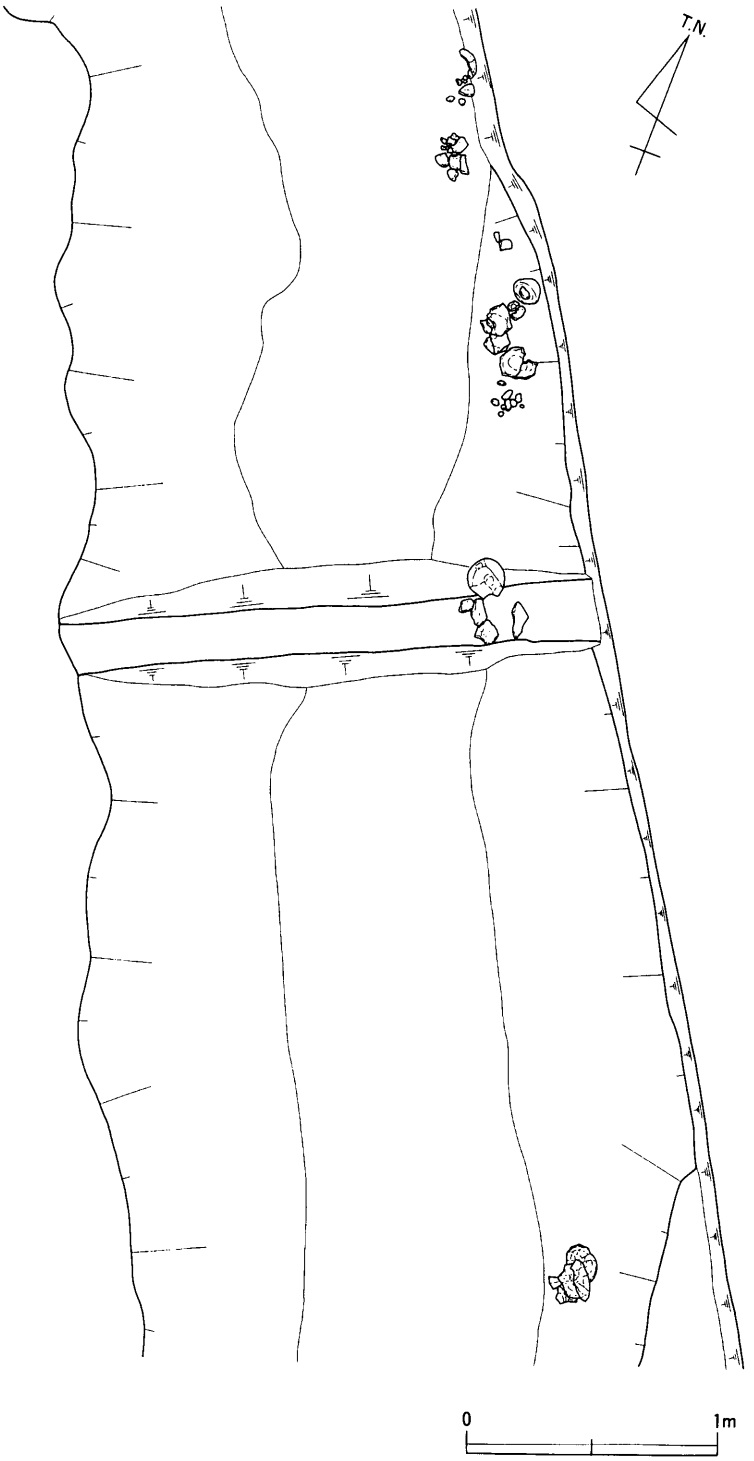
瞭であり，断面形態が逆台形もしくはU字形を呈するが，埋没過程で肩部が崩れた部分はなだらかに落ち込んでいる。また，北半部（a－a'）に浅い張り出しがある。埋土は6層に細別でき，さらにそれらは土質などにより最上層（第1層），上層（第2層），中層（第3層），下層（第4～6層）に整理できる。下層は溝本体の明瞭な落ち際から堆積する粘質土層であり，遺物を多く包含する。第6層には拳大の礫も混ざっていることや，壁面にオーバーハングする部分がある（d－d'）ことから，一定度の流れがあったことを示唆する。中層は砂層である。溝底がある程度埋没した後に南方からの急な流れがあったことがわかる。その上の上層は再び粘質土である。埋没が進行し，肩部の崩落が進んではいるが，一



第69図　ＳＤ３５遺物出土状況（１）（Ｓ＝1/30）



第70図　ＳＤ３５遺物出土状況（２）（Ｓ＝1/30）



第71図　ＳＤ３５遺物出土状況（３）（Ｓ＝1/30）

応溝らしい外観を保つ淀んだ状態にあったことが考えられる。さらに埋没が進行して最上層が堆積する頃には，わずかな落ち込みとなっており，溝としての機能は完全に失われていることが想定できる。

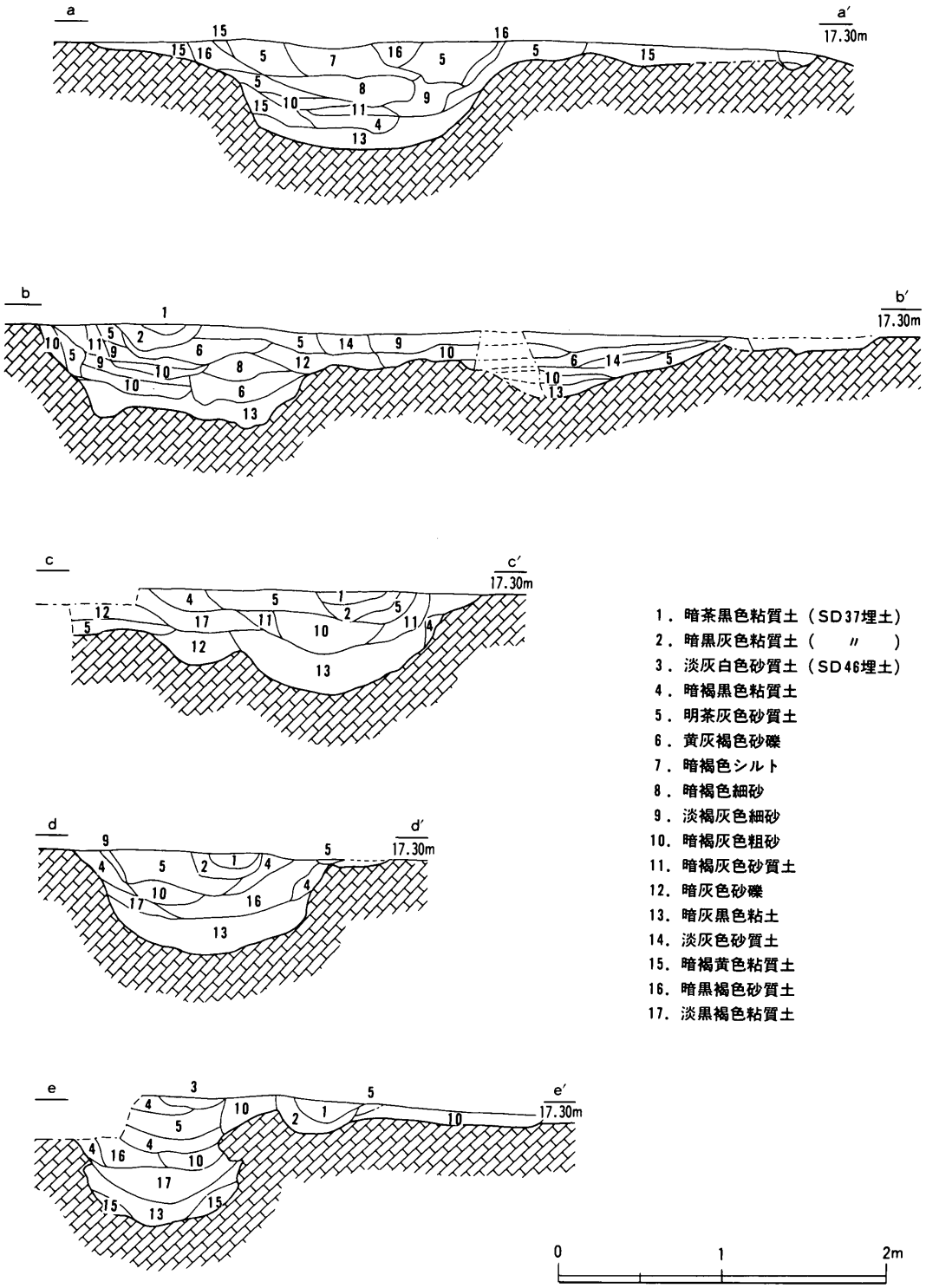
遺物は，底部に接した下層中の3箇所で集中して検出された。かなり完形に近い個体もあり，さほど遠距離から流れてきたとは思えない土器群である。

105～115・120～123は，ＳＤ３５下層から出土した土器である。凹線文を施した弥生時代中期後半の壺が1点（105）みられるほかは，弥生時代後期末～古墳時代前期末ないし中期初頭の土器が混在する。高杯（106・120・121）は杯部中位の屈曲が明瞭であり，脚基部は細い筒状を呈する。壺には直口壺（107），脚台付の小型壺（122），広口壺（123）がある。107は直線的に外傾する短い口縁部と丸い底部をもつ。体部外面には横ハケと縦ハケを交互に行う。肩部内面には接合痕が顕著に残る。123は外傾する頸部とそこから明瞭に外反する口縁部からなる。口縁端部は上下に弱く拡張する。器表にハケ目調整を施した後，内面にはヘラ磨きが縦方向に施される。甕（109～115）には伝統的な形態と布留系の形態のものがある。109・111は布留系の二重口縁甕（壺）の系譜を引くものであるが，口縁部の屈曲は鈍く弱いものである。112～115は，在地の伝統的な形態である。112・113の外面は叩き成形された後に縦ハケ調整が行われる。また114・115は，比較的明瞭で平坦な底部をもつ。

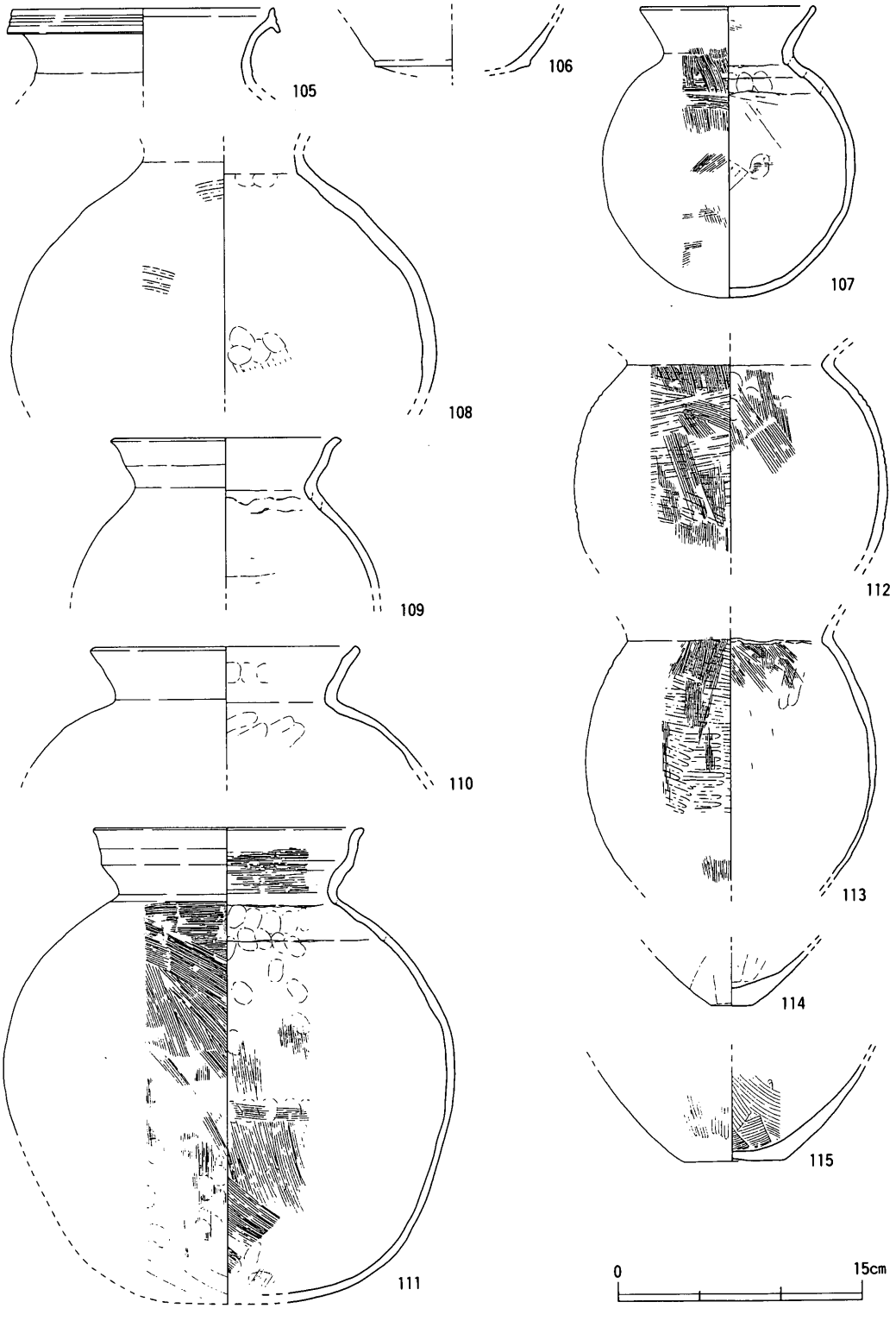
これらの土器は，大久保徹也氏編年による下川津Ｖ式（庄内期）前後のもの（112～115，122・123）と，布留式新段階前後のもの（107～111）とに大別できる。高杯は屈曲状況に古い様相が指摘できるが，後者に近い時期と捉えておく。以上を踏まえると，ＳＤ３５下層は古墳時代前期末ないし中期初頭に埋没したとみるのが妥当である。ただし下川津Ｖ式の土器もかなりみられるため，開削時期をそこまで遡らせて捉えることができる可能性があろう。

［ＳＤ４０］

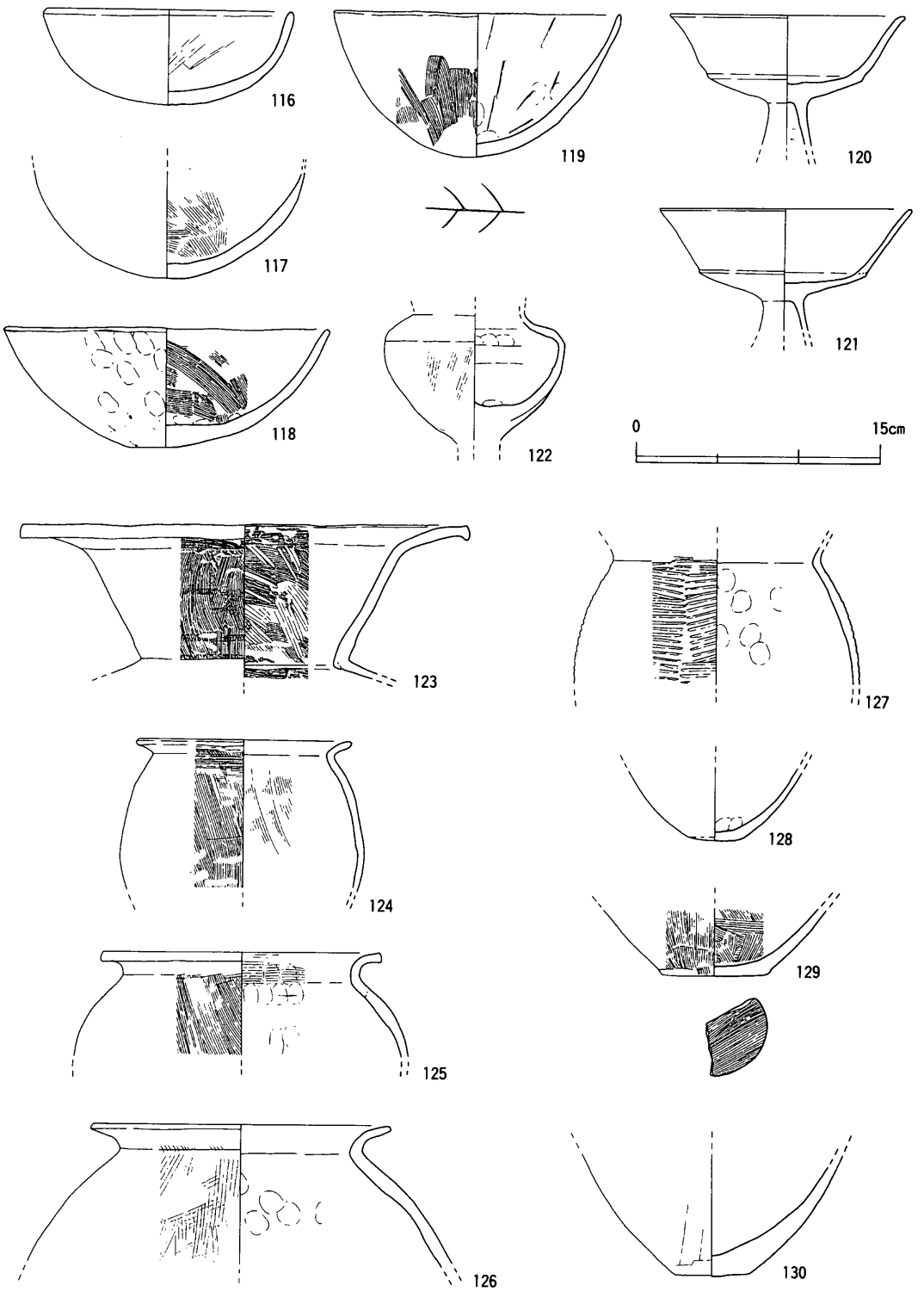
Ⅲ区中央部をＳＤ３５とほぼ平行して延びる大型の溝状遺構である。検出した南半から中央部にかけてはＮ－29°－Ｗの方向で流れるが，中央で急速に屈曲してＮ－９°－Ｅとなる。この屈曲部の西岸部に張り出しがありＳＤ３５との合流部（ｃ－ｃ'付近）を形成する。また東岸部にも溜り状の張り出しがあり，そこからＳＤ４１～４３が分岐している。この中央の屈曲部からさらに北側でＮ－30°－Ｅの方向に屈曲して北流する。いずれも屈曲部以外は直線的に延びることが特徴である。



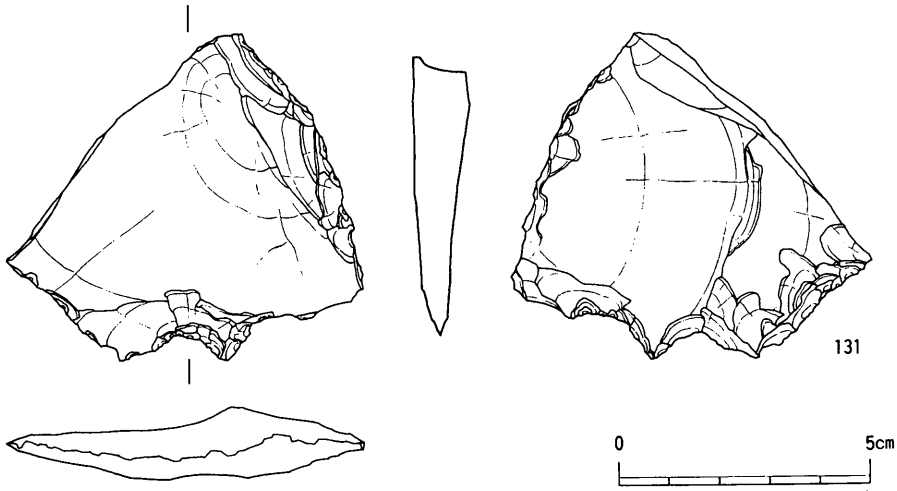
第72図　ＳＤ４０断面図（Ｓ＝1/40）



第73図　ＳＤ３５出土遺物（Ⅰ）（Ｓ＝1/4）



第74図　ＳＤ３５出土遺物（２），ＳＤ４０出土遺物（１），ＳＤ４２出土遺物（S＝1/4）



第75図　ＳＤ４０出土遺物（２）（Ｓ＝2/3）

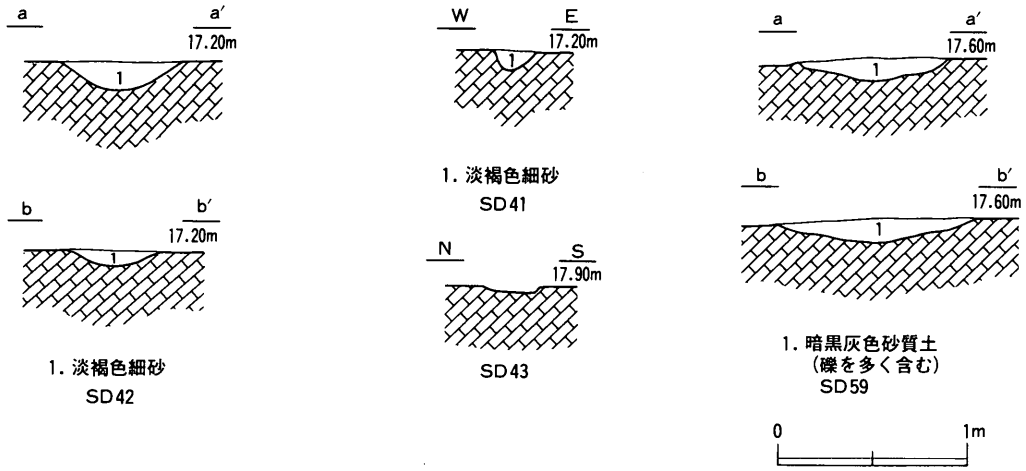
溝の規模は，ａ－ａ'断面で幅2.45m，深さ0.63mを測り，ｄ－ｄ'断面で幅1.66m，深さ0.62mを測る。断面形態はＵ字形を呈しており，ｅ－ｅ'断面のように壁面下半が抉れて肩部がオーバーハングする箇所もある。埋土はＳＤ３５に比べてやや複雑に細分されるが，土質や層の切り合いにより上層（砂質土層主体）・中層（砂質土層）・下層（粘質土層主体）にまとめることができる。下層の最下部には部分的に拳大の礫を含む砂質土層があり，かなり流れの早い状態であったことを窺わせる。またＳＤ３５との合流部（ｃ－ｃ'）では，それに先行した砂質土が堆積している。これはＳＤ３５中層と近似するが，現状水路が介在するために同一層と確定はできない。しかし本遺構での堆積状況をみる限り，合流部はかなり早い段階で埋没が進行していた可能性が高く，ＳＤ３５・４０との間の分水・配水は短期間で機能しなくなったと考えられる。

116・117・119・124～131は，ＳＤ４０出土遺物である。125・130・131は上層，116はＳＤ４１～４３分岐点の溜り埋土，ほかは下層出土である。土器は下川津Ｖ式頃に比定できる。131はサヌカイト製のスクレイパーである。

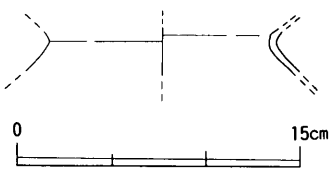
［ＳＤ４１～４３］（第74・76図）

ＳＤ４０東岸の溜りから分岐する小規模な溝状遺構である。いずれもＳＤ４０と平行ないし直交した方向に延びる。土層の重複状況から，ＳＤ４０の中層堆積時に埋没したことが考えられる。

ＳＤ４２から弥生土器鉢（118）が出土した。内面をハケ目調整しており，底部外面は縦方向に削る。下川津Ｖ式頃のものであろう。



第76図　ＳＤ４１～４３，５９断面図（Ｓ＝1/40）

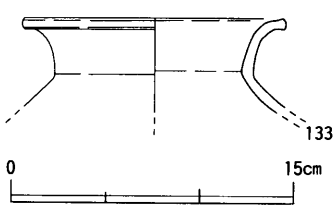


第77図ＳＤ59出土遺物（Ｓ＝1/4）

［ＳＤ５９］（第76・77図）

Ⅴ区東端部で検出した。微高地の縁辺部に沿いながら南北方向に延びている。北側に位置するＳＤ５６と繋がる可能性がある。埋土中から弥生土器甕片（132）が出土した。弥生時代後期末葉前後のものであろう。

５．性格不明遺構



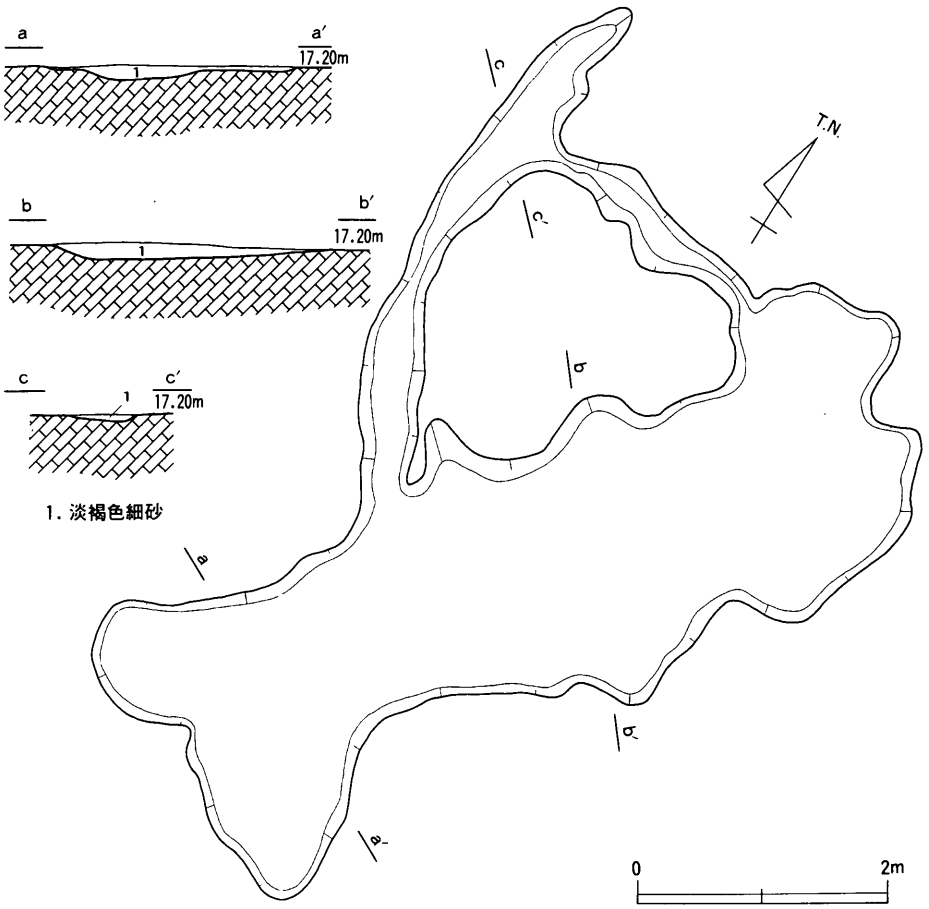
第78図　ＳＸ05出土遺物（Ｓ＝1/4）

［ＳＸ０５］（第78・79図）

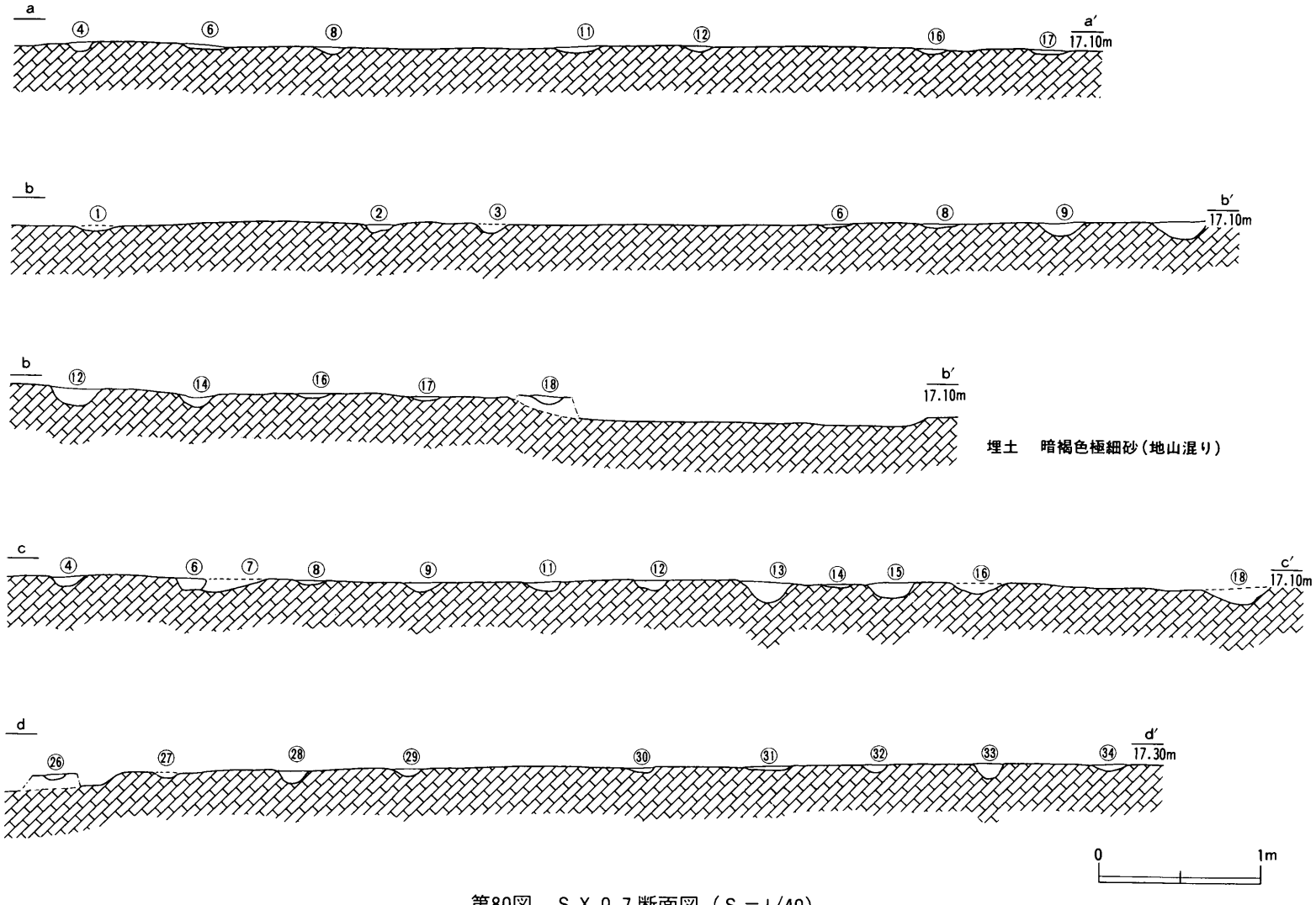
Ⅲ区東半部に位置する，浅く不定形な土坑状の遺構である。淡褐色細砂を埋土とする。下川津Ⅴ・Ⅵ式頃と思われる壺（133）が出土している。

［ＳＸ０７］（第80・81図，図版18）

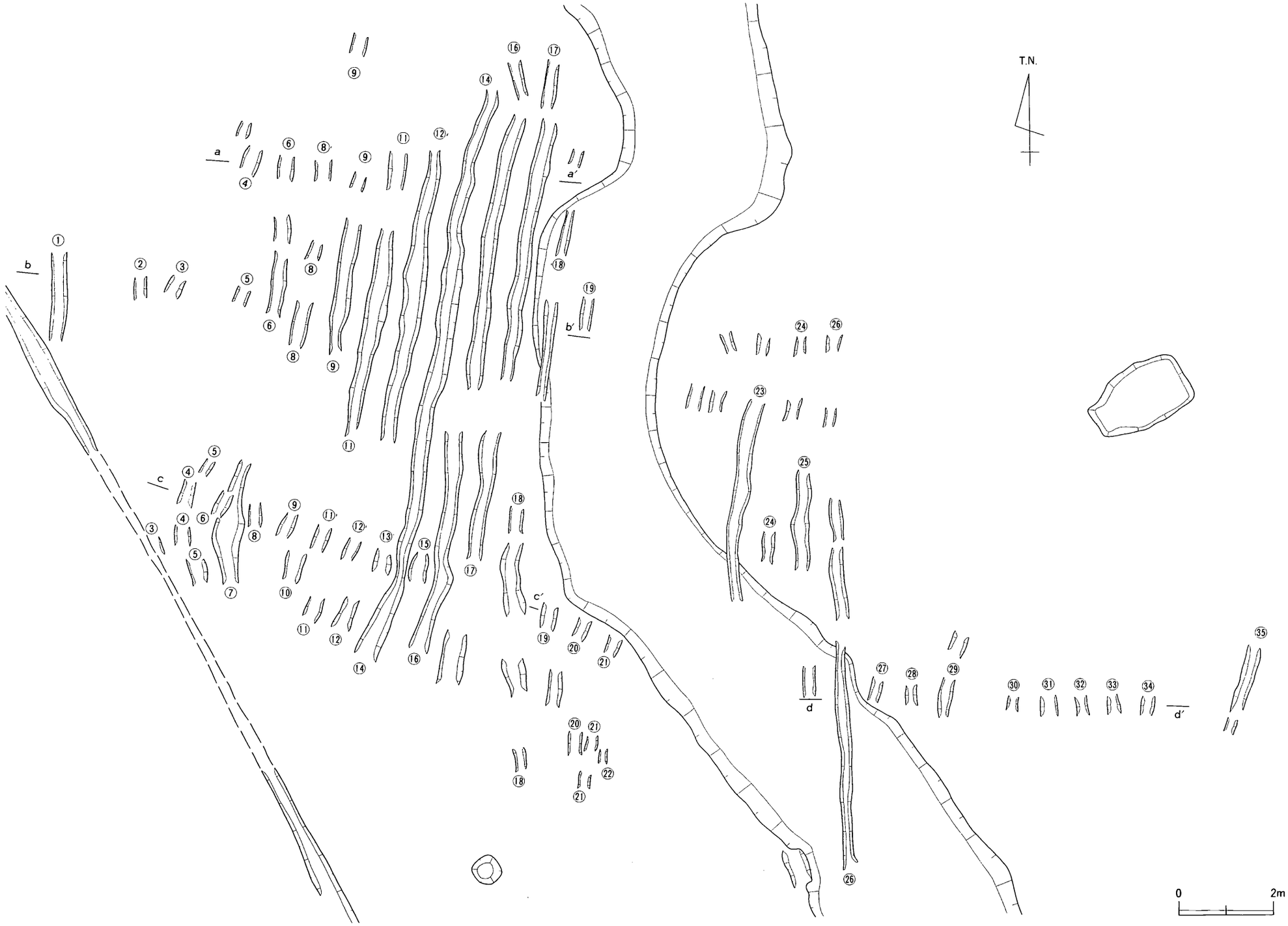
Ⅳ区北半部に位置する小溝群である。幅0.15～0.2m，深さ0.05～0.1mを測る小溝が，0.3m程度の間隔で35条並列している。小溝の方向はＮ－10°－Ｅ前後である。埋土は基盤となる第Ⅳ層をブロック状に含む暗褐色極細砂層である。埋土はＳＤ４１～４３に近似しており，また位置的にもＳＸ０７－①がＳＤ４２の延長上に位置し，これらの溝状遺構と方位をほぼ同じくするなど，ＳＤ４１～４３との何らかの関わりが想定される。



第79図　ＳＸ０５平・断面図（Ｓ＝1/60）



第80図　ＳＸ０７断面図（Ｓ＝1/40）



第81図　ＳＸ０７平面図（Ｓ＝1/100）

第5節　古　代　前　半

1．概　　要

古代の遺構は極めて少ない。僅かに火葬墓1基と溝8条が検出されたのにとどまっており，埋土から当該期と判断したものも多く，詳細な時期の限定も困難なものが多い。また遺構の性格としては，集落に直接関わる遺構は認められない。ただし，包含層出土遺物はⅠ区南半部やⅤ区などにおいて供膳・煮沸器種が一定量みられるため，調査区外南方（直近かやや離れているかは不明）における集落の存在が推測される。

2．火　葬　墓

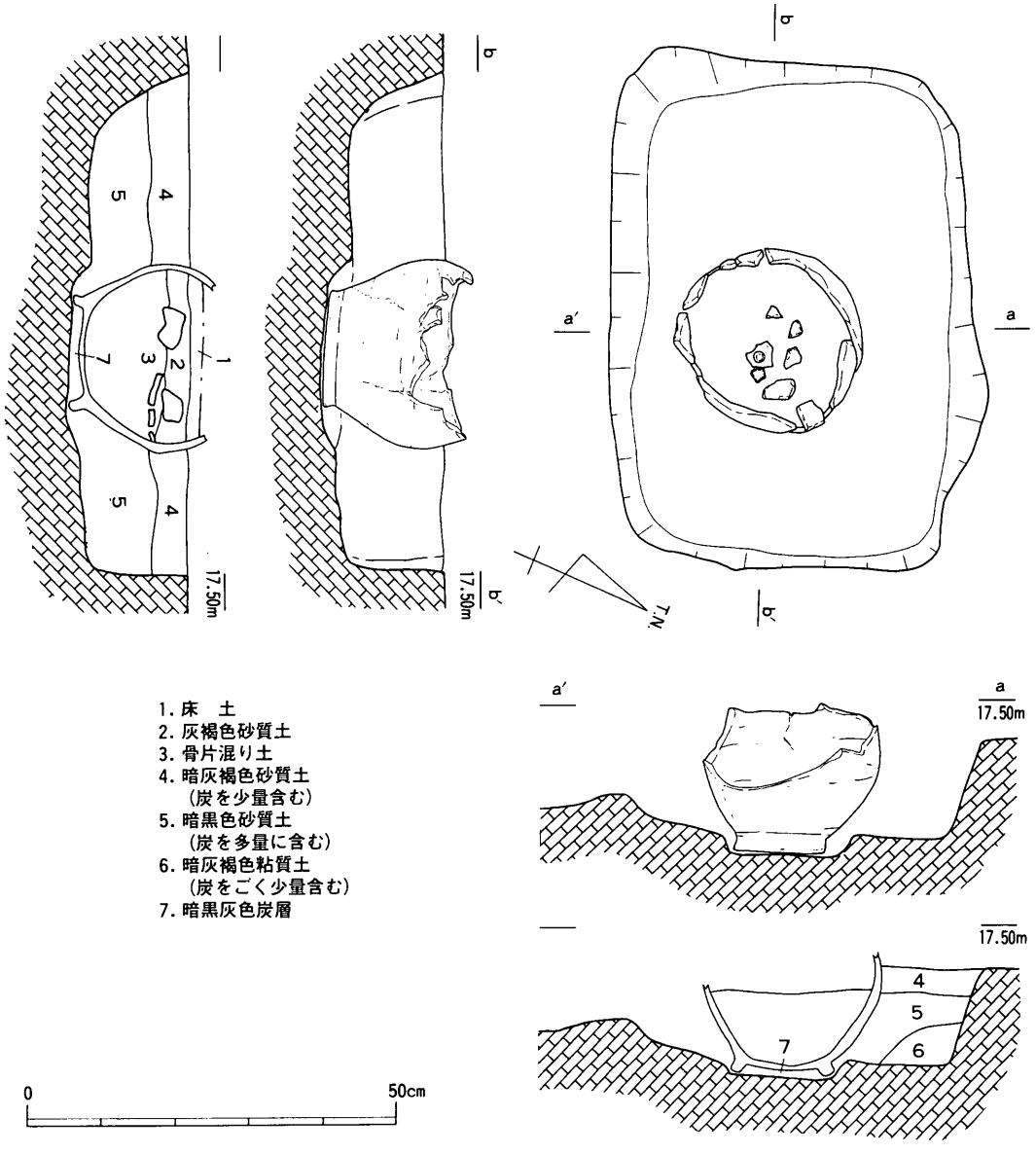
［ＳＴ０１］（第82～84図，図版4～5）

平面長方形の墓壙に骨蔵器を埋納する形態の墳墓である。上面は近世後期以降の水田造成に伴い削平されているために，本来の深さは不明である。また古代火葬墓にしばしばみられる，小規模な盛り土が存在したかどうかも明らかにはできない状況であった。

墓壙は長さ0.68m，幅0.50m，残存深0.17mを測る，やや隅丸な長方形を呈している。主軸はＮ－64.5°－Ｅであり，これは周辺の条里型地割とややずれる方位である。墓壙壁面は西辺でやや緩く立ち上がるが，概ね垂直に掘り込まれている。また底面は平坦であるが，中央部に径0.17m，深さ0.03mの窪みがあり，そこに骨蔵器の高台が位置する。この窪みは，墓壙掘削時に骨蔵器の埋納を意識して掘られたものか，あるいは埋納後に土圧とともに骨蔵器の重みで形成されたものの，二者の可能性がある。しかし，窪みと骨蔵器高台の大きさは完全には一致せず，窪みの直径がかなり大きいこと，また窪みの壁面が斜めに掘り込まれていることなどを考慮すると，前者の可能性が指摘できよう。

なお，墓壙内には焼土層は形成されていないことから，火化施設をそのまま墓壙に転用したとは考えられない。

墓壙内の埋土は概ね2層認められた。上・下層ともに土質そのものはほぼ同じであるが，木炭粒の含有量において違いがみられる。すなわち，上層（第4層）には細かな木炭粒が少量含まれる程度であるが，下層（第5層）では指先大の木炭粒が多量に含まれており，土と木炭粒がほぼ同率混ざったような状況にある。このことは，墓壙を埋め戻す際に下部



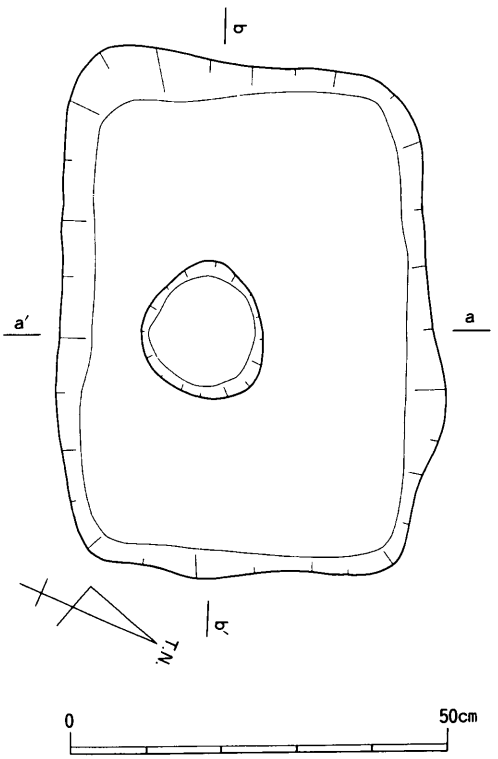
第82図　ＳＴ０１平・断面図（Ｓ＝1/10）

に木炭片の充塡が意識的に行われた可能性を示すが，奈良県白川火葬墓群３号墓で典型的にみられるような，20cm前後の木炭を多量に使用して骨蔵器を被覆するのとは異なる。墓壙内の埋土は全て水洗選別を行ったが，骨片や焼土は検出されなかった。したがって，木炭片は火葬の際に生じたものを使用したのではなく，別に調達したのであろう。

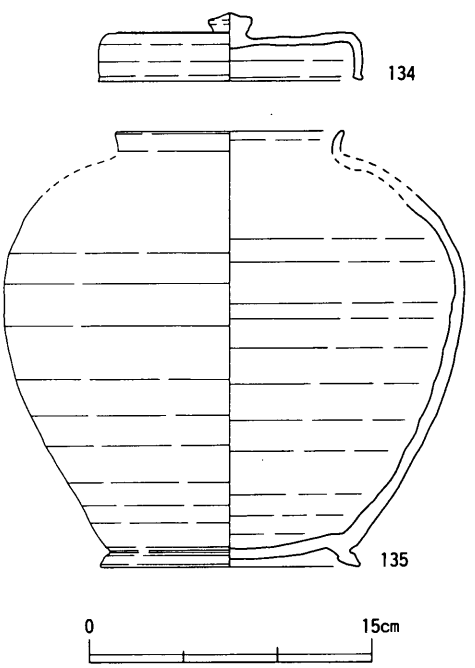
骨蔵器の内部には，体部中位付近まで骨片の詰まった土（第３層）が遺存しており，そ

の上面に骨蔵器蓋と口縁部小片が割れた状態で落ち込んでいた。その上には砂質土（第２層）が堆積しており，さらにその上に床土（第１層）が堆積している状況であった。骨蔵器の頸部より上は床土に伴う削平（18世紀後葉以降）によって破損していることを考慮すると，近世以前に蓋が骨蔵器内部に落下し，その後耕地化による削平が行われたとみられる。骨蔵器内からは副葬品は検出されていない。また，火葬骨は細片が多く，部位の特定や性別・年齢についての知見は得られなかった。

骨蔵器（134・135）は，須恵器の有蓋高台付短頸壺（薬壺）である。蓋(134)は平坦な天井部とほぼ直立して垂下する口縁部をもつ。口縁端部には内傾する平坦面が作られ，天井部外縁には回転ヘラ削りが施される。また天井部中央には擬宝珠形のツマミが貼付されている。胎土・焼成ともに135と同じであり，同一窯で焼成されたとみられる。壺（135）は肩部上半から頸部にかけては削平によって遺存していなかったが，口縁部細片から復元される口径によって，ほぼその全形を窺い知ることができる。器高に対する胴部径（体部最大径）の割合は低く，また体部最大径の位置も体部の中位から若干上にある程度であり，肩の張りがさほど強くなく，やや胴長な印象を受ける。



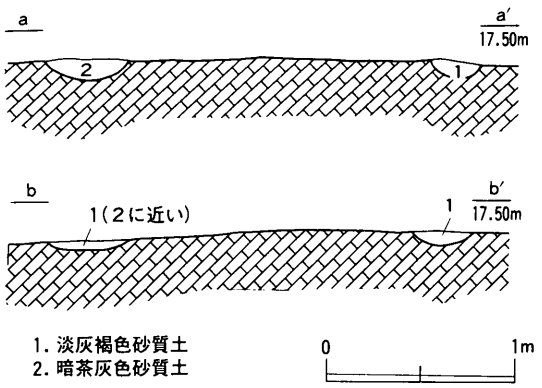
第83図　ＳＴ０１墓壙平面図（Ｓ＝1/10）



第84図　ＳＴ０１骨蔵器（Ｓ＝1/4）

この特徴は三豊郡高瀬町西ノ脇古墓の骨蔵器薬壺と比較すると，より明瞭に読み取ることができる。西ノ脇古墓は，被せ蓋に転用されていた須恵器高台付杯身の形態からみて，8世紀中葉の年代が想定できるのであるが，郡家田代遺跡ＳＴ０１はそれよりも後出することは明らかであろう。黒崎直氏による畿内薬壺の変遷観をも参考にすると，9世紀前半頃の年代が想定できる。なお，胎土の特徴からみて，骨蔵器は綾南町十瓶山窯跡群で製作された可能性が考えられる。

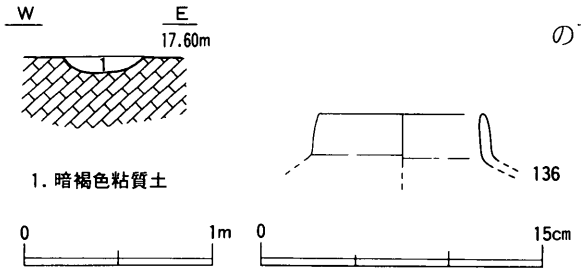
3．溝状遺構



第85図　ＳＤ０１・０２断面図（Ｓ＝1/40）

［ＳＤ０１・０２］(第85図)

Ｉ区北半部の西端で検出された，2条平行して延びる溝である。主軸方位はＮ－33°－Ｗを測る。両溝の間隔は約2ｍであり，ＳＤ０１は周辺の地割から想定される条里型地割の坪界線にほぼ該当する。ＳＤ０１は幅0.44m，深さ0.11mを測り，ＳＤ０２は幅0.3m，深さ0.08mを測る。断面形態はともに浅いＵ字形を呈する。遺物は出土しなかったが，埋土の状況が第3層に近似しており，古代前期の可能性が考えられる。



第86図　ＳＤ１０断面図(Ｓ＝1/40)，出土遺物(Ｓ＝1/4)

［ＳＤ１０］(第86図)

II区中央部をＮ－30.5°－Ｗの方向に延びる溝状遺構である。幅0.42m，深さ0.08mを測り，浅い逆台形状の断面形態を呈する。暗褐色粘質土を埋土としており，埋土中から8～9世紀頃の須恵器短頸壺(136)が出土した。

［ＳＤ２２］(第87図)

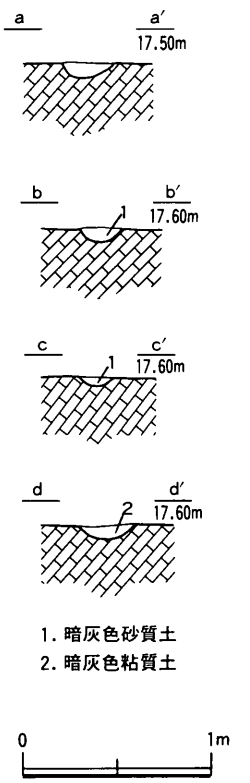
II区東端部からIII区西端部にかけて，Ｎ－30°－Ｗの方向に延びる溝状遺構である。南北方向の走向が主であるが，II・III区の南端でクランク状に屈曲している。幅0.25～0.3m，深さ0.08mを測り，断面逆台形を呈する。遺物は出土しなかったが，重複状況から弥生時

代前期の溝状遺構群よりも後出し，近世のＳＤ２７よりも先行することは確認できる。また埋土が第３層に近似することから，古代前期の所産である可能性が考えられる。

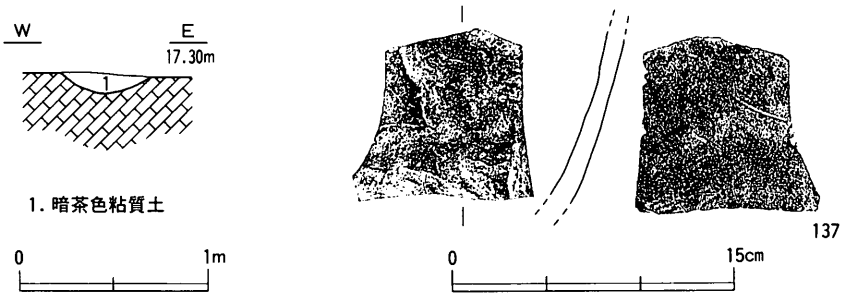
［ＳＤ３７］（第88図）

Ⅲ区中央部をＮ－30°－Ｗの方向に延びる溝状遺構である。古墳時代前期のＳＤ３５・４０の埋土を切り込んでおり，近世のＳＤ４６に切り込まれている。ＳＤ０１から東へ109mの地点にあり，周辺の地割から想定される坪界ラインとほぼ一致する。幅0.44m，深さ0.1mを測り，断面が浅いＵ字形を呈する。埋土は暗茶色粘質土であり，埋土中から須恵器甕片が１点（137）のみ出土した。

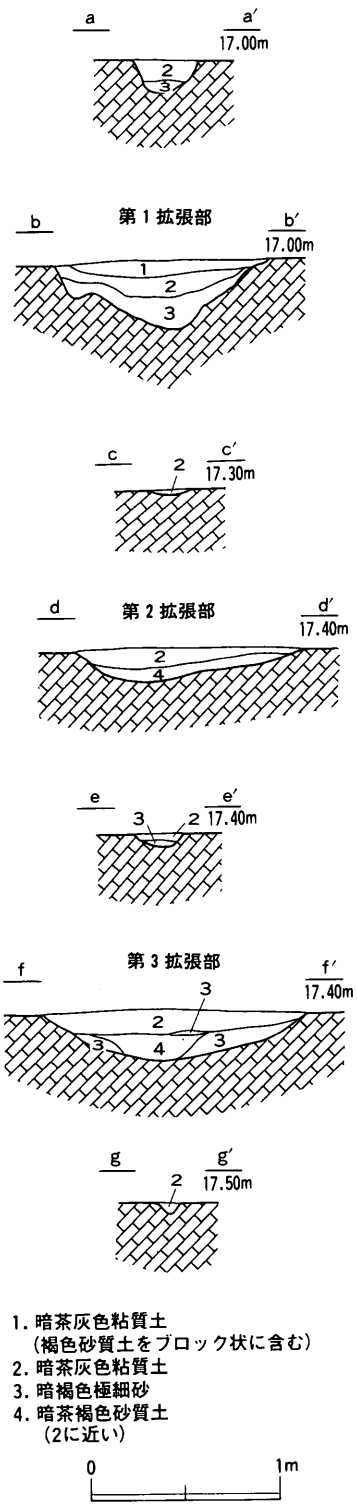
137は体部下半の破片であり，細かく時期を特定させる要素には欠ける。しかし内面に擦り消された当て具痕を残すこと，また外面の叩き目をカキ目によって消していることは，９世紀後葉以降の須恵器には認められない調整方法であり，ほぼ８世紀代前後の特徴とすることができよう。遺物量・残存状況ともに良好な状態ではないため，この須恵器が直ちにＳＤ３７の時期を示すものか明らかではないが，古代前期の幅の中では捉えることができると考える。



第87図　ＳＤ２２断面図（Ｓ＝40）



第88図　ＳＤ３７断面図（Ｓ＝1/40），出土遺物（Ｓ＝1/4）



第89図　ＳＤ５３断面図（Ｓ＝1/40）

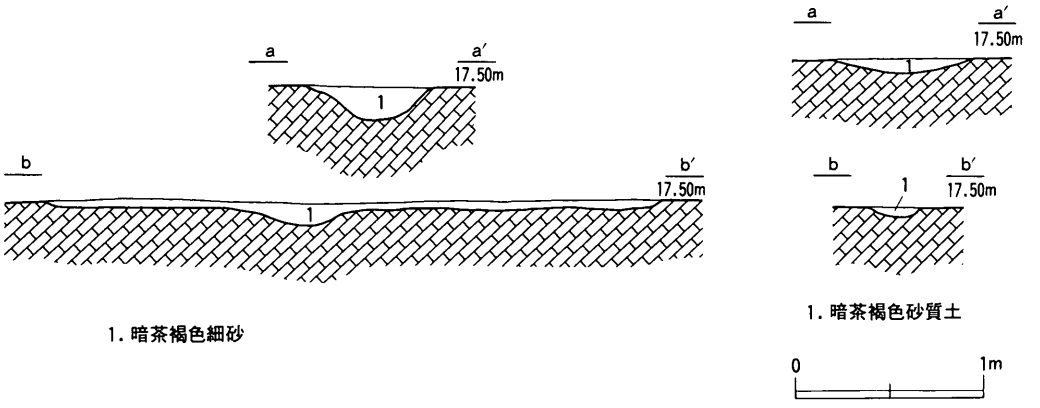
［ＳＤ５３］(第89図)

IV区東端部をＮ－30°－Ｗの方向に延びる溝状遺構である。幅0.34m，深さ0.17mを測り，断面逆台形を呈する。この遺構に特徴的なのは，３箇所に瘤状の拡幅部が認められる点である。北から順に第１～３拡幅部と呼称しておく。第１拡幅部は長さ2.2m，幅1.3m，深さ0.36mを測り，平面形態はやや長方形に近い楕円形を呈する。第２拡張部は第１拡張部の南23.5mにあり，長さ1.5m，幅1.25m，深さ0.18mを測る。平面形態は歪な楕円形を呈する。第３拡張部は第１拡張部の南35mの地点にあり，長さ2.25m，幅1.28m，深さ0.26mを測る。平面形態は長方形を呈する。これら拡張部は溝本体よりも若干深いものの，底面は基盤の第IV層にとどまっており，これを掘り抜いて砂礫層(第VI層)にまで達するような状態ではない。このため，郡家原遺跡で検出されたような出水状遺構とは異なる。溝本体の途中各所に存在することを重視すると，流水を溜めるための何らかの施設である可能性がある。

遺物は全く出土しなかった。したがって細かな時期を特定することは困難であるが，埋土が第IV層やＳＤ３７などに近似していることから，古代前期と考えておきたい。

［ＳＤ５４］(第90図)

IV区東端部からＶ区南端部にかけて検出された，不定形な方向をもつ溝状遺構である。溝の方位は南端では真北に近いが，大きく屈曲してＮ－60°－Ｗの方向をとり，さらにＮ－30～40°－Ｗの方位に向くようになる。南端での方向は微高地縁辺の等高線と平行しており，地形に制約された結果であることが考えられる。そして地形の制約が少ない北側では，周囲の地割と同



第90図　ＳＤ５４・５５断面図（Ｓ＝1/40）

様な走向を指向するようになる。また溝幅も一定しておらず，南端部では最大幅3.35mを測るが，これは浸食された肩部に埋土が溜ったためであり，本来は幅0.6m，深さ0.16m程度の規模をもつと思われる。

［ＳＤ５５］(第90図)

Ｖ区をＮ－30～38°－Ｗの方向で延びる溝状遺構である。幅0.7m，深さ0.08mを測る。検出した南半部ではＮ－10°－Ｅにクランク状に屈曲する部分があり，ＳＤ５４同様，地形的な制約を受けているとみられる。

第6節　近　　世

1．概　　要

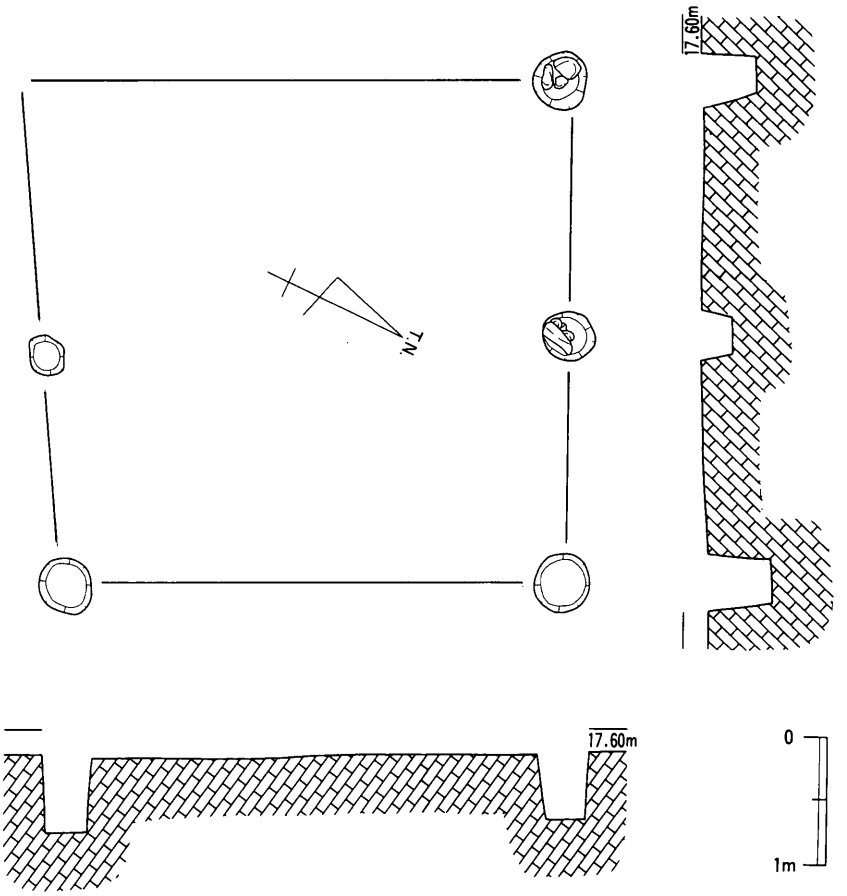
近世の遺構には，掘立柱建物5棟と柵列2基，それ以外のピット群，土坑29基，井戸状遺構1基，水溜め状の方形土坑3基，溝8条などがある。調査区内での平面分布をみると，大半がⅠ区北半部（Ｆ－2，Ｇ－2・3，Ｈ－2グリッド）に集中しており，その他の地区・グリッドでは少数の土坑と溝が認められるにとどまる。Ⅰ区北半部は，分布調査の時点で近世土器・陶磁器の散布が指摘されていた箇所であり，調査時でも耕作土や包含層から多量の近世土器・陶磁器が出土している。この箇所での遺構分布は調査区北端ほど濃密であり，南方では次第に散漫な状況を呈するようになる。包含層出土の近世遺物もＧ－2グリッドが最も多く，Ⅰ区南半部ではほとんどみられない。このことは，近世集落が調査区北側へと連続して展開することを示唆していよう。調査区内の掘立柱建物が31㎡を最大とするのにとどまり，また井戸や水溜めなどの機能が想定できる土坑が多いことからみても，集落の中心部は調査区北側にあると考えられる。Ⅰ区北半部の遺構群は，出土遺物から18世紀前葉～中葉を下限としているが，上限については必ずしも確定的ではない。土器・陶磁器・瓦が多量に出土した大型土坑（ＳＫ09）が集落廃絶時に掘削された廃棄土坑とみられ，また他の土坑・溝の廃絶時期が上記の時期であることを考慮すれば，少量みられる17世紀後葉の遺物が集落の上限を示すのかもしれない。

以下，各遺構と出土した遺物について，報告する。なお，包含層出土の遺物は第7節で一括して報告する。

2．掘立柱建物

［ＳＢ02］（第91図）

1×2間の小型の掘立柱建物（床面積16㎡）である。主軸方位はＮ－65.5°－Ｅであり，周囲の条里型地割から若干東に偏している。柱穴掘り方は径0.3～0.5mを測り，平面円形を呈する。遺物は出土していないが，柱穴掘り方埋土が締まりのない淡灰白色粘質土ないし暗茶褐色砂質土であり，さほど古くは遡らないとみられることから，包含層中の近世陶磁器と同じ時期とみられる。



第91図　ＳＢ０２平・断面図（Ｓ＝1/60）

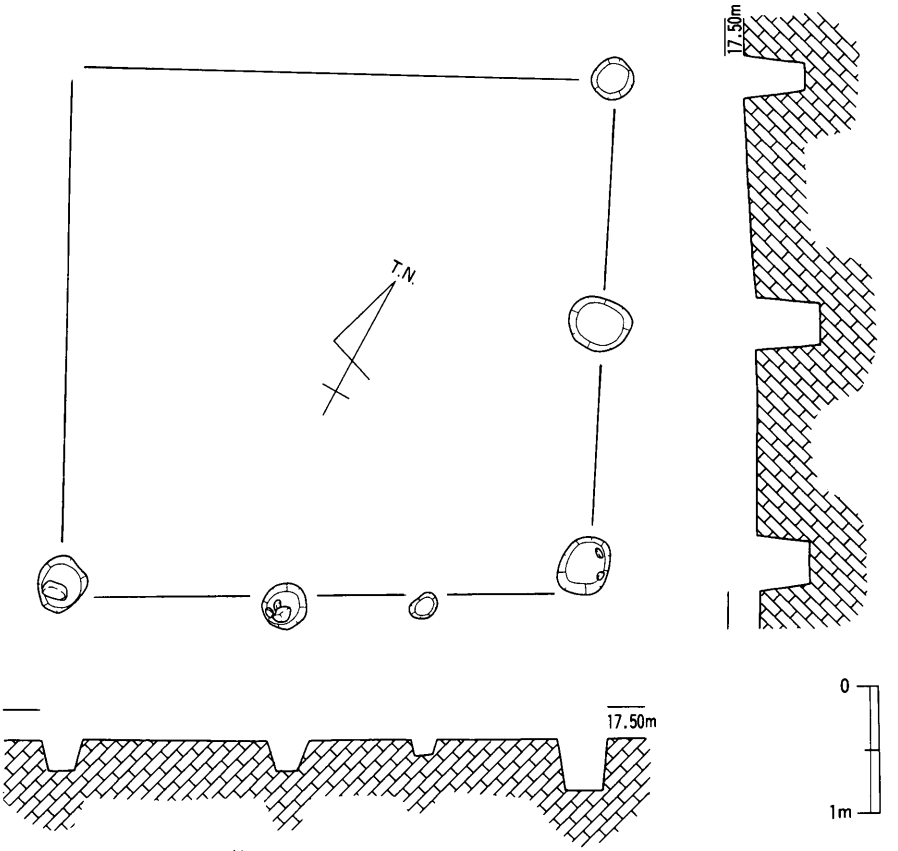
［ＳＢ０３］（第92・93図）

２×３間の掘立柱建物で，隣接するＳＢ０２と同程度の規模（17.6㎡）をもつ。主軸方位はＮ－60°－Ｅであり，周囲の条里型地割にほぼ平行している。柱穴掘り方は径0.35～0.45mを測り，平面円形を呈する。柱穴掘り方の埋土の状況はＳＢ０２と同様であり，Ｐ－１より根石に転用された石臼が出土している。

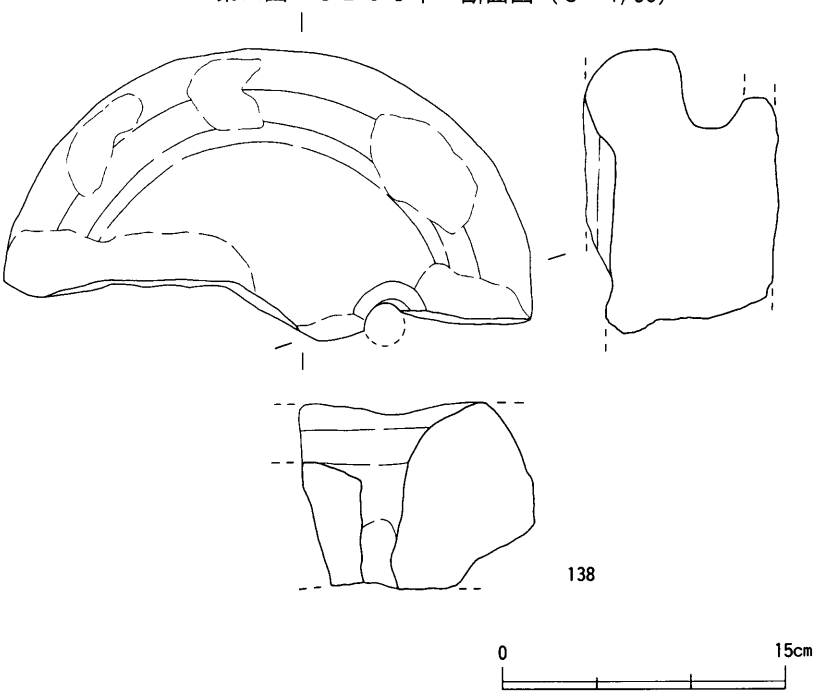
石臼（138）は凝灰角礫岩製の上臼であり，半分に欠損している。臼の目は観察できないが，粗い石質のために消失したのか，当初より施されなかったのかは不明である。

［ＳＢ０４］（第94図）

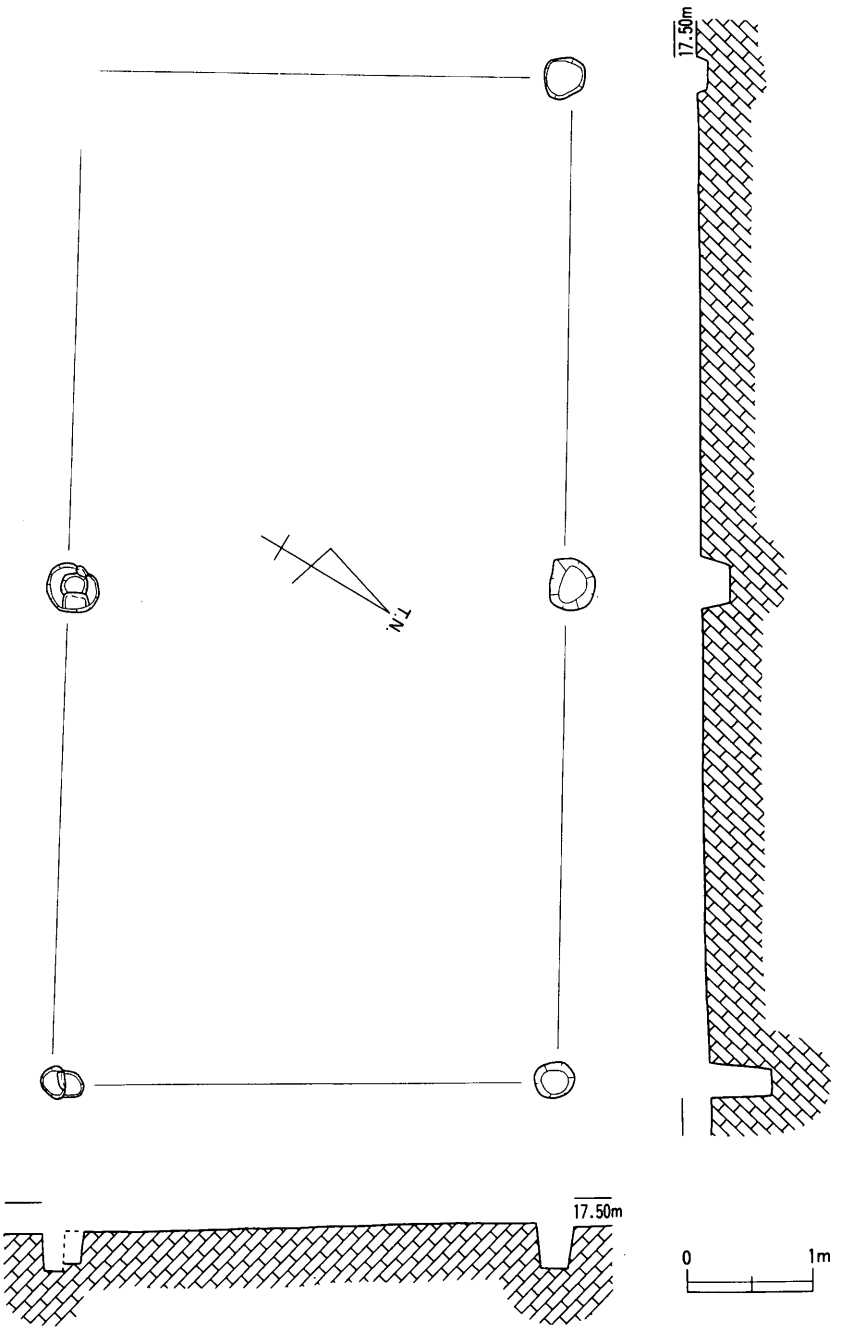
１×２間，床面積20.8㎡の小型建物であり，主軸方向はＮ－60°－Ｅと，周囲の地割と一致する。北辺西側の柱穴はＳＫ０９に破壊されている。また南東隅の柱穴がＳＫ０５の埋土を掘り込んでいる。遺物は出土しなかったが，遺構の重複関係から近世後期の短期間存



第92図　ＳＢ０３平・断面図（Ｓ＝1/60）



第93図　ＳＢ０３出土遺物（Ｓ＝1/4）

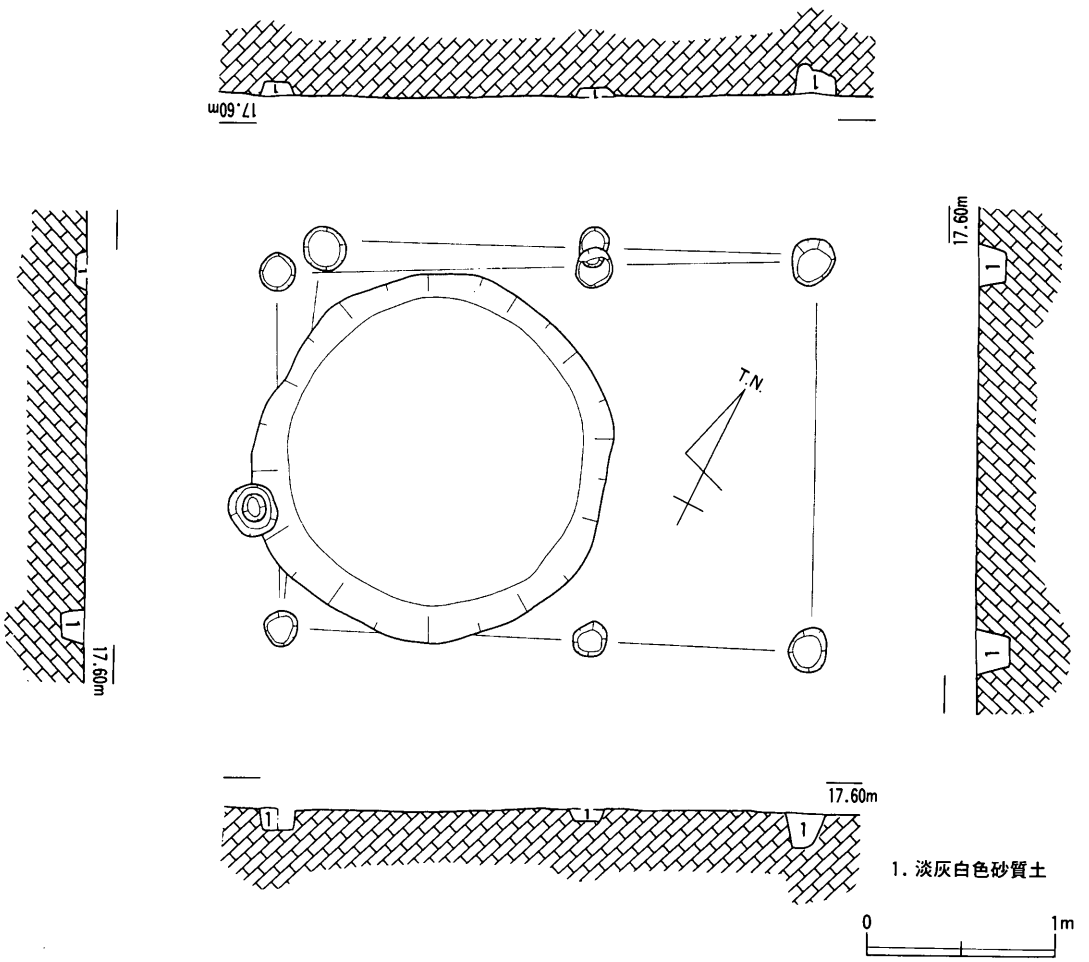


第94図　ＳＢ０４平・断面図（Ｓ＝1/40）

在したことが考えられる。

［ＳＢ０５］（第95図）

１×２間の掘立柱建物で，復元できた建物の中で最小規模の床面積(5.3m²)をもつ。　主軸方位はＮ－62°－Ｅであり，周囲の地割とほぼ合致する。西半部にはＳＫ０５が重複しており，西半１間分が丁度土坑を囲繞するような位置関係にある。また北辺のピットの重複状況から，少なくとも１回は建て替えが行われたことが指摘できる。上記した企画的な配

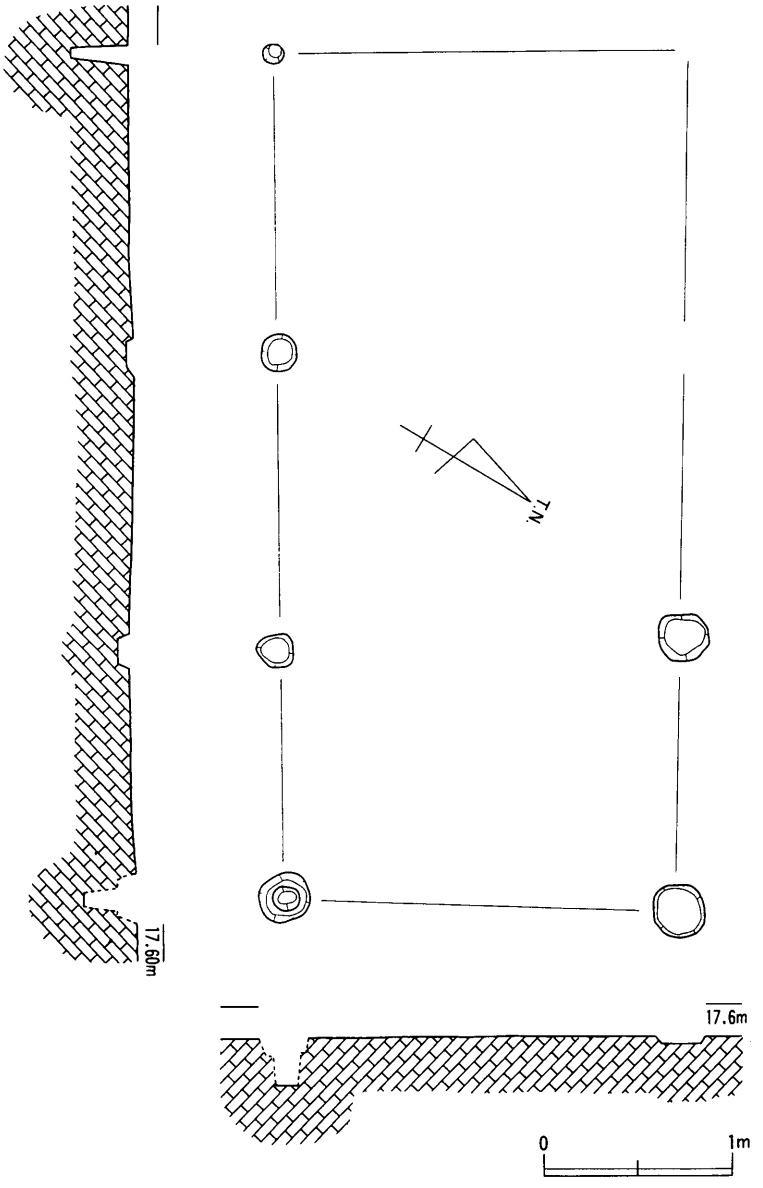


第95図　ＳＢ０５平・断面図（Ｓ＝1/40）

置から，ＳＢ０５とＳＫ０５は同時併存であった可能性が考えられ，規模の小ささとともに居住建物以外の性格が想定できる要件を備えているといえよう。遺物は出土しなかった。

［ＳＢ０６］（第96図）

１×２間の掘立柱建物で，最大規模の床面積（31.6㎡）をもつ。主軸方向はＮ－62°－Ｅであり，周囲の地割とほぼ一致する。南西隅では柱穴が検出されなかったが，やや歪な平面形態が許容されれば，ＳＰ２６が柱穴に該当する可能性がある。柱穴の間隔は3.9m前後（２間）と大きいことから，調査区内で完結せずにさらに北側に延びる可能性があろう。遺物は出土しなかった。



第96図　ＳＢ０６平・断面図（Ｓ＝1/60）

3．柵列状遺構

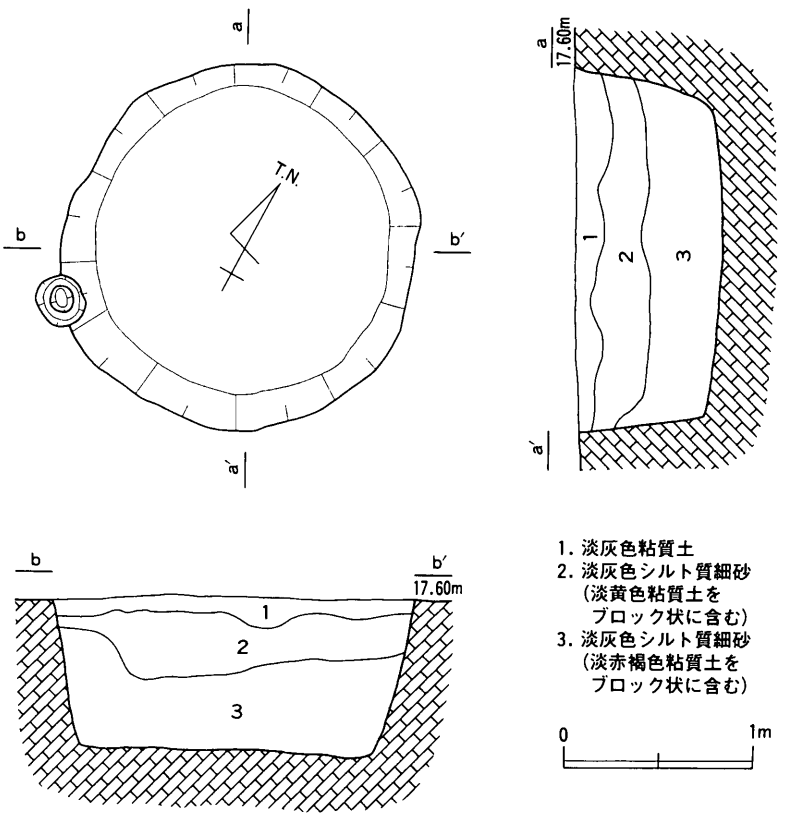
［ＳＡ０１］

ＳＢ０６に近接してＬ字形に延びる柵列状の遺構である。東西の主軸はＮ－59.5°－Ｅを測り，周囲の地割と平行する。柱穴掘り方からは遺物は出土しなかった。

［ＳＡ０２］

Ⅱ区北西部に位置する。主軸方位はＮ－27°－Ｗを測り，周囲の地割とほぼ平行する。西側が現代水路で調査できなかったため，未調査部分に対応する柱穴が存在して掘立柱建物を構成する可能性もある。遺物は出土しなかった。

4．土坑・井戸状遺構



第97図　ＳＫ０５平・断面図（Ｓ＝1/40）

［ＳＫ０５］（第97図・図版６）

Ｉ区北半部でＳＢ０５と重複して検出された。平面円形・断面逆台形の形態をもち，直径1.9m，深さ0.82mを測る。埋土は３層あり，ほぼ水平に堆積しているが，第２・３層には地山や有機物などがブロック状に多く含まれていた。遺物は底面から竹皮が少量出土したのみで，土器・陶器はみられなかった。

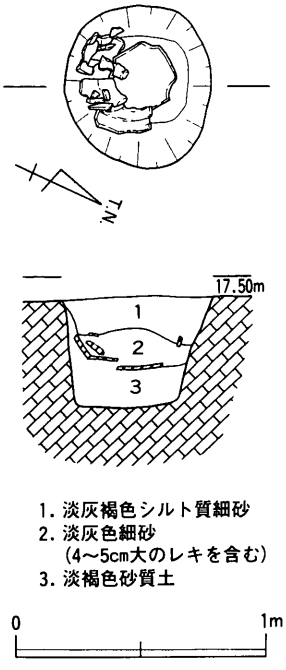
土坑内埋土の状況は，近世肥甕内に堆積したものに近似していることから，同様な内容物を含んでいたことが推測され，ＳＫ０５は便槽もしくは肥溜めの可能性が指摘できる。これを企画的に囲繞する小型建物ＳＢ０５が覆い屋であるとすれば，両遺構は建物群に隣接した厠とも考えられる。

［ＳＫ０６］（第98～100図・図版５）

Ｉ区北半部で検出された，平面楕円形，断面逆台形を呈する土坑である。規模は直径0.58～0.65m，深さ0.44mを測る。土坑内には，平瓦の上に底部中央を意識的に欠損させた土師質甕が据えられた状態で遺存していた。これらの遺物は第３層上面で検出されたことから，第３層は甕を据える際の裏込め土とみられる。同層は砂質土であることから，埋め甕の防湿の機能を果たしていたことも考えられる。

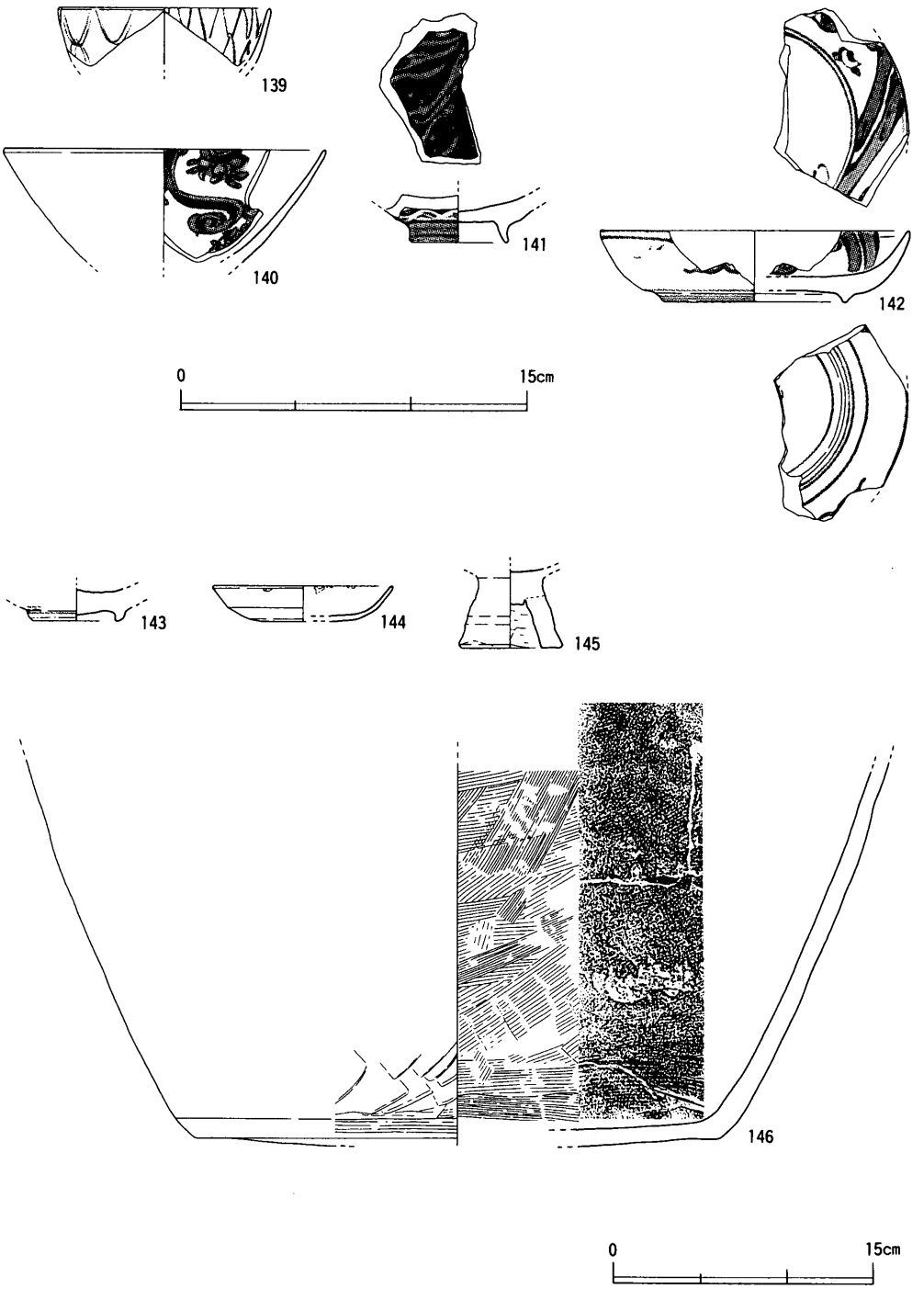
本遺構は埋め甕としては小型であり，大型例にしばしばみられる肥甕とは異なる性格をもつことが考えられる。

出土遺物には，磁器碗・皿・瓶，陶器碗・灯明皿，土師質土器台付灯明皿・甕，平瓦がある。陶磁器は，いずれも18世紀前葉～中葉の特徴をもつもので，碗皿類（灯明皿を除く）は肥前系のみである。140は直線的に開く体部をもち，文様は内面のみに描かれる。文様は輪郭線を描き，その内外を塗り込んでおり，他に比べて丁寧な描画といえる。お歯黒を塗る際にうがいをする「うがい茶碗」にあたる。Ｉ区北半部包含層出土例（582）と同一個体とみられる。144は，焼成から備前系の灯明皿とみられ，口縁部に煤が付着している。145は台付灯明皿の脚部とみられる。やや硬質な土師質焼成を呈しており，器面には横ナデ調整が顕著にみられる。146は埋め甕に使われていた土師質土器甕である。やや下方に突出気味な底部をもつ。体部外面の板ナデや内面のハケ目調整は，下から上へと施されている。平瓦（147）

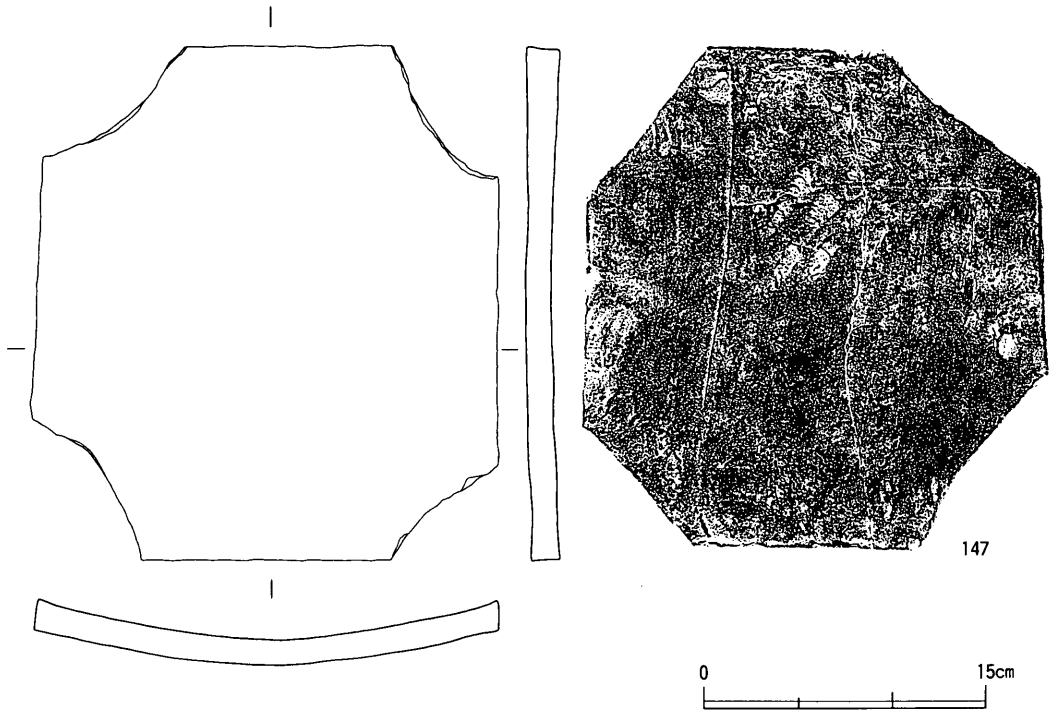


第98図　ＳＫ０６
平・断面図（Ｓ＝1/30）

は四隅が打ち欠かれている。凸面には「コビキ」の痕跡と，それに後出する「アラジドリ」時の手の痕跡がみられる。



第99図　ＳＫ０６出土遺物（Ⅰ）（陶磁器碗Ｓ＝1/3，他はＳ＝1/4）

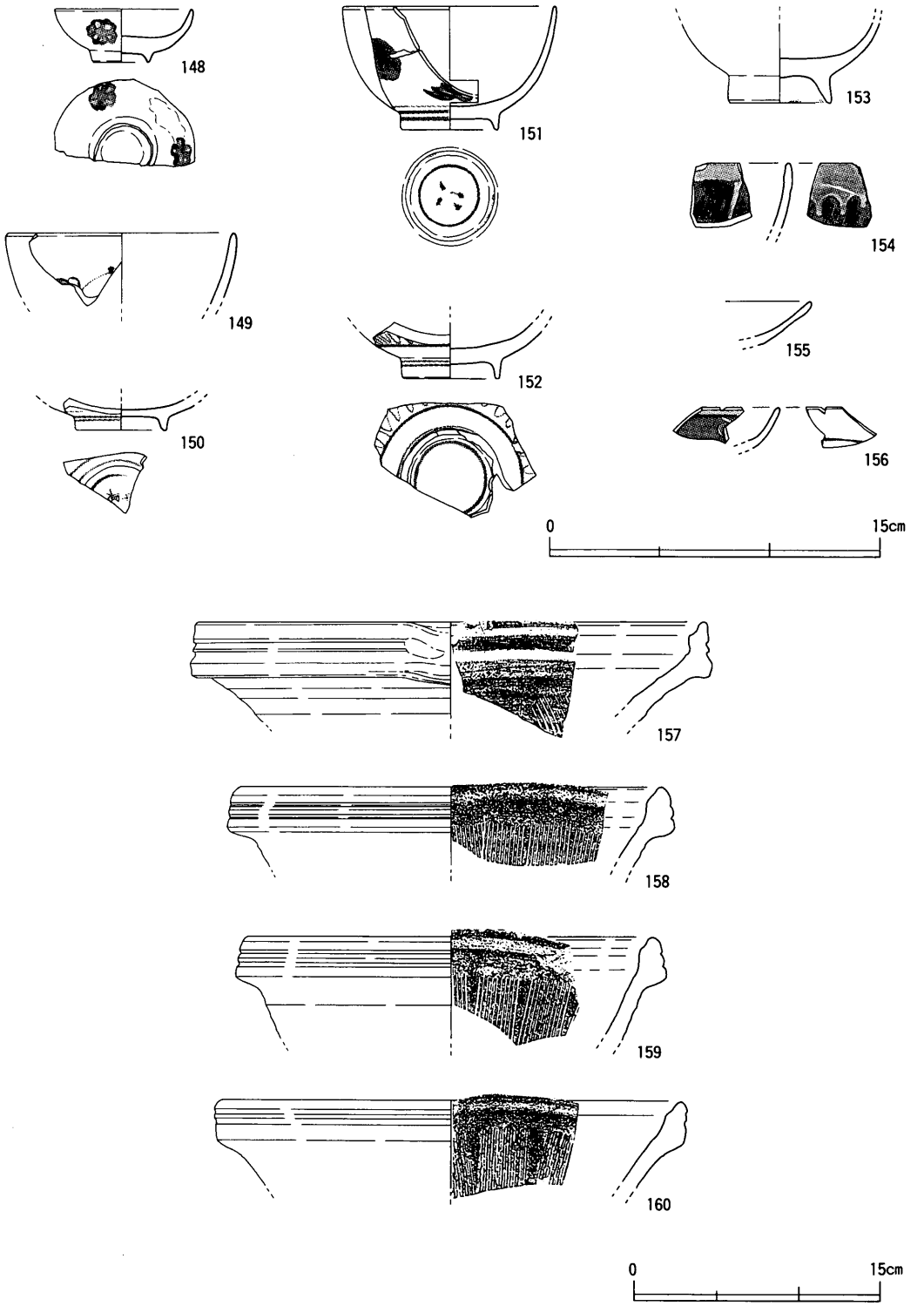


第100図　ＳＫ０６出土遺物（２）（Ｓ＝1/4）

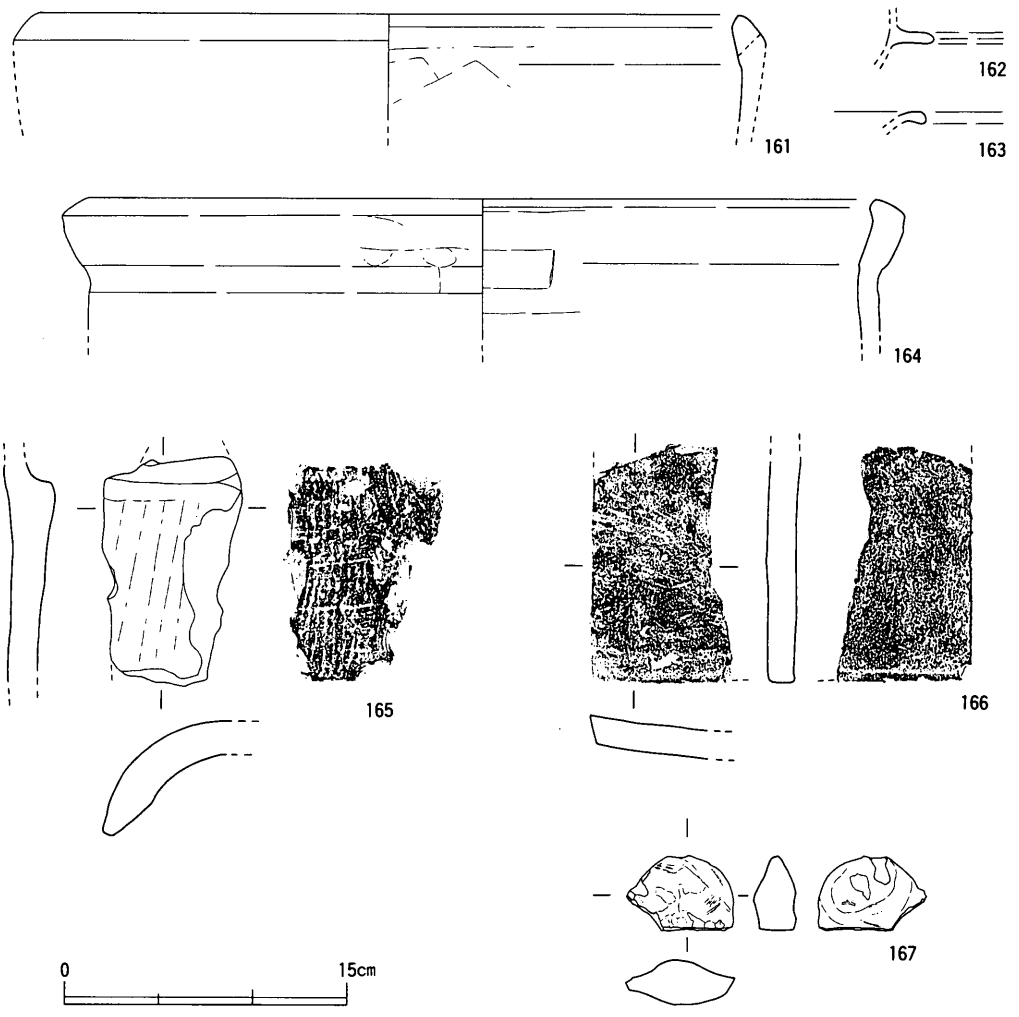
［ＳＫ０８］（第101～103図）

Ｉ区北半部で検出された土坑である。平面形態は不定形な長方形を呈する。規模は長さ2.6m，幅1.3～1.8m，深さ0.1mを測る。土坑内には多量の礫がみられ，人為的に埋め戻されたことが窺える。ＳＫ０９と同様な廃棄土坑か。

出土遺物には，磁器猪口・碗・皿，陶器碗・擂鉢，土師質土器火鉢・羽釜・焙烙・甕，丸瓦・平瓦，用途不明石製品がある。陶磁器は18世紀前葉～中葉を主体とし，一部17世紀代にまで遡るものがみられる。148～153・155・156は肥前系，157～160は備前系である。肥前系陶磁器は，体部外面にコンニャク印判を施すもの（148・151）があり，18世紀前葉～中葉の典型例である。底部外面には「大明年製」（151），「□□年製」（150）銘がみられる。また152は体部外面に一重網目文が施されており，17世紀後半にまで遡るものである。153は呉器手碗であり，やはり17世紀後葉頃にまで遡る可能性がある。備前系擂鉢（157～160）は，重ね焼きの痕跡や田土とみられる胎土，また中性焔～酸化焔気味の焼成状態からみて，全て備前窯の製品と考えられる。158～160は18世紀代の所産とみられるが，157は16世紀後半～17世紀代であろう。在地産とみられる土師質土器（161～164）は細片



第101図　ＳＫ０８出土遺物（１）（陶磁器碗Ｓ＝1/3，他はＳ＝1/4）

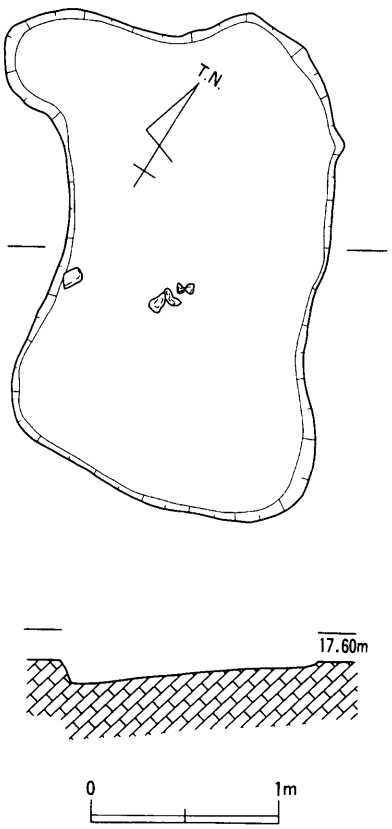


第102図　ＳＫ０８出土遺物（２）（Ｓ＝1/4）

が多い。甕（164）は直立する体部から内弯気味に外傾する口縁部が伸びる。ＳＫ５８の埋め甕（393）に比べて口縁部は肥厚化していない。

［ＳＫ０９］（第104～122図・図版６）

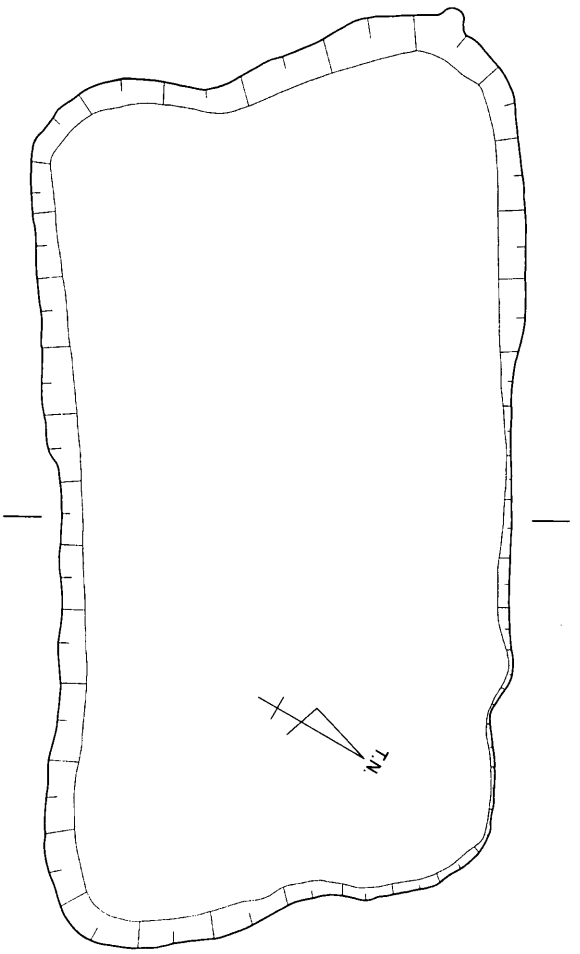
Ｉ区北半部で検出された大型の土坑である。平面形態はやや歪な長方形を呈しており，周辺の地割と平行した主軸方位（Ｎ－60°－Ｅ）をもつ。規模は長さ5.6m，幅3.0m，深さ0.25mを測る。土坑内の埋土は２層みられるが，上層の礫層が厚く，下層の層厚は薄い。



第103図　ＳＫ０８平・断面図（Ｓ＝1/40）

遺物は上層で多く検出されており，廃棄土坑と考えられる。

出土した遺物は，28ℓ入りコンテナで６箱分にのぼる。多量の土器・陶磁器とともに，瓦もまとまってみられる点が大きな特徴である。器種別の製作地であるが，碗・皿・瓶は肥前系磁器が圧倒的に多く，その他はごく少量の在地産の土器皿がみられるのに過ぎない。また鉢も肥前系陶器が圧倒的に多く，少量の在地産土器がみられる。擂鉢は備前系陶器と少量の在地産土器で構成される。火鉢・焜炉・羽釜・焙烙・甕は，ほぼ完全に在地産土器で賄われているが，ごく少量の搬入品も含め複数の生産地製品が存在するようである。



第104図　ＳＫ０９平・断面図（Ｓ＝1/50）

以下，各器種の特徴について記述しておく。なお，後述するようにＩ区北半部包含層の遺物もＳＫ０９付近から集中的に出土しており，本来ＳＫ０９に廃棄されたものが耕地化の際に攪拌されたとみられる。このため，焼物の組成については包含層の遺物と併せて評価すべきであろう。

磁器蓋（168・169）　口縁部に口受けがある，蓋物の蓋である。ともに肥前系で外面に草花が描かれる。

磁器碗（170～179）　大半が肥前系である。170は口縁部が外反する端反形を呈する小杯である。中碗では，器壁が全体に薄手で精緻な作りの一群（171・172）と，体部下半から底部にかけて厚くなる一群（173～179）がある。171・172は釉薬の色調が黄灰色を呈する白磁碗であり，他の肥前系染付や白磁とは異なる。肥前系かどうか判断が難しい。173は体部外面に草花文のコンニャク印判を施す。

陶器碗（180～194）　全て肥前系である。17世紀末葉～18世紀前半に盛行する刷毛目碗（181～186）と，呉器手碗（187～193）が主体を占める。186は体部外面に白泥で五弁花文を描き，内面に打刷毛目を施す。鉄釉の色調は他の刷毛目碗とやや異なる。194は体部に白泥状の釉薬を施す。高台には削り出した痕跡がみられる。

磁器皿（195～207，212～216）　強く外傾する直線的な体部と径の小さい高台をもつ「底狭形」の一群（195～207）と，直立気味に立ち上がる体部と径の大きい高台をもつ「底中形」の一群（213～216）がある。「底狭形」は見込みに蛇ノ目釉剝ぎを施し，高台付近は露胎である。見込みに草文状のラフな描画を施すもの（195～199）と，文様を施さないもの（200～207）がある。高台は逆三角形を呈するもの（200～203）と，方形ないし逆台形を呈するもの（204～207）の２者みられる。また「底中形」は見込みと体部外面に文様を施し，高台にも施釉する。214と215は全く同じ形態・文様構成をもち，さらにＩ区北半部包含層中にも同様な事例（610～612）を認めることができるが，残存度や文様パターンからみて複数個体存在することは間違いなく，数客を揃えて使用されていた可能性が高い。214で観察される外面の唐草文は，花の部分を「w」形に簡略化して描いており，18世紀前葉～中葉の特徴をもつ。215の底部外面には「□製」銘がみられる。また212は底部中央の破片のみで全体の形状は明らかではないが，外面に「製」の崩れ銘，内面にコンニャク印判が施される。

陶器皿（208～211）　「底狭形」の磁器皿と概ね共通した形態・技法をもつものであるが，いずれも銅緑釉を用いたいわゆる「青緑釉皿」である。17世紀末葉～18世紀前半の所産で

あろう。

磁器鉢（217）　形態・技法とも「底狭形」の磁器皿と共通しており，あるいは大皿に分類されるものかもしれない。内面には草状の斜線が描かれる。肥前系。

陶器鉢（218～220）　いずれも肥前系であり，見込みには砂目（砂・胎土目か）がみられる。218は刷毛目鉢である。内面に白泥による轆轤刷毛目が施される。219は外面に鉄釉が薄く施される。220はいわゆる「三島手」の鉢である。内面に剣先蓮弁文を陰刻し，陰刻部分に白化粧土を粗く充填する。

陶器擂鉢（221～231）　全て備前系である。生産地の特定は必ずしも容易ではないが，確実に堺産とみられるものはないようである。それは，①堺産擂鉢は口縁部内面を回転ナデ調整して卸し目上端をナデ消すことが多いが，そのような調整手法がみられないこと，②体部外面にヘラ削りを施す堺産に特徴的といわれる手法をもつもの（224・229）があるが，224は火だすきが認められ備前窯的な窯詰め方法が行われたことがわかること，③口縁部内面に堺産に特徴的な突帯をもつものがなく，総じて断面三角形状を呈する，などの理由による。焼成状態にかなりのばらつきがあるが，備前系擂鉢に関する現在までの知見を踏まえると，221～231は備前窯の製品である可能性が高いといえよう。なお230は使用によって卸し目が摩滅している。

磁器瓶（232～234）　いずれも肥前系である。文様は轆轤回転を利用した簡単な線がみられる程度であり，装飾性に乏しい。

土師質小皿（235・236）　底部に回転糸切り痕がみられ，薄手に挽き出されたものである。236は円盤状高台的な底部をもつ。

土師質鉢（237・238）　内面に卸し目を施さない鉢類である。237は内面に使用痕とみられる横方向の擦痕が遺存するため，擂鉢と同様な機能を果たしたのかもしれない。両者ともに胎土中には金雲母を含む特徴的なものである。

土師質擂鉢（239～241）　239は外傾する体部から内弯気味に立ち上がる口縁部をもち，形態的に口縁の内弯がより顕著な中世後期の土師質擂鉢の系譜を引くものと考えられる。卸し目は4本を1単位としたものをやや疎らに弱く施す。外面に煤の付着が認められることから，火にかけられたことがわかる。煤の付着した土師質擂鉢はI区北半部包含層の遺物（638）にもみられ，特徴的な使用形態が存在したことを窺わせる。なお，241は土師質としてはやや硬質な焼成を呈しており，あたかも軟質陶器のような印象を受ける。これと同様な焼成は土師質甕（280・493）でも認められ，特定の生産地で製作された製品として

捉えることができよう。また，239の胎土中には金雲母が含まれ，土師質鉢や土師質焜炉と共通する。

瓦質火鉢（242～246）　通常の鉢類と同じく平面円形の桶形を呈するもの（242～244）と，四隅をもつ箱形を呈するもの（245・246）がある。形態的な多様さにかかわらず，内面調整が粗く外面調整が丁寧な点で技法的な共通点が看取できる。また胎土はやや粗く，同時期の瓦に近い。242・244は縁帯状に外反する口縁部をもつ。243は口縁部に環状の把手が付される。245・246は四隅に格狭間形の脚部を付す。

土師質焜炉（247～258）　直立する体部と内弯して肥厚する口縁部からなる。瓦質火鉢に比べてかなり形態的なまとまりが強い一群である。257・258のように体部に開口部（焚口）をもち，その付近に煤が付着するものがあることから，大半は厨房具としての焜炉であるとみられるが，観音寺市一の谷遺跡群の三脚を伴う火鉢の存在を考慮すると，一部には暖房具としての火鉢が含まれる可能性がある。なお，口縁部形態の細かなバリエーションをみると，①口縁部が長く内弯し，外傾する端面をもつもの（247・249・250）と，②口縁部が短く内弯し，内傾もしくは水平に延びる端面をもつもの（251～258）に分けられよう。調整手法も外面に縦方向の板ナデ，内面に横方向の板ナデもしくは細かい横ハケと画一的である。胎土は雲母を比較的多く含むものとそうでないものがあるが，基本的な素地の状況に差異は見出せず，黄白色に発色する。このため，同一生産地の粘土とみてよかろう。247は体部外面に中房径の大きな印花文が押印されている。248も同一個体もしくは同一形態の破片であろう。

土師質羽釜（259～268）　水平方向に長く伸びる鍔部をもつもので，極めて薄い器壁をもつ。胎土は微細な砂粒を少量含むが比較的緻密で，やや暗い茶褐色を呈する。明らかに土師質焜炉の一群とは異なり，後述する内耳を伴う焙烙と一致した胎土をもつ。口縁部形態には，内弯した頸部から直立気味に外反する茶釜形のもの（259・260）と，頸部からそのまま内弯して伸びるもの（261）の2者が存在する。手法的には，体部外面は指オサエの後無調整のものが多く，頸部より上は鍔部貼り付け後に横ナデされる。内面には全体に横ハケもしくは横方向の板ナデ調整が行われる。鍔部は下側の調整が粗雑なため，この部分で体部との境に接合痕を残すことが多い。

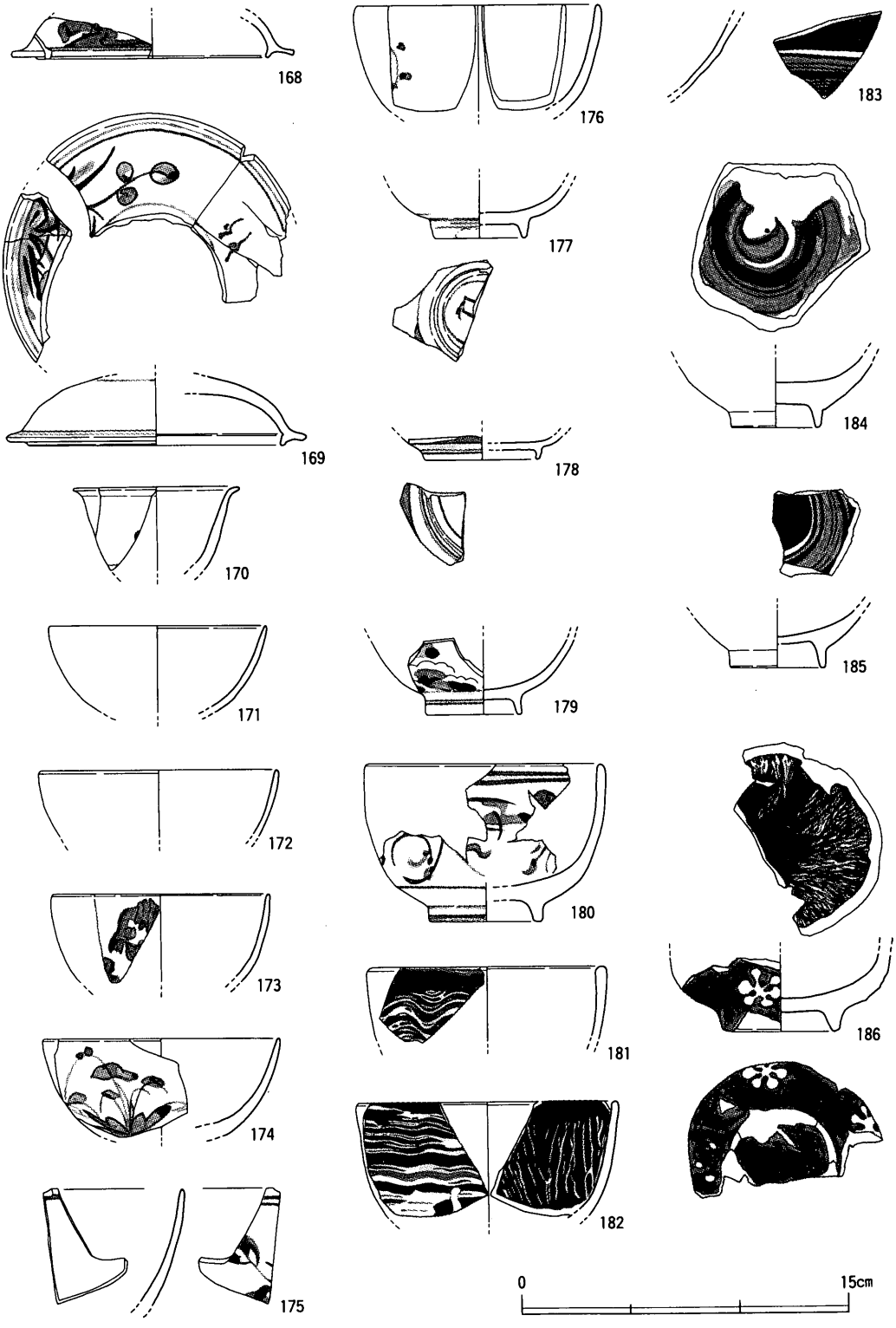
土師質焙烙（269～278）　細片が多いため，全体の形状を知る資料に乏しい。269～273はやや内弯しながら直線的に伸びる底体部と口縁部をもつものである。やや粗質な素地に金雲母が含まれ，土師質焜炉に近似した胎土をもつ。口縁端部の形態は，強い横ナデ調整

のために端面に凹面が形成されるもの（269）と，断面がやや拡張した方形を呈するもの（270・271），また太く丸い端部をもつもの（272），内外面とも強く横ナデして嘴状を呈するもの（273）とかなり多様である。274・275は底部の破片であり，外面にハケ目がみられる。胎土は内耳を伴う焙烙と同じであり，その形態の底部であろう。276～278は関西系の焙烙である。浅く丸い底部と内弯気味に直立する口縁部をもつ。底部外面には離れ砂の痕跡がみられ，また口縁部には回転ナデが施されることから，轆轤（回転台）上に据えられた外型で成形されたものであろう。278は底部と体部の境にはみ出した粘土を削り取った痕跡が看取できる。これらの焙烙は，難波洋三氏の分類によればD類に該当し，大坂付近で製作されたものとみられる。胎土はかなりきめ細かであり，他の在地産土器とは全く異質であることから，搬入品とみて間違いなかろう。

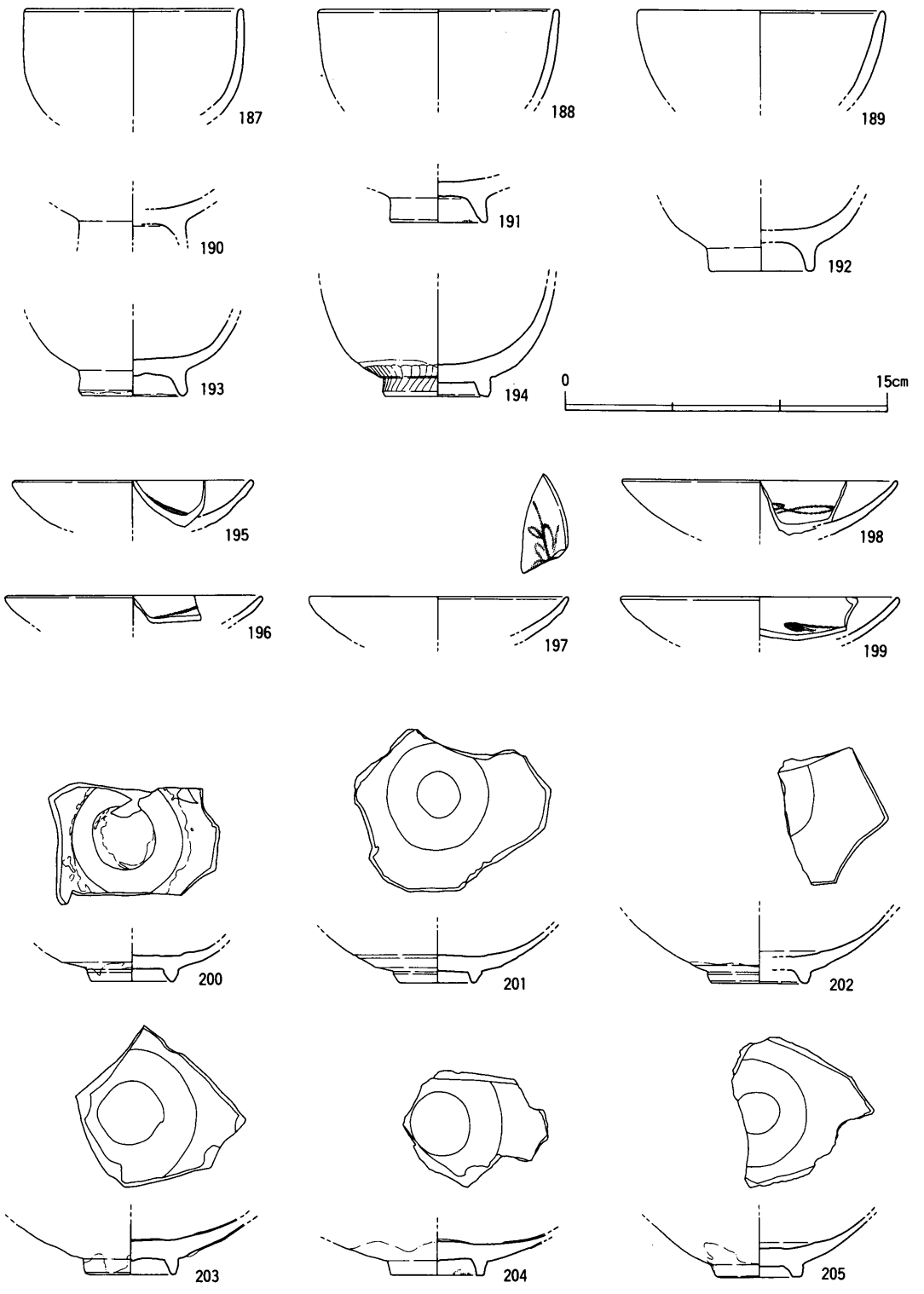
瓦質焙烙（279）　十能形を呈する把手付の焙烙である。18世紀代では瓦質焼成の焙烙は希有な存在であるが，高松市空港跡地遺跡II－20区でも同様な形態を呈する瓦質焙烙が出土している。胎土は先述した瓦質火鉢の一群に近く，これらと同一生産地で製作された可能性がある。

土師質甕（280～289）　280は直立する口縁部を肥厚させ，また外面に強い横ナデ調整を施して段をもった縁帯状に作出している。形態的に備前焼甕との近縁性が看取できよう。焼成は硬質であり，先述した土師質擂鉢（241）と共通する。281も口縁部外面に横ナデによる段がみられるが，全体に断面矩形に肥厚しており，280とは細部形態を異にする。282は短く立ち上がる口縁部と肩のよく張った体部をもち，器種としてはむしろ壺に分類した方がよいかもしれない。接合痕を各所に残しており，やや粗い作巧である。283・284は甕体部であり，外面に波状文を施すものである。波状文を観察すると，いずれも回転を利用して施文されていることから，回転台上での製作工程が想定できる。283は胎土に金雲母を含み，土師質焜炉と共通する。なお，県内の現存生産地では岡本（三豊郡豊中町）の土師質甕に波状文がしばしばみられる。285は丸く突出した底部をもつ。底部外面は平滑であり，また外縁端に粘土の「へたり」を削り取った跡がみられることから，底部を型状の作業台に載せて体部より上の製作を行ったことが考えられる。286も甕底部であるが，脚部を接合した痕跡がみられる。脚部の形態は，287～289にみられるようなものであろう。285～289はいずれも胎土中に金雲母を含む。

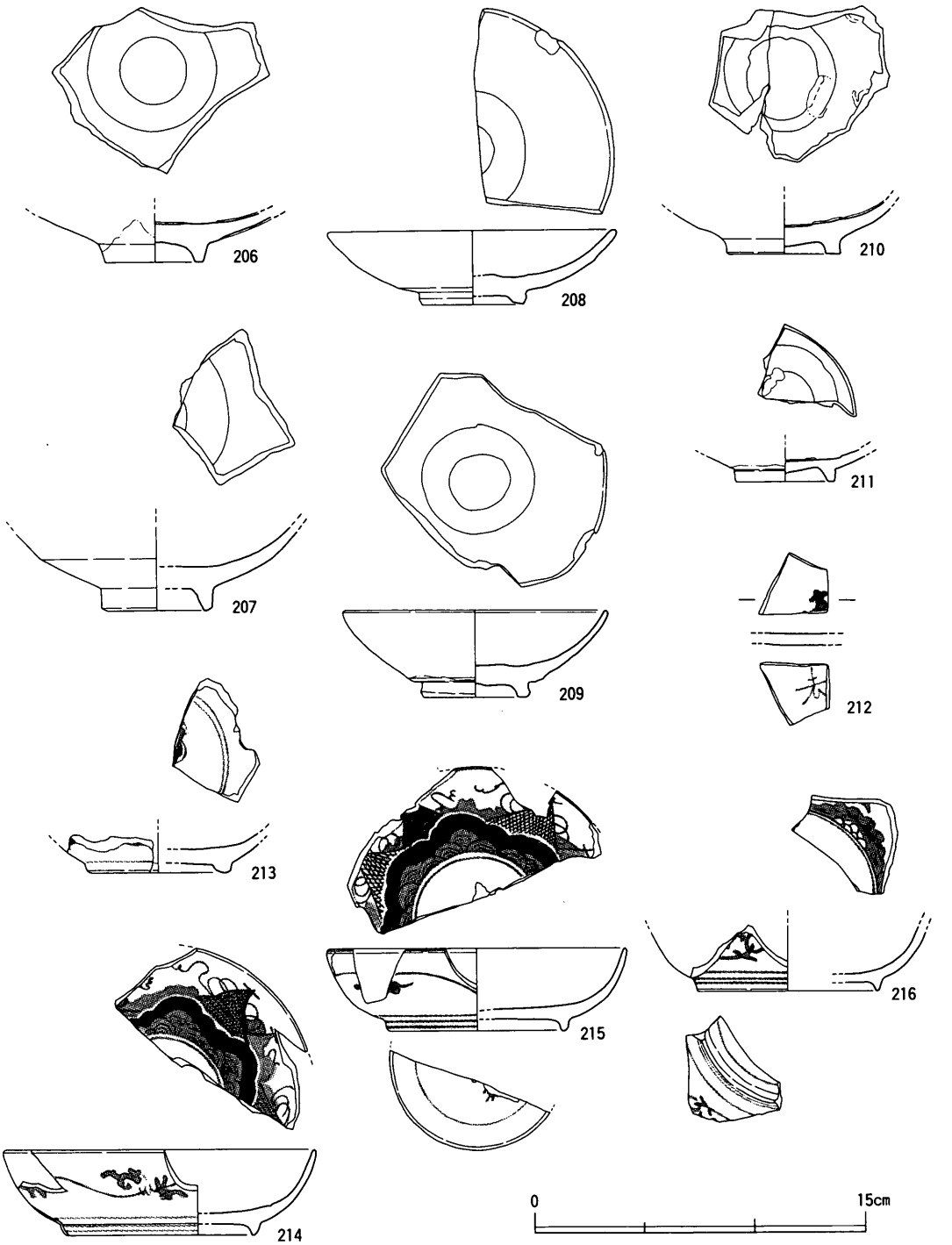
軒丸瓦（290～294）　290は小菊瓦である。瓦当に八葉の菊花文がみられる。291～294は珠文をもつ巴文瓦であるが，細片のために後述する文様のどれに対応するかは明らかで



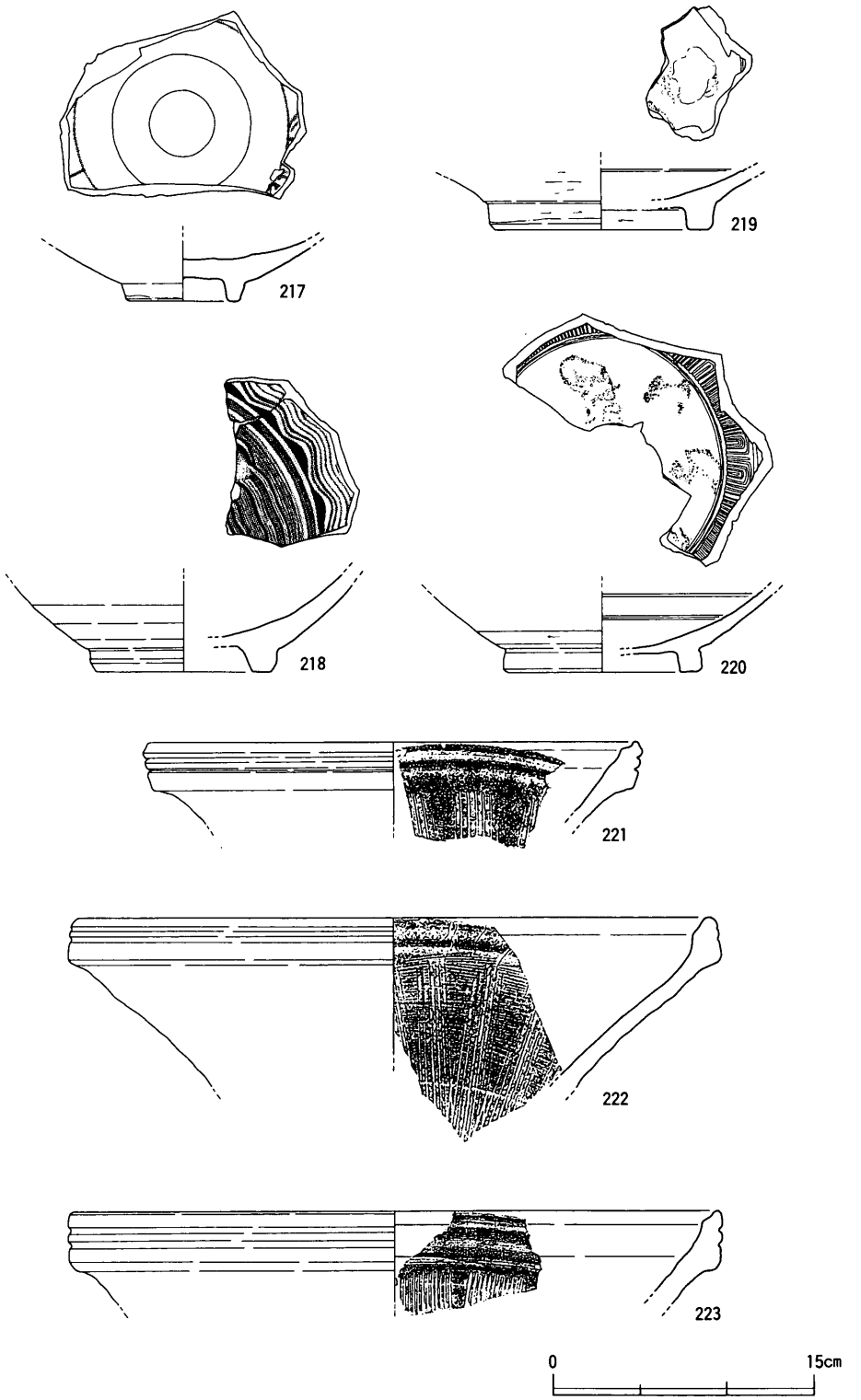
第105図　ＳＫ０９出土遺物（１）（Ｓ＝1/3）



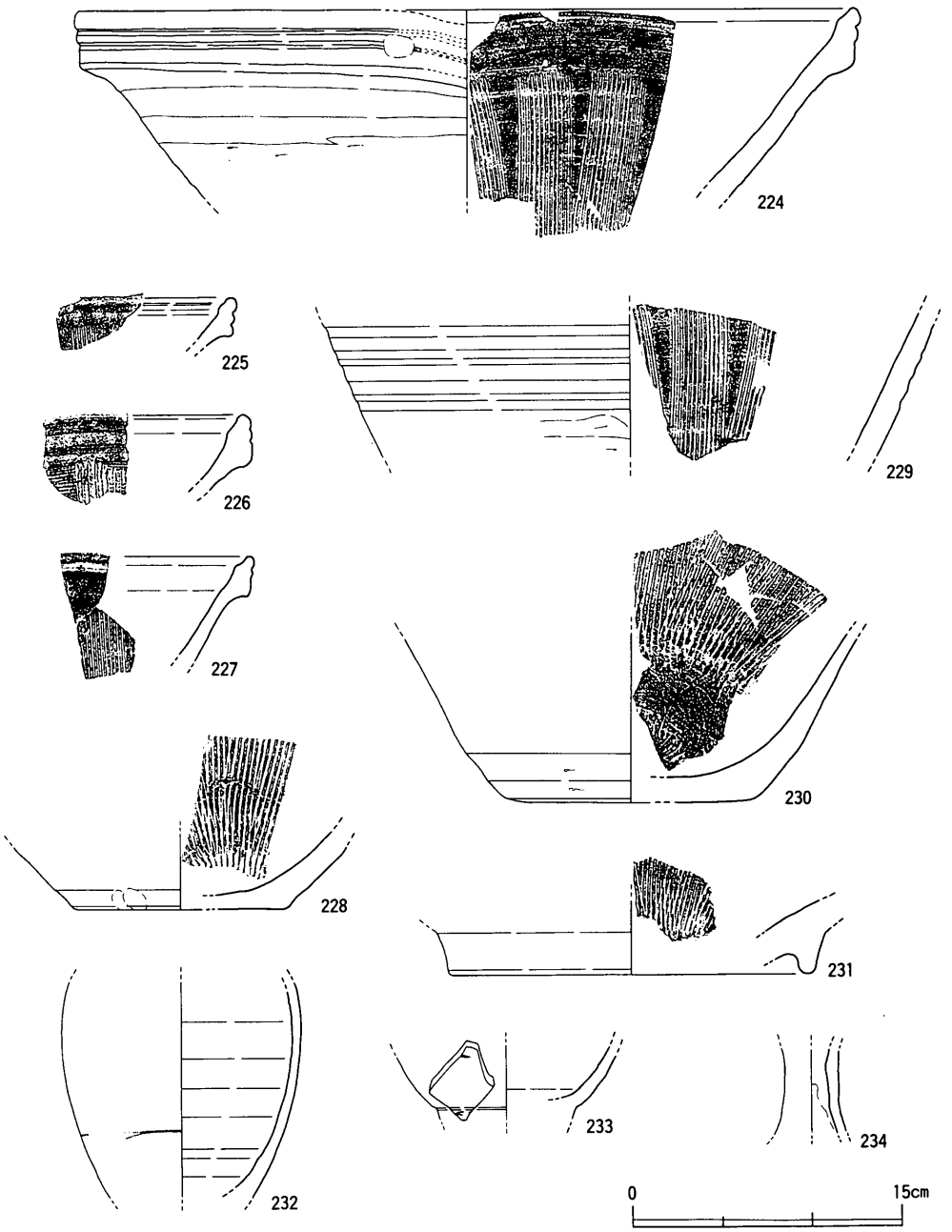
第106図　ＳＫ０９出土遺物（２）（Ｓ＝1/3）



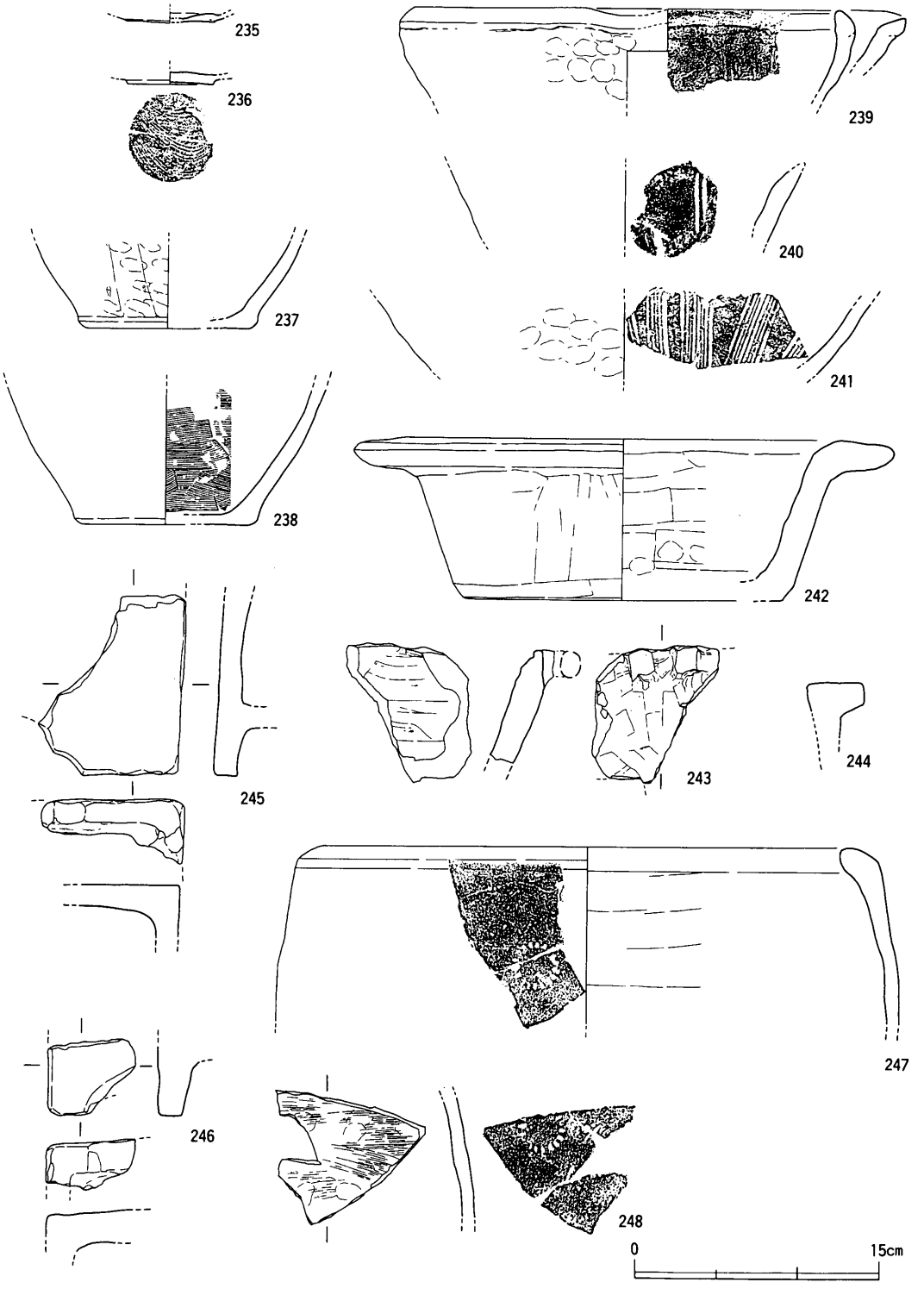
第107図　ＳＫ０９出土遺物（３）（Ｓ＝1/3）



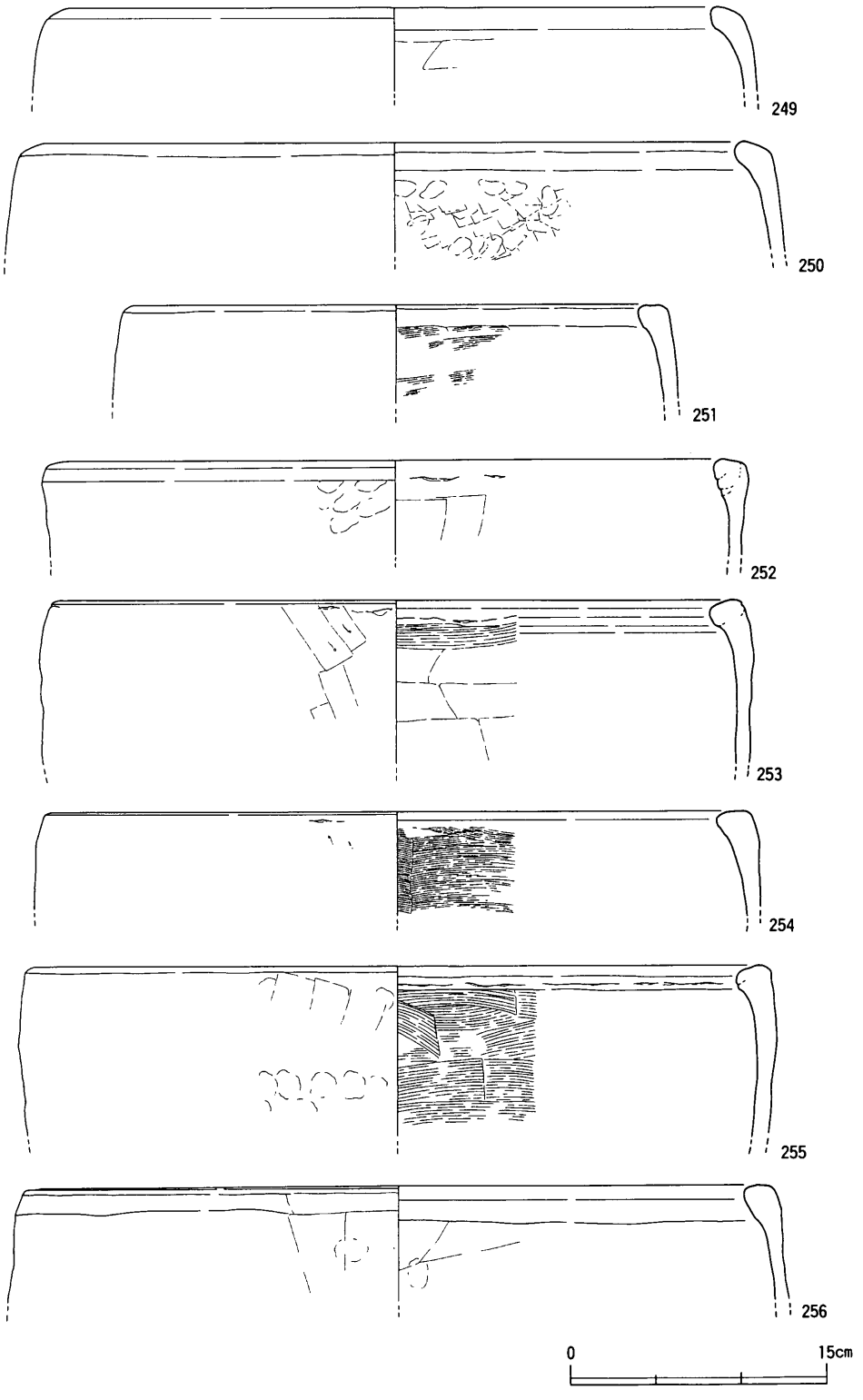
第108図　ＳＫ０９出土遺物（４）（Ｓ＝1/4）



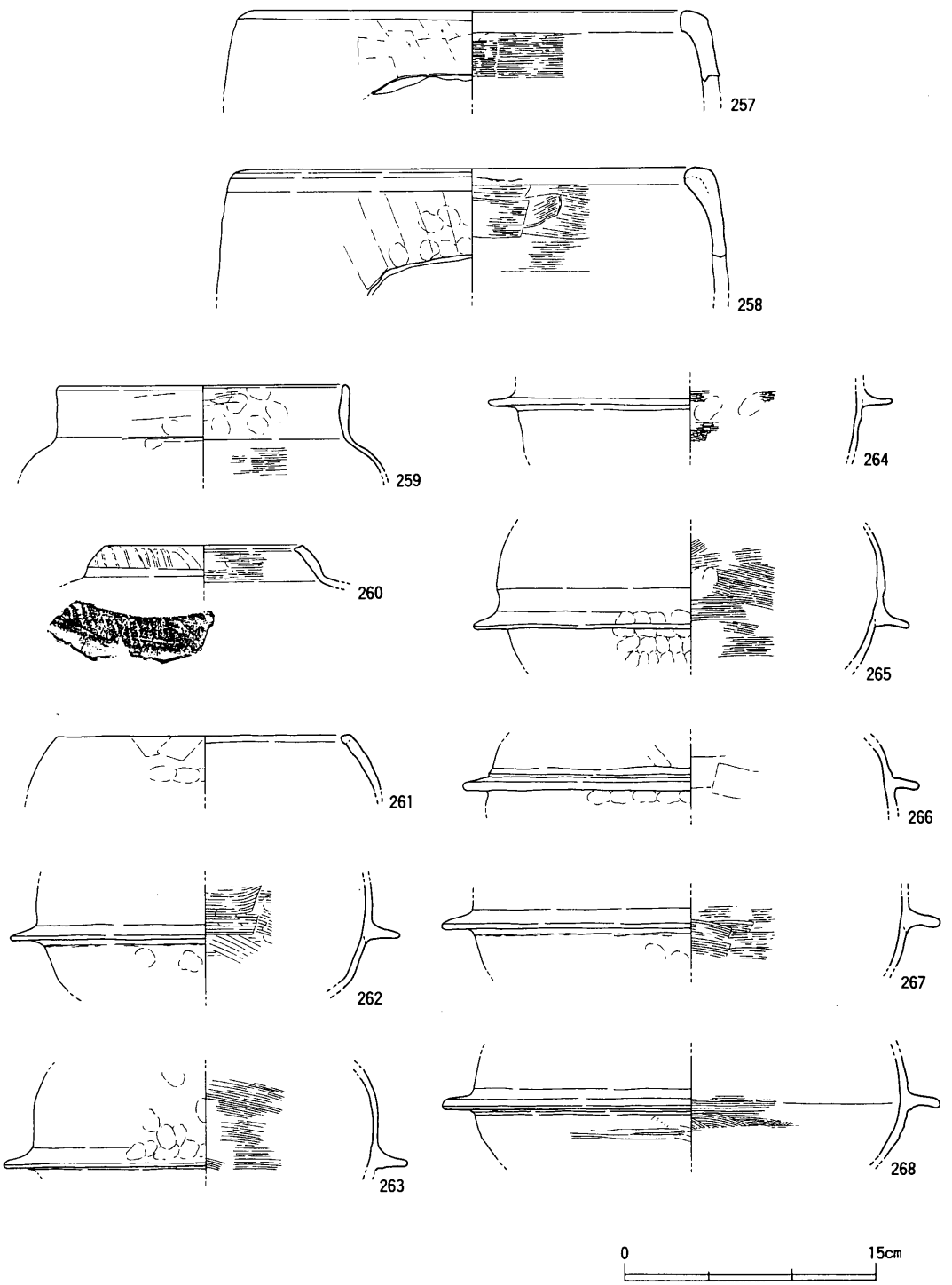
第109図　ＳＫ０９出土遺物（５）（Ｓ＝1/4）



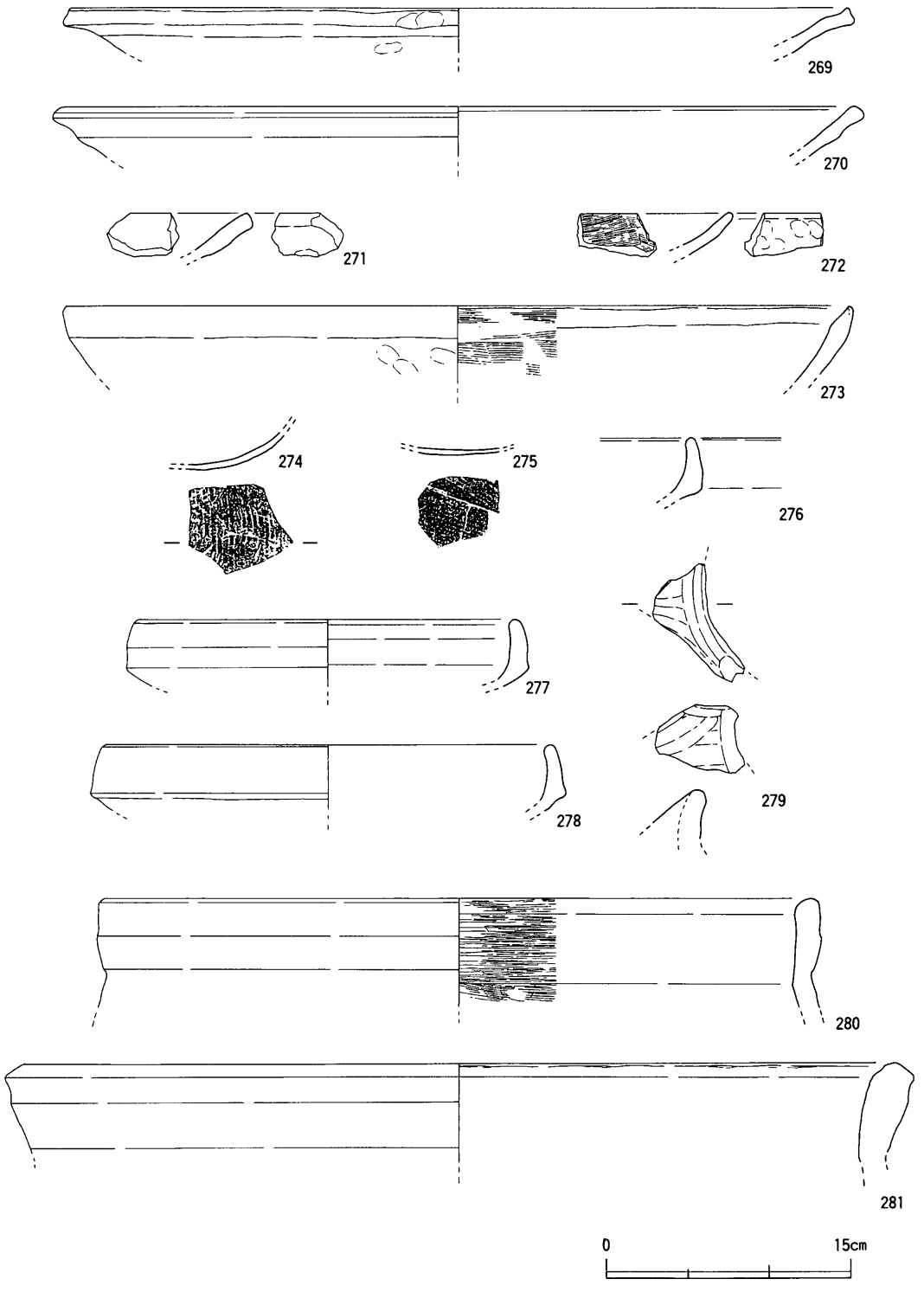
第110図　ＳＫ０９出土遺物（６）（Ｓ＝1/4）



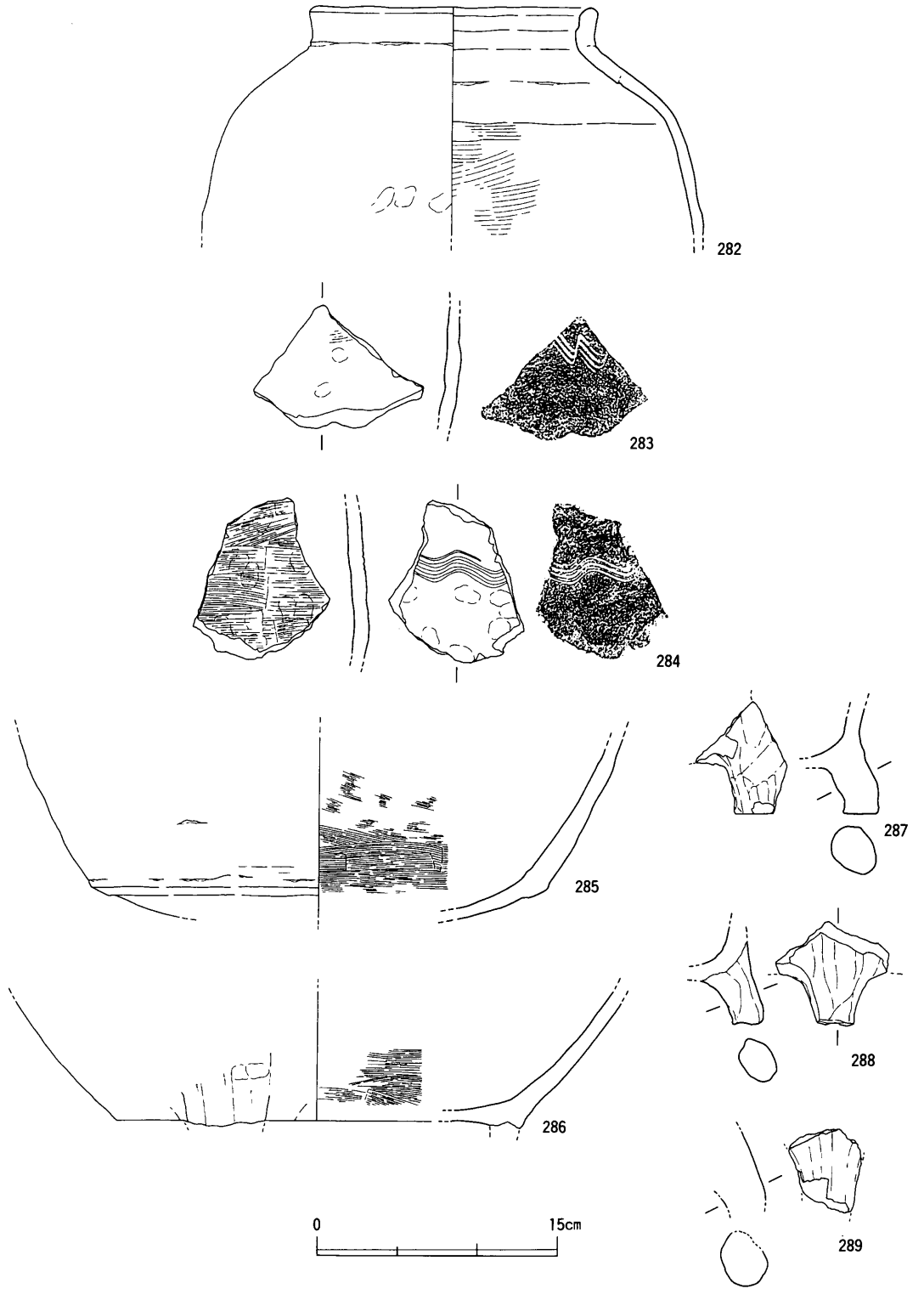
第111図　ＳＫ０９出土遺物（７）（Ｓ＝1/4）



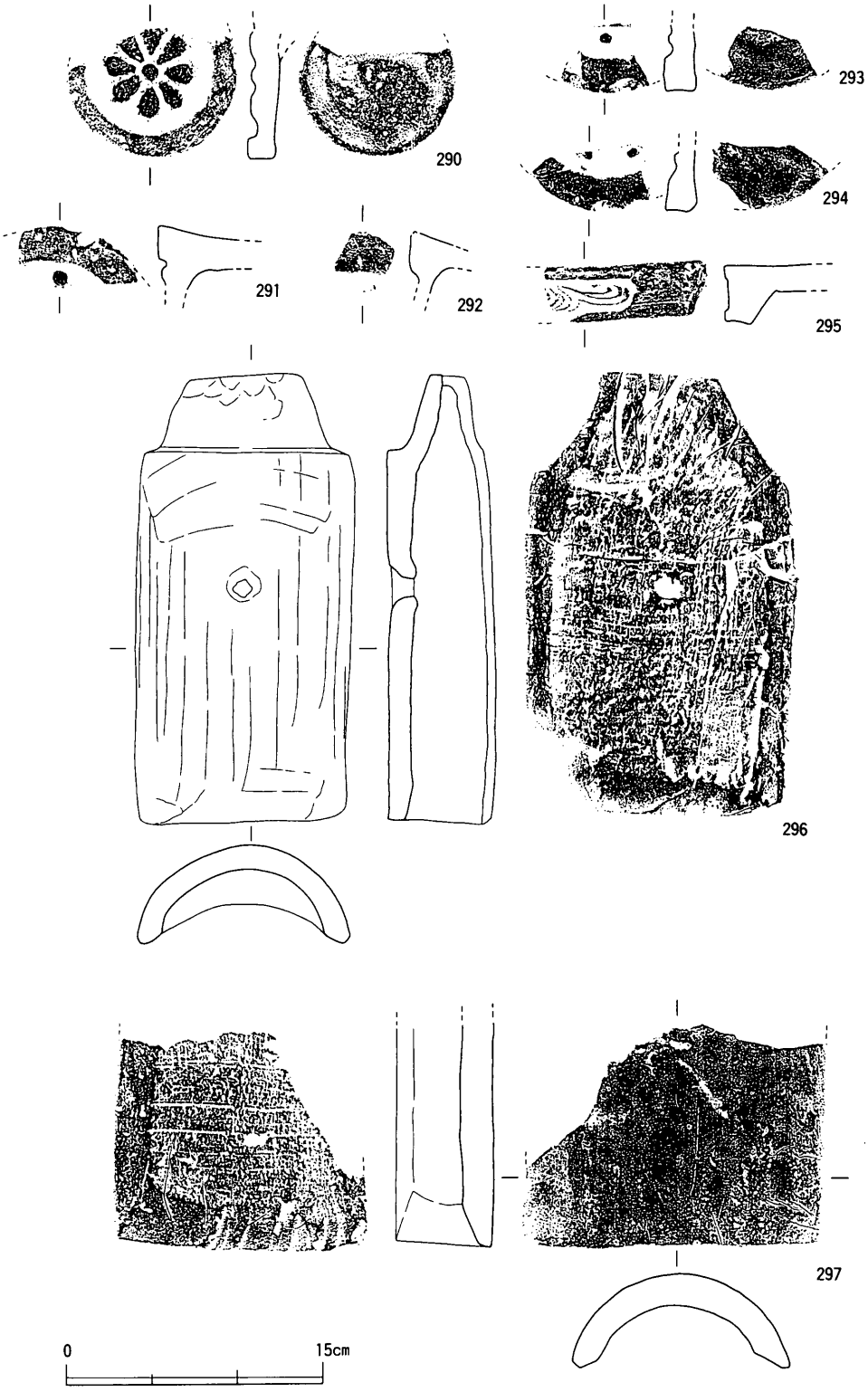
第112図　ＳＫ０９出土遺物（８）（Ｓ＝1/4）



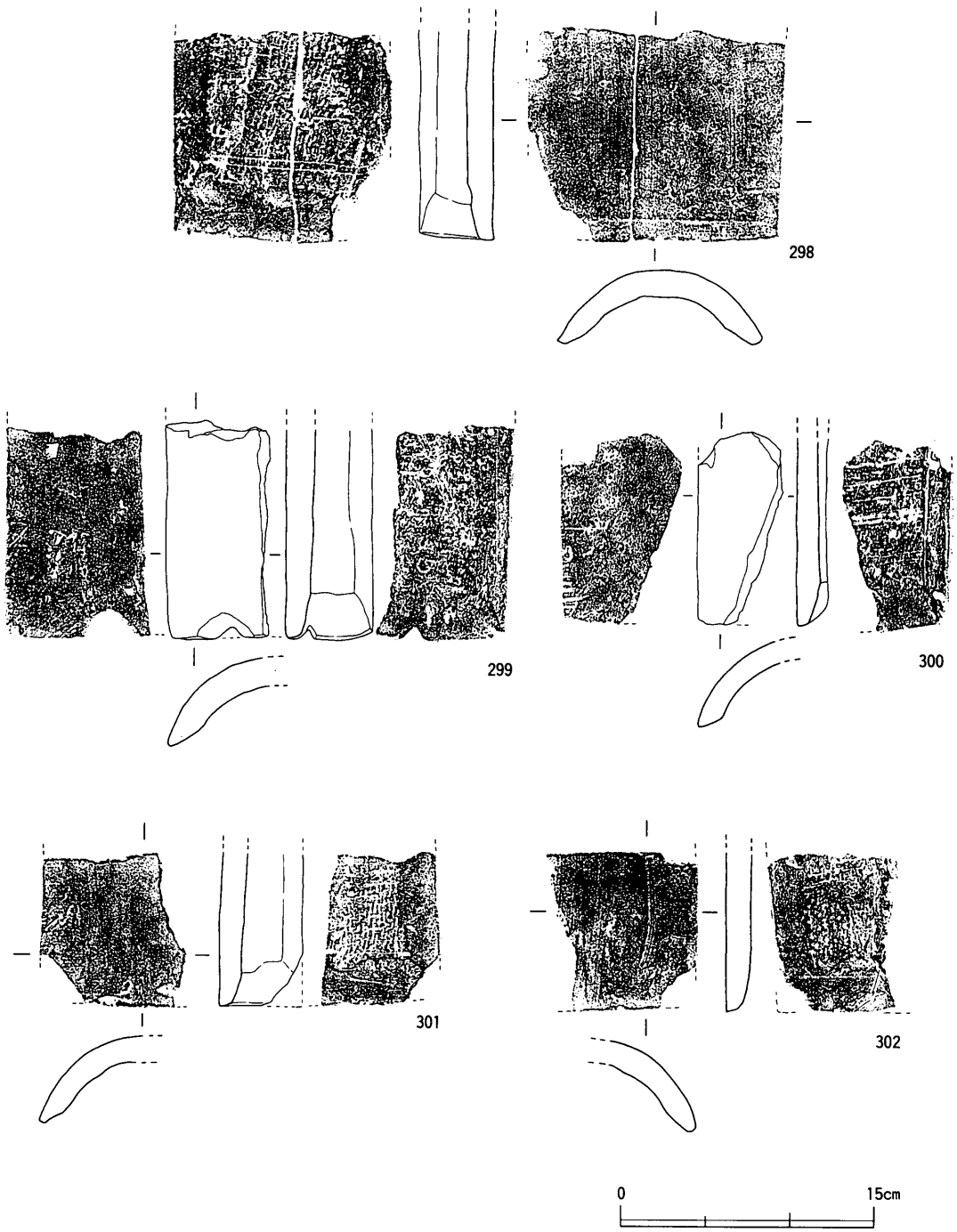
第113図　ＳＫ０９出土遺物（９）（Ｓ＝1/4）



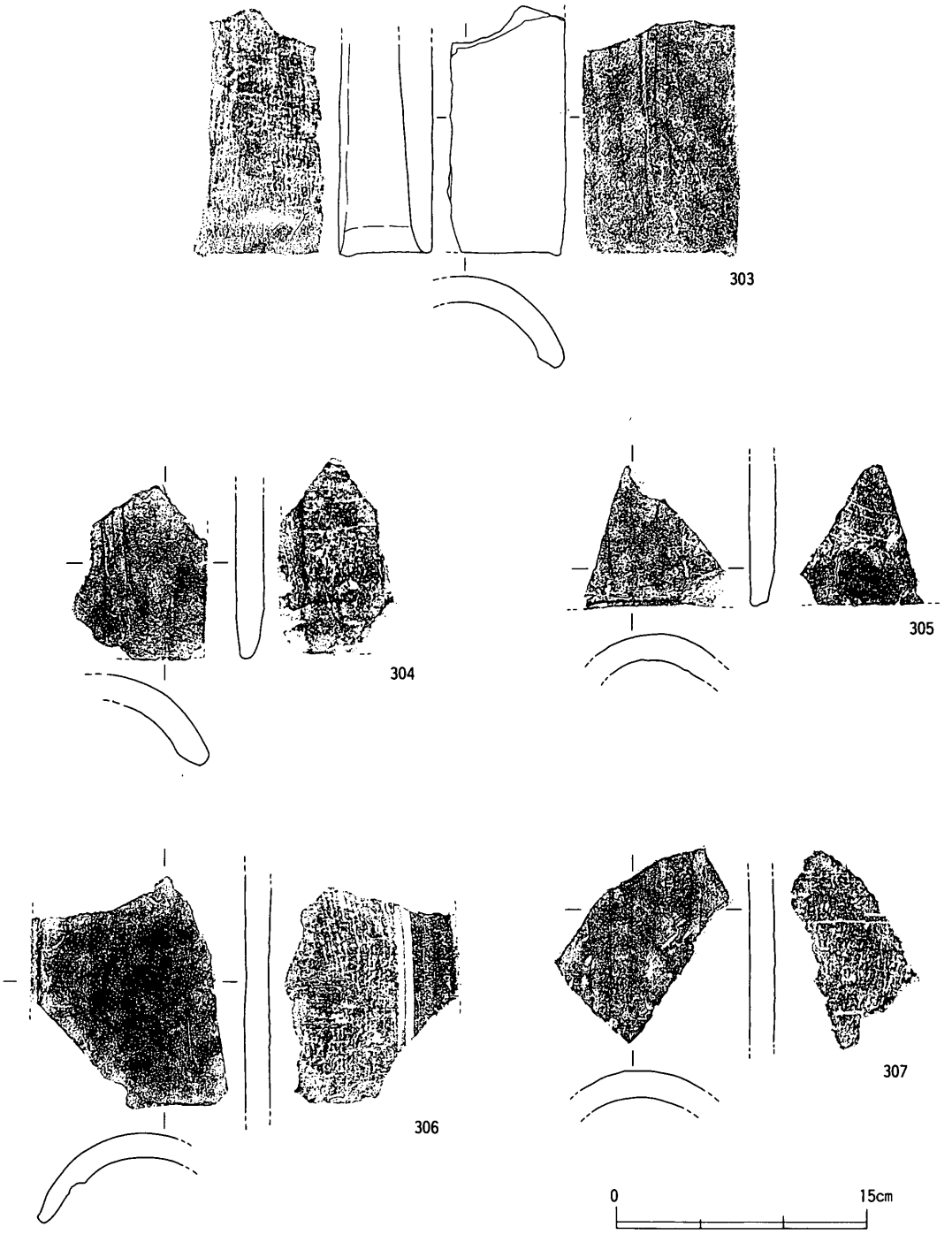
第114図　ＳＫ０９出土遺物（10）（Ｓ＝1/4）



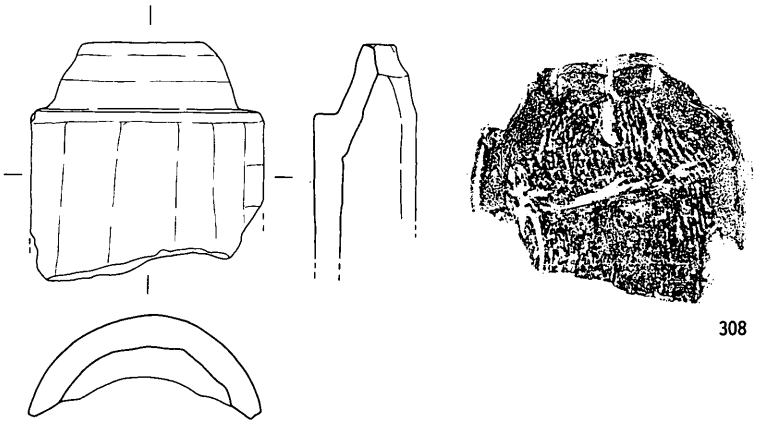
第115図　ＳＫ０９出土遺物（11）（Ｓ＝1/4）

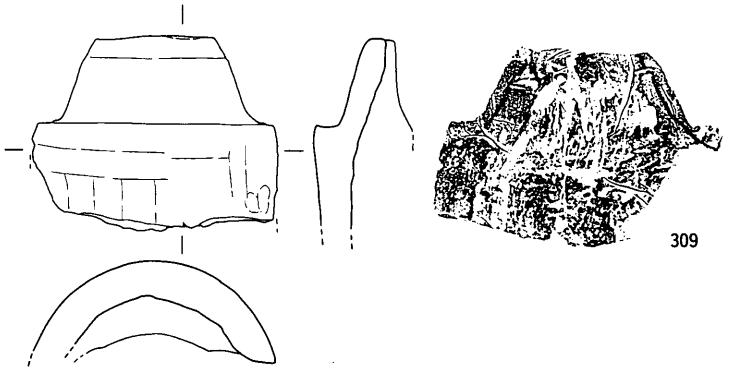


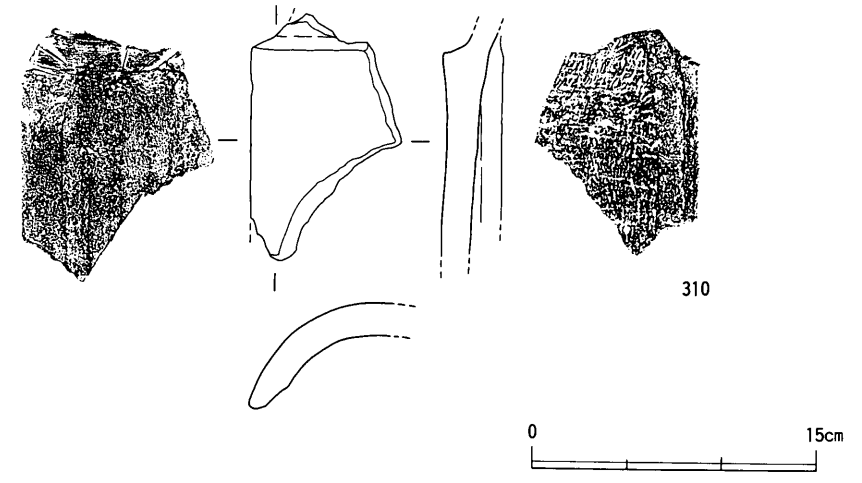
第116図　ＳＫ０９出土遺物（12）（Ｓ＝1/4）



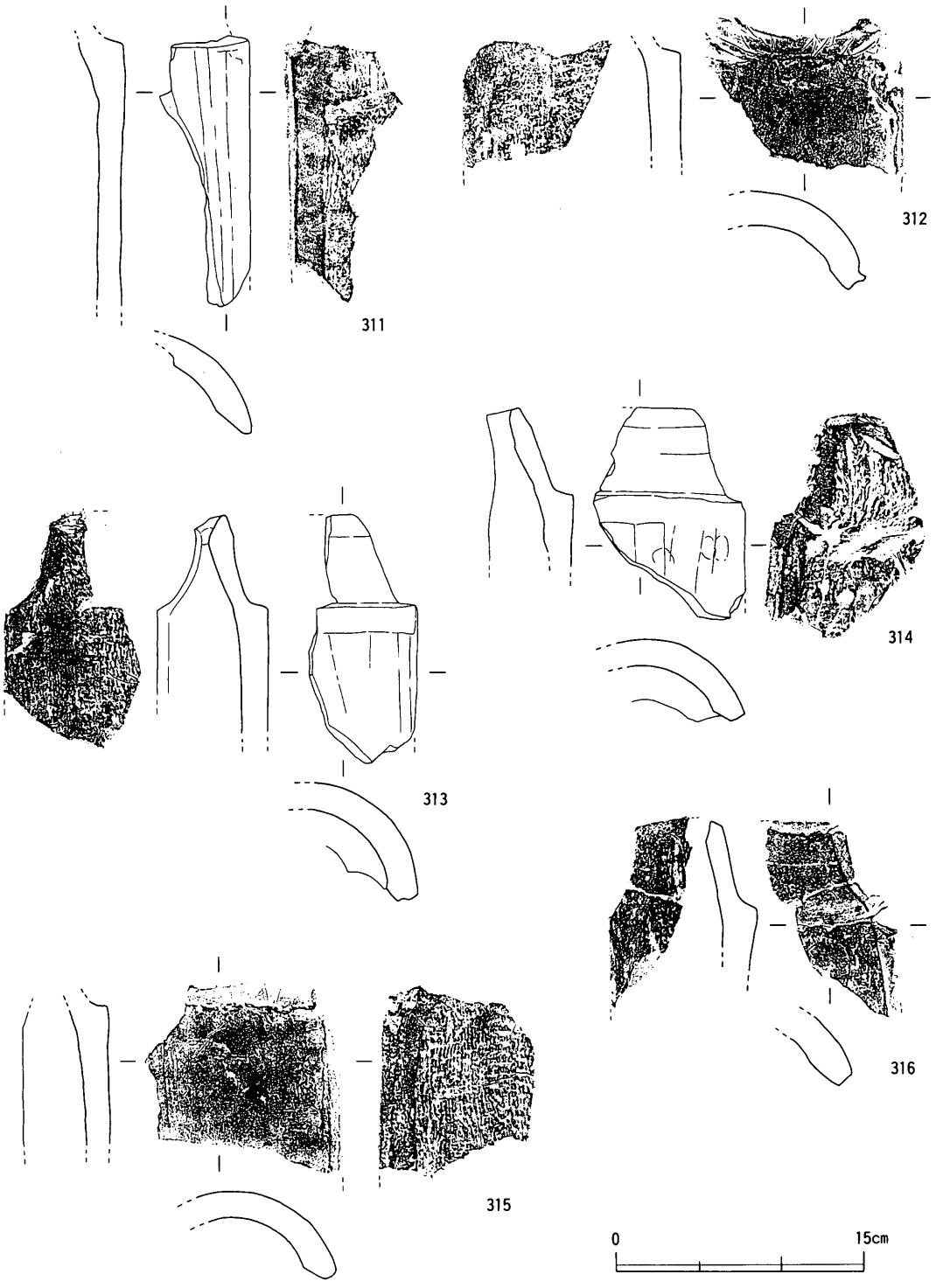
第117図　ＳＫ０９出土遺物（13）（Ｓ＝1/4）



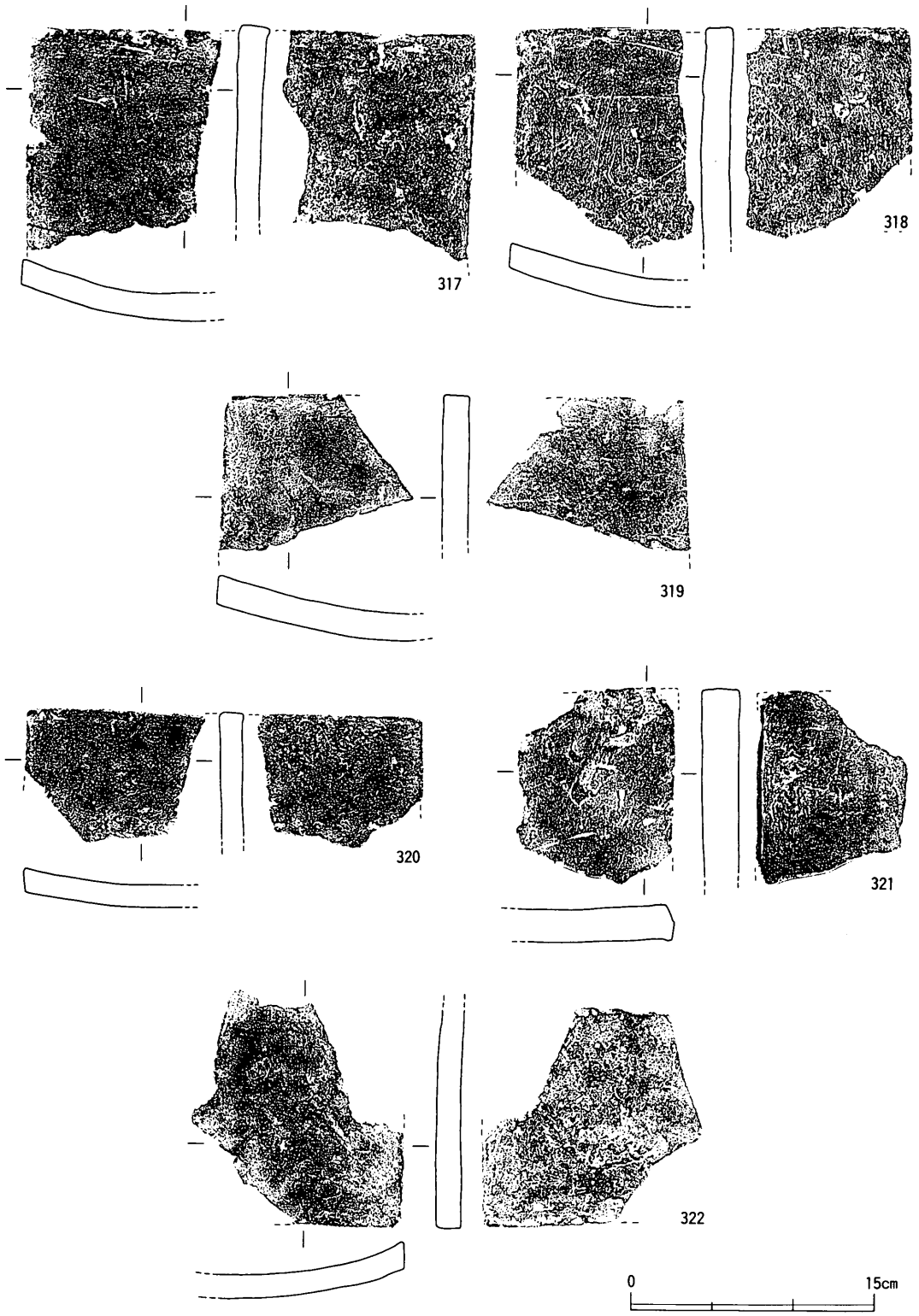




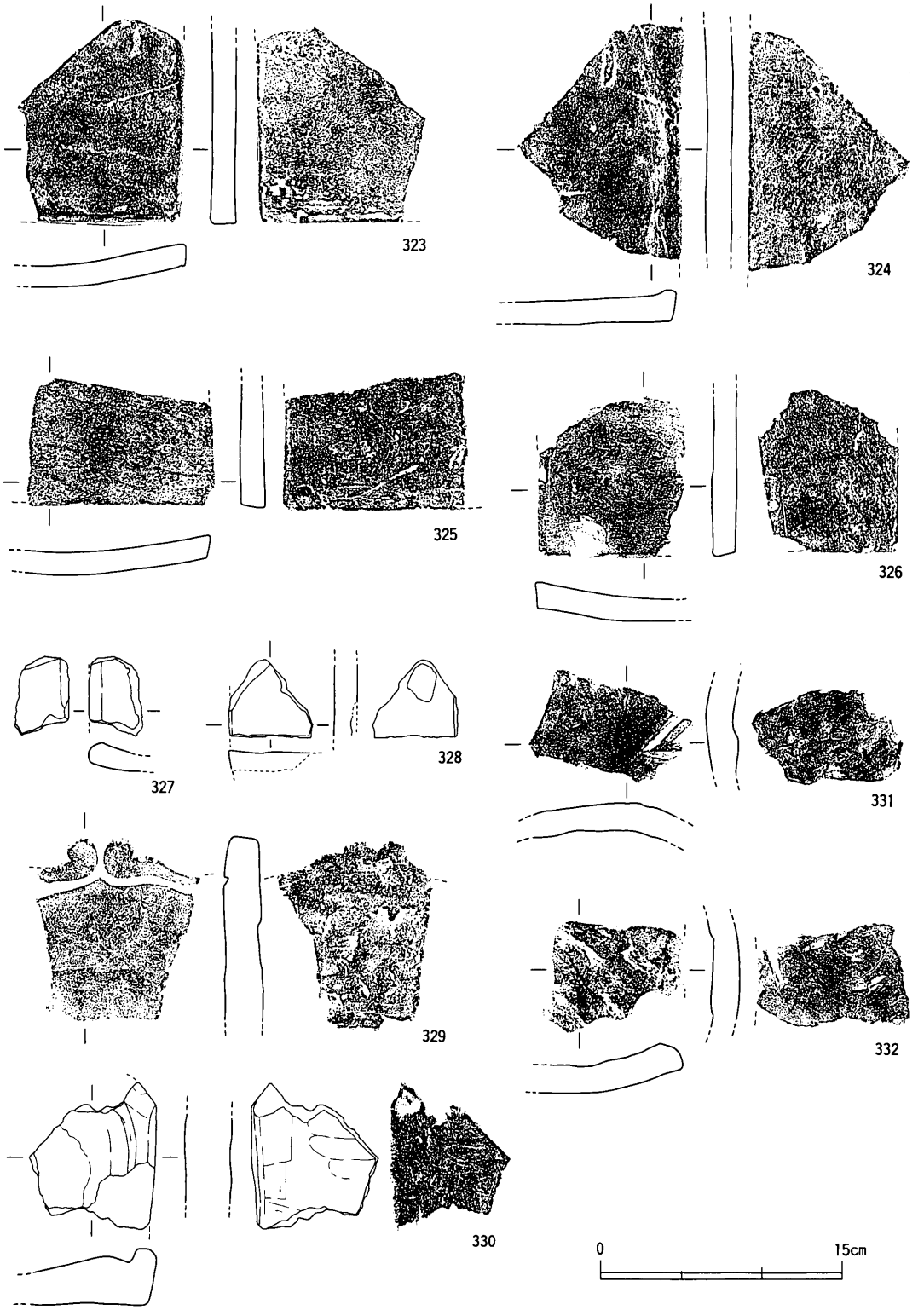
第118図　ＳＫ０９出土遺物（14）（Ｓ＝1/4）



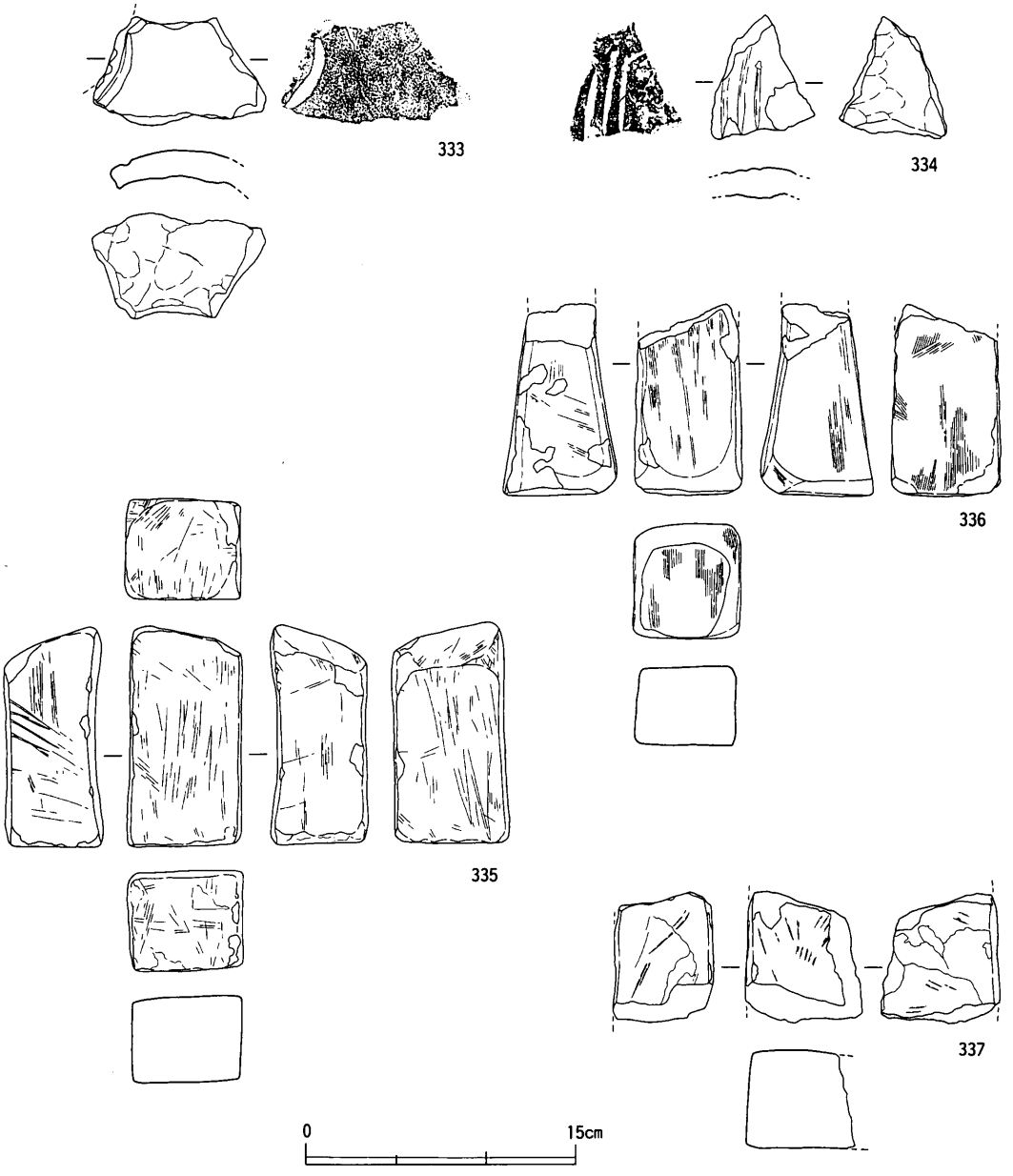
第119図　ＳＫ０９出土遺物（15）（Ｓ＝1/4）



第120図　ＳＫ０９出土遺物（16）（Ｓ＝1/4）



第121図　ＳＫ０９出土遺物（17）（Ｓ＝1/4）



第122図　ＳＫ０９出土遺物（18）（Ｓ＝1/4）

はない。

軒平瓦（295）　瓦当面の文様は中心飾りから３本の線が出ており流水状に反転する。

丸瓦（296～316）　いずれも同形同大のものである。唯一の完形品である296によって大きさを示すと，全長26.0cm，体長22.0cmを測る。釘穴は１箇所穿孔される。凸面には縦方向のヘラナデが施され，その後体部前端部と後端部に横方向のナデが行われる。また凹面には布袋目と横筋がみられる。前端や玉縁，また側縁の面取りには若干のバリエーションが認められるが，顕著なものではなく，また同一製品でも両側縁の面取りの形状が若干異なるものもあり，細別する要件にまでは至らないと考える。

平瓦（317～328）　平瓦も形態・大きさ・技法が画一的である。凸面には離れ砂の痕跡がみられる。321のみ他の平瓦よりも厚手であり，また横方向の反りが弱い。

鬼瓦（329・330）　鬼瓦と考えられるものは２点のみ出土した。全体に「風」字の形態を呈している。329は刻線で周縁を表現し，330は周縁を相対的に高く表現する。330は中心付近が剝離しているため，文様は不明である。

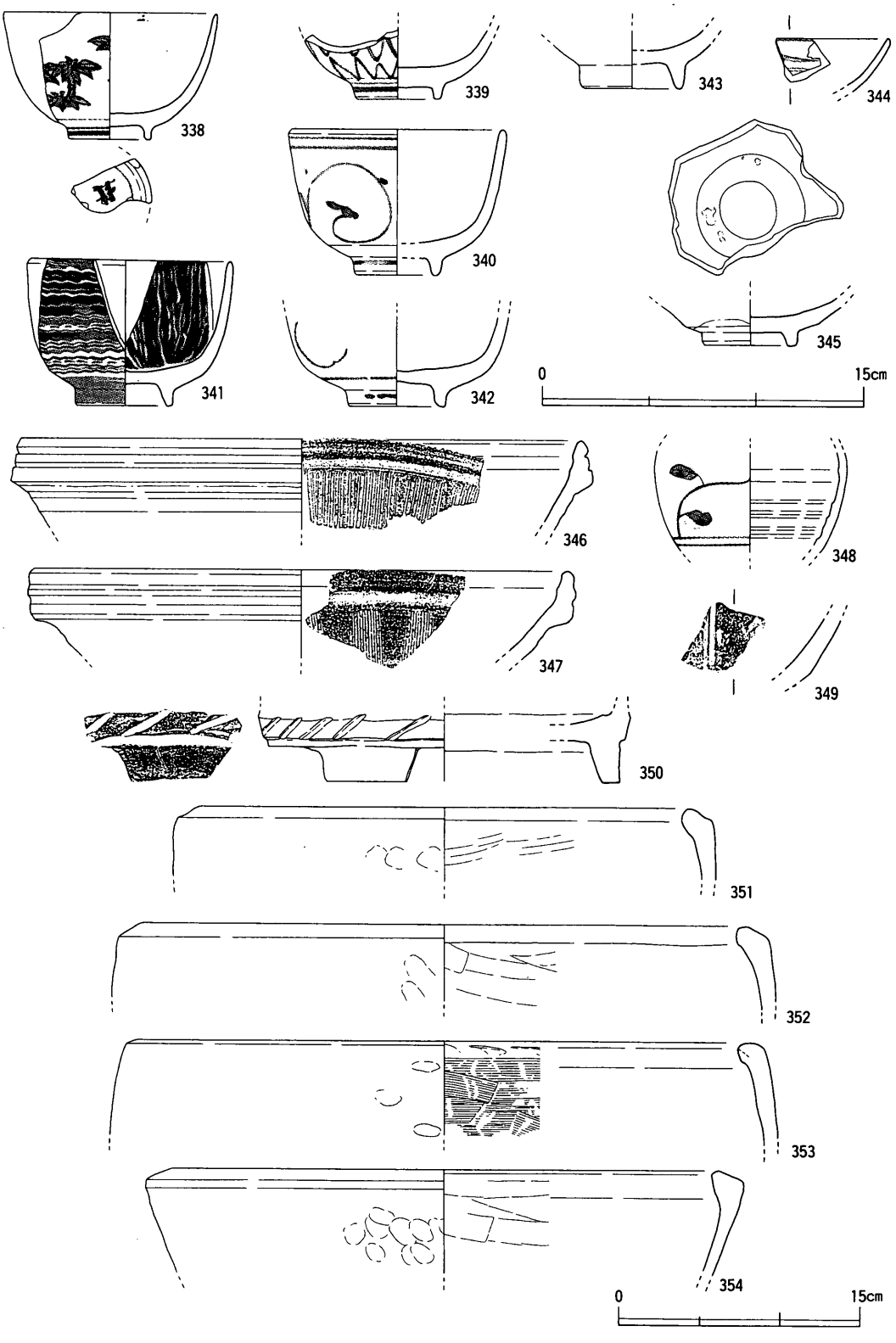
不明瓦製品（331～334）　球形状の器面をもち，ヘラ描き文を施す瓦製品である。火鉢の可能性もあるが，何らかの飾り瓦の一部である可能性も否定できない。

砥石（335～337）　白色を呈する緻密な砂岩製の砥石である。

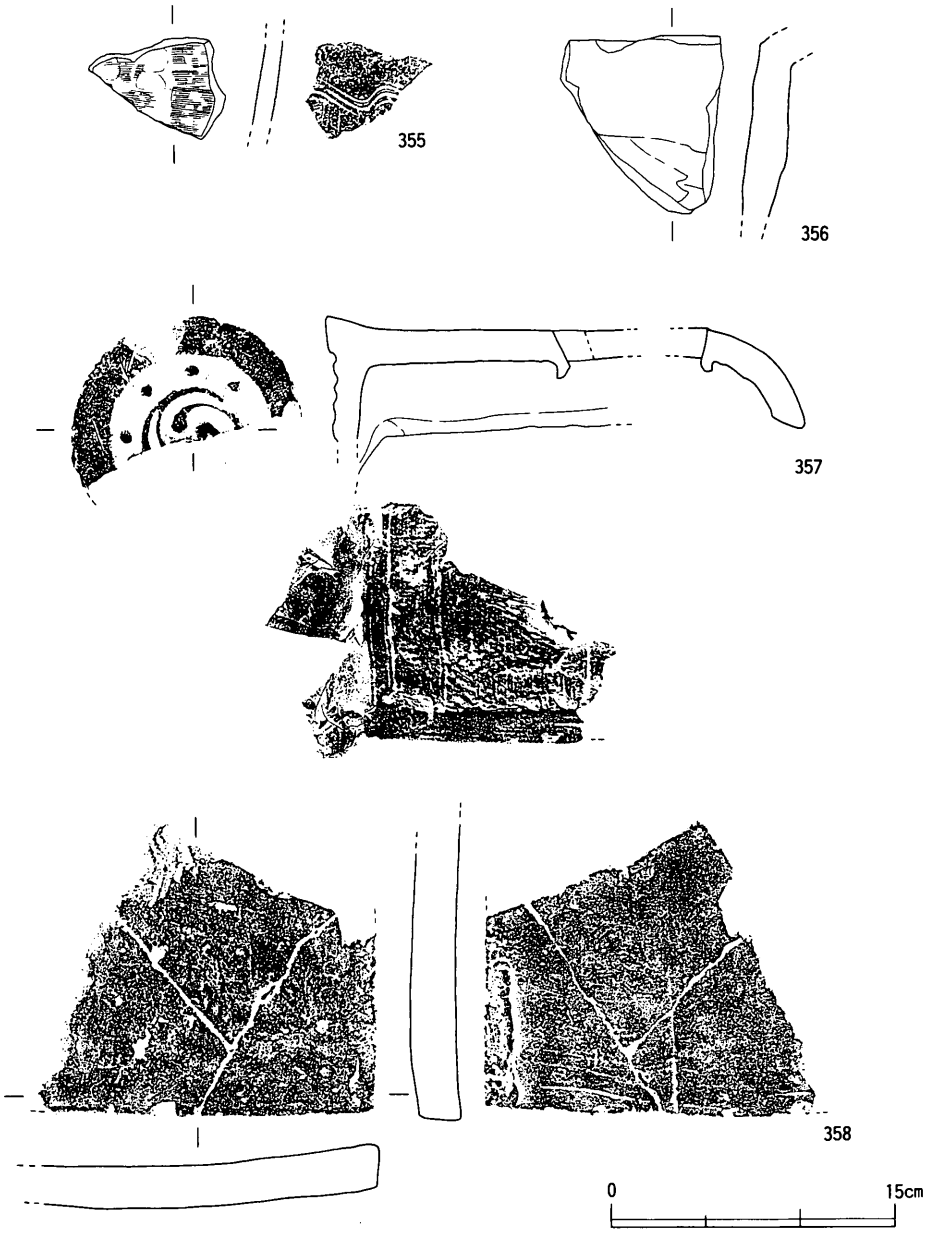
［ＳＫ１０］（第123～125図）

Ｉ区北半部で検出した，やや不整形な円形を呈する土坑である。規模は長径2.15m，短径1.80m，深さ0.75mを測る。埋土は上下２層みられ，下層が砂礫層であることから人為的に埋められた可能性がある。

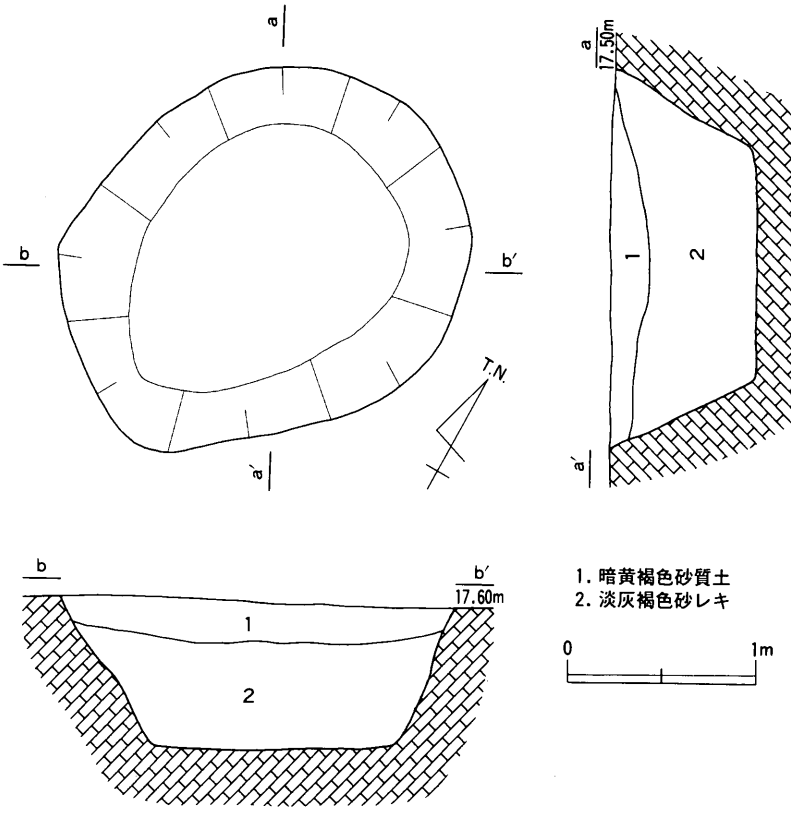
出土遺物には，磁器碗・皿・瓶，陶器碗・皿・擂鉢，瓦質火鉢，土師質擂鉢・火鉢・甕，軒丸瓦・平瓦がある。陶磁器の碗皿類は全て肥前系であり，339が17世紀後葉である以外は概ね18世紀前葉～中葉の時期にあたる。338は体部外面に竹を描き，底部外面には「大明年製」崩れ銘がみられる。339には一重網目文が施文される。341は外面に轆轤刷毛目，内面に打刷毛目を施す。340・342は簡略化された唐草文が施文される。343は呉器手の碗である。344・345はともに「底狭形」の皿であり，344の内面には松葉状の簡単な線が描かれる。陶器擂鉢（346・347）は備前系であり，卸し目上端をナデ消さないことから備前窯の製品であると考えられる。瓦質火鉢（350）は，長方形の脚部をもち，底部外縁には桶のタガを模した突帯が巡る。Ｉ区北半部包含層出土の649と同一形態であり，あるいは同一個体か。土師質焜炉（351～354）にはＳＫ０９出土遺物でみられたような口縁部の２形態が存在する。



第123図　ＳＫ１０出土遺物（１）（陶磁器碗Ｓ＝1/3，他はＳ＝1/4）



第124図　ＳＫ１０出土遺物（２）（Ｓ＝1/4）

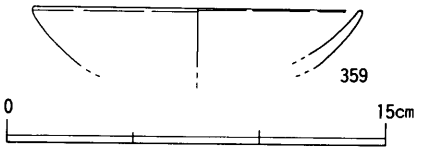


第125図　ＳＫ１０平・断面図（Ｓ＝1/40）

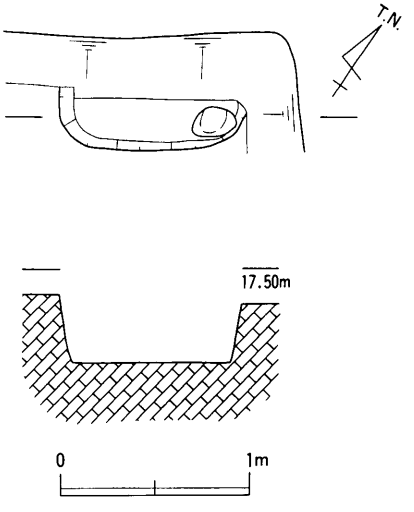
軒丸瓦（357）は瓦当文様に巴文をもつ。巴文は右巻きであり，隣接する尾が繋がって圏線をなす。珠文の数は８個であろう。

［ＳＫ１１］（第126・127図）

Ｉ区北半部で検出した，方形ないし長方形を呈する土坑である。調査区北壁際で検出したため，全体の形状・規模については明らかではない。検出した部分の規模は，長軸0.98m，短軸0.34m，深さ0.35mを測る。



第126図　ＳＫ１１出土遺物（Ｓ＝1/3）

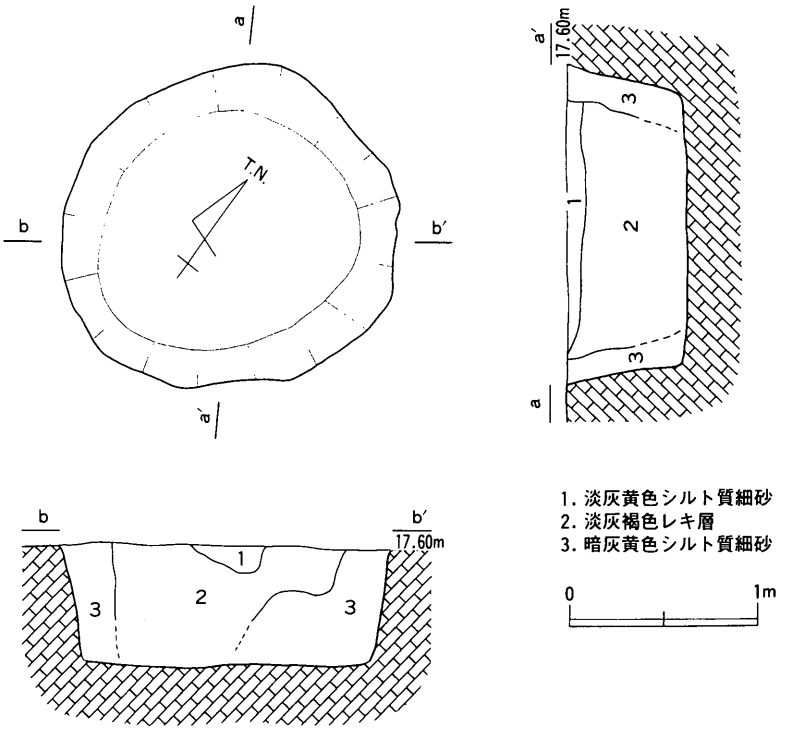


第127図　ＳＫ１１平・断面図（Ｓ＝1/40）

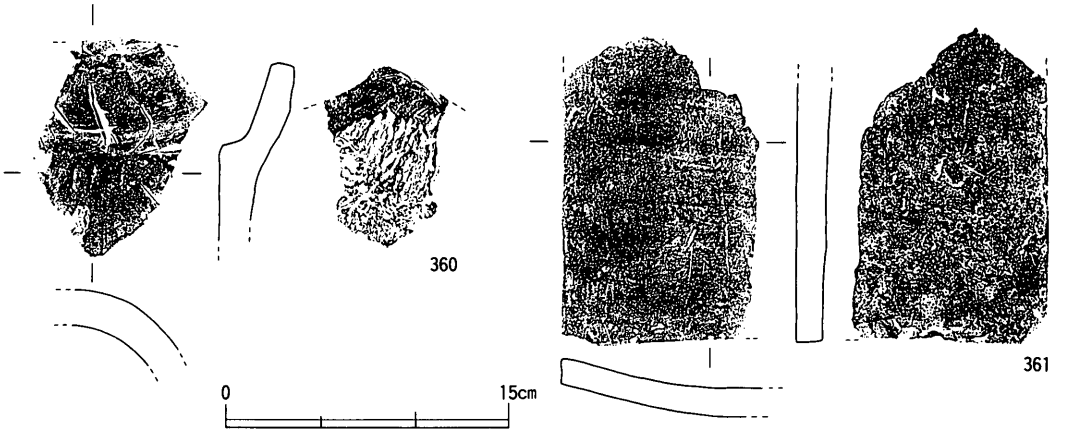
遺物は，わずかに肥前系の磁器皿が１点（359）出土したのみであった。

［ＳＫ１５］（第128・129図）

Ｉ区北半部で検出した，平面円形を呈する土坑である。土坑壁面はほぼ垂直に掘り込まれており，断面長方形を呈する。規模は直径1.63～1.75m，深さ0.63mを測る。埋土は３



第128図　ＳＫＩ５平・断面図（Ｓ＝1/40）

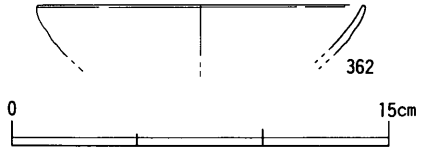


第129図　ＳＫＩ５出土遺物（Ｓ＝1/4）

層に分けられるが，第３層は土坑外縁に堆積し，その内側に第１・２層が堆積している。このことから，土坑内には本来筒状の器物が据えられており，第３層はその裏込め土であった可能性があろう。

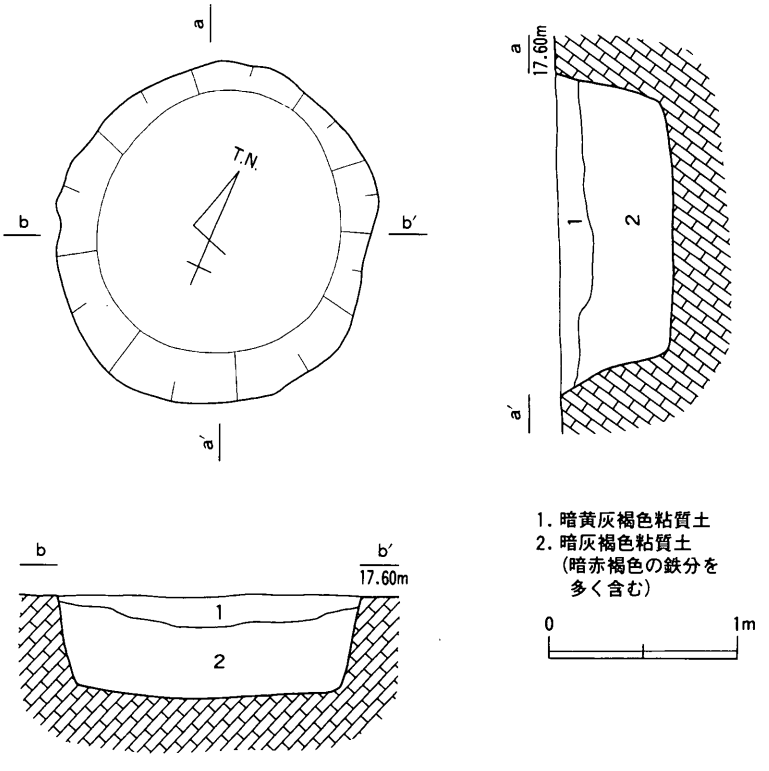
出土遺物には，丸瓦（360）と平瓦（361）がある。

［ＳＫ１６］（第130・131図）

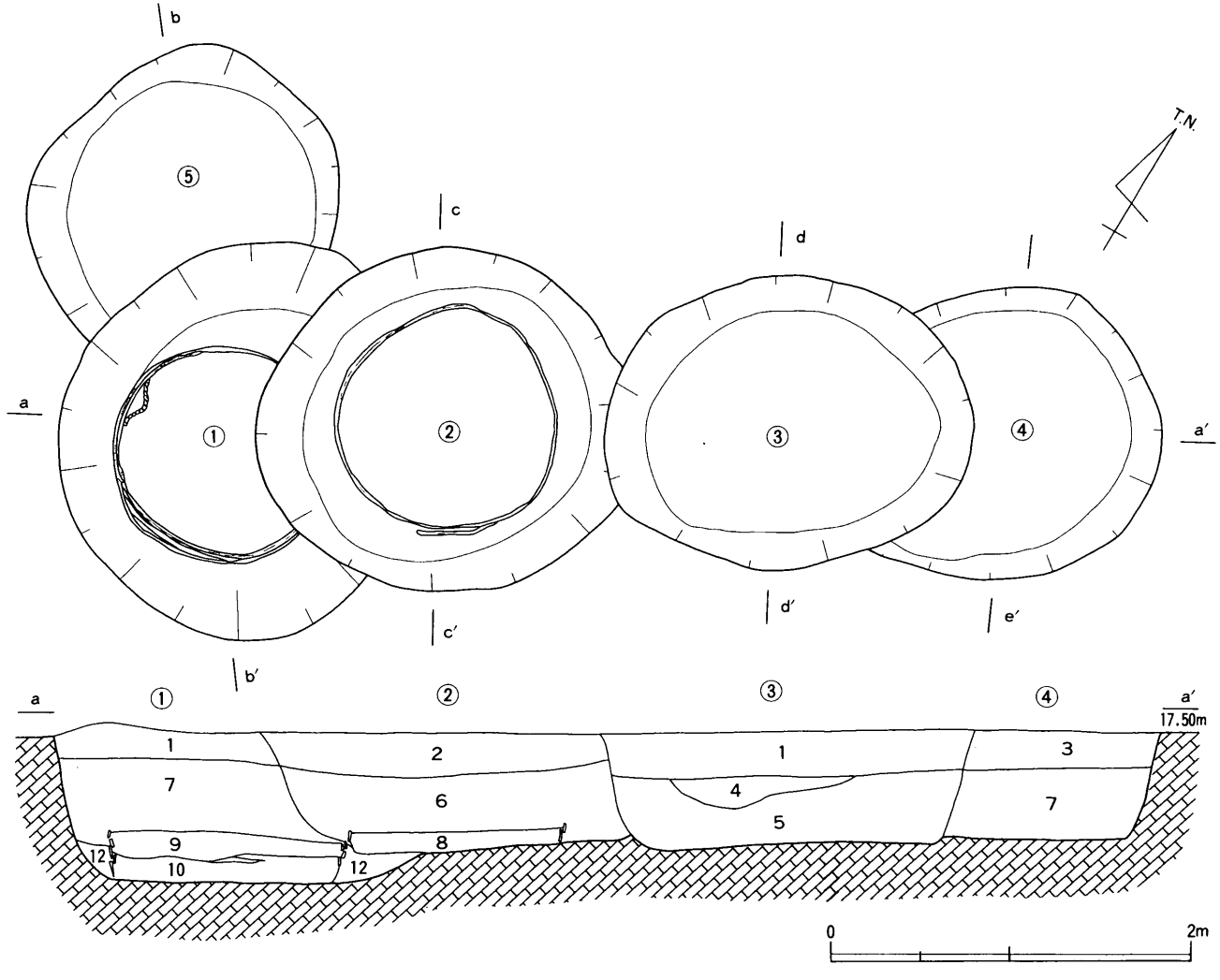


第130図　ＳＫ１６出土遺物（Ｓ＝1/3）

Ｉ区北半部で検出した，平面円形を呈する土坑である。規模は直径1.70m，深さ0.60mを測る。埋土は上下２層に分けられ，下層には鉄分を多く含む。遺物は，肥前系の磁器皿（362）が出土したのみである。



第131図　ＳＫ１６平・断面図（Ｓ＝1/40）

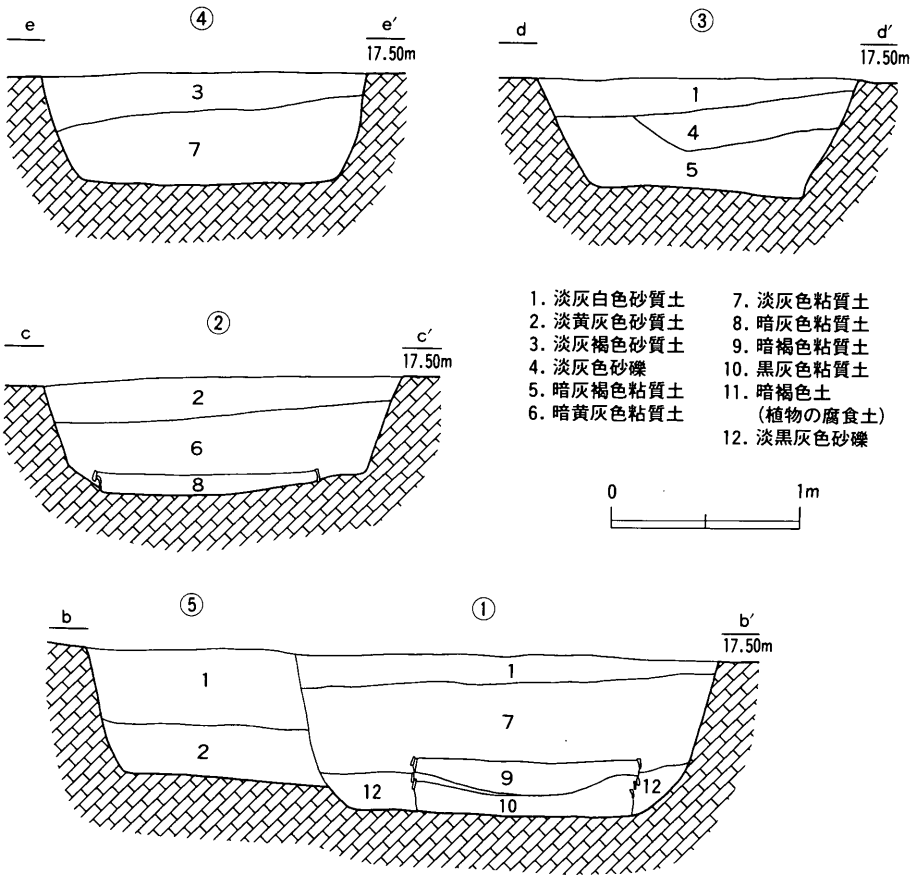


第132図　ＳＫ１７平面・縦断面図（Ｓ＝1/40）

［ＳＫ１７］(第132・134図，図版７・８)

Ｉ区北半部で検出した。平面円形を呈する土坑が５基重複した状態で遺存しており，同じ地点に土坑が繰り返し掘削されたものとみられる。このため個別に遺構番号は付けず，ＳＫ１７－①～⑤と枝番号で表示した。土層の堆積状況から，⑤→①→②→③ならびに④→③という前後関係が考えられ，③が最も新しい段階の掘削であることがわかるが，④については全体のどの時点で掘削されたかは明確にし難い。

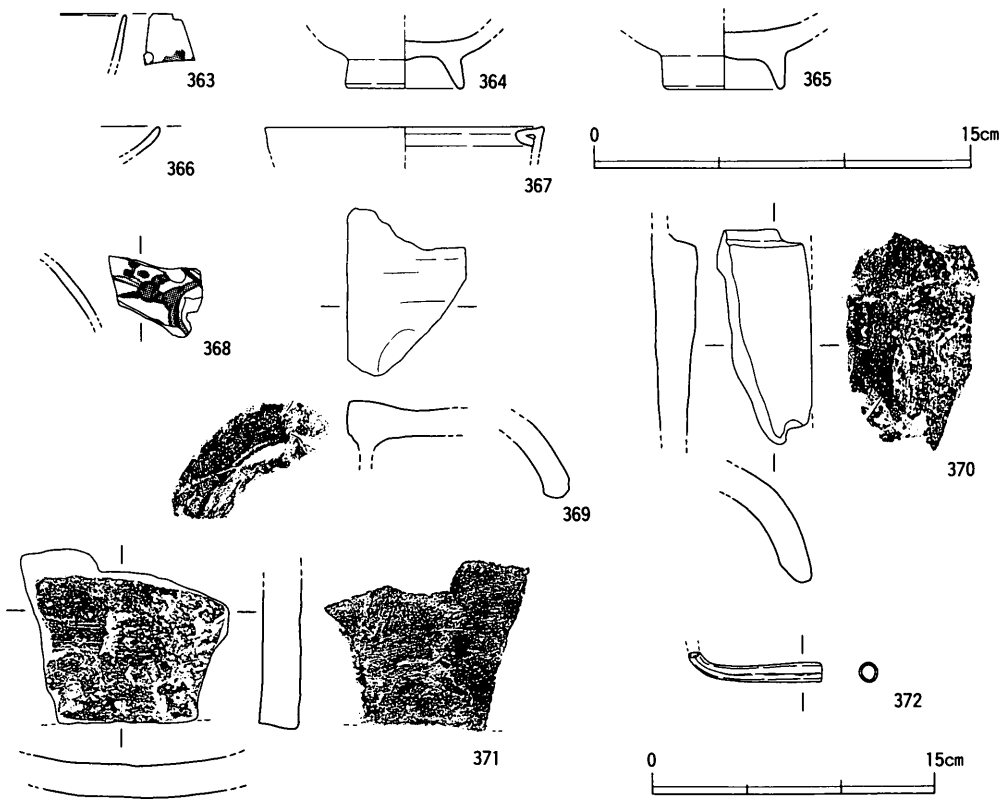
ＳＫ１７－①は直径2.23m，深さ0.85mの規模をもち，平面がやや楕円形に近い形態をもつ。掘り方壁面はほぼ垂直に掘り込まれており，底面は平坦である。底面中央に，直径1.2mの箍が遺存していた。箍は竹製であり，４～５本を組紐状に回していた。恐らく当初は土坑内に桶が据えられていたと考えられるが，土坑内に桶の板材は全く遺存していなかった。この箍の外周には淡黒褐色砂礫層（第132図第12層）が堆積していた。桶の裏込め



第133図　ＳＫＩ７横断面図（Ｓ＝1/40）

土として砂礫層が充填されたのであろう。検出した箍の直上には埋め戻しによるとみられる淡灰色粘質土（第７層）が厚く堆積していたが，このレベルには裏込め土は認められなかった。したがって，土坑廃絶時に上方の箍を外して桶の板材を抜き取り，裏込め土の大半はこの際に崩されたと考えられる。箍の内側には，ヘドロ状の黒灰色粘質土（第10層）が堆積しており，多量の昆虫（アブ科？）の幼虫や蛹などが含まれていた。第10層は土坑機能時に堆積したと考えられるため，桶内部にはこれらの昆虫が生息するような条件が整っていたことが想像される。また同層には，長さ30cm程度の紐も遺存していたが，取り上げることはできなかった。この他の出土遺物には，平瓦片（371）や銅製の煙管（372）がある。煙管は雁首で火皿を欠損するが，脂返しの屈曲の状況から，古泉弘氏編年の第４段階（18世紀前半）とみられる製品である。

ＳＫ１７－②も，同様な形態・内容物をもつ土坑である。土坑の直径1.94～2.10m，深さ0.68mを測り，①の埋没後に掘り込まれている。底面は平坦で，中央に直径1.24mの竹製の箍が遺存していたが，桶板材はやはり検出されなかった。出土遺物には，肥前系磁器



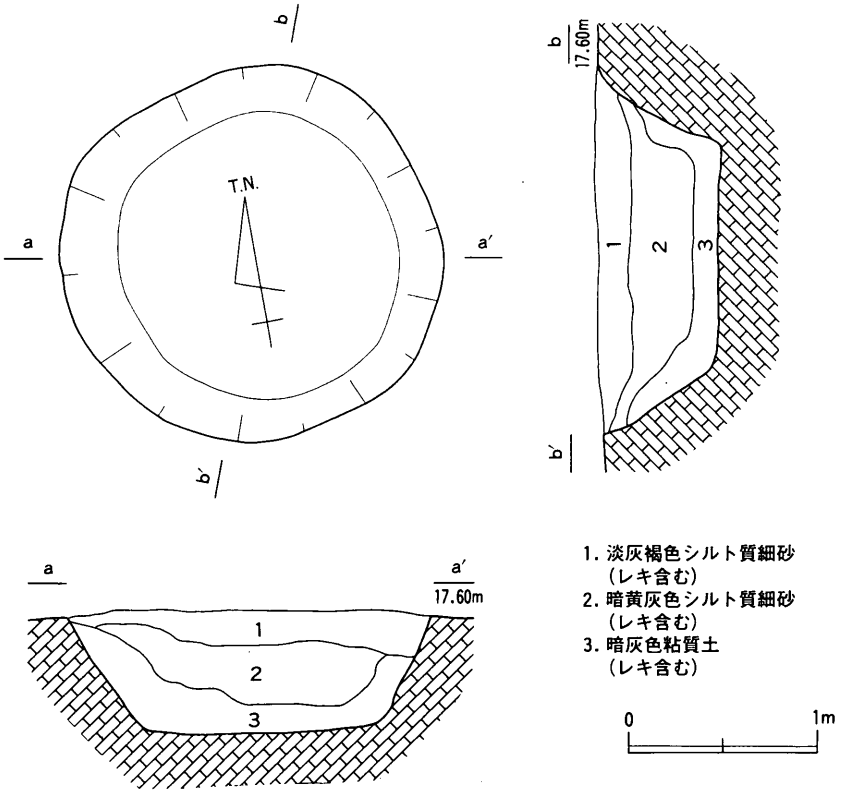
第134図　ＳＫ１７出土遺物（Ｓ＝1/4）

皿（366）・火入れ（367）・瓶（368），軒丸瓦（369）などがある。細片のためそれぞれの詳細な時期は特定できないが，概ね18世紀前葉～中葉の製作とみられる。

ＳＫ１７－③は，直径2.05～1.65mを測る平面楕円形の土坑である。深さは0.63mを測り，底面は平坦である。土坑内には箍や板材は遺存していなかったが，埋土中位に南側から投棄されたような状態で砂礫層（第７層）が堆積しており，廃絶時に土坑内構造物の撤去と埋め戻しが行われたことが推測できる。出土遺物には，丸瓦片（370）がある。

ＳＫ１７－④は，直径1.64mの平面円形の土坑であり，深さは0.61mを測る。土坑内には箍や板材は遺存していなかった。出土遺物には，肥前系磁器碗（363）・陶器碗（364・365）がある。363は体部外面に花形のコンニャク印判が押捺されており，18世紀前葉～中葉の所産とみられる。364・365は呉器手碗であり，17世紀後葉～18世紀前半の幅で捉えられる。

ＳＫ１７－⑤は，直径1.74m，深さ0.69mを測る平面円形の土坑である。土坑内には，やはり箍・板材はみられなかった。

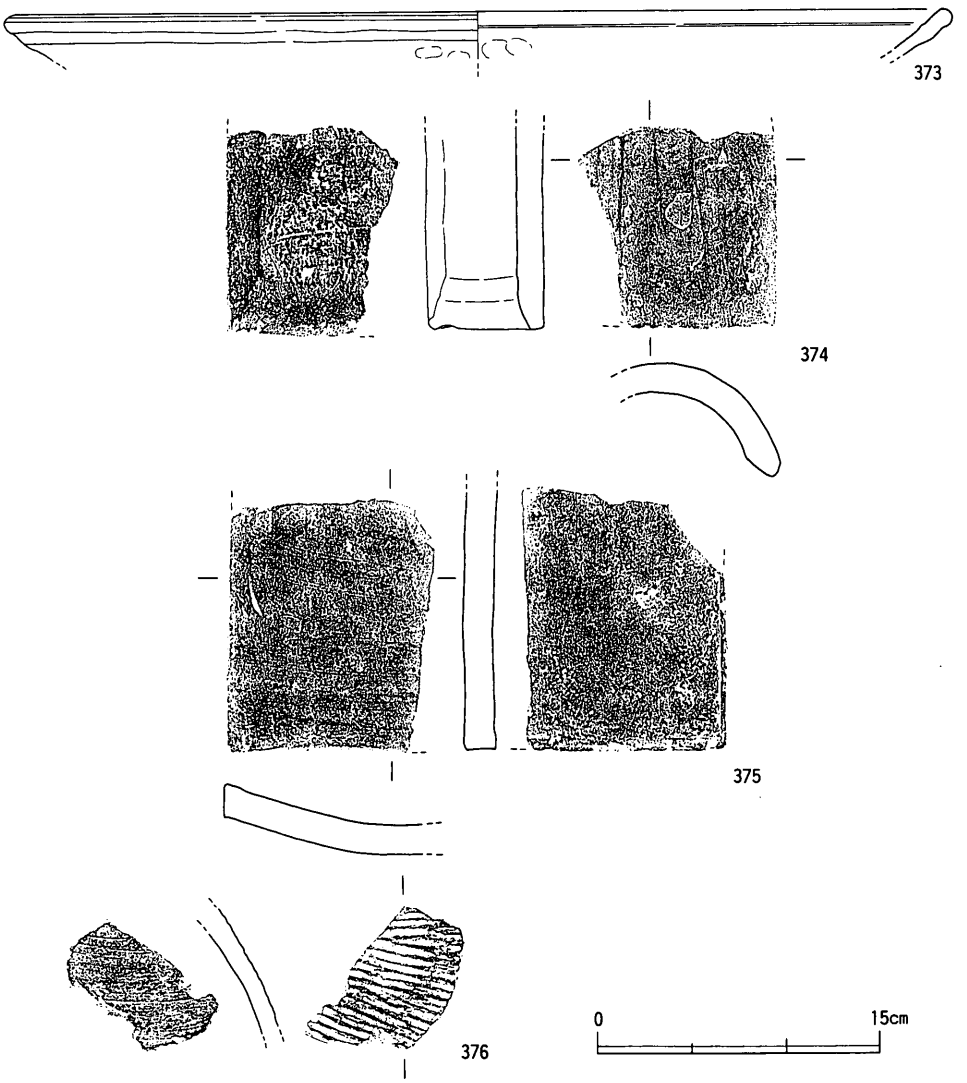


第135図　ＳＫ１８平・断面図（Ｓ＝1/40）

これらの土坑は,出土遺物からは明瞭な時期差を読み取ることができず,18世紀前葉～中葉の中で埋没と掘削が繰り返されたと考えられる。また土坑の性格としては，①の状況からみて桶内が淀んだ滞水状態にあったことが想定されることから，飲料水確保の井戸とみるよりも，それ以外の用途をもつ水溜めと考えられる。

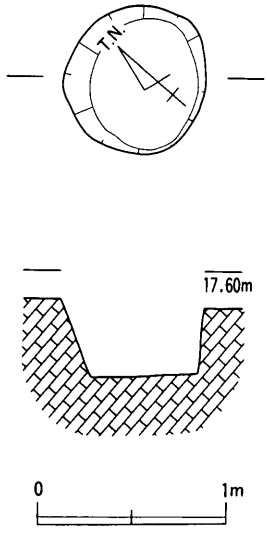
［ＳＫ１８］(第135・136図，図版８)

Ｉ区北半部南端に位置する。平面円形を呈しており，規模は直径2.0m，深さ0.75mを測る。出土遺物は少量で，わずかに土坑内から土師質焙烙（373)，丸瓦（374)，平瓦（378)などの他，須恵器甕片（376）が出土した程度である。373は丸味を帯びた口縁端部をもつ。



第136図　ＳＫＩ８出土遺物（Ｓ＝1/4)

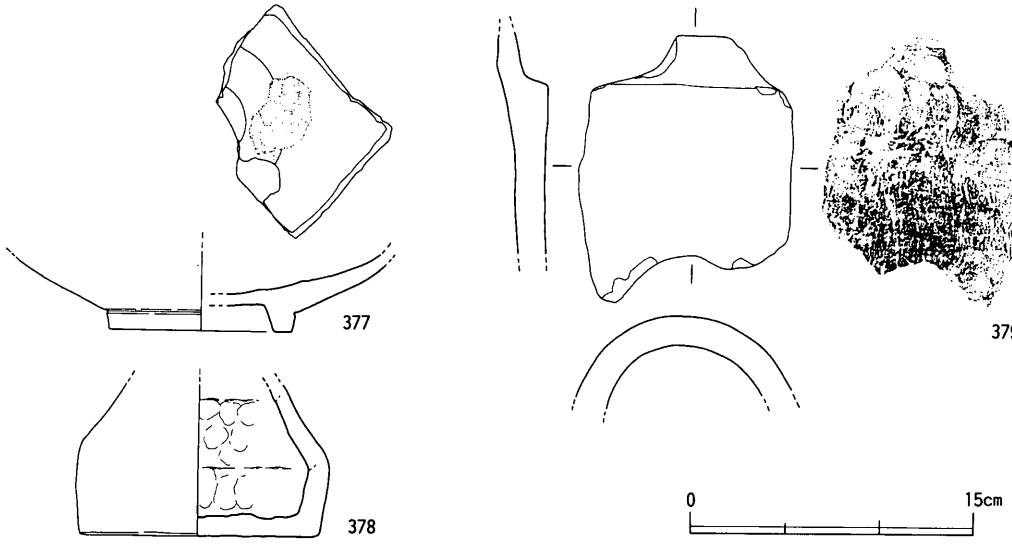
376は外面に平行叩き目を施す十瓶山窯産の甕であり，12世紀前後の所産であろう。



［ＳＫ１９］（第137・138図）

Ｉ区北半部南端に位置する土坑で，平面円形を呈する。規模は直径0.75m，深さ0.4mを測る。土坑内から，肥前系陶器鉢（377），土師質壺（378），丸瓦（379）が出土した。378は平坦な底部と直立して立ち上がる体部，内傾する頸部をもつ。底部外面は無調整であるが極めて平滑であり，何らかの作業台上で製作されたことを窺わせる。体部・頸部の内面は指オサエの痕跡が顕著にみられ，接合痕も遺存する。

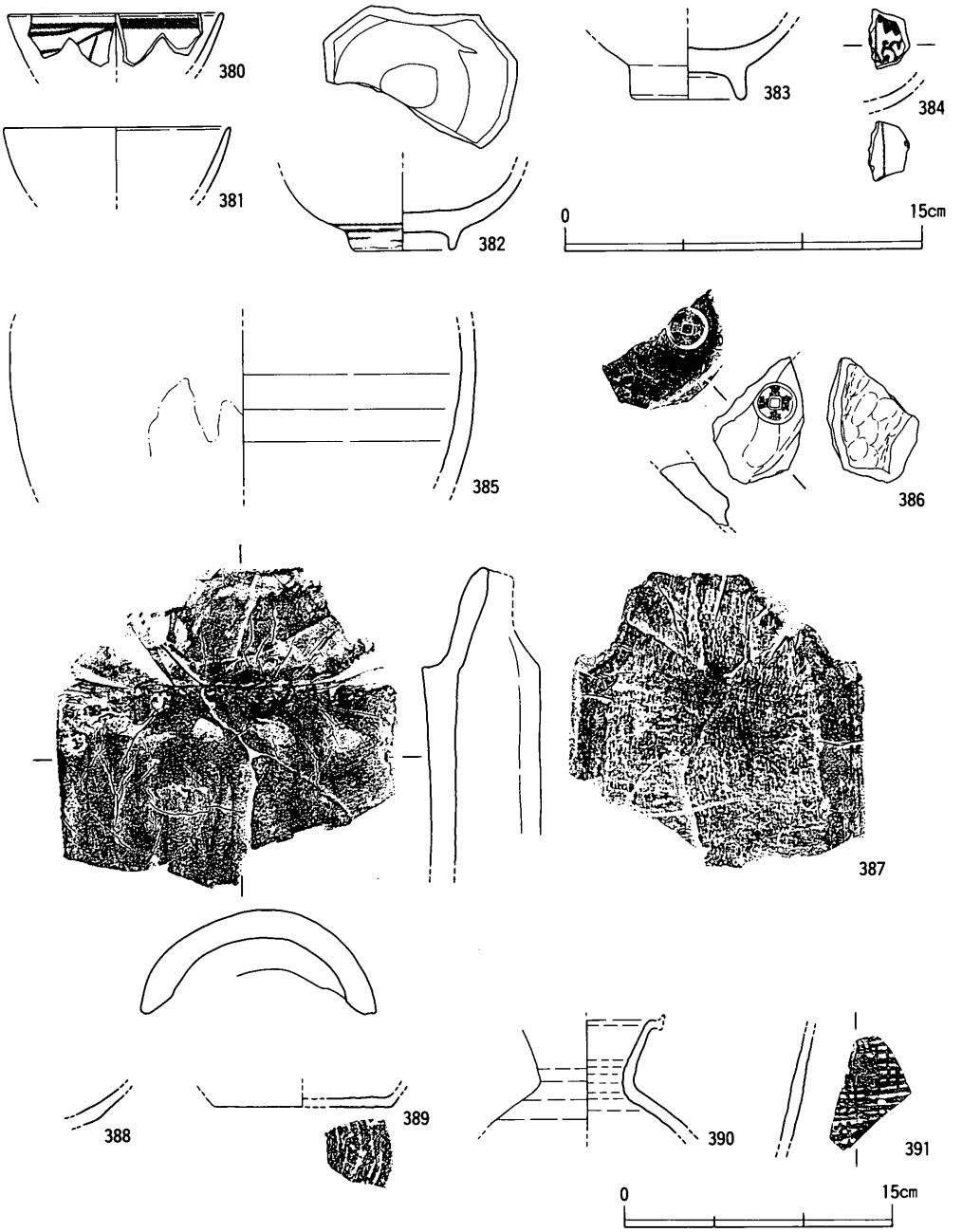
第137図　ＳＫ19平・断面図（Ｓ＝1/40）



第138図　ＳＫ１９出土遺物（Ｓ＝1/4）

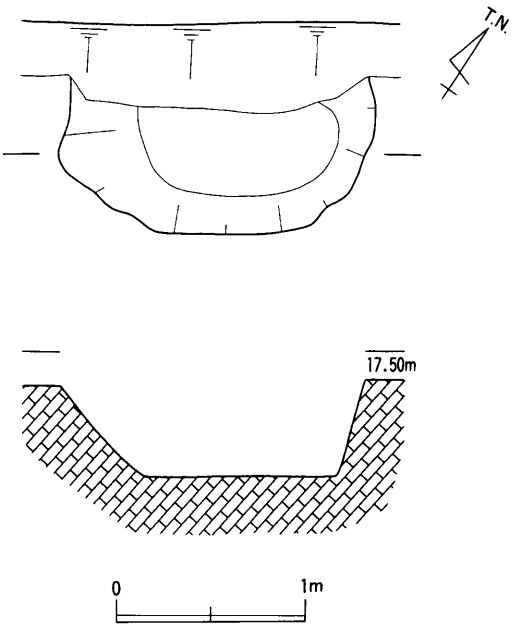
［ＳＫ２０］（第139・140図）

Ｉ区北半部北端で検出した。調査区際に位置するため，全体の形状は明らかではないが，平面形は隅丸方形を呈するものと思われる。規模は東西1.62m，深さ0.49mを測る。土坑内より肥前系磁器碗（380～382）・陶器碗（383）・磁器皿（384）・陶器瓶（385），土人形（386），丸瓦（387）などの近世遺物の他，須恵器杯（388・389）・壺（390・391）などが



第139図　ＳＫ２０出土遺物（陶磁器碗Ｓ＝1/3，他はＳ＝1/4）

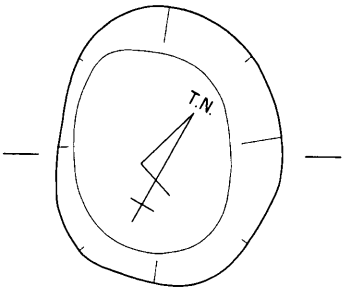
出土している。383は呉器手碗である。384は内面に花唐草文が描かれる。386は土人形もしくは装飾瓦の一部とみられる瓦質製品であり，I区北半部包含層出土の699と同一個体の可能性がある。699との比較から，着物の袖の部分にあたる破片ではないかと思われ，外面に実物の寛永通宝が押捺・転写されている。外面は最終的なナデ仕上げもあって極めて丁寧な作りであるが，内面は指オサエが顕著に認められる。このことから，伏見人形のように外型成形の可能性があろう。388～391は，いずれも9世紀後葉～10世紀前葉頃の十瓶山窯産須恵器である。

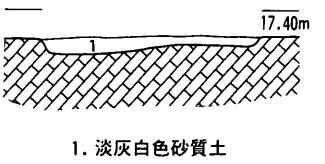


第140図　ＳＫ２０平・断面図

［ＳＫ２５］（第141・142図）

II区北西部で検出した土坑である。平面はやや歪な楕円形を呈しており，長径1.45m，短径1.17m，深さ0.08mを測る。埋土は淡灰白色砂質土のみであり，肥前系の呉器手碗（392）の小片が出土した。

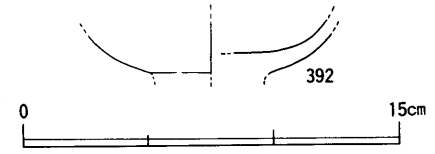




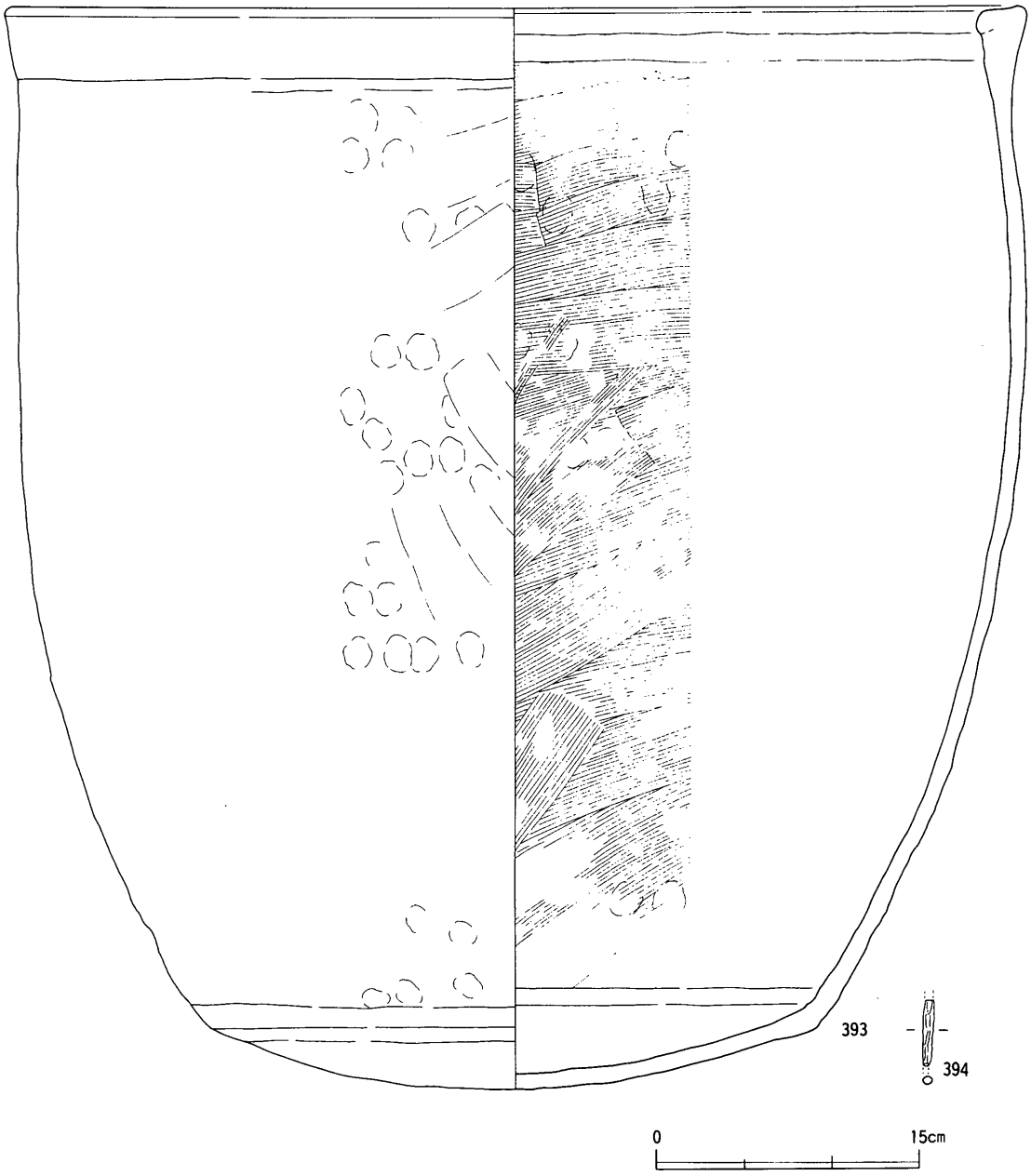
第142図　ＳＫ２５平・断面図（Ｓ＝1/40）

［ＳＫ５８］（第143・144図，図版20）

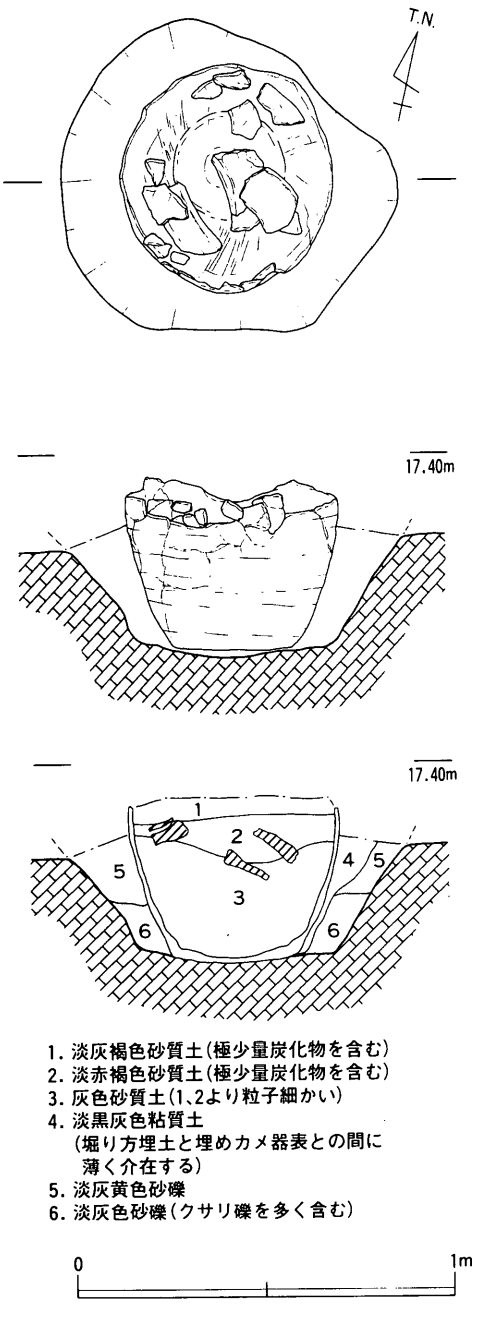
Ｖ区に位置する埋め甕土坑である。埋め甕の上端は近世以降の耕作土中に遺存しており，耕地化の後に据えられたことがわかる。土坑掘り方はやや歪な円形を呈する平面形態であり，直径1.60～1.80m，深さ0.64m以上を測る。土坑内には砂礫（第５・６層）が詰められて甕の



第141図　ＳＫ２５出土遺物（Ｓ＝1/3）



第143図　ＳＫ５８出土遺物（Ｓ＝1/4）



第144図　ＳＫ５８平・断面図（Ｓ＝1/20）

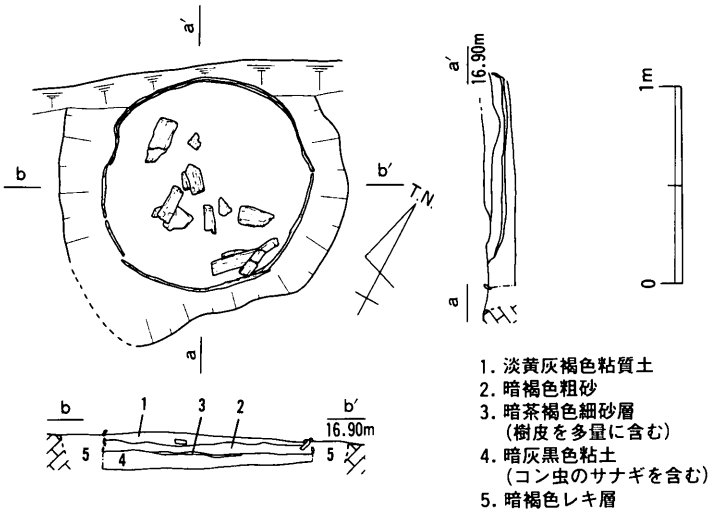
裏込め土とされていた。甕内部には遺物がほとんど存在せず，鉄釘（394）が出土したのみであった。

埋め甕（393）は土師質甕である。全体の形状としては，短く立ち上がる口頸部と肩の張らない体部，丸く突出する底部が特徴的である。口縁部は断面逆三角形に肥厚し，端面は水平に伸びる。内面は強く横ナデ調整されてわずかに凹面が形成される。体部は余り張りのない円筒形に近い形態であり，外面には縦もしくは斜め方向の板ナデ調整，内面には斜めもしくは横方向のハケ目調整が行われる。内面のハケ目は，体部の上方ほど横位であり，下方ほど縦位に傾く。これは，器体の上から作業する製作者の手の動きを反映するものであろう。底部は浅い球体を呈しており，外縁には「ヘタリ」を削り取った痕跡が認められる。ＳＫ０９出土土師質甕（285）でみたように，外型状の作業台上で製作が行われたことを示していよう。

ＳＫ５８の詳細な時期は，陶磁器に欠けるため明らかではないが，耕作土との関係や後述する土師質甕の変遷観から考えると，19世紀以降とみて大過ないと思われる。

［ＳＥ０１］（第145～147図，図版９）

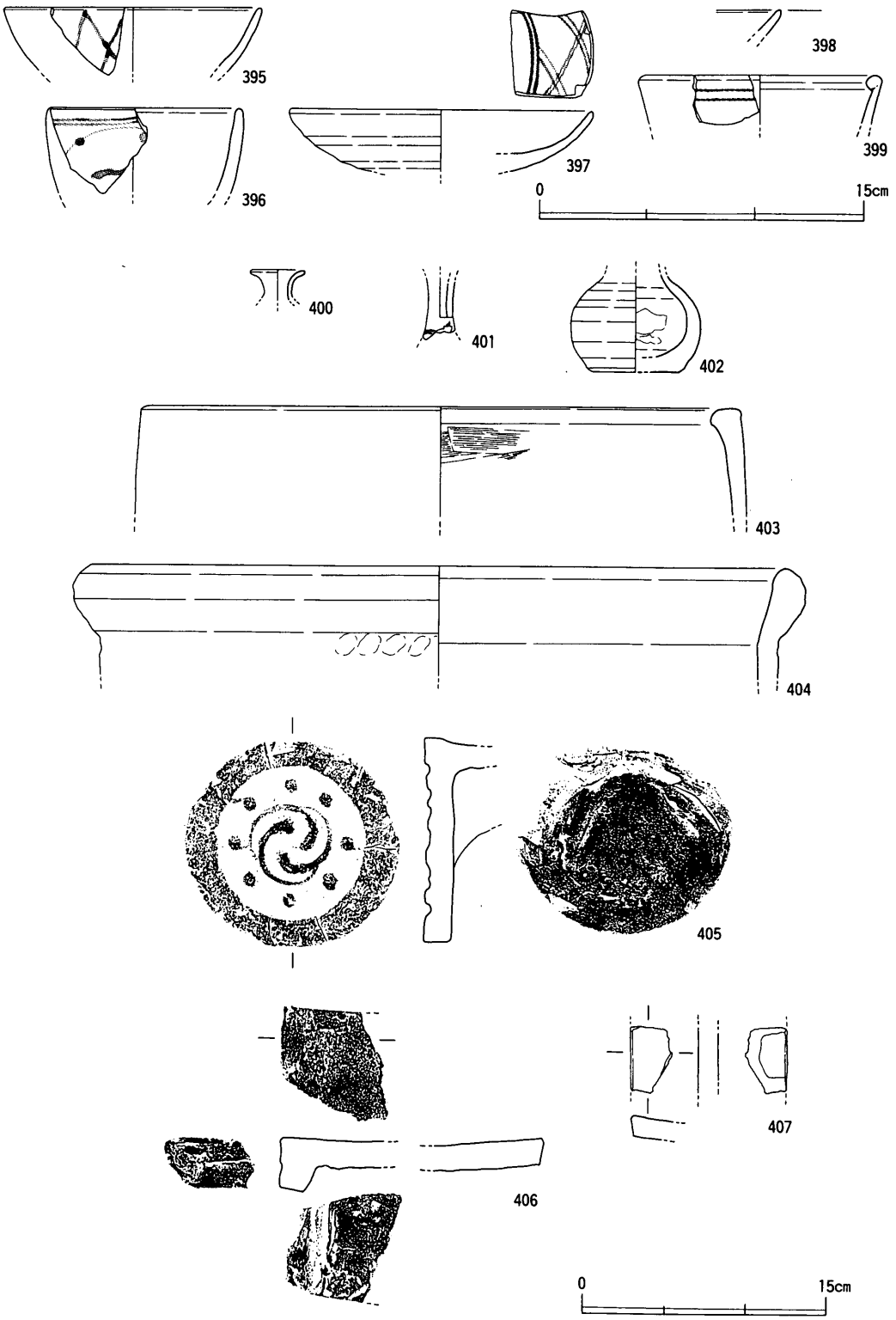
Ｉ区北半部で検出した。予備調査時のトレンチ（11トレンチ）によって大半が削られており，基底部が検出されたのにとどまる。このため，位置的に重複関係にあるＳＸ０１との前後関係は明らかにできなかった。予備調査のデータを参考にすると，ＳＸ０１よりも後出する可能性がある。



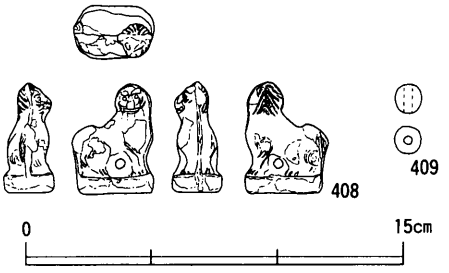
第145図　ＳＥ０１平・断面図（Ｓ＝1/40）

検出面では，直径1.52mの不整円形の掘り方内に，直径1.06mに回る竹製の箍が遺存している状況であった。箍内には桶の板材がかなり落ち込んでいた。また箍内の埋土は砂と粘土が互層状に堆積しており，長期間の滞水を窺わせる。このため井戸と考えたが，箍内の最下層（第４層）には昆虫の蛹を含む粘土層が堆積しており，ＳＫ１７でみたような淀んだ滞水状況が一時あったことがわかる。

箍(桶)内の埋土から，若干量の遺物が出土している。肥前系磁器碗(395)・陶器碗(396)・磁器皿(397)・陶器皿(398)・陶器火入れ(399)・磁器瓶(400・401)，備前系陶器小壺(402)，土師質焜炉(403)・甕(404)，軒丸瓦(405)・軒平瓦(406)・平瓦(407)，陶製狛犬(408)，ガラス玉(409)などがある。395は体部外面に一重網目文を描くもので，17世紀後葉の所産である。396～398は18世紀代の製作であろう。402は底部を回転糸切りするもので，胎土・焼成からみて備前窯産であろう。内面には鉄錆が付着しており，何らかの鉄製品を入れていたことがわかる。404は直立する体部から外反して肥厚する口縁部をもつ。口縁部外面や端面は丸味を帯びるが，内面は横ナデ調整で平坦面をなす。405は瓦当面に左巻きの巴文をもち，その外縁に８個の珠文が伴う。珠文には，周縁に繋がる凸線をもつものが２個，巴文に繋がる凸線をもつものが１個あり，他遺構・包含層出土瓦との同笵関係を推測する上で，大きな指標になる。408は，軟質な素地に濃緑色の釉薬をかけるものである。側縁には鋳張り状の粘土のはみ出しがみられることから，合わせ型による製作であることがわかる。409は青緑色を呈するガラスで作られている。数珠か。402・408・409などは，祭祀的な意味合いをもって投棄されたのであろうか。



第146図　ＳＥ０１出土遺物（１）（陶磁器碗・皿・火入れＳ＝1/3，他はＳ＝1/4）



第147図　ＳＥ０１出土遺物（２）（Ｓ＝1/3）

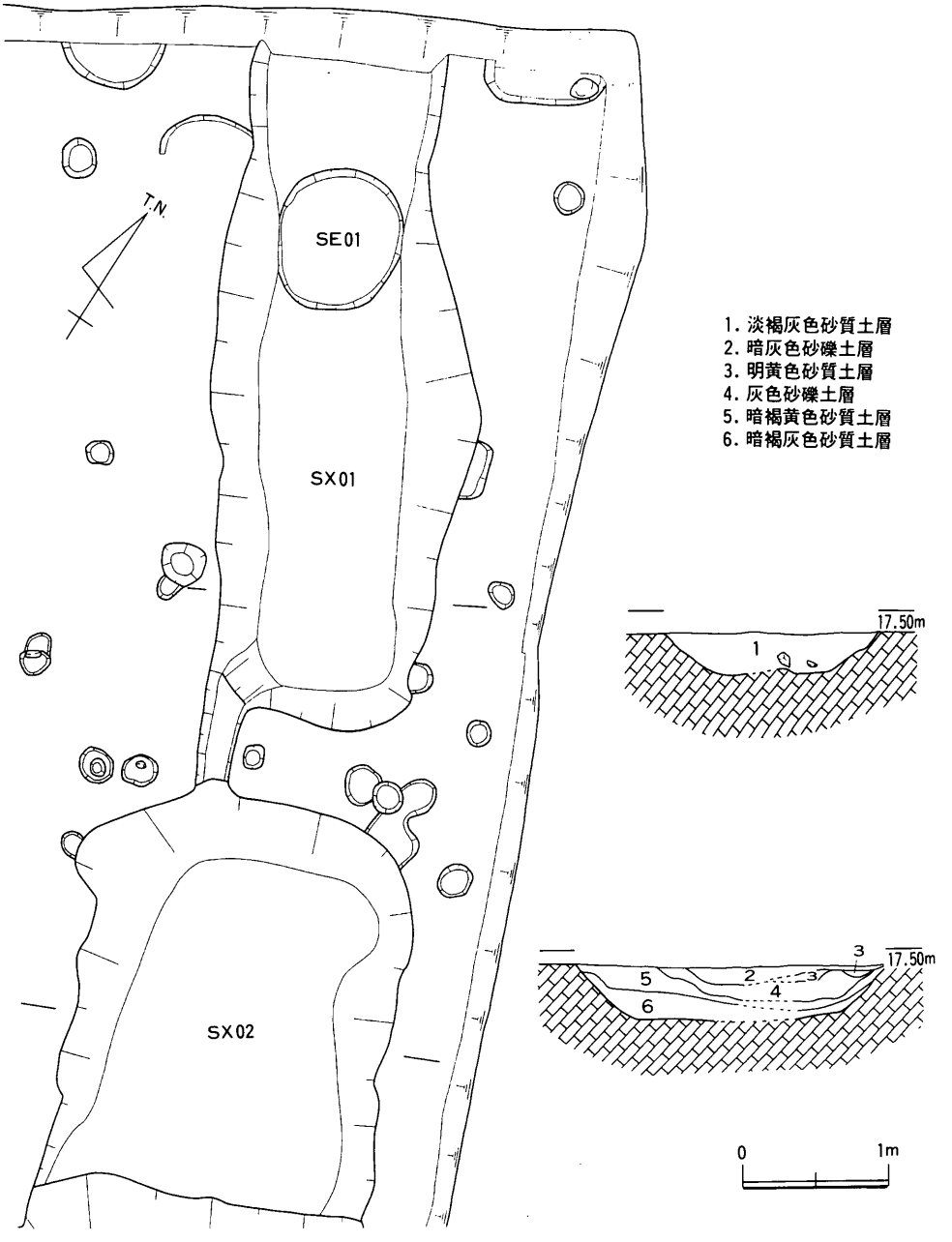
５．方形土坑・石積み土坑

ここで「方形土坑」とするものは，平面方形（長方形）を呈する大型土坑である。既に報告したＳＫ０８や０９も平面形態は同様であるが，深さが浅いことや当初から廃棄を目的として掘削されたとみられる点で，性格を異にするものである。また「石積土坑」は，方形土坑内に石積みを伴うものである。Ｉ区北半部東側に集中しており，またＳＸ０１～０３は重複することから，方形土坑と石積み土坑は同じ性格・機能をもつ施設である可能性があろう。

［ＳＸ０１］（第148・149図）

Ｉ区北半部北東隅に位置する。長さ9.2m以上，幅2.6～3.7m，深さ0.55mを測り，平面長方形を呈する。主軸方位はＮ－30°－Ｗであり，周囲の地割と一致する。埋土は，淡褐灰色砂質土単一層であり，土坑内がどのような状況にあったのか，明らかではない。しかし，土坑南西隅には幅0.05mの小溝が取り付いており，溝から導水していた可能性がある。

出土遺物には，肥前系磁器碗（410・411）・磁器皿（412・413・415・416）・陶器皿（414），備前系擂鉢（417），土師質焜炉（418），軒平瓦（419）などがある。411は蛇ノ目凹形高台をもつもので，18世紀以降に盛行するものである。415は見込みに花(五弁花か)のコンニャク印判，底部外面に「大□□化□□」（大明成化年製）の銘をもつ。416は型打ち成形による皿であり，底部は蛇ノ目凹形高台である。417は卸し目をやや間隔をあけて施し，上端は口縁部のナデ調整で消されることはない。備前窯産であろう。418は口縁部を明瞭に折り込んで作られている。ＳＫ０９出土の土師質焜炉と比較すると，口縁部長が長く屈曲度合いが強い一群（247・249・250）よりもさらにこの特徴が顕著であることがわかる。胎土は

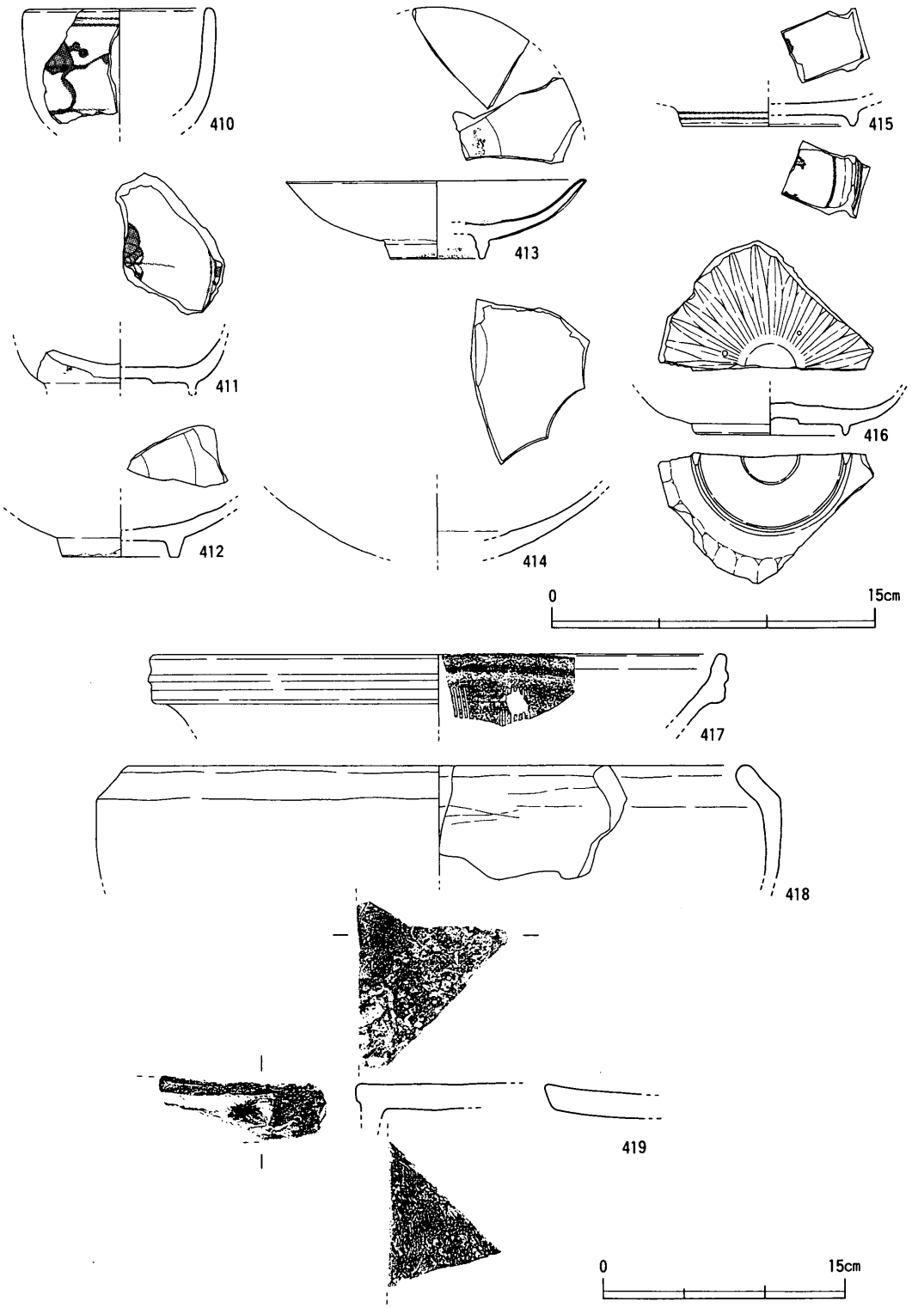


第148図　ＳＸ０１・０２平・断面図（Ｓ＝1/50）

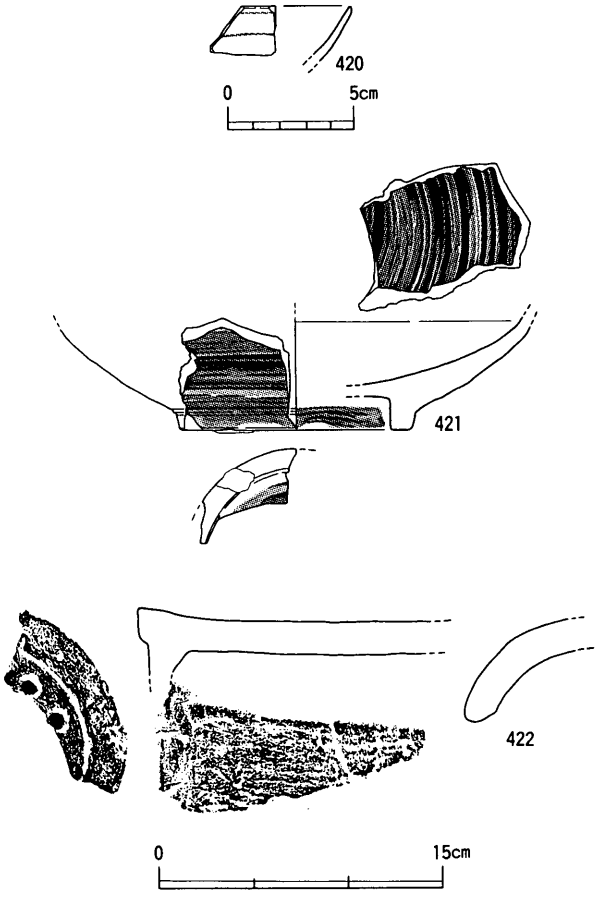
ややきめ細かいものである。

［ＳＸ０２］（第148～150図）

ＳＸ０１の南側に位置しており，ＳＸ０１に繋がる小溝埋土を切り込むことから，ＳＸ０１に後出するとみられる。主軸方位はＮ－33°－Ｗであり，周囲の地割よりもわずかに東



第149図　ＳＸ０１出土遺物（陶磁器碗・皿Ｓ＝1/3，他は1/4）



第150図　ＳＸ０２出土遺物（磁器皿Ｓ＝1/3，他はＳ＝1/4）

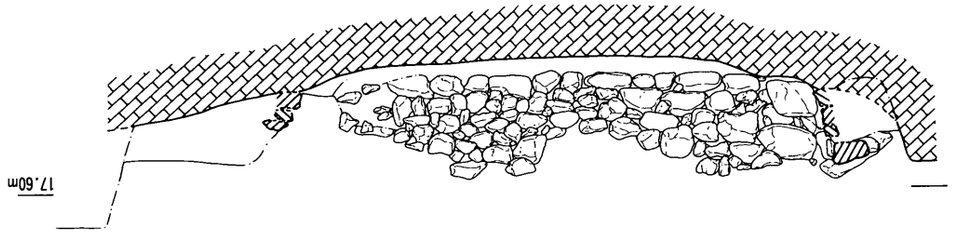
に偏する。埋土は５層に分層できるが，最下層（第６層）は細かいシルト状の砂質土であり，土坑内に水が溜っていたものの，淀んだ滞水状態ではなく，やや流れのある状態であったことが推測できる。また上位には砂礫層が堆積しており，人為的な埋め戻しの行われたことが窺える。

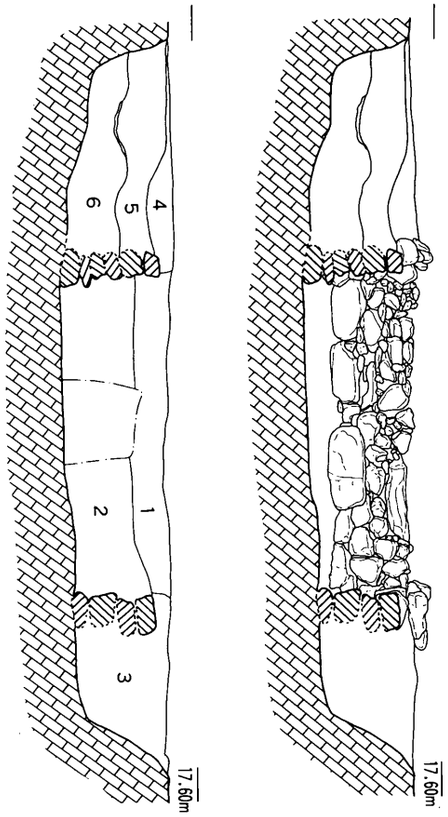
出土遺物には，肥前系磁器皿（420）・陶器鉢（421），軒丸瓦（422）がある。421は内外面に鉄釉と白泥による轆轤刷毛目を施す。18世紀代の所産であろう。422の瓦当面には珠文が２個遺存する（本来は８個）。

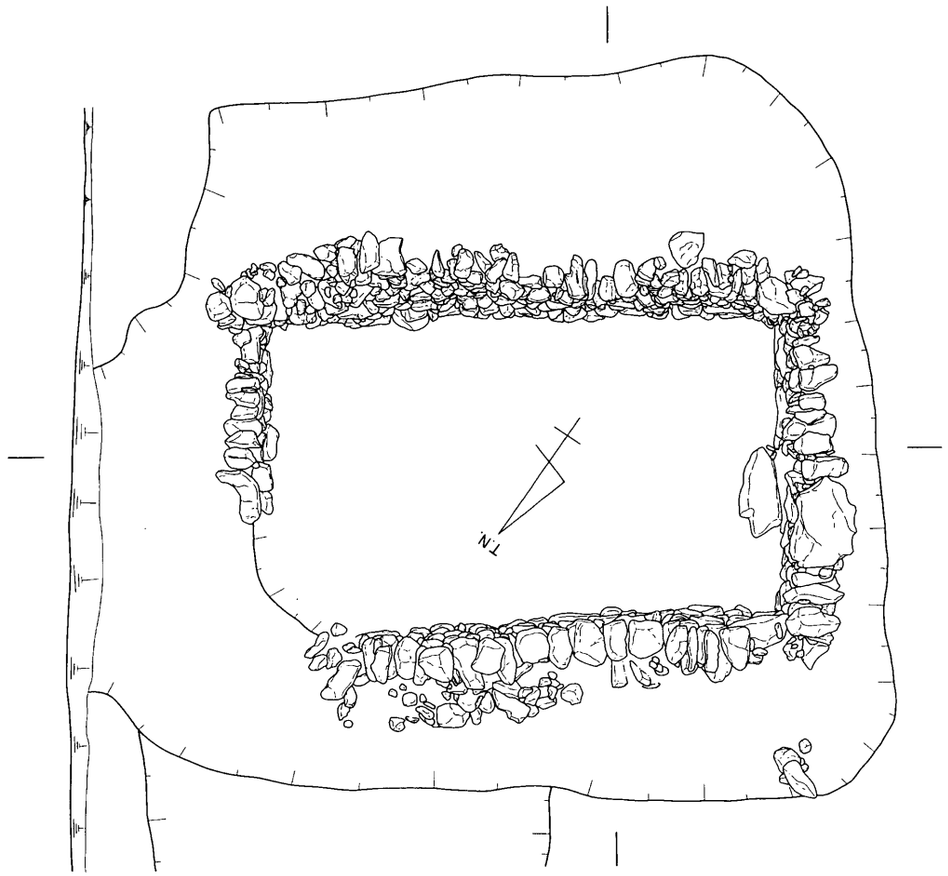
［ＳＸ０３］（第150～163図，図版９～10）

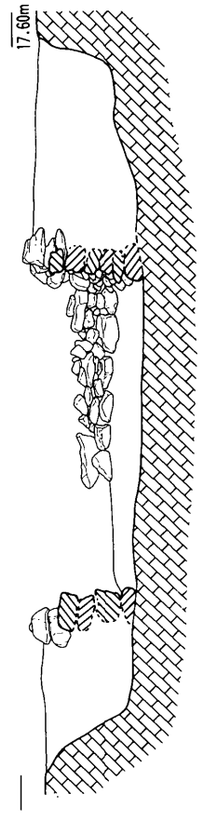
ＳＸ０２の南側に位置する石積み土坑である。ＳＸ０２の埋土を切り込んで掘り方が掘られていることから，ＳＸ０２よりも後出することがわかる。主軸方位はＮ－61°－Ｅであり，周囲の地割とも一致する。掘り方は長さ5.5m，幅5.15m，深さ0.78mを測り，平面

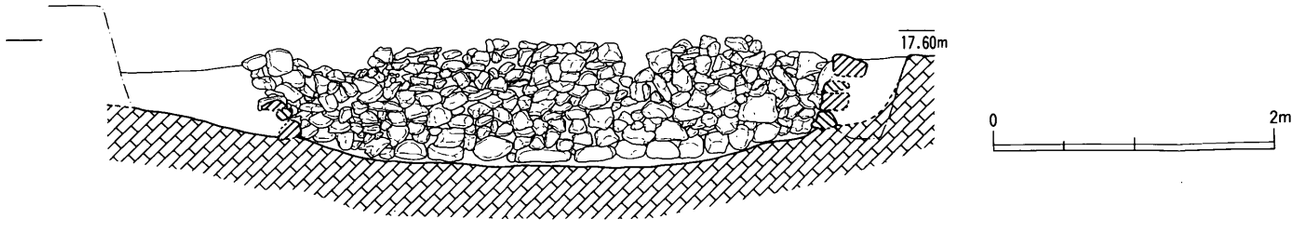
1. 淡黄灰色粘質土(5～15cm大のレキ含む)
2. 暗黄灰色粘質土
3. 淡灰色砂礫(2～5cm大のレキ含む)
4. 淡灰色砂質土
5. 淡灰褐色砂質土
6. 暗黄褐色粘質土







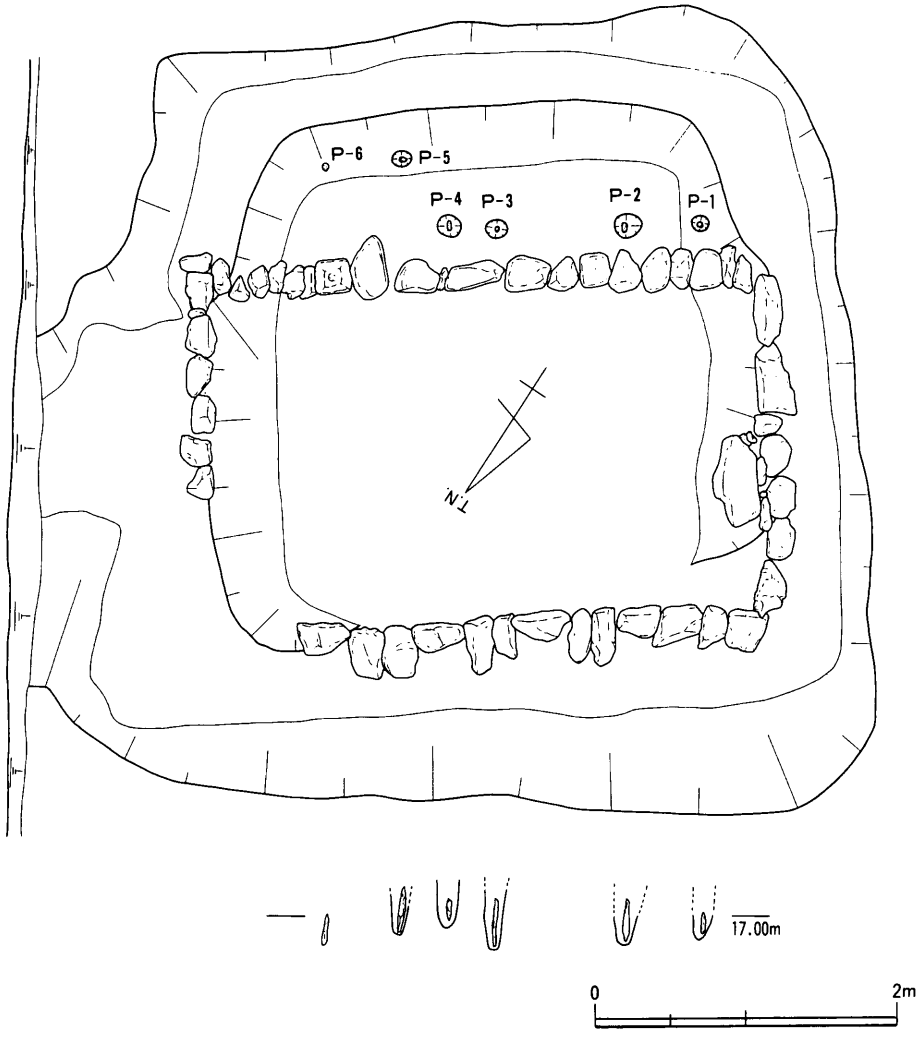




第151図　ＳＸ０３平・断面図（Ｓ＝1/50）

長方形を呈するが，北東隅の幅約2.3mの部分が東側に張り出している。この張り出しは隣接するII区では検出されなかったことから，I区とII区との境を画する現況の水路に繋がっている可能性が高い。石積みの北東隅が途切れていることも考慮すると，恐らく水路と繋がる張り出し部から取水し，石積み内に水を溜めていたのであろう。

石積み部の規模は，内法で長さ3.50m，幅2.0～2.15m，高さ0.25～0.87mを測る。平面形態は長方形であるが，幅は東側ほどやや広くなる。また既に述べたように，北東隅では石積みが認められない。石積みは20～30cm大の平たい長方形の自然礫を基底として，その上にそれよりもやや小振りな自然礫を最大で6段積み上げている。石は小口積みされるこ



第152図　S X 0 3 基底石・杭列（S＝1/50）

とが多く，また積まれた壁面はやや外開きに傾く。石材は大半が砂岩であるが，基底部の一部に凝灰角礫岩製の五輪塔が転用されている。また西側壁面中央に接した底面に33×65cmの方柱状の自然礫が置かれる。この礫の背後の西側壁面最上段には45×65cmの板石が置かれている。これらの石は，石積内に昇降するための踏み台とみられる。石積みの外側には控え積みは認められず，砂礫や砂質土（第３～６層）が裏込め土として充填されていた。また，南側壁面の裏込め土中で６本の木杭が検出された（Ｐ１～６）。Ｐ１～４は南側壁面に接してみられるが，Ｐ５・６は若干壁面からは離れている。この杭の機能は明らかにし難い。

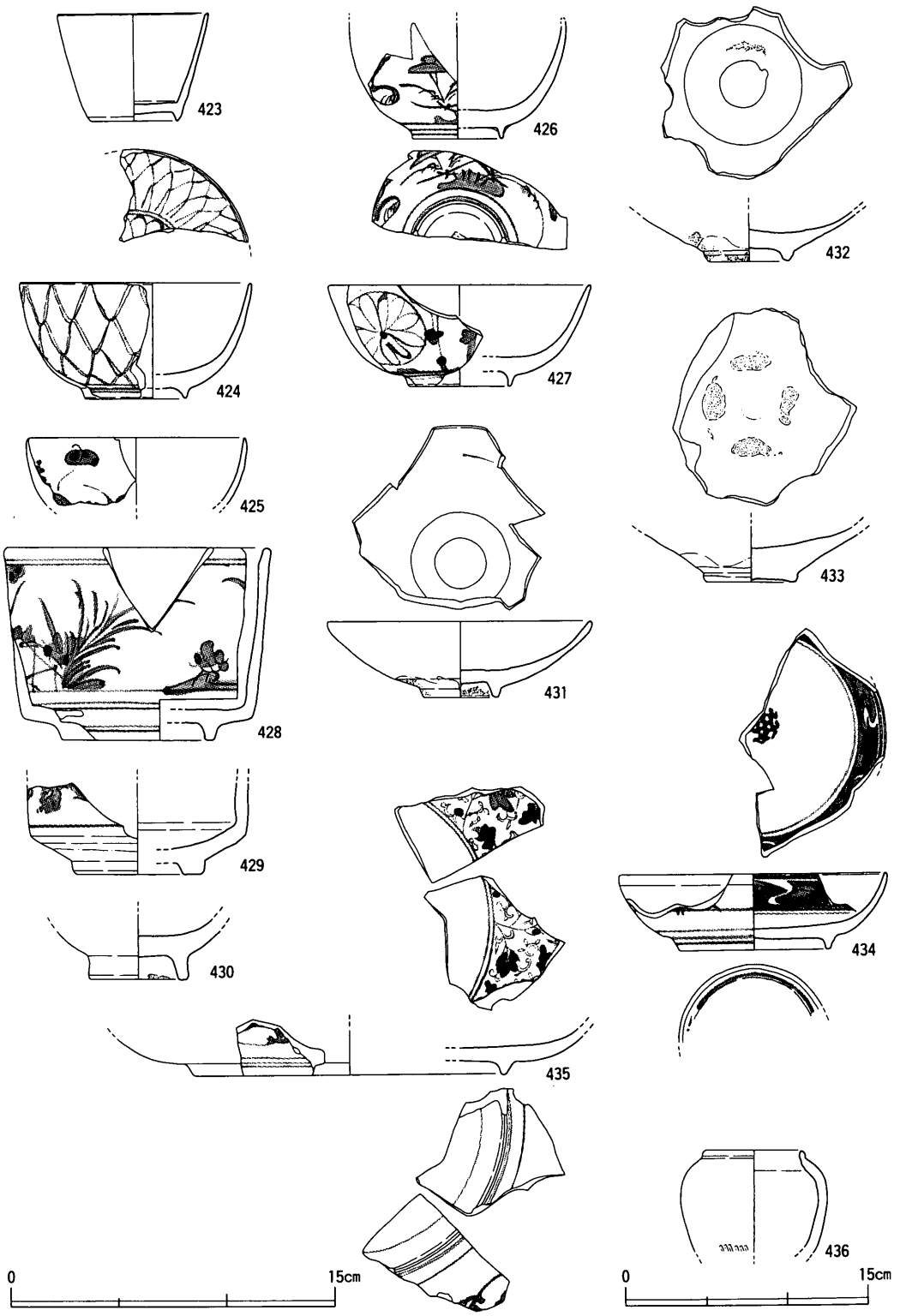
遺物は，石積み内の埋土（第１・２層）と石積み裏込め土（第３～６層）から出土した。前者はＳＸ０３の廃絶時期を，後者は構築時期を示す資料である。また量的にもかなり多く，ＳＫ０９やＩ区北包含層の出土遺物同様，近世陶磁器・土器の組成をよく示す内容をもっている。

石積み内埋土出土遺物（423～448）

磁器猪口（423）・磁器碗（424～428）・陶器碗（429・430）・磁器皿（431・432・434・435）・陶器皿（433）など，供膳具は全て肥前系である。陶器小壺（436）は産地不明，土師質小皿（437）・焜炉（438）・焙烙（439～441）・壺（442）は在地産であろう。この他に軒丸瓦（443～445）・軒平瓦（446）・平瓦（447・448）がある。

423は，口縁部から高台に至るまで一貫した直線的な器壁をもつ。口縁端部には口錆が施される。424は外面に二重網目文が，内面に一重網目文と菊花文が描かれる。425・426は，ともに外面に簡略化された草文が描かれる。426の底部外面には渦福状の裏銘がみられる。427の体部外面には，菊花文と簡略化された草文がみられる。428・429は筒形を呈する体部をもち，外面に草文が描かれる。いわゆる蓋物であろう。430は呉器手碗である。433は平高台状の分厚い底部をもち，見込みには４箇所の砂目が明瞭に残る。434は見込みに五弁花のコンニャク印判が押される。また体部内面の文様には，墨弾きの手法が用いられている。435は体部外面に唐草文，内面に細かく丁寧な筆致による草花文が描かれる大皿である。以上の肥前系陶磁器の製作年代は，433が17世紀前半頃に位置付けられるほかは，概ね18世紀前葉～中葉とみられる。

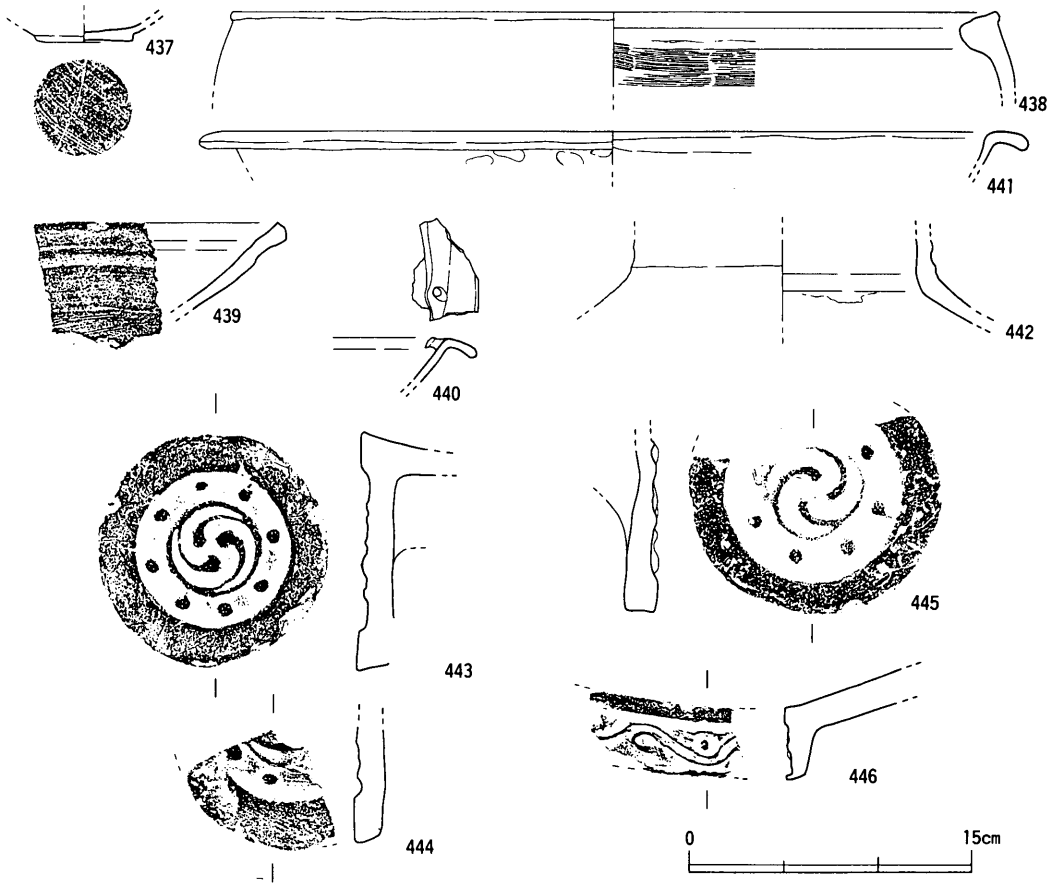
436は産地不明の陶器小壺である。底部には叩き状の条線がみられる。437は底部に静止糸切りを施す。438は口縁部が短く内弯しており，ＳＫ０９出土の251～258の一群に近いものである。439は口縁部が直線的に伸びるタイプの焙烙である。440・441は外反する口縁



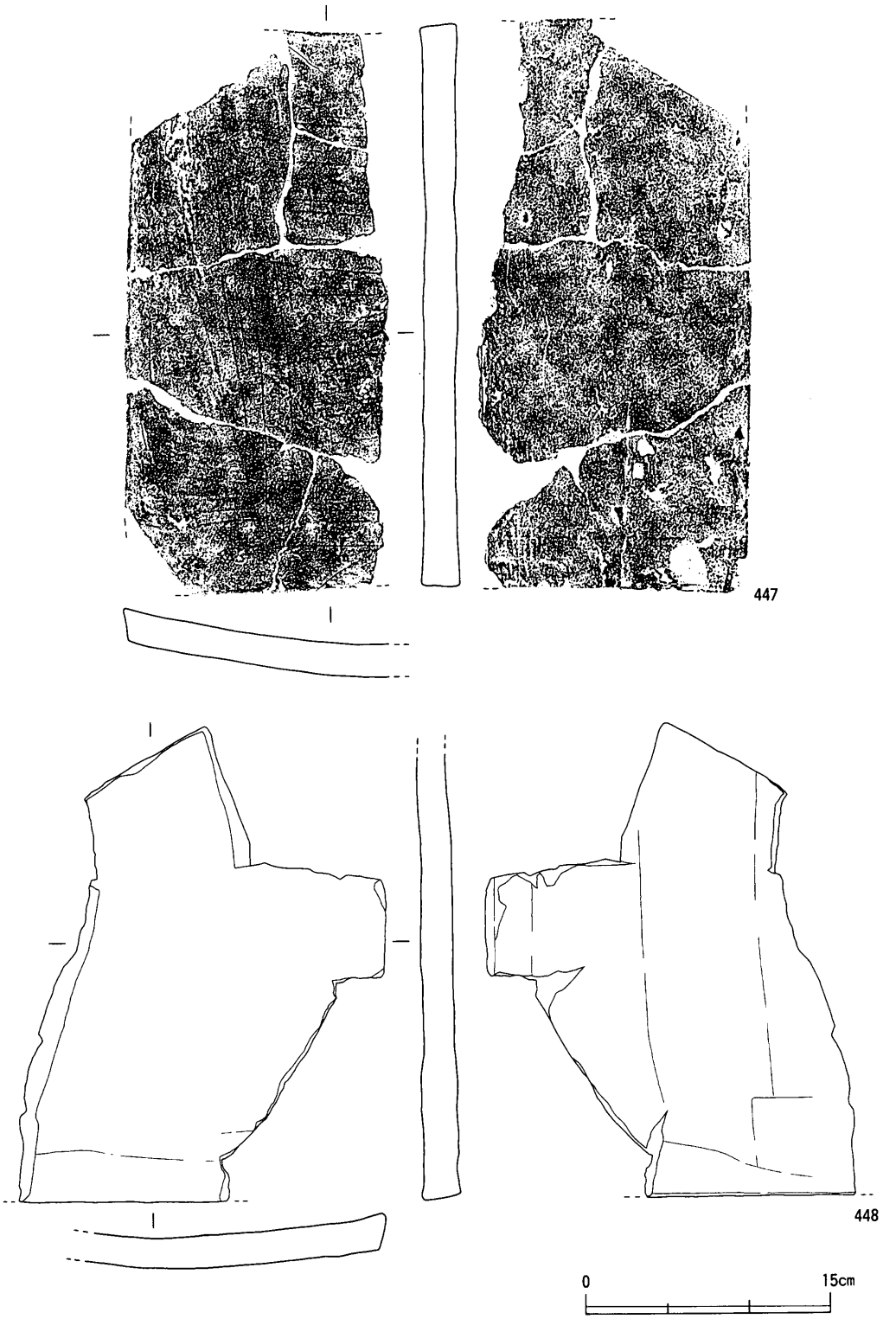
第153図　ＳＸ０３石積み内埋土出土遺物（１）（陶磁器猪口・碗・皿Ｓ＝1/3，壺はＳ＝1/4）

部をもち，2個の小孔を伴う内耳が1対みられる。

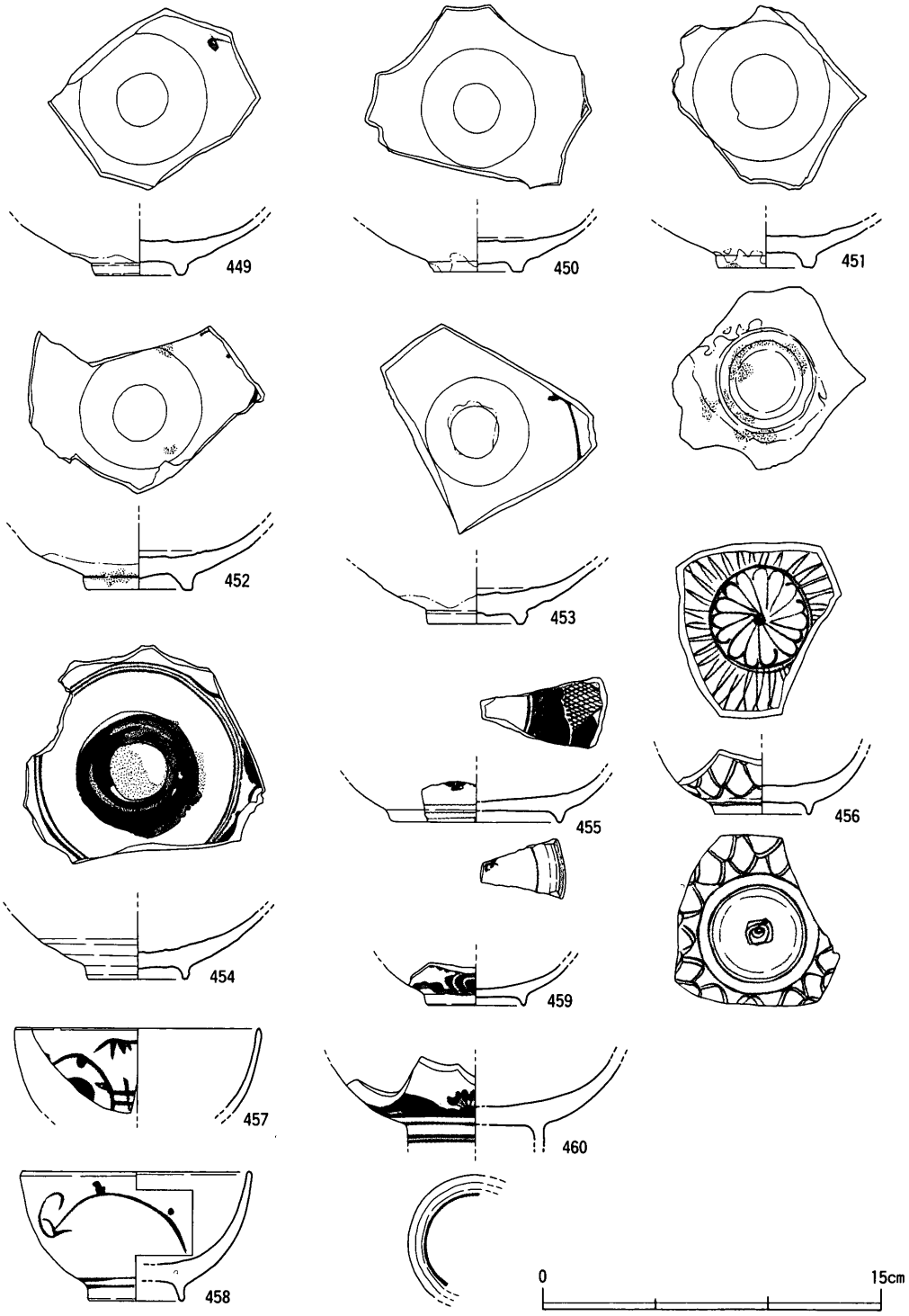
軒丸瓦の文様は2種類認められる。443・444は右巻きの巴文と8個の珠文をもつもので同笵である。巴文は尾の部分が繋がって圏線をなしている。圏線の径は5cm，外縁径は12cm前後を計り，比較的バランスのとれた瓦当面をなしている。445は左巻きの巴文と8個の珠文をもち巴の尾は互いに接して圏線状をなすが，個々の尾の巻き方がばらばらであるために，443・444ほど明瞭な正円形とはならない。軒平瓦（446）は，極めて簡略化された中心飾りから2回反転する唐草文が左右に伸びる，均整唐草文を瓦当面にもつ。これらの軒瓦の瓦当面には，離れ砂の痕跡が明瞭である。447の凹面には強いナデ調整の痕跡がみられる。まず横方向にナデて，その後側縁に近い部分を縦方向にナデ調整する。凸面にはコビキ痕がみられる。



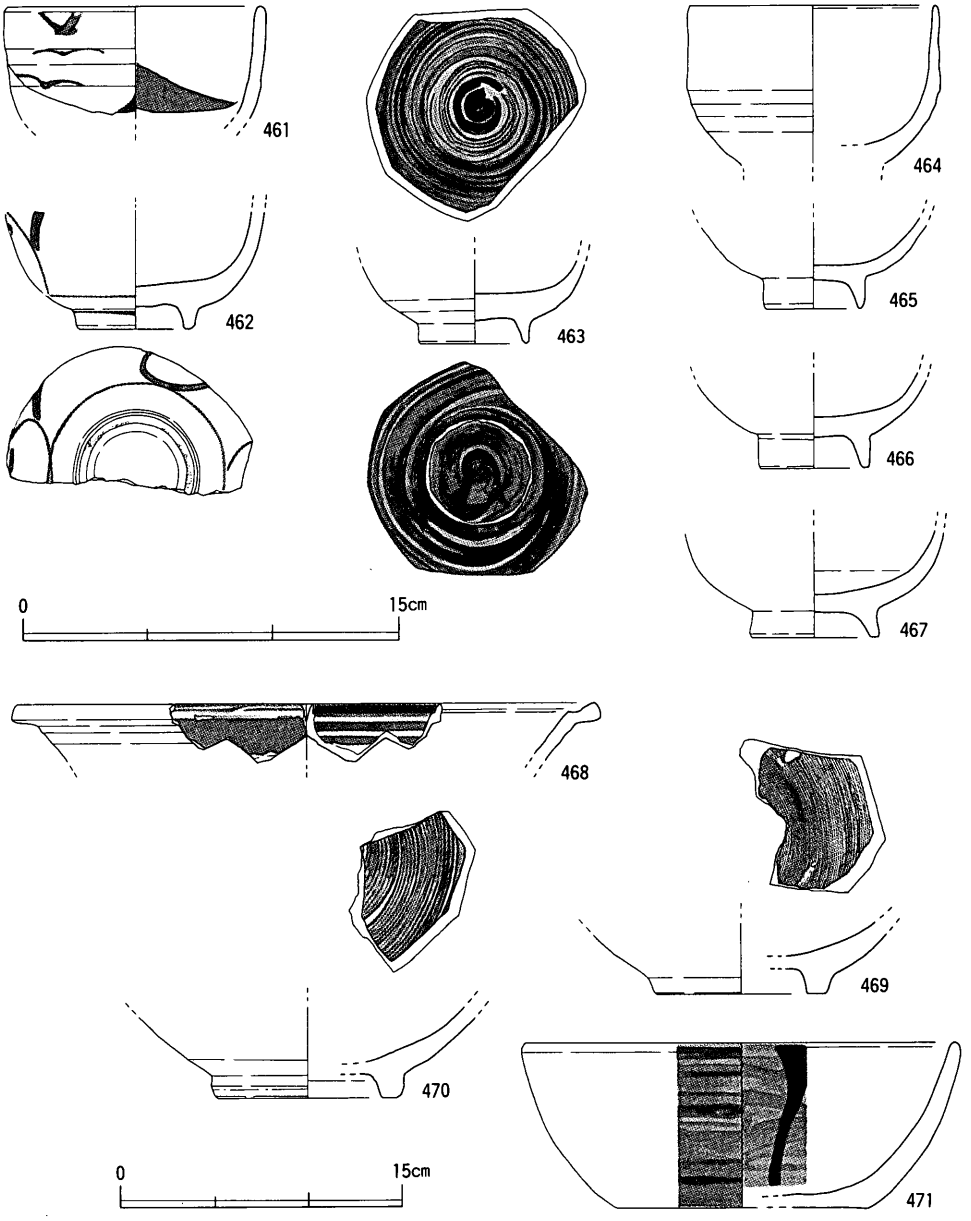
第154図　ＳＸ０３石積み内埋土出土遺物（２）（Ｓ＝1/4）



第155図　ＳＸ０３石積み内埋土出土遺物（３）（Ｓ＝1/4）



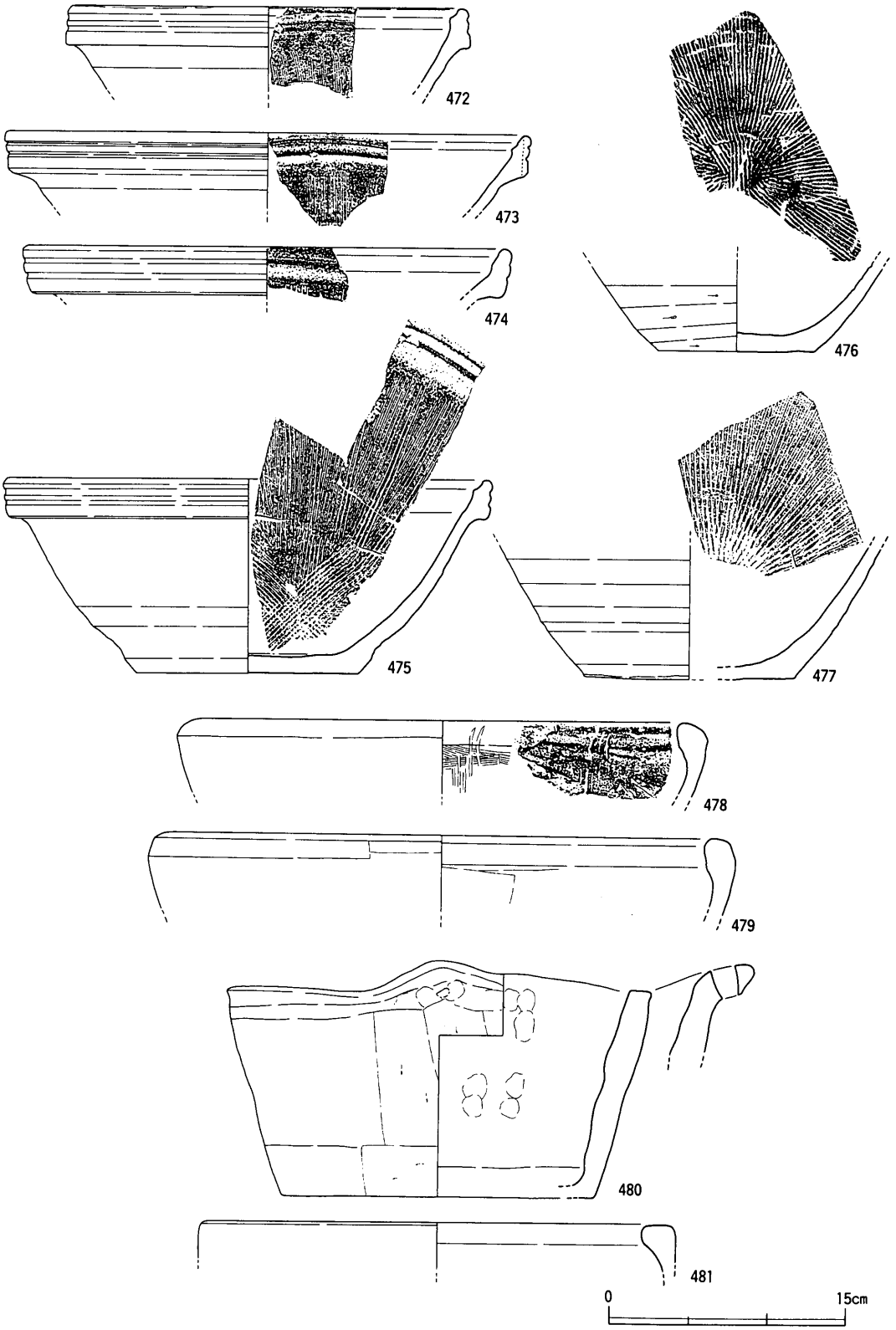
第156図　ＳＸ０３石積み裏込め土出土遺物（１）（Ｓ＝1/3）



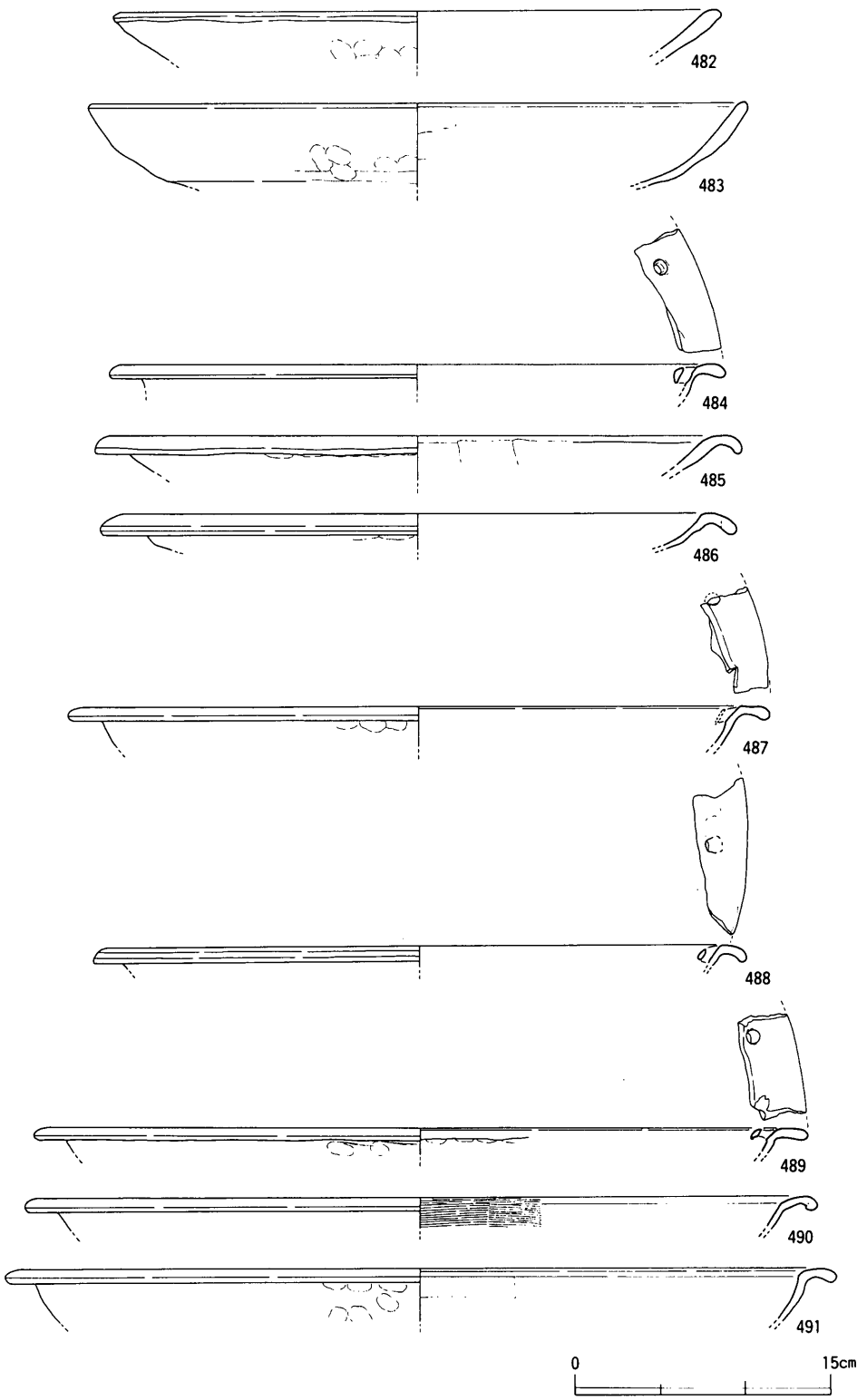
第157図　ＳＸ０３石積み裏込め土出土遺物（２）（陶磁器碗Ｓ＝1/3，他はＳ＝1/4）

石積み裏込め土出土遺物（449～499）

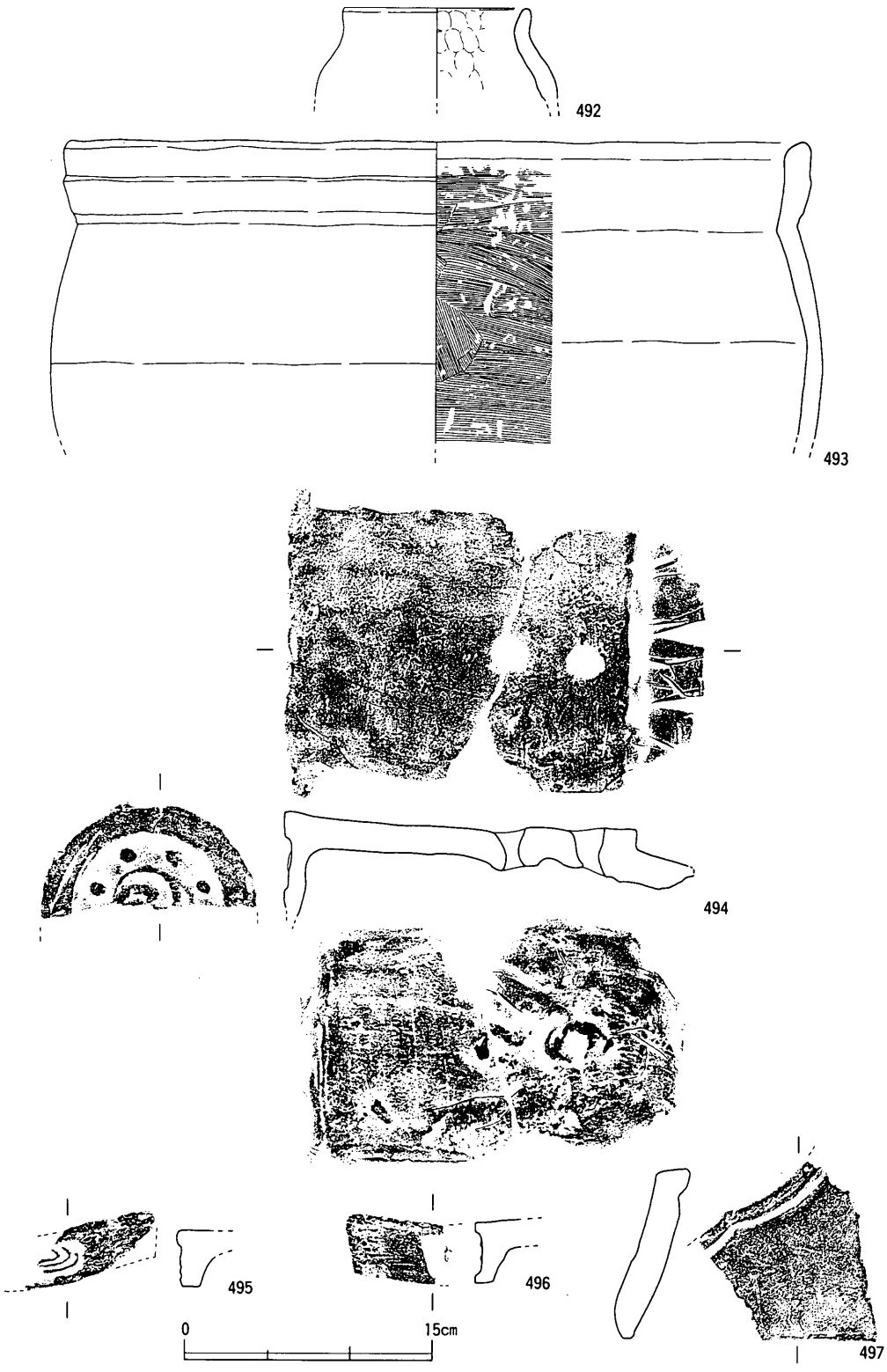
肥前系磁器皿（449～455）・磁器碗（456～460）・陶器碗（461～467）・陶器鉢（468～470），産地不明陶器鉢（471），備前系擂鉢（472～477），土師質擂鉢（478・479）・火鉢（480）・焜炉（481）・焙烙（482～491）・甕（493），瓦質小壺（492），軒丸瓦（494）・軒平瓦（495・496），不明瓦製品（497），石臼（498・499）などが出土した。碗皿類を肥前系陶磁器が，



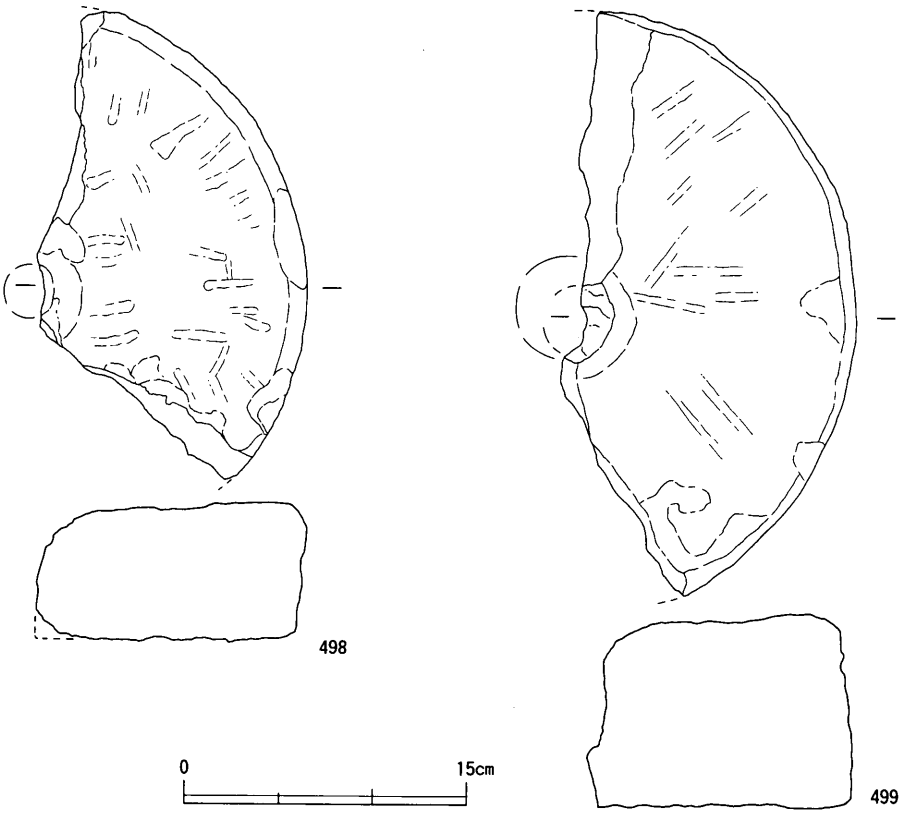
第158図　ＳＸ０３石積み裏込め土出土遺物（３）（Ｓ＝1/4）



第159図　ＳＸ０３石積み裏込め土出土遺物（４）（Ｓ＝1/4）



第160図　ＳＸ０３石積み裏込め土出土遺物（５）（Ｓ＝1/4）

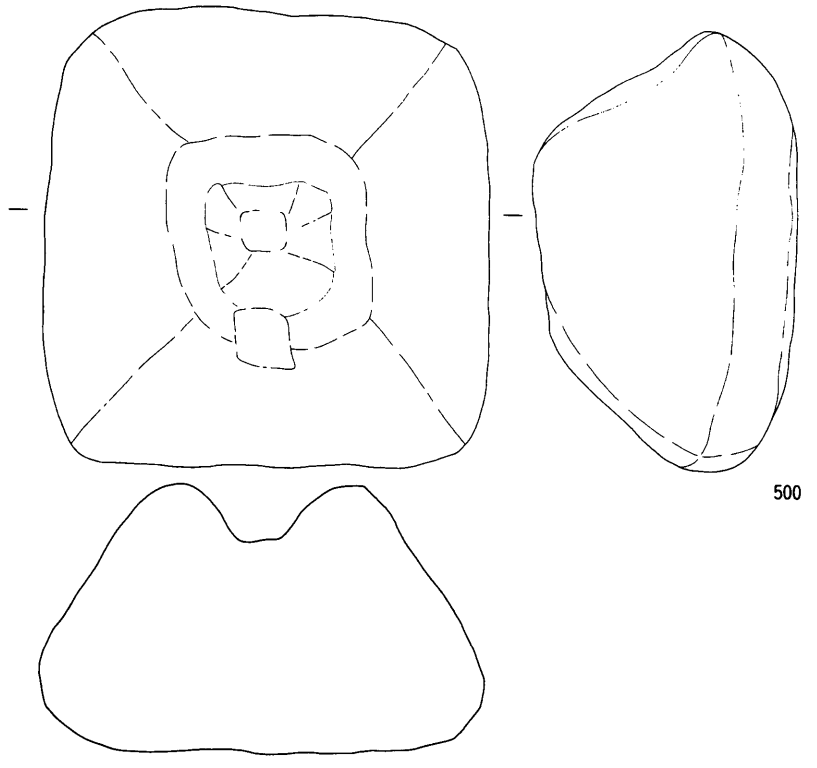


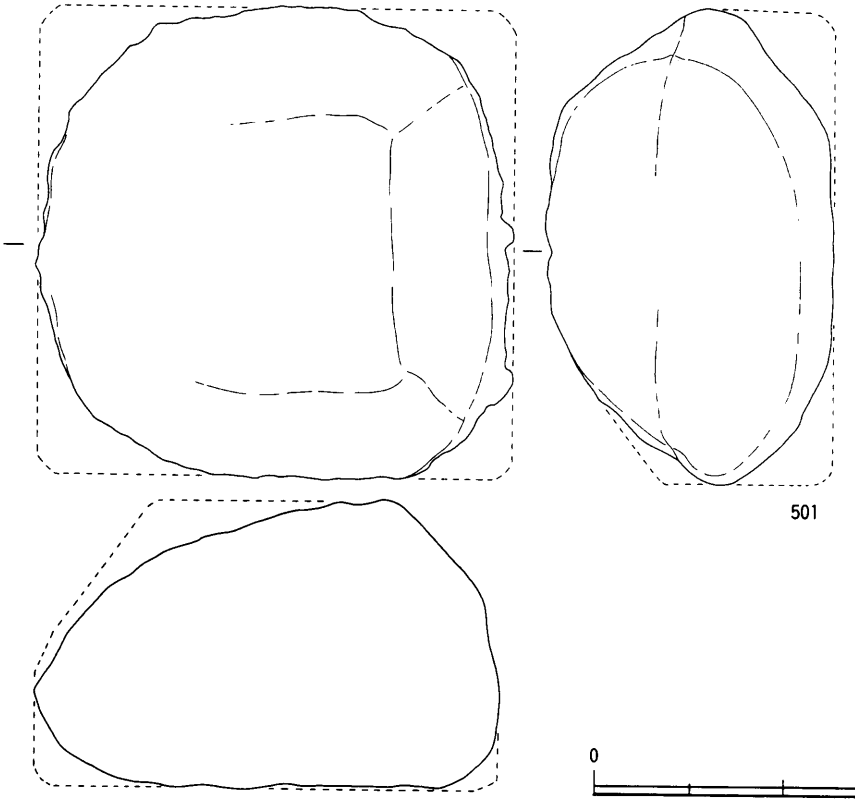
第161図　ＳＸ０３石積み裏込め土出土遺物（６）（Ｓ＝1/4）

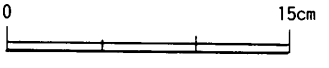
擂鉢を備前系陶器が，そして火にかける焙烙や火鉢・焜炉を在地産土器が明瞭に機能分担していることが読み取れる。

磁器皿は，見込み蛇ノ目釉剝ぎした「底狭形」のもの（449～453）が目立った存在である。454は蛇ノ目釉剝ぎの後，そこに鉄釉を施す。455は，ＳＫ０９出土皿（214・215）やＩ区北半部包含層出土皿（610～612）と同形もしくはいずれかと同一個体の可能性をもつものである。底部外面には「化？」（大明成化年製？）の裏銘がみられる。456は外面に二重網目文，内面に一重網目文と菊花文を施すもので，埋土内出土碗（424）と同一文様である。底部外面には渦福文がみられる。463の内外面には，轆轤刷毛目が施されている。464～467は呉器手の碗である。高台の高いもの（464・465）とやや低いもの（466）の２者がある。468は鍔縁形の口縁部をもつ。469・470は刷毛目鉢である。以上の肥前系陶磁器は，ほぼ18世紀前葉～中葉の所産と捉えられ，石積み内埋土出土の遺物と大きな時期差を指摘することができない。

471は産地不明の陶器鉢であり，内外面に轆轤回転を利用して化粧土状の鉄釉を施して



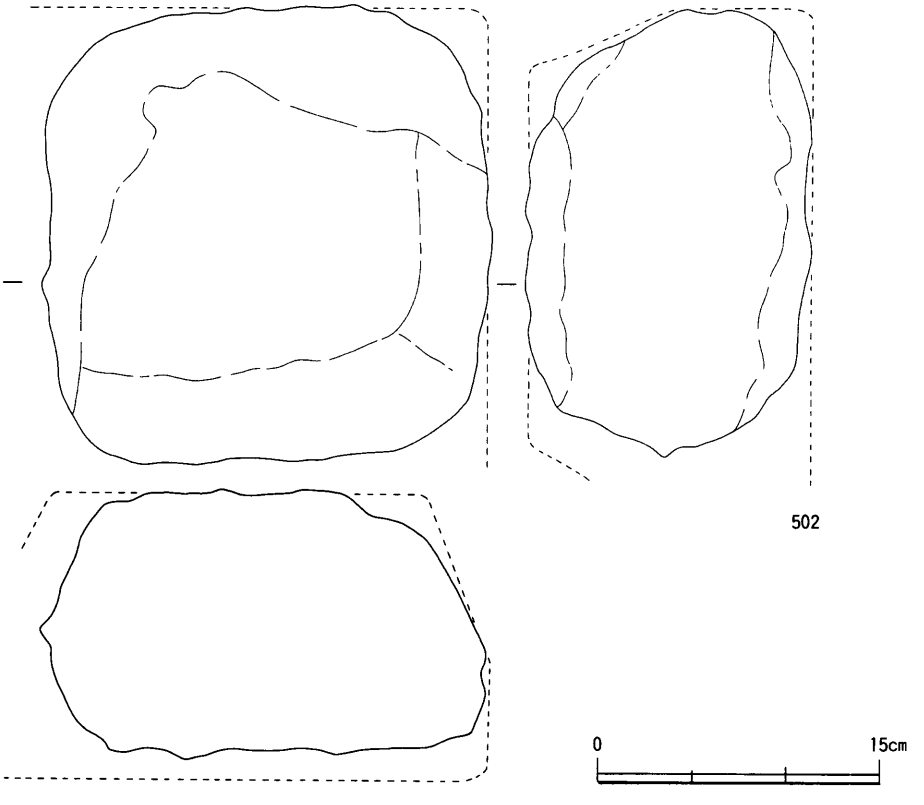




第162図　ＳＸ０３石積み内出土遺物（１）（Ｓ＝1/4）

いる。あるいは備前系か。備前系擂鉢（472～477）は，口縁部の形態や調整，卸し目や胎土・焼成から，備前窯産と考えられる。478・479は，内弯して肥厚する口縁部をもち，内面に数本単位の卸し目を弱く疎らに施す。480は土師質焼成であるが，内面を粗く調整し，外面を丁寧に板ナデする手法や，瓦に近似した胎土などの特徴は，他の瓦質火鉢と共通する。焙烙（482～491）は，口縁部が直線的に伸びる一群（482・483）と，口縁部が外反し内耳が付されるものの一群（484～491）の2者存在する。内耳にあけられた円孔は，いずれも貫通しており（484・487～489），完全に痕跡化したものは認められない。492は瓦質の小壺である。493はＳＫ０９出土遺物（280）と同一個体か。

軒丸瓦（494）は，左巻きの巴文をもつが，巴の形態や珠文の位置が同じ左巻きの事例（405・445）とは異なっており，別の笵によるものと考えられる。丸瓦部には2個の釘穴があけられる。495は3本の線を流水状に反転させる軒平瓦である。ＳＫ０９出土瓦(295)と同笵か。497は形態不明の瓦製品である。図示した上端と下端は削りによる明瞭な縁をなしており，火鉢などの容器とは考えられない。装飾瓦の一部か。



第163図　ＳＸ０３石積み内出土遺物（２）（Ｓ＝1/4）

498・499は凝灰角礫岩製の挽き臼である。表面が荒れており，臼の目の分割パターンや1単位の数は明らかではない。

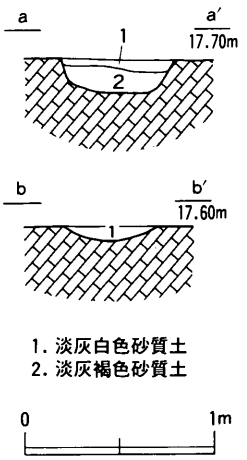
石積み内出土遺物（500～502）

500～502は，石積みの基底石に転用されていた五輪塔の火輪である。石材は石臼と同じく凝灰角礫岩である。

6．溝状遺構

［ＳＤ０３］（第164・165図）

Ⅰ区北半部中央で検出した，東西方向に延びる溝である。主軸方位はＮ－60～63.5°－Ｅであり，西半部は周辺地割と一致する。また重複状態からＳＤ０１・０２，ＳＫ０４より後出し，ＳＸ０３に先行することがわかる。規模は幅0.35～0.85m，深さ0.11mを測る。

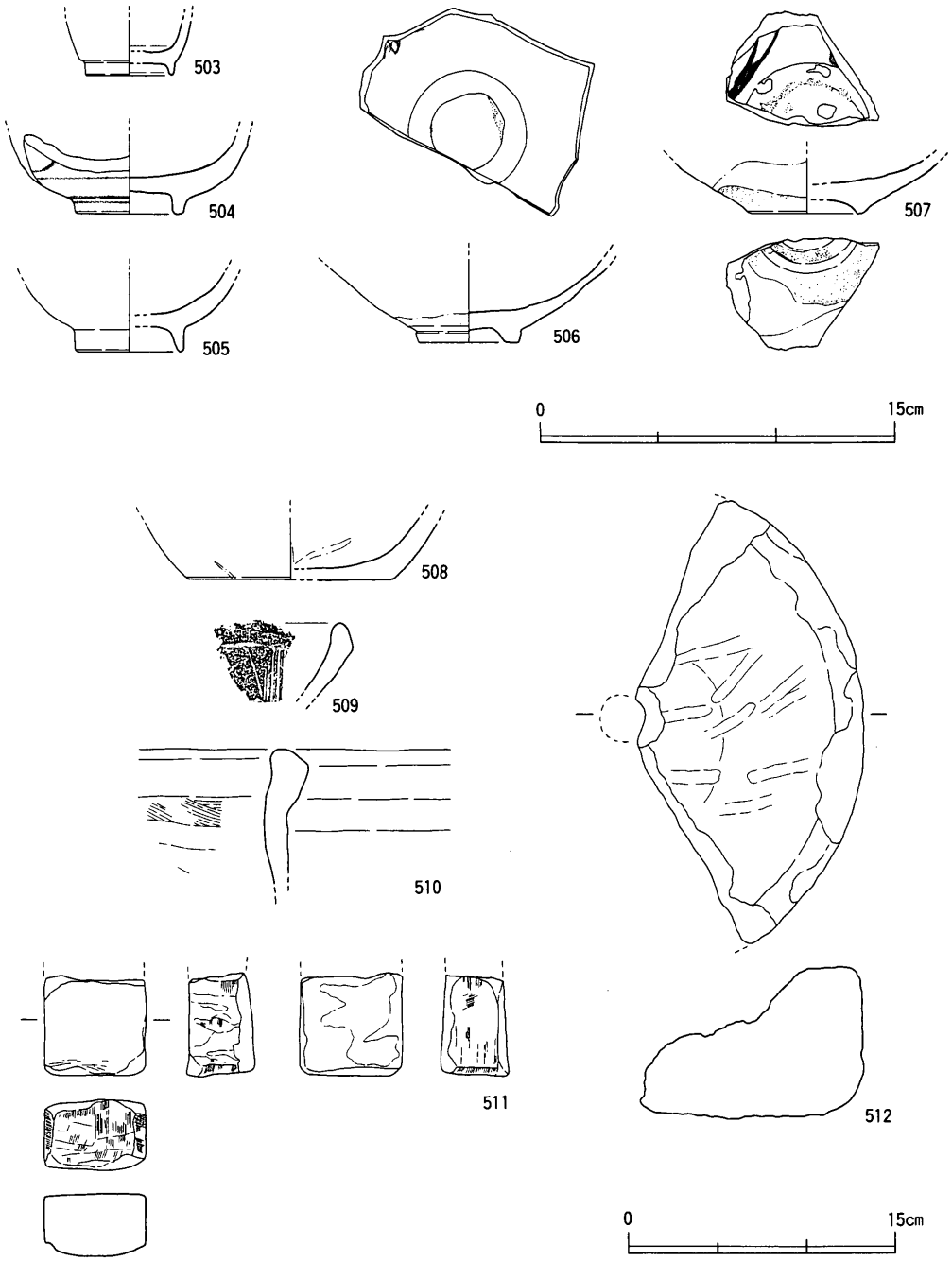


第164図　ＳＤ０３
断面図(S＝1/40)

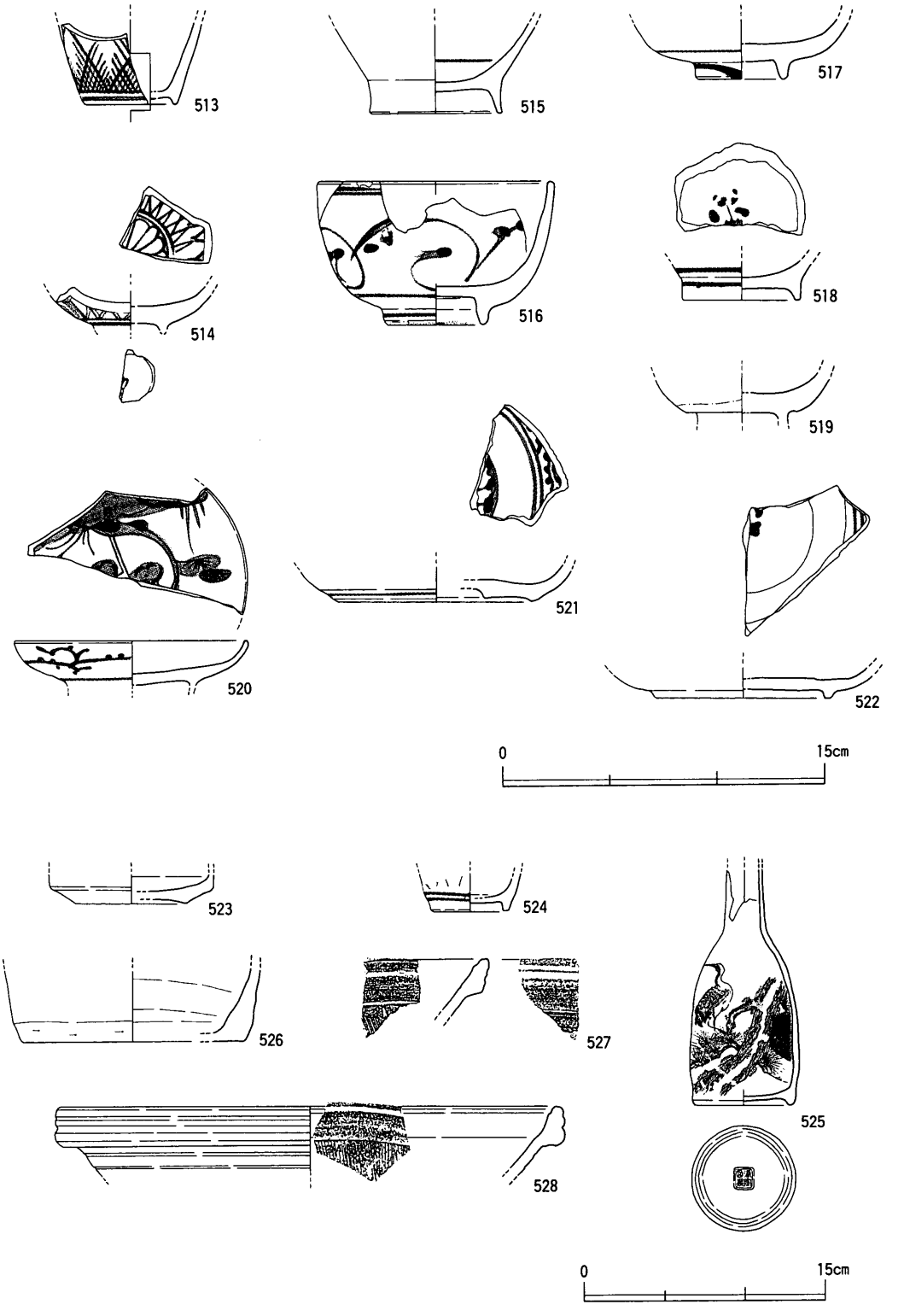
埋土中から，肥前系磁器猪口（503）・陶器碗（504・505）・磁器皿（506）・陶器皿（507），備前系（？）陶器鉢（508），土師質擂鉢（509）・甕（510），砥石（511）・石臼（512）が出土した。肥前系陶磁器は大半が18世紀前葉～中葉の所産とみられるが，507のみやや遡る可能性がある。509は内弯して肥厚する口縁部をもち，内面には卸し目が疎らに施される。510は肥厚する口縁部をもつが，内面は強いナデ調整によって凹面をなしており，ＳＫ０８出土甕（164）とＳＫ５８出土甕（393）との中間的な形態をもつ。511は砂岩製の砥石である。512は凝灰角礫岩製の挽き臼である。上面が擂鉢状に窪み，そこに臼の目状の条線が認められる。形態的には上臼に近いが，芯棒孔が貫通していることから下臼であることに相違ないと思われる。あるいは上面の窪みは下側のえぐりであり，臼の目状の条線は製作時の加工痕であろうか。そうだとすれば，図示した上下は反対になるが，臼の目が施されなかったことになり，臼の構造・機能に若干の問題を残す。

［ＳＤ４５］（第166～169図，図版12）

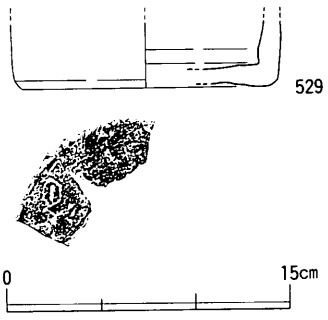
Ⅲ区東半部で検出した溝で，鍵の手状に延びる。主軸方位はＮ－27°－Ｗであり，周辺地割よりもわずかに東に偏する。規模は幅0.3～2.0m，深さ0.57mを測る。調査開始直前ま



第165図　ＳＤ０３出土遺物（陶磁器猪口・碗・皿Ｓ＝1/3，他はＳ＝1/4）



第166図　ＳＤ４５出土遺物（Ⅰ）（陶磁器猪口・碗・皿Ｓ＝1/3，他はＳ＝1/4）

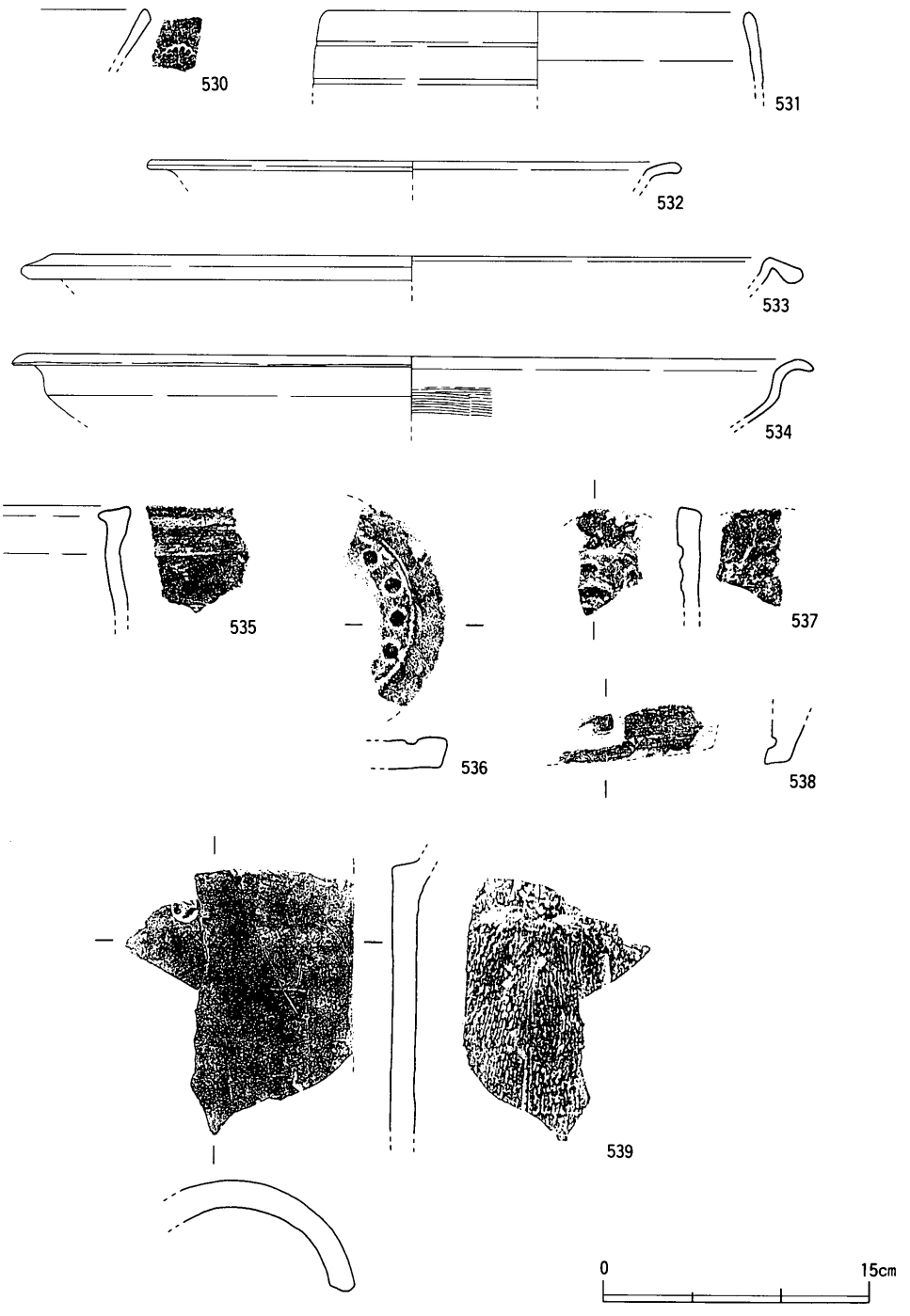


第167図　ＳＤ４５出土遺物（２）
（Ｓ＝1/4）

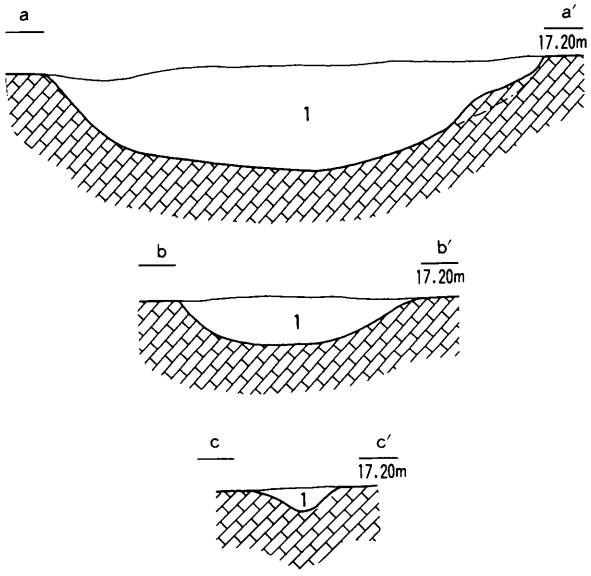
で機能していたため，埋土中の遺物には近世陶磁器から新しいガラス製品まで，かなりの時期幅が認められる。

主な遺物としては，肥前系磁器猪口（513）・磁器碗（514・515）・陶器碗(516・517・519)・磁器皿(520～522)・磁器瓶（524），瀬戸美濃系と推測される陶器碗（518）・段重（523），産地不明磁器瓶（525），備前系鉢（526）・擂鉢（527・528）・鉢（529),瓦質鉢（530）・羽釜（531）・焙烙（532），土師質焙烙（533・534）・甕（535），軒丸瓦（536・537）・軒平瓦（538）・丸瓦（539）などがある。一見して他の近世遺構と異なるのは，以下の諸点であろう。すなわち，①瀬戸美濃系陶器が少量みられること，②備前系擂鉢に堺産がみられること，③在地産土器に回転台成形の瓦質品（531）がみられること，である。この３つの特徴をもつ遺物は，いずれも19世紀代以降の製作年代が付与でき，Ｉ区を中心とした近世遺構廃絶後の陶磁器・土器の流通状況や技法上の変化の一端を示している。

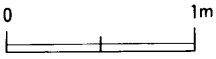
515は肥前系の広東碗であり，18世紀後葉以降の年代が想定される。520は外面に唐草文，内面に松が描かれるもので，あるいは蓋になるかもしれない。521は内面に蛸唐草文を施し，体部と一体化した低い蛇ノ目凹形高台をもつ。520・521も広東碗と並行する時期の所産とみてよかろう。525は産地不明の磁器瓶であり,外面には鶴と松がプリントされている。底部外面には「源陶園製」の裏銘が，やはりプリントで施されている。19世紀後葉以降の所産であろう。528は堺産の擂鉢である。白神典之氏編年のIII型式にあたり，19世紀中葉以降の年代が想定できる。529は底部外面に刻印が押されている。530は体部外面に菊花のスタンプが押される。531は体部内外面に顕著な回転ナデが施されるものであり，恐らく鍔部や底部を外型成形していると考えられる。19世紀後葉以降の所産であろう。534は直立する体部上端と，そこから緩やかに外反する口縁部をもつ。在地産の焙烙（内耳を伴う系統)とは若干異なった形態であり，あるいは搬入品かもしれない。535は口縁部内面に突帯状の端部の折り込みがみられる。539の外面には刻印が押される。



第168図　ＳＤ４５出土遺物（３）（Ｓ＝1/4）



1. 灰黒色粘質土



第169図　ＳＤ４５断面図（Ｓ＝1/40）

第7節　包含層出土の遺物

1．Ⅰ区南半部包含層（第170図）

第3章第1節で既に述べたように，Ⅰ区南半部では弥生～古代の包含層である第Ⅲａ・ｂ層が比較的良好に遺存しており，その上に堆積していた第Ⅱ層（床土・近世包含層）には近世遺物がほとんど認められなかった。以下，古代の遺物を中心に報告したい。

土師器杯・椀（540～545）　いわゆる「回転台土師器」にあたる。540・542は9世紀後葉～10世紀前葉頃の所産とみられ，形態・技法的に須恵器と同一である。541は比較的厚い器壁をもち，口径も15cm前後に及ぶとみられるが，底部に回転糸切りが施されることから，13世紀代のものと考えられる。543～545は11～12世紀頃のものであろう。

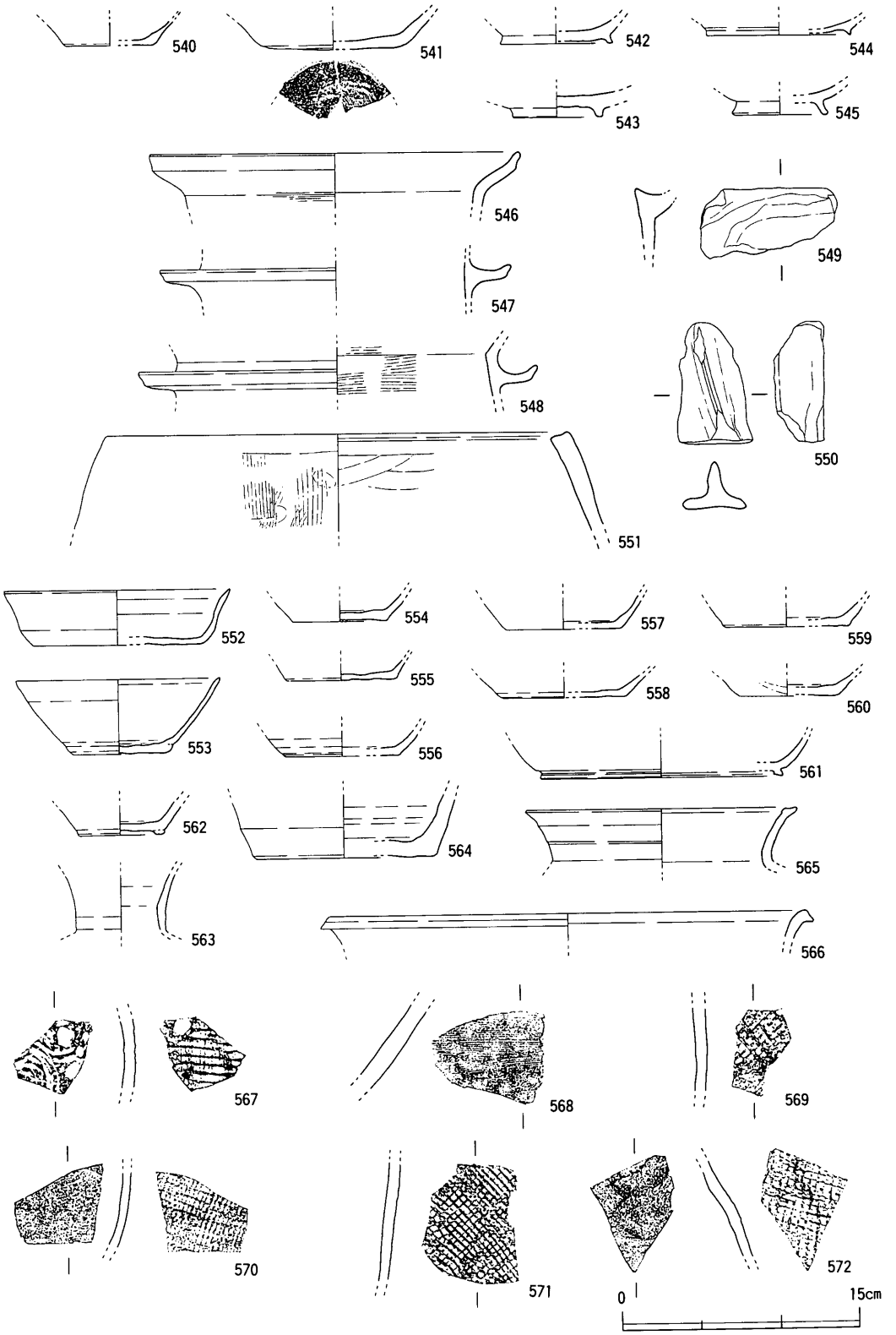
土師器羽釜（546～548）　「く」の字形に明瞭に屈曲する口頸部と，そこからやや下った位置に貼付される鍔部をもつ。体部調整には横ハケが多用されるようである。口縁端部と鍔端部には強い横ナデ調整が行われ，外傾気味の凹面が形成される。胎土中には2㎜以下の砂粒が比較的多く含まれる。

土師器甕（549～551）　細片のために全体の形状は不明である。胎土は羽釜に近似する，やや粗いものである。

須恵器杯（552～562）　無高台の一群（552～560）と高台付の一群（561・562）があるが，時期的には8世紀代のものは少なく（552・561），大半が9世紀後葉～10世紀前葉頃にあたるものである。9～10世紀頃の事例は8世紀代に比べて全体に焼成が甘く，かなり軟質なものも見受けられる。また器面に火だすきを残すものもあり（560），同時期の十瓶山窯跡群産須恵器の特徴をよく示す。562はすべっと2号窯跡に類例がある。

須恵器壺・甕（563～572）　8世紀代とみられるものには565・567・568があるが，他の多くは9～10世紀代の所産とみられるものである。大半が十瓶山窯跡群産の可能性をもつ。

以上のように，時期的には9～10世紀代を主体としていることが土師器・須恵器ともに読み取れ，中世にまで下る資料は少ない。こうした状況は，調査区南方の遺跡の動向をある程度は示唆するものではあろうが，遺物はいずれも細片が多いために，調査区直近に該期の集落を想定できるかどうかは，なお検討を要する。



第170図　Ⅰ区南半部包含層出土遺物（S＝1/4）

2．I区北半部包含層（第171～183図）

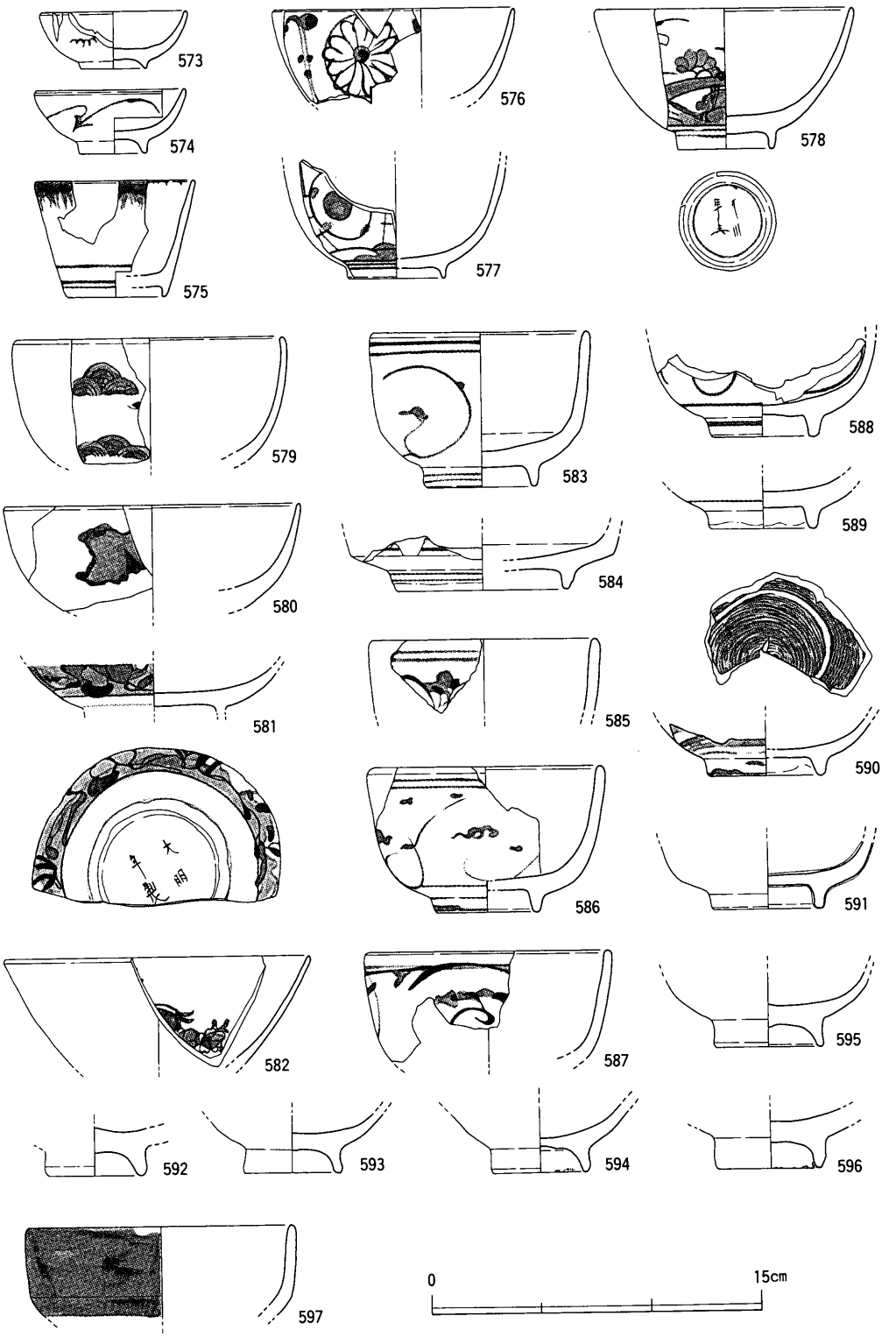
地山直上に堆積した第Ⅰ・Ⅱ層から，多量の近世陶磁器・土器・瓦が出土した。重複して存在する近世遺構の遺物と同じ形態や文様をもつものも多く，ことに浅く広い廃棄土坑であるＳＫ０９からの二次的な移動が考えられるものが目に付く。

磁器猪口（573～575）　「紅猪口」（573・574）と「そば猪口」（575）がある。573・574の高台は矮小化しておらず，比較的しっかりしている。18世紀中葉～後葉頃か。574の高台は外傾する体部から直線的に連続しているが，明瞭に突出している。18世紀代のものであろう。いずれも肥前系とみられる。

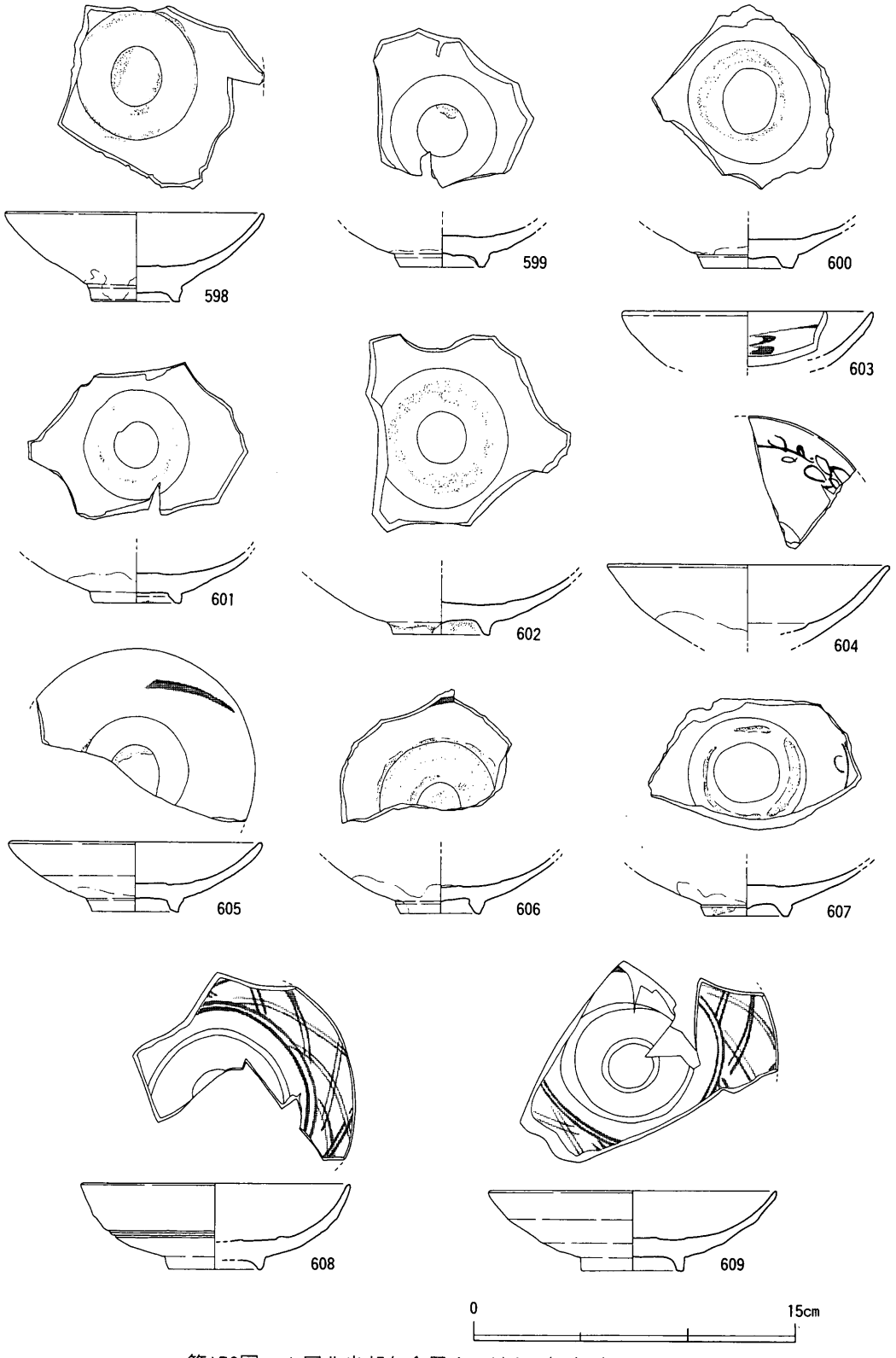
磁器碗（576～584）　全て肥前系である。文様はかなり多様であるが，図柄としてはいずれも18世紀前葉～中葉頃に一般的なものである。576は外面に菊花文と草文が描かれ，ＳＸ０３埋土出土碗（427）と同一個体かもしれない。577はＳＸ０３石積み裏込め土出土の碗（457）と同一個体か。578の底部外面には「大明年製」崩れ銘が，また581の底部外面には崩れていない「大明年製」銘がみられる。580の体部外面にはコンニャク印判が施される。また，582は「うがい茶碗」であり，ＳＫ０６出土碗（140）と同一個体の可能性がある。583・584は陶器碗と似た形態・文様をもつ。584は「蓋物」か。

陶器碗（585～597）　肥前系（585～596）と瀬戸美濃系（597）があり，圧倒的に肥前系が多い。肥前系には，全体がやや厚手で唐草文などを簡略化して施文する陶胎染付碗（585～589），鉄釉の上に白泥による轆轤刷毛目を施す刷毛目碗(590)，高い高台をもち黄橙色を呈する呉器手碗（592～596）がある。瀬戸美濃系の碗は，「せんじ」と呼ばれる湯呑みである。体部から口縁部にかけて鉄釉が施される。製作時期は，585～589が18世紀代，590が18世紀前半，592～596が17世紀後葉に該当しよう。597は18世紀中葉か。

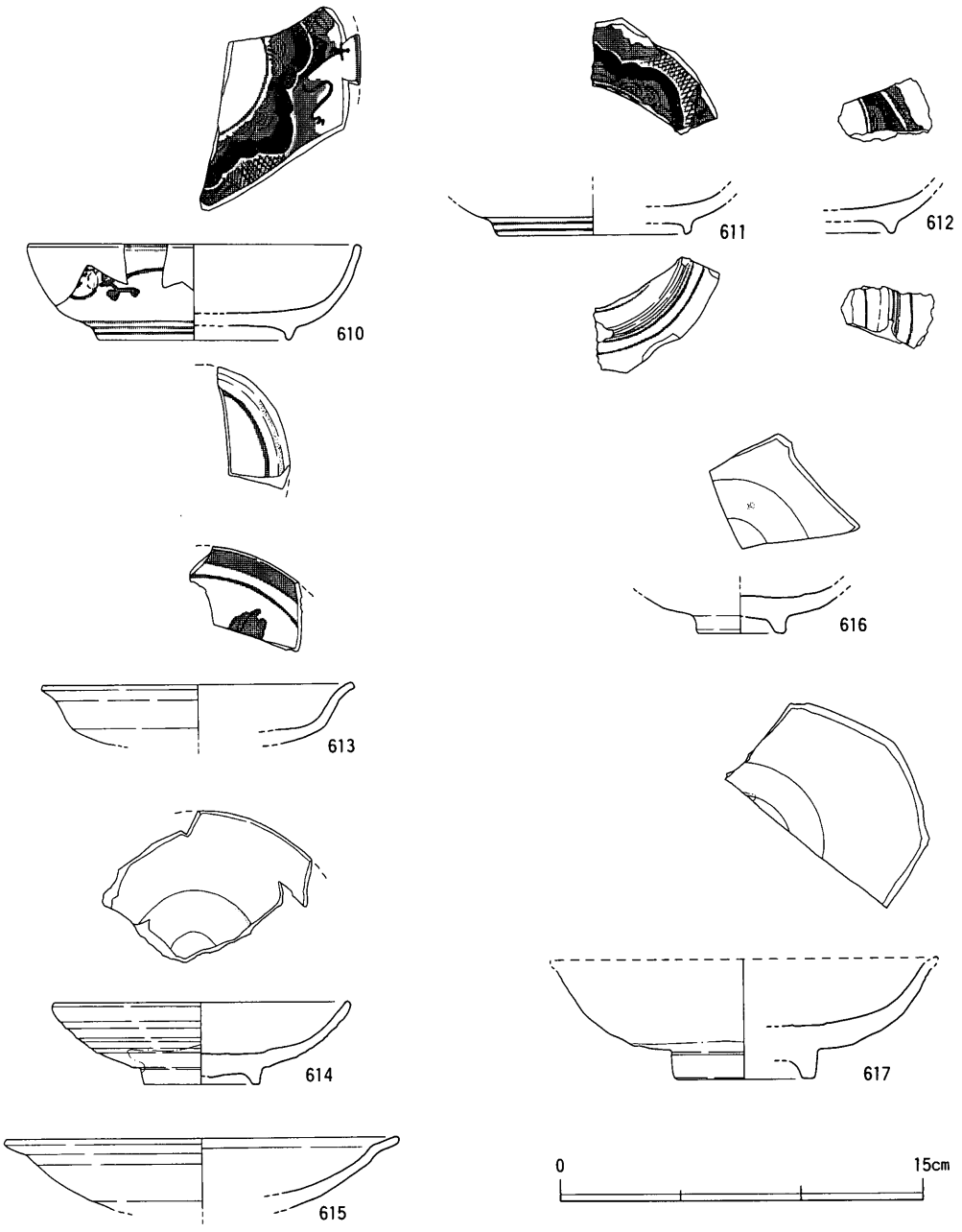
磁器皿（598～613・617）　全て肥前系である。見込みに蛇ノ目釉剝ぎを施す「底狭形」のもの（598～609）が多く，「底中形」ないし「底広形」（610～612）も若干量みられる。前者は，無文もしくは簡略化された草文や幾何学文を施す程度であり，装飾性に乏しい。これに対し後者は，見込みと体部外面への加飾が顕著である。なお610～612は文様が同一意匠であり，同一個体の可能性も否定できないが，色調が若干異なることや同様の破片がＳＫ０９で２片（214・215）みられ，いずれも接合しないにもかかわらず破片の大きさから１個体以上になるのは確実である。したがって既に述べたようにむしろ，数客が１セットになったかたちで購入・保有されていた可能性が高いといえよう。617は大皿（鉢）であ



第171図　Ⅰ区北半部包含層出土遺物（1）（S＝1/3）



第172図　Ⅰ区北半部包含層出土遺物（２）（S＝1/3）



第173図　Ⅰ区北半部包含層出土遺物（３）（S＝1/3）

る。肥前陶器に盛行した青緑釉皿であり，磁器としては本遺跡ではこれのみである。製作時期は598～612・617が18世紀前葉頃であろう。

陶器皿（614～616）　全て肥前系の青緑釉皿で1690～1740年代の製作であろう。615は折縁形である。

陶器鉢（618～620）　全て肥前系ないしその可能性があるものである。618は「腰折形」で体部外面には刷毛目が施される。619は内面に刷毛目，外面に化粧土状に錆釉をかけている。底部のほぼ中央に径7㎜程度の意図的な穿孔（焼成後）がみられ，植木鉢に転用された可能性がある。620は片口である。内外面ともに鉄釉が厚く施され，口縁端部のみ拭き取られる。口縁部形態や胎土は肥前系の鉢と同様である。

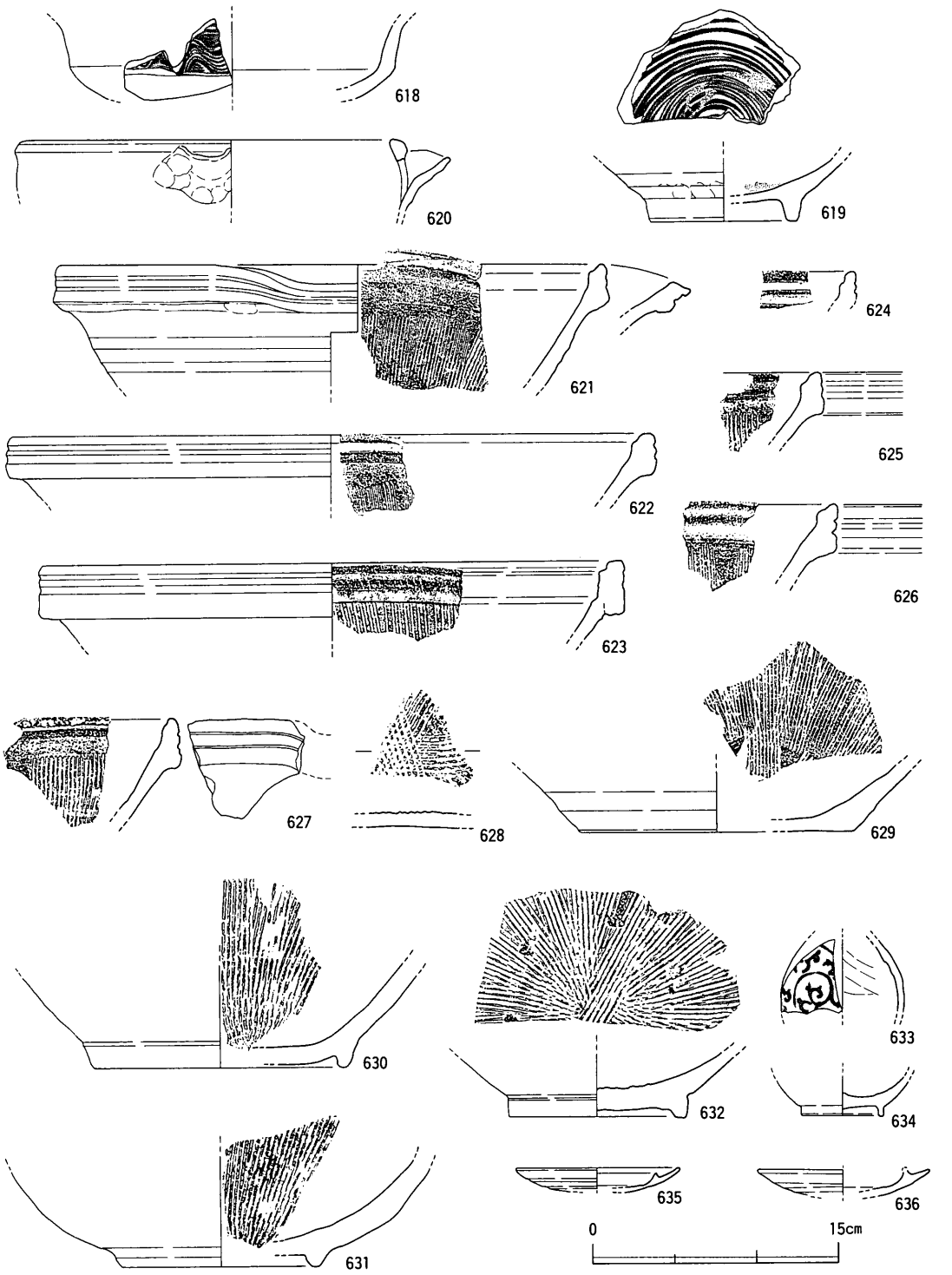
陶器擂鉢（621～632）　ほとんど備前系であるが，632のみ肥前系である。備前系には口縁部形態や重ね焼き痕・胎土・焼成などから，備前窯産と考えられるもの（621・622・624～627・631）がかなりみられる。逆に堺ないし明石産とみられるものが少ない（623・628～630）のは，既に各遺構出土遺物でもみた通りである。備前窯産とみられるものは縁帯が長く立ち上がるものと，縁帯がやや短く太くなったものの2形態存在する。恐らく後者がより新しい時期を示すのであろうが，該期の備前産擂鉢は細かい編年観が提示されておらず，年代を限定するのは困難である。堺･明石産擂鉢は，623が白神典之氏のII型式2段階にあたり，19世紀前半頃のものと考えられる。肥前系擂鉢（632）は，底部から体部にかけて連続した放射状の卸し目が施される。見込みには6方向に砂・胎土目がみられる。

磁器瓶（633・634）　肥前系がある。633は唐草文を施した色絵瓶である。

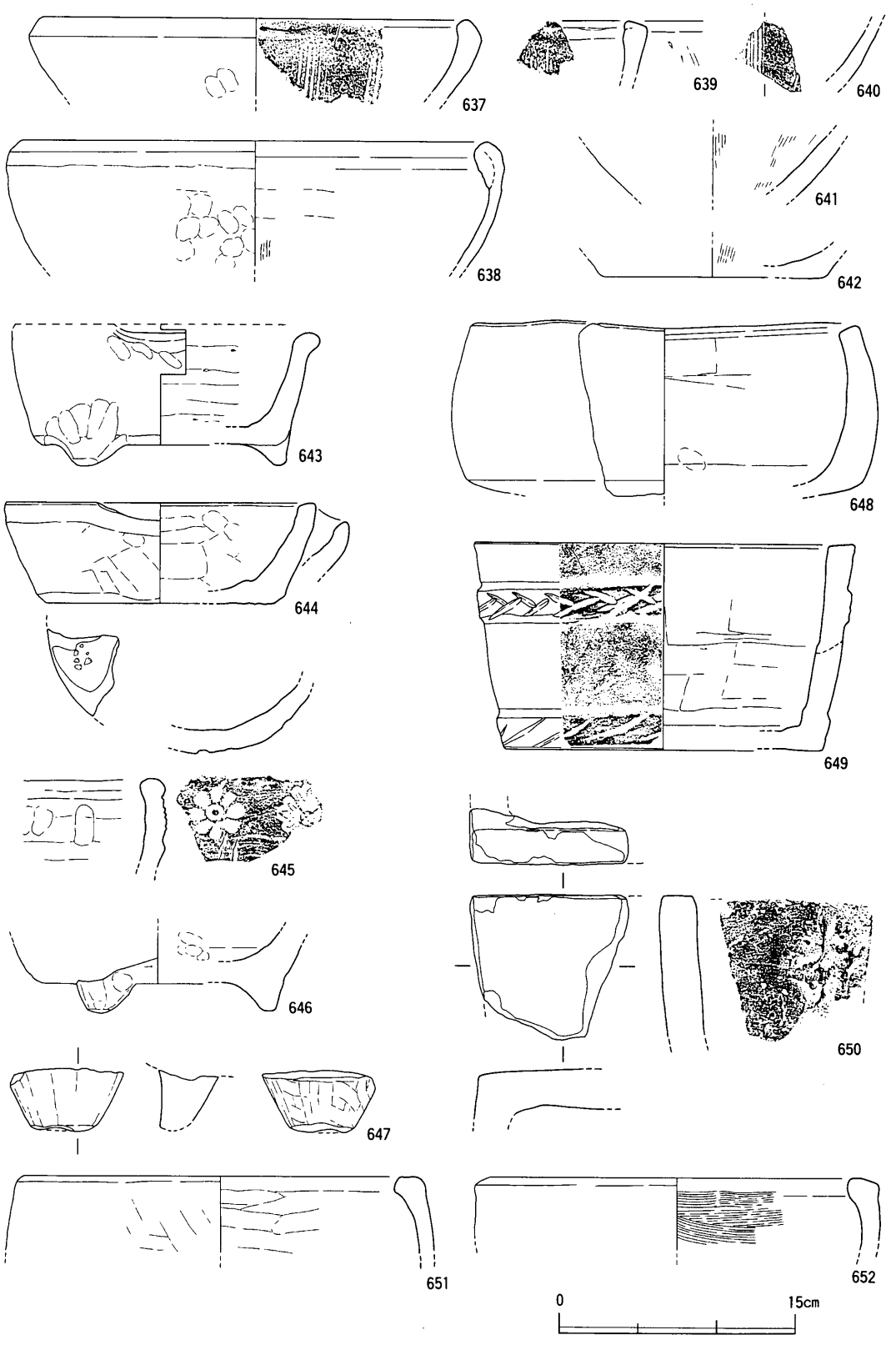
陶器灯明皿（635・636）　還元焔焼成された陶器であり，備前系とみられる。

土師質擂鉢（637～642）　灰白ないし黄橙系の色調をもち，胎土中に雲母を含む一群（637・638・641・642）が多い。内面には，5・6条を1単位とした卸し目が疎らに施されるが，多くは器表の摩滅によって消滅している。恐らく実際に使用されたことによるのであろう。また638の体部外面には煤が付着しており，中世後期以来しばしば認められる鍋兼用の擂鉢であった可能性がある。口縁部形態は，外傾する端面をもち内弯気味に立ち上がるもの（637･638）と，ほぼ直立気味に伸びて肥厚して収まる端部をもつもの（639）がある。

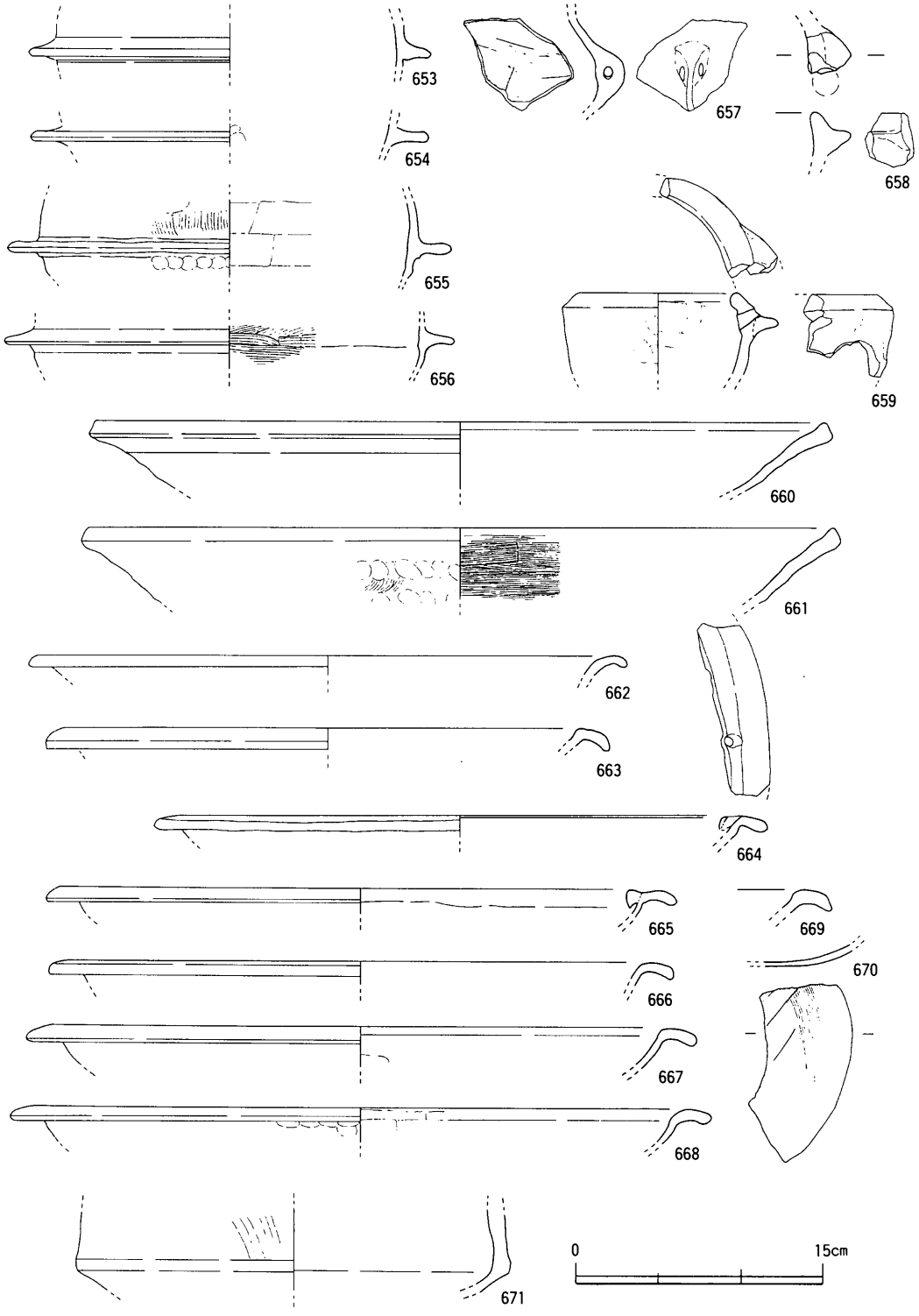
瓦質火鉢（643～650）　比較的砂粒を多く含み，瓦に近似した粗い胎土をもつ一群である。円筒形の器体をもつもの（643～646・648・649）と，平面方形の箱形を呈するもの



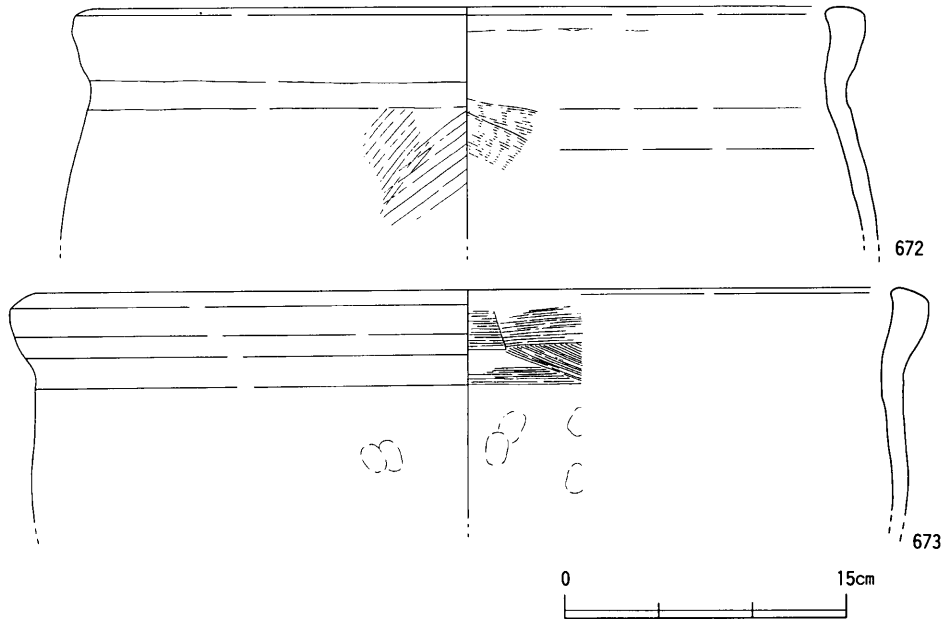
第174図　Ⅰ区北半部包含層出土遺物（４）（S＝1/4）



第175図　Ⅰ区北半部包含層出土遺物（５）（S＝1/4）



第176図　Ⅰ区北半部包含層出土遺物（６）（S＝1/4）



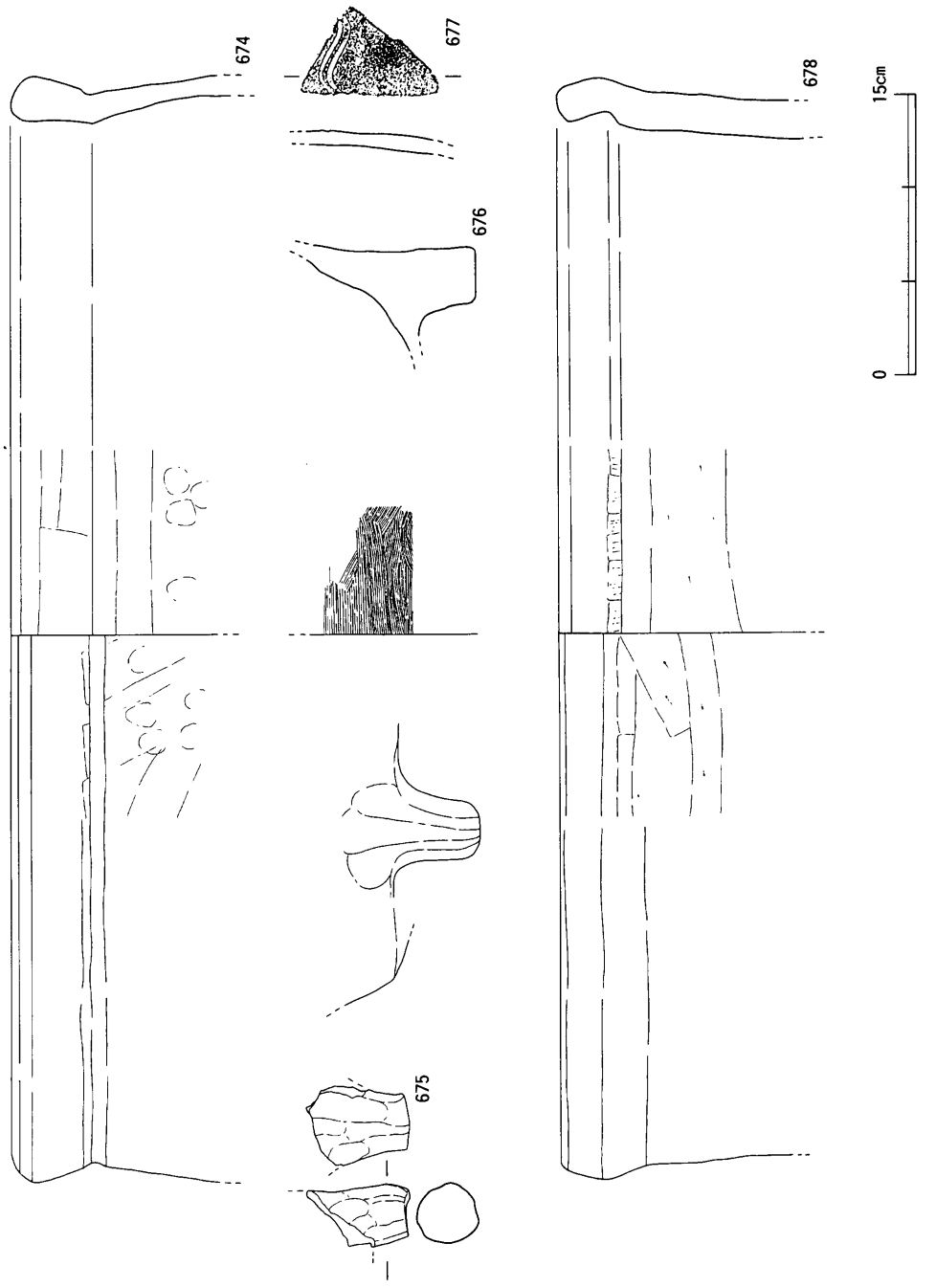
第177図　Ⅰ区北半部包含層出土遺物（７）（Ｓ＝1/4）

（650）がある。いずれも底部の外縁には３方向ないし４方向の脚部が付されるようである。外面の器表は比較的丁寧にナデ調整が行われるが，内面は凹凸の顕著な非常に粗いナデ調整が施されるにとどまる。灰や炭を蓄めるため，内面については丁寧な調整を必要としないのであろう。643･644は片口状の口縁をもつ。644は脚部が剝離しており，接合部にヘラ状工具による刺突痕が観察できる。脚部と底部の付きをよくするための工夫であろう。645は平面隅丸方形を呈する可能性もある。口縁部には印花文がスタンプされる。649は桶形の火鉢で，体部上半と底部外縁にタガを模した２条の突帯が巡る。ＳＫ１０出土の火鉢（350）と同一形態であり，脚部が付されることがわかる。650は箱形の火鉢口縁部である。内面に粗いケズリ状のナデが施される。

土師質焜炉（651・652）　土師質擂鉢に近似した胎土をもち，金雲母の含有量が特に顕著である。口縁部形態は，ＳＫ０９でみた短く内弯する一群（251～258）と同じである。内面には横方向の板ナデもしくは横ハケが行われる。

土師質羽釜（653～657）　鍔部付近（653～656）と口縁部把手（657）の破片がある。焼成は653･654が瓦質との中間的な様相をもつ。655は口縁部外面に櫛目状の粗い縦ハケ調整を施す。

土師質鍋（658・659）　円孔を伴う把手を恐らく１対貼付するものである。中世後期に盛行した把手付鍋に近似するが，本例の場合，口径が非常に小さいことや，縁帯状の鍔部



第178図　Ⅰ区北半部包含層出土遺物（８）（S＝1/4）

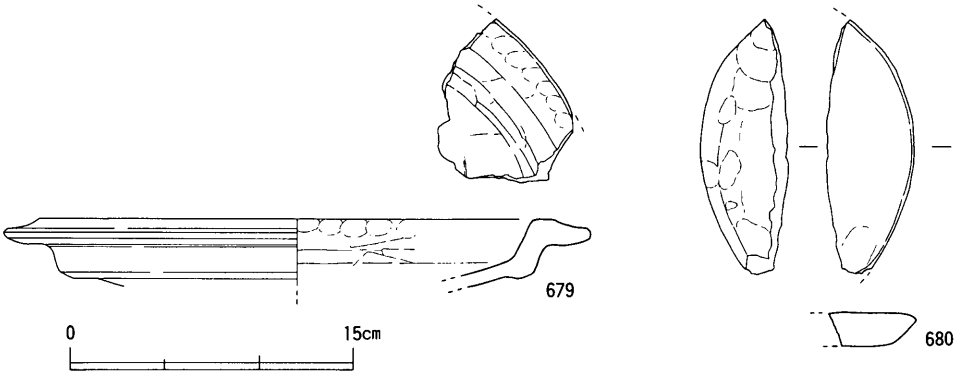
がさらに退化して外傾する端面となっていることが異なる。このため，他の土器群と同様に近世の所産と捉えておきたい。

土師質焙烙（660～671）　ＳＸ０３出土遺物と同様に，口縁部が直線的に伸びるもの（660・661）と，口縁部が外反するもの（662～669）の２者が存在する。670は胎土・焼成状況からみて後者の底部と考えられる。671は関西系の焙烙であり，底部と体部の境を削り，また体部外面に縦ハケ状の掻き取り痕が認められる。難波氏分類のＣ類にあたる。

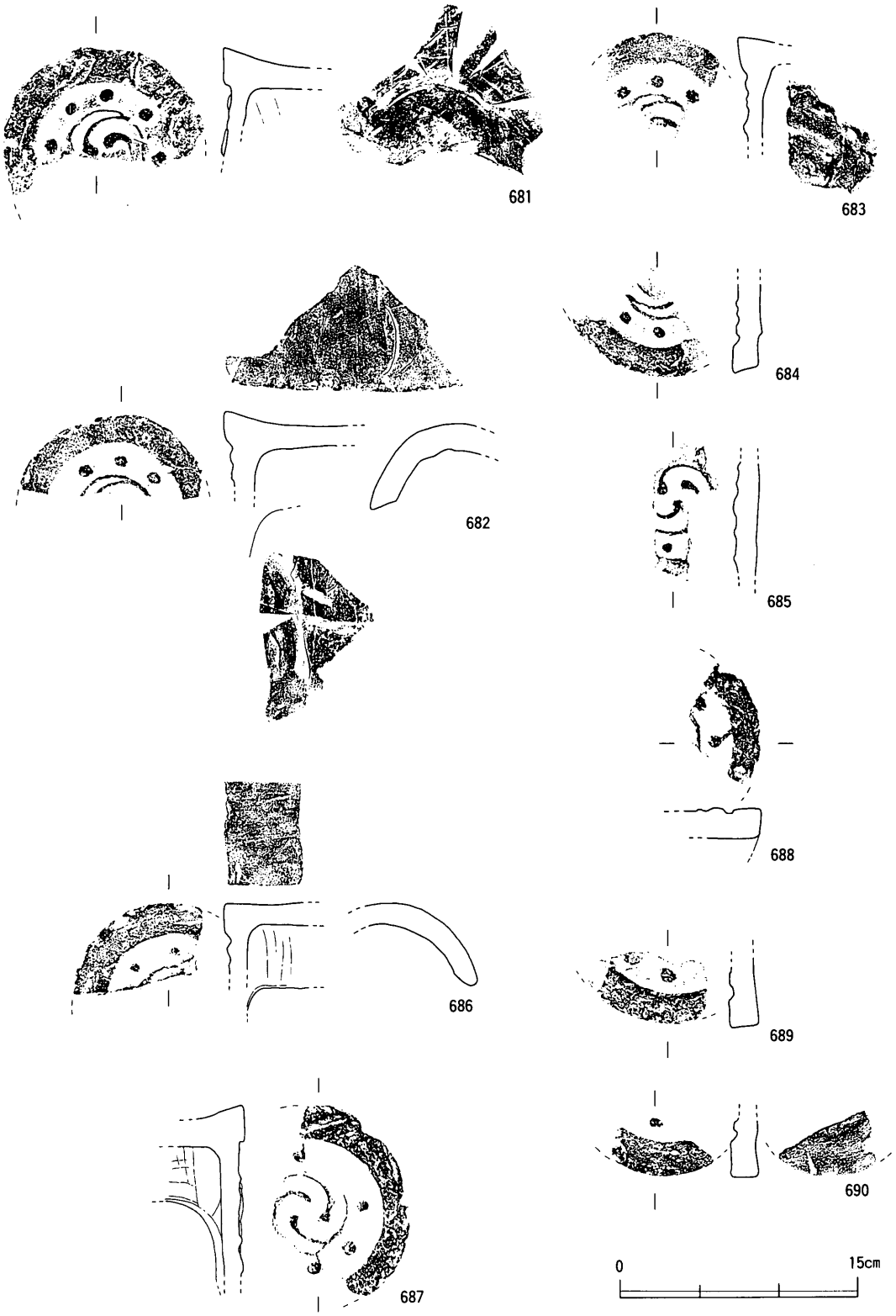
土師質甕（672～677）　いずれも内弯気味に肥厚する口縁部をもつが，端部がシャープな角をなすもの（672・673）と，丸く収まるもの（674）の２者が存在する。後者の方がより口縁部の肥厚度合いが顕著である。675・676は脚部片である。底部と体部との境に貼付されており，ほぼ垂直方向に伸びる。677は回転を利用した波状文を施す甕体部片である。

瓦質土管（678）　内面に段をもつ受け口状の口縁部形態を呈するものである。体部内外面を顕著に削っており，口縁部は横ナデ調整される。近世瓦や瓦質火鉢と同様な胎土をもつ。形態からみても，近代（明治期）までは下らないであろう。

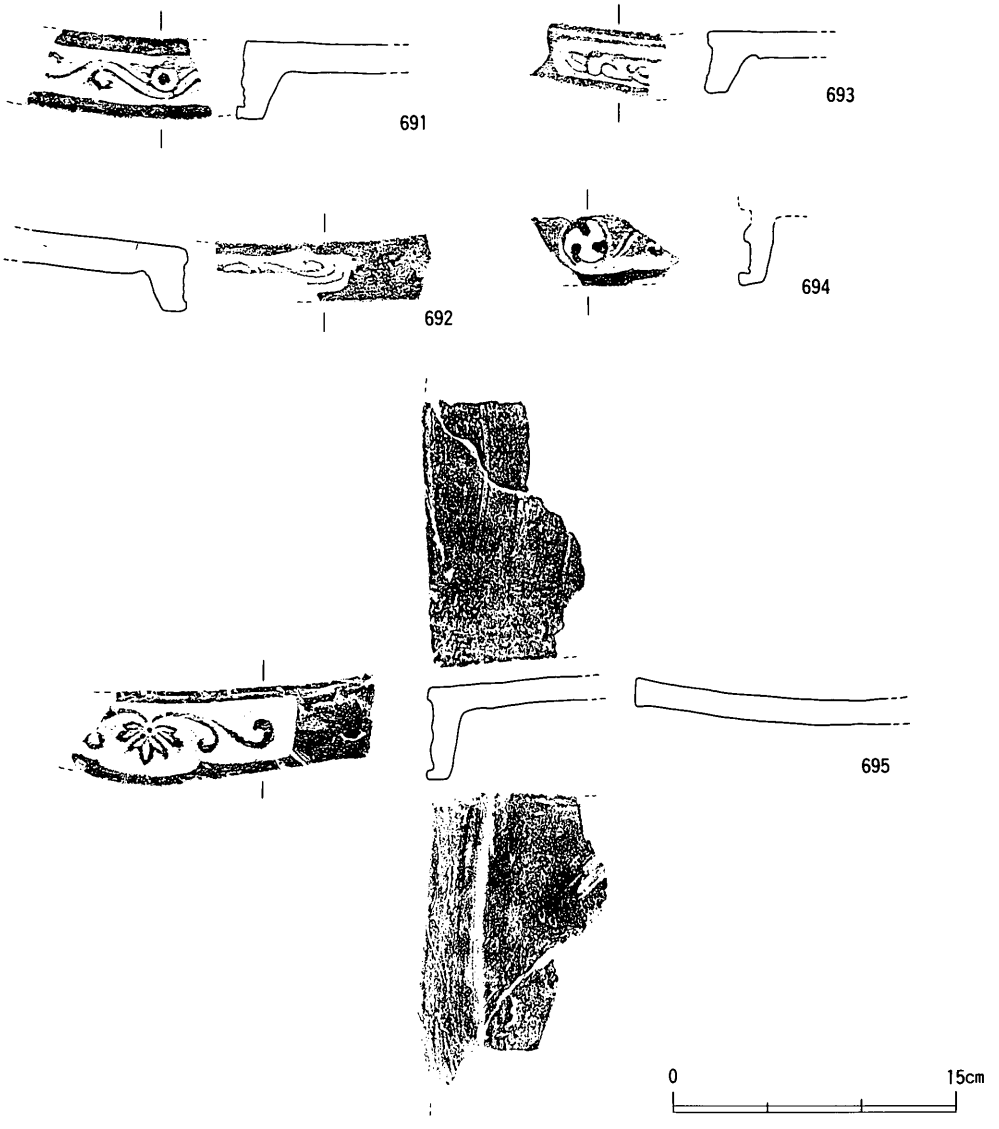
土師質蓋（679・680）　679は火消し壺の蓋である。胎土中には金雲母を多量に含む。恐らく近代以降の所産であろう。680は円盤形の土製品であり，径の大きい面が丁寧にナデ調整され，小さい面は指オサエ痕が粗く残る。丁寧な調整の面を上側にした蓋か。



第179図　Ⅰ区北半部包含層出土遺物（９）（Ｓ＝1/4）



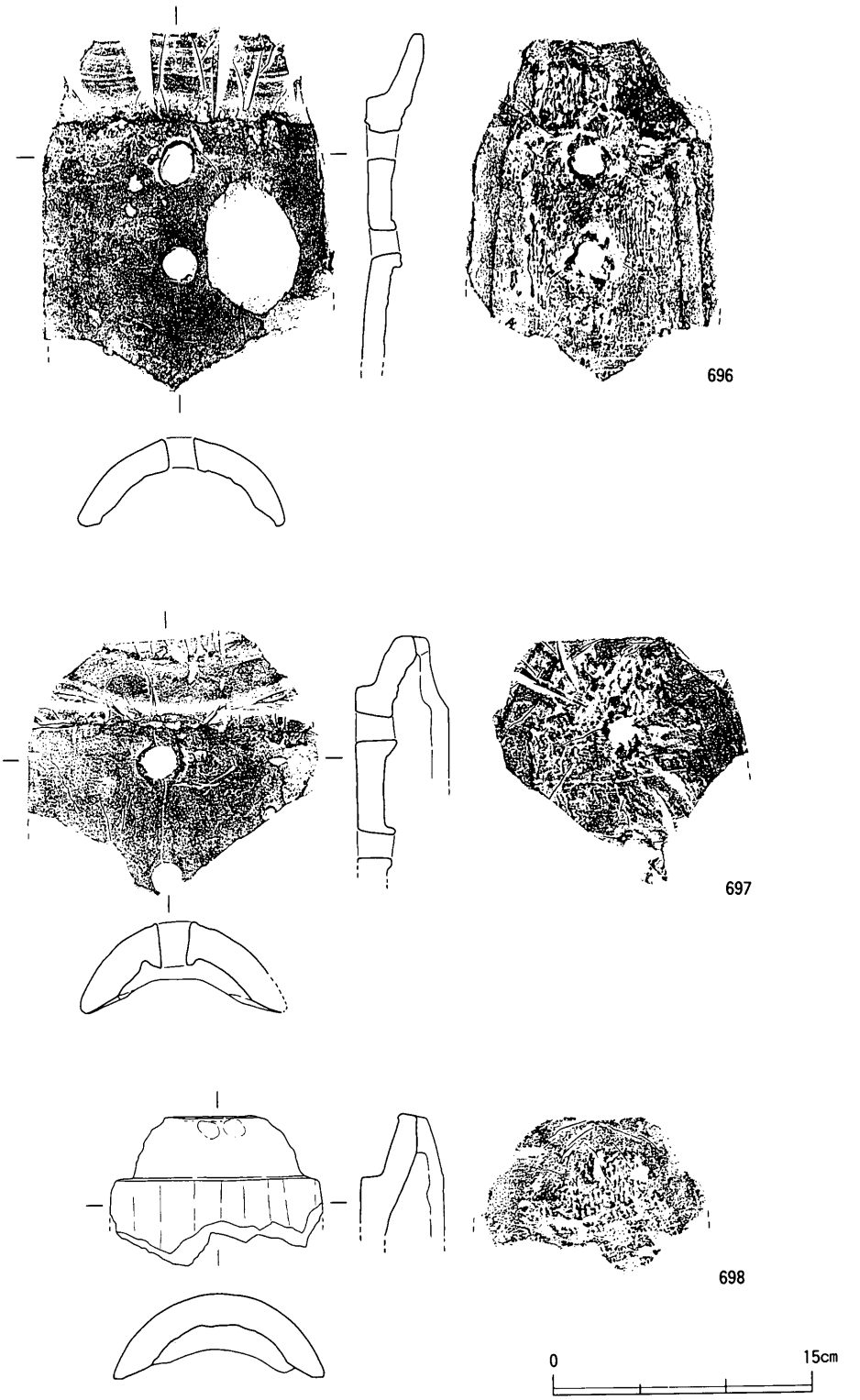
第180図　Ⅰ区北半部包含層出土遺物（10）（S＝1/4）



第181図　Ⅰ区北半部包含層出土遺物（11）（S＝1/4）

軒丸瓦（681～690）　右巻きの巴文をもつもの（681～686）と，左巻きの巴文をもつもの（687・688）がある。前者は全て443と，また後者も405と同笵である。

軒平瓦（691～695）　691は「◉」形の簡略化された中心飾りをもつもので，446と同笵である。692は295と同笵である。693は中心から2回上側に反転する唐草文をもち，左端から3本の弧線が出て終わる。694は中心飾りに巴文をもち，そこから唐草文が延びる。また695はいわゆる「高麗瓦」に近い形態の瓦当面をもつものであり，本遺跡の西隣に位置する郡家大林上遺跡のＳＫ０７出土瓦と同笵の可能性がある。以上の瓦は，694が銀化的な焼成

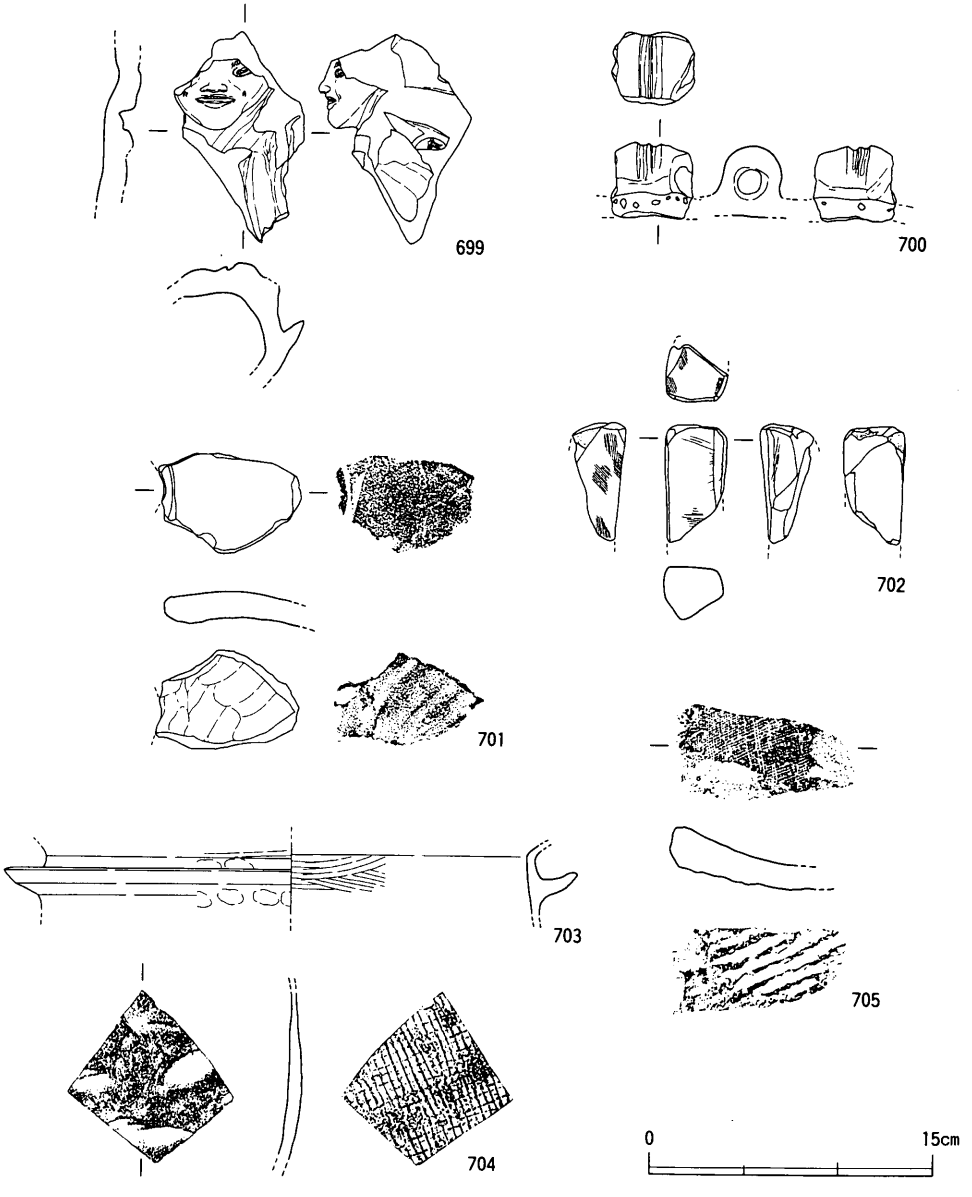


第182図　1区北半分包含層出土遺物（12）（S＝1/4）

状況から近代以降になる可能性があるが，他は18世紀を中心とした近世段階の所産と考えられる。

丸瓦（696～698）　696・697は釘穴を2個穿孔するものである。

土人形（699）　瓦質の土人形で，頭部と肩部の破片である。頭部の描写は克明であり，目や鼻・口・顎の凹凸は写実的である。また眉毛や口髭は釘状の工具で1本ずつ刻線されており，歯も細かく造形される。左肩に袋状のものを担いでおり，そこに実物の寛永通宝



第183図　I区北半部包含層出土遺物（13）（S＝1/4）

がスタンプされている。同様な造形物へのスタンプは，ＳＫ２０出土遺物（386）にもみられる。形態・胎土・焼成の共通性から699と386は恐らく同一個体であろう。その形態から大黒天を象ったものと考えられ，あるいは装飾瓦の一部であるかもしれない。

不明瓦製品（700・701）　700は２本の沈線を施した環状の突起をもつものである。破損面には，接合時に付けられたとみられる多数の小孔が認められる。701は弧状の端部に沿って沈線を施すものであり，332～334・470などと同様な製品である。

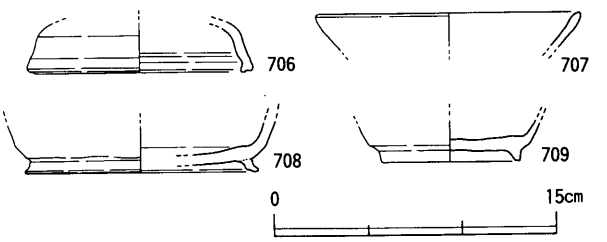
砥石（702）　砂岩製の砥石である。中央部付近で折れている。各面には研磨した痕跡が擦痕となって認められる。

その他（703～705）　古代の遺物が少量出土している。703は土師器羽釜である。体部内面には粗い横ハケ調整が施される。704は須恵器甕の体部片である。外面には格子叩き目，内面に無文の当て具痕がみられる。十瓶山窯跡群産の須恵器で10世紀頃の所産であろう。705は須恵質の平瓦である。凸面に縄目叩きが施される。

３．II区包含層（第184図）

II区では遺構の少なさと軌を一にして，包含層出土の遺物量が極めて少ない。図示可能なものは僅かに４点で，いずれも古代の須恵器である。

706は短頸壺の蓋である。口縁端部を挽き出して突帯状にしている。７世紀前葉頃のものであろう。707は直線的に開く口縁部と体部をもつ杯であり，恐らく10世紀頃の平底製品であろう。708は高台付の杯身である。高台が比較的高く，外側に踏張るような断面形態をもつことから，７世紀後葉頃の所産と考えられる。709も高台付杯身であるが，高台は断面逆台形を呈し，矮小化したような特徴をもつ。９世紀前半頃のものであろう。



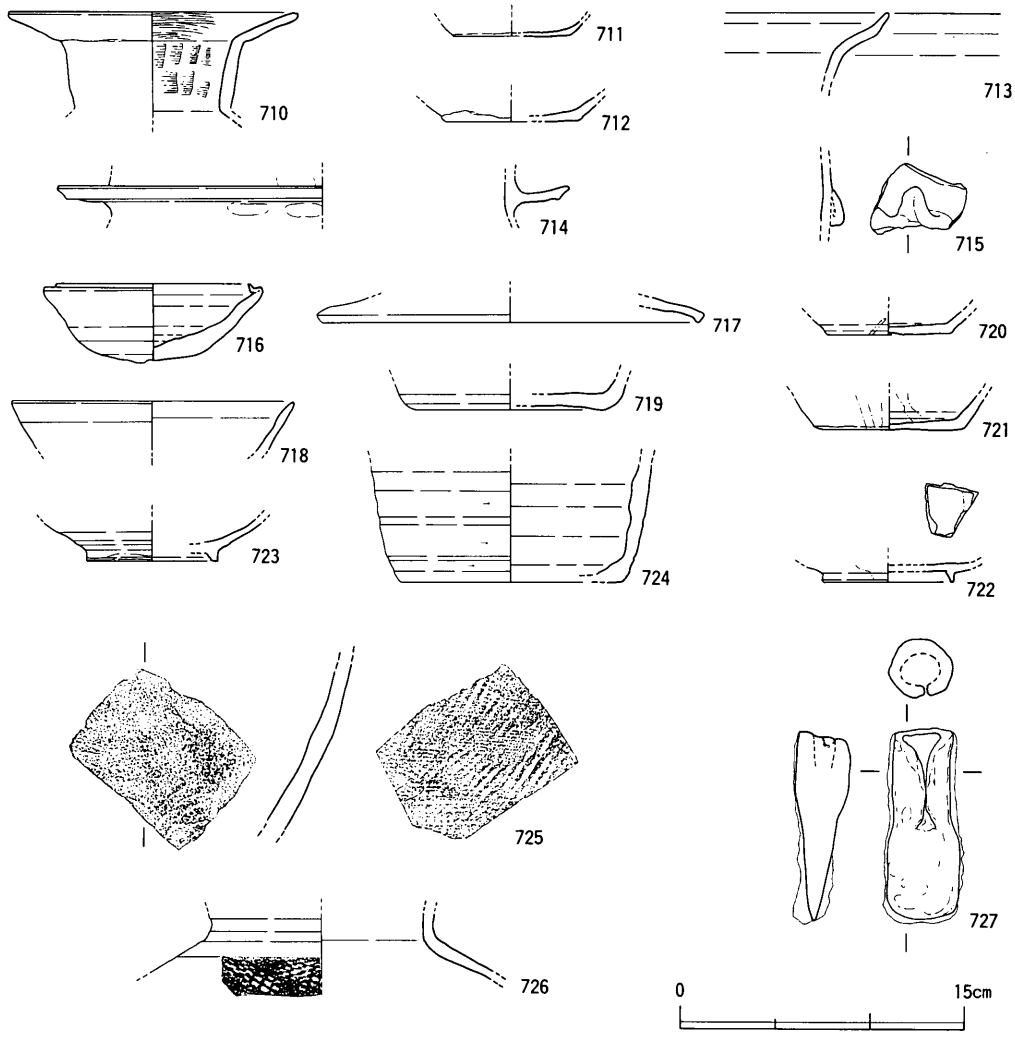
第184図　II区包含層出土遺物（Ｓ＝1/4）

4．III区包含層（第185・186図）

古代と近世の遺物を主体とするが，遺物量はかなり少ない。前者は第III層中から，後者は第Ⅰ・II層中から出土した。

710は古式土師器の広口壺である。口縁端部には平坦面が作られず丸く収まることから，下川津VI式とVII式の中間に位置付けられる延命遺跡ＳＤ２１段階の所産か。

711・712は土師器杯である。ヘラ切りによるとみられる平坦な底部と，極めて薄い体部からなる。713・714は土師器羽釜である。口縁端部と鍔端部は強い横ナデ調整によって凹



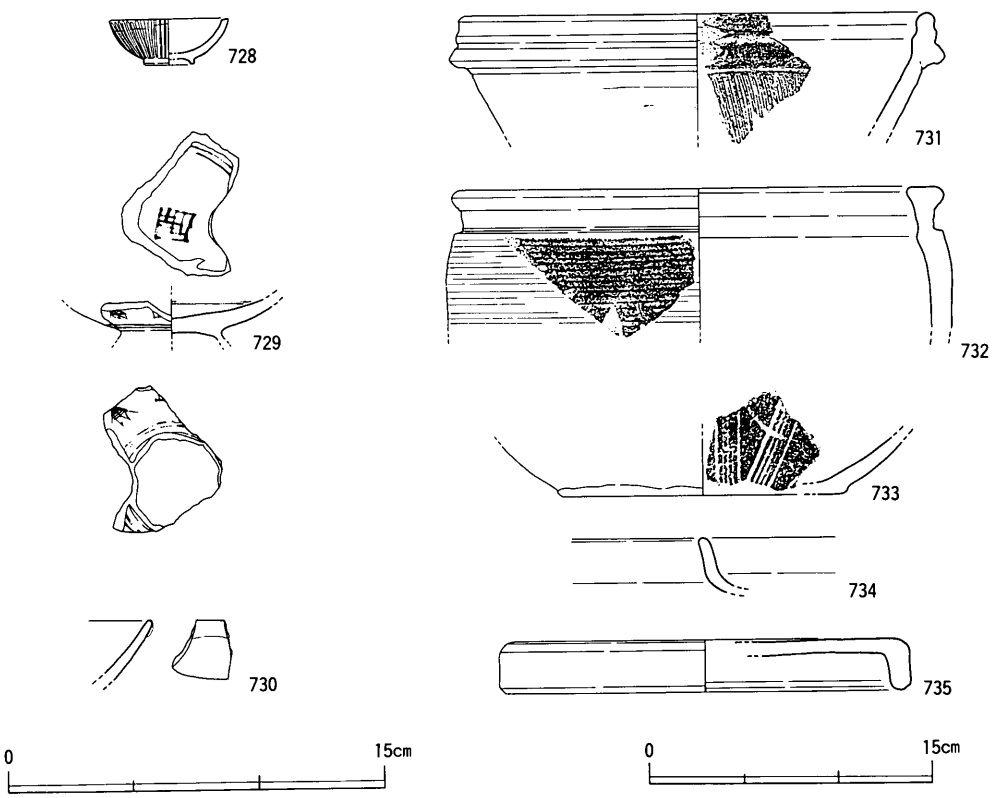
第185図　III区包含層出土遺物（１）（Ｓ＝1/4）

面を形成する。715は土師器鍋である。把手は体部と完全に一体化しており，痕跡器官化している。時期は9世紀頃か。

716～721は須恵器の杯類である。716は立ち上がりの退化した杯身であり，底部はヘラ切り不調整である。7世紀中葉頃のものであろう。717は口縁端部の折り込みがなく，断面が弱い嘴状に収まる。7世紀末葉頃の所産であろう。718・719はやや厚い器壁で丸味を帯びた底体部をもつ8世紀代の平底の杯である。これに対して720・721は平坦な底部と直線的な体部をもち，器壁は薄い。9世紀後葉～10世紀代の十瓶山窯製品であろう。

722は灰釉陶器椀もしくは皿である。灰白色に発色するきめの細かい素地に，淡緑色の灰釉がかけられる。723は緑釉陶器椀である。高台を除く内外面には濃緑色の釉が施される。体部外面には削り調整が顕著である。高台内面に段が作られることから，10世紀代の近江産緑釉陶器と考えられる。

724～726は須恵器の壺甕類であり，いずれも十瓶山窯産製品とみられる。724・726は9世紀後葉～10世紀代のものであり，725は8世紀代のものであろう。



第186図　III区包含層出土遺物（2）（陶磁器碗S＝1/3，他はS＝1/4）

727は袋状鉄斧である。短冊形でやや分厚い刃部をもつ。出土層位からみて古代前期以前のものであることは確かである。

728～730は，磁器の碗類である。728は肥前系の菊花形の紅猪口であり，外面は型打ち成形である。18世紀前半頃の所産であろう。729はやや高い高台をもつと思われ，外面には崩し字状の幾何学的な文様が，また見込みには格子状の文様が描かれる。

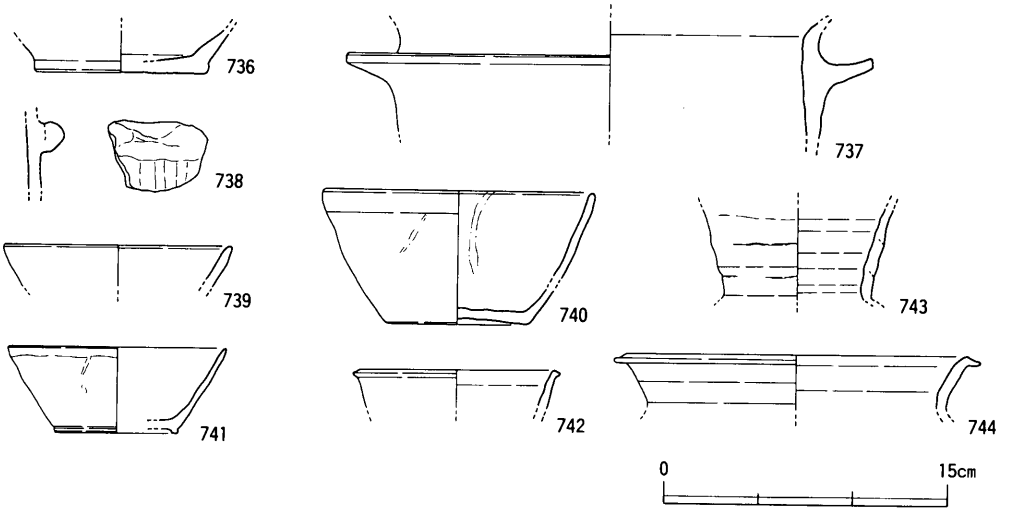
731は堺もしくは明石産の陶器擂鉢である。内面の卸し目は密に施され，上端は口縁部のナデ調整によって消される。また体部外面にはヘラ削りが行われる。732は陶器甕である。口縁部は逆三角形に肥厚し，体部外面に回転利用の沈線がみられる。還元気味に焼き締められている。産地は明確にできないが，あるいは備前産か。

733は土師質擂鉢である。５本１単位の卸し目を疎らに施す。734は土師質羽釜の口縁部である。また735は火消し壺の蓋であり，表面は燻されて光沢がある。同形態のものは現在でも高松市御厩で生産されており，極めて新しい時期のものであろう。

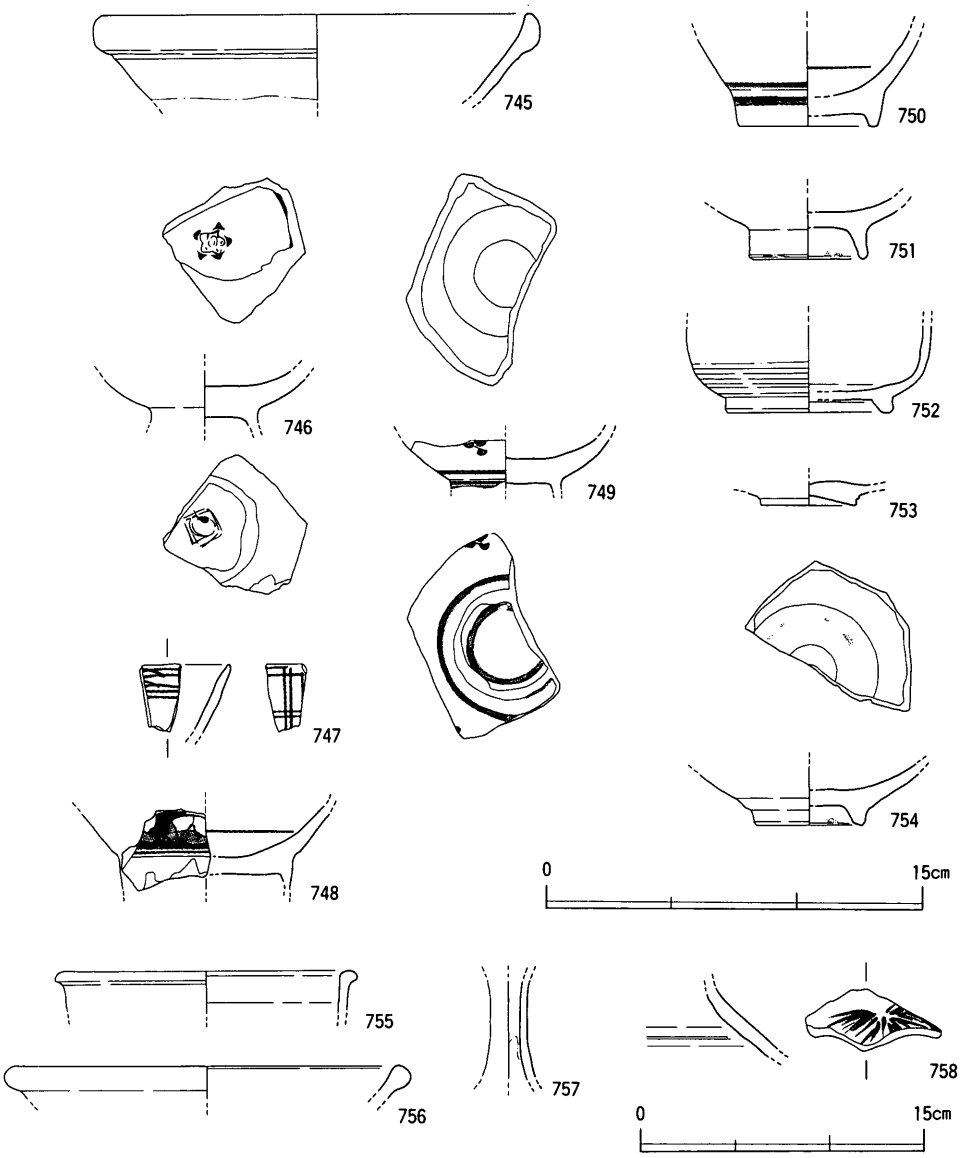
５．Ⅳ区包含層（第187・188図）

Ⅲ区同様に古代と近世の遺物を主体とするが，やはり出土量は少ない。

736は土師器椀で，分厚くしっかりした平高台（円盤状高台）をもち，高台は回転ヘラ切りされる。胎土は精良であり，焼成も土師器としてはやや硬質である。10～11世紀のもの



第187図　Ⅳ区包含層出土遺物（１）（S＝1/4）



第188図　Ⅳ区包含層出土遺物（２）（陶磁器碗・皿Ｓ＝1/3，他はＳ＝1/4）

であろう。737は土師器羽釜である。738は土師器鍋の把手であり，715と同じく体部と把手の一体化が進み，実際の機能は果たしていない。

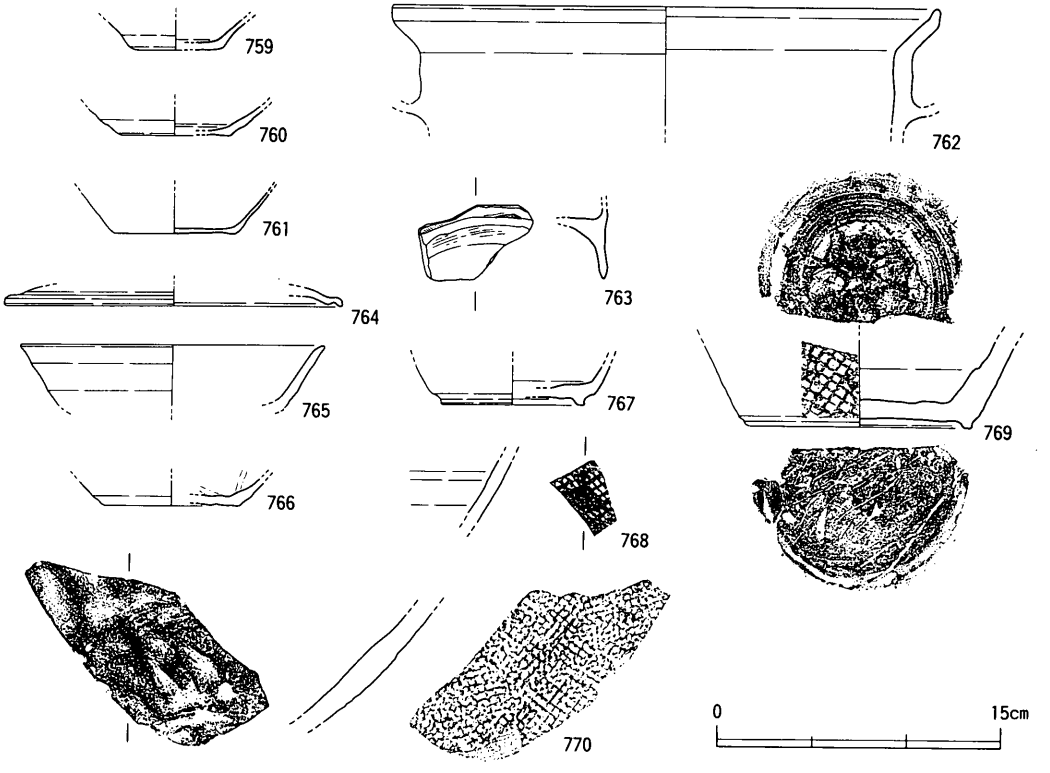
739～741は須恵器杯である。740･741には器面に火だすきがみられる。741には，断面方形の低く小さい高台が直線的な体部と底部との境に貼付されている。高台付杯身の最終形態であり，739・740と同じく９世紀後葉～10世紀前葉に位置付けられよう。742・743は須恵器の長頸壺である。742は口縁端部を若干横方向に挽き出す。744は須恵器甕であり，口

縁端部は横方向に大きく挽き出されている。壺・甕も杯と同じ段階のものである。以上の須恵器は全て十瓶山窯産とみられる。

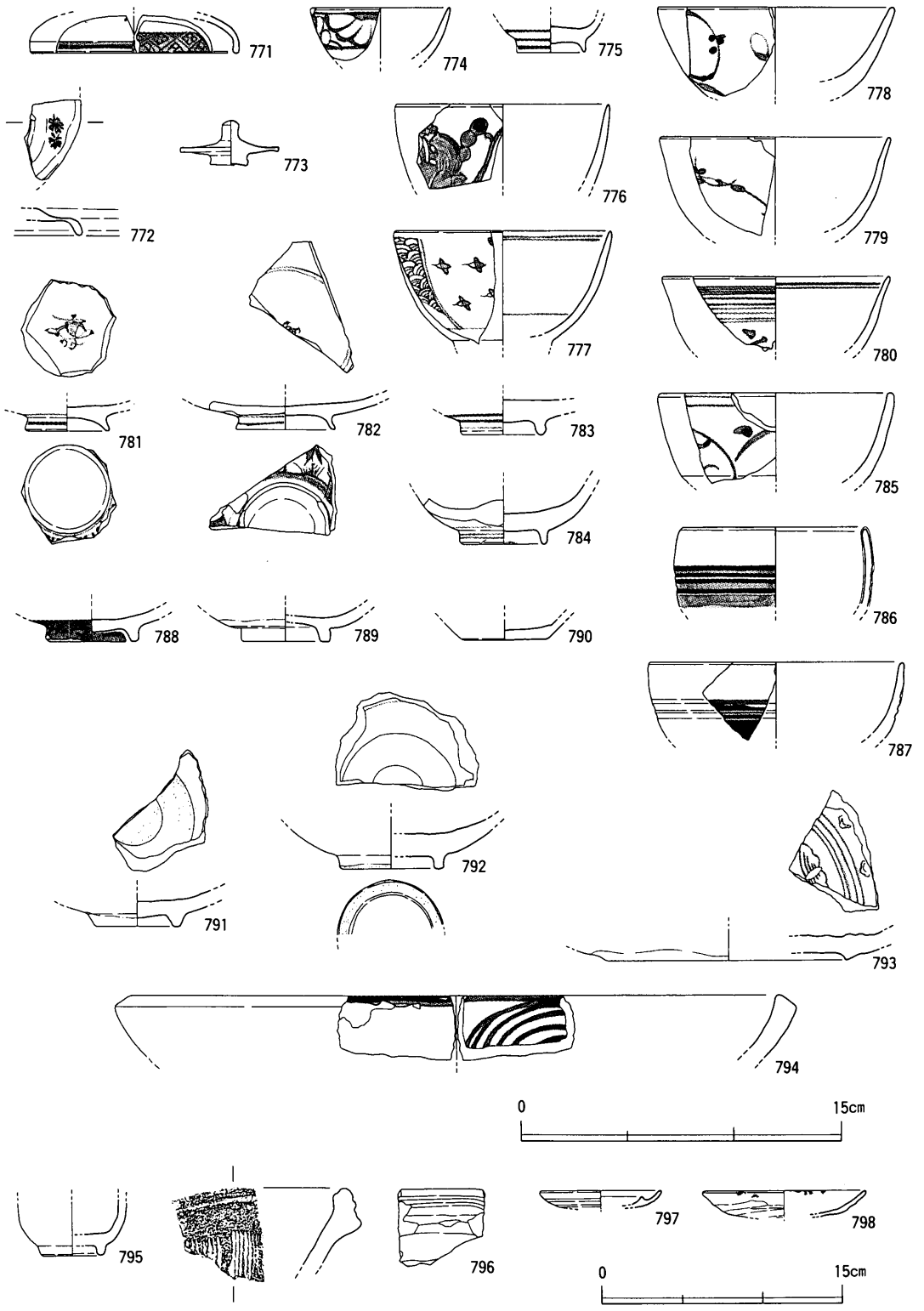
745は中世前半の白磁碗IV類である。

746～748は肥前系磁器の碗である。746は，見込みに手描きによる五弁花文があり，底部外面には禍福文を施す。ただし形態的には広東碗的な高台をもつため，18世紀後葉以降の所産であろう。749･751は肥前系陶器碗である。749は見込みに蛇ノ目釉剝ぎを施している。750はあるいは瓶の底部か。751は呉器手碗である。752は産地不明の陶器碗である。体部下半は露胎であり，ヘラ削りが丁寧に施される。753は灰白色の素地をもつ陶器皿であり，削り出しによる平高台をもつ。瀬戸美濃産か。

6．V区包含層（第189～191図）



第189図　V区包含層出土遺物（1）（S＝1/4）



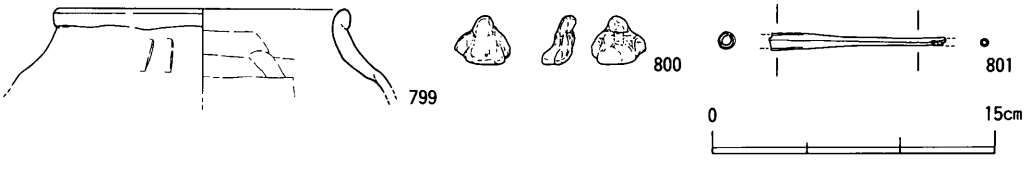
第190図　V区包含層出土遺物（2）（陶磁器蓋・碗・皿S＝1/3，他はS＝1/4）

III・IV区同様に古代・近世の遺物が主体であるが，やはり量は少ない。

759～761は土師器杯である。底部・体部ともに器壁が極めて薄い。762は三角形の把手を付す土師器鍋である。把手は体部と一体化していない。763は土師器竈である。

764～767は須恵器の杯類である。764は体部からZ字形に屈曲して収まる口縁部をもち，8世紀後葉頃の製作時期が考えられる。765・767も，これとほぼ同時期であろう。768は格子叩きの後に回転ナデ調整を施している。9世紀後葉～10世紀代の長頸壺の体部であろう。769は高台付の壺もしくは甕である。体部外面には格子叩き目が施されるが，内面は回転ナデ調整が顕著なため，当て具痕がみられない。底部は1枚の粘土板からなるようであり，内面にはロクロ上に据えた際の指オサエが顕著である。また底部外面には削り調整が行われた後に，小さく矮小化した高台を外縁端に貼付している。768と同じ時期の所産であろう。770は大型甕の体部下半から底部にかけての破片である。外面の格子叩き目は不定方向に施されるが，これは丸底化の工程に伴うものであろう。内面には当て具痕が顕著な凹凸となって残る。12～13世紀のものであろう。以上の須恵器は，766～770が十瓶山窯跡群産とみて相違ない。

771～798は，近世陶磁器である。瀬戸美濃系陶器の存在が目立つ。771・772は磁器蓋である。771内面には四方襷文が描かれる。18世紀中葉～後葉の肥前系磁器であろう。772は外面に花文が描かれており，箱形の蓋かもしれない。産地は不明である。773は近代以降の陶器蓋であろう。774～784は肥前系磁器碗であるが，このうち780は砥部窯の製品の可能性がある。また781・782は薄く「ハ」の字形に開く高台が特徴的な碗（皿？）である。781には見込みに帆船らしい崩れた文様が描かれ，782の見込みには手書きの五弁花文がみられる。形態・文様ともにやや異質であり，肥前以外の窯で生産されたのかもしれない。786～789は瀬戸美濃系の陶器碗である。786・787は「腰錆湯呑」であり，788はその底部か。789は削り痕が明瞭な底部・高台部分を露胎にしており，体部に透明な釉薬（灰釉）をかける。「筒形碗」か。793は陶器の皿もしくは鉢の底部とみられる。見込みに草花と思われる文様を浮き彫り状（型押しか）に施しており，高台付近は露胎，体部や見込みには灰釉をかけ



第191図　V区包含層出土遺物（3）（S＝1/4）

る。胎土や釉薬の特徴から，瀬戸美濃系と考えられる。794は瀬戸美濃系の「馬の目」皿である。体部内面に渦巻き状の文様が描かれる。797・798は備前系とみられる陶器灯明皿である。798には内面の突帯がないが，口縁部に油煙が付着する。

799は土師質壺である。口縁部を玉縁状に肥厚させており，器表には板ナデ調整が施される。800は土師質焼成の土人形である。摩滅が著しいため，何を象ったか明確でないが座像である。801は煙管の吸い口である。銅板を巻いて作られている。

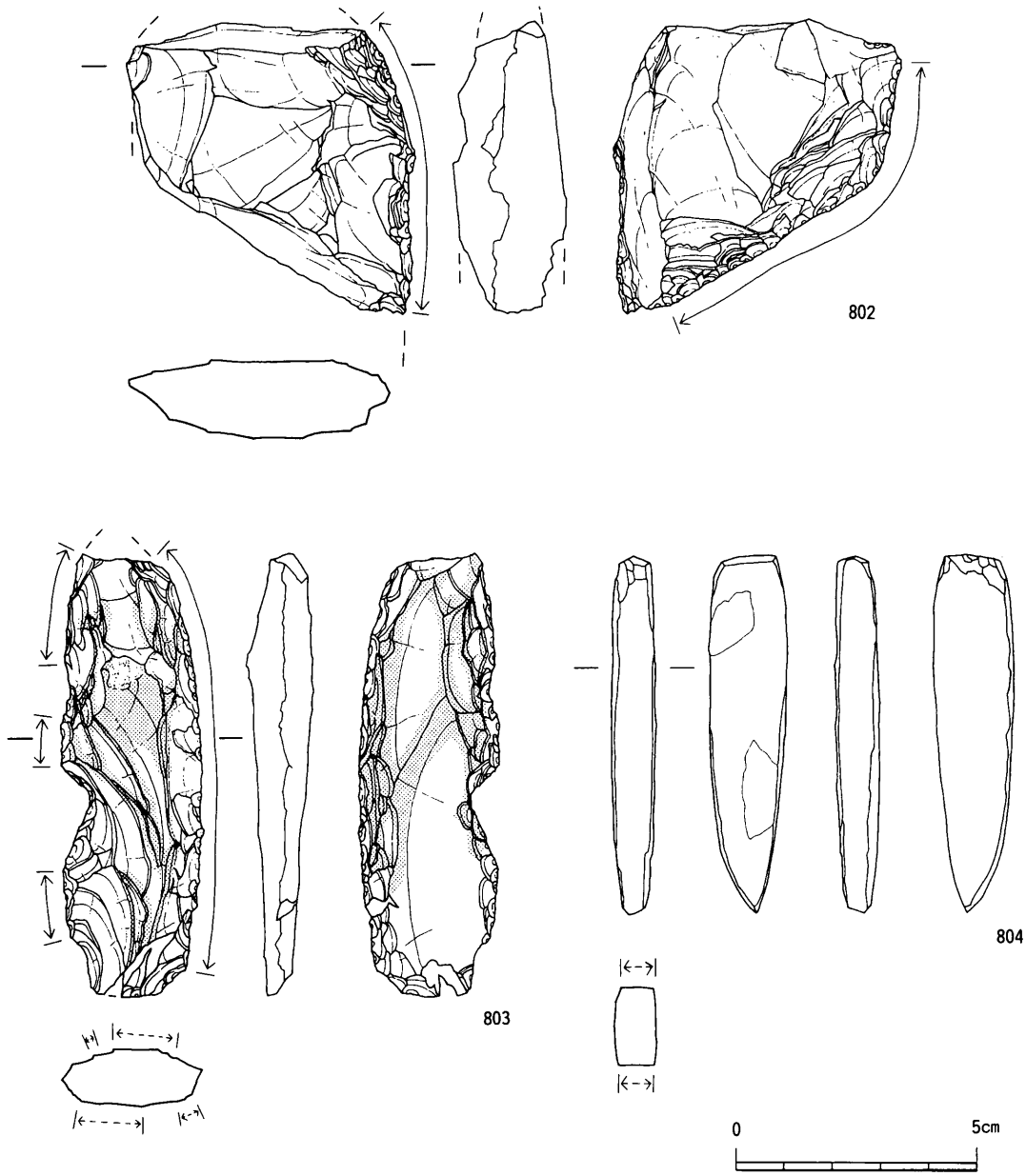
7．石　　器（第192～195図）

Ⅰ～Ⅴ区の包含層から出土した旧石器以外の石器を一括して図示する。石材は804が結晶片岩である以外，全て石理の発達したサヌカイトである。

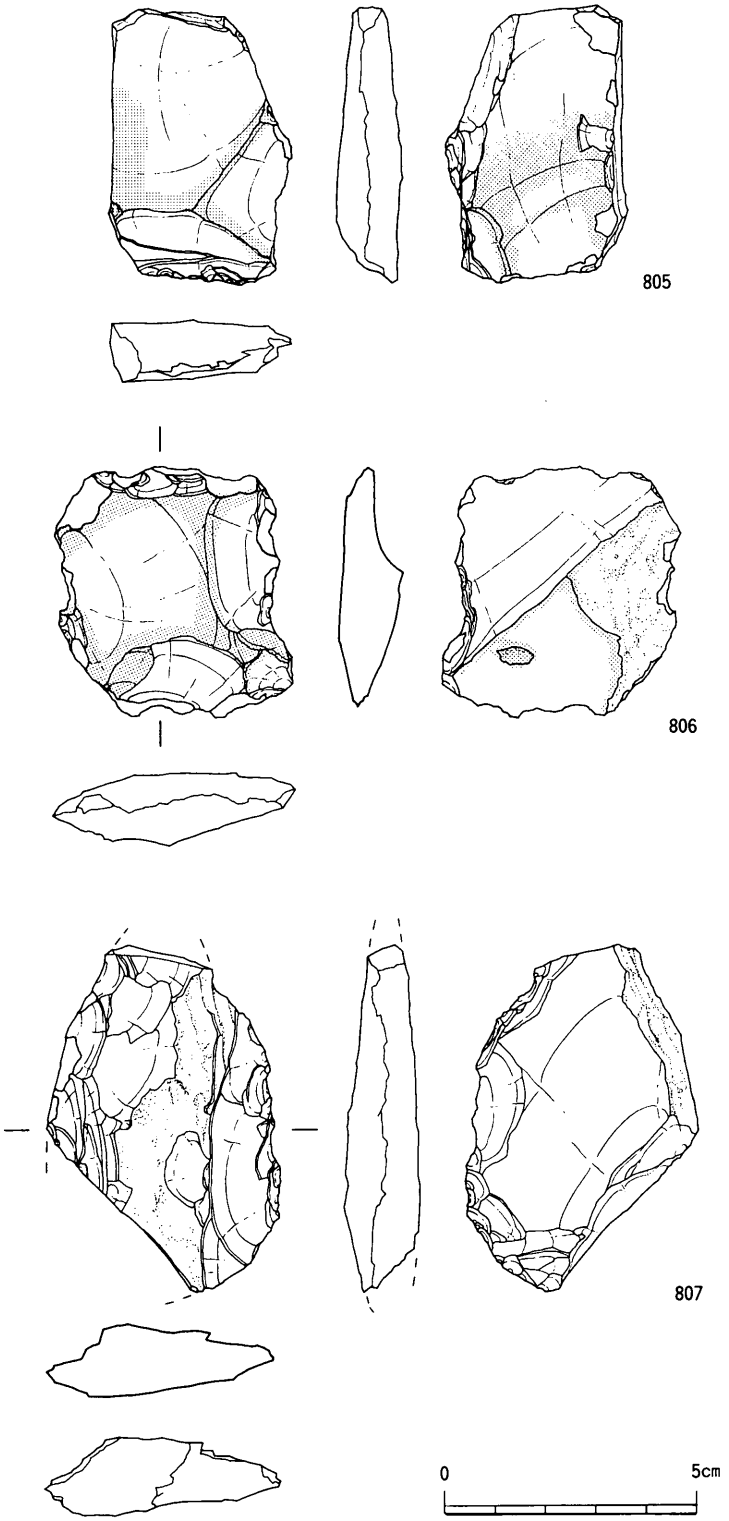
802・803・807は打製石斧である。802は上下端ともに折損しているが，下端には連続的な小剝離が顕著に認められる。折損後も石斧として継続使用されたか，楔形石器などに転用されたかのいずれかであろう。803には使用による摩滅痕が認められる。804は小型の柱状片刃石斧である。

805・808～810・817～819はスクレイパーである。不定形な剝片を素材とするため，多様な形態をもつ。特定の部位に限定せず，やや粗い非連続的な調整を行うもの（805・808・809）と，特定の部位に集中する連続的な細かい調整を行うもの（810・817～819）がある。後者には，810のように先端を鋭く作出するものと，817～819のように一つの縁辺を鋭利にするものがある。

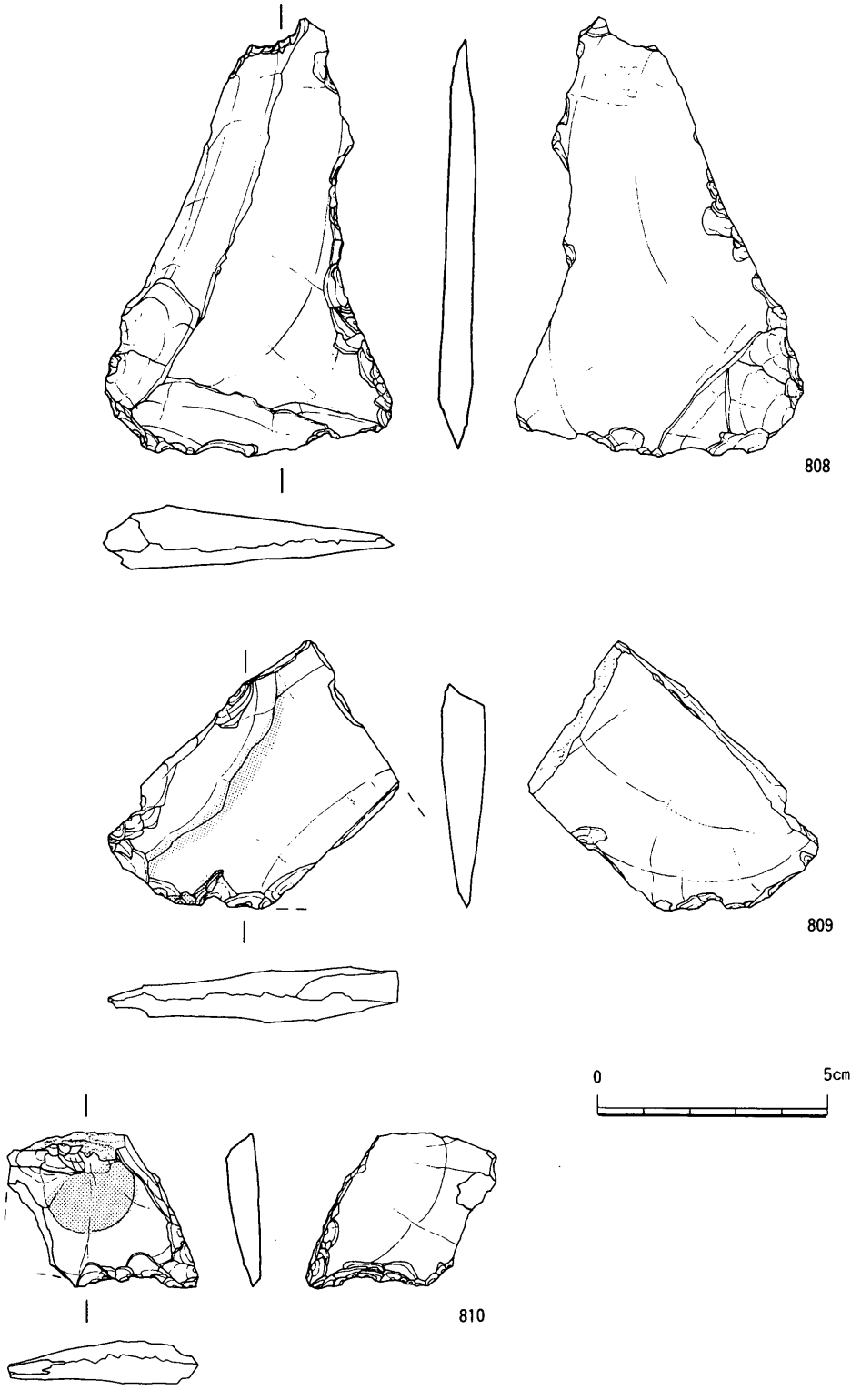
811～816は石鏃である。凹基式（811・814～816）と平基式（812），凸基式（813）がある。凹基式には縄文時代にまで遡る可能性があるもの（814・816）も含まれるが，ほかは弥生時代の所産とみてよかろう。



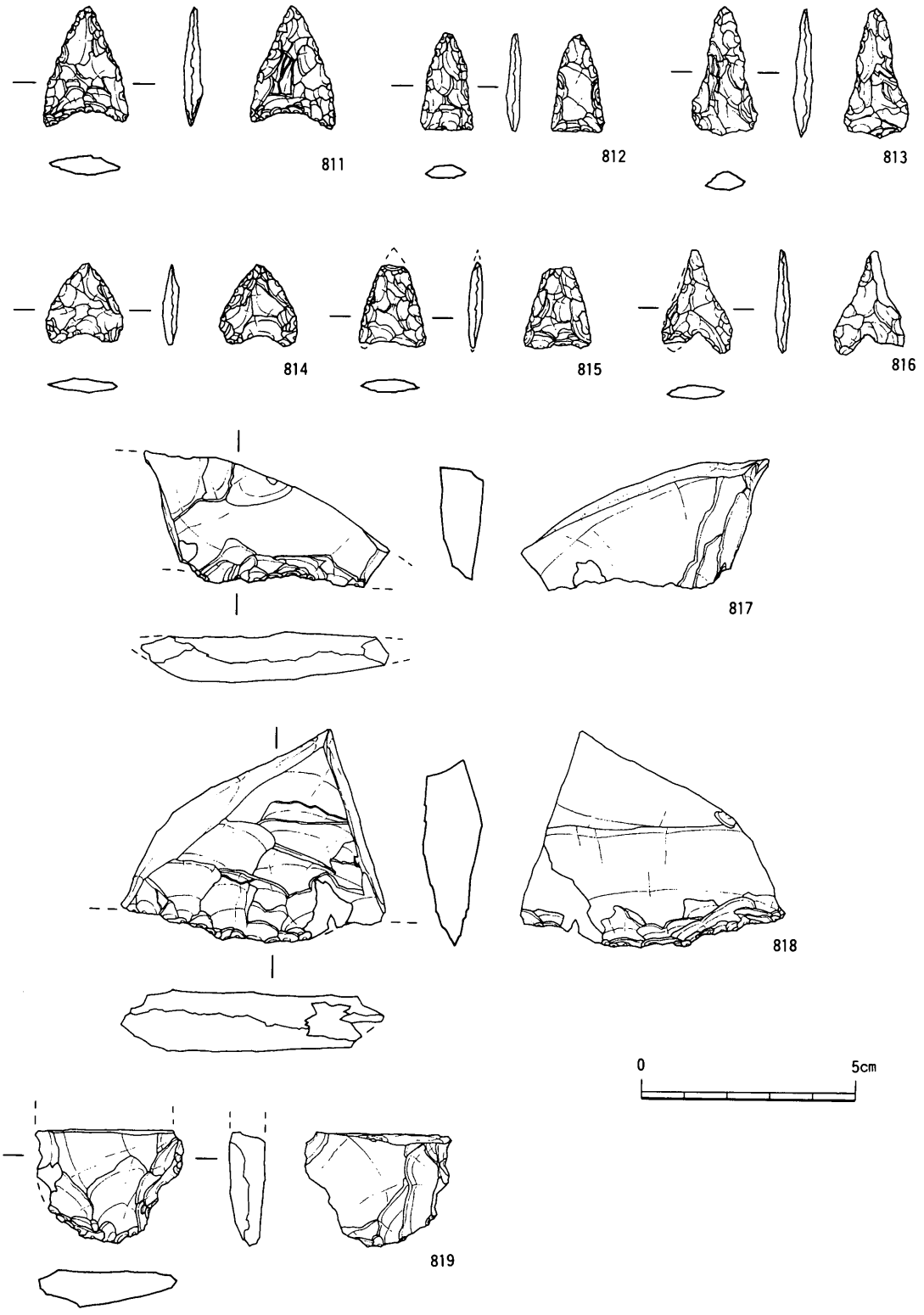
第192図　包含層出土石器（1）（S＝2/3）



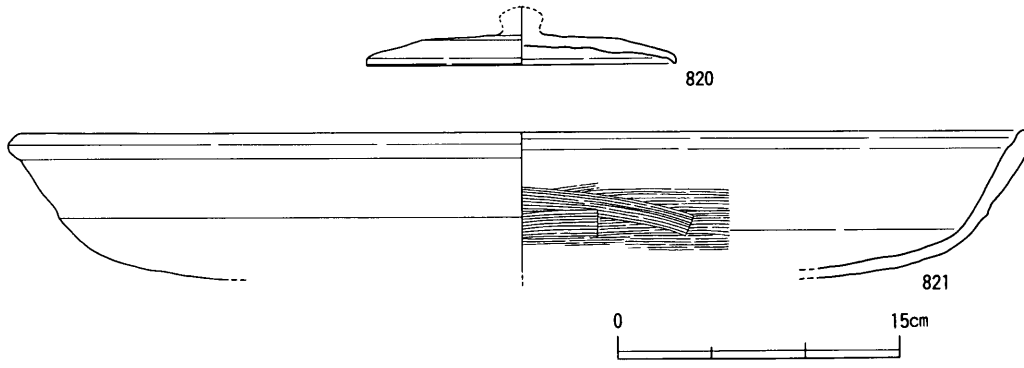
第193図　包含層出土石器（２）（S＝2/3）



第194図　包含層出土石器（３）（S＝2/3）



第195図　包含層出土石器（4）（S＝2/3）



第196図　予備調査・トレンチ出土遺物，出土地点不明遺物（S＝1/4）

第4章　自然科学的調査の成果

第1節　郡家田代遺跡出土近世土器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所　白石　純

1．はじめに

この分析では，郡家田代遺跡から出土した近世土器の胎土分析を行い，以下の点について検討した。

（1）郡家田代遺跡出土の近世土器で，器種により胎土に差がみられるかどうか。

（2）郡家田代遺跡出土の近世土器の器種のうち焙烙が形態・技法的に御厩系，岡本系，関西系に分類されている(1)。そして，これら分類された焙烙が胎土分析からどのように分類されるか。また，文献上から近世讃岐の土器生産地として御厩・吉岡・岡本の3ケ所がわかっており，現在でもこの3ケ所の生産地で土器の生産が行われている。そこで，これら現在の生産地の粘土と郡家田代遺跡出土の焙烙との比較を行った。

2．分析方法および結果

胎土分析の方法は，蛍光X線分析装置（リガク電機製波長分散型KG-4型）で行い，分析条件・資料の作製などは現在まで行っている方法である(2)。

分析資料は，第3表に示した48点の土器である。器種別の土器の点数は，甕5点・擂鉢5点・羽釜7点・火鉢（瓦質系・土師質系）10点・焙烙14点・生産地粘土7点である。また，測定した元素は，K_2O・Fe_2O_3・SiO_2・TiO_2・Al_2O_3・CaO・Sr・Rbの8元素である。

今回の分析で識別に有効な元素は，K_2O・CaO・Sr・Rbの4元素である。そして，この元素を用いて（1）の課題である器種により胎土に差異があるかどうかでは，第197図K_2O-CaO，第198図Sr-Rbの両散布図とも器種に関係なくほぼ一つにまとまり識別できなかった。

（2）の検討課題の形態・技法的に御厩系・岡本系・関西系に分類された焙烙が胎土的にどのように分類されるかでは，第199図K_2O-CaO，第200図Sr-Rbからほぼ一つにまとまり各系ごとに区別できなかった。そして，これらの焙烙は郡家田代遺跡出土のその他の器

種ともほぼ重なり識別できなかった。

御厩・吉岡・岡本の各生産地の粘土の比較では，3箇所の粘土とも，特徴があり識別できた。そして，現段階では郡家田代遺跡出土の近世土器の胎土に最も近い粘土は，吉岡採集の粘土である。

3．ま と め

この近世土器の胎土分析でわかったことをまとめると，

1）郡家田代遺跡出土土器で器種により胎土に差異があるかどうかでは，各器種ごとに差はみられず一つにまとまった。器種により粘土の使い分けをしていないようである。

2）3つに分類された焙烙が胎土的に違いがみられるかどうかでは，御厩系・岡本系・関西系とも区別はできず，ほぼ一つにまとまった。そして，他の器種ともほぼ重なり郡家田代遺跡の近世土器で一つのまとまった集団をつくった。

そして，近世土器の生産地の粘土には明らかな差異があり識別できたが，形態・技法的に分類されている焙烙には胎土的に差がみられなかった。特に，御厩系（焙烙）と御厩採集粘土，岡本系（焙烙）と岡本採集粘土の両者とも分析値が異なり，同じ粘土を使用していなかった。このことは，今回採集した地点の粘土とは，異なる地点なのか，あるいは粘土に混和材を入れているのかなどの原因が考えられる。しかし，この分析では生産・消費地の資料点数に制約があり，資料の蓄積を行い検討する必要がある。

註

(1) 資料提供者である佐藤竜馬氏の分類による。

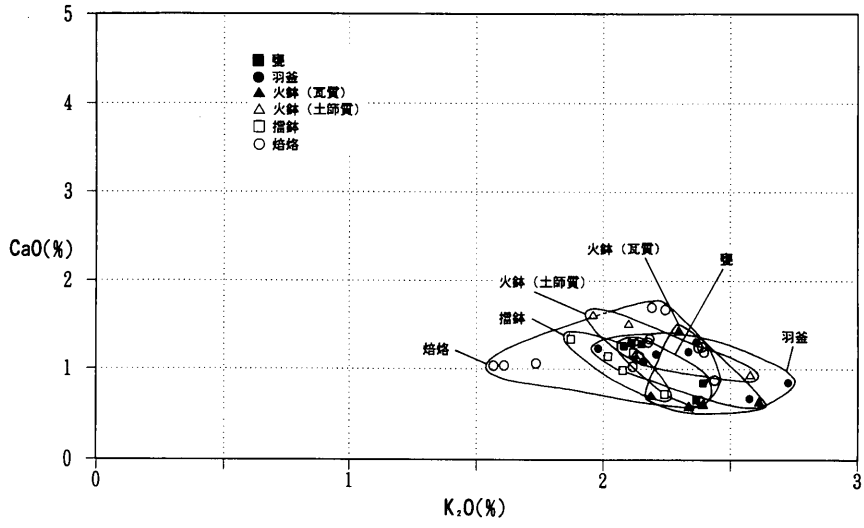
(2) 白石　純「蛍光X線分析による考古遺物（石器・土器）の化学分析（II）」『自然科学研究所研究報告　第12号』　岡山理科大学　1986.

編者註

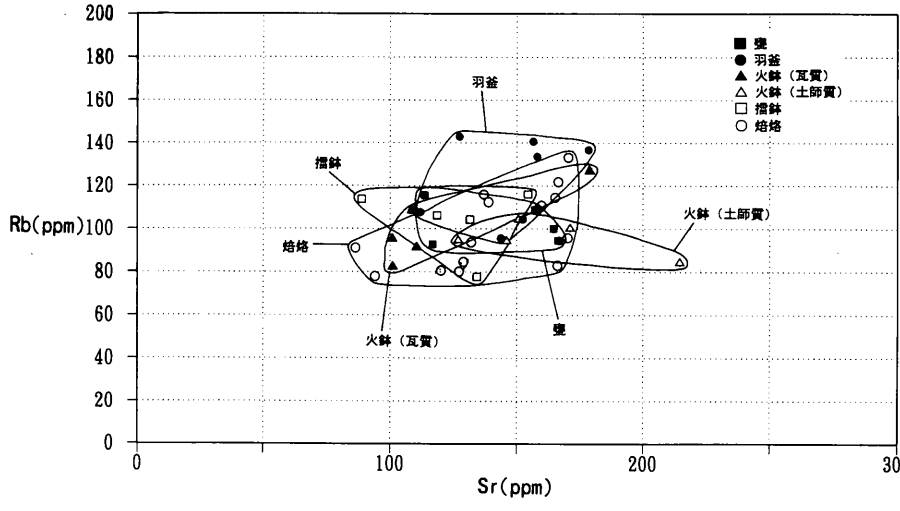
分析試料の火鉢（土師質系）は土師質焜炉である。

種　別		K	Fe	Si	Ti	Al	Ca	Sr	Rb
甕	164	2.11	5.99	64.94	0.90	20.56	1.29	167	94
	672	2.15	6.76	63.30	0.91	20.15	1.28	165	99
	673	2.08	6.07	64.53	0.88	20.16	1.26	158	108
	674	2.40	8.18	64.14	0.75	19.02	0.86	117	92
	393	2.37	4.71	71.22	0.71	19.04	0.67	114	115
羽　釜	262	2.58	3.76	71.49	0.51	16.79	0.67	112	107
	263	2.16	6.97	64.40	1.05	18.93	1.10	159	133
	264	1.98	10.59	57.77	1.12	19.60	1.23	144	94
	265	2.21	7.37	58.09	1.12	18.99	1.17	153	104
	266	2.37	6.14	69.20	0.83	17.37	1.31	178	136
	267	2.73	6.24	67.29	0.80	17.46	0.86	128	143
	268	2.34	7.31	66.33	0.90	18.02	1.21	157	139
火　鉢　瓦質系	643	2.39	4.50	72.37	0.58	15.48	0.62	111	91
	644	2.34	3.82	74.26	0.57	15.64	0.59	101	95
	648	2.62	4.23	78.27	0.58	14.72	0.64	109	108
	649	2.19	9.18	60.89	0.57	17.45	0.71	101	82
	242	2.30	7.27	64.61	0.96	18.97	1.43	179	127
土師質系	249	2.10	9.03	57.23	1.17	19.67	1.54	171	100
	250	2.13	8.43	59.17	0.95	17.80	1.32	128	95
	251	1.96	9.44	56.91	1.21	18.79	1.63	146	94
	252	2.12	8.78	58.16	1.16	21.27	1.18	151	104
	253	2.58	6.17	61.66	0.82	19.03	0.95	215	85
擂　鉢	239	2.02	6.91	56.30	0.95	21.28	1.15	154	116
	240	2.24	5.74	64.28	0.63	17.06	0.74	89	113
	241	1.88	7.02	64.10	0.98	20.80	1.34	132	104
	478	2.08	7.02	62.60	0.93	20.86	1.00	119	105
	638	2.13	6.78	60.42	0.85	19.83	1.19	134	76
焙烙鍋　御厩系	484	2.39	8.86	62.17	0.93	17.27	1.19	170	133
	485	2.38	8.13	59.08	0.98	17.85	1.25	166	121
	486	2.37	10.42	55.83	0.95	17.04	1.24	139	112
	487	2.18	9.99	59.43	0.88	16.12	1.34	165	114
	488	1.60	5.98	58.75	0.88	21.07	1.05	127	80
	489	2.14	8.67	57.60	0.89	19.05	1.15	137	115
岡本系	269	1.56	6.53	58.15	0.87	21.40	1.04	120	80
	270	2.38	5.51	66.70	0.93	17.59	0.65	86	90
	271	1.73	7.78	59.37	1.04	18.22	1.06	129	84
	660	2.18	10.76	58.39	0.91	15.80	1.32	160	111
	661	2.11	6.38	65.34	0.87	19.86	1.03	133	93
関西系	671	2.43	10.83	57.86	0.83	16.76	0.88	94	78
	276	2.19	10.47	54.94	1.09	16.82	1.69	167	83
	278	2.24	8.92	55.58	1.09	18.27	1.67	170	95
岡本粘土	1	1.77	6.87	59.59	1.13	21.74	0.44	50	92
	2	1.50	5.73	77.79	0.99	12.29	0.40	51	72
	3	2.62	7.45	66.97	0.69	16.38	0.33	54	88
吉岡粘土	1	2.57	5.20	65.75	0.69	18.25	0.62	119	128
	2	2.55	4.99	65.07	0.71	18.51	0.64	122	132
御厩粘土	1	0.44	10.41	46.25	1.03	20.65	5.02	280	16
	2	0.50	11.04	46.97	1.02	21.27	4.27	164	23

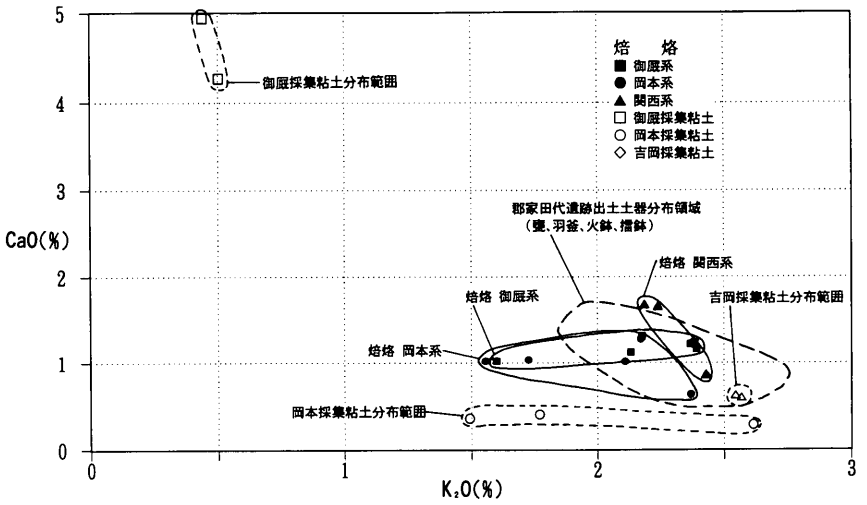
第3表　郡家田代遺跡出土近世土器の胎土分析値一覧表(%)　ただし，Sr・Rb はppm



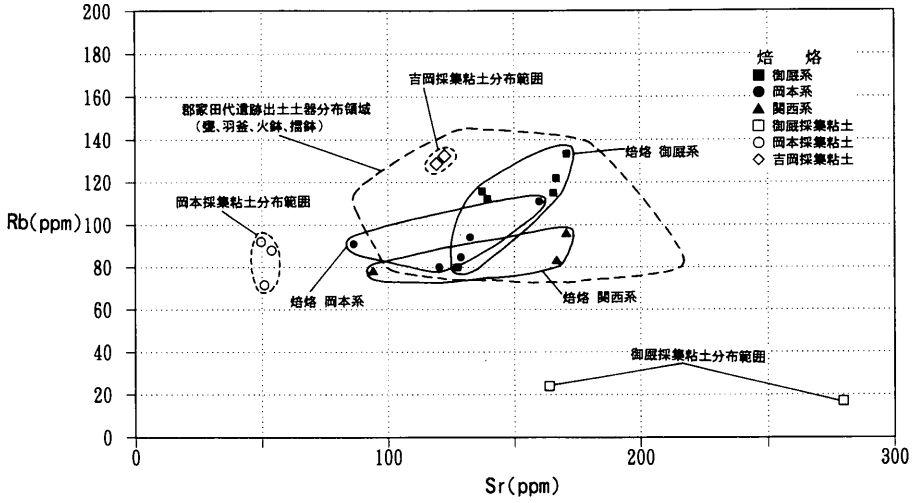
第197図　K_2O-CaO による郡家田代遺跡内出土近世土器の器種別の比較



第198図　Sr-Rb による郡家田代遺跡内出土近世土器の器種別の比較



第199図　K_2O-CaO による郡家田代遺跡内出土近世土器（焙烙・粘土）の比較



第200図　Sr-Rb による郡家田代遺跡内出土近世土器（焙烙・粘土）の比較

第2節　胎土分析試料の概要と今後の課題

1．肉眼観察による胎土の群別と土器の形態

今回蛍光X線分析を依頼した近世土器の一群は，肉眼観察による限り鉱物の含有状態や素地の粗密によって，いくつかのグループに識別できた。すなわち，

胎土1　1～2㎜大の砂粒を多く含み，きめが粗い。雲母を一定量含む。

胎土2　胎土1と基本的な粗密は大体同じであるが，雲母を含まない。

胎土3　1㎜以下の砂粒を少量含み，比較的きめ細かい。

胎土4　胎土3に近似するが，粗い砂粒を含む。また十分捏ねられておらず，断面が筋状を呈するものもある。瓦に近い胎土である。

胎土5　微砂粒や雲母を少量含むが，胎土3よりもきめ細かな素地である。

このうち，胎土2は雲母を含まないこと以外には胎土1との識別が困難であり，あるいは同じ範疇で理解できるのかもしれない。胎土2を暫く除外しておくと，特徴的な胎土1・3～5は第5章第2節で示した形態分類のいくつかと明確な対応関係にある。

胎土1　擂鉢1類，焜炉2・3類，焙烙1～4類（岡本系），甕2・3類

胎土3　羽釜1・2類，焙烙5類（御厩系）

胎土4　火鉢1～3・5・6類

胎土5　焙烙6・7類（関西系）

以上の観察は，形態・技法から「御厩系」「岡本系」と呼称した焙烙が，胎土においても特徴を異にしていることを予測させた。砂粒の含有形態を明確に異にすることは，換言すれば製品の品質そのものも規定すると考えられる。「御厩系」焙烙は極めて薄い器壁であるが，「岡本系」焙烙はかなり厚手の器壁をもち，このことをよく示している。土器の品質まで規定するこのような胎土の違いが，どのように分析値の違いとして読み取れるのか，また同様な胎土を各々もつ他器種と併せて，分析値のまとまった集団を個々に形成するかどうかが問題となった。

2．現存生産地と粘土採取地点

もし分析値に違いが読み取れれば，それが近世以来継続してきた現存生産地の胎土とどのように対応するのかが，次に問題となる。このため，御厩・吉岡（鍋谷）・岡本の3生産

地付近の粘土採取を行った。

採取にあたって，なるべく窯場に近接して，採掘の実績がある地点からの採取を心がけた。御厩窯では，地元陶工からの聞き取りと近世文書の記載をもとに，津内山南麓に現存する粘土採掘地点（戦前頃まで採掘が行われていた）から焙烙の原料としていた白色風化土を採取した。鍋谷では，蛸壺用に吉岡から採取された田土を地元陶工から入手した。また岡本では，瓦や岡本焼の粘土として重機で田土（黄灰色粘土）を採掘している地点を地元の陶工に教示・案内してもらい，そこで採取した。

以上によって得られた粘土を試料にして，近世土器との比較を依頼した。

3．分析結果と今後の課題

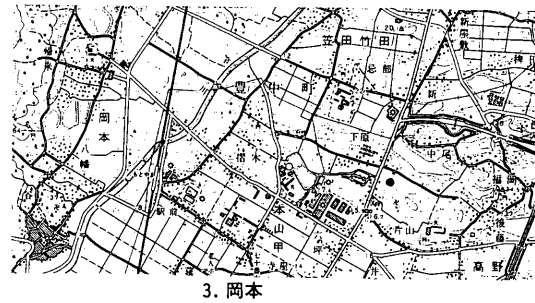
分析結果は，第1節の白石氏報文のとおりである。近世土器では器種別に大きな差異はみられず，一つのグループとなった。また焙烙では形態差に対応するような分析値は得られなかった。さらに現存生産地の粘土は差異が読み取れたものの，これと近世土器とは明確なかたちでは対応しなかった。

こうした結果をどのように解釈するかは，今回のデータからのみでは難しい。何よりも今回の分析試料が各器種に分散しており，量的な保障が得られないため，今後も同様な観点からの分析の継続が望まれる。例えば焙烙の分析値は，Sr-Rb 散布図（第200図）では一定の重なりをもちながらもやや散布域を異にするようにもみえる。散布域を同一とみるかやや異なるとみるかは，分析データを蓄積することで解決できる問題と考える。これは他器種についても同様であろう。

また比較に用いた現存生産地の粘土についても，より厳密なサンプリングが要求される。白石氏も指摘するように，近世段階での粘土採掘地点の特定，混和材や粘土相互の混ぜ合わせがどのように行われたか，などを聞き取りや文献的な調査によって，より正確に行う必要があろう。さらに近代以降の製品についても分析試料を蓄積することも，時期的な変化の有無を確認する意味で重要である。

2. 吉岡(鍋谷)

1. 御厩



3. 岡本

第201図　分析試料採取地点と土器生産地

第5章　ま　と　め

第1節　出土旧石器の特徴

1．出土状況からみた資料の性格

郡家田代遺跡から出土した旧石器は，上位の包含層出土のものを加えても100点をわずかに超える程度に過ぎない。各石器集中部の石器群に関しては，既に第3章第2節で述べたようにかなり一括性の高い出土状況といえるが，出土点数は集中部1で50点，集中部2で37点にとどまっており，他の旧石器遺跡で行われているような，量的な裏付けに基づく資料操作が困難な面がある。

出土点数の少なさの原因の一つには，水洗選別を行わなかったための砕片の見落としを念頭に置く必要があるものの，製品や剝片については概ね遺存していた実数に近いものと考えられる。ただし垂直・平面分布の状況や接合資料の分布から，石器集中部はかなりの短期間に形成されたとみてよい。遺跡が平野部を南北に縦走する微高地縁辺部に立地することを考慮するならば，備讃瀬戸の遺跡群のように眺望に有利であるがために継続的な遺跡形成が行われた状況とは明瞭に異なっているといえる。すなわち本遺跡の場合には，その立地に限定された任意性は認められず，むしろ偶然で一過性の強い在り方が看取できるのである。石器の点数は140点とやや多いが，本遺跡の西約1.2kmに所在する三条黒島遺跡の旧石器ブロックも同様な性格の可能性があろう。

以上を踏まえると，本遺跡の石器群は資料点数が少ない反面，一括性という点ではかなり信頼度の高いものであり，短期間における消費地の石器組成・製作技術・使用形態について示唆的な内容を多く含んでいるといえよう。これらの資料を適切に評価するためには，個々の石器に対する徹底した観察と洞察が必要と思われるが，ここでは大まかに特徴を指摘するのにとどめたい。

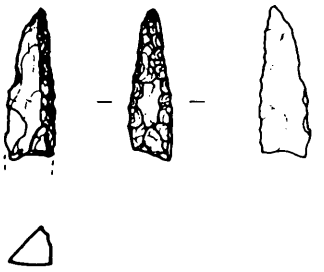
2．器種組成

石器集中部１・２と上位包含層から出土した石器群の組成は，第４表に示した通りである。一見してわかるのは，ナイフ形石器が量的に多いことであり，これにスクレイパーや楔形石器が少量伴うという在り方である。ナイフ形石器には，翼状剝片素材で背部のみ調整する典型的な国府型ナイフ形石器（１・40・41・83・84・86・89，第202図）と，横長剝片を素材とした二側縁加工のものや，やや不定形な形態のものなどがある。両者はほぼ同率存在するが，二側縁加工のものの一部（85・87）や不定形な底面をもつもの（94）も国府型ナイフ形石器とすれば，前者が73%，後者が27%となる。なお後者には，２のように素材の刃部をほとんど残さずに鋭い先端を作る，変形度の顕著なものが存在する。またス

器　　種	集中部１	集中部２	上位層	計
	点数	点数	点数	点数
ナイフ形石器	2	6	7	15
スクレイパー	1	0	1	2
楔形石器	3	0	0	3
二次加工ある剝片	2	7	3	12
使用痕ある剝片	2	2	0	4
翼状剝片	0	1	3	4
横長剝片	15	18	0	33
縦長剝片	0	1	0	1
砕片	11	0	0	11
横長剝片石核	2	6	1	9
原礫	0	1	0	1
計	38	41	15	94

第４表　郡家田代遺跡出土旧石器の器種組成
石鏃と安山岩などは除外した。

クレイパーや楔形石器は，不定形な素材が用いられている。翼状剥片もしくは底面を有する目的的な横長剥片は，ナイフ形石器と密接な対応関係にあるということが，当遺跡でも指摘できよう。



第202図　石器集中部２出土石器（S＝1/2）

もう一点注意されるのが，二次加工ある剥片といった不定形な石器の存在が顕著である，ということである。この中には，安定した形態での剥取に失敗した横長剥片に背部加工的な調整を行い，ナイフ形石器状に仕上げたもの（44）もあるが，他は底面をもたない不定形な横長剥片を素材とするもの（60・61）や，底面はもつが半折した横長剥片を素材とするもの（10・62・88），さらに大型で不定形な剥片を素材とするもの（６・92）など様々である。いずれも非目的的な剥片を素材とし，加工部位や方法にも規格性が認められないものである。

剥片類では圧倒的に横長剥片が多く，縦長剥片はわずかに１点（59）に過ぎない。目的剥片とみられるものには，翼状剥片が４点，翼状剥片とは考えられない横長剥片が１点出土しており，翼状剥片の比率が高い。

３．石核の消耗度

既にみたように目的剥片では翼状剥片の比率が高く，典型的な国府型ナイフ形石器の存在と併せて瀬戸内技法第３工程の存在がかなり明瞭であったことが窺える。これに対して石核の在り方は，やや対照的である。つまり，作業面に複数の剥離面のみられる石核が３点（28・34・79），交互剥離状の石核が５点（67・68・77・78・98）存在し，石核幅と１枚の作業面幅がほぼ同じ石核はわずか１点（46＋47）である。残核の形態からは，瀬戸内技法第２工程の存在が希薄であるといわざるを得ず，剥片と石核にみられる現象面の齟齬をどのように捉えるのかが問題となる。

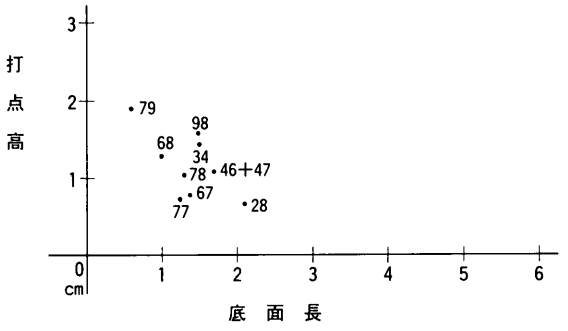
まず考えられるのは，当遺跡内で瀬戸内技法第２工程がほとんど行われずに，翼状剥片と国府型ナイフ形石器が原産地から搬入されるという形態である。しかし，定形的な翼状剥片の剥取に失敗したと考えられる事例（44）が存在することに留意する必要があろう。失敗品が原産地からの持ち出しの対象とならなかったのであれば，この事例は当遺跡で翼状剥片の剥取が行われたことを示唆していよう。またおよそ国府型ナイフ形石器の素材としては不適な，両端を欠損した翼状剥片（50）や，当遺跡での国府型ナイフの大きさ（最

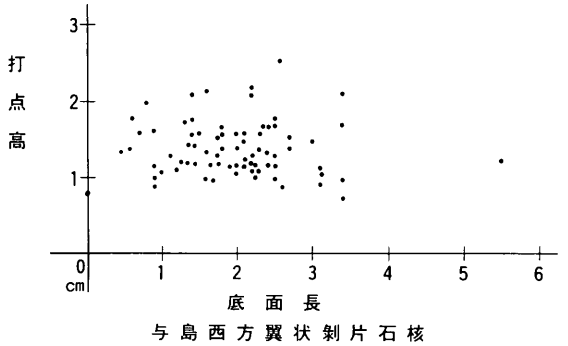
大長9.2cm，最小長3.05cm，平均長5.72cm。ただし最小長は折損によるもの)に満たない翼状剝片（96。長5.5cm）が加工されずに遺棄されていることも，このことを示すように思われる。これらから，遺跡内でもある程度瀬戸内技法第２工程が行われたことが想定される。

ところで消費遺跡では，原産地遺跡以上に石材の効率的な利用が図られたとされている。具体的な現象としては，瀬戸大橋関係の調査成果が示すように，石核の消耗度という点に反映されよう。郡家田代遺跡出土の石核においても，石核の消耗度と剝片剝離の在り方には密接な関わりがあるように思われる。

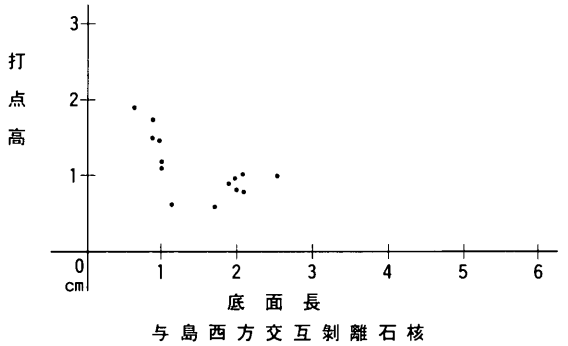
第５表は，旧作業面に残された石核の打点高と，残された底面の長さを示したものである。残核となった時点での長さと厚み，つまりどの程度剝片剝取の余地を残したまま石核が廃棄されたのか，表示することを意図して作成した。残核の厚みを示すのが目的であるから，剝片剝離技術の差異は取り敢えず度外視した。このため交互剝離石核の場合には，旧の打面側の平坦面を底面と見做して計測した。これを原産地遺跡である国分台遺跡群の石核と比較すると，ほとんど重複することのない明瞭な分布域の違いが読み取れる。すなわち国分台の方が剝片剝取の比較的早い段階で石核を放棄する傾向にあり，石核を使い切るのは打点高の高さに表れるように比較的長い剝片剝取が可能な場合に限られるようである。これは翼状剝片石核でも他の横長剝片石核でも共通している。翼状剝片石核で比較してみると，46＋47は国分台の分布域の最小値にあたる。また並列剝離や交互剝離の石核では，国分台の最小値域あるいはそれよりも小さな値の領域をとるのである。

郡家田代遺跡のみでは資料数が少ないので，上記の指摘を補強する意味で国分台からほぼ同じ距離にある与島西方遺跡Ａ地区の石核についても計測してみた。翼状剝片石核は底面長が３cm以下にまとまっており，国分台よりも短い数値でまとまっている。ただし打点高は国分台とほぼ同じで，１cm以下になることはほとんどない。長さに一定の限度を有した上で，より徹底した剝片剝取が行われていることが読み取れよう。交互剝離石核の分布域は，国分台の最小値域と一部重複しながらさらに小さいものも多い。同じ遺跡内の翼状剝片と比較すると，打点高を１cm以上に維持する一群と打点高が１cmを下回る一群とに分けられる。前者は最も消耗した翼状剝片石核に近似する数値を示し，後者はそれをさらに上回る消耗度である。翼状剝片石核と交互剝離石核との消耗度は，国分台ではほぼ似通っているが，西方では交互剝離石核がより顕著であることが看取できよう。西方遺跡でのこうした現象は，翼状剝片石核の剝片剝取最終段階において，打面調整と目的剝片剝取の差異が少なくなり，交互剝離的な剝取形態をとることがあるとした藤好史郎氏の指摘と整合

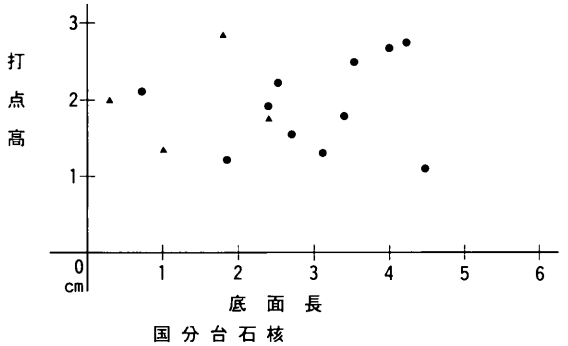




与島西方翼状剝片石核



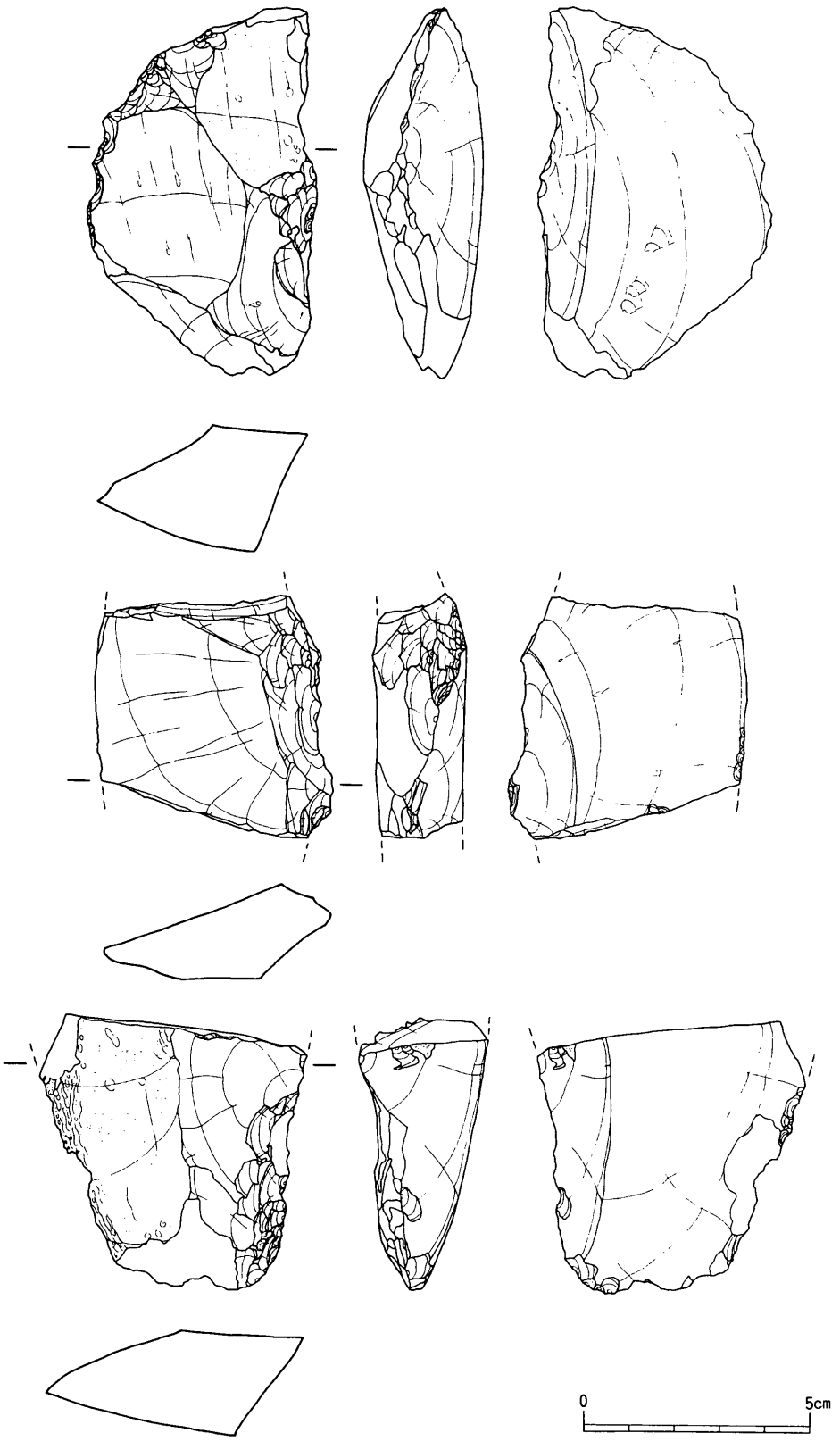
与島西方交互剝離石核



国分台石核

● 翼状剝片石核
▲ 交互剝離並列剝離石核

第5表　石核の底面長と打点高



第203図　国分台朱雀台第Ⅰ地点採集の石核（S＝2/3）

性をもつものである。郡家田代遺跡における消耗した石核にも，こうした事情を想定することができれば，石核と剝片・製品との間にみられた齟齬は解消する。ただし，消耗し切った石核から剝取された剝片が，どのような形態で使用されたかは本遺跡の資料から明らかにできず，複数の背面からなるナイフ形石器（43）にその可能性が指摘できる程度である。

4．石器の再加工

出土した石核9点のうち7点までが作業面縁辺や底面縁辺に二次加工を施したものであり，残核となった後にスクレイパーなどの機能が与えられたものと思われる。しかし残核に二次加工を施す現象は国分台でもしばしば認められるようであり，原産地とそれ以外の遺跡との差異を際立たせる要素ではない。これに対しナイフ形石器に認められる再加工の痕跡は，消費地遺跡の特性をよく表している。

48＋49は，背部加工中に折損したナイフ形石器に再加工を施す良好な接合資料である。折損した2つの破片は石器集中部2に残されており，背部加工→折損→再加工（折損面を打面として樋状剝離）→廃棄という一連の行為が短時間のうちに行われたことを窺わせる。再加工後も刃部を生かした使用が行われたとも考えられるが，樋状剝離を生かして彫器として再生された可能性もある。

調整加工による変形度の高いナイフ形石器にも，再加工品とみられるものが存在する。42・43には折損部を打面とした小剝離がみられ，折損後に調整加工が行われたことがわかる。瀬戸内地方のナイフ形石器の再生形態として想定されている，中央部を生かし両端部を再加工するものとは異なる。ただし接合資料ではないため，折損の生じたのが製作途上か使用時かは判断できない。なお典型的な国府型ナイフには，再加工の形跡を明瞭に読み取ることは困難である。

以上のように，ナイフ形石器の再加工率は21％（14点中3点）であり，製作途上であっても完成後であっても折損品をかなり有効に使用していることが窺える。他遺跡での再加工率が明らかでないので比較は困難であるが，「石材環境に応じたナイフ形石器の積極的な延命策」がここでも講じられたとみることができるかもしれない。

5．おわりに

事実関係の羅列と不確定な憶測の提示に終始したが，石核の顕著な消耗状況とナイフ形石器の再加工から，非原産地的な消費地における石器組成の一端を示せたものと考える。個々の石器について大きな事実誤認をしていることをおそれるが，少なくとも石器集中部１・２の石器群に一括性が看取でき，また上位層出土石器もそれとの関係で理解できる以上，限定された時期の石器群であることは首肯できる。当該地方の旧石器遺跡は，不安定な層位と長期にわたる石器群の重複から，編年論においてもそれに立脚した石材消費論においても不確定な要素を排除できないことが多いが，本遺跡の資料はそれをほぼ純粋なかたちで示したことに最大の意義がある。三条黒島遺跡の石器群の成果も踏まえた上で，改めて消費地における多様な石材（素材）獲得や石器生産の在り方について，検討していく必要があろう。

第2節　近世土器の形態

1．はじめに

第3章第6・7節で報告したように，郡家田代遺跡ではⅠ区北半部を中心に多量の近世遺物が出土した。中でも注目されるのは，肥前系や備前系（稀に瀬戸美濃系）の陶磁器に混ざって出土した，多くの近世土器である。それらは決して膨大な量ではないが，土器が分担した特定器種の基本的な形態・技法について，多くの情報をもたらしてくれる。そして，遺構の大半が18世紀中葉頃に廃絶したものであることは，資料の一括性を少なくとも廃棄の時点では保障していることになる。このことは，これらが近代以降の土器との識別が未だ容易ではない近世土器の様相について，時期的にも形態・技法の点でもまとまった内容を示す資料であるといえよう。

ここでは本遺跡の近世土器の形態を分類し，その特徴を明らかにしておきたい。また比較のために，観音寺市一の谷遺跡群出土の主要な近世土器についても検討しておく。なお器種名は，実際の機能・使用形態を厳密に検討して導き出されたものではなく，慣例的で便宜的な用法に倣っているのに過ぎない。したがって「土器」としての明確な形式・型式設定は，今後の重要な検討課題であるといえよう。

2．形態分類

[小皿]

円盤状に弱く突出した底部と，そこから横方向へ緩やかに立ち上がる体部をもつ。底部外面には，糸切り痕がみられる。土師質焼成である。

[台付灯明皿]

短く「ハ」の字形に開く脚部と，横方向に伸びる浅い体部をもつ。器壁は体部が薄いのに対して，脚部は極めて厚い。これは脚部が最初に円柱状に作られ，その後ヘラ削りによって内面を成形するためであろう。土師質焼成である。

[擂鉢]

口縁部を内弯させる傾向をもち，内面には条数の少ない卸し目が疎らに施される。口縁部形態から3形態に細分できる。1類は内面に肥厚する口縁部をもち，内弯傾向がより強調されたような形態を呈する。2類は弱く内弯する口縁部をもつ。口縁部端面には内傾す

る平坦面が明瞭に作られる。3類は体部から漸移的に肥厚するものである。内面の肥厚と内弯傾向は弱くなる。いずれも土師質焼成である。

形態的には中世後期の土師質擂鉢に最も近い1類を嚆矢として，1類→2類→3類と口縁部と体部の一体化という方向で連続的に変化する可能性があるが，本遺跡の出土状況からは検証できない。

[捏鉢]

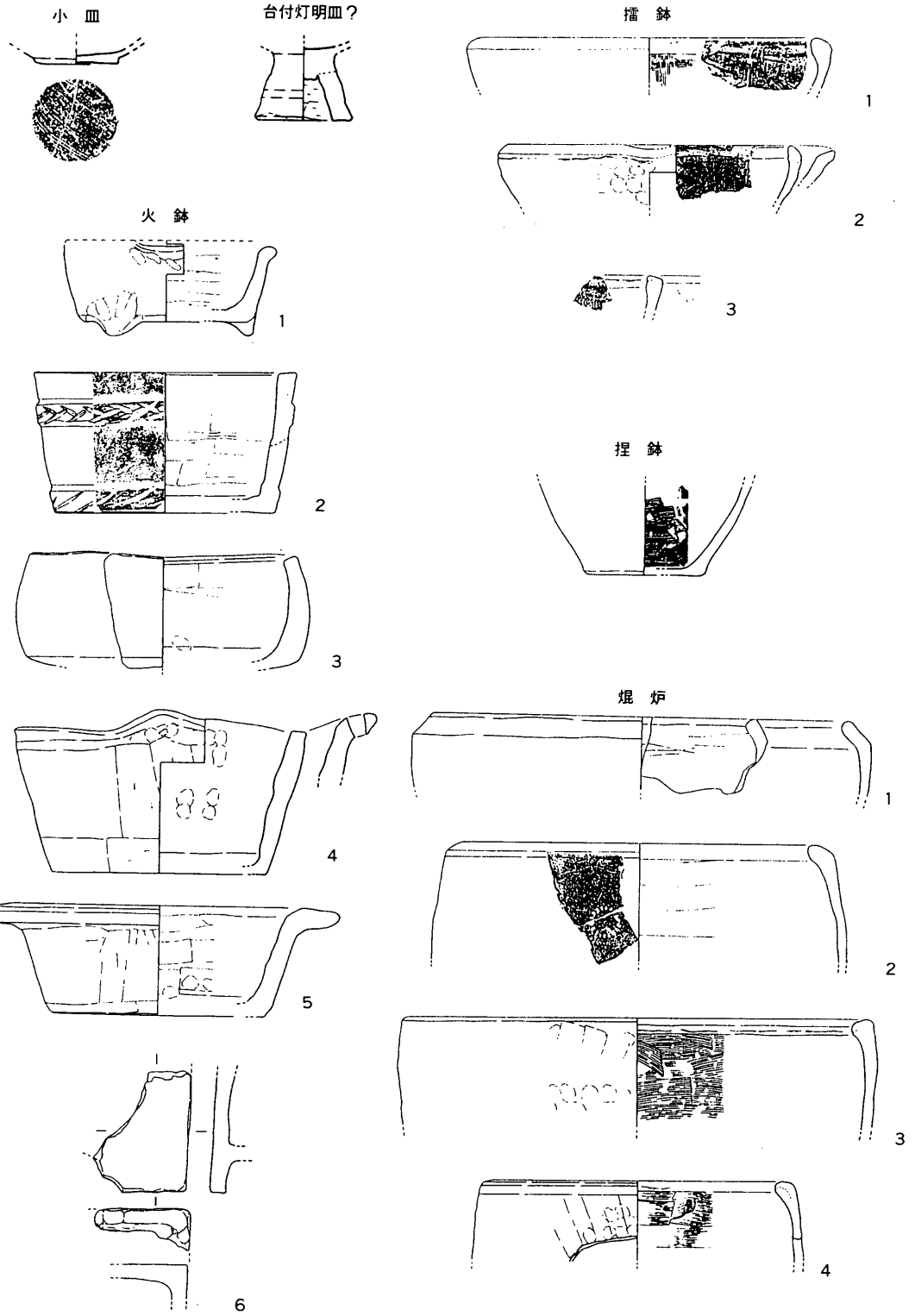
卸し目のない鉢類を「捏鉢」とした。口縁部形態は明らかではないが，体部と底部の大きさからみて，擂鉢よりも小型の器種であった可能性がある。内弯気味の体部をもつ。土師質焼成である。

[火鉢]

厚手の器壁をもち，外面に比べて内面調整が極めて粗雑なこと，また後述するような胎土が類似するなどの点で共通するが，形態的には脚部の有無と加飾法にかなりの個体差がある。火鉢としたのは，いくつかの内面に煤が付着していることによるが，全てを火鉢で一括できるかどうかは確定的ではない。取り敢えず6形態に細分した。1～5類は円筒形の体部をもち，6類は箱形の体部をもつ。また1・2・5類は有脚である。1類は有脚円筒形の火鉢である。脚部は逆台形の板状のものが3方向付される。2類も有脚円筒形である。脚部は1類よりも幅広で，体部の延長上に貼付される。また体部には2条の突帯があり，刻みを入れて箍状にする。桶の模倣品であろう。3類は無脚円筒形のもので，内弯する体部と波状に上下する口縁部が特徴である。4類も無脚円筒形であり，口縁部には大きく横に張り出す把手がある。5類は無脚円筒形であり，水平に長く外反する口縁部をもつ。6類は有脚箱形の火鉢で，底部四隅に格狭間形の脚部がみられる。1～3・5・6類は瓦質焼成である。4類は土師質焼成であるが，本来は瓦質焼成の可能性がある。

[焜炉]

円筒形の体部をもち，体部の一方に開口部をもつものを焜炉とした。ただし一の谷遺跡群の事例のように，有脚円筒形の火鉢の口縁部が類似した形態をもち，一概に焜炉と割り切れないことも考えられる。しかしながら一の谷の火鉢は口径が小さく，本遺跡出土事例とは明瞭に法量が異なるので，本遺跡の事例は全て焜炉に分類した。口縁部から3形態に細分した。1類は口縁部が明瞭な屈曲部を伴って長く内傾するものである。口縁部外面には外傾する平坦面が形成される。2類は口縁部の屈曲は明瞭だが，口縁部長が1類の半分程度に短いものである。3類は口縁部に明瞭な屈曲部はなく，短く内側に肥厚することで



第204図　郡家田代遺跡出土の近世土器（1）
（小皿・灯明皿はS＝1/4，他はS＝1/6）

かろうじて端部の屈曲状態を作出するものである。口縁端部には水平もしくは内傾する短い平坦面がある。土師質焼成である。

焜炉の形態は，口縁部の縮小・肥厚化傾向から1類→2類→3類という変化をたどる可能性がある。しかし出土状況からは検証できない。

［羽釜］

球形の体部中位に水平に伸びる鍔部を伴うものである。中世在地土器に顕著であった脚付の形態はみられない。口縁部形態から2つに分けた。1類は内弯する体部から明瞭に屈曲した直立気味の口縁部をもつ茶釜形のものである。2類は内弯する体部の延長上で口縁部が収まるものである。特に2類には，口縁部に1対の環状の把手が付される。土師質焼成である。

1類と2類は模倣の原型（鉄釜）を異にする，別系統の形態と考えられる。

［把手付鍋］

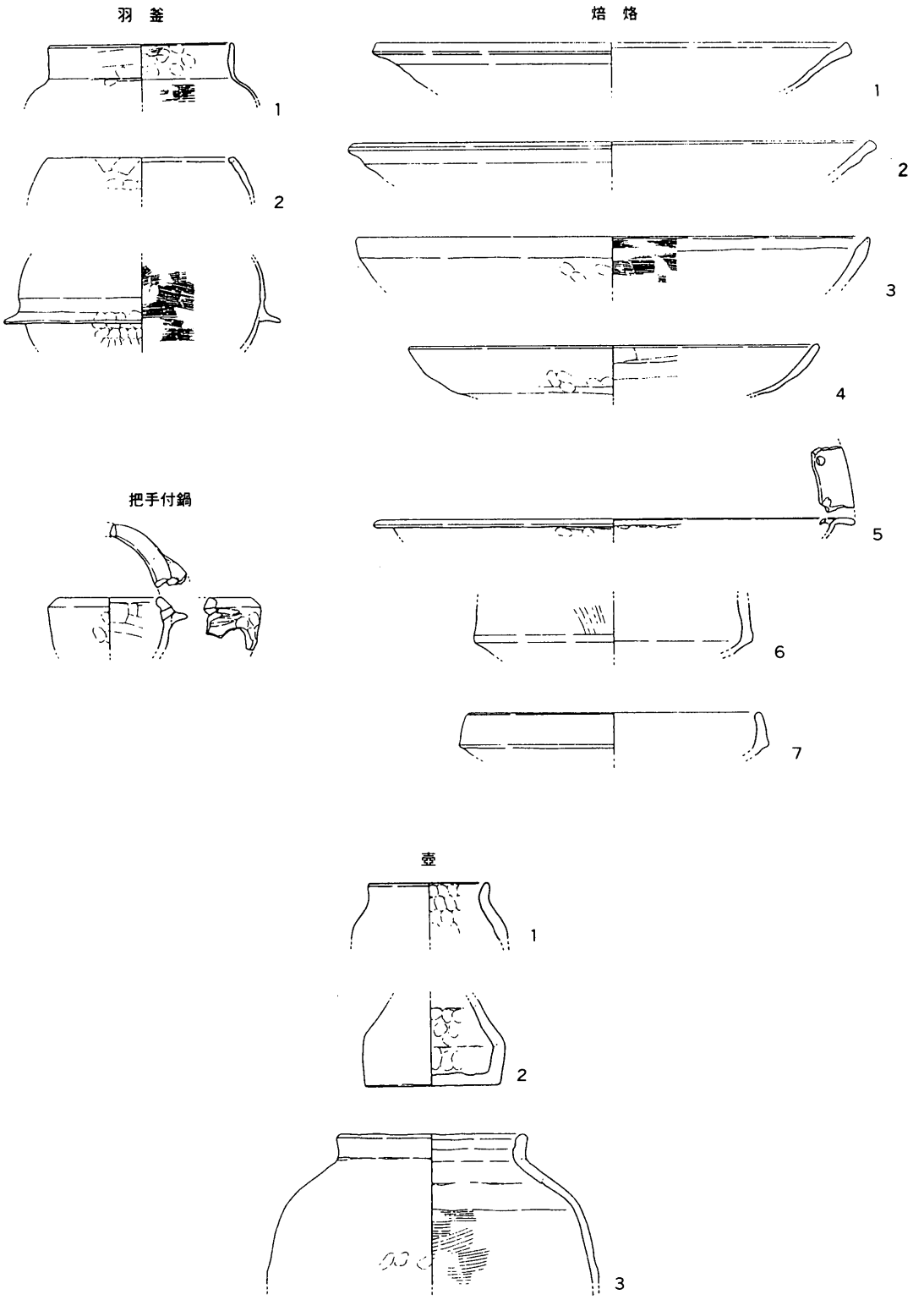
中世後期にみられた羽釜形の口縁部に1対の把手を付す鍋の系譜を引くものである。口縁部に付された鍔状の突帯は退化し，外傾する口縁部端面となっている。また，把手も上方に大きく張り出していたものが，水平方向に小さく伸びる程度になっている。口径の縮小化も顕著であり，実際の使用に供されたものか，判断に苦しむ。土師質焼成である。

［焙烙］

非常に浅い，皿形を呈する鍋類を焙烙とした。「ホーロク」という呼称は少なくとも近世から現在までは炒り鍋のことを指す名称であったようである。口縁部形態をみると，体部からの延長で口縁部が収まる一群（岡本系）と，外反する明瞭な口縁をもつ一群（御厩系），さらに直立する口縁部をもつ一群（関西系）に大別できる。岡本系と考えられる一群は，口縁部端面の形態から4つに細分した。1類は強い横ナデ調整を施し，凹面を形成させるものである。2類はやや拡張した方形を呈するものである。3類は内外面ともに強くナデ調整して嘴状にするものである。4類は丸く収まる端部をもつ。いずれも個体差が大きく，細分案が妥当かどうかは本遺跡の事例のみでは判断できない。御厩系と考えた焙烙は，まとまった形態からなる。水平方向に強く外反する口縁部をもち，2個の円孔を伴う内耳を1対有している（5類）。6類は難波洋三氏分類のC類に，7類はD類に対応する関西系焙烙である。

［壺］

体部から明確にすぼまる頸部と口縁部をもつものを壺とし，3形態に細分した。1類は



第205図　郡家田代遺跡出土の近世土器（２）（S＝1/6）

短く外反する口縁部と若干張る体部からなる。2類は最大径の位置が体部の下半にあり，直線的に内傾する体部上半をもつ。3類は直立する短い口縁部をもち，体部は大きく球形に膨らむ。大型の壺であり，あるいは甕に分類した方がよいかもしれない。1類は瓦質焼成であり，2・3類は土師質焼成である。

［甕］

口径と体部最大径にほとんど差がない大型品を甕とした。口縁部形態から5形態に分けられる。1類は外面に幅広い段を伴った縁帯をもつものである。2類は断面矩形に肥厚し，若干外反する口縁部をもつ。3類は内弯気味に外傾する口縁部をもち，端部は突帯状に作られる。短いが直立する頸部をもつ。4・5類は18世紀中葉よりも下った時期の可能性があるものである。4類は3類の口縁部が強く肥厚し，明瞭な頸部が消失したような形態をもつ。5類は3類の頸部を短くし，口縁部にやや丸味をもたせたような形態である。なお底部の3方向に脚部を貼付するものがあるが，口縁部との対応関係は明らかにできなかった。いずれも土師質焼成であるが，1類は特に堅緻であり「軟質陶器」ともいえるような焼き上がりを示す。

形態的には3類から4類への変化が考えられる。また5類も3類からの変化形態である可能性があろう。しかし4類と5類の関係については資料も少なく明らかにできない。

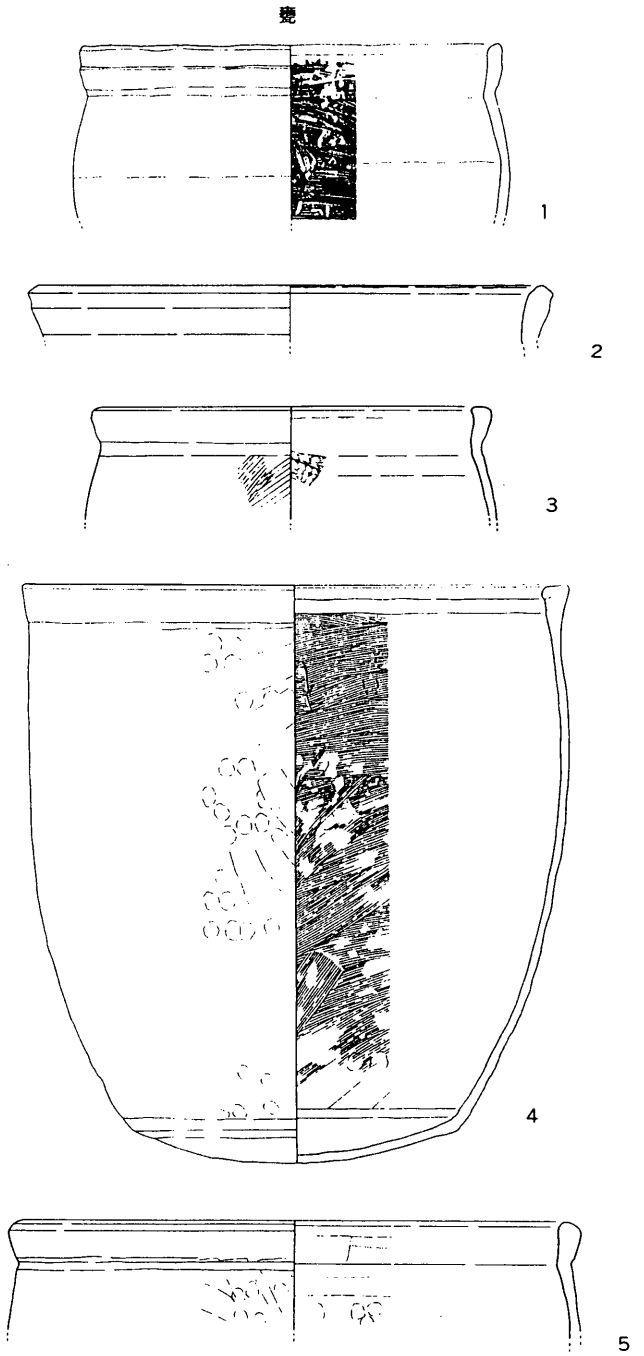
3．一の谷遺跡群の近世土器

一の谷遺跡群は，三豊平野のほぼ中央に位置する近世集落遺跡である。四国横断自動車道（善通寺～豊浜間）建設に伴い発掘調査が行われ，包含層や廃棄土坑，埋め甕などから18世紀～19世紀前半頃の近世陶磁器とともに近世土器が多量に出土した。なお，北西約3kmの地点に近世土器生産地の岡本窯が存在する。

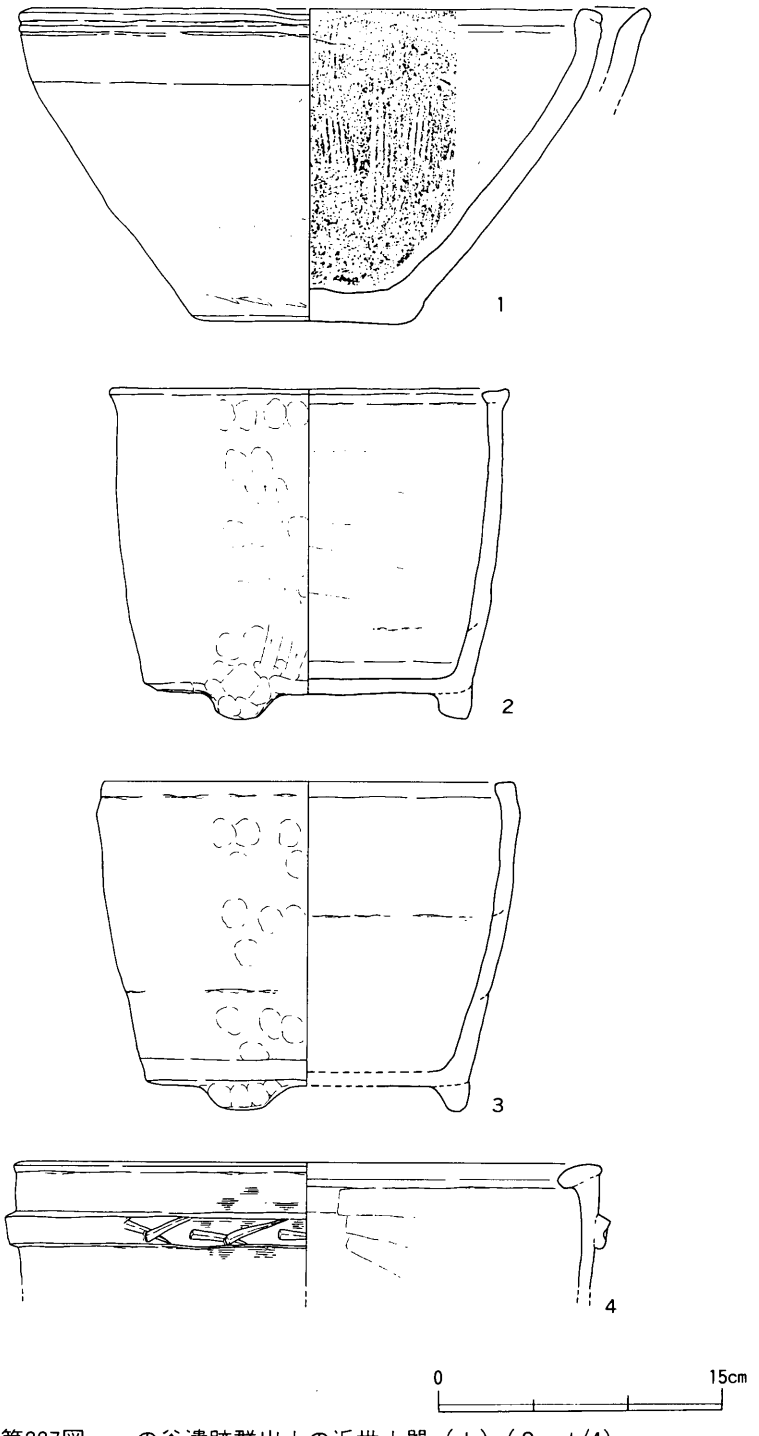
第207～210図は出土した主要な近世土器である。やや粗質で砂粒を多く含む胎土1（雲母含む）もしくは胎土2（雲母なし）の土師質土器を主体とする。

［擂鉢］（第207図1）

外傾して直線的に伸びる体部から，緩やかに屈曲して直立する口縁部をもつ。口縁部はわずかに肥厚する程度であり，断面方形を呈する。郡家田代遺跡の擂鉢3類に近い形態であるといえよう。口縁部には強い横ナデ調整が施されるが，底部に下駄印はみられず回転台上で製作されたかどうか，判断は難しい。内面には10本を1単位とする卸し目が間隔を開けて施されており，体部下半と口縁部では使用により卸し目が摩滅している。また口縁



第206図　郡家田代遺跡出土の近世土器（３）（S＝1/8）

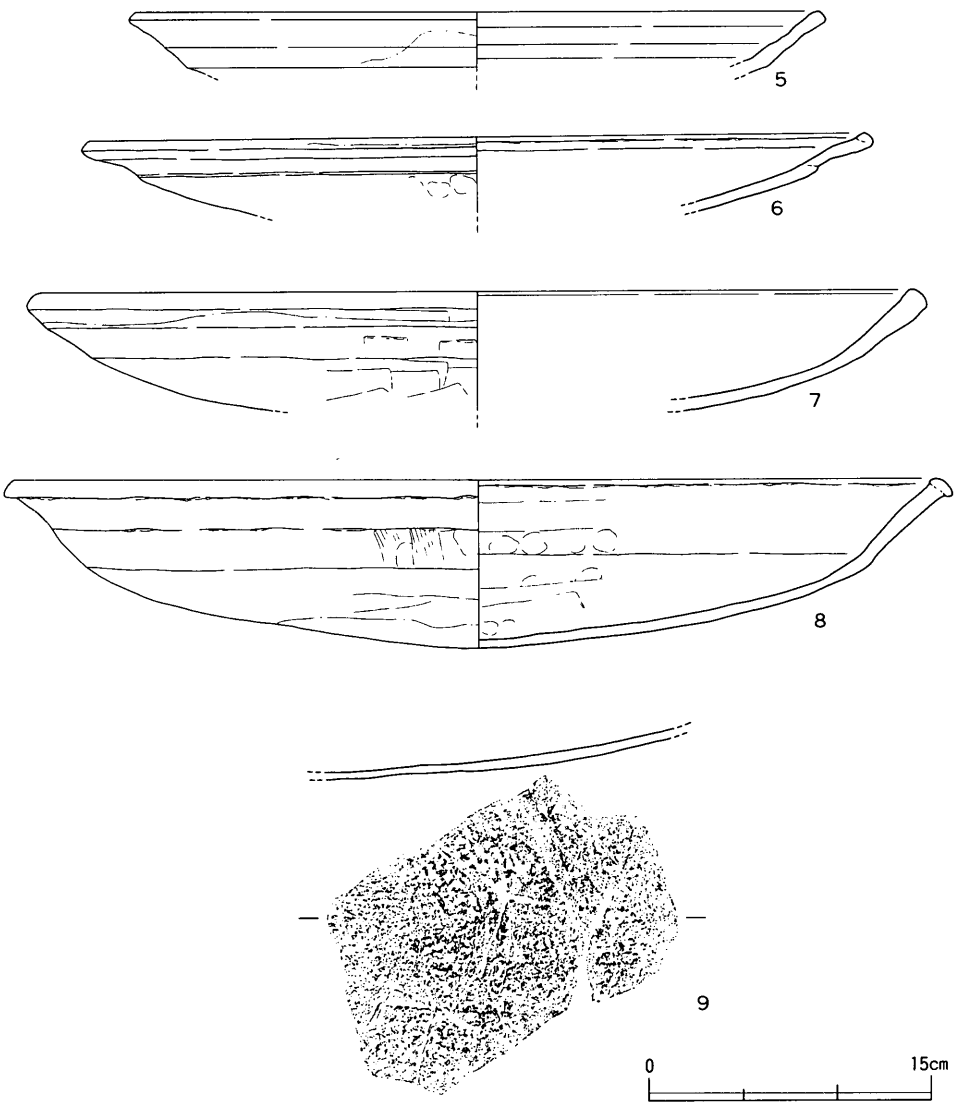


第207図　一の谷遺跡群出土の近世土器（１）（Ｓ＝1/4）

部に弱く造作された片口がみられる。

［火鉢］（第207図 2 ～ 4 ）

いずれも土師質焼成で胎土 1 ・ 2 であり，瓦質焼成主体で胎土 4 の郡家田代遺跡とは明確に異なる。 2 と 3 は，基本的な形態を同じくする有脚円筒形の事例であり，内弯気味に直立する体部と平坦な底部 3 方向に付された脚部をもつ。わずかに口縁端部の拡張傾向に

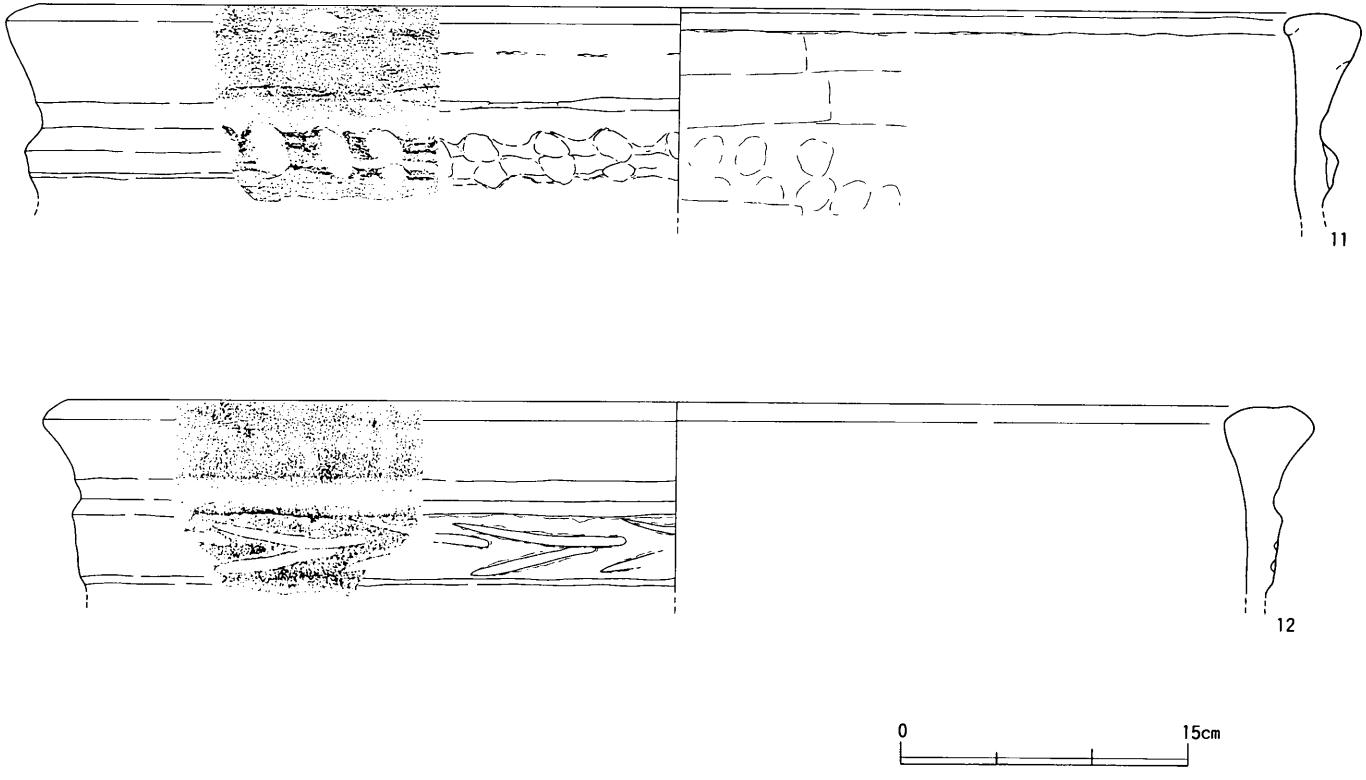


第208図　一の谷遺跡群出土の近世土器（ 2 ）（ S ＝ 1/4）

差異がみられる。4は直立する体部から内側に大きく肥厚する口縁部をもつものであり，体部上端に断面方形の突帯が貼付される。突帯上には「×」形に刻みが入れられ，箍状に作られている。田代の火鉢2類との近縁性が指摘できるが，口縁部の作巧や胎土・焼成が全く異なる。模倣対象（桶）を共有したことによる，見かけ上の類似であろう。

［焙烙］（第208図5～9）

第209図　一の谷遺跡群出土の近世土器（3）（S＝1/6）



第210図　一の谷遺跡群出土の近世土器（４）（S＝1/4）

胎土1をもつ土師質焼成品であり，形態・技法から「岡本系」とした事例で占められる。「御厩系」とした事例は全くみられない。郡家田代遺跡で指摘した口縁細部形態の顕著な個体差は，ここでも読み取れる。すなわち，端部が断面方形に収まるもの(5)，上方にツマミ上げるもの（6），肥厚気味な断面方形を呈するもの（7），丸味をもち両側に拡張するもの（8）などがある。技法的にはいずれも口縁部外面と内面全体をナデ調整し，その後に底部外面を粗く板ナデ調整する。底部外面には板ナデ調整に先行する筵状の圧痕(9)がみられるが，これは筵状の敷物上で底部成形が行われたことを示唆し，外型成形の可能性を示す。

［甕］(第209図10，第210図11・12)

10は体部から明瞭にくびれて比較的長く直立する頸部と，丸く肥厚する口縁部をもつ。田代出土の土師質甕とは若干異なる口縁部形態をもつが，底部が皿形に丸く突出している点は共通しており，成形技法を同じくする。11・12は断面逆三角形に強く肥厚し，田代の甕4類に近似する口縁部をもつものである。しかしやや詳細にみると，11は内面側の端部が突帯状にツマミ出されており，甕3類から甕4類へと肥厚化を経ても継承される要素がみられる。これに対し12ではそれが認められず，また相対的に11よりも肥厚化傾向がより顕著である。同様な口縁部は，高松市空港跡地遺跡の最も新しい段階の遺構群（昭和19年廃絶）にもみられ，より後出的な形態といえるかもしれない。

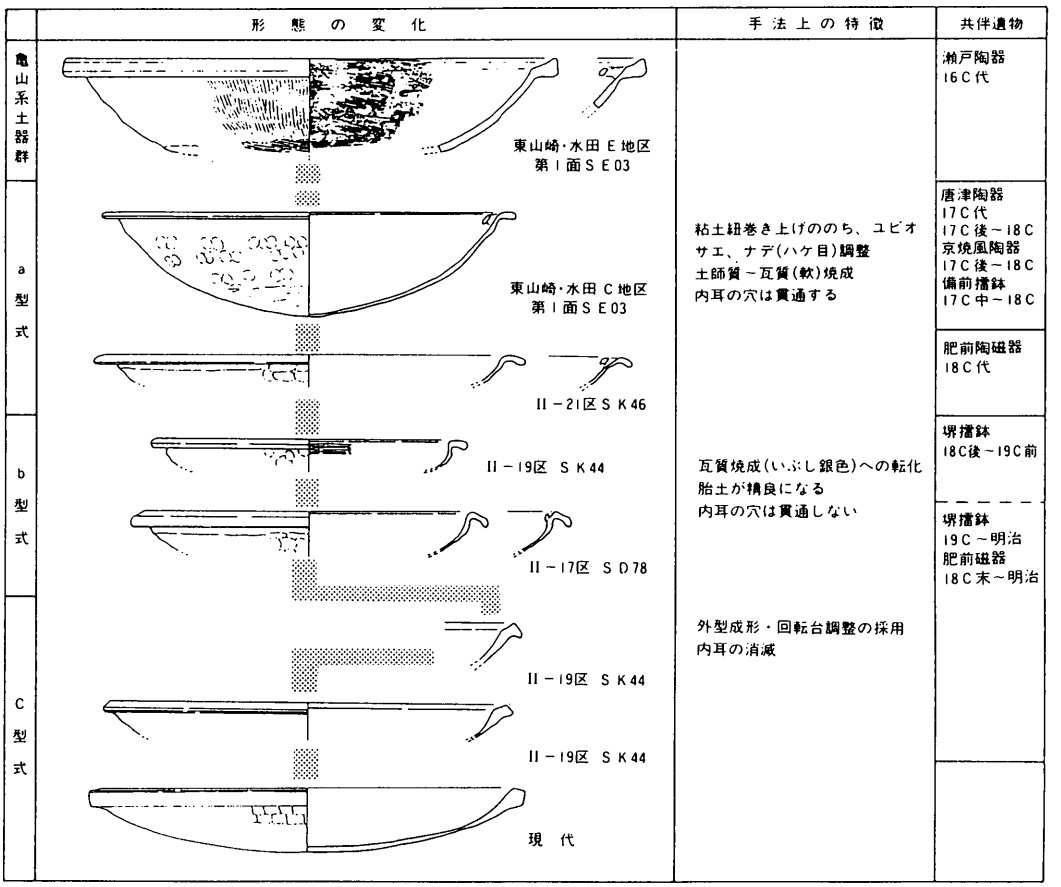
4．おわりに

以上，近世土器の形態分類案を提示した。また不十分ながら一の谷遺跡群出土土器と比較した結果，いくつかの共通点と相違点がみられた。すなわち，擂鉢や岡本系焙烙，甕など共通する形態・技法の器種が存在する一方，火鉢の形態や焼成，御厩系焙烙の有無などに明確な相違点が読み取れた。高松平野における断片的な資料（東山崎・水田遺跡，空港跡地遺跡）をも参考にすると，これは流通圏の差異を反映している可能性が大きい。ただし現段階では，全ての器種にわたって生産地を想定することが困難であるので，流通圏の個別具体的な復元にまでは至らない。また，火鉢についても多様な形態の一端を示し得たのに過ぎず，他地域で普遍的にみられる主要器種（火消し壺）の様相については全く不明な状況である。御厩・岡本・吉岡の各生産地における民俗的な調査とともに，県内各地での土器組成のリストアップが当面する課題であろう。

第3節　近世土器の地域色

1．はじめに

第2節で行ったような，考古学的な手法による近世土器の形態分類は，生産地系列の復元と相俟って今後も積極的に推し進めるべき課題であるが，同時に他地域との比較の中で讃岐の近世土器がどのように位置付けられるのか，ということも重要な検討課題である。とはいえ周辺の瀬戸内沿岸地域では，近世土器の具体的な様相については不分明な点が多い。そこでここでは，報告資料数が比較的多い焙烙と甕を検討材料として，瀬戸内の各地域の様相を明らかにした上で，讃岐の近世土器の系譜的な位置付けを考えてみたい。

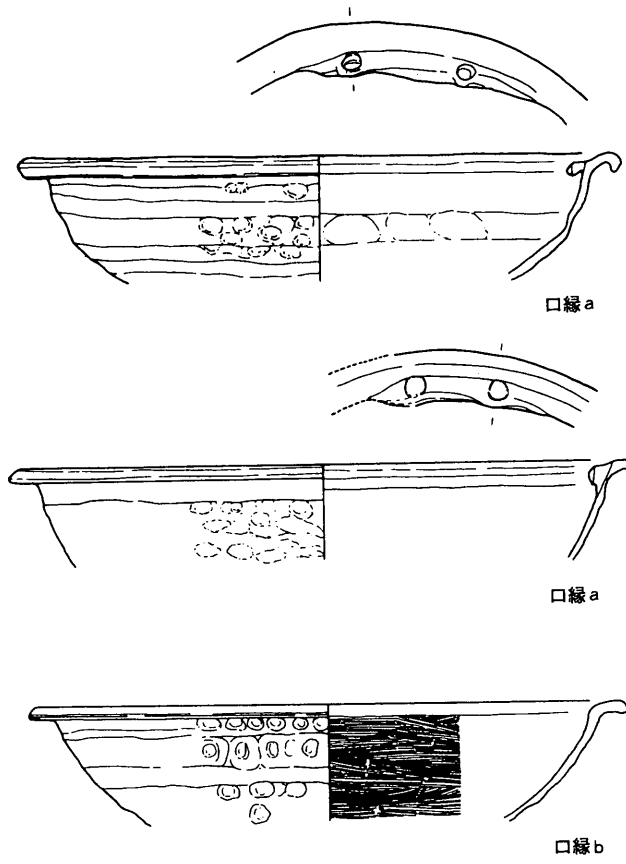


第211図　高松市空港跡地遺跡における「御厩系」焙烙の変遷

2．焙烙の地域色

［中部瀬戸内地域］

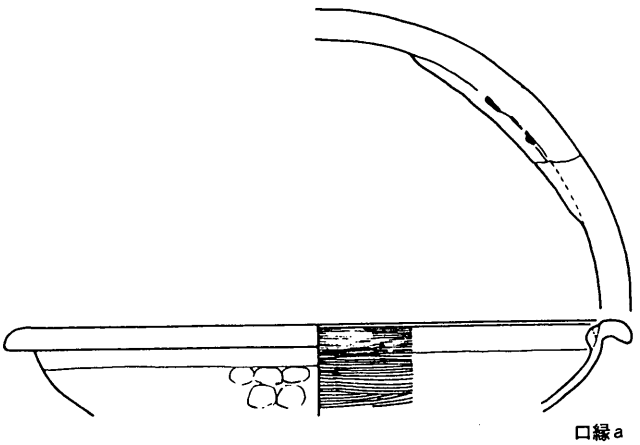
焙烙の形態・技法は，岡山・香川でかなり強い共通性を読み取ることができる。香川で「御厩系」としたのは，形態的には外反する口縁部と１対の内耳（各２箇所の穿孔あり）をもち，技法的には皿形に薄く延ばした底部に粘土紐巻き上げで体部・口縁部を形成するもので，外型成形・回転台調整を行わない焙烙である（郡家田代遺跡の形態分類では５類にあたる）。これと同一の特徴をもつ焙烙が，岡山南部（ことに備中地域）を中心に分布しているのである。香川でこれを「御厩系」とする根拠は，近世～近現代を通じての形態変化が御厩窯へ連続的に続くことによるが，同様に岡山南部の焙烙も在地の生産地である大原窯に極めてスムーズに連続することが窺える。



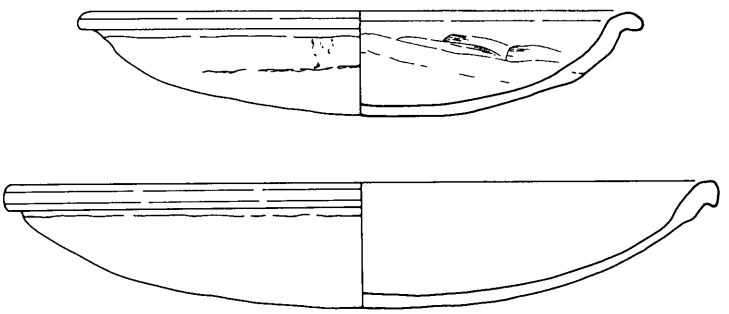
第212図　鍛冶屋遺跡出土の近世焙烙（S＝1/4）

このことをまず確認するために，岡山南部の焙烙の変遷を概観しておこう。検討対象としたのは，笠岡市鍛冶屋遺跡（18世紀前葉～中葉）・浅口郡鴨方町阿坂古墳前庭部（18世紀後葉～19世紀前葉）出土資料と，浅口郡里庄町大原窯の民俗資料である。

鍛冶屋遺跡出土の焙烙には，外反した口縁端部を下方に折り込むようにして垂下させるもの（口縁ａ）がかなりの頻度で認められ，直線的に外反するもの（口縁ｂ）は少量しかない。内耳にはしっかりした円孔があけられている。阿坂古墳前庭部出土資料でも口縁ａ主体であるが，時期の新しい一群（19世紀前葉頃）は口縁部器壁が厚手で若干長さが短くなったような印象を受ける。また内耳は円孔が貫通せずに痕跡器官化したものが多い。大原窯の民俗資料で明治期前後とみられる焙烙（第214図１）には内耳がなく，口縁部の肥厚化と短小化が顕著である。この特徴は，鍛冶屋遺跡例から阿坂古墳例への形態変化の延長



第213図　阿坂古墳前庭部出土の近世焙烙（Ｓ＝1/4）



第214図　大原窯産焙烙の民俗例（Ｓ＝1/4）

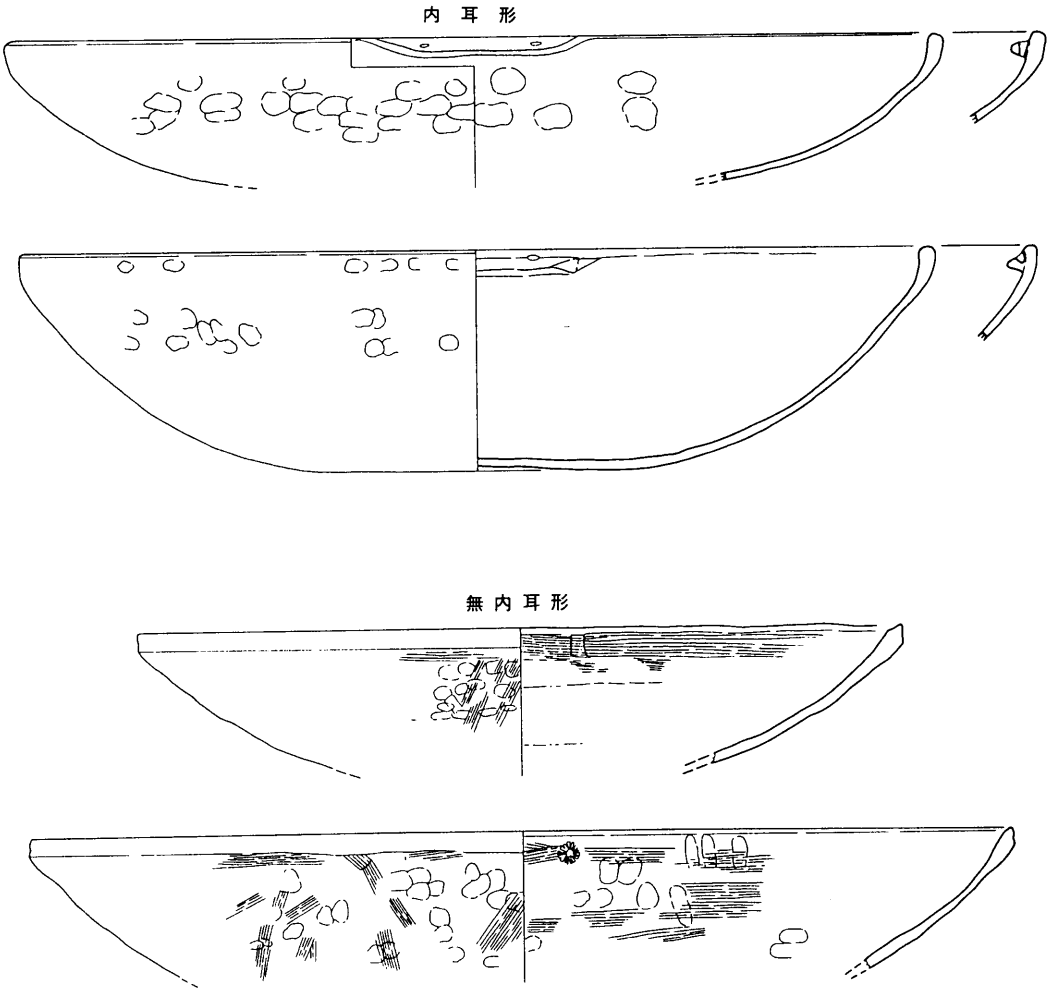
上にあるといえよう。この焙烙の底部外面には，藁の痕跡が顕著に遺存している。これが剝離材の痕跡であれば，この時点で外型成形が開始されたことになる。さらに大正～昭和期の焙烙は，より一層口縁部の肥厚・短小化が顕著であるが，口縁部の外反傾向はかろうじて維持されている。底部外面には離れ砂の痕跡がみられ，定型的な土製型による製作が行われたことがわかる。

香川の「御厩系」焙烙を岡山南部の事例と比較すると，以下の点に異なった要素が指摘できる。まず鍛冶屋遺跡と同じ時期には，口縁部形態は口縁ｂが主流で，口縁ａは少ない。次いで阿坂古墳前庭部と同時期にも口縁ａは少ない。また口縁部の肥厚・短小化傾向は認められない。そして明治期以降には，口縁部の肥厚状況が大きく異なる。

これらの相違点は，①細部形態のバリエーション（口縁ａ・ｂ）の出現頻度に差がみられる段階（18世紀代），②口縁部の肥厚傾向の有無によって形態差が顕在化する段階（19世紀前葉），③口縁部の肥厚のさせ方が大きく異なり，外型成形の採用によってその差異が固定的になる段階(明治期以降)，とまとめることができる。それぞれの地域で形態変化の方向は固有であり，次第にその差異が大きくなり現存生産地（御厩窯・大原窯）に至ることが読み取れる。一方で，①の段階には頻度の違いはあってもバリエーションは共通し，同様な内耳を備えることといった共通点が存在することに注意する必要があろう。このことは，祖型を同じくする両者が18世紀前葉頃に分岐したことを想定させる。文献史料の記載や聞き取りの成果と併せ考えるならば，③段階以降の両者を「御厩産」「大原産」と区別・呼称することは全く正当であると思うが，上記した変遷観や差異の在り方は，さらに遡及した①・②の段階を含めて「御厩系」「大原系」とする根拠になろう。

また広島では，東広島市付近を中心に特徴的な焙烙が分布している。すなわち，底部から内弯気味に立ち上がる体部・口縁部をもつ皿形の器体に，２個の円孔を各々もつ内耳が２ないし４箇所貼付されるものである。実見していないが，写真や実測図から判断すると外型成形ではないようである。内耳の形態や製作技法に御厩・大原系との共通した要素が窺える。付近には八本松という生産地（東広島市）が存在するが，八本松の製品については不分明であり，上記した焙烙との関係は明らかではない。このため生産地系列を想定することは保留し，「東広島系」と仮称しておきたい。

以上の焙烙は，中世後期に中部瀬戸内で盛行した内耳鍋の系譜を引くことは明らかであろう。中世後期の内耳鍋には２形態あり，口縁部が明瞭に外反するものと，極めて弱く外反するものがある。両者は中世のある時点で同一祖型（亀山窯産須恵器？）から分かれ，



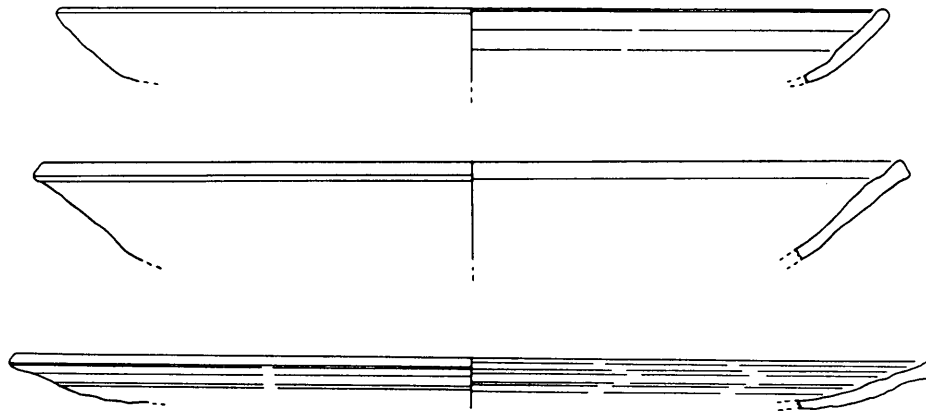
第215図　東広島市周辺の近世焙烙（内耳形はS＝1/4，無内耳形はS＝1/6）

併存したものと考えられるが，中世御厩・大原系は前者と，東広島系は後者と直接的な系譜関係が想定できよう。したがって，いずれも中世内耳鍋を共通の祖型とするものと思われるが，御厩系と大原系により顕著な近縁性が指摘できる。

当該地域には，この他にも内耳の伴わない焙烙が存在する。香川西部（西讃地方）を中心に分布する「岡本系」焙烙は，底部から外傾して立ち上がる体部をもち，口縁部は屈曲することなく体部の延長で収まる(第208図)。想定される形態変化から，現在の岡本窯(三豊郡豊中町)に連続する土器とみられる。郡家田代遺跡の分類では焙烙1～4類にあたり，胎土が雲母や砂粒を多量に含む粗質なもののため，御厩系焙烙のような薄い器壁を作ることができない。また底部には筵状の編物の圧痕がみられ，外型との間に筵を挟んで剝離材

として用いた痕跡とも考えられる。これが外型成形の可能性を示唆するとしても，関西地方の焙烙のような効率的な型成形が行われていたかどうかは，なお検討を要する。系譜的には口縁の屈曲が弱くなり，器高の低くなった鍋からの変化で一応理解できるものである。

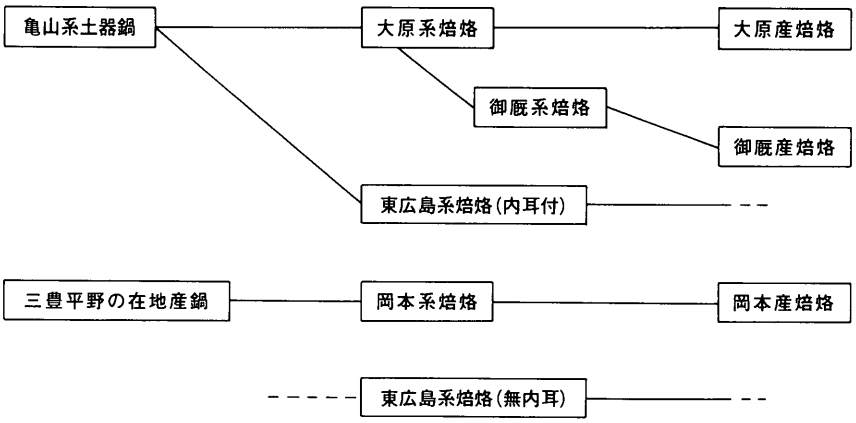
岡本系に近似した形態の焙烙は，高知県南国市の田村遺跡群においてもかなり出土している。この遺跡群では，報告されている焙烙13点中12点までが岡本系と同形態のものであった(ほか１点は関西系)。高知では近世遺跡の報告例が少ないため，これが普遍化できる現象かどうかは現段階では判断できないが，岡本窯製品が流通したか岡本の影響を強く受けた在地窯が存在したかのいずれかの可能性があろう。



第216図　田村遺跡群出土の近世焙烙（S＝1/4）

また東広島付近においても，内耳の貼付されない焙烙が少数報告されている。形態的には皿形を呈しており，内耳付の東広島系と同じく口縁部は外反しない。ただし口縁端部の形態は断面三角形の嘴状である点が内耳付の焙烙とは異なる。岡本系とした焙烙３類に近い形態ともいえるが，変遷過程や系譜が明らかではない。一応，「東広島系」無内耳形としておく。

以上を予察的見解を交えて系譜関係から整理すると，第217図のようになる。後述するような関西系技術（外型成形・回転台調整）の影響がみられず，中・狭域流通圏をもつ中世在地土器の系譜を引くこれらの一群を「瀬戸内系」と総称しておきたい。

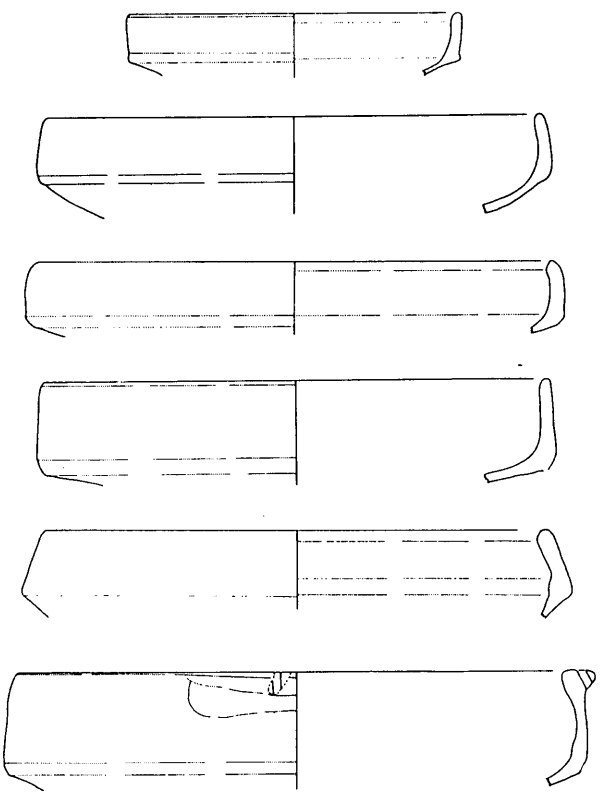


第217図　「瀬戸内系」焙烙の系譜

[東部瀬戸内地域]

播磨灘・大阪湾の沿岸地域は，中部瀬戸内とはかなり異なった様相をもつ。焙烙の形態と生産地については，難波洋三氏の一連の論考に詳しい。大阪湾沿岸の兵庫東部や大阪では，18世紀～19世紀前半頃に難波氏分類のD・E・G類の生産地が各地に点在しており，またF類の生産が奈良近郊で行われていた。いずれも外型成形・回転台調整の技術を伴い把手の互換性にみられるように相互に技術基盤を共有していたことからこれらを一括して「関西系」とすることができよう。

大阪湾岸の中心的な生産・流通圏からやや離れた徳島においても，関西系焙烙の存在が顕著である。城ノ



第218図　城ノ内遺跡出土の近世焙烙（S＝1/4）

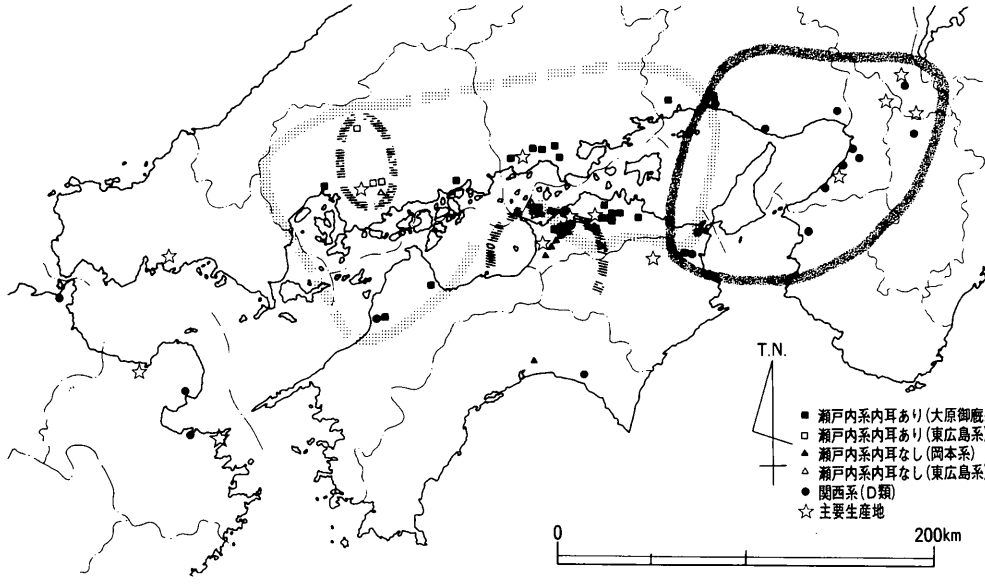
内遺跡（徳島城お花畠地点）では，報告された焙烙7点のうち6点が関西系のD類焙烙であった。ただし徳島では，鳴門市付近で御厩・大原系の焙烙が3点確認でき，瀬戸内系と関西系の混在地域であるといえよう。吉野川をやや遡った麻植郡川島町では土器生産地の存在が知られており，ここでの製品の実態把握が課題となろう。

［西部瀬戸内地域］

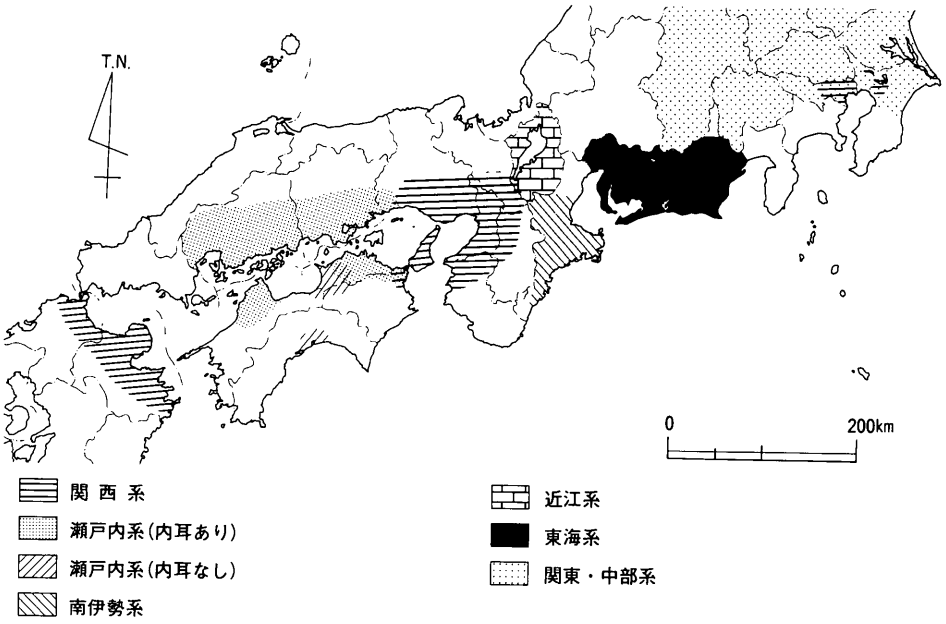
周防灘沿岸地域の様相は，まだ十分には明らかにされていない。ことに山口では，史料的には佐野（防府市）が近世以来の土器生産地であることが知られるが，そこでの製品が実際の考古遺物とどのように対応するのかについては，今後も検討を要する問題である。一方，大分や福岡北部では報告遺跡数が少ないものの，吉田寛氏によれば，この地域の焙烙は関西系焙烙で占められるという。1遺跡での出土量も安定しているため，大分県内に関西系の生産地が存在する可能性が考えられている。確かに関西とこの地域に介在する中部瀬戸内で関西系焙烙の存在が希有なことを考慮すると，在地窯での生産の可能性はかなり高い。大分での土器生産地（高村・佐賀関）製品との比較と，そのほかの生産地の追求が今後の課題であろう。

［まとめ］

以上検討してきたことによって，瀬戸内沿岸地域では東部と西部で関西系焙烙が卓越し，中部では関西系の影響を受けない在地的な瀬戸内系焙烙が存在することが明らかになっ



第219図　18世紀代の焙烙分布図



第220図　近世焙烙の地域色

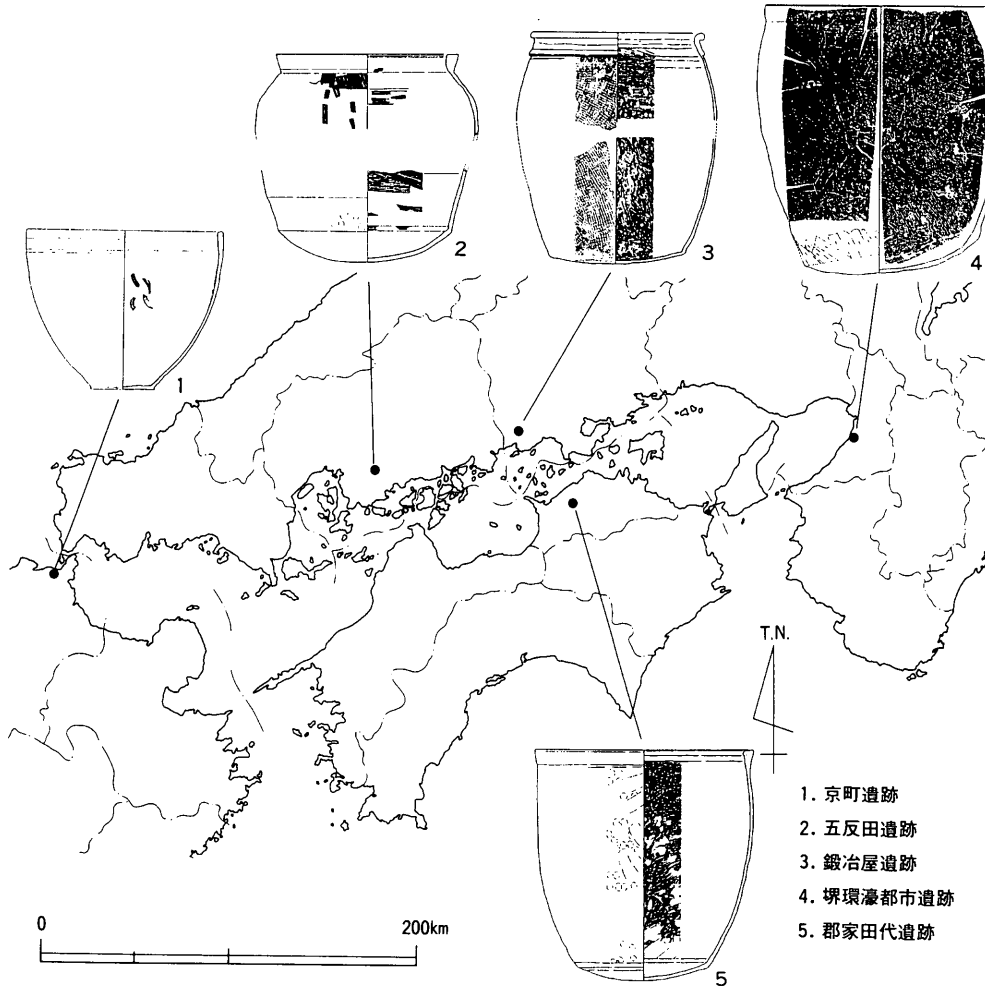
た。西部瀬戸内での関西系の焙烙は，搬入品ではなく在地窯で生産された可能性があり，この想定が正しければ，関西系の技術は直接当該地域へ伝播したことになる。それは東海地方や関東地方の在地的な焙烙生産地域を超えて，江戸へ直接関西系技術が伝播したという東日本の在り方とも共通する。難波氏が明確に指摘するように，関西系技術が従前の土器生産と比較しても極めて効率的であることは疑いないが，それをいち早く受容する地域と容易には受容しない地域があることは，近世在地土器の生産体制や系譜を示唆する現象として重要視される。

3．甕の地域色

甕は焙烙ほど報告資料に恵まれず，現段階では個別資料の極めて点的な把握にとどまらざるを得ない。各地域に普遍化されるような地域色の検討は今後に委ねるとして，ここでは代表的な近世遺跡での事例を相互に比較することにしたい。

［堺環濠都市遺跡］（大阪府堺市）

ここでは16世紀代まで東播系須恵器甕の影響を受け，体部を叩き成形（平行叩き）する特徴的な土師質甕が多量に存在する。近世に入ると叩き目が消滅し，口縁部が方形か逆三



第221図　18〜19世紀の土師質甕

角形に肥厚し，底部が皿状に突出する新たな形態の甕が出現する。この甕は中世後期の事例からの変遷形態としては捉えられず，前代とは断絶した形態・技法が急速に普遍化したことが窺える。皿形の底部は外型的な作業台上での成形によるものと考えられ，底部外縁の削り調整は作業台上にへたってきた体部下端を掻き取るのが目的であろう。その系譜は，形態的には常滑陶器の影響が考えられているが，常滑甕は底部が平坦であり外型的な作業台での成形は考えられない。したがって技法的には常滑甕の影響下にはないといえ，むしろ軌を一にして堺の焙烙に採用される外型成形・回転台調整との関連が強いであろう。

［鍛冶屋遺跡・本谷遺跡］（岡山県笠岡市）

岡山南部では近代に至るまで，体部に格子叩き目が施される極めて特徴的な土師質（瓦

質）甕が認められる。叩き成形は内面に当て具を用いて行われ，叩き目はいわゆる「叩き締めの円弧」を描く。これは，中世以来の亀山産須恵器・亀山系土器の系譜を直接引くものであり，外反させて折り返す口縁部形態もその延長で捉えられる。ただし近世甕に特有なのが，堺同様に皿形に突出する底部形態である。この底部の外縁には，40箇所程度の縄の圧痕が放射状に遺存していることがしばしばあり，具体的な形態・機能はわからないが作業台に関連する痕跡と考えられる。

第222図　本谷遺跡出土の近世甕（S＝1/10）

［五反田遺跡］（広島県東広島市）

頸部が明瞭にくびれること以外，堺の土師質甕に極めて近似した形態をもつ土師質甕がみられる。口縁部は断面方形に肥厚し，底部は皿形に突出する。また肩部に波状文を施すものもあり，焙烙の印花文同様，加飾的である。なおこの甕は，八本松窯（東広島市）で生産されていた「はんどう」に酷似する形態であるということが，立川敏之氏によって指摘されている。

［京町遺跡］（福岡県北九州市）

上記してきた事例とは異なり，底部が突出せずに平坦な形態をもつ土師質（瓦質）甕で構成される。口縁部は断面方形に肥厚するが，外面の口縁下端に１条沈線が施されるものと，口縁端部を横に拡張させるものがある。同一系譜上の変化なのか，別系統の甕なのかは資料数が少なく判断が難しいが，前者は西部瀬戸内地域で中世後期に展開する「防長系」の土器の系譜を引く可能性が高い。また後者は唐津系の陶器甕の影響を受けたものの可能性があろう。前者には体部を叩き成形するものがあり，内面に当て具痕を残すものもある

が，ハケ目調整や磨き調整を行うために全てが叩き成形を経るものなのかどうかは明らかではない。

［まとめ］

以上簡単に概観した程度であるが，焙烙の地域色とはかなり異なった在り方を示すことが窺えた。最大の特徴は，底部を皿形に突出させる形態の甕が中・東部瀬戸内地域にかなり広範に認められる，という点である。既に第3章第6節で述べたように，郡家田代遺跡の土師質甕にもこの特徴は認められる。これは型状の作業台の上で甕が製作されたことを想定させ，焙烙でみたような頑なな地域性を超えた技法の伝播を示している。他の特徴を加味すると，このことはさらに明瞭になる。すなわち，堺・東広島・香川の甕口縁部はいずれも断面方形ないし逆三角形を呈しており，体部に叩き目を施さないことで共通しており，極めて近縁的な一群をなしているといえる。岡山南部の甕は形態・技法ともに中世以来の在地色の強いものであるが，逆にいえばそのような地域でさえ底部成形に共通した技法を受け入れており，型状の作業台上での製作法が強い影響力をもつことがわかる。

この技法で最も遡る事例は，現段階では17世紀前半の堺に認められる。これは他地域では17世紀代の資料に乏しいことにもよるが，作業台での製作がこの時期の堺焙烙に採用される外型成形との関連が想定できることを考慮するならば，まず堺付近でこの技法が始まった可能性があろう。さらに常滑甕に近似した形態も，地理的に最も近い堺で出現し，底部成形技法とともに瀬戸内沿岸地域へ伝播した可能性がある。

他方，北部九州では防長系や唐津系的な甕がみられ，底部は平坦に作られている。この地域の焙烙は逆に関西系の強い影響下にあるが，甕に全くその傾向がみられないのである。焙烙と甕にみられる形態・技法的な系譜の齟齬をどのように評価するのかは，今後の資料の蓄積を待って考える必要があろう。ここでは各地域の近世土器が，中世以来の伝統的な系譜を引く一方で，関西地方で成立した新たな形態・技法が器種毎に異なった伝播の仕方をするということを確認するのにとどめたい。

第4節　遺構の変遷

1．旧石器時代

第IV層中に包含された石器集中部が，IV区とV区の南端部で各1箇所検出された。具体的な出土状況や組成，個々の遺物の特徴については，第3章第2節と本章第1節に記述しており，ここで改めて述べることはない。ただし，各石器集中部で石器製作に関わるような接合資料（34＋35，48＋49）が確認でき，それが集中部でも限定された範囲にみられる傾向にあることから，極めて一過的で一括性の高い石器群と判断できたことは大きな成果であろう。ナイフ形石器に再加工品がみられること，石核の消耗度が高いこと，さらに持ち込まれた原礫が拳大の小さなものであることが指摘でき，石器群を残した集団の置かれた石材供給の条件を示唆する。これは，国分台からの距離をほぼ同じくする備讃海峡の遺跡群と比較すると，より一層明瞭になる。

2．縄文時代～弥生時代前期

Ⅰ区南半部からIV区にかけて，いくつかの溝状遺構が検出できた。縄文時代晩期頃のやや規模の大きな溝状遺構（ＳＤ５０）と，II区東端からIII区西半部にかけてほぼ同じ場所を踏襲して重複する弥生時代前期頃の溝状遺構群（ＳＤ１２・１３・１５・２３・２５・２６・２８）がある。ＳＤ５０は遺構検出面の微起伏と一致した流路をもち，明瞭な掘り込みがないため，自然河道の可能性もある。これに対して弥生時代前期の溝状遺構群は，小規模な微高地状の地形の縁辺を北西方向に流れ，途中から北方向に屈曲してこの微高地を横断するような流路をもつ。ただし，本遺跡や隣接する郡家大林上遺跡を含めた清水川東岸域では，三条黒島遺跡でみられたような幹線的な水路は検出されておらず，極めて局所的に水路の開削が行われていたことを窺わせる。

なお，遺跡内では当該期の集落遺構は検出されていないが，ＳＤ２５から残存状況の比較的良好な大型壺（103）が出土していることは看過できない。ＳＤ２５の規模からみてこれが調査区外の遠隔地から流れてきたとは考え難く，付近にこのような大型壺を必要とするような遺構群が展開する可能性があろう。そのほかに，Ⅰ区南半部包含層から出土した磨製石斧（804）が注目される遺物である。

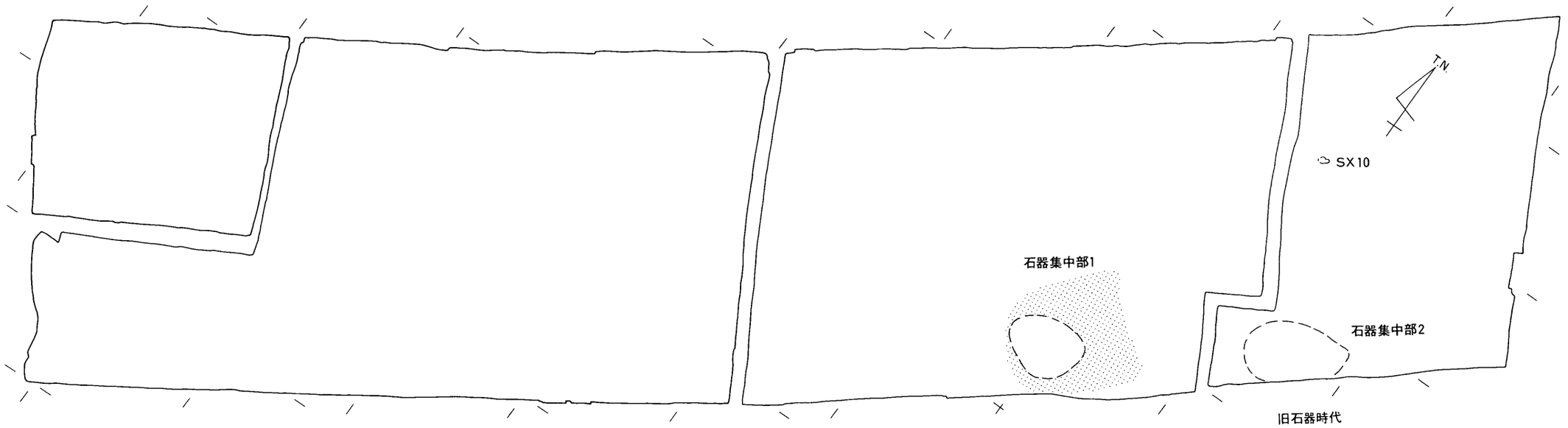
3．弥生時代後期～古墳時代前期

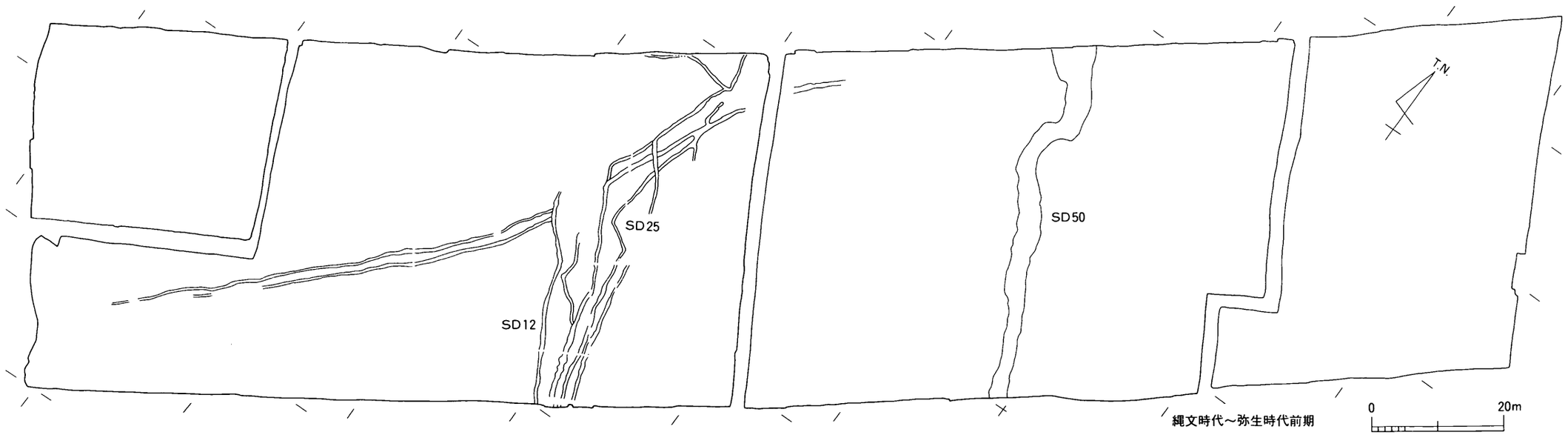
弥生時代後期初頭頃，Ⅰ区北半部の微高地上に１×３間の掘立柱建物（ＳＢ０１）が構築される。付近の微高地上は第Ⅲ層がみられず，土層堆積状況からみても削平が行われていることがわかる。ただしＳＢ０１の柱穴掘り方は0.3m程度遺存していることから，遺構が完全に消滅する程の顕著な削平であったとは考えられない。このことから，ＳＢ０１は単独に近いかたちで存在していた可能性があり，小規模な集落がごく短期間存在していたとみられる。

弥生時代後期末（下川津Ｖ式期）～古墳時代前期（布留式新段階）には，Ⅲ区中央部に幅２m以上，深さ0.5m前後の大規模な溝状遺構（ＳＤ３５・４０）が開削される。土層観察から埋没に至るまでの間，滞水と流水を繰り返していたことがわかり，また遺物に時期幅があり最も新しい遺物が下層から出土していることから，長期にわたる維持・管理（再掘削など）が行われていたことを窺わせる。清水川東岸域における当該期の幹線的な水路と評価できよう。両溝の水源は明らかでないが，清水川の旧流路（郡家大林上遺跡ＳＲ０１－１）からも下川津Ｖ式頃の土器が出土しており，郡家地区を固定的に分割するような河道の本流（深さ２m程度を測る）も灌漑網の主水源として積極的に活用された可能性がある。

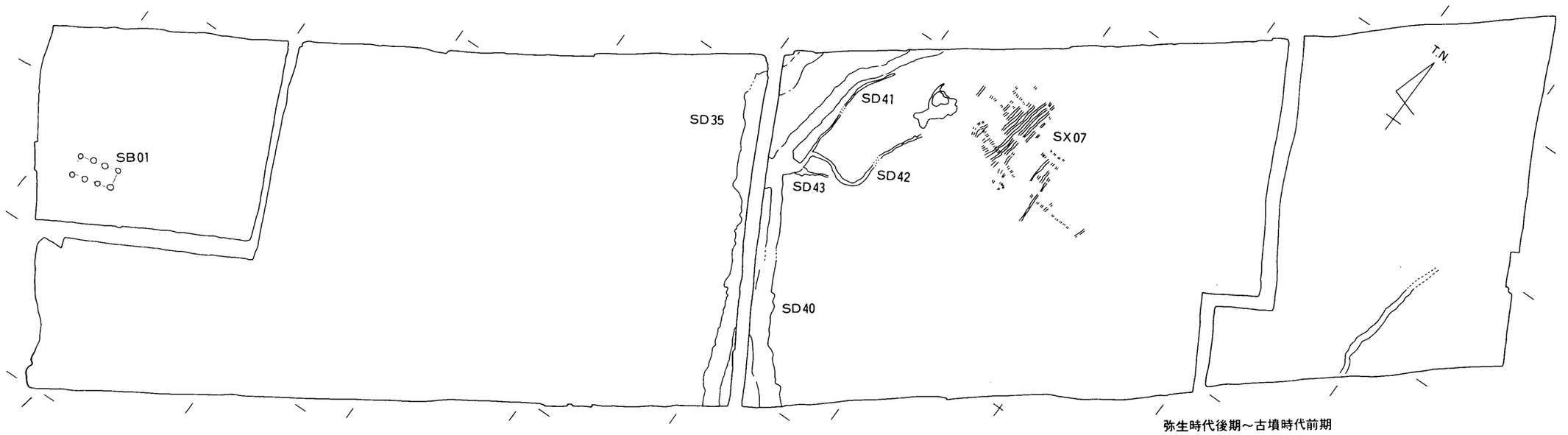
ところでＳＤ３５・４０は小規模な微高地状地形の縁辺に沿って延びているが，屈曲部の溜り状の拡幅部から小溝（ＳＤ４１～４３）が分岐する。この小溝は微凹地に向かって延びており，その延長上に畝状の小溝群（ＳＸ０７）が存在している。ＳＸ０７に近似した遺構は，郡家大林上遺跡でも検出されている(ＳＺ０２)。ここではＳＺ０２を覆う暗茶灰色粘質土から須恵器や土師器の細片が出土しているといい，古代に遡る可能性が示唆されている。良好な遺物に恵まれないために郡家田代遺跡ＳＸ０７との時期的な関係は不明であるが，ともに畑の畝の可能性が考えられよう。既にみたように，この時期は清水川西岸域でも幹線水路の増加や，「出水」による新たな水源確保の動きが読み取れる。畝状遺構の出現も，このような面的な灌漑網の拡充との関わりで捉えることができるかもしれない。

4．古代前半

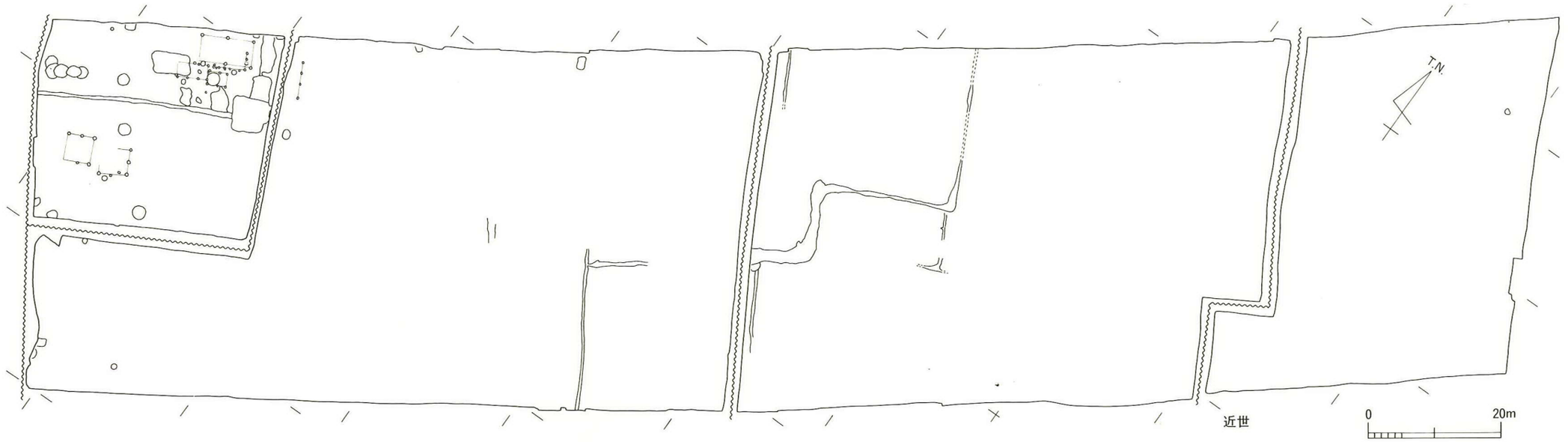




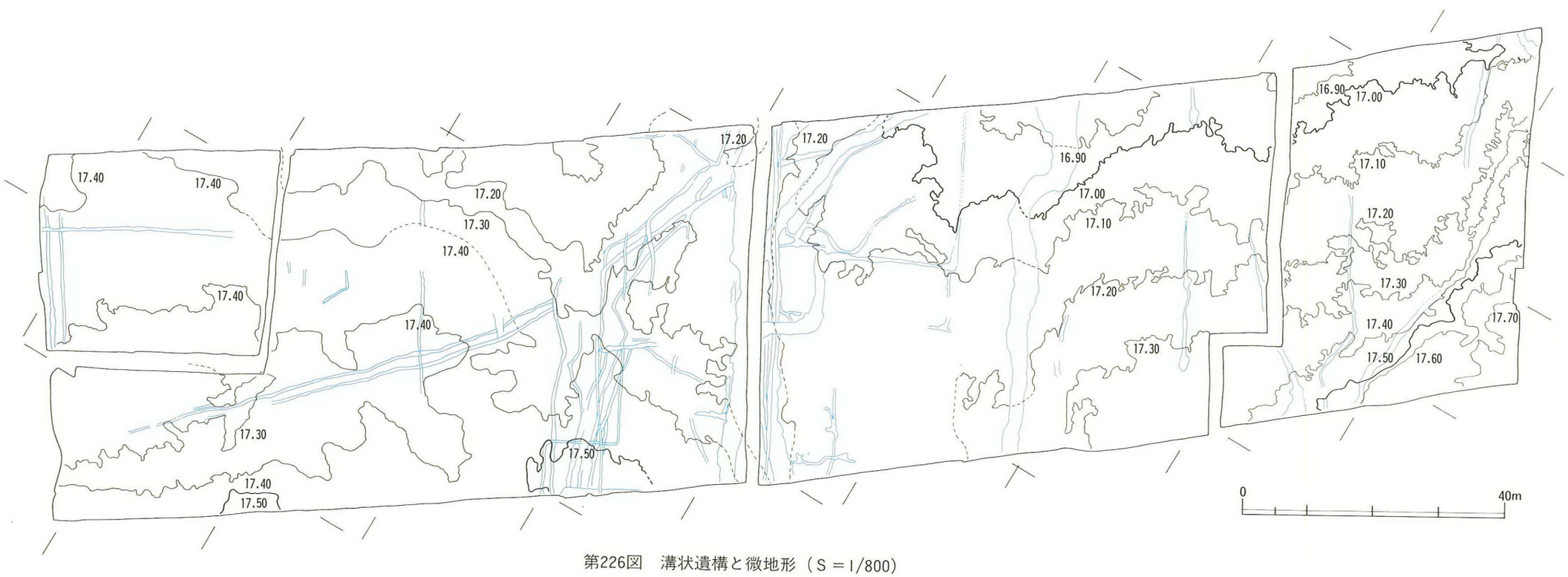
第223図　遺構の変遷（Ⅰ）（S＝1/800）



第224図　遺構の変遷（２）（S＝1/800）



第225図　遺構の変遷（３）（S＝1/800）



第226図　溝状遺構と微地形（S＝1/800）

当該期（８世紀～10世紀前半）には，溝状遺構は周辺の条里型地割（Ｎ－30°－Ｗ）と一致した方向を指向するようになる。遺物が少ないために詳細な時期を特定するまでには至らないが，ＳＤ１０・３７からは８世紀～９世紀前半頃の時期幅で捉えられる須恵器片が出土しており，概ねこの時期に埋没が進行したことを想定させる。周辺地割との位置関係から，ＳＤ０１・３７は坪境の溝にあたるとみられ，両溝の距離は109mを測る。このように該期は，本遺跡付近でも条里型地割の整備が進んだとみられるが，かなり早い時点に埋没したと考えられること，また幹線水路となるような大規模な事例に欠けていることを考慮すると，安定的な耕地化が達成されていたとは考えられない状況といえる。古代後半や中世の溝状遺構が全くみられないことも，このことを示唆する。

薬壺を骨蔵器とした火葬墓（ＳＴ０１）が検出されたのも，このような土地条件と関係するのかもしれない。香川県内における古代前半の火葬墓は，出土地点が特定ないし推測できる31例中29例までが丘陵部に立地しており，平野部立地の事例は本例を含めてわずかに２例である。全国的な趨勢からみても，平野部の事例は今後とも著しく増加することはないと思われ，ＳＴ０１は通常の形態とはやや異質な立地と評価できる。これは丘陵部の火葬墓群（例えば善通寺市や高瀬町付近の火葬墓群）を，特定の集団に伴う墓域と見做すのか，それとも半ば公的な性格をもつ「葬地」として認識するのか，ということに関わる問題である。もし，前者が妥当であれば，丘陵を控えない平野部では開発の進捗状況に応じた墓域の設定が行われていた可能性がある。いずれにしても定式化した骨蔵器の形態や埋納方法から，ＳＴ０１は有力階層が埋葬されたものと考えられ，周辺遺跡の律令的祭祀具（斎串）や国産施釉陶器の存在，また集落の動向と併せて検討を深めるべきであろう。

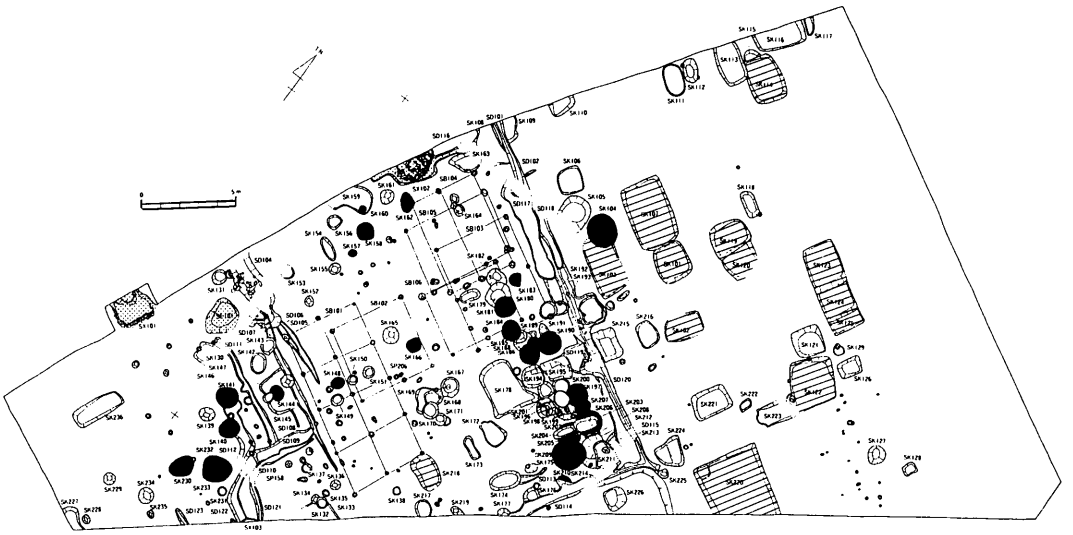
５．近　　世

当該期になると，Ｉ区北半部で集落の形成が始まる。集落は掘立柱建物５棟を主体とし，これに多様な形態をもった複数の土坑が伴う。掘立柱建物は床面積31.6㎡のＳＢ０６を最大として，他は15～20㎡前後の小型建物３棟（ＳＢ０２～０４），5.3㎡前後の非常に小規模な建物１棟（ＳＢ０５）で構成される。ＳＢ０６は柱穴の間隔が２間分とかなり大きく，調査区外（北側）に連続する可能性もある。主屋とも考えられるが，付近の遺構や包含層から多量の瓦が出土していることに留意する必要があろう。軒丸瓦や軒平瓦は２～３種類の同笵瓦が主体的であり，平瓦・丸瓦もそれぞれ技法・形態がまとまっている。さらに鬼瓦も存在する。これらから，付近に瓦葺きの建物が存在した可能性は極めて高く，ＳＢ０

６とは別の大型建物が想定される。また，ＳＢ０５は円形の土坑と規格的な位置関係にあり，厠的な建物と考えられる。

土坑には様々な形態のものがみられる。すなわち，ａ平面円形（径2.0m前後，深さ0.7m前後）のもの。素掘り（ａ１）と径１m程度の桶を据えたもの（ａ２）がある。ｂ平面円形の土坑内部に甕を据えたもの。ｃ平面長方形で深さが浅く，多量の礫や遺物を包含するもの。ｄ平面長方形で深さが深く，滞水状況を示す埋土をもつもの。素掘りのもの（ｄ１）と石積みのもの（ｄ２）がある。ａ２はＳＫ１７が該当するが，桶の箍のみ遺存し，板材は廃絶時に外されているようである。ＳＫ１５も円筒形の構造物を抜き取っており，元来は桶が据えられていたとみられる。箍内の埋土はヘドロ状の粘質土であり，滞水状況にあったことがわかる。水溜めの可能性があろう。井戸状遺構（ＳＥ０１）も同様な状況にあるが桶の板材が多く遺存しており，また調査時に湧水が顕著であったことから，井戸的な水溜めと考えられる。ｂにはＳＫ５８のように耕地に接した肥溜めとみられる事例もあるが，集落に伴って検出されたＳＫ０６は，土坑底面に砂質土を詰め，その上に平瓦を置き，さらにその上に底部を開けた甕が据えられており，肥溜めとは異なった貯蔵機能が考えられる。ｃは廃棄土坑であろう。ｄ２は取水部とみられる張り出しをもち，踏み台とみられる石を壁に接して置いていることから，石積み内に水を溜める施設と考えられる。ｄ１についても水溜めの可能性があろう。

観音寺市一の谷遺跡群平塚地区の近世集落（18世紀～19世紀前半）でも，多様な土坑が不随する。掘立柱建物の周辺に埋め甕土坑（ｂ），石積み土坑（ｄ２），遺物を多量に含んだ廃棄土坑(ｃ)，さらに井戸が検出された。廃棄土坑は建物群の区画外に掘られ，建物群とは最も遠い位置関係にある。石積み土坑は区画溝と重複する位置にある。建物に最も近接するのは井戸と埋め甕土坑であり，両者が居住者の生活と不可分の関係にあったことが窺える。埋め甕土坑には２列に並列するものがあり，居住者の生業と関わるようなものを多量に貯蔵していたと考えられる。郡家田代遺跡の土坑の在り方は，個別の比較に耐えるほど良好な内容ではないが，県内各地の農村部集落の分析を進める過程でその特徴が明らかになるだろう。



第227図　一の谷遺跡群平塚地区近世集落（S＝1/400）
黒ヌリは埋め甕土坑，網目は石積み土坑と井戸，斜線は廃棄土坑

参 考 文 献

第2章

木下晴一　1995　「10cm等高線による遺跡立地の検討」　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第十五冊　龍川四条遺跡』　香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団

香川県教育委員会　1987　『国道バイパス及び四国横断自動車道建設予定地内　埋蔵文化財詳細分布・試掘調査概報』

丸亀市史編纂委員会　1995　『新編丸亀市史　1　自然・原始・古代・中世編』

丸亀市史編纂委員会　1994　『新編丸亀市史　2　近世編』

香川県　1988　『香川県史　1　原始・古代』　四国新聞社

香川県　1989　『香川県史　4　近世II』　四国新聞社

石原潤　1965　「集落形態と村落共同体――特に讃岐の事例を中心に――」　『人文地理』17

香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団　1992　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第十一冊　三条番ノ原遺跡』

香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団　1993　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第十二冊　郡家一里屋遺跡』

香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団　1993　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第十三冊　郡家原遺跡』

香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団　1995　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第十五冊　龍川四条遺跡』

香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団　1995　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第十七冊　郡家大林上遺跡』

香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団　1996　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第二十三冊　龍川五条遺跡』

香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団高松建設局　1989　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　昭和63年度』

第3章

松藤和人　1974　「瀬戸内技法の再検討」　『ふたがみ』　同志社大学石器文化談話会

中・四国旧石器文化談話会　1994　『瀬戸内技法とその時代』

福田英人　1989　『大阪府文化財調査報告書　第36輯　八尾南遺跡――旧石器出土第3地点――』　大阪府教育委員会

高井健司・櫻井久之　1993　「層位発掘に基づく石鏃形態の変遷的研究」　『大阪市平野区長原・瓜破遺跡発掘調査報告　V』　財団法人大阪市文化財協会

宮崎哲治　1995　「香川における弥生前期土器の様相」　『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要III』

大久保徹也　1993　「讃岐地方における古墳時代初頭の土器について――下川津VI式以降の様相――」　『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』Ⅰ　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

奈良県立橿原考古学研究所　1993　『奈良県遺跡調査概報　1992年度』

佐賀県立九州陶磁文化館　1988　『国内出土の肥前陶磁』

大橋康二　1993　『考古学ライブラリー　55　肥前陶磁』　ニュー・サイエンス社

間壁忠彦　1991　『考古学ライブラリー　60　備前焼』　ニュー・サイエンス社

白神典之　1992　「堺擂鉢考」　『東洋陶磁』第19号

瀬戸市史編纂委員会　1993　『瀬戸市史　陶磁史篇五』

新宿区内藤町遺跡調査会　1992　『内藤町遺跡』

第5章第1節

竹岡俊樹　1988　「旧石器時代」『香川県史　1　原始・古代』　四国新聞社

絹川一徳　1994　「五色台産サヌカイトを中心とした石器石材の獲得と瀬戸内技法」　『瀬戸内技法とその時代』　中・四国旧石器文化談話会

本州四国連絡橋公団・香川県教育委員会　1985　『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　Ⅳ　西方遺跡』

藤好史郎　1981　「国分台出土の石核」　『香川史学』第10号　香川歴史学会

第5章第3節

難波洋三　1989　「市坂の土器作り」　『京都大学構内遺跡調査研究年報　1986年度』　京都大学埋蔵文化財研究センター

難波洋三　1992　「徳川氏大坂城期の炮烙」　『難波宮址の研究　第九』　財団法人大阪市文化財協会

吉田寛　1993　「府内城三ノ丸遺跡出土の土師質・瓦質土器について」　『府内城三ノ丸遺跡――大分県共同庁舎（仮称）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』　大分県教育委員会

小柳和宏　1995　「宇佐高村と中世雑器生産」　『大分県地方史』第159号

立川敏之　1994　「まとめ」　『五反田遺跡発掘調査報告書』　財団法人東広島市教育文化振興事業団

岩崎仁司　1987　「近世土器について」　『笠岡市埋蔵文化財発掘調査報告1　山陽自動車道建設に伴う本谷遺跡』　建設省岡山国道工事事務所・笠岡市教育委員会

土山健史　1989　「堺環濠都市遺跡における15・16世紀の所在土器」　『中近世土器の基礎研究　V』

佐藤竜馬　1994　「18～19世紀の土器・瓦について」　『空港跡地遺跡発掘調査概報　平成5年度』　香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

佐藤竜馬　1995　「近世讃岐における土器生産」　『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要　III』

財団法人広島県埋蔵文化財調査センター　1993　『広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書　第108集　郡山城下町遺跡』

財団法人広島県埋蔵文化財調査センター　1992　『広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書　第98集　山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅷ）』

財団法人広島県埋蔵文化財調査センター　1994　『広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書　第129集　山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（X）』

財団法人広島市歴史科学教育事業団　1994　『㈶広島市歴史科学教育事業団調査報告書　第12集　広島城県庁前地点発掘調査報告』

財団法人東広島市教育文化振興事業団　1994　『五反田遺跡発掘調査報告書』

尾道市教育委員会　1980　『尾道中世遺跡発掘調査報告――尾道市土堂二丁目所在――』

尾道市教育委員会　1981　『尾道　1980――市街地発掘調査概要――』

岡山県教育委員会　1980　『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　36　本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う発掘調査Ⅰ』

建設省岡山国道工事事務所・岡山県教育委員会　1981　『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　42　山陽自動車道建設に伴う発掘調査２』

建設省岡山国道工事事務所・岡山県教育委員会　1988　『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　70　山陽自動車道建設に伴う発掘調査４』

日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会　1993　『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　81　山陽自動車道建設に伴う発掘調査５』

岡山県教育委員会　1990　『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　78　岡山城二の丸跡』

建設省岡山国道工事事務所・笠岡市教育委員会　1987　『笠岡市埋蔵文化財発掘調査報告１　山陽自動車道建設に伴う　本谷遺跡』

兵庫県教育委員会　1987　『兵庫県文化財調査報告　第49冊　宝林寺北遺跡――太子龍野バイパス建設に伴う発掘調査報告――』

兵庫県教育委員会　1990　『兵庫県文化財調査報告　第77冊　龍野城――神戸地方検察局龍野支部庁舎建替えに伴う埋蔵文化財発掘調査報告書――』

財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター　1994　『一般国道196号松山環状線埋蔵文化財発掘調査報告書　II』

財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター　1984　『一般国道196号今治道路埋蔵文化財発掘調査報告書　Ⅰ』

香川県教育委員会・日本道路公団　1987　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第一冊　中村遺跡・乾遺跡・上一坊遺跡』

香川県教育委員会・日本道路公団　1988　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第五冊　石田遺跡・長砂古遺跡・柞田八丁遺跡』

香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団　1990　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第八冊　延命遺跡』

香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団　1990　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第九冊　永井遺跡』

香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団　1990　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第六冊　稲木遺跡』

香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1994　『県道山崎御厩線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　正箱遺跡・薬王寺遺跡』

香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局　1992　『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第１冊　東山崎・水田遺跡』

香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局　1993　『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第２冊　林・坊城遺跡』

香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局　1995　『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第3冊　前田東・中村遺跡』

香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1994　『空港跡地遺跡発掘調査概報　平成5年度』

徳島県教育委員会　1988　『本州四国連絡橋建設に伴う大毛島地区埋蔵文化財発掘調査報告書』

徳島県教育委員会　1988　『城ノ内遺跡徳島城跡お花畠地点発掘調査報告書』

高知県教育委員会　1986　『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

安芸市教育委員会　1987　『五藤家屋敷跡発掘調査報告』

堺市教育委員会　1990　『堺市文化財調査報告　第51集』

大分県教育委員会　1993　『府内城三ノ丸遺跡――大分県共同庁舎（仮称）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室　1994　『京町遺跡　2』

財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室　1994　『京町遺跡　3』

第5章第4節

香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団　1990　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第七冊　一の谷遺跡群』

佐藤竜馬　1993　「讃岐における古代の火葬墓」　『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要　Ⅰ』

観察表凡例

・器種に以下の略号を用いた。

弥：弥生土器　　土：土師器　　土質：土師質土器　　瓦質：瓦質土器

陶：陶器　　磁：磁器

・法量の単位は，全てcmである。

・重量の単位は，全てｇである。

・旧石器の材質は，以下の略号を用いた。

白サ：白色風化サヌカイト　　普通サ：普通サヌカイト　　粗サ：粗質サヌカイト

良サ：良質サヌカイト

・色調は，農林水産省農林水産技術会議事務局監修，財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖　1992年版』によった。

番号	出土位置	器種	法量	重量	材質	備考
1	石器集中部1	ナイフ形石器	(長)6.7(幅)1.8(厚)0.8	9.25	白サ	翼状剥片素材？
2	石器集中部1	ナイフ形石器	(長)8.8(幅)2.5(厚)0.85	22.68	白サ	二側縁加工
3	石器集中部1	スクレイパー	(長)3.5(幅)2.9(厚)0.9	9.79	普通サ	
4	石器集中部1	使用痕ある剥片	(長)4.3(幅)1.9(厚)0.7	3.53	普通サ	調整剥片転用
5	石器集中部1	使用痕ある剥片	(長)3.0(幅)4.9(厚)1.3	18.16	白サ	調整剥片転用
6	石器集中部1	二次加工ある剥片	(長)9.4(幅)6.2(厚)2.1	112.66	白サ	
7	石器集中部1	楔形石器	(長)3.1(幅)2.9(厚)1.0	10.98	白サ	
8	石器集中部1	楔形石器	(長)5.35(幅)2.8(厚)0.95	14.23	白サ	
9	石器集中部1	楔形石器	(長)5.2(幅)2.2(厚)1.9	16.82	白サ	
10	石器集中部1	二次加工ある剥片	(長)4.0(幅)3.0(厚)0.6	6.92	白サ	
11	石器集中部1	剥片	(長)2.3(幅)3.9(厚)0.4	2.89	白サ	
12	石器集中部1	剥片	(長)2.0(幅)4.3(厚)0.5	4.26	白サ	
13	石器集中部1	剥片	(長)2.6(幅)3.2(厚)0.8	7.95	白サ	
14	石器集中部1	剥片	(長)1.5(幅)2.6(厚)0.35	1.00	白サ	
15	石器集中部1	剥片	(長)3.3(幅)2.1(厚)0.8	5.05	白サ	
16	石器集中部1	剥片	(長)5.6(幅)3.0(厚)0.85	13.73	白サ	
17	石器集中部1	砕片	(長)2.8(幅)2.3(厚)0.55	3.84	白サ	
18	石器集中部1	剥片	(長)2.2(幅)3.0(厚)0.45	2.24	白サ	
19	石器集中部1	剥片	(長)2.1(幅)2.0(厚)0.4	1.32	白サ	
20	石器集中部1	剥片	(長)2.1(幅)2.3(厚)0.3	1.86	白サ	
21	石器集中部1	砕片？	(長)4.3(幅)2.3(厚)0.7	5.53	白サ	
22	石器集中部1	剥片	(長)1.8(幅)2.9(厚)0.5	2.60	白サ	
23	石器集中部1	剥片	(長)1.4(幅)2.2(厚)0.4	1.19	白サ	
24	石器集中部1	砕片	(長)1.5(幅)1.1(厚)0.2	0.37	白サ	
25	石器集中部1	剥片	(長)2.4(幅)1.1(厚)0.3	0.84	白サ	
26	石器集中部1	剥片	(長)1.0(幅)2.9(厚)0.4	1.28	白サ	
27	石器集中部1	剥片	(長)2.0(幅)2.2(厚)0.6	2.01	白サ	
28	石器集中部1	横長剥片石核	(長)4.3(幅)5.4(厚)1.3	30.64	白サ	
29	石器集中部1	石鏃	(長)1.7(幅)1.4(厚)0.25	0.39	白サ	
30	石器集中部1	石鏃	(長)2.3(幅)1.6(厚)0.3	0.70	白サ	
31	石器集中部1	石鏃	(長)2.1(幅)1.6(厚)0.3	0.64	白サ	
32	SX08	石鏃	(長)2.5(幅)1.7(厚)0.4	1.72	白サ	
33	E-8第Ⅳ層	剥片	(長)4.1(幅)5.7(厚)1.2	26.79	普通サ	石核？
34	石器集中部1	横長剥片石核	(長)5.3(幅)4.4(厚)1.3	26.85	白サ	
35	石器集中部1	横長剥片	(長)2.65(幅)5.9(厚)0.6	10.30	白サ	34と接合(長)4.3(幅)6.4(厚)1.8(重)37.15g
36	石器集中部1	砕片	(長)2.2(幅)3.7(厚)0.6	8.77	白サ	
37	石器集中部1	砕片	(長)3.1(幅)3.0(厚)1.2	8.66	白サ	36と接合(長)5.3(幅)3.8(厚)0.9(重)17.43g
38	石器集中部1	砕片	(長)2.3(幅)1.9(厚)0.7	2.26	白サ	
39	石器集中部1	砕片	(長)1.7(幅)2.0(厚)0.5	1.06	白サ	38と接合(長)2.4(幅)2.5(厚)0.8(重)3.32g
40	石器集中部2	ナイフ形石器	(長)9.2(幅)3.6(厚)1.5	49.92	白サ	国府型
41	石器集中部2	ナイフ形石器	(長)4.0(幅)1.6(厚)0.8	5.52	白サ	国府型
42	石器集中部2	ナイフ形石器	(長)3.05(幅)1.6(厚)0.9	4.47	粗サ	二側縁加工、折損面を打面として二次加工

石器観察表（1）

番号	出土位置	器種	法量	重量	材質	備考
43	石器集中部2	ナイフ形石器	(長)3.7(幅)1.5(厚)0.8	4.64	良サ	二側縁加工、折損面を打面として二次加工
44	石器集中部2	二次加工ある剥片	(長)7.0(幅)3.0(厚)0.9	16.68	普通サ	横長剥片素材
45	石器集中部2	二次加工ある剥片	(長)4.6(幅)5.1(厚)1.0	23.45	粗サ	
46	石器集中部2	横長剥片石核	(長)3.7(幅)5.7(厚)1.4	41.61	白サ	
47	石器集中部2	横長剥片石核	(長)3.4(幅)3.0(厚)1.1	11.18	白サ	46と接合(長)3.7(幅)8.0(厚)1.7(重)52.79g
48	石器集中部2	ナイフ形石器	(長)3.7(幅)2.0(厚)1.2	7.30	白サ	折損面を打面として樋状剥離
49	石器集中部2	ナイフ形石器	(長)3.3(幅)2.5(厚)0.9	6.60	白サ	48と接合(長)6.6(幅)2.5(厚)1.0(重)13.90g
50	石器集中部2	翼状剥片	(長)2.7(幅)4.35(厚)0.9	11.86	普通サ	
51	石器集中部2	剥片	(長)2.7(幅)4.1(厚)0.7	7.93	白サ	
52	石器集中部2	剥片	(長)2.4(幅)3.7(厚)0.7	6.65	白サ	
53	石器集中部2	剥片	(長)2.3(幅)3.2(厚)0.5	4.07	白サ	
54	石器集中部2	剥片	(長)4.1(幅)2.4(厚)0.85	8.72	粗サ	
55	石器集中部2	剥片	(長)3.0(幅)2.4(厚)0.7	5.70	白サ	
56	石器集中部2	剥片	(長)1.6(幅)2.8(厚)0.5	2.20	白サ～普通サ	
57	石器集中部2	剥片	(長)1.9(幅)2.0(厚)0.4	1.54	粗サ	
58	石器集中部2	剥片	(長)3.1(幅)1.9(厚)0.6	2.14	良サ	
59	石器集中部2	縦長剥片	(長)3.4(幅)1.7(厚)0.6	3.54	白サ	
60	石器集中部2	二次加工ある剥片	(長)3.6(幅)2.7(厚)0.7	5.87	粗サ	
61	石器集中部2	二次加工ある剥片	(長)1.5(幅)3.3(厚)0.3	1.94	白サ	
62	石器集中部2	二次加工ある剥片	(長)3.3(幅)5.1(厚)0.5	7.86	白サ	
63	石器集中部2	剥片	(長)5.35(幅)2.1(厚)1.45	10.97	普通サ	
64	石器集中部2	剥片	(長)3.2(幅)1.9(厚)0.6	3.26	良サ	
65	石器集中部2	剥片	(長)3.9(幅)2.0(厚)0.7	5.08	粗サ	
66	石器集中部2	剥片	(長)4.2(幅)2.4(厚)1.0	7.42	白サ	
67	石器集中部2	横長剥片石核？	(長)2.9(幅)2.3(厚)0.95	5.23	良サ	
68	石器集中部2	横長剥片石核？	(長)4.8(幅)2.5(厚)1.25	13.47	白サ	
69	石器集中部2	剥片	(長)3.5(幅)1.8(厚)1.3	6.07	白サ	
70	石器集中部2	剥片	(長)3.8(幅)2.4(厚)0.3	2.83	普通サ	
71	石器集中部2	剥片	(長)2.2(幅)1.9(厚)0.6	2.97	白サ	
72	石器集中部2	剥片	(長)2.3(幅)1.4(厚)0.5	1.81	良サ	
73	石器集中部2	剥片	(長)2.1(幅)2.2(厚)0.4	0.67	白サ	
74	石器集中部2	二次加工ある剥片	(長)1.3(幅)0.8(厚)0.3	0.31	白サ	
75	石器集中部2	二次加工ある剥片	(長)2.1(幅)1.6(厚)0.5	1.03	普通サ	
76	石器集中部2	剥片	(長)3.3(幅)0.9(厚)0.5	1.35	普通サ	
77	石器集中部2	横長剥片石核	(長)3.4(幅)2.3(厚)1.5	7.78	良サ	
78	石器集中部2	横長剥片石核	(長)3.2(幅)2.4(厚)0.9	6.62	普通サ	
79	石器集中部2	横長剥片石核	(長)3.7(幅)2.8(厚)1.5	18.71	白サ	
80	石器集中部2	ハンマー	(長)10.1(幅)5.3(厚)5.2	249.61	白サ	
81	B-10第IV層		(長)20.0(幅)3.4(厚)2.0	141.40	かなり緻密な安山岩	
82	石器集中部1		(長)4.0(幅)2.8(厚)1.8	13.47	安山岩	

石器観察表（2）

番号	出土位置	器種	法量	重量	材質	備考
83	C-9第II・III層	ナイフ形石器	(長)6.4(幅)2.8(厚)0.8	17.28	普通サ	国府型、刃部使用痕
84	G-11第II層	ナイフ形石器	(長)6.1(幅)2.2(厚)0.9	12.39	普通サ	国府型、刃部使用痕
85	G-10第II層	ナイフ形石器	(長)6.9(幅)1.9(厚)0.8	10.61	普通サ	稜上加工、二側縁加工
86	B-10第II層	ナイフ形石器	(長)6.7(幅)2.6(厚)1.1	18.49	普通サ	国府型
87	V区北半部第II層	ナイフ形石器	(長)4.4(幅)1.7(厚)0.9	8.24	普通サ	二側縁加工
88	IV・V区第II・III層	二次加工ある剝片	(長)4.7(幅)2.5(厚)0.6	7.54	普通サ	翼状剝片素材？
89	IV・V区第II・III層	ナイフ形石器	(長)4.9(幅)7.3(厚)1.0	46.45	白サ	翼状剝片素材未製品？
90	D-10第III層	二次加工ある剝片	(長)2.5(幅)2.0(厚)0.5	3.26	白サ	
91	D-11第III層	翼状剝片	(長)7.4(幅)3.9(厚)1.1	27.74	普通サ	ファーストフレイク
92	IV・V区第II・III層	二次加工ある剝片	(長)10.7(幅)4.7(厚)1.6	78.8	白サ	
93	IV・V区第II・III層		(長)4.1(幅)5.0(厚)2.1	46.6	良サ	
94	IV・V区第II・III層	ナイフ形石器	(長)4.5(幅)2.4(厚)0.9	8.50	普通サ	底面不明瞭
95	IV・V区第II・III層	翼状剝片	(長)6.7(幅)3.0(厚)0.9	20.23	普通サ	
96	IV・V区第II・III層	翼状剝片	(長)3.0(幅)5.5(厚)0.7	11.04	白サ	
97	IV・V区第II・III層	剝片	(長)3.7(幅)1.9(厚)0.7	5.88	普通サ	
98	IV・V区第II・III層	横長剝片石核？	(長)3.4(幅)3.1(厚)1.3	10.19	良サ	
99	IV・V区第II・III層	剝片	(長)4.6(幅)2.4(厚)1.3	9.39	白サ	
100	E-8・9第II・III層	スクレイパー	(長)9.3(幅)4.1(厚)1.1	29.4	白サ	
101	SD50	石鏃	(長)2.2(幅)1.9(厚)0.3	0.8	普通サ	
131	SD40	スクレイパー	(長)7.1(幅)6.4(厚)1.4	45.3	サヌカイト	
138	SB03	石臼(上臼)	(長)27.8		疑灰角礫岩	
167	SK08	不明石製品	(長)3.9(幅)5.7(厚)2.4			
335	SK09	砥石	(長)12.0(幅)6.3(厚)5.4			使用痕
336	SK09	砥石	(長)10.3(幅)6.3(厚)6.2			使用痕
337	SK09	砥石	(長)7.2(幅)6.5(厚)5.5			使用痕
498	SX03石積み裏込め土	石臼	(長)30.0		凝灰角礫岩	
499	SX03石積み裏込め土	石臼	(長)32.0		凝灰角礫岩	
500	SX03石積み裏込め土	五輪塔	(長)23.5(幅)23.5(厚)13.7		凝灰角礫岩	加工痕
501	SX03石積み裏込め土	五輪塔	(長)24.6(幅)24.6(厚)19.4		凝灰角礫岩	

石器観察表（3）

番号	出土位置	器種	法量	重量	材質	備考
502	SX03石積み裏込め土	五輪塔	(長)23.6(幅)23.6(厚)13.9		凝灰角礫岩	
511	SD03	砥石	(長)5.7(幅)3.8(厚)3.5		砂岩	
512	SD03	石臼	(長)26.0		凝灰角礫岩	
702	Ⅰ区北半部包含層	砥石	(長)6.3(幅)3.2(厚)2.8		片岩	使用痕
802	Ⅰ区南半部包含層	打製石斧	(長)5.8(幅)5.8(厚)2.4	81.7	サヌカイト	敲打痕
803	Ⅰ区南半部包含層	小型打製石斧	(長)9.0(幅)2.9(厚)1.4	36.9	サヌカイト	敲打痕
804	Ⅰ区南半部包含層	摩製石斧	(長)7.3(幅)0.9(厚)1.6	19.8	緑泥片岩	
805	Ⅴ区包含層	スクレイパー	(長)5.3(幅)3.6(厚)1.2	30.6	サヌカイト	使用痕
806	Ⅱ区包含層	楔形石器素材	(長)4.7(幅)4.9(厚)1.4	28.5	サヌカイト	
807	Ⅰ区南半部包含層	打製石斧	(長)6.8(幅)4.6(厚)1.5	43.1	サヌカイト	
808	Ⅲ区包含層	スクレイパー	(長)9.1(幅)6.3(厚)1.5	53.1	サヌカイト	
809	Ⅴ区包含層	スクレイパー	(長)6.2(幅)5.8(厚)1.1	31.6	サヌカイト	
810	Ⅴ区包含層	スクレイパー	(長)4.2(幅)3.3(厚)0.9	11.4	サヌカイト	
811	Ⅰ区南半部包含層	石鏃	(長)2.7(幅)2.0(厚)0.5	4.3	サヌカイト	
812	Ⅰ区南半部包含層	石鏃	(長)2.2(幅)1.2(厚)0.3	0.7	サヌカイト	
813	Ⅱ区包含層	石鏃	(長)2.9(幅)1.5(厚)0.4	1.3	サヌカイト	白色風化
814	Ⅳ区包含層	石鏃	(長)1.9(幅)1.8(厚)0.3	0.9	サヌカイト	
815	Ⅳ区包含層	石鏃	(長)1.9(幅)1.6(厚)0.3	0.9	サヌカイト	白色風化
816	Ⅳ区包含層	石鏃	(長)2.3(幅)1.6(厚)0.3	0.8	サヌカイト	
817	Ⅰ区南半部包含層	スクレイパー	(長)5.8(幅)3.1(厚)1.0	16.7	サヌカイト	白色風化
818	Ⅰ区南半部包含層	スクレイパー	(長)6.1(幅)5.1(厚)1.4	36.7	サヌカイト	
819	Ⅰ区南半部包含層	スクレイパー	(長)2.6(幅)3.5(厚)0.8	8.9	サヌカイト	

石器観察表（4）

番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度
102	SD12	弥・壺	(底)7.3	4㎜以下の砂粒	良好	にぶい橙7.5YR6/4	(外・内)調整不明	底部完存
103	SD25	弥・壺	(口)35.0 (高)59.4 (底)14.0	5㎜以下の粗い砂粒	良好	明褐7.5YR5/6	(外・内)押圧・ナデ	底部完存
104	SB01	弥・甕	(口)9.3	1㎜以下の砂粒	良好	浅黄2.5Y7/3	(外)頸部縦方向のナデ→口縁部横ナデ・凹線文(内)縦方向のナデ	口径1/6
105	SD35	弥・壺	(口)16.0	3㎜以下の砂粒	良好	(外)にぶい黄橙10YR7/4(内)灰N4	(外・内)ナデ・口縁部凹線文	口径1/8
106	SD35	土・高杯	(杯)9.4	2㎜以下の砂粒	良好	にぶい橙7.5YR6/4	(外)板ナデ(内)ナデ	杯部1/4
107	SD35	土・小型丸底壺	(口)10.6 (高)17.6	3㎜以下の砂粒	良好	にぶい黄橙10YR7/2	(外)横ハケ→縦ハケ(内)ハケ→ナデ．押圧→ヘラ削り→ナデ	頸部1/4
108	SD35	土・壺		2㎜以下の砂粒	良好	にぶい橙7.5YR6/4	(外)平行叩き目→ナデ(内)ハケ→押圧→ナデ	頸部1/2
109	SD35	土・甕	(口)13.4	3㎜以下の砂粒を多量	良好	にぶい黄橙10YR7/3	(外)調整不明 (内)横ナデ・ヘラ削り	口径1/3
110	SD35	土・壺	(口)16.0	3㎜以下の砂粒を多量	良好	にぶい黄橙10YR7/2	(外)調整不明 (内)押圧	口径3/5
111	SD35	土・壺	(口)16.3	5㎜以下の砂粒	良好	灰黄褐10YR6/2	(外)横ナデ．押圧→ハケ→ナデ．板ナデ．煤付着(内)横ハケ→横ナデ．押圧→ハケ．板ナデ	口縁完存
112	SD35	土・甕	(頸)12.8	3㎜以下の砂粒	良好	浅黄2.5Y7/3	(外)平行叩き→ハケ(内)押圧→ハケ	頸部1/4
113	SD35	土・甕		2.5㎜以下の砂粒	良好	(外)灰黄2.5Y6/2(内)暗灰N3	(外)平行叩き→縦ハケ．黒斑(内)ヘラ削り→押圧→縦ハケ	体部1/2
114	SD35	土・甕	(底)2.6	3㎜以下の砂粒	良好	にぶい黄橙10YR6/4	(外)板ナデ．黒斑 (内)ヘラ削り	底部完存
115	SD35	土・壺	(底)6.0	3㎜以下の砂粒．金雲母	軟	(外)にぶい褐7.5YR5/4(内)にぶい黄橙10YR5/3	(外)ヘラ磨き→ナデ．底部調整不明(内)ハケ	底部ほぼ完存
116	SD40	土・鉢	(口)14.9 (高)5.7	6㎜以下の砂粒．金雲母	良好	(外)にぶい黄橙10YR6/3(内)褐7.5YR4/4	(外)ナデ．黒斑 (内)板ナデ	ほぼ完存
117	SD40	土・鉢		3㎜以下の砂粒を多量	良好	にぶい黄橙10YR6/4一部黒	(外)調整不明 (内)縦ハケ	底径4/5
118	SD42	土・鉢	(口)19.8 (高)7.2	2㎜以下の砂粒．金雲母	良好	にぶい黄橙	(外)押圧→ナデ．ヘラ削り(内)押圧→ハケ	ほぼ完存
119	SD40	土・鉢	(口)17.6 (高)8.8	3㎜以下の砂粒．金雲母	良好	にぶい橙7.5YR6/4	(外)ナデ．ハケ(底外)木葉痕(内)押圧→板ナデ	底部完存
120	SD35	土・高杯	(口)14.4	2㎜以下の砂粒	良好	(外)浅黄橙10YR8/6．褐灰(内)褐灰10YR4/1	(外)横ナデ(内)横ナデ．脚部ヘラ削り	口径1/2
121	SD35	土・高杯	(口)15.4	2㎜以下の砂粒	良好	淡橙5YR8/3	(外・内)調整不明	杯部ほぼ完存

土器観察表（1）

番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度
122	SD35	土・小壺		2㎜以下の砂粒	良好	灰白10YR8/2	(外)縦ハケ→ナデ (内)押圧→ナデ	体部完存
123	SD35	土・壺	(口)27.8	2㎜以下の砂粒	良好	灰黄褐10YR6/2	(外)口縁部横ナデ．縦ハケ→横ハケ(内)横ハケ→ヘラ磨き	口縁2/3
124	SD40	土・甕	(口)12.7	1㎜以下の砂粒．金雲母	良好	にぶい黄橙10YR6/4	(外・内)縦ハケ→口縁部横ナデ．煤付着	体部1/6
125	SD40	土・甕	(口)17.0	3㎜以下の砂粒．金雲母	堅緻	にぶい赤褐5YR5/4	(外)横ナデ．ハケ (内)ハケ→ナデ．押圧→ハケ．押圧→ナデ	口径1/4
126	SD40	土・甕	(口)18.1	4㎜以下の砂粒．金雲母	良好	明褐7.5YR5/6	(外)口縁部横ナデ．横ハケ→縦ハケ(内)口縁部横ナデ．押圧→ナデ	口径1/12
127	SD40	土・甕	(頸)12.8	3㎜以下の砂粒を多量	良好	橙5YR6/6	(外)平行叩き (内)押圧→ナデ	頸部1/12
128	SD40	土・甕	(底)1.7	2㎜以下の砂粒	良好	(外)黄褐2.5Y 5/4．黄灰2.5Y4/1 (内)黄灰2.5Y4/1	(外)調整不明(内)押圧	底部完存
129	SD40	土・甕	(底)6.4	1㎜以下の砂粒	良好	にぶい黄橙10YR7/3	(外)縦ハケ．煤付着(内)横ハケ→縦ハケ．煤付着	底径1/4
130	SD40	土・壺	(底)4.5	4.5㎜以下の砂粒を多量	良好	(外)にぶい黄橙10YR6/3(内)明赤褐5YR5/6	(外)板ナデ(内)ナデ	底部完存
132	SD59	弥・甕		2㎜以下の砂粒	良好	暗灰黄2.5Y5/2	(外・内)調整不明	頸部1/4
133	SX05	土・壺	(口)13.7	3㎜以下の砂粒	軟	にぶい黄橙10YR7/3	(外)横ナデ (内)調整不明	口径1/4
134	ST01	須・壺蓋	(口)14.0 (高)3.5	2㎜以下の砂粒	良好	灰N5	(外)ヘラ削り→回転ナデ(内)回転ナデ	口径1/8
135	ST01	須・壺	(口)12.0 (底)13.6	2㎜以下の砂粒	良好	灰N5	(外)ヘラ削り→回転ナデ(内)回転ナデ	底部完存 口縁細片
136	SD10	須・短頸壺	(口)8.8	2㎜以下の砂粒	良好	灰N6	(外・内)回転ナデ	口径1/8
137	SD37	須・？		1㎜以下の砂粒	良好	灰白N8	(外)回転ナデ．カキ目(内)当て具痕	細片
145	SK06	土質・台付灯明皿？	(底)6.0	1㎜以下の砂粒	良好	浅黄橙7.5YR8/3	(外)横ナデ (内)ナデ．ヘラ削り	底径1/2
146	SK06	土質・甕	(底)30.0	2㎜以下の砂粒	良好	浅黄橙7.5YR8/4	(外)板ナデ．ハケ (内)ハケ	底径3/5
161	SK08	土質・火鉢	(口)36.8	2㎜以下の砂粒を多量	良好	(外)浅黄橙7.5YR8/4 (内)浅黄橙7.5YR8/3	(外)ナデ(内)板ナデ	口径1/12
162	SK08	瓦質・羽釜		微細砂粒	良好	灰褐	(外)横ナデ(内)ナデ	細片
163	SK08	土質・焙烙		微細砂粒	良好	黒褐	(外・内)横ナデ	細片
164	SK08	土質・甕	(口)41.2	2㎜以下の砂粒．金雲母	良好	浅黄橙10YR8/3	(外)押圧．回転ナデ (内)回転ナデ・板ナデ	細片
235	SK09	土質・小皿	(底)5.2	精良・角閃石	良好	浅黄橙10YR8/3	(外)回転ナデ(底外)回転糸切り(内)回転ナデ	底径1/6
236	SK09	土質・小皿	(底)5.2	3㎜以下の砂粒	良好	灰白7.5YR8/2	(底外)回転糸切り (内)回転ナデ	底部細片

土器観察表（2）

番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度
237	SK09	土質・捏鉢	(底)10.0	1㎜以下の砂粒．金雲母	良好	橙5YR7/6	(外)押圧→板ナデ (内)使用痕？	底径1/4
238	SK09	土質・捏鉢	(底)10.1	1㎜以下の砂粒．金雲母	良好	(外)にぶい橙7.5YR7/4(内)橙5YR7/6	(外)調整不明 (内)ハケ	底径1/4
239	SK09	土質・擂鉢	(口)26.0	2㎜以下の砂粒．金雲母	良好	(外)褐灰10YR4/1 (内)にぶい黄橙10YR7/3	(外)横ナデ．押圧→ナデ．煤付着(内)板ナデ→卸し目4本/1.1cm	口径1/10
240	SK09	土質・擂鉢		1㎜以下の砂粒	良好	にぶい黄橙10YR7/3	(外)ナデ (内)ナデ．卸し目	細片
241	SK09	土質・擂鉢		2.5㎜以下の砂粒	堅緻	(外)橙5YR7/6 (内)灰褐5YR5/2	(外)押圧(内)板ナデ→卸し目8本/2.1cm．使用痕	細片
242	SK09	瓦質・火鉢	(口)26.2	1.5㎜以下の砂粒	良好	(外)暗灰N3 (内)灰白2.6Y8/1	(外・内)口縁部横ナデ→板ナデ	口縁細片
243	SK09	瓦質・火鉢		1㎜以下の砂粒	良好	灰N4	(外・内)板ナデ	細片
244	SK09	瓦質・火鉢		1㎜以下の砂粒	軟	灰～灰白．黒	横ナデ．押圧→ナデ	細片
245	SK09	瓦質・火鉢		2㎜以下の砂粒を少量	良好	褐灰10YR5/1	(外・内)板ナデ (外・断)煤付着	底部細片
246	SK09	瓦質・火鉢		1㎜以下の砂粒	良好	黒褐10YR2/1	(外・内)板ナデ	底部細片
247	SK09	土質・焜炉	(口)30.8	2㎜以下の砂粒．金雲母	良好	浅黄橙7.5YR8/6	(外)横ナデ．ナデ．印花文(内)板ナデ	口径1/6
248	SK09	土質・焜炉		2㎜以下の砂粒．金雲母	良好	浅黄橙7.5YR8/6	(外)ナデ．印花文 (内)押圧→板ナデ	細片
249	SK09	土質・焜炉	(口)37.0	3㎜以下の砂粒．金雲母	良好	浅黄橙7.5YR8/6	(外)横ナデ (内)板ナデ	口径1/8
250	SK09	土質・焜炉	(口)40.3	2㎜以下の砂粒．金雲母	良好	(外)浅黄橙7.5YR8/4 (内)灰白7.5YR8/2	(外)ナデ (内)板ナデ→押圧	口縁細片
251	SK09	土質・焜炉	(口)30.6	3㎜以下の砂粒．金雲母	良好	浅黄橙7.5YR8/4	(外)口縁部横ナデ．板ナデ(内)口縁部横ナデ．ハケ	口径1/6
252	SK09	土質・焜炉	(口)37.0	1㎜以下の砂粒．金雲母	良好	橙5YR7/6	(外)口縁部横ナデ．ナデ(内)口縁部横ナデ．板ナデ	口径1/12
253	SK09	土質・焜炉	(口)40.0	3㎜以下の砂粒	良好	にぶい黄橙10YR7/4	(外)板ナデ→ナデ (内)板ナデ	口径1/6
254	SK09	土質・焜炉	(口)41.0	2㎜以下の砂粒．金雲母	良好	にぶい黄橙10YR7/3	(外)板ナデ→口縁部横ナデ(内)横ハケ→口縁部横ナデ	口径1/8
255	SK09	土質・焜炉	(口)42.0	4㎜以下の砂粒	良好	にぶい橙7.5YR7/4	(外)押圧→板ナデ→口縁部横ナデ(内)横ハケ→口縁部横ナデ	口径1/5
256	SK09	土質・焜炉	(口)41.6	2㎜以下の砂粒を多量．金雲母	良好	橙5YR7/8	(外)板ナデ→口縁部横ナデ(内)押圧→ナデ→口縁部横ナデ	口縁細片
257	SK09	土質・焜炉	(口)26.0	1.5㎜以下の砂粒・金雲母	良好	(外)にぶい褐2.5YR6/3(内)褐灰10YR5/1	(外)板ナデ→口縁部ナデ(内)横ハケ→口縁部ナデ	口縁1/8

土器観察表（3）

番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度
258	SK09	土質・焜炉	(口)25.2	2㎜以下の砂粒．金雲母	良好	浅黄橙10YR8/8	(外)押圧→板ナデ→口縁部横ナデ(内)板ナデ→口縁部横ナデ．炊き口に煤付着	口径1/4
259	SK09	土質・羽釜	(口)17.0	2㎜以下の砂粒	良好	(外)暗褐7.5YR3/3(内)にぶい橙7.5YR7/4	(外)板ナデ．ナデ(内)押圧→横ハケ．横ハケ→ナデ	口径1/8
260	SK09	土質・羽釜	(口)11.8	2㎜以下の砂粒	良好	(外・内)灰N6(断)灰5Y4/1	(外)横ナデ．板ナデ？→横ナデ(内)押圧→横ハケ→ナデ	口径1/4
261	SK09	土質・羽釜	(口)16.4	1.5㎜以下の砂粒	良好	(外)暗灰N3(内)黄灰2.5Y6/1	(外)ナデ．押圧→板ナデ(内)調整不明	口径1/12
262	SK09	土質・羽釜		2㎜以下の砂粒	良好	黄灰2.5Y6/1	(外)ナデ．横ナデ(内)押圧→横ハケ(底外)押圧→ナデ．煤付着	鍔部1/12
263	SK09	土質・羽釜		1㎜以下の砂粒	良好	(外)灰黄褐(内)灰白(断)濃灰	(外)押圧→ナデ．押圧→横ナデ(内)横ハケ	鍔部1/12
264	SK09	土質・羽釜		3㎜以下の砂粒	良好	灰N5	(外)ナデ(内)押圧→横ハケ(底外)調整不明	鍔部1/10
265	SK09	瓦質・羽釜		1㎜以下の砂粒	良好	(外)灰黄褐10YR5/2(内)灰白2.5Y7/1(断)オリーブ黒5Y3/1	(外)押圧→横ナデ(内)押圧→横ハケ(底外)押圧．煤付着	鍔部1/10
266	SK09	瓦質・羽釜		1㎜以下の砂粒	良好	灰5Y5/1	(外)指ナデ→横ナデ(内)板ナデ(底外)押圧．煤付着	鍔部1/12
267	SK09	瓦質・羽釜		2㎜以下の砂粒	良好	(外)黄灰2.5Y4/1(内)黄灰2.5Y5/1	(外)横ナデ(内)横ハケ(底外)押圧→ナデ	鍔部1/12
268	SK09	土質・羽釜		1㎜以下の砂粒	良好	(外)灰白2.5Y7/1(内)にぶい橙7.5YR7/4(断)橙5YR6/6	(外)横ナデ(内)横ハケ→横ナデ(底外)横ハケ．煤付着	鍔部細片
269	SK09	土質・焙烙	(口)47.4	2㎜以下の砂粒．金雲母	良好	(外)黒褐10YR3/1(内)にぶい黄橙10YR7/4	(外)横ナデ．煤付着(内)横ナデ	口径1/16
270	SK09	土質・焙烙	(口)48.0	2㎜以下の砂粒	良好	(外)灰黄褐10YR4/2(内)にぶい黄橙10YR7/3	(外)ナデ→横ナデ．煤付着(内)横ナデ	口縁細片
271	SK09	土質・焙烙		4㎜以下の砂粒．金雲母	良好	(外)灰褐7.5YR4/2(内)にぶい黄橙10YR7/3	(外)横ナデ．煤付着(内)横ナデ	口縁細片
272	SK09	土質・焙烙		2㎜以下の砂粒．金雲母	良好	(外)黒褐7.5YR3/1(内)にぶい橙7.5YR7/4	(外)横ナデ．押圧→ナデ．煤付着(内)横ハケ	口縁細片
273	SK09	土質・焙烙	(口)47.6	2㎜以下の砂粒．金雲母	良好	(外)灰黄褐10YR5/2(内)灰白10YR8/2	(外)横ナデ→押圧(内)横ハケ→ナデ	口径1/6

土器観察表（4）

番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度
274	SK09	土質・焙烙		微細砂粒	良好	(外)暗灰黄2.5Y5/2 (内)灰5Y5/1	(外)粗いハケ (内)ナデ	細片
275	SK09	土質・焙烙		1㎜以下の砂粒	良好	(外)にぶい黄橙10YR6/3(内)黒10YR2/1	(外)粗いハケ (内)炭化物付着	細片
276	SK09	土質・焙烙		微細砂粒．金雲母	良好	灰白10YR8／2	(外)回転ナデ．外型剝離痕(内)回転ナデ	口縁細片
277	SK09	土質・焙烙	(口)23.0	1㎜以下の砂粒を少量．金雲母	良好	灰黄2.5Y7/2	(外)回転ナデ→外型剝離痕(内)回転ナデ	口径1/12
278	SK09	土質・焙烙	(口)27.2	1㎜以下の砂粒を少量．金雲母	良好	にぶい黄橙10YR7/3	(外)回転ナデ→ヘラ削り→外型剝離痕(内)回転ナデ	口径1/4
279	SK09	瓦質・手付き焙烙		1㎜以下の砂粒	良好	灰N4	(外・内)ナデ	口縁細片
280	SK09	土質・甕	(口)43.0	2㎜以下の砂粒	堅緻	(外)灰褐5YR6/2 (内)浅黄橙7.5YR6/4	(外)横ナデ (内)横ハケ	口径1/6
281	SK09	土質・甕	(口)53.0	4㎜以下の砂粒．金雲母	良好	灰白10YR8/2	(外・内)横ナデ	口径1/8
282	SK09	土質・甕	(口)16.9	5㎜以下の小石	良好	淡橙5YR8/4	(外)口縁部横ナデ．調整不明(内)板ナデ．横ハケ	口径1/6
283	SK09	土質・甕？		2㎜以下の砂粒．金雲母	良好	橙5YR7/8	(外)波状文：回転利用 (内)押圧→板ナデ	細片
284	SK09	土質・甕？		2㎜以下の砂粒	良好	浅黄橙10YR8/3	(外)押圧→ナデ．波状文：回転利用(内)押圧→横ハケ	細片
285	SK09	土質・甕	(底)28.2	4㎜以下の砂粒．金雲母	良好	(外)橙7.5YR7/6 (内)浅黄橙10YR8/3	(外)板ナデ (内)横ハケ	底径1/8
286	SK09	土質・足付甕	(底)24.8	3㎜以下の砂粒．金雲母	良好	浅黄橙7.5YR8/4	(外)押圧→板ナデ (内)横ハケ	底径1/8
287	SK09	土質・脚部		1.5㎜以下の砂粒．金雲母	良好	にぶい黄橙10YR7/2	指ナデ	脚部完存
288	SK09	土質・脚部		2㎜以下の砂粒．金雲母	良好	浅黄橙7.5YR8/4	ナデ	脚部完存
289	SK09	土質・脚部		1.5㎜以下の砂粒を多量．金雲母	良好	灰白2.5Y7/1	指ナデ	脚部細片
349	SK10	土質・擂鉢		2㎜以下の砂粒．金雲母	良好	にぶい橙7.5YR7/4	(外)ナデ (内)ナデ→卸し目	細片
350	SK10	瓦質・火鉢	(底)22.6	精緻	良好	(外)灰N4 (内)灰白N7	(外)ナデ．タガ状突帯(内)ナデ	底径1/12
351	SK10	土質・焜炉	(口)30.0	2㎜以下の砂粒	良好	浅黄橙7.5YR8/4	(外)押圧→口縁部横ナデ(内)横ハケ→口縁部横ナデ	口径1/12
352	SK10	土質・焜炉	(口)37.0	3㎜以下の砂粒．金雲母	良好	灰白10YR8/2	(外)押圧→口縁部横ナデ(内)板ナデ→口縁部横ナデ	口径1/12

土器観察表（5）

番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度
353	SK10	土質・焜炉	(口)38.0	1㎜以下の砂粒．金雲母	良好	浅黄橙7.5YR8/4	(外)押圧→ナデ (内)横ハケ→ナデ	口縁細片
354	SK10	土質・焜炉	(口)33.8	2㎜以下の砂粒．金雲母	良好	にぶい橙5YR6/4	(外)押圧．横ナデ (内)板ナデ	口径1/12
355	SK10	土質・甕？		2㎜以下の砂粒	良好	浅黄橙7.5YR8/6	(外)板ナデ→波状文：回転利用(内)押圧→ハケ	体部細片
356	SK10	瓦質・甕？		3㎜以下の砂粒を少量	良好	暗灰N3(胎)灰N6	(外)調整不明 (内)調整不明．ナデ	細片
373	SK18	土質・焙烙	(口)48.8	2.5㎜以下の砂粒	良好	(外)褐灰10YR4/1 (内)にぶい黄褐10YR5/3	(外)口縁部横ナデ．押圧→ナデ．煤付着 (内) 横ナデ	口縁細片
376	SK18	須・甕		2㎜以下の砂粒	良好	灰N6	(外)平行叩き (内)板ナデ	細片
378	SK19	土質・壺	(底)12.6	2㎜以下の砂粒	良好	灰白5Y7/1	(外)ナデ(内)押圧 (底外)無調整	底部完存
388	SK20	須・杯		2㎜以下の砂粒	良好	灰N5	(外・内)回転ナデ	細片
389	SK20	須・杯	(底)10.0	1㎜以下の砂粒	良好	灰5Y6/1	(外・内)回転ナデ (底外)ヘラ切り	底径1/8
390	SK20	須・壺	(口)2.6	精良	良好	(胎)赤灰5R5/1 (内)灰N4	(外・内)回転ナデ	頸部1/6
391	SK20	須・壺		1㎜以下の砂粒	良好	(外)青灰5PB5/1 (内)青灰5B6/1	(外)格子目叩き (内)板ナデ	細片
393	SK58	土質・甕	(口)57.0 (高)60.5 (底)34.5	3㎜以下の砂粒	良好	浅黄橙10YR8/4	(外)口縁部横ナデ．押圧→板ナデ(内)口縁部横ナデ．押圧→斜め～横ハケ(底)板ナデ	口径1/2 底径完存
403	SE01	土質・火鉢	(口)36.0	2㎜以下の砂粒．金雲母	良好	(外)淡黄2.5Y8/3 (内)橙7.5YR7/6	(外)ナデ→口縁部横ナデ(内)横ハケ→ナデ→口縁部横ナデ	口縁細片
404	SE01	土質・甕	(口)42.0	2㎜以下の砂粒を多量	良好	にぶい黄橙10YR7/2	(外)押圧→回転ナデ (内)回転ナデ	口径1/12
418	SX01	土質・焜炉	(口)38.0	2㎜以下の砂粒	良好	灰白7.5YR8/2	(外)縦方向のナデ→口縁部横ナデ(内)板ナデ→横ナデ	口径1/12
437	SX03 石積み内埋土	土質・小皿	(底)5.1	1㎜以下の砂粒	良好	にぶい黄橙10YR7/2	(外)ナデ(内)回転ナデ(底外)静止糸切り	底部完存
438	SX03 石積み内埋土	土質・焜炉	(口)40.0	2㎜以下の砂粒．金雲母	良好	灰黄褐10YR6/2	(外)板ナデ→ナデ (内)口縁部横ナデ．ハケ	口径1/16
439	SX03 石積み内埋土	土質・焙烙		3.5㎜以下の砂粒を多量	良好	(外)灰黄褐10YR6/2(内)にぶい黄橙10YR6/4	(外)口縁部横ナデ．押圧→横ナデ．煤付着(内)口縁部横ナデ．ハケ	口縁細片
440	SX03 石積み内埋土	土質・焙烙		1㎜以下の砂粒	良好	(外)暗灰黄2.5Y4/2 (内)灰5Y5/1	(外)口縁部ナデ．押圧→ナデ(内)ナデ	口縁細片
441	SX03 石積み内埋土	土質・焙烙	(口)41.0	1㎜以下の砂粒	良好	(外)黒褐10YR3/1 (内)灰黄褐10YR5/2	(外)押圧→口縁部横ナデ(内)板ナデ	口径1/12

土器観察表（6）

番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度
442	SX03 石積み内埋土	土質・壺		2㎜以下の砂粒	良好	浅黄橙10YR8/3	(外・内)調整不明	頸部細片
478	SX03石積み 裏込め土	土質・擂鉢	(口)30.0	2㎜以下の砂粒	良好	浅黄橙7.5YR8/6	(外)ナデ→口縁部横ナデ(内)横ハケ→口縁部横ナデ．卸し目5本/1.9cm	口径1/12
479	SX03石積み 裏込め土	土質・擂鉢	(口)33.8	1.5㎜以下の砂粒	良好	橙5YR7/8	(外)ナデ→口縁部横ナデ(内)板ナデ→口縁部横ナデ	口縁細片
480	SX03石積み 裏込め土	土質・火鉢	(口)24.0	1㎜以下の砂粒	良好	淡赤橙2.5YR7/3・褐灰7.5YR6/1	(外)口縁部横ナデ．押圧．板ナデ(内)ナデ．押圧．煤付着	口径1/4
481	SX03石積み 裏込め土	土質・火鉢	(口)26.2	2㎜以下の砂粒	良好	(外)灰黄褐10YR6/2 (内)灰黄褐10YR5/2	(外)ナデ (内)ナデ．煤付着	口径1/8
482	SX03石積み 裏込め土	土質・焙烙	(口)35.4	1㎜以下の砂粒．金雲母	良好	にぶい褐7.5Y5/4	(外)口縁部横ナデ→押圧→ナデ．煤付着(内)横ナデ	口縁細片
483	SX03石積み 裏込め土	土質・焙烙	(口)38.0	2㎜以下の砂粒．金雲母	良好	(外)暗褐7.5YR3/3 (内)灰黄2.5Y7/2	(外)口縁部横ナデ．押圧→板ナデ(内)板ナデ	口径1/6
484	SX03石積み 裏込め土	土質・焙烙	(口)36.0	1㎜以下の砂粒	良好	浅黄橙10YR8/3	(外・内)口縁部横ナデ	口径1/16
485	SX03石積み 裏込め土	土質・焙烙	(口)36.2	1.5㎜以下の砂粒	良好	(外)黒褐10YR3/1 (内)灰黄2.5Y6/2	(外)押圧→口縁部横ナデ(内)口縁部横ナデ→板ナデ	口縁細片
486	SX03石積み 裏込め土	土質・焙烙	(口)37.0	精良	良好	暗灰N3	(外)押圧→口縁部横ナデ(内)横ナデ	口径1/12
487	SX03石積み 裏込め土	土質・焙烙	(口)40.9	微細砂粒	良好	褐灰10YR4/1	(外)押圧→横ナデ (内)横ナデ	口縁細片
488	SX03石積み 裏込め土	土質・焙烙		精良	良好	黒2.5Y2/1	(外)横ナデ (内)押圧→横ナデ	口縁細片
489	SX03石積み 裏込め土	土質・焙烙	(口)45.0	微細砂粒	良好	(外)黒2.5Y2/1 (内)黄2.5Y5/1	(外)押圧→板ナデ．口縁部横ナデ(内)押圧→ナデ	口縁細片
490	SX03石積み 裏込め土	土質・焙烙	(口)46.0	2㎜以下の砂粒	良好	(外)暗褐7.5YR3/3 (内)にぶい褐7.5YR5/4	(外)押圧．ナデ (内)横ハケ	口径1/16
491	SX03石積み 裏込め土	土質・焙烙	(口)50.4	1㎜以下の砂粒	良好	褐灰10YR4/1	(外)押圧→ナデ(内)板ナデ→口縁部横ナデ	口径1/16
492	SX03石積み 裏込め土	瓦質・壺	(口)11.1	1㎜以下の砂粒	軟	(胎)灰白5Y8/1 (外・内)灰N4	(外)ナデ (内)押圧→ナデ	口径1/8
493	SX03石積み 裏込め土	土質・甕	(口)43.4	2㎜以下の砂粒	良好	(外)にぶい褐2.5YR5/3(内)橙7.5YR6/6	(外)口縁部横ナデ→縦方向のナデ(内)横ハケ．陶質に近い焼成	口径1/12
509	SD03	土質・擂鉢		2㎜以下の砂粒	良好	灰白2.5Y8/2	(外)板ナデ(内)板ナデ→卸し目5本／1.2cm	口縁細片

土器観察表（7）

番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度
510	SD03	土質・甕		2㎜以下の砂粒	良好	浅黄橙10YR8/4	(外)縦方向のナデ→口縁部横ナデ(内)板ナデ→横ハケ→口縁部横ナデ	口縁細片
530	SD45	瓦質・鉢？		1㎜以下の砂粒	良好	暗灰黄2.5Y5/2	(外)印花文	口縁細片
531	SD45	瓦質・羽釜	(口)23.6	2㎜以下の砂粒	良好	黒褐2.5Y3/1	(外・内)回転ナデ	口縁細片
532	SD45	瓦質・焙烙	(口)29.4	2㎜以下の砂粒	良好	灰10Y 5	(外・内)ナデ	口縁細片
533	SD45	土質・焙烙	(口)40.0	1㎜以下の砂粒	良好	(外)オリーブ黒5Y3/1 (胎)灰白5Y7/1	(外・内)ナデ	口径1/12
534	SD45	土質・焙烙	(口)44.8	1㎜以下の砂粒	良好	黒褐2.5Y3/1	(外)口縁部横ナデ．外型剝離痕(内)ハケ→口縁部横ナデ	口縁細片
535	SD45	土質・甕		2㎜以下の砂粒	良好	灰白10YR8/2	(外)ナデ→波状文(内)押圧→ナデ．口縁部ナデ	口縁細片
540	Ⅰ区南半部包含層	土・杯	(底)5.4	微細粒及び0.5㎜以下の砂粒	良好	橙7.5YR7/6	(外・内)調整不明(底外)ヘラ切り	底径1/12
541	Ⅰ区南半部包含層	土・杯	(口)8.0	2㎜以下の砂粒．5㎜程の小石	良好	灰白2.5Y8/2	(外・内)回転ナデ．ナデ(底外)回転糸切り	底径1/4
542	Ⅰ区南半部包含層	土・杯	(高台)7.0	2㎜以下の砂粒を少量	軟	浅黄橙10YR8/4	(外・内)調整不明	高台細片
543	Ⅰ区南半部包含層	土・碗	(高台)5.6	0.5㎜以下の砂粒を少量	良好	淡黄2.5Y8/4	(外・内)調整不明	高台1/4
544	Ⅰ区南半部包含層	土・碗	(高台)9.0	微細砂粒	軟	淡黄2.5Y8/3	(外・内)調整不明	高台1/6
545	Ⅰ区南半部包含層	土・碗	(高台)6.0	0.5㎜以下の砂粒を少量	良好	灰白2.5Y8/2	(外・内)回転ナデ	高台1/5
546	Ⅰ区南半部包含層	土・羽釜	(口)23.0	3㎜以下の砂粒	良好	灰黄褐10YR6/2	(外)ハケ？ (内)調整不明	口径1/8
547	Ⅰ区南半部包含層	土・羽釜		2㎜以下の砂粒	軟	(外)褐灰10YR5/1 (内)浅黄橙10YR8/3	(外・内)ナデ	鍔部細片
548	Ⅰ区南半部包含層	土・羽釜		2㎜以下の砂粒	良好	橙2.5YR6/6	(外)鍔部横ナデ (内)横ハケ	鍔部1/10
549	Ⅰ区南半部包含層	土・竈		4㎜以下の砂粒	良好	にぶい黄橙10YR7/2	(外)ナデ(内)板ナデ	細片
550	Ⅰ区南半部包含層	土・竈		3㎜以下の砂粒を多量	良好	にぶい黄橙10YR7/2	(外・内)ナデ	細片
551	Ⅰ区南半部包含層	土・竈	(口)28.8	3㎜以下の砂粒	良好	にぶい橙7.5YR7/4	(外)押圧→縦ハケ→口縁部横ナデ(内)板ナデ→口縁部横ナデ	口径1/12
552	Ⅰ区南半部包含層	須・杯	(口)14.0 (高)3.4 (底)10.6	3㎜以下の砂粒	良好	灰N 5	(外・内)回転ナデ (底外)回転ヘラ切り	底径1/3
553	Ⅰ区南半部包含層	須・杯	(口)12.8 (高)4.6 (底)5.8	1㎜以下の砂粒	良好	灰白2.5Y7/1	(外)回転ナデ(底外)ヘラ切り(内)回転ナデ→ナデ	口径1/14 底径1/2

土器観察表（8）

番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度
554	Ⅰ区南半部包含層	須・杯	(底)6.0	1㎜以下の砂粒	良好	灰白N 7	(外・内)回転ナデ (底外)ヘラ切り	底径1/2
555	Ⅰ区南半部包含層	須・杯	(底)6.8	精良	軟	灰N 7	(外・内)回転ナデ (底外)回転ヘラ切り	底径3/4
556	Ⅰ区南半部包含層	須・杯	(底)7.0	精良	良好	灰5 Y6/1	(外・内)回転ナデ (底外)ヘラ切り	底径1/6
557	Ⅰ区南半部包含層	須・杯	(底)7.2	1㎜以下の砂粒	良好	灰N 6	(外・内)回転ナデ (底外)回転ヘラ切り	底径1/4
558	Ⅰ区南半部包含層	須・杯	(底)8.0	1㎜以下の砂粒	軟	灰白N 8	(外・内)回転ナデ (底外)回転ヘラ切り	底径1/8
559	Ⅰ区南半部包含層	須・杯	(底)7.8	微細粒及び0.5㎜以下の砂粒	軟	灰白N 8	(外)回転ナデ(底外)ヘラ切り(内)調整不明	底径1/8
560	Ⅰ区南半部包含層	須・杯	(底)6.0	0.5㎜以下の砂粒	良好	青灰5 PB5/1	(外・内)回転ナデ.火だすき	底径1/8
561	Ⅰ区南半部包含層	須・杯	(高台)15.0	微細砂粒	良好	灰N 6	(外・内)回転ナデ	高台1/16
562	Ⅰ区南半部包含層	須・杯	(高台)5.1	1㎜以下の砂粒を少量	軟	灰白N 7	(外・内)回転ナデ	高台1/7
563	Ⅰ区南半部包含層	須・壺		2.5㎜以下の砂粒	良好	(外)紫灰5 P6/1 (内)青灰5 B6/1	(外・内)回転ナデ	頸部1/8
564	Ⅰ区南半部包含層	須・壺	(底)11.0	1㎜以下の砂粒	良好	灰N 6	(外・内)回転ナデ(底外)調整不明.一部ナデ	底径1/12
565	Ⅰ区南半部包含層	須・甕	(口)17.0	1㎜以下の砂粒	良好	灰N 6	(外・内)回転ナデ	口径1/10
566	Ⅰ区南半部包含層	須・甕	(口)30.0	1㎜以下の砂粒	良好	明オリーブ灰2.5 GY7/1	(外・内)回転ナデ	口径細片
567	Ⅰ区南半部包含層	須・甕		精良	良好	(胎)灰白N 8 (釉)透明	(外)擬格子叩き目 (内)当て具痕	体部細片
568	Ⅰ区南半部包含層	須・甕		1㎜以下の砂粒	良好	(外)灰N 5 (内)灰白N 7	(外)カキ目(内)ナデ	体部細片
569	Ⅰ区南半部包含層	須・甕		微細粒及び0.5㎜以下の砂粒	良好	灰N 6	(外)格子叩き目 (内)ナデ	体部細片
570	Ⅰ区南半部包含層	須・甕		2㎜以下の砂粒	良好	灰N 5	(外)格子叩き目 (内)回転ナデ	体部細片
571	Ⅰ区南半部包含層	須・甕		1.5㎜以下の砂粒	良好	灰N 4	(外)格子叩き目 (内)ナデ	体部細片
572	Ⅰ区南半部包含層	須・甕		0.5㎜以下の砂粒	良好	青灰5 PB5/1	(外)格子叩き目 (内)押圧→ナデ	体部細片
637	Ⅰ区北半部包含層	土質・擂鉢	(口)26.8	2㎜以下の砂粒.金雲母	良好	灰白10YR8/2	(外)回転ナデ→押圧(内)回転ナデ→卸し目5本/1.8㎝	口径1/4
638	Ⅰ区北半部包含層	土質・擂鉢	(口)29.0	1㎜以下の砂粒.黒雲母	良好	にぶい橙7.5YR7/4	(外)口縁部横ナデ.押圧.ナデ.煤付着(内)口縁部横ナデ.表面剝離.卸し目	口径1/10
639	Ⅰ区北半部包含層	土質・擂鉢		1㎜以下の砂粒	堅緻	橙7.5YR6/6	(外)板ナデ→口縁部ナデ(内)ハケ→卸し目→口縁部ナデ	口縁細片

土器観察表（9）

番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度
640	Ⅰ区北半部包含層	土質・擂鉢		2㎜以下の砂粒	良好	にぶい赤褐5YR5/4	(外)押圧→ナデ (内)板ナデ→卸し目	体部細片
641	Ⅰ区北半部包含層	土質・擂鉢		2㎜以下の砂粒．金雲母	良好	灰白10YR8/2	(外)ナデ(内)卸し目	体部1/10
642	Ⅰ区北半部包含層	土質・擂鉢	(底)14.0	2㎜以下の砂粒．金雲母	良好	浅黄橙7.5YR8/3	(外・内)調整不明	底径1/8
643	Ⅰ区北半部包含層	瓦質・火鉢	(底)15.0	1㎜以下の砂粒	良好	(外)灰白5Y7/1 (内)灰N5	(外)口縁部ナデ→押圧→ナデ(内)横ナデ．脚部貼付	底径1/6
644	Ⅰ区北半部包含層	瓦質・火鉢	(口)19.6 (高)6.1 (底)14.4	3㎜以下の砂粒	良好	(外・内)灰5Y4/1(胎)灰白5Y8/1	(外)口縁部横ナデ．板ナデ．ナデ(内)押圧．ナデ．板ナデ(底外)ヘラ先の痕？脚部貼付痕あり	底径1/8
645	Ⅰ区北半部包含層	瓦質・火鉢		1㎜以下の砂粒	良好	オリーブ黒5Y3/1	(外)板ナデ→印花文 (内)口縁部ナデ．ナデ→押圧	口縁細片
646	Ⅰ区北半部包含層	瓦質・火鉢		2㎜以下の砂粒	良好	(外・内)灰N4 (胎)灰白5Y8/1	(外)ヘラ削り？(内)押圧→ナデ(脚)押圧→ナデ．脚部貼付	底径1/8
647	Ⅰ区北半部包含層	瓦質・火鉢脚部		1㎜以下の砂粒	良好	灰10Y3/1	(外・内)縦方向のナデ→横ナデ	脚部ほぼ完存
648	Ⅰ区北半部包含層	瓦質・火鉢	(口)22.2 (底)25.0	2㎜以下の砂粒	軟	(外)灰5Y5/1 (内)暗灰N3	(外)ナデ(内)板ナデ	口径1/10
649	Ⅰ区北半部包含層	瓦質・火鉢	(口)20.8 (高)12.7 (底)23.0	2㎜以下の砂粒	良好	暗灰N3	(外)ナデ．突帯上に刻線(内)ヘラ削り	口径1/4
650	Ⅰ区北半部包含層	瓦質・火鉢		2㎜以下の砂粒	良好	暗灰N3	(外)板ナデ (内)ヘラ削り	口縁細片
651	Ⅰ区北半部包含層	土質・焜炉	(口)24.6	1㎜以下の砂粒．金雲母	良好	にぶい橙7.5YR7/3	(外・内)板ナデ→口縁部横ナデ	口径1/12
652	Ⅰ区北半部包含層	土質・焜炉	(口)22.0	3㎜以下の砂粒を少量．金雲母	良好	灰黄褐10YR5/2 (胎)にぶい橙7.5YR6/4	(外)ナデ→口縁部横ナデ(内)横ハケ→口縁部横ナデ	口径1/8
653	Ⅰ区北半部包含層	土質・羽釜		1.5㎜以下の砂粒	良好	灰N5	(外)ヘラ削り．鍔部ナデ．煤付着(内)ナデ	鍔部1/9
654	Ⅰ区北半部包含層	土質・羽釜		1㎜以下の砂粒	良好	暗青灰5PB4/1	(外)鍔部ナデ (内)押圧→ナデ	鍔部細片
655	Ⅰ区北半部包含層	土質・羽釜		2㎜以下の砂粒	良好	(外)黄灰2.5Y4/1 (内)にぶい黄橙10YR6/3	(外)押圧．縦ハケ．ナデ．鍔部横ナデ(内)板ナデ	鍔部1/16
656	Ⅰ区北半部包含層	土質・羽釜		1㎜以下の砂粒	良好	灰黄2.5Y6/2	(外)鍔部横ナデ．煤付着(内)横ハケ	鍔部1/12
657	Ⅰ区北半部包含層	土質・羽釜		2㎜以下の砂粒	良好	黄灰2.5Y6/1	(外)押圧．ナデ(内)押圧→横ハケ	細片

土器観察表（10）

番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度
658	Ⅰ区北半部包含層	土質・鍋		1㎜以下の砂粒	良好	浅黄橙7.5YR8/4	(外・内)ナデ	口縁細片
659	Ⅰ区北半部包含層	土質・鍋	(口)9.4	2㎜以下の砂粒．金雲母	良好	にぶい橙7.5YR6/4	(外)口縁部横ナデ．押圧→ナデ(内)板ナデ	口径1/4
660	Ⅰ区北半部包含層	土質・焙烙	(口)43.4	2㎜以下の砂粒．金雲母	良好	(外)黒褐7.5YR7/1 (内)橙7.5YR7/6	(外)口縁部板ナデ．型枠剝離材．煤付着(内)板ナデ	口縁細片
661	Ⅰ区北半部包含層	土質・焙烙	(口)34.6	2㎜以下の砂粒	良好	浅黄橙10YR8/3	(外)口縁部回転ナデ．押圧．ハケ．煤付着(内)板ナデ？	口縁細片
662	Ⅰ区北半部包含層	土質・焙烙	(口)35.2	1㎜以下の砂粒	良好	灰黄2.5Y6/2	(外・内)口縁部横ナデ	口径1/12
663	Ⅰ区北半部包含層	土質・焙烙	(口)33.8	1㎜以下の砂粒	良好	(外)黒褐2.5Y3/1 (内)灰褐2.5Y6/2	(外・内)口縁部横ナデ	口縁細片
664	Ⅰ区北半部包含層	土質・焙烙	(口)35.0	1.5㎜以下の砂粒	良好	灰オリーブ5Y6/2	(外)口縁部横ナデ．押圧→ナデ(内)口縁部板ナデ．ナデ	口縁細片
665	Ⅰ区北半部包含層	土質・焙烙	(口)32.8	1㎜以下の砂粒	良好	浅黄橙7.5YR8/6	(外・内)口縁部横ナデ	口縁細片
666	Ⅰ区北半部包含層	土質・焙烙	(口)34.1	1㎜以下の砂粒	良好	(外)灰黄褐10YR5/2 (内)にぶい黄橙10YR6/3	(外・内)口縁部横ナデ	口縁細片
667	Ⅰ区北半部包含層	土質・焙烙	(口)36.0	0.5㎜以下の砂粒	良好	灰7.5Y6/1	(外)押圧→口縁部横ナデ(内)板ナデ→口縁部横ナデ	口径1/24
668	Ⅰ区北半部包含層	土質・焙烙	(口)42.2	2㎜以下の砂粒	良好	黒褐10YR3/1	(外)口縁部押圧．ナデ．煤付着(内)口縁部板ナデ	口径1/16
669	Ⅰ区北半部包含層	土質・焙烙		1㎜以下の砂粒	良好	(外)黒褐10YR3/1 (内)灰黄2.5Y6/2	(外)口縁部横ナデ．煤付着(内)口縁部横ナデ	口縁細片
670	Ⅰ区北半部包含層	土質・焙烙		1㎜以下の砂粒	良好	褐灰7.5YR4/1	(底外)粗いハケ．煤付着(底内)ナデ	底部細片
671	Ⅰ区北半部包含層	土質・焙烙		1㎜以下の砂粒	良好	にぶい褐7.5YR5/3	(外)ハケ目状のカキ目→口縁部回転ナデ．ヘラ削り(底外)外型剝離痕(内)回転ナデ	底径1/12
672	Ⅰ区北半部包含層	土質・甕	(口)38.6	1㎜以下の砂粒	良好	浅黄橙10YR8/4	(外)縦ハケ→ナデ (内)板ナデ→ナデ	口径1/12
673	Ⅰ区北半部包含層	土質・甕	(口)45.0	3㎜以下の砂粒．金雲母	良好	浅黄橙10YR8/3	(外)口縁部回転ナデ．押圧→ナデ(内)口縁部板ナデ．横ハケ．押圧→ナデ	口径1/16
674	Ⅰ区北半部包含層	土質・甕	(口)56.6	3㎜以下の砂粒	良好	橙5YR6/8	(外・内)押圧→板ナデ	口径1/12
675	Ⅰ区北半部包含層	土質・甕脚部		2㎜以下の砂粒．金雲母	良好	浅黄橙7.5YR8/4	(外・内)ナデ	脚部ほぼ完存

土器観察表（11）

番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度
676	Ⅰ区北半部包含層	土質・甕		2㎜以下の砂粒	良好	にぶい黄橙10YR7/3	(外)板ナデ．ナデ (内)横ハケ	脚部細片
677	Ⅰ区北半部包含層	土質・甕		1㎜以下の砂粒を多量．金雲母	良好	浅黄橙10YR8/3	(外)ナデ→波状文 (内)ナデ	体部細片
678	Ⅰ区北半部包含層	瓦質・土管	(口)57.8	2㎜以下の砂粒	良好	オリーブ黒7.5Y 3/1	(外)口縁部横ナデ．板ナデ(内)削り状の板ナデ→口縁部横ナデ．板ナデ	口径1/12
679	Ⅰ区北半部包含層	土質・火流し壺蓋	(口)24.8	3㎜以下の砂粒．金雲母	良好	(外)にぶい黄橙10YR7/3(内)にぶい黄橙10YR7/2	(外)削り．押圧．横ナデ(内)板ナデ	口縁細片
680	Ⅰ区北半部包含層	瓦質・蓋？		1㎜以下の砂粒	良好	灰白5Y8/1	押圧→ナデ．ナデ	細片
703	Ⅰ区北半部包含層	土・羽釜		2㎜以下の砂粒	良好	にぶい黄橙10YR7/4	(外)鍔部横ナデ．押圧 (内)横ナデ．横ハケ	鍔部1/8
704	Ⅰ区北半部包含層	須・甕		1㎜以下の砂粒	堅緻	灰N6	(外)格子叩き目 (内)当て具痕	体部細片
706	Ⅱ区包含層	須・蓋	(口)10.9	1㎜以下の砂粒	良好	青灰5PB6/1	(外)回転ナデ→ナデ (内)回転ナデ	口径1/8
707	Ⅱ区包含層	須・杯	(口)14.0	0.5㎜以下の砂粒	良好	灰N5	(外)口縁部回転ナデ．ヘラ削り(内)回転ナデ	口径1/8
708	Ⅱ区包含層	須・杯	(高台)12.5	1㎜以下の砂粒	良好	(外)暗灰N3 (内)灰5Y6/1	(外・内)回転ナデ (底外)ヘラ切り→高台貼付	高台1/12
709	Ⅱ区包含層	須・杯	(高台)7.3	1.5㎜以下の砂粒	軟	灰白N8	(外・内)回転ナデ(底外)回転ヘラ切り→高台貼付	高台完存
710	Ⅲ区包含層	土・壺	(口)15.3	4㎜以下の砂粒	良好	にぶい黄橙10YR7/4	(外)横ナデ(内)横ハケ	口径1/6
711	Ⅲ区包含層	土・杯	(底)6.2	1㎜以下の砂粒	良好	明褐7.5YR5/6	(外・内)回転ナデ	底径1/4
712	Ⅲ区包含層	土・杯	(底)7.0	1㎜以下の砂粒を少量	良好	明黄褐10YR6/6	(外・内)調整不明	底径1/4
713	Ⅲ区包含層	土・羽釜		3㎜以下の砂粒	軟	橙7.5YR7/6	(外・内)調整不明	口縁細片
714	Ⅲ区包含層	土・羽釜		2㎜以下の砂粒．黒雲母	良好	にぶい赤褐5YR5/4	(外)板ナデ．鍔部横ナデ．押圧(内)ナデ	鍔部1/12
715	Ⅲ区包含層	土・鍋		2㎜以下の砂粒	軟	浅黄橙10YR8/3	(外・内)調整不明	細片
716	Ⅲ区包含層	須・杯身	(口)10.4 (高)4.2 (底)8.0	2㎜以下の砂粒	良好	灰白N7	(外)口縁部回転ナデ→ヘラ切り(内)回転ナデ	口径1/2 底部完存
717	Ⅲ区包含層	須・杯蓋	(口)20.0	1㎜以下の砂粒	良好	灰白N7	(外・内)回転ナデ	口径1/3
718	Ⅲ区包含層	須・杯	(口)15.0	微細砂粒	良好	灰N6	(外・内)回転ナデ	口径1/12
719	Ⅲ区包含層	須・杯	(底)10.0	0.3㎜以下の砂粒を少量	良好	灰N6	(外・内)回転ヘラ削り	底径1/4
720	Ⅲ区包含層	須・杯	(底)6.5	1㎜以下の砂粒	軟	明褐灰7.5YR7/2	(外)ナデ．火だすき(内)ナデ(底外)ヘラ切り	底径1/4
721	Ⅲ区包含層	須・杯	(底)8.0	1㎜以下の砂粒	良好	灰N5	(外・内)回転ナデ．火だすき(底外)回転ヘラ切り	底径1/4

土器観察表（12）

番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度
722	III区包含層	灰・椀	(高台)7.0	精良	堅緻	(胎)灰白5Y2/1 (釉)浅黄5Y7/3	(外・内)回転ナデ (底外)ヘラ削り	高台1/4
723	III区包含層	緑・椀	(高台)7.0	精良	堅緻	灰N6	(外・内)回転ナデ	高台1/7
724	III区包含層	須・壺	(底)12.0	2㎜以下の砂粒	良好	灰N5	(外)回転ヘラ削り(内)回転ナデ(底外)無調整	底径1/12
725	III区包含層	須・甕		5㎜以下の砂粒	良好	灰白N7	(外)平行叩き目→カキ目(内)当て具痕	体部細片
726	III区包含層	須・甕		1㎜以下の砂粒	良好	灰N6	(外)格子叩き目→口縁部回転ナデ(内)回転ナデ	頸部1/8
733	III区包含層	土質・擂鉢	(底)15.3	3㎜以下の砂粒	良好	にぶい橙5YR6/4	(外)ナデ(内)ナデ→卸し目5本/1.4cm	底径1/8
734	III区包含層	瓦質・羽釜		1㎜以下の砂粒	軟	灰5Y6/1	(外・内)調整不明	口縁細片
735	III区包含層	瓦質・火消し壺蓋	(口)21.2	1.5㎜以下の砂粒	良好	暗灰N3	(外)回転ナデ．ヘラ削り(内)回転ナデ	口径1/5
736	IV区包含層	土・碗	(底)9.1	2㎜以下の砂粒	良好	灰白2.5Y8/2	(外・内)回転ナデ (底外)回転ヘラ切り	底径3/4
737	IV区包含層	土・羽釜		3㎜以下の砂粒	良好	橙5YR6/6	(外・内)調整不明	鍔部細片
738	IV区包含層	土・鍋		3㎜以下の砂粒	良好	黄褐10YR5/6	(外)縦ハケ・調整不明 (内)調整不明	細片
739	IV区包含層	須・杯	(口)12.0	0.3㎜以下の砂粒	良好	(外)灰N6(胎)灰赤2.5YR4/2	(外・内)回転ナデ	口径1/8
740	IV区包含層	須・杯	(口)14.2 (高)7.0 (底)7.6	1㎜以下の砂粒を少量	良好	灰白N6	(外・内)回転ナデ．火だすき(底外)回転ヘラ切り	底径1/2
741	IV区包含層	須・杯	(口)11.6 (高)4.5 (高台)6.6	2㎜以下の砂粒を少量	良好	灰N6	(外・内)回転ナデ．火だすき	高台1/4
742	IV区包含層	須・壺	(口)10.4	1㎜以下の砂粒	良好	灰N5	(外・内)回転ナデ	口縁細片
743	IV区包含層	須・壺		1㎜以下の砂粒	良好	暗灰N3・灰白N7	(外・内)回転ナデ	体部1/6
744	IV区包含層	須・甕	(口)18.0	1㎜以下の砂粒	良好	青灰5B5/1	(外・内)回転ナデ	口径1/9
759	V区包含層	土・杯	(底)5.0	1㎜以下の砂粒	良好	橙7.5YR6/6	(外・内)ナデ	底径1/5
760	V区包含層	土・杯	(底)5.8	1㎜以下の砂粒	良好	橙7.5YR6/6	(外・内)回転ナデ	底径1/4
761	V区包含層	土・杯	(底)6.4	1㎜以下の砂粒	軟	橙5YR7/8	(外・内)回転ナデ・ナデ(底外)回転ヘラ切り	底径1/3
762	V区包含層	土・鍋	(口)28.8	1㎜以下の砂粒	良好	(外)灰黄褐10YR5/2 (胎)明赤褐5YR5/6	(外・内)調整不明	口径1/12
763	V区包含層	土・竈		2㎜以下の砂粒	良好	橙7.5YR7/6	(外)ハケ．ナデ(内)ナデ	細片
764	V区包含層	須・杯蓋	(口)17.8	1㎜以下の砂粒	良好	灰N6	(外・内)回転ナデ	口径1/12
765	V区包含層	須・杯	(口)16.0	0.5㎜以下の砂粒	良好	灰N7	(外・内)回転ナデ	口径1/12
766	V区包含層	須・杯	(底)7.0	0.5㎜以下の砂粒	良好	灰N7	(外)回転ヘラ削り (内)回転ナデ．火だすき(底外)回転ヘラ削り	底径1/4

土器観察表（13）

番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度
767	V区包含層	須・杯	(高台)7.5	1㎜以下の砂粒	良好	灰N 6	(外・内)回転ナデ(底外)回転ヘラ切り→高台貼付？	高台1/8
768	V区包含層	須・壺？		0.5㎜以下の砂粒を少量	良好	灰N 5	(外)格子叩き目 (内)回転ナデ	体部細片
769	V区包含層	須・甕	(底)11.7	1㎜以下の砂粒	良好	(外)灰N 5 (内)灰N 6	(外)格子叩き目 (内)板ナデ．押圧→ナデ(底外)回転ナデ．ヘラ削り	底径1/2
770	V区包含層	須・甕		1㎜以下の砂粒	良好	灰 5 Y6/1	(外)格子叩き目 (内)当て具痕	体部細片
799	V区包含層	土質・壺	(口)15.0	2㎜以下の砂粒	良好	橙 5 YR7/6	(外・内)口縁部横ナデ．板ナデ	口径1/10
800	V区包含層	土製人形	(高)2.5	1㎜以下の砂粒	良好	浅黄橙10YR8/4	合わせ型成形	
820	出土地点不明	須・蓋	(口)16.3	微細砂粒	良好	青灰 5 PB6/1	(外)ヘラ切り→回転ナデ(内)回転ナデ	体部1/4
821	予備調査トレンチ	土質・焙烙	(口)53.0	2㎜以下の砂粒	良好	(外)黒(内)にぶい黄2.5Y6/9	(外)口縁部横ナデ．ナデ．外型痕．煤付着(内)横ナデ→ハケ	口径1/8

土器観察表（14）

番号	出土位置	器種	法量	色調	文様	製作地	残存度	備考
139	SK06	磁・碗	(口)9.0	(胎)灰白N8 (釉)灰白2.5GY8/1 (呉)オリーブ灰5GY6/1	(外)二重網目文 (内)一重網目文	肥前系	口径1/6	
140	SK06	磁・碗	(口)13.8	灰白7.5Y8/1(釉)透明 (呉)藍	(内)草花	肥前系	口径1/8	
141	SK06	陶・碗	(高台)4.2	灰褐7.5YR5/2 (釉)緑茶色・乳白色	(外)轆轤刷毛目 (内)刷毛目	肥前系	高台1/2	白泥・鉄釉.貫入
142	SK06	磁・皿	(口)13.0 (高)3.1 (高台)7.8	(胎)灰白N8(釉)灰白5GY8/1(呉)暗オリーブ灰5GY3/1	(外)唐草文(内)草花(底外)コンニャク印判？	肥前系	口径1/10.底径1/4	口錆
143	SK06	磁・瓶	(高台)4.8	(胎)灰白5Y8/1(釉)透明 (呉)明青		肥前系	高台ほぼ完存	内面無釉
144	SK06	陶・灯明皿	(口)10.2 (高)2.0 (底)8.6	灰黄褐10YR5/2		備前系？	口径1/6	口縁部煤付着
148	SK08	磁・碗	(口)6.1 (高)2.4 (高台)2.5	灰白10Y7/1 (呉)緑灰10G5/1	(外)コンニャク印判	肥前系	口径1/12	
149	SK08	磁・碗	(口)10.2	明緑灰7.5GY8/1(呉)青	(外)唐草文	肥前系	口径1/8	
150	SK08	磁・碗	(高台)4.0	(胎)灰白7.5Y8/1(釉)透明(呉)暗青灰5B4/1		肥前系	高台1/4	(底外)「○○年製」銘
151	SK08	磁・碗	(口)9.6 (高)5.5 (高台)4.4	(胎)灰白5Y8(釉)透明 (呉)暗青灰5B4/1	(外)コンニャク印判・草？	肥前系	底部ほぼ完存	(底外)「大明年製」銘.高台砂目
152	SK08	陶・碗	(高台)4.3	(胎)灰白(釉)透明 (呉)オリーブ黒10Y3/1	(外)一重網目文	肥前系	底径1/3	
153	SK08	陶・碗	(高台)4.7	淡黄2.5Y8/3(釉)透明		肥前系	高台7/8	貫入.呉器手
154	SK08	陶・碗		黒褐2.5Y3/2(胎)暗赤褐2.5YR3/6(釉)灰白5Y8/2			口縁細片	白泥・鉄釉
155	SK08	磁・皿		(胎)灰白5Y8(釉)透明		肥前系	口縁細片	
156	SK08	磁・皿		(胎)明オリーブ灰2.5GY7/1(釉)透明(呉)緑灰7.5GY5/1		肥前系	口縁細片	墨弾き
157	SK08	陶・擂鉢	(口)30.4	にぶい赤褐2.5YR5/4		備前系	口径1/12	
158	SK08	陶・擂鉢	(口)25.5	灰赤10R6/2		備前系	口径1/8	
159	SK08	陶・擂鉢	(口)24.4	(胎)灰白N8(表面)にぶい赤褐2.5YR5/4		備前系	口径1/12	卸し目10本/2.6cm
160	SK08	陶・擂鉢	(口)27.8	灰赤2.5YR4/2		備前系	口径1/10	
168	SK09	磁・蓋	(口)10.9	(胎)灰白N8(釉)透明 (呉)暗青灰5B・5PB3/1	(外)草花	肥前系	口径1/8	
169	SK09	磁・蓋	(口)13.8	(胎)灰白(釉)透明 (呉)暗青灰5B3/1・4/1	(外)草花	肥前系	口径1/3	
170	SK09	磁・小杯	(口)7.5	(胎)灰白10Y8/1 (呉)青灰10BG6/1		肥前系	口径1/17	

陶磁器観察表 (1)

番号	出土位置	器種	法量	色調	文様	製作地	残存度	備考
171	SK09	磁・碗	(口)10.0	(胎)灰白5Y8/1(釉)透明		肥前系？	口径1/8	白磁
172	SK09	磁・碗	(口)10.8	灰白(釉)透明		肥前系？	口径1/8	白磁
173	SK09	磁・碗	(口)9.9	灰白5GY8/1(呉)青	(外)草花文・コンニャク印判	肥前系	口径1/10	
174	SK09	磁・碗	(口)10.7	(胎)灰白7.5Y8/1 (呉)暗青灰5PB4	(外)草花	肥前系	口径1/8	
175	SK09	磁・碗		(胎)灰白(釉)透明 (呉)明青	(外)草花	肥前系	口縁細片	
176	SK09	磁・碗	(口)11.0	(胎)灰白N8(釉)透明 (呉)暗青灰5B4/1	(外)唐草文	肥前系	口径1/8	
177	SK09	磁・碗	(高台)4.1	(胎)灰白N8(呉)暗青灰5B4/1		肥前系	高台1/2	(底外)崩し字
178	SK09	磁・碗	(高台)5.2	(胎)灰白N8(釉)透明 (呉)明青		肥前系	高台1/6	
179	SK09	磁・碗	(高台)4.4	(胎)灰白N8(釉)白 (呉)暗青	(外)草花？	肥前系	高台1/4	
180	SK09	陶・碗	(口)10.4 (高)7.2 (高台)5.0	(胎)灰 褐7.5YR4/2(釉) 明オリーブ灰2.5GY7/2 (呉)オリーブ灰2.5GY6/1	(外)唐草文	肥前系	口径1/8 高台1/4	
181	SK09	陶・碗	(口)10.4	(胎)にぶい赤褐2.5Y5/4 (釉)褐灰	(外)轆轤刷毛目	肥前系	口径1/8	白泥・鉄釉
182	SK09	陶・碗	(口)11.8	(胎)赤褐10R5/4 (釉)黒褐	(外)轆轤刷毛目 (内)刷毛目	肥前系	口径1/8	白泥・鉄釉.貫入
183	SK09	陶・碗		にぶい黄橙10YR7/3 淡黄2.5Y8/3	(外)轆轤刷毛目	肥前系	細片	白泥・鉄釉
184	SK09	陶・碗	(高台)4.0	明赤褐2.5YR5/8 (釉)浅黄橙10YR8/3	(内)轆轤刷毛目	肥前系	高台完存	白泥・鉄釉
185	SK09	陶・碗	(高台)4.3	灰白10YR8/1 (釉)黄灰2.5Y4/1	(内)轆轤刷毛目	肥前系	高台1/4	白泥・鉄釉
186	SK09	陶・碗	(高台)5.4	(胎)明赤褐5YR5/6 (釉)明赤灰2.5YR7/1 灰白2.5Y8/2	(外)五弁花 (内)刷毛目	肥前系	高台1/2	白泥・鉄釉
187	SK09	陶・碗	(口)10.0	灰黄2.5Y7/2		肥前系	口径1/6	呉器手
188	SK09	陶・碗	(口)11.0	(胎)灰白2.5Y8/1 (釉)灰黄2.5Y6/2		肥前系	口径1/5	呉器手
189	SK09	陶・碗	(口)11.2	(胎)灰白2.5Y8/1 (釉)灰黄2.5Y6/2		肥前系	口径1/10	呉器手
190	SK09	陶・碗		浅黄2.5Y7/3		肥前系	高台1/4	呉器手
191	SK09	陶・碗	(高台)4.4	(胎)灰白2.5Y8/1 (釉)にぶい黄2.5Y6/3		肥前系	高台1/2	呉器手
192	SK09	陶・碗	(高台)4.8	(胎)灰白2.5Y8/1 (釉)浅黄2.5Y7/3		肥前系	高台1/3	呉器手
193	SK09	陶・碗	(高台)4.6	(胎)灰白2.5Y8/2 (釉)浅黄2.5Y7/3		肥前系	高台1/4	呉器手

陶磁器観察表 (2)

番号	出土位置	器種	法量	色調	文様	製作地	残存度	備考
194	SK09	陶・碗	(高台)4.8	(内・底)灰白10YR8/2 (外)灰白10YR8/1		肥前系 ?	高台1/2	
195	SK09	磁・皿	(口)11.0	(胎)明青灰5PB7/1 (釉)透明(呉)緑灰5G6/1		肥前系	口径1/8	
196	SK09	磁・皿	(口)11.8	(胎)灰白(釉)透明 (呉)青灰10BG6/1		肥前系	口径1/12	呉須発色悪い
197	SK09	磁・皿	(口)12.0	(胎)灰白2.5YG8/1(釉)透明(呉)青灰10BG5/1	草	肥前系	口径1/12	
198	SK09	磁・皿	(口)12.6	灰白(釉)透明 (呉)オリーブ黒10Y3/2	草?	肥前系	口径1/8	
199	SK09	磁・皿	(口)12.8	(胎)灰白(釉)透明 (呉)緑灰5G6/1		肥前系	口径1/5	呉須発色悪い
200	SK09	磁・皿	(高台)3.8	(胎)灰白10Y8/1(釉)透明(呉)にぶい黄橙10YR7/3		肥前系	高台完存	白磁.見込み蛇の目釉剝ぎ
201	SK09	磁・皿	(高台)3.6	灰白5Y8/1(釉)透明		肥前系	高台完存	白磁.見込み蛇の目釉剝ぎ
202	SK09	磁・皿	(高台)4.4	(胎)灰白10YR8/2 (釉)灰白10Y8/1		肥前系	高台1/4	白磁.見込み蛇の目釉剝ぎ
203	SK09	磁・皿	(高台)4.0	(胎)灰白2.5Y8/2 (釉)灰白5GY8/1		肥前系	高台完存	白磁.見込み蛇の目釉剝ぎ
204	SK09	磁・皿	(高台)4.4	(胎)灰白N8 (釉)明緑灰7.5GY7/1		肥前系	高台1/2	白磁.見込み蛇の目釉剝ぎ.高台砂目
205	SK09	磁・皿	(高台)3.9	(高台)にぶい橙7.5YR7/4(釉)灰白10Y8/1		肥前系	高台5/8	白磁.見込み蛇の目釉剝ぎ
206	SK09	磁・皿	(高台)4.4	(胎)灰白N8(外)にぶい橙5YR7/4(釉)透明		肥前系	高台完存	白磁.見込み蛇の目釉剝ぎ
207	SK09	磁・皿	(高台)4.4	(胎)灰白5Y8/1 (釉)灰白5GY8/1		肥前系	高台1/10	白磁.見込み蛇の目釉剝ぎ
208	SK09	陶・皿	(口)13.0 (高)3.3 (高台)4.5	灰白5Y8/1.オリーブ黄7.5Y6/3		肥前系	1/4	青緑釉皿.見込み蛇の目釉剝ぎ
209	SK09	陶・皿	(口)11.6 (高)4.9 (高台)4.6	(胎)灰白5Y7/2 (釉)灰オリーブ7.5Y5/3		肥前系	口径1/8 高台完存	青緑釉皿.見込み蛇の目釉剝ぎ
210	SK09	陶・皿	(高台)5.2	(胎)灰白10YR8/1 (釉)緑灰5G6/1～暗緑灰5G4/1		肥前系	高台ほぼ完存	青緑釉皿.見込み蛇の目釉剝ぎ・砂目
211	SK09	陶・皿	(高台)4.4	(胎)灰白N7 (釉)緑灰5G6/1		肥前系	高台1/4	青緑釉皿.見込み蛇の目釉剝ぎ.砂目.二次的被熱
212	SK09	磁・皿?		(胎)灰白2.5Y8/1(釉)透明(呉)暗青灰5B3/1	(外)「○○○製」銘(内)五弁花コンニャク印判	肥前系	底部細片	

陶磁器観察表 (3)

番号	出土位置	器種	法量	色調	文様	製作地	残存度	備考
213	SK09	磁・皿	(高台)6.0	(胎)灰白N8(釉)透明 (呉)暗青灰5B4/1	(内)草花？	肥前系	高台1/4	
214	SK09	磁・皿	(口)13.9 (高)3.8 (高台)8.4	(胎)灰白2.5Y8/1 (釉)透明(呉)暗青灰5B5/1	(外)唐草文 (内)草花？	肥前系	高台1/4	口錆
215	SK09	磁・皿	(口)13.4 (高)3.7 (高台)7.9	(胎)灰白7.5Y8/1 (釉)灰白10Y8/1(呉)藍	(外)唐草文 (内)草花？	肥前系	高台1/2	(底外)「製」？ 銘.口錆
216	SK09	磁・皿	(高台)8.0	(胎)灰白N8(釉)透明 (呉)暗青灰10G4/1	(外)唐草文 (内)岩竹	肥前系	高台1/5	
217	SK09	磁・鉢	(高台)6.2	(胎)灰白N7(釉)透明 (呉)暗青灰5BG4/1		肥前系	高台完存	見込み蛇の目釉剝ぎ
218	SK09	陶・鉢	(高台) 10.0	(胎)赤10R5/6 (釉)灰白7.5Y8/1	(内)轆轤刷毛目	肥前系	高台1/5	見込み砂目.白泥・鉄釉
219	SK09	陶・鉢	(高台) 12.2	(胎)橙2.5YR6/6 (釉)灰白7.5Y7/2 (外)暗赤灰2.5YR3/1		肥前系	高台1/6	鉄釉.見込み砂目
220	SK09	陶・鉢	(高台) 11.4	(胎)明青灰5PB7/1(釉)灰オリーブ7.5Y6/2(外)にぶい赤褐2.5YR4/3	三島手	肥前系	高台1/2	見込み砂目.白泥・鉄釉
221	SK09	陶・擂鉢	(口)27.6	(口縁外)にぶい橙7.5YR6/4.にぶい赤褐5YR5/3		備前系	口径1/10	卸し目7本/2.6cm.口縁重ね焼痕
222	SK09	陶・擂鉢	(口)36.0	にぶい赤褐7.5R4/3		備前系	口径1/12	卸し目6本/1.9cm.内面ハケ目
223	SK09	陶・擂鉢	(口)36.8	橙2.5YR6/6		備前系	口径1/16	卸し目12本/3.2cm
224	SK09	陶・擂鉢	(口)43.0	明赤褐2.5YR5/6		備前系	口径1/12	卸し目12本/3.2cm (体外)ヘラ削り
225	SK09	陶・擂鉢		灰N6		備前系	口縁細片	口縁重ね焼痕
226	SK09	陶・擂鉢		にぶい赤褐7.5R5/3		備前系	口縁細片	(内)ハケ目
227	SK09	陶・擂鉢		橙2.5YR6/6		備前系	口縁細片	卸し目9本/2.1cm 口縁重ね焼痕
228	SK09	陶・擂鉢	(底)11.6	紫灰5P6/1		備前系	底径1/8	卸し目8本/2.3cm
229	SK09	陶・擂鉢		明赤褐2.5YR5/6		備前系	体部細片	卸し目12本/3.1cm(外)ヘラ削り
230	SK09	陶・擂鉢	(底)13.8	赤褐10R5/4.橙5YR7/8		備前系	底径1/6	卸し目11本/3.5cm (底外)ヘラ削り (内)使用痕
231	SK09	陶・片口擂鉢	(底)20.0	明赤褐2.5YR5/6		備前系	底部細片	高台貼付
232	SK09	陶・瓶		(外)灰白N7(内)にぶい橙7.5Y6/4(釉)透明		肥前系	体部1/4	二次的被熱
233	SK09	磁・瓶		(胎)明オリーブ灰2.5GY7/1(釉)透明(呉)青灰10BG6/1(内)にぶい黄橙10YR7/3		肥前系	細片	

陶磁器観察表 (4)

番号	出土位置	器種	法量	色調	文様	製作地	残存度	備考
234	SK09	陶・瓶		灰白N7(釉)明青灰10BG 7/1.透明		肥前系	頸部完存	頸部内面上半施釉
338	SK10	磁・碗	(口)10.0 (高)5.7 (高台)3.8	(胎)灰白2.5Y8/1 (釉)透明 (呉)明青.暗緑灰5G3/1	(外)笹竹	肥前系	口径1/16	「大明年製」銘
339	SK10	磁・碗	(高台)4.0	(胎)灰白N8(釉)透明 (呉)暗青灰5B4/1	(外)一重網目文	肥前系	高台1/4	
340	SK10	陶・碗	(口)9.8 (高)6.6 (高台)3.8	(胎)灰5Y6/1(釉)灰10 Y6/1(呉)緑灰7.5GY5/1	(外)唐草文	肥前系	口径1/6	
341	SK10	陶・碗	(口)9.2 (高)6.5 (高台)4.5	(胎)赤灰10R5/1 (釉)褐灰10YR4/1	(外)轆轤刷毛目 (内)刷毛目	肥前系	高台完存	
342	SK10	陶・碗	(高台)4.5	(胎)灰白N7 (釉)明オリーブ灰5GY7/1 (呉)緑灰10GY5/1	(外)唐草文	肥前系	高台1/2	
343	SK10	陶・碗	(高台)4.7	(胎)灰白2.5Y8/2 (釉)透明		肥前系	高台1/3	呉器手
344	SK10	磁・皿		灰白10Y8/1		肥前系	細片	
345	SK10	陶・皿	(高台)4.2	(胎)灰白10YR8/1 (釉)オリーブ黄7.5Y6/3		肥前系	高台ほぼ完存	見込み蛇の目釉剝ぎ・砂目
346	SK10	陶・擂鉢	(口)34.8	赤褐10R4/4		備前系	口径1/10	卸し目8本/2.6cm.口縁部重ね焼き痕
347	SK10	陶・擂鉢	(口)33.0	赤褐10R5/4		備前系	口径1/12	卸し目9本/2.8cm
348	SK10	磁・瓶		(外)灰白N8(内)灰白2.5 GY8/1(釉)透 明(呉)青灰10BG6/1	(外)草	肥前系	体部1/4	
359	SK11	磁・皿	(口)12.9	灰白5GY8/1		肥前系	口径1/8	白磁
362	SK16	磁・皿	(口)12.9	(外)灰白5Y7/2 (内)緑灰10GY6/1		肥前系	口縁細片	青緑釉皿
363	SK17	磁・碗		灰白10Y8/1(呉)青	(外)コンニャク印判	肥前系?	口縁細片	
364	SK17	陶・碗	(高台)4.5	にぶい黄橙10YR6/3 (釉)透明		肥前系	高台完存	呉器手.貫入
365	SK17	陶・碗	(高台)4.4	(胎)浅黄橙7.5YR8/3 (釉)透明		肥前系	高台完存	呉器手
366	SK17	磁・皿		(胎)白(釉)透明		肥前系	口縁細片	白磁
367	SK17	磁・火入れ	(口)11.0	灰白 (釉)明オリーブ灰5GY7/1		肥前系?	口径1/8	青磁
368	SK17	磁・瓶		(胎)灰白N8(釉)透明 (呉)灰～オリーブ黒	(外)草花	肥前系	細片	内面無釉
377	SK19	陶・鉢	(高台)9.8	黒褐7.5YR3/1		肥前系	高台1/4	見込み砂・胎土目.鉄釉
380	SK20	磁・碗	(口)9.0	(胎)灰白(釉)透明 (呉)青		肥前系?	口径1/8	
381	SK20	磁・碗	(口)9.4	(胎)灰白5Y8/1(釉)透明		肥前系	口径1/12	白磁

陶磁器観察表 (5)

番号	出土位置	器種	法量	色調	文様	製作地	残存度	備考
382	SK20	磁・碗	(高台)4.0	(胎)灰白N8(釉)透明 (呉)青灰5B5/1		肥前系	高台1/2	見込み蛇の目釉剝ぎ
383	SK20	陶・碗	(高台)4.4	浅黄2.5Y7/3		肥前系	高台完存	呉器手
384	SK20	磁・皿		(胎)灰白N8(釉)透明 (呉)明青	(内)唐草文	肥前系	細片	
385	SK20	陶・瓶		(釉)黒10YR2/1			体部1/8	鉄釉.内面無釉
392	SK25	陶・碗		灰白10YR8/1 (釉)にぶい黄2.5Y6/3		肥前系	体部細片	呉器手
395	SE01	磁・碗	(口)11.8	(胎)灰白N8(釉)透明 (呉)暗青灰	(外)一重網目文	肥前系	口径1/12	
396	SE01	陶・碗	(口)9.8	(胎)灰白10Y7/1 (釉)透明(呉)緑灰10GY5/1	(外)唐草文	肥前系	口径1/8	
397	SE01	磁・皿	(口)14.0	(胎)灰白N8(釉)透明 (呉)明青灰10BG7/1.緑灰10GY5/1	(内)二重格子	肥前系	口径1/12	
398	SE01	陶・皿		(胎)灰白7.5Y7/1 (釉)灰オリーブ7.5Y5/2		肥前系	口縁細片	
399	SE01	陶・火入れ	(口)11.2	(胎)黄灰2.5Y6/1 (釉)灰オリーブ7.5Y6/2		肥前系 ?	口径1/12	
400	SE01	磁・瓶	(口)3.2	(胎)灰白7.5Y8/1 (釉)透明		肥前系	口径1/2	白磁.髪油壺
401	SE01	磁・瓶		(胎)灰白5Y8/1 (釉)灰オリーブ5Y6/2		肥前系	頸部完存	
402	SE01	陶・壺	(底)5.2	灰N6		備前系	底径1/5	(底外)回転糸切り (内)鉄錆付着
408	SE01	陶・高麗犬形	(長)3.2 (高)4.2 (厚)2.0	灰オリーブ7.5Y5/3 浅黄5Y7/4 (胎)灰白5Y8/1				軟質施釉陶器.合わせ型によるバリ
410	SX01	磁・碗	(口)8.2	(胎)灰10Y6/1(釉)透明 (呉)暗青灰5B5/1	(外)唐草文	肥前系	口径1/12	
411	SX01	磁・碗		(胎)灰白N8(釉)透明 (呉)明青	(内)草花	肥前系	高台1/4	蛇の目凹形高台
412	SX01	磁・皿	(高台)5.4	(胎)灰白7.5YR8/2・5YR8/2		肥前系	底径1/12	白磁.見込み蛇の目釉剝ぎ
413	SX01	磁・皿	(口)13.6 (高)3.5 (高台)4.4	(胎)灰白N8 (釉)明緑灰5G7/1		肥前系	口径1/8	白磁.見込み蛇の目釉剝ぎ.高台砂目
414	SX01	陶・皿		(外)灰白2.5Y8/1 (内)灰白5Y8/1 (釉)暗緑灰5G4/1		肥前系	体部1/6	青緑釉皿.見込み蛇の目釉剝ぎ
415	SX01	磁・皿	(高台)8.0	(胎)灰白N8(釉)明青灰10BG7/1(呉)紺	(内)コンニャク印判	肥前系	高台1/10	(底外)「大明成化年製」銘
416	SX01	磁・皿	(高台)6.9	(胎)灰白N8 (釉)明緑灰5G7/1	蓮弁	肥前系	高台2/5	型打ち成形.蛇の目凹形高台.見込み三足付きハマ熔着痕

陶磁器観察表 (6)

番号	出土位置	器種	法量	色調	文様	製作地	残存度	備考
417	SX01	陶・擂鉢	(口)34.6	赤褐10R5/4		備前系	口径1/12	卸し目6本/1.9cm.口縁重ね焼痕
420	SX02	磁・皿		灰白10Y8/1 (呉)青灰10BG6/1		肥前系	口縁細片	
421	SX02	陶・鉢	(高台) 12.0	(胎)にぶい橙5YR6/4 (釉)黒褐5YR2/1	(外・内)轆轤刷毛目	肥前系	高台1/8	高台砂・胎土目
423	SX03石積み内埋土	磁・猪口	(口)7.0 (高)4.9 (高台)4.0	(胎)灰白(釉)透明		肥前系	口径1/2 底径完存	口錆
424	SX03石積み内埋土	磁・碗	(口)10.6 (高)5.3 (高台)4.6	(胎)灰白N8(釉)透明 (呉)明青	(外)二重網目文 (内)一重網目文・菊花	肥前系	口径1/4	
425	SX03石積み内埋土	磁・碗	(口)10.0	(胎)灰白N8(釉)透明 (呉)明青	(外)草花	肥前系 ?	口径1/5	貫入
426	SX03石積み内埋土	磁・碗	(高台)4.2	(胎)灰白(釉)透明 (呉)明青	(外)草花	肥前系	高台1/3	(底外)渦福文?
427	SX03石積み内埋土	磁・碗	(口)12.0 (高)4.7 (高台)4.6	(胎)灰白N8(釉)透明 (呉)暗青灰5B4/1	(外)菊花・草	肥前系	1/5	
428	SX03石積み内埋土	磁・碗	(口)12.0 (高)8.7 (高台)7.0	明緑灰10GY8/1 (胎)灰白N8(釉)透明 (呉)暗青灰5B4/1	(外)草	肥前系	1/4	
429	SX03石積み内埋土	陶・碗	(高台)5.8	(胎)にぶい赤褐2.5YR5/4 (釉)オーリブ灰5GY6/3 (呉)緑灰7.5GY5/1	(外)草花?	肥前系	高台1/4	貫入
430	SX03石積み内埋土	陶・碗	(高台)4.5	浅黄2.5Y7/4(胎)灰白2.5Y8/2(釉)透明		肥前系	高台完存	呉器手.高台砂目
431	SX03石積み内埋土	磁・皿	(口)12.1 (高)3.5 (高台)3.4	(胎)灰白5GY8/1 (釉)透明		肥前系	高台完存	白磁.見込み蛇の目釉剝ぎ.高台砂目
432	SX03石積み内埋土	磁・皿	(高台)3.6	(胎)灰白N8 (釉)明緑灰7.5GY8/1		肥前系	高台完存	白磁.見込み蛇の目釉剝ぎ.見込み.高台砂目
433	SX03石積み内埋土	陶・皿	(底)4.2	(胎)灰白5Y8/1 (釉)明オリーブ灰2.5GY7/1(外)灰褐5YR5/2		肥前系	底部完存	見込み.高台砂目
434	SX03石積み内埋土	磁・皿	(口)12.3 (高)3.5 (高台)6.4	(胎)灰7.5Y6/1 (釉)透明 (呉)青灰5B6/1	(外)笹(内)五弁花コンニャク印判	肥前系	高台1/3	
435	SX03石積み内埋土	磁・皿	(高台) 14.0	(胎)灰白N8(釉)透明 (呉)暗青灰5B4/1	(外)唐草文 (内)草花	肥前系	高台1/4	
436	SX03石積み内埋土	陶・壺	(口)5.9	(外・内)にぶい橙7.5YR6/4(胎)灰白N7			口径1/4	
449	SX03石積み裏込め土	磁・皿	(高台)3.8	(胎)灰白10Y8/1(釉)透明 (呉)オリーブ灰10Y5/2		肥前系	高台完存	見込み蛇の目釉剝ぎ

陶磁器観察表 (7)

番号	出土位置	器種	法量	色調	文様	製作地	残存度	備考
450	SX03石積み裏込め土	磁・皿	(高台)3.9	明緑灰10GY8/1 (呉)青灰10BG6/1		肥前系	高台完存	見込み蛇の目釉剝ぎ
451	SX03石積み裏込め土	磁・皿	(高台)3.2	(胎)灰白2.5Y8/2 (釉)灰白10Y8/1		肥前系	高台ほぼ完存	見込み蛇の目釉剝ぎ.高台砂目.白磁
452	SX03石積み裏込め土	磁・皿	(高台)4.6	明緑灰10GY8/1 (呉)青灰10BG6/1		肥前系	高台完存	見込み蛇の目釉剝ぎ.見込み.高台砂目
453	SX03石積み裏込め土	磁・皿	(高台)4.2	灰白5GY8/1 (呉)暗青灰10BG4/1		肥前系	高台完存	見込み蛇の目釉剝ぎ
454	SX03石積み裏込め土	磁・皿	(高台)4.5	明緑灰7.5GY8/1 (呉)明青灰10BG7/1		肥前系	高台完存	見込み蛇の目釉剝ぎ→鉄釉.見込み砂目
455	SX03石積み裏込め土	磁・皿	(高台)7.4	(胎)灰 白2.5Y8/2(釉)灰白2.5Y8/1(呉)明青	(外)唐草文 (内)草花？	肥前系	高台1/12	(底 外)銘(文 字不明)あり
456	SX03石積み裏込め土	磁・碗	(高台)4.2	(胎)灰白N8(釉)透明 (呉)暗青灰5B4/1	(外)二重網目文 (内)一重網目文・菊花(底外)渦福文	肥前系	高台完存	
457	SX03石積み裏込め土	磁・碗	(口)10.7	(胎)灰 白10Y8/2(釉)透明(呉)暗青灰10BG4/1	(外)笹	肥前系	口径1/8	貫入
458	SX03石積み裏込め土	磁・碗	(口)10.0 (高)5.7 (高台)4.1	明緑灰7.5GY8/1(呉)青	(外)草花	肥前系	口径1/3	
459	SX03石積み裏込め土	磁・碗	(高台)4.3	(胎)灰白5Y8(釉)透明 (呉)明青	(外)草花？	肥前系？	底径3/4	
460	SX03石積み裏込め土	磁・碗		(胎)灰白N8(釉)透明 (呉)明青	(外)草花	肥前系	底径1/6	
461	SX03石積み裏込め土	陶・碗	(口)10.2	(胎)灰N5 (釉)オリーブ灰2.5GY6/1 (呉)暗オリーブ灰2.5GY4/1	(外)鳥？		口径1/3	貫入
462	SX03石積み裏込め土	陶・碗	(高台)4.5	(胎)灰白N7(釉)明青灰5B7(呉)青灰5B5/1	(外)唐草文	肥前系	高台3/5	高台砂目
463	SX03石積み裏込め土	陶・碗	(高台)4.3	(外・内)灰黄褐10YR6/2・灰白2.6Y8/2	(外・内)轆轤刷毛目	肥前系	高台完存	
464	SX03石積み裏込め土	陶・碗	(口)9.8	浅黄2.5Y7/4		肥前系	口径1/12	呉器手
465	SX03石積み裏込め土	陶・碗	(高台)3.8	(胎)淡黄2.5Y8/4 (釉)透明		肥前系	高台3/4	呉器手
466	SX03石積み裏込め土	陶・碗	(高台)4.4	(胎)灰白2.5Y8/2 (釉)透明		肥前系	高台完存	呉器手
467	SX03石積み裏込め土	陶・碗	(高台)5.0	(胎)灰白2.5Y8/2 (釉)透明		肥前系	高台完存	呉器手.高台砂目
468	SX03石積み裏込め土	陶・鉢	(口)30.5	(胎)赤10R5/6 (釉)灰黄褐10YR4/2	(内)轆轤刷毛目	肥前系	口径1/12	

陶磁器観察表 (8)

番号	出土位置	器種	法量	色調	文様	製作地	残存度	備考
469	SX03石積み裏込め土	陶・鉢	(高台)9.0	灰 白5Y8/1(胎)灰5Y6/1(釉)褐10YR4/4	(内)轆轤刷毛目	肥前系	高台1/4	鉄釉.白泥
470	SX03石積み裏込め土	陶・鉢	(高台)9.6	(胎)にぶい赤褐2.5YR5/4(外)暗 褐7.5Y8/3(内)褐灰・灰白	(内)轆轤刷毛目	肥前系	高台1/5	鉄釉.白泥
471	SX03石積み裏込め土	陶・鉢	(口)11.4 (高)8.7 (底)10.0	(胎)にぶい赤褐2.5YR5/3(釉)灰赤2.5YR4/2			体部1/4	鉄釉
472	SX03石積み裏込め土	陶・擂鉢	(口)24.4	橙2.5YR7/6		備前系	口径1/16	卸し目10本/3.1cm 口縁重ね焼き痕
473	SX03石積み裏込め土	陶・擂鉢	(口)32.5	橙2.5YR6/6 灰赤2.5YR4/2		備前系	口径1/12	卸し目14本/2.9cm 口縁重ね焼き痕
474	SX03石積み裏込め土	陶・擂鉢	(口)30.0	(外)にぶい赤褐5YR4/3 (内)にぶい赤黒2.5YR5/4		備前系	口縁細片	
475	SX03石積み裏込め土	陶・擂鉢	(口)30.1 (高)12.1 (底)14.0	(胎)橙5YR6/6 (口縁)赤黒2.5YR2/1		備前系	底径1/8	卸し目10本/2.7cm 口縁重ね焼き痕
476	SX03石積み裏込め土	陶・擂鉢	(底)9.8	灰N6		備前系	底径1/2	卸し目7本/2.6cm
477	SX03石積み裏込め土	陶・擂鉢	(底)13.2	灰N6		備前系	底径1/4	卸し目9本/2.5cm
503	SD03	磁・猪口	(高台)3.6	灰白10Y8/1		肥前系	高台1/4	白磁.高台砂目
504	SD03	陶・碗	(高台)4.5	(胎)青灰5B5/1(釉)透明	(外)唐草文？	肥前系	高台1/2	
505	SD03	陶・碗	(高台)4.2	淡黄2.5Y8/3		肥前系	高台1/2	呉器手
506	SD03	磁・皿	(高台)4.2	(胎)灰白7.5YR8/2 (釉)灰白5GY8/1 (呉)暗緑灰10GY4/1		肥前系	高台3/4	見込み蛇の目釉剝ぎ.見込み・高台砂目
507	SD03	陶・皿	(高台)4.8	(胎)灰白5Y7/1 (釉)オリーブ灰10Y6/2	(内)草？	肥前系	高台1/6	見込み蛇の目釉剝ぎ.高台砂目
508	SD03	陶・鉢	(底)11.4	赤褐10R4/4		備前系？	底径1/3	火だすき
513	SD45	磁・猪口	(高台)4.0	(胎)灰白N8(釉)透明 (呉)明青	(外)交又線文	肥前系	高台1/3	
514	SD45	磁・碗	(高台)3.4	(胎)灰白5Y8/1(釉)透明 (呉)青灰5B6	(外)二重網目文 (内)一重網目文・菊花	肥前系	高台1/6	
515	SD45	磁・碗	(高台)6.2	(胎)灰白N2(釉)透明 (呉)明青		肥前系	高台1/3	広東形
516	SD45	陶・碗	(口)10.6 (高)6.4 (高台)4.4	(胎)灰N6 (釉)オリーブ灰5GY5/1 (呉)暗オリーブ灰5GY4/1	(外)唐草文	肥前系	口径1/16 高台1/2	高台砂目
517	SD45	陶・碗	(高台)3.9	(胎)灰白N7(釉)オリーブ灰5GY6/1(呉)青灰		肥前系	高台1/4	貫入
518	SD45	陶・碗	(高台)5.4	灰白5Y8/2 (呉)緑灰10GY6/1	(内)花	瀬戸・美濃系？	高台1/2	

陶磁器観察表 (9)

番号	出土位置	器種	法量	色調	文様	製作地	残存度	備考
519	SD45	陶・碗	(高台)4.0	浅黄橙10YR8/3(釉)透明		肥前系	高台1/2	呉器手
520	SD45	磁・皿	(口)10.6	(胎)灰白N8(釉)透明 (呉)暗青	(外)唐草文 (内)松・草	肥前系	口径1/5	
521	SD45	磁・皿	(高台)9.0	(胎)灰白N8(釉)透明 (呉)青	(内)唐草文・菊花？	肥前系	高台1/5	蛇の目凹形高台
522	SD45	磁・皿	(高台)8.0	(胎)灰白5Y8/1(釉)透明 (呉)青灰10BG6/1	(内)五弁花コンニャク印判	肥前系	高台1/4	見込み蛇の目釉剝ぎ
523	SD45	陶・段重	(底)6.9	(胎)灰白2.5Y8/2 (釉)灰白10Y7/2		瀬戸・美濃系？	底径1/6	
524	SD45	磁・瓶	(高台)4.6	(胎)灰白5Y8/1 (釉)明緑灰10GY8/1 (呉)青灰10BG5/1	(外)剣先崩し	肥前系	高台1/2	
525	SD45	磁・瓶	(高台)6.0	(胎)灰白N8(釉)透明 (呉)灰N4	(外)松・鶴		高台完存	型紙刷り(底外)「源陶園製」銘
526	SD45	陶・鉢	(底)13.2	明赤褐5YR5/6 黒褐7.5YR3/1		備前系？	底径1/6	
527	SD45	陶・擂鉢		橙2.5YR6/6		備前系	口縁細片	(外)ヘラ削り
528	SD45	陶・擂鉢	(口)30.8	にぶい褐7.5YR5/3		備前系	口縁細片	
529	SD45	陶・鉢	(底)13.0	(外)暗赤褐10R2/2 (胎)赤褐10R4/3		備前系？	底径1/4	(底外)窯印
573	Ⅰ区北半部包含層	磁・猪口	(口)6.5 (高)2.5 (高台)3.0	(胎)灰白N8(釉)透明 (呉)暗青灰5B4/1	(外)笹	肥前系	1/2	
574	Ⅰ区北半部包含層	磁・猪口	(口)6.7 (高)2.7 (高台)3.1	(胎)灰白N8 (釉)明緑灰7.5GY8/1 (呉)青灰10BG6/1	(外)折松葉	肥前系	口径2/3 底部完存	
575	Ⅰ区北半部包含層	磁・猪口	(口)7.0 (高)5.1 (高台)4.4	(胎)灰白N8 (釉)明緑灰7.5GY8/1 (呉)緑灰7.5GY6/1	(外)雨下り文	肥前系？	口径1/4	
576	Ⅰ区北半部包含層	磁・碗	(口)10.8	(胎)灰白N8(釉)灰白2.5GY8/1(呉)藍	(外)草花・菊花	肥前系	口径1/5	
577	Ⅰ区北半部包含層	磁・碗	(高台)4.4	(胎)灰白N8(釉)明緑灰10GY8/1(呉)青灰5B6/1	(外)草花？	肥前系	高台1/5	貫入
578	Ⅰ区北半部包含層	磁・碗	(口)11.4 (高)6.1 (高台)4.2	(胎)灰白N8(釉)透明 (呉)青灰	(外)草花	肥前系	高台ほぼ完存	(底外)「大明年製」崩し銘
579	Ⅰ区北半部包含層	磁・碗	(口)11.9	灰白5GY8/1(呉)青灰	(外)？	肥前系	口縁細片	
580	Ⅰ区北半部包含層	磁・碗	(口)13.3	(胎)灰白5GY8/1 (呉)明青灰5B7/1	(外)コンニャク印判	肥前系	口縁細片	
581	Ⅰ区北半部包含層	磁・碗	(高台)6.5	(胎)灰白5Y8/1(釉)明緑灰7.5GY8/1(呉)青	(外)草	肥前系	高台2/3	(底外)「大明年製」銘
582	Ⅰ区北半部包含層	磁・碗	(口)13.8	(胎)灰白N8(釉)透明 (呉)青	(内)草花	肥前系	口径1/8	

陶磁器観察表 (10)

番号	出土位置	器種	法量	色調	文様	製作地	残存度	備考
583	Ⅰ区北半部包含層	磁・碗	(口)9.6 (高)4.9 (高台)5.0	(胎)灰10Y6/1(釉)透明 (呉)緑灰10GY5/1	(外)唐草文	肥前系	口径1/6	
584	Ⅰ区北半部包含層	磁・碗	(高台)7.6	(胎)灰白N8(釉)透明 (呉)青灰10BG5/1		肥前系	高台1/3	
585	Ⅰ区北半部包含層	陶・碗	(口)10.0	(胎)灰白N8 (釉)明オリーブ灰5GY2/1 (呉)暗青灰5B4/1	(外)唐草文	肥前系	口径1/8	貫入
586	Ⅰ区北半部包含層	陶・碗	(口)10.2 (高)6.6 (高台)4.8	灰白10Y7/1 (呉)オリーブ灰2.5GY6/1青灰10BG5/1	(外)唐草文	肥前系	高台1/3	
587	Ⅰ区北半部包含層	陶・碗	(口)10.8	(胎)灰白2.5Y7/1 (釉)オリーブ灰2.5GY6/1 (呉)暗オリーブ灰5GY4/1	(外)唐草文	肥前系	口径1/4	貫入
588	Ⅰ区北半部包含層	陶・碗	(高台)4.9	(胎)灰白N7(釉)明オリーブ灰5GY7/1(呉)緑灰	(外)唐草文？	肥前系	高台1/3	貫入
589	Ⅰ区北半部包含層	陶・碗	(高台)4.8	(胎)灰白N8(釉)オリーブ灰(呉)オリーブ灰5GY5/1		肥前系	高台1/2	貫入
590	Ⅰ区北半部包含層	陶・碗	(高台)5.0	(胎)橙7.5YR7/6 (釉)灰白2.5Y8/2 にぶい褐7.5YR	(外・内)轆轤刷毛目	肥前系	高台2/3	白泥・鉄釉
591	Ⅰ区北半部包含層	陶・碗	(高台)4.8	(胎)褐7.5YR4/3 (釉)灰白2.5Y8/1		肥前系	高台1/2	
592	Ⅰ区北半部包含層	陶・碗	(高台)4.1	(胎)灰白2.5Y8/2 (釉)透明		肥前系	高台ほぼ完存？	高台砂目.呉器手
593	Ⅰ区北半部包含層	陶・碗	(高台)4.3	(胎)灰白10YR8/2 (釉)にぶい黄橙10YR5/4		肥前系	高台完存	貫入.呉器手
594	Ⅰ区北半部包含層	陶・碗	(高台)4.2	(胎)灰白2.5Y8/2 (釉)にぶい黄2.5Y6/4		肥前系	高台1/4	高台砂目.呉器手
595	Ⅰ区北半部包含層	陶・碗	(高台)4.7	(胎)灰白10YR8/2 (釉)浅黄2.5Y7/3		肥前系	高台完存	呉器手
596	Ⅰ区北半部包含層	陶・碗	(高台)4.7	(胎)灰白2.5Y8/1 (釉)浅黄2.5Y7/3		肥前系	高台ほぼ完存	高台砂目.貫入.呉器手
597	Ⅰ区北半部包含層	陶・碗	(口)12.0	(胎)灰白5Y7/1(釉外)にぶい黄褐10YR5/4 (釉内)浅黄5Y7/3		瀬戸・美濃系	口径1/8	腰錆.鉄・灰釉
598	Ⅰ区北半部包含層	磁・皿	(口)11.9 (高)4.0 (高台)4.0	(胎)灰白N8 (釉)灰白5GY8/1		肥前系	高台完存	見込み蛇の目釉剝ぎ・砂目.白磁
599	Ⅰ区北半部包含層	磁・皿	(高台)4.0	(胎)灰白N8(釉)透明		肥前系	高台3/4	見込み蛇の目釉剝ぎ.見込み・高台砂目.白磁
600	Ⅰ区北半部包含層	磁・皿	(高台)4.2	(胎)灰白5Y7/1(釉)透明		肥前系	高台完存	見込み蛇の目釉剝ぎ.見込み・高台砂目.白磁

陶磁器観察表 (11)

番号	出土位置	器種	法量	色調	文様	製作地	残存度	備考
601	Ⅰ区北半部包含層	磁・皿	(高台)4.0	(胎)灰白N8(釉)透明		肥前系	高台完存	見込み蛇の目釉剝ぎ.見込み・高台砂目.白磁
602	Ⅰ区北半部包含層	磁・皿	(高台)4.6	(胎)灰白5Y8/1 (釉)明緑灰10GY8/1		肥前系	高台完存	見込み蛇の目釉剝ぎ.見込み・高台砂目.白磁
603	Ⅰ区北半部包含層	磁・皿	(口)11.5	(胎)灰白5Y8/1(釉)透明 (呉)明青	(内)草？	肥前系	口径1/12	
604	Ⅰ区北半部包含層	磁・皿	(口)12.9	(胎)灰白N8(釉)透明 (呉)藍	(内)草？	肥前系	口径1/8	見込み蛇の目釉剝ぎ
605	Ⅰ区北半部包含層	磁・皿	(口)11.6 (高)3.2 (高台)4.0	(胎)灰白N8(釉)透明 (呉)暗緑灰5G4/1		肥前系	1/2	見込み蛇の目釉剝ぎ・砂目
606	Ⅰ区北半部包含層	磁・皿	(高台)3.8	(胎)灰白N8 (釉)灰白2.5GY8/1 (呉)オリーブ灰2.5GY5/1		肥前系	高台1/2	見込み蛇の目釉剝ぎ・砂目
607	Ⅰ区北半部包含層	磁・皿	(高台)3.9	(胎)灰白5Y7/1(釉)透明 (呉)暗オリーブ5Y4/3	(内)草？	肥前系	高台完存	見込み蛇の目釉剝ぎ.見込み・高台砂目
608	Ⅰ区北半部包含層	磁・皿	(口)12.4 (高)3.9 (高台)4.4	(胎)灰白N8(釉)透明 (呉)青灰5BG6/1	(内)格子	肥前系	口径1/2 高台1/2	見込み蛇の目釉剝ぎ
609	Ⅰ区北半部包含層	磁・皿	(口)13.2 (高)3.7 (高台)4.8	(胎)灰白N8 (釉)明緑灰10GY8/1 (呉)緑灰10GY6/1	(内)格子	肥前系	口径1/12 高台完存	見込み蛇の目釉剝ぎ
610	Ⅰ区北半部包含層	磁・皿	(口)13.6 (高)3.8 (高台)7.8	(胎)灰白N8 (釉)灰白2.5GY8/1 (呉)明青	(外)唐草文 (内)草花？	肥前系	口縁細片 高台1/4	口錆
611	Ⅰ区北半部包含層	磁・皿	(高台)8.0	(胎)灰白2.5Y8/1 (釉)灰白10Y8/1(呉)藍	(内)草花？	肥前系	高台1/6	
612	Ⅰ区北半部包含層	磁・皿		(胎)灰白2.5Y8/1(釉)透明(呉)青灰5B5/1	(内)草花？	肥前系	高台細片	
613	Ⅰ区北半部包含層	磁・皿	(口)12.7	(胎)灰白N8(釉)明緑灰10GY8/1(呉)藍		肥前系	口径1/8	
614	Ⅰ区北半部包含層	陶・皿	(口)12.1 (高)3.35 (高台)4.75	(胎)浅黄橙10YR8/3 (釉)緑灰6/1		肥前系	高台1/3	見込み蛇の目釉剝ぎ.青緑釉皿
615	Ⅰ区北半部包含層	陶・皿	(口)16.2	(胎)灰白N8 (釉外)灰オリーブ5Y6/2 (釉内)灰オリーブ7.5Y5/3		肥前系	口縁細片	青緑釉皿.折縁形
616	Ⅰ区北半部包含層	陶・皿	(高台)3.6	(胎)灰白N8 (釉)暗オリーブ2.5GY4/1		肥前系	高台1/4	見込み蛇の目釉剝ぎ・砂目.青緑釉皿
617	Ⅰ区北半部包含層	磁・皿	(高台)5.6	(胎)灰白10YR8/1 (釉)暗オリーブ7.5Y4/3		肥前系	高台1/4	見込み蛇の目釉剝ぎ・砂目.青緑釉皿

陶磁器観察表 (12)

番号	出土位置	器種	法量	色調	文様	製作地	残存度	備考
618	Ⅰ区北半部包含層	陶・鉢	(胴体腰折)18.0	(胎)灰褐5YR4/2 (釉)オリーブ黒7.5Y3/2 灰白10Y8/1	(外)轆轤刺毛目	肥前系?	胴体部1/8	鉄釉・白泥.腰折形
619	Ⅰ区北半部包含層	陶・鉢	(高台)9.0	(胎)赤灰5R6/1 (釉)灰オリーブ7.5Y5/2 灰黄褐10YR4/2	(内)轆轤刷毛目	肥前系	高台1/4	鉄釉・白泥.見込み砂目・穿孔(植木鉢転用か)
620	Ⅰ区北半部包含層	陶・鉢	(口)22.0	(胎)赤灰2.5YR5/1 (釉)赤黒2.5YR3/1			口縁細片	鉄釉.片口
621	Ⅰ区北半部包含層	陶・擂鉢	(口)32.8	(外)黒褐5YR3/1・橙5YR6/6(内)明赤褐5YR3/2		備前系	口径1/4	卸し目9本/1.9cm.口縁重ね焼痕
622	Ⅰ区北半部包含層	陶・擂鉢	(口)38.0	(胎)橙2.5YR6/6 (外)暗赤灰2.5YR3/1		備前系	口径1/20	卸し目10本/2.1cm
623	Ⅰ区北半部包含層	陶・擂鉢	(口)35.0	(外)灰褐5YR4/2 明赤褐5YR5/6 (内)明赤褐5YR5/6		備前系	口径1/12	卸し目7本/2.6cm (外)ヘラ削り
624	Ⅰ区北半部包含層	陶・擂鉢		(外)灰N7(内)灰白N7		備前系	口縁細片	
625	Ⅰ区北半部包含層	陶・擂鉢		明赤褐2.5YR5/6		備前系	口縁細片	口縁重ね焼痕
626	Ⅰ区北半部包含層	陶・擂鉢		にぶい赤褐2.5YR5/4		備前系	口縁細片	口縁重ね焼痕
627	Ⅰ区北半部包含層	陶・擂鉢		(外)灰N6 (内)灰褐5YR5/2		備前系	口縁細片	卸し目12本/3.1cm
628	Ⅰ区北半部包含層	陶・擂鉢		(胎)にぶい橙5YR6/4 灰褐5YR4/2		備前系	底部(基部)細片	卸し目8本/2.7cm
629	Ⅰ区北半部包含層	陶・擂鉢	(底)16.6	にぶい橙2.5YR5/4		備前系	底部1/6	卸し目10本/2.3cm (底外)ヘラ削り
630	Ⅰ区北半部包含層	陶・擂鉢	(高台)15.4	(胎)にぶい橙2.5YR 灰赤2.5YR4/2		備前系	高台1/12	卸し目9本/2.9cm ?貼付高台.使用痕
631	Ⅰ区北半部包含層	陶・擂鉢	(高台)12.0	灰褐5YR5/2		備前系	高台1/8	卸し目11本/3.0cm貼付高台
632	Ⅰ区北半部包含層	陶・擂鉢	(高台)10.8	(外)灰赤2.5YR5/2 (内)にぶい赤褐2.5YR4/3		肥前系	高台1/2	卸し目6本/1.9cm見込み砂・胎土目
633	Ⅰ区北半部包含層	磁・瓶		(胎)灰白N8(釉)明オリーブ灰2.5GY7/1(呉)赤褐2.5YR4/8	(外)唐草文	肥前系	体部細片	
634	Ⅰ区北半部包含層	磁・瓶	(高台)5.0	(外)灰白5GY8/1 (内)にぶい橙5YR7/4		肥前系?	高台3/5	
635	Ⅰ区北半部包含層	陶・灯明皿	(口)9.8	灰7.5Y6/1		備前系	口径1/4	
636	Ⅰ区北半部包含層	陶・灯明皿	(口)10.6	にぶい赤褐2.5YR4/4		備前系	口径1/8	
728	Ⅲ区包含層	磁・猪口	(口)4.7 (高)1.8 (高台)1.8	灰白N8(釉)透明		肥前系	1/4	型打ち.白磁

陶磁器観察表 (13)

番号	出土位置	器種	法量	色調	文様	製作地	残存度	備考
729	III区包含層	磁・碗		(胎)灰白N8(釉)透明 (呉)青灰5B6/1		肥前系 ?	高台2/3	(外・内)崩し銘
730	III区包含層	磁・碗		(胎)灰白N8 (釉)灰白7.5Y7/1		肥前系 ?	口縁細片	
731	III区包含層	陶・擂鉢	(口)24.5	暗赤褐2.5YR3/2		備前系	口縁細片	(外)回転ヘラ削り
732	III区包含層	陶・甕	(口)26.0	灰5Y6/1		備前系 ?	口径1/7	
745	IV区包含層	磁・碗	(口)16.6	(胎)灰白N8(釉)透明			口縁細片	白磁碗IV類
746	IV区包含層	磁・碗		(胎)灰白N8 (釉)オリーブ灰5GY6/1 (呉)青灰5B5/1	(底外)渦福文 (内)五弁花	肥前系 ?	高台1/3	
747	IV区包含層	磁・碗		(胎)灰白N8(釉)透明 (呉)緑灰10GY6/1	(外)格子	肥前系 ?	口縁細片	
748	IV区包含層	陶・碗	(高台)6.8	(胎)灰白N7(釉)透明 (呉)藍?	(外)草	肥前系	高台1/4	広車形
749	IV区包含層	磁・碗		(胎)灰白7.5Y8/1 (釉)灰白7.5Y7/1 (呉)暗緑灰7.5YG4/1	(外)梅文	肥前系	高台細片	見込み蛇の目釉剝ぎ
750	IV区包含層	陶・碗	(高台)5.5	(胎)灰白5Y8/1(釉)透明 (呉)薄青灰		瀬戸・ 美濃系	高台1/2	
751	IV区包含層	陶・碗	(高台)4.7	(胎)灰白5Y8/1 (釉)浅黄2.5Y7/3		肥前系	高台1/5	高台砂目.呉器手
752	IV区包含層	陶・碗	(高台)6.4	(胎)にぶい黄橙10YR6/3(釉)灰白5Y8/2			高台1/2	
753	IV区包含層	陶・皿	(高台)3.8	灰白2.5Y8/2			高台1/3	削り出し高台
754	IV区包含層	磁・皿	(高台)4.2	(胎)灰白N8 (釉)明青灰5B7/1		肥前系	高台1/2	見込み蛇の目釉剝ぎ.見込み・高台砂目.白磁
755	IV区包含層	陶・鉢	(口)15.0	(胎)灰白N7 (釉)オリーブ黄7.5Y6/3			口径1/12	貫入
756	IV区包含層	陶・鉢	(口)19.8	(胎)灰白7.5Y8/1 (釉)灰オリーブ7.5Y6/2			口縁細片	
757	IV区包含層	磁・瓶	(頸)1.0	(胎)灰白10Y8/1 (釉)透明		肥前系	頸部ほぼ完存	
758	IV区包含層	磁・瓶		(胎)灰白N8 (釉)明緑灰7.5GY7/1 (呉)青灰5B6/1	(外)笹	肥前系	体部細片	
771	V区包含層	磁・蓋	(口)9.5	(胎)灰白N8(釉)透明 (呉)明青	(内)四方襷	肥前系	口径1/8	
772	V区包含層	磁・蓋		(外・内)灰白2.5Y8/2 (釉)灰白2.5GY8/1	(外)花		口縁細片	
773	V区包含層	陶・蓋	(鍔)4.6 (高)2.0 (底)1.8	(胎)明褐灰5YR7/2(釉)浅黄5Y7/3			完存	

陶磁器観察表 (14)

番号	出土位置	器種	法量	色調	文様	製作地	残存度	備考
774	V区包含層	磁・碗	(口)6.5	(胎)灰 白 N8(釉)灰 白5GY8/1(呉)青灰5B6/1	(外)菊花散し	肥前系	口径1/6	
775	V区包含層	磁・碗	(高台)3.2	(胎)灰白8N(釉)透明 (呉)暗青灰5B4/1		肥前系	高台完存	高台砂目
776	V区包含層	磁・碗	(口)10.0	(胎)灰白10Y8/1 (呉)青灰	(外)山水	肥前系	口縁細片	
777	V区包含層	磁・碗	(口)10.0	(胎)灰白N8(釉)透明 (呉)暗青灰5B4/1	(外)？	肥前系？	口径1/5	
778	V区包含層	磁・碗	(口)9.0	(胎)灰 白 N7(釉)明 オリーブ 灰2.5GY2/1(呉)オリーブ灰2.5GY6/1	(外)唐草文	肥前系	口径1/6	
779	V区包含層	磁・碗	(口)10.6	(胎)灰白N7(釉)透明 (呉)暗オリーブ灰5GY4/1	(外)草	肥前系	口径1/10	
780	V区包含層	磁・碗	(口)10.6	(胎)灰白N8(釉)灰白5GY8/1(呉)藍		肥前系(砥部？)	口径1/8	
781	V区包含層	磁・碗	(高台)3.8	(胎)灰白N8(釉)灰白2.5GY8/1(呉)明青	(内)舟？	肥前系？	高台完存	
782	V区包含層	磁・碗	(高台)4.6	(胎)灰白N8(釉)透明 (呉)暗青灰5B4/1	(外)草・笹 (内)五弁花コンニャク印判	肥前系	高台1/2	
783	V区包含層	磁・碗	(高台)3.8	(胎)灰N8(釉)灰白5GY8/1(呉)うすい青		肥前系	高台完存	
784	V区包含層	磁・碗	(高台)4.0	(胎)灰白N7 (釉)灰白10Y7/1		肥前系	高台1/2	
785	V区包含層	陶・碗	(口)11.0	(胎)灰 白7.5Y7/1(釉)明オリーブ 灰2.5GY7/1(呉)緑灰10G6/1	(外)唐草文	肥前系	口径1/10	
786	V区包含層	陶・碗	(口)8.8	(胎)灰白10Y7/1 (釉)オリーブ褐2.5Y4/6		瀬戸・美濃系	口径1/10	腰錆碗
787	V区包含層	陶・碗	(口)12.0	(胎)灰白7.5Y7/1 (釉)明オリーブ灰2.5GY7/1		瀬戸・美濃系	口径1/12	腰錆碗
788	V区包含層	陶・碗	(高台)4.0	(胎)灰白5Y8/1(釉外)黒7.5YR2/1(釉内)灰 白2.5GY8/1		瀬戸・美濃系	高台4/5	
789	V区包含層	陶・碗	(高台)4.0	灰白5Y8/1		瀬戸・美濃系	高台1/2	
790	V区包含層	磁・皿	(底)4.0	(胎)灰黄2.5Y7/2 (釉)灰白10Y7/1			底部1/6	青磁
791	V区包含層	磁・皿	(高台)4.0	(胎)灰白N8 (釉)明緑灰10GY8/1		肥前系	高台1/3	見込み蛇の目釉剝ぎ・砂目
792	V区包含層	磁・碗	(高台)4.3	(胎)灰白N8(釉)透明 (呉)青灰10BG6/1		肥前系	高台1/2	見込み蛇の目釉剝ぎ・高台砂目

陶磁器観察表 (15)

番号	出土位置	器種	法量	色調	文様	製作地	残存度	備考
793	V区包含層	陶・皿	(高台)11.1	(胎)灰白2.5Y8/1 (釉)オリーブ黄5Y6/4	(内)草花？	瀬戸・美濃系？	高台1/8	
794	V区包含層	陶・皿	(口)30.0	(胎)灰白2.5Y8/1(釉)透明(呉)にぶい黄褐10YR 4/3	(内)馬の目	瀬戸・美濃系	口縁細片	
795	V区包含層	磁・瓶	(高台)3.6	(胎)灰白N7(釉)透明		肥前系	高台1/3	青磁
796	V区包含層	陶・擂鉢		橙5YR7/6		備前系	口縁細片	
797	V区包含層	陶・灯明皿	(口)7.5	赤褐10R4/3		備前系	口径1/8	
798	V区包含層	陶・灯明皿	(口)10.0	赤10R5/6		備前系	口径1/8	口縁煤付着

陶磁器観察表 (16)

番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法
147	SK06	平瓦	(長)26.7(幅)24.4 (厚)1.6	精良	瓦.良好	暗灰N3	凸面コビキ 四隅打ち欠き
165	SK08	丸瓦	(長)11.2(厚)2.0	1mm以下の砂粒	瓦.軟	灰白5Y7/1	凸面ナデ.凹面布目
166	SK08	平瓦	(長)12.4(厚)1.5	1mm以下の砂粒を少量	瓦.軟	(外)灰N6 (胎)灰白N8	
290	SK09	軒丸瓦	(径)9.6(厚)1.8	2mm以下の砂粒	瓦.良好	灰N4	
291	SK09	軒丸瓦	(長)4.8(径)12.0	2mm以下の砂粒	瓦.軟	(外)灰白2.5Y8/1 (内)灰N6	
292	SK09	軒丸瓦		2mm以下の砂粒	瓦.軟	黄灰2.5Y6/1	
293	SK09	軒丸瓦	(径)12.2(厚)1.9	微細砂粒	瓦.良好	(外)黒2.5Y2/1 (胎)灰白5Y8/1	
294	SK09	軒丸瓦	(径)14.0(厚)1.8	1mm以下の砂粒を少量	瓦.軟	灰白2.5Y7/1	
295	SK09	軒平瓦	(長)5.0(厚)3.3	2mm以下の砂粒	瓦.良好	灰N4	
296	SK09	丸瓦	(長)26.0(筒長)21.5 (玉長)4.5(筒径)12.4 (玉径)10.0(厚)1.5	精良	土.良好	灰白2.5Y7/1	凸面ナデ 凹面布目→削り 釘穴1
297	SK09	丸瓦	(長)12.5(径)12.6 (厚)1.8	3mm以下の砂粒	瓦.良好	(外)黒2.5Y2/1 (胎)灰白2.5Y8/2	凸面ナデ 凹面布目→削り
298	SK09	丸瓦	(長)12.8(径)12.0 (厚)1.6	2mm以下の砂粒	瓦.やや軟	灰5Y4/1	凸面ナデ 凹面布目→削り
299	SK09	丸瓦	(長)12.2(厚)1.7	0.5mm以下の砂粒	瓦.良好	暗灰N3	凸面ナデ 凹面布目→削り
300	SK09	丸瓦	(長)11.3(厚)1.3	1mm以下の砂粒	瓦.良好	暗灰N3	凸面ナデ 凹面布目→削り
301	SK09	丸瓦	(長)10.0(径)12.2 (厚)1.5	2mm以下の砂粒	瓦.軟	灰白5Y7/1	凸面ナデ 凹面布目→削り
302	SK09	丸瓦	(長)9.5(厚)1.5	2mm以下の砂粒を少量	瓦.軟	灰白N7	凸面ナデ 凹面布目→削り
303	SK09	丸瓦	(長)14.5(径)11.8 (厚)1.5	1mm以下の砂粒	瓦.良好	灰N4	凸面ナデ 凹面布目→削り
304	SK09	丸瓦	(長)10.6(厚)1.6	精良	瓦.良好	(外)灰N4(内)灰白N8	凸面ナデ 凹面布目→削り
305	SK09	丸瓦	(長)8.4(厚)1.6	1mm以下の砂粒	土.良好	(外)浅黄橙10YR8/3 (内)灰白10YR8/2	凸面ナデ 凹面布目→削り
306	SK09	丸瓦	(長)14.0(径)12.6 (厚)1.5	2mm以下の砂粒	瓦.良好	(外)黒5Y2/1 (胎)灰白5Y8/1	凸面ナデ 凹面布目→削り
307	SK09	丸瓦	(長)9.8(厚)1.6	3mm以下の砂粒	瓦.良好	灰N4	凸面ナデ.凹面布目
308	SK09	丸瓦	(長)12.3(玉長)3.8 (筒径)12.2(玉径)9.0 (厚)1.5	1mm以下の砂粒	瓦.良好	灰N4	凸面ナデ 凹面布目→削り
309	SK09	丸瓦	(長)9.8(玉長)4.5 (筒径)12.8(玉径)5.6 (厚)1.9	微細砂粒	土.軟	灰白N8	凸面ナデ 凹面布目→削り
310	SK09	丸瓦	(長)12.2(径)12.0 (厚)1.7	1mm以下の砂粒	瓦.良好	黒5Y2/1	凸面ナデ 凹面布目→削り

瓦観察表（1）

番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法
311	SK09	丸瓦	(長)15.4(厚)1.7	精良	瓦.良好	暗灰N3/1	凸面ナデ 凹面布目→削り
312	SK09	丸瓦	(長)7.4(径)12.0 (厚)2.0	1mm以下の砂粒	瓦.良好	灰N4	凸面ナデ 凹面布目→削り
313	SK09	丸瓦	(長)14.9(玉長)5.4 (筒径)12.0 (玉径)9.8(厚)1.9	1mm以下の砂粒	瓦.良好	灰N4	凸面ナデ 凹面布目→削り
314	SK09	丸瓦	(長)12.5(玉長)5.2 (筒径)12.6 (玉径)7.2(厚)1.6	微細砂粒	瓦.軟	(外)黄灰2.5Y6/1 (胎)灰白2.5Y8/1	凸面ナデ 凹面布目→削り
315	SK09	丸瓦	(長)9.6(径)13.0 (厚)1.6	3mm以下の砂粒	瓦.良好	(外)黒2.5Y2/1 (胎)灰白2.5Y8/2	凸面ナデ 凹面布目→削り
316	SK09	丸瓦	(長)10.6(玉長)4.6 (筒径)12.0(厚)2.3	1mm以下の砂粒	瓦.良好	灰N4	凸面ナデ 凹面布目→削り
317	SK09	平瓦	(長)13.8(厚)1.7	微細砂粒	土.良好	灰白2.5Y8/2	
318	SK09	平瓦	(長)13.5(厚)1.7	0.5mm以下の砂粒を少量	瓦.良好	灰N5	
319	SK09	平瓦	(長)9.5(厚)1.7	微細砂粒	瓦.軟	黒2.5Y2/1～灰白2.5Y8/2	
320	SK09	平瓦	(長)8.2(厚)1.4	3mm以下の砂粒	土.良好	灰白5Y8/1	
321	SK09	平瓦	(長)11.5(厚)2.0	1mm以下の砂粒を少量	瓦.良好	(外)灰N6・N4 (内)灰白N5	
322	SK09	平瓦	(長)13.7(厚)1.4	微細砂粒	瓦.良好	(外)灰N4(内)灰N6	
323	SK09	平瓦	(長)11.8(厚)1.4	1mm以下の砂粒を少量	瓦.軟	(外)灰N6 (内)灰白N7	
324	SK09	平瓦	(長)13.7	2mm以下の砂粒	瓦.良好	灰N5	凸面コビキ？
325	SK09	平瓦	(長)7.8(厚)1.4	2mm以下の砂粒	瓦.良好	暗灰N3	
326	SK09	平瓦	(長)9.6(厚)1.5	精良	瓦.やや軟	(外)灰5Y4/1(胎)灰白5Y8/1～灰5Y6/1	
327	SK09	平瓦	(長)4.8(厚)1.4	精良	瓦.良好	にぶい黄橙10YR7/3	
328	SK09	平瓦	(長)4.8(厚)1.4	1mm以下の砂粒	瓦.良好	(外)黒褐2.5Y3/1 (胎)灰白5Y8/1	
329	SK09	鬼瓦	(長)11.4(厚)2.4	微細砂粒	瓦.良好	(外)黒2.5Y2/1 (胎)灰白5Y8/1	(表)沈線 (裏)コビキ？
330	SK09	鬼瓦	(長)8.8(厚)3.4	1.5mm以下の砂粒	瓦.良好	(外)灰白5Y8/1 (内)灰白2.5Y7/1	
331	SK09	不明瓦製品	(長)9.0(厚)1.8	2mm以下の砂粒	瓦.軟	(外)灰白2.5Y7/1 (内)黄灰2.5Y4/1	(外)沈線
332	SK09	不明瓦製品	(長)6.5(厚)1.8	2mm以下の砂粒	瓦.良好	(外)黒2.5Y2/1 (胎)灰白5Y8/1	
333	SK09	不明瓦製品	(長)9.4(厚)1.4	0.5mm以下の砂粒	瓦.軟	(外)暗灰N3 (胎)灰白5Y7/1	(外)沈線
334	SK09	不明瓦製品	(長)6.0(厚)1.6	1mm以下の砂粒	瓦.良好	(外)灰5Y6/1 (内)灰5Y5/1	(外)沈線
357	SK10	軒丸瓦	(長)15.7(径)12.0 (厚)1.6	1mm以下の砂粒	瓦.良好	(外)黒N1.5 (胎)灰白7.5Y7/1	凸面ナデ 凹面布目→削り

瓦観察表（2）

番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法
358	SK10	平瓦	(長)14.2(厚)2.15	2mm以下の砂粒	瓦.良好	(外)灰5Y4/1 (胎)灰白5Y8/1	凸面コビキ
360	SK15	丸瓦	(長)11.3 (玉長)4.0(厚)1.9	精良	土.良好	灰白2.5Y7/1	凸面ナデ 凹面布目→削り
361	SK15	平瓦	(長)15.9(厚)1.5	精良	瓦.良好	(外)黒2.5Y2/1 (胎)黄灰2.5Y4/1	
369	SK17	軒丸瓦	(長)6.0(厚)1.3	2mm以下の砂粒を少量	土.良好	灰白10YR8/2	凸面ナデ
370	SK17	丸瓦	(長)11.3(厚)1.7	1mm以下の砂粒	瓦.良好	黒褐2.5Y3/1	凸面ナデ 凹面布目→削り
371	SK17	平瓦	(長)9.9(厚)2.0	1mm以下の砂粒	瓦.軟	(外)黄灰2.5Y4/1 (内)黄灰2.5Y6/1	凸.凹面コビキ？
374	SK18	丸瓦	(長)11.2(径)13.4 (厚)1.5	1mm以下の砂粒	瓦.良好	(外)黒7.5Y2/1 (胎)灰白N8	凸面ナデ 凹面布目→削り
375	SK18	平瓦	(長)13.3(厚)1.6	1mm以下の砂粒	瓦.良好	(外)黒2.5Y2/1 (胎)灰白5Y8/1	凹面ナデ
379	SK19	丸瓦	(長)11.3 (玉長)2.6(厚)1.6	1mm以下の砂粒	瓦.良好	オリーブ黒5Y3/1	凸面ナデ 凹面布目→削り
386	SK20	土人形	(厚)1.6	精良	瓦.良好	暗灰N3.灰白N7	(外)寛永通宝刻印 (内)シボリ目
387	SK20	丸瓦	(長)16.5(玉長)5.5 (筒径)13.0 (玉径)9.0(厚)1.6	1mm以下の砂粒	瓦.良好	灰N4	凸面ナデ 凹面布目→削り
405	SE01	軒丸瓦	(径)13.2(厚)1.8	1mm以下の砂粒	土.良好	灰白5Y7/1	瓦当面離れ砂
406	SE01	軒平瓦	(長)6.3(厚)1.6	1mm以下の砂粒	瓦.軟	灰白7.5Y8/1～黒7.5Y2/1	
407	SE01	平瓦	(長)4.0(厚)1.3	1mm以下の砂粒	瓦.軟	灰白5Y7/1	
419	SX01	軒平瓦	(長)9.0(厚)1.5	2mm以下の砂粒を少量	瓦.良好	(外)暗灰N3 (胎)灰白N8	
422	SX02	軒丸瓦	(長)15.5(厚)1.7	2.5mm以下の砂粒	瓦.良好	(外)黒N2 (胎)灰白7.5Y7/1	凸面ナデ 凹面布目→削り
443	SX03石積み内埋土	軒丸瓦	(長)3.5	1mm以下の砂粒	瓦.良好	暗灰N3	瓦当面離れ砂
444	SX03石積み内埋土	軒丸瓦	(厚)1.5	1.5mm以下の砂粒	瓦.良好	灰N4	瓦当面離れ砂
445	SX03石積み内埋土	軒丸瓦	(厚)1.7	1mm以下の砂粒	土.良好	灰白2.5Y7/1	瓦当面離れ砂
446	SX03石積み内埋土	軒平瓦	(長)6.2(厚)1.6	1mm以下の砂粒	瓦.良好	(外)黒N2 (胎)灰白7.5YR8/1	鍔部ナデ
447	SX03石積み内埋土	平瓦	(長)34.3(厚)2.3	1mm以下の砂粒	瓦.良好	(外)暗灰N3 (胎)灰白N8	
448	SX03石積み内埋土	平瓦	(長)28.5(厚)2.0	2.5mm以下の砂粒	瓦.軟	灰N5	凸.凹面ナデ
494	SX03 石積み裏込め土	軒丸瓦	(長)24.4(筒長)21.0 (玉長)3.5 (筒径)13.2(厚)3.2	1mm以下の砂粒	土.良好	灰白2.5Y8/1	凸面ナデ 凹面布目→削り 釘穴2

瓦観察表（3）

番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法
495	SX03石積み裏込め土	軒平瓦	(厚)1.5	1mm以下の砂粒	土.軟	灰黄2.5Y7/2	
496	SX03石積み裏込め土	軒平瓦	(厚)1.4	1mm以下の砂粒	瓦.良好	黒N2	
497	SX03石積み裏込め土	不明瓦製品	(長)10.5(厚)1.9	1mm以下の砂粒	瓦.良好	(外)黒10Y2/1 (内)黒褐2.5Y3/1	(外)沈線
536	SD45	軒丸瓦	(厚)1.6	2mm以下の砂粒を少量	瓦.良好	(外)暗灰N3 (胎)灰白5Y7/1	瓦当面離れ砂
537	SD45	軒丸瓦	(厚)1.4	2.5mm以下の砂粒を少量	瓦.良好	暗灰N3	瓦当面離れ砂
538	SD45	軒平瓦	(厚)1.7	1mm以下の砂粒	瓦.良好	(外)暗灰N3 (胎)灰白5Y8/1	
539	SD45	丸瓦	(長)14.5 (筒径)13.8(厚)1.5	微細砂粒	瓦.良好	(外)黒N2 (胎)灰白N8	凸面ナデ→刻印「今」?
681	Ⅰ区北半部包含層	軒丸瓦	(長)5.5(厚)2.0	2mm以下の砂粒	土.良好	灰白2.5Y8/2	瓦当面離れ砂
682	Ⅰ区北半部包含層	軒丸瓦	(長)7.7(厚)1.6	1mm以下の砂粒	瓦.良好	灰白5Y8/1	瓦当面離れ砂
683	Ⅰ区北半部包含層	軒丸瓦	(厚)1.1	2mm以下の砂粒	瓦.良好	灰白2.5Y7/1 黄灰2.5Y4/1	瓦当面離れ砂
684	Ⅰ区北半部包含層	軒丸瓦	(厚)1.6	0.5mm以下の砂粒	土.良好	(外)灰白5Y8/1 (胎)浅黄2.5Y7/3	瓦当面離れ砂
685	Ⅰ区北半部包含層	軒丸瓦	(厚)1.6	1mm以下の砂粒	土.良好	灰黄2.5Y7/2	瓦当面離れ砂
686	Ⅰ区北半部包含層	軒丸瓦	(長)5.4(厚)1.3	0.5mm以下の砂粒	瓦.良好	(外)灰N5 (胎)灰白N8	瓦当面離れ砂 凸面ナデ 凹面布目→削り
687	Ⅰ区北半部包含層	軒丸瓦	(長)5.0(厚)1.7	1mm以下の砂粒	瓦.軟	灰白5Y7/1	瓦当面離れ砂
688	Ⅰ区北半部包含層	軒丸瓦	(径)10.0(厚)1.8	2mm以下の砂粒	瓦.軟	暗灰N3	瓦当面離れ砂
689	Ⅰ区北半部包含層	軒丸瓦	(厚)1.8	0.5mm以下の砂粒	土.良好	灰白5Y7/1	
690	Ⅰ区北半部包含層	軒丸瓦	(厚)1.8	微細砂粒	瓦.良好	灰白7.5Y8/1	
691	Ⅰ区北半部包含層	軒平瓦	(長)7.5(厚)1.8	1mm以下の砂粒	瓦.良好	黒7.5Y2/1	鍔部ナデ
692	Ⅰ区北半部包含層	軒平瓦	(長)8.9(厚)1.7	1mm以下の砂粒	土.良好	灰白2.5Y8/2	鍔部ナデ
693	Ⅰ区北半部包含層	軒平瓦	(長)5.9(厚)1.3	1.5mm以下の砂粒	土.軟	灰白2.5Y8/1	鍔部ナデ
694	Ⅰ区北半部包含層	軒平瓦	(厚)1.6	1mm以下の砂粒を少量	瓦.良好	灰N4	
695	Ⅰ区北半部包含層	軒平瓦	(長)9.6(厚)1.3	1mm以下の砂粒	瓦.良好	(外)黒褐10YR3/1 (胎)灰白10YR8/1	凹面ナデ?

瓦観察表（4）

番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法
696	I区北半部包含層	丸瓦	(長)18.4(玉長)3.2 (筒径)12.0(厚)1.4	2mm以下の砂粒	瓦.良好	灰N5	凸面ナデ 凹面布目→削り 釘穴2
697	I区北半部包含層	丸瓦	(長)12.5(玉長)2.9 (筒径)12.0 (玉径)8.0(厚)1.8	2mm以下の砂粒	瓦.良好	黒5Y2/1	凸面ナデ 凹面布目→削り 釘穴2
698	I区北半部包含層	丸瓦	(長)8.5(玉長)3.5 (筒径)12.1 (玉径)9.7(厚)1.8	2mm以下の砂粒	瓦.やや軟	灰5Y5/1	凸面ナデ 凹面布目→削り
699	I区北半部包含層	土人形	(厚)1.6	精良	瓦.良好	(外)暗灰N3 (胎)灰白N8	(外)寛永通宝刻印 (内)シボリ目
700	I区北半部包含層	不明瓦製品		1mm以下の砂粒	瓦.良好	(外)灰5Y5/1 (胎)灰白5Y8/1	接合部刺突痕. 沈線
701	I区北半部包含層	不明瓦製品	(厚)1.6	微細砂粒	瓦.良好	灰白5Y8/1	(外)沈線
705	I区北半部包含層	平瓦	(長)4.5(厚)1.5	5mm以下の砂粒	須.良好	青灰5B5/1	凸面縄目叩き 凹面布目

瓦観察表（5）

番号	出土位置	器種	法量	材質	備考
372	SK17	煙管	(長)7.0	銅	
394	SK58	鉄釘？	(長)3.7(幅)0.5(厚)0.5	鉄	
409	SE01	ガラス玉	(径)1.1		
727	III区包含層	鉄斧	(長)9.9(幅)3.7(重)172.2g	鉄	袋状鉄斧
801	V区包含層	煙管	(長)9.3	銅.竹(ウラ)	

金属・ガラス製品観察表

図　　版

郡家田代遺跡周辺空中写真

図版 2

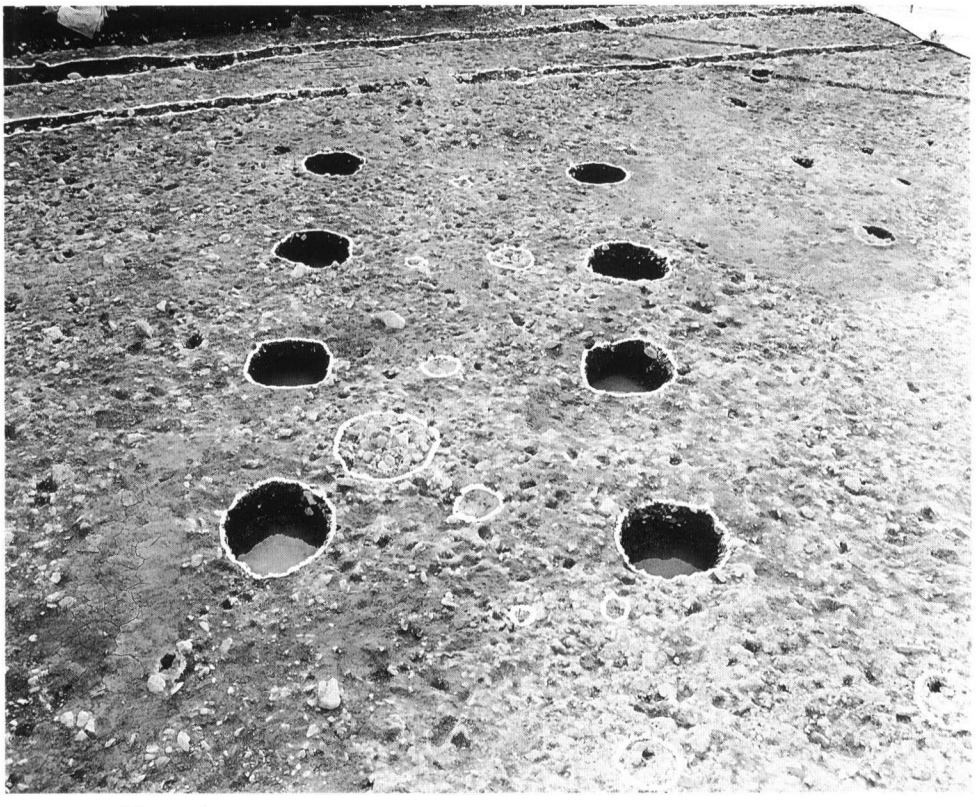
調査前風景（東から）

調査前風景（西から）

Ⅰ区北半部作業風景（東から）

Ⅰ区南半部近世遺構（北東から）

図版 4



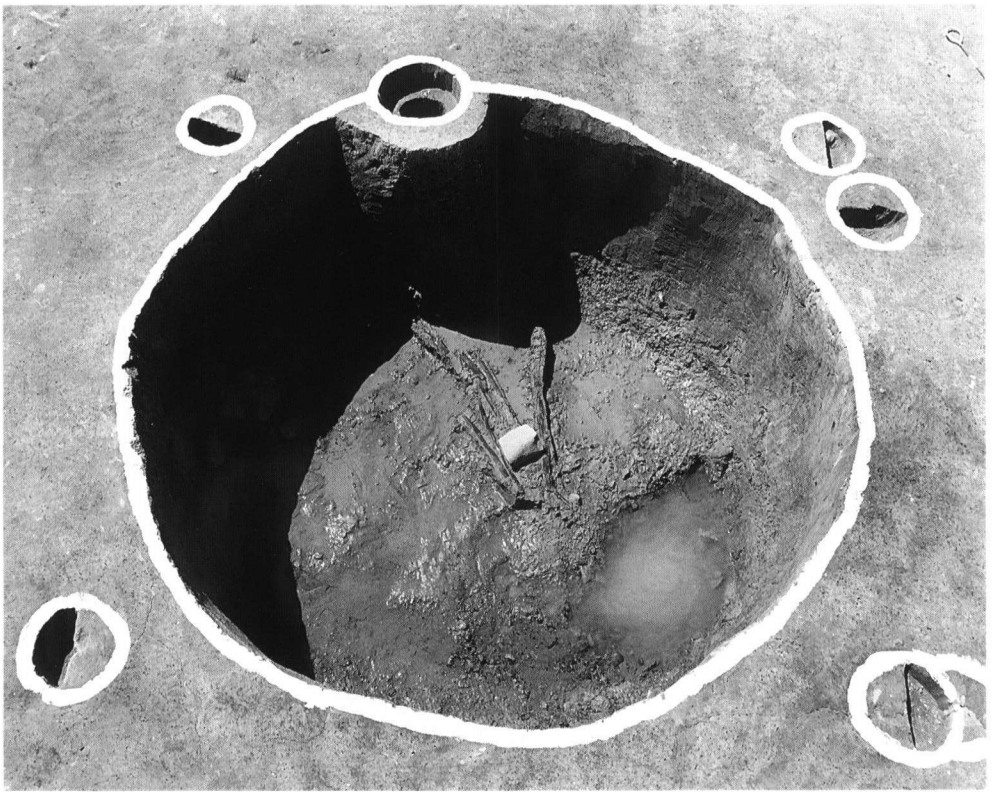
ＳＢ０１（東から）

ＳＴ０１（南から）

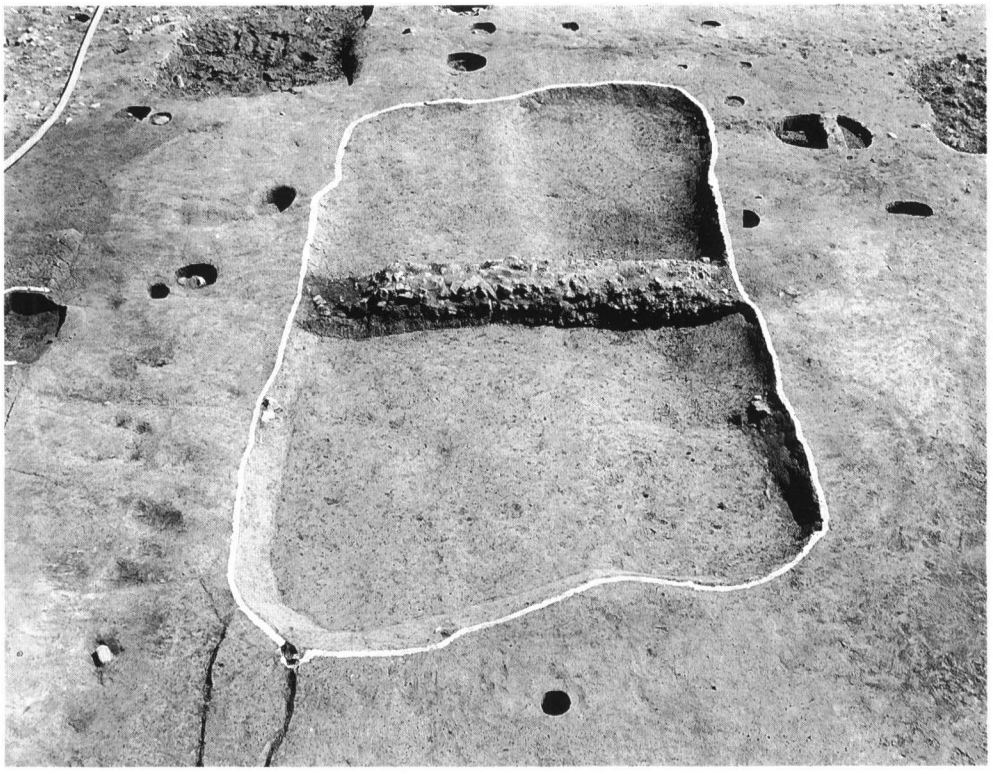
ＳＴ０１（南から）

ＳＫ０６（南から）

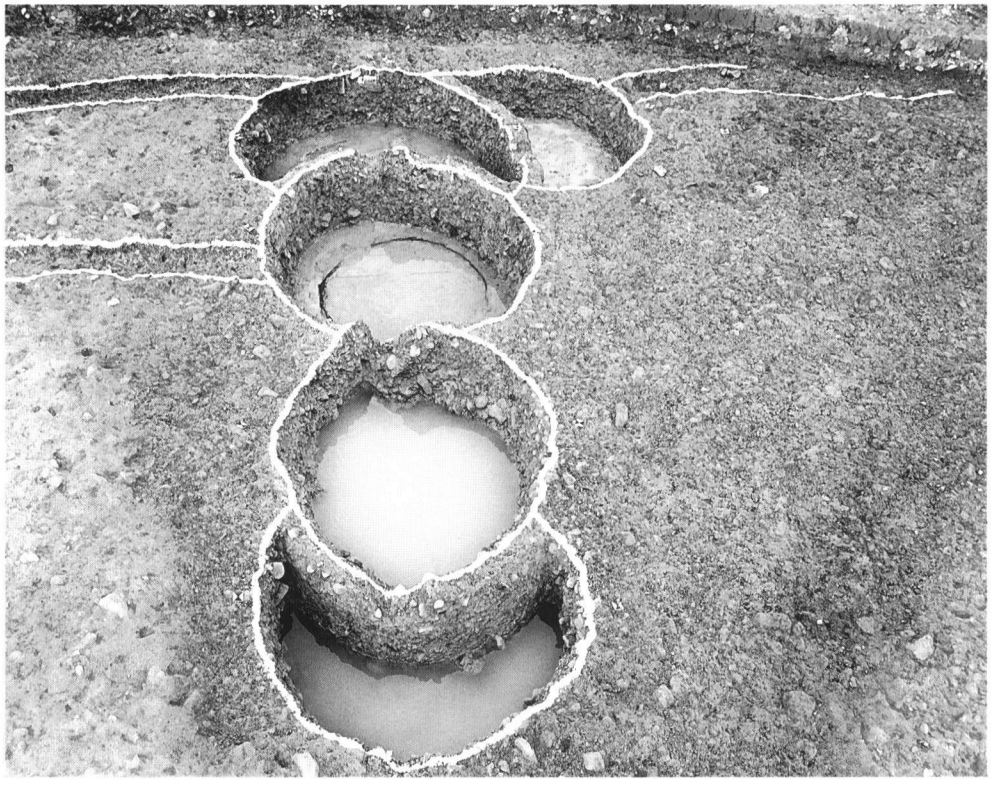
図版 6



ＳＫ０５（北東から）



ＳＫ０９（南西から）



ＳＫＩ７（北東から）

ＳＫＩ７-②（北から）

図版 8

ＳＫＩ７-① （北から）

ＳＫＩ８ （北から）

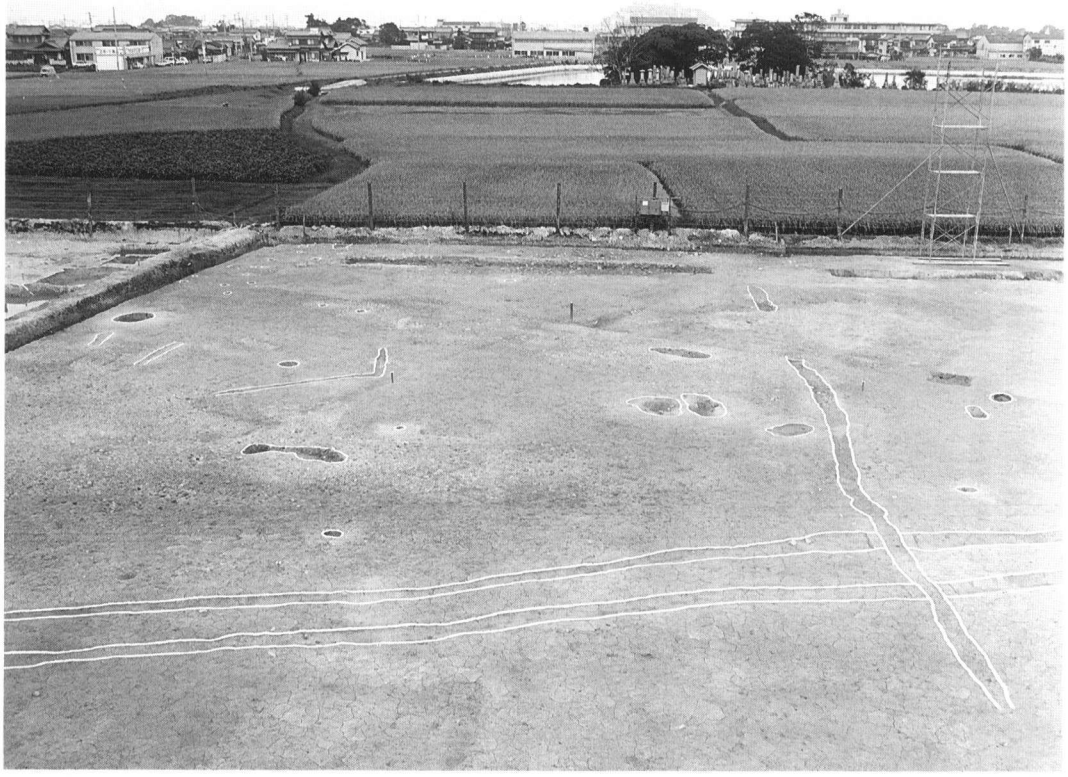
ＳＥ０１（南東から）

ＳＸ０３（東から）

図版 10

ＳＸ０３基底石（北西から）

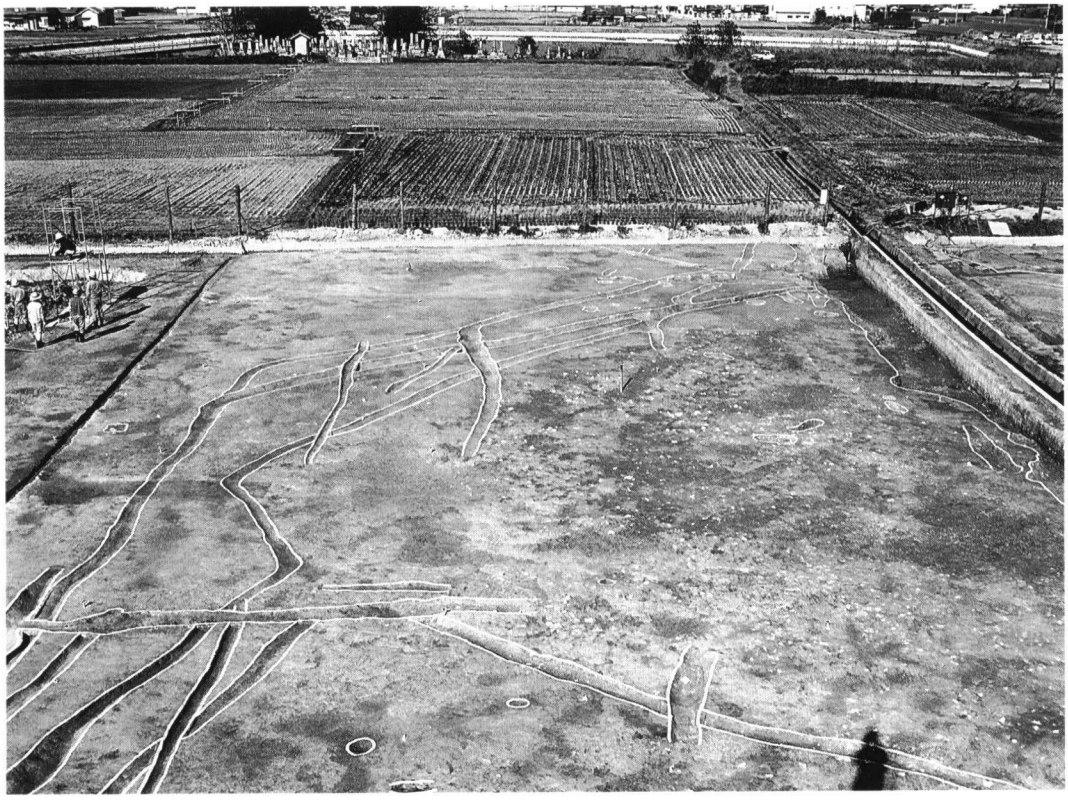
ＳＸ０３五輪塔出土状況（北東から）



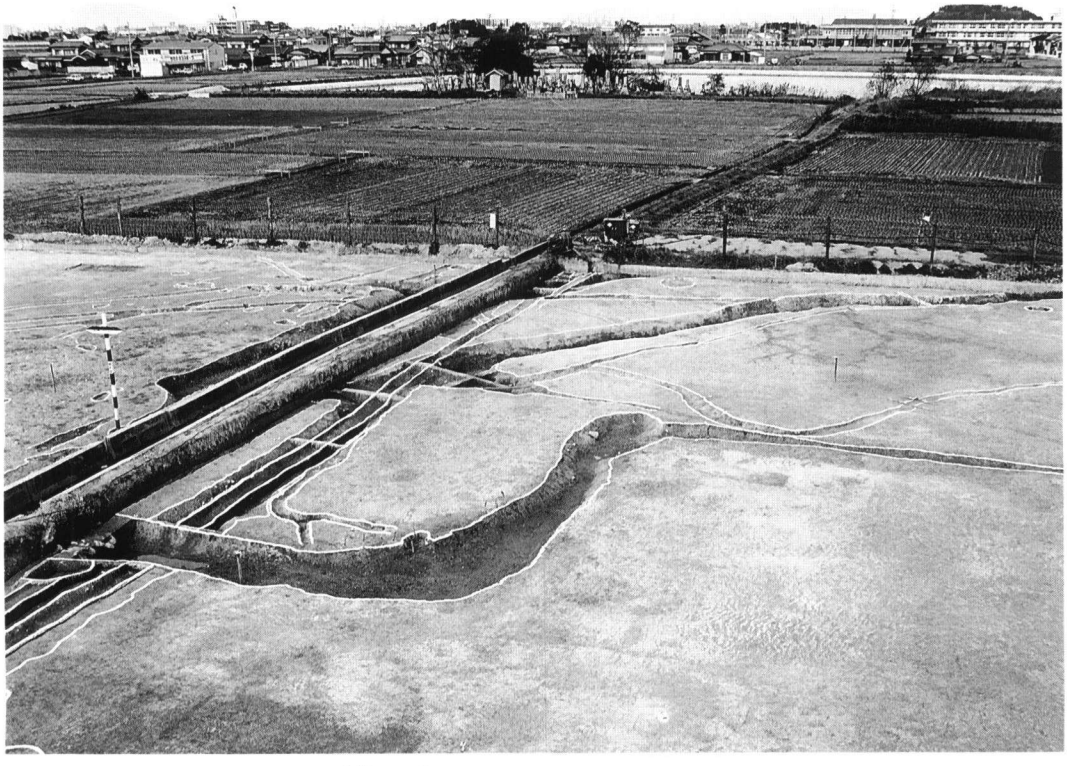
II 区北半部遺構（南東から）

II 区南半部遺構（北から）

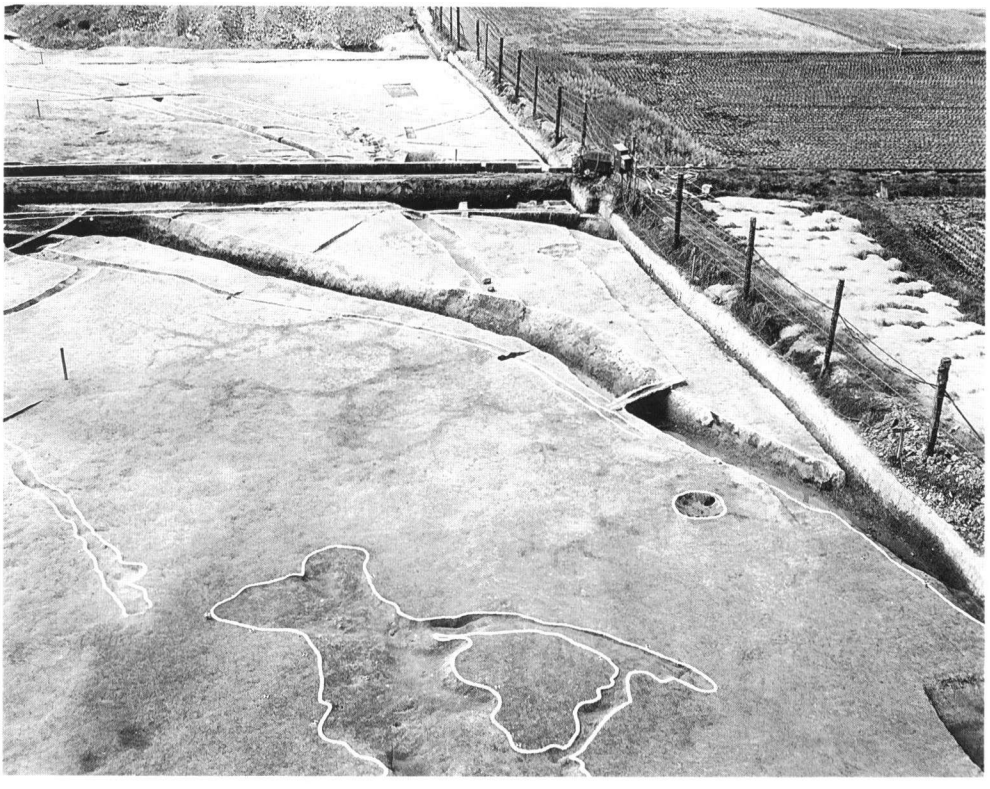
図版 12



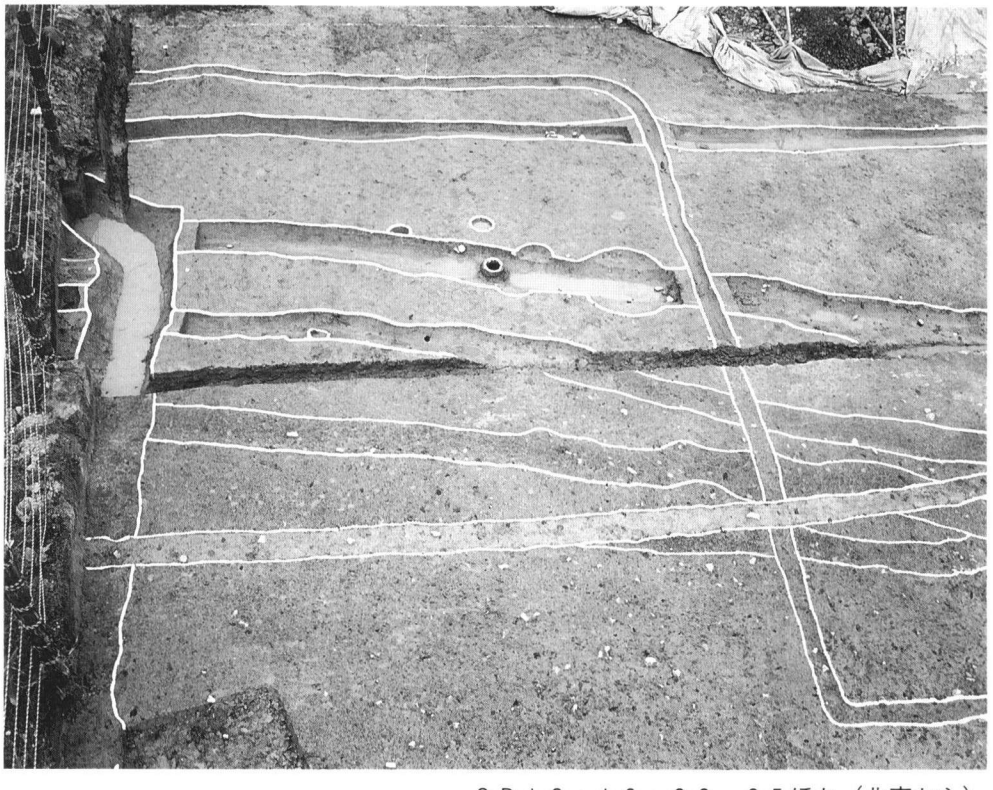
III区西半部遺構（南東から）



ＳＤ３５・３７・４０・４５（東から）



ＳＤ４０，ＳＸ０５（東から）



ＳＤ１２・１６・２２・２５ほか（北東から）